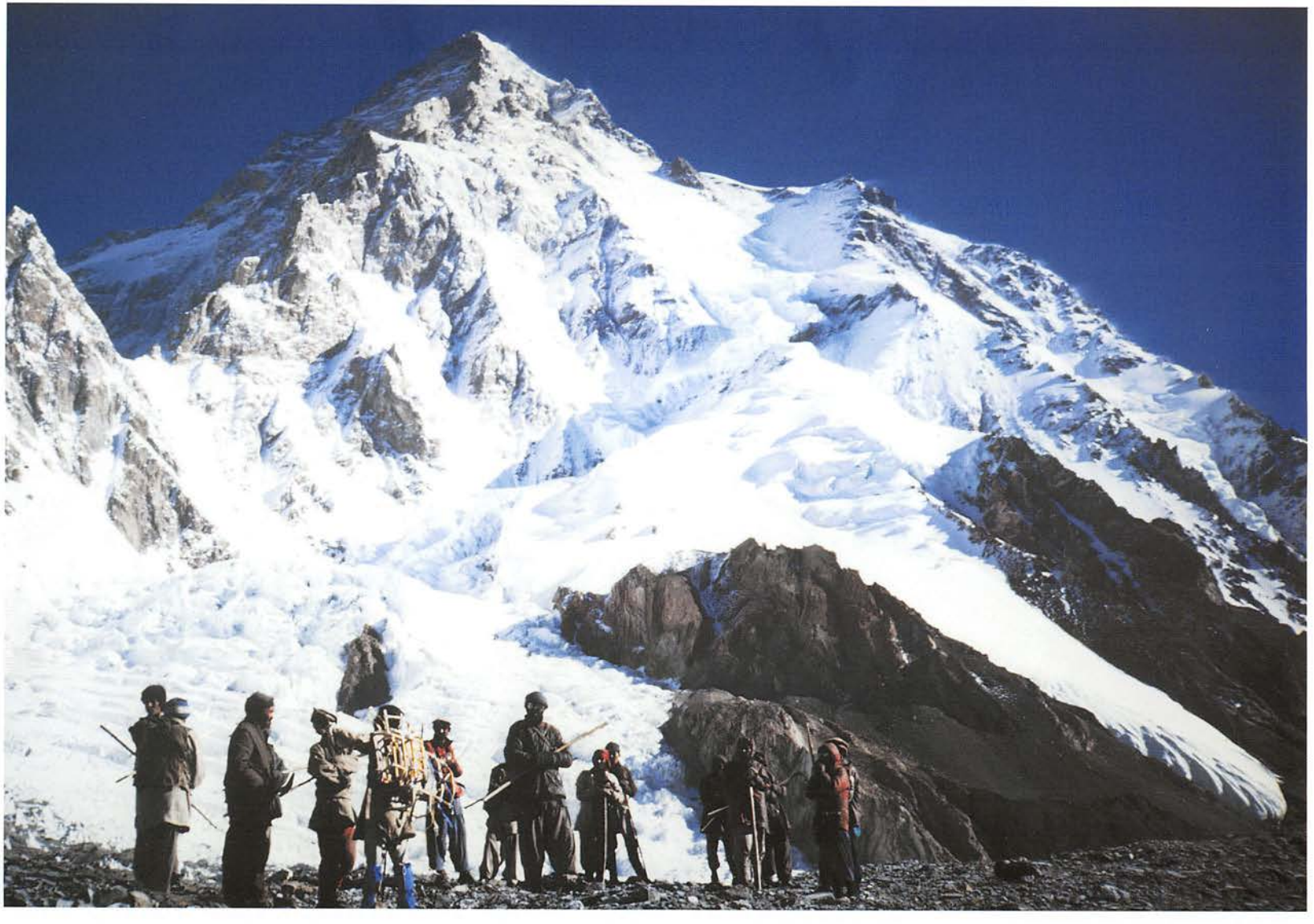
雪の住処35年の記録

日本ヒマラヤ協会



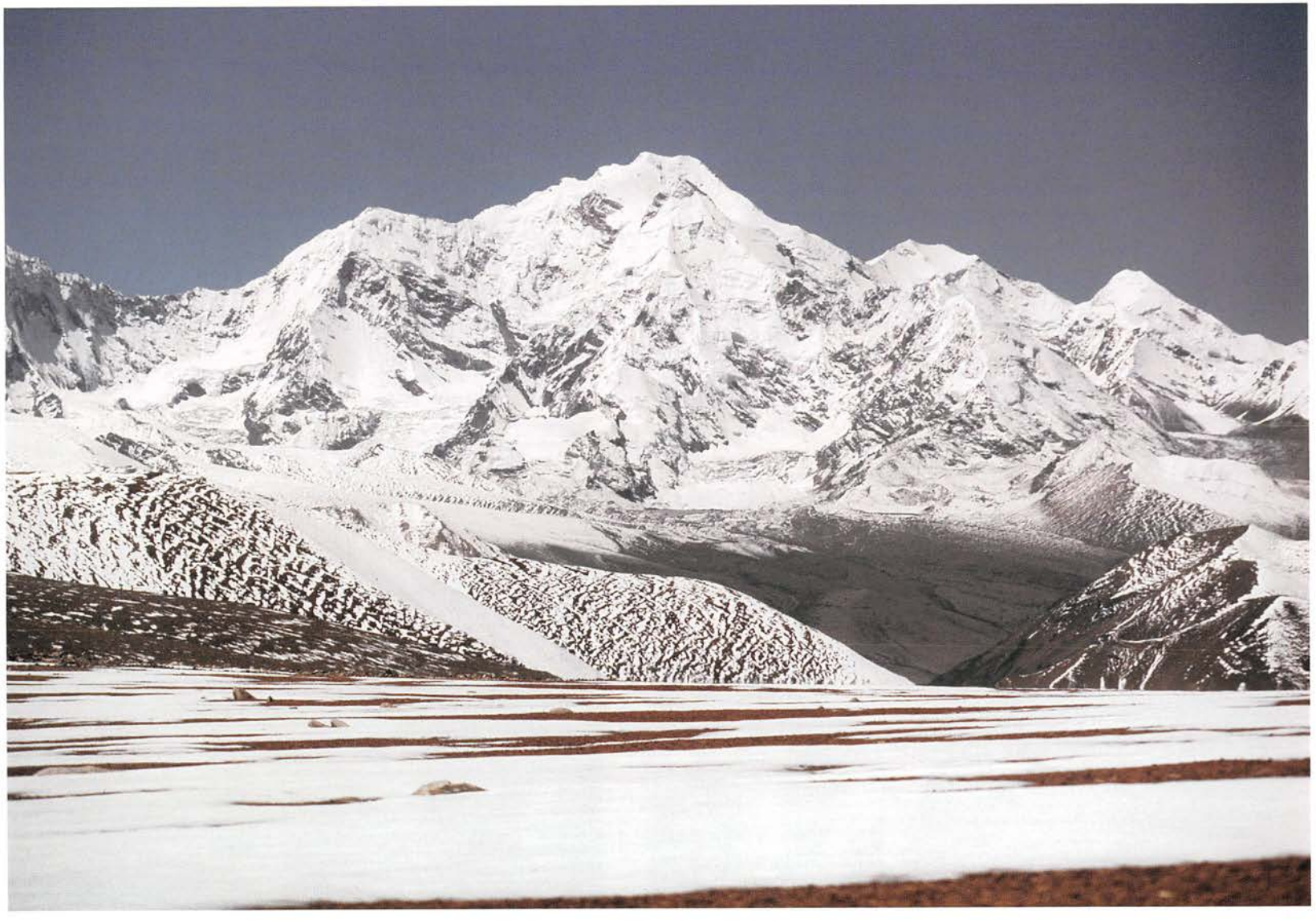
■パキスタン、K2（右手が南東稜）一九八五年七月、山田昇、吉田憲司、村上和也が登頂に成功。

■ネパール、ヤルン氷河から八五〇〇mの縦走をめざした。左からヤルン・カン、主峰、中央峰、南峰。

■カンチェンジュンガ主峰（Kangchenjung M 8,586ｍ）南西面

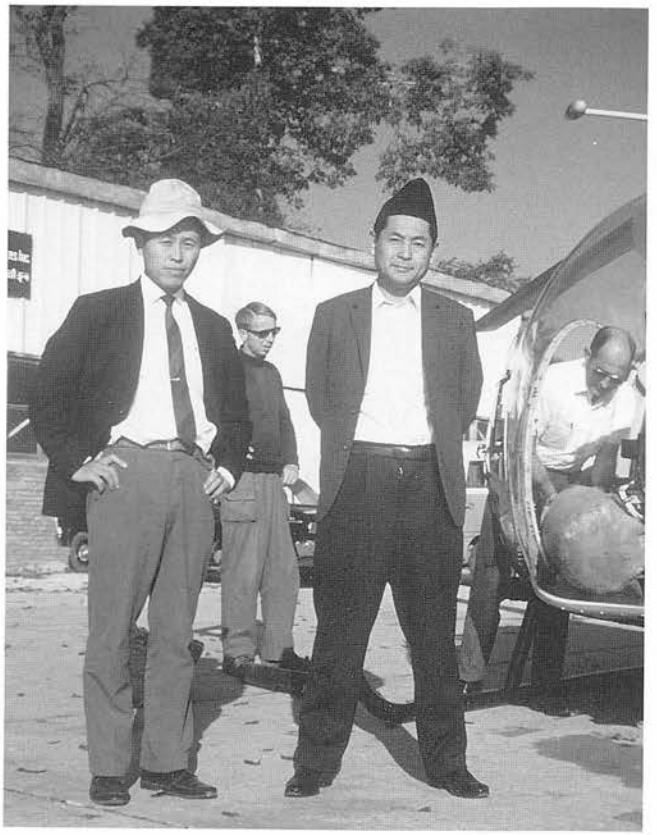
いずれもＡＢＣ（7,300ｍ）から頂上を行く隊員（○印内）を撮影

■ヤルン・カン（Yalung Kang 8,505ｍ）南東面



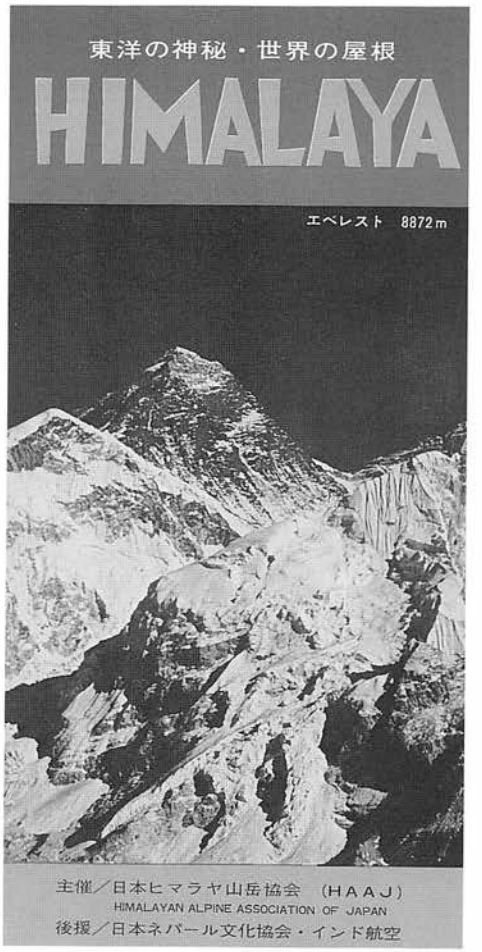
■中国、シシャパンマ主峰（八〇二七m）一九八八年十月、山田昇、三枝照雄、山本篤が主峰に登頂。

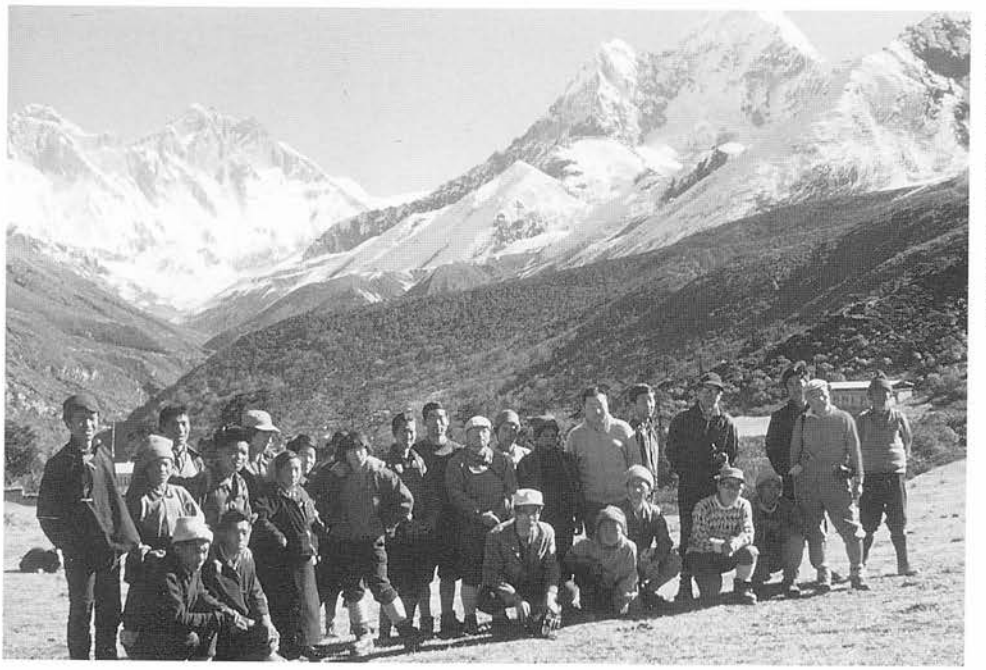
第１回ヒマラヤの旅(1968.10)点描



▲レスキューヘリを見送る柴田会長と宮原巍氏

▼当時のパンフレット



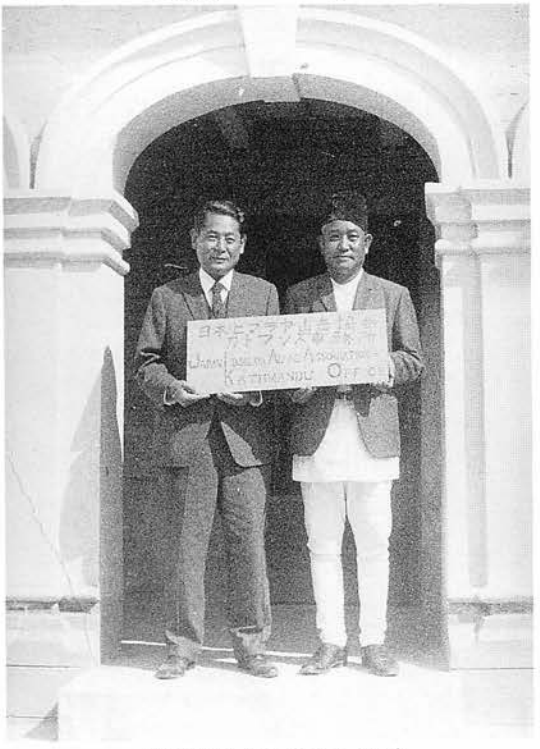


◀タンボチェの丘で記念撮影

▲ガンジャ・ラ　5.030ｍ地点にて
後列左から佐藤、池田、４人おいて伊藤、前列左から１人おいて稲田、４人おいて熊谷

▼チャンドラコットにて左から佐々木、三原、吉田

▼カトマンズ事務所オープン（S.44.10）



柴田会長とセルチャン氏

（左上２枚の写真は第７回ヒマラヤの旅のパーティのもの　1972.１）

▶第三回ヒマラヤの旅出発
一九六九・一二・二十七（羽田空港にて）

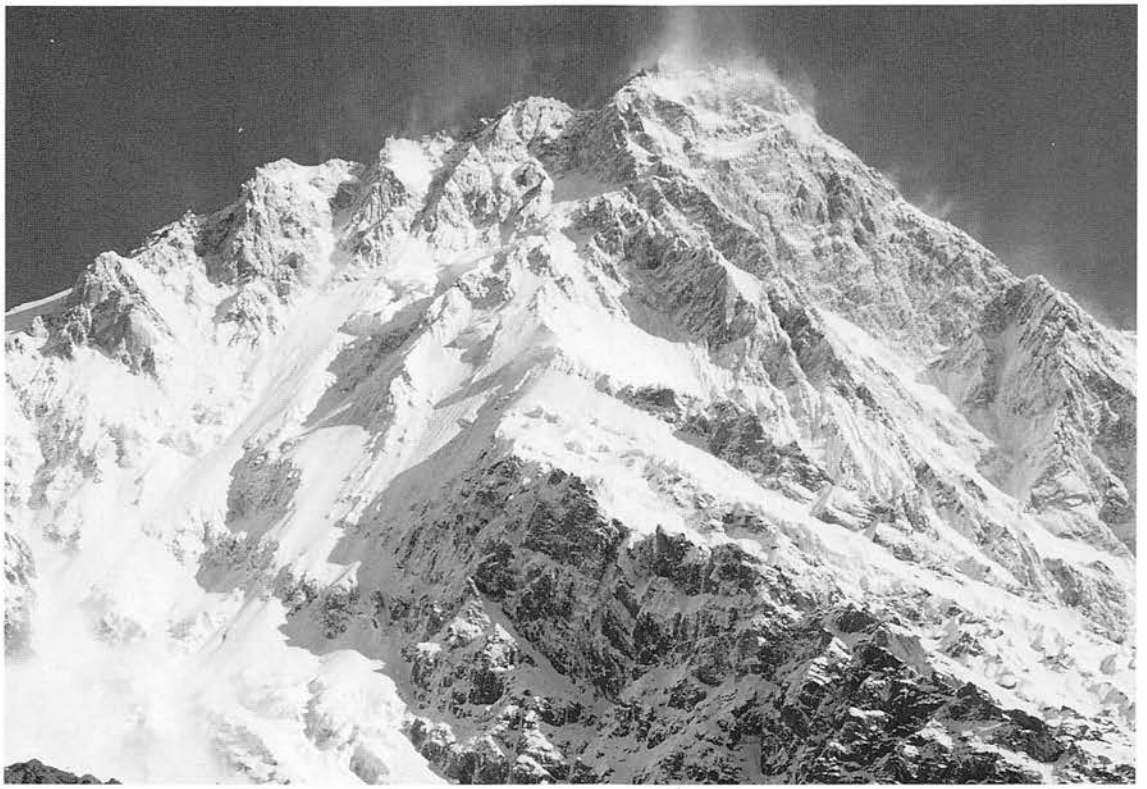
▲インドラ・マン・セルチャン氏歓迎会（1969年５月31日・名古屋にて）

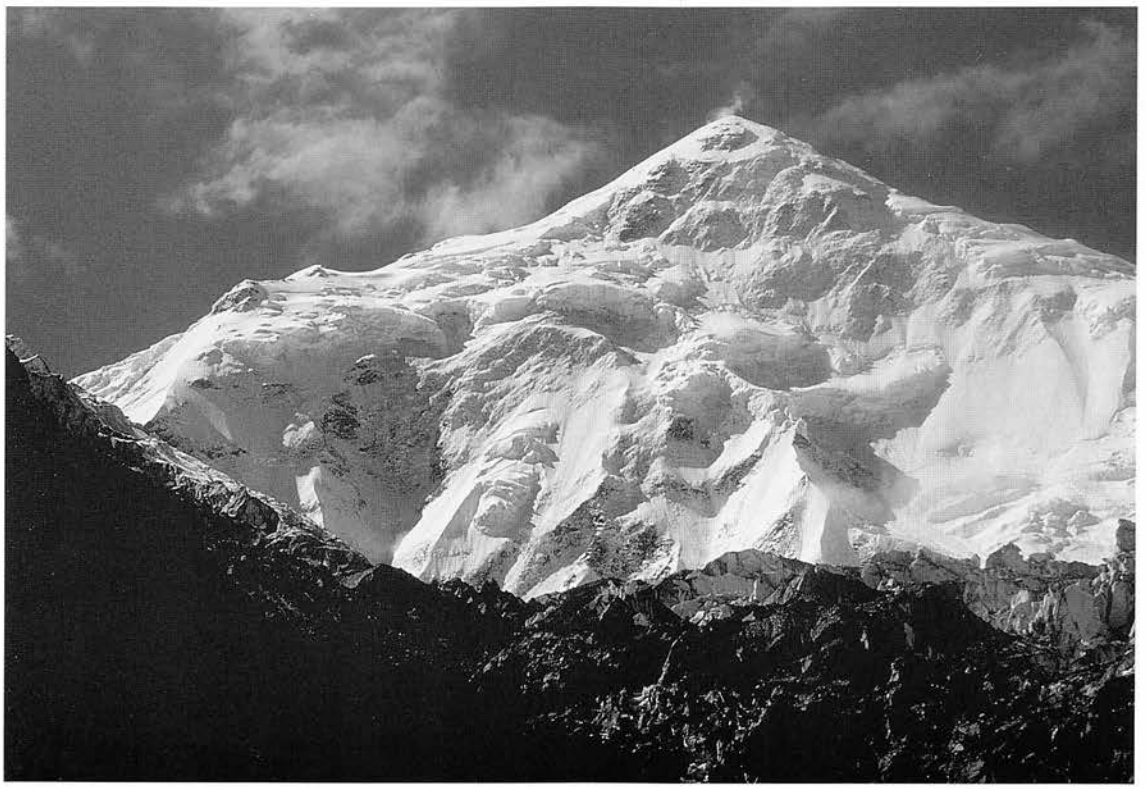
▼キラン・マン・セルチャン君サヨナラ・パーティ（1971年７月４日　名古屋）

▲ナンダ・カート（Nand Khat 6,611m）1981年秋　7名　India

痛恨の山々

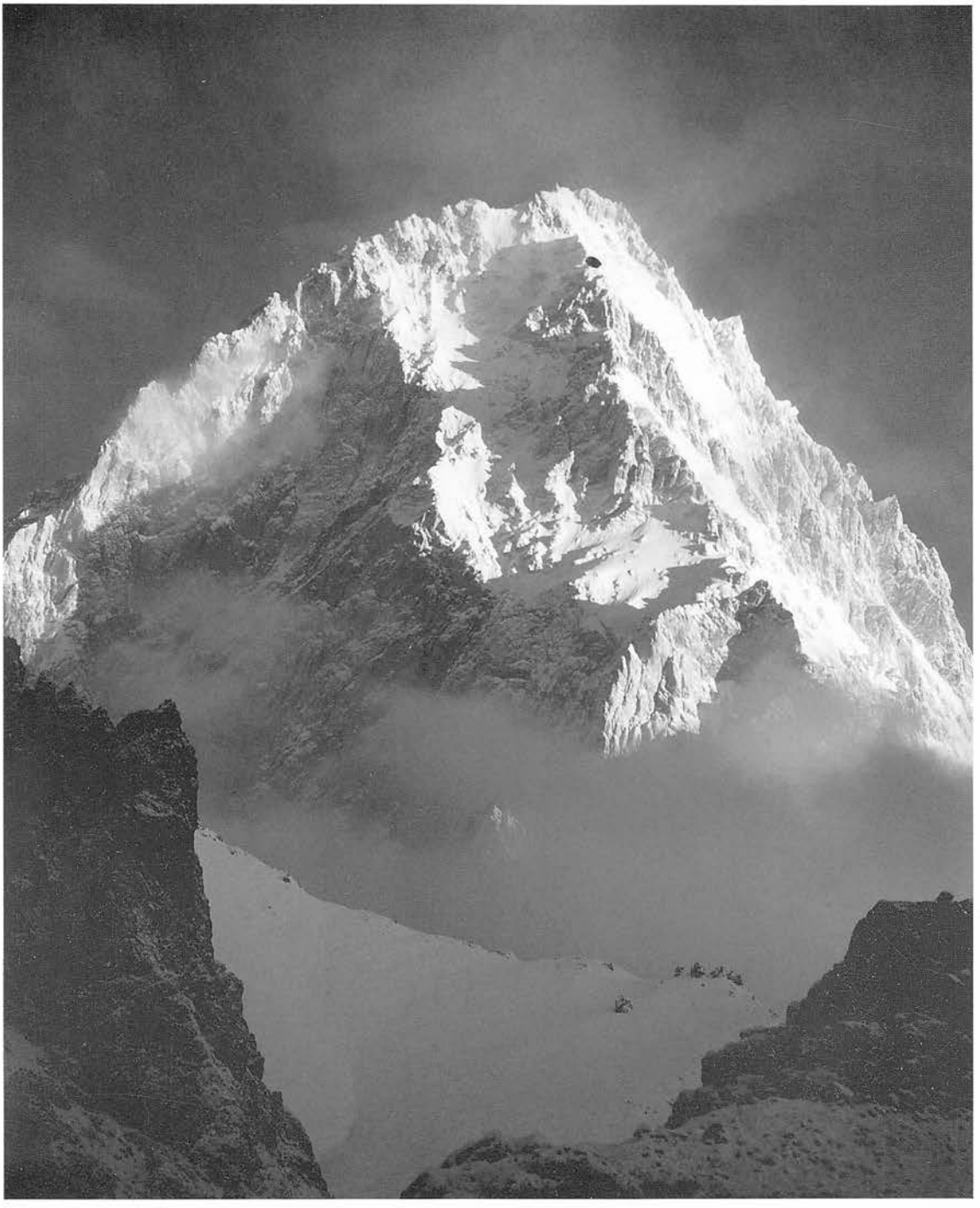
▼ナンガ・パルバット（Nanga Parbat 8,126m）南面　1984年夏　4名　　Pakistan



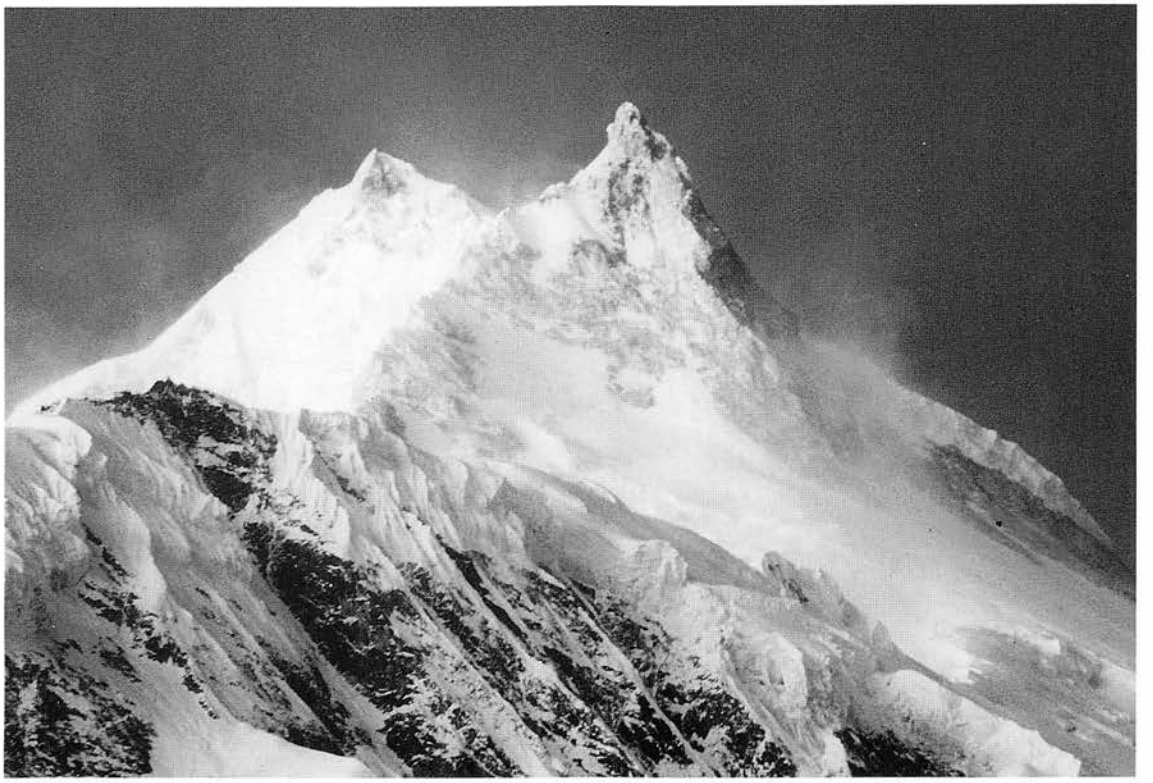


▲ミニヤ・コンカ（Minya Konka 7,556m）北西　1994年秋　4名　　China

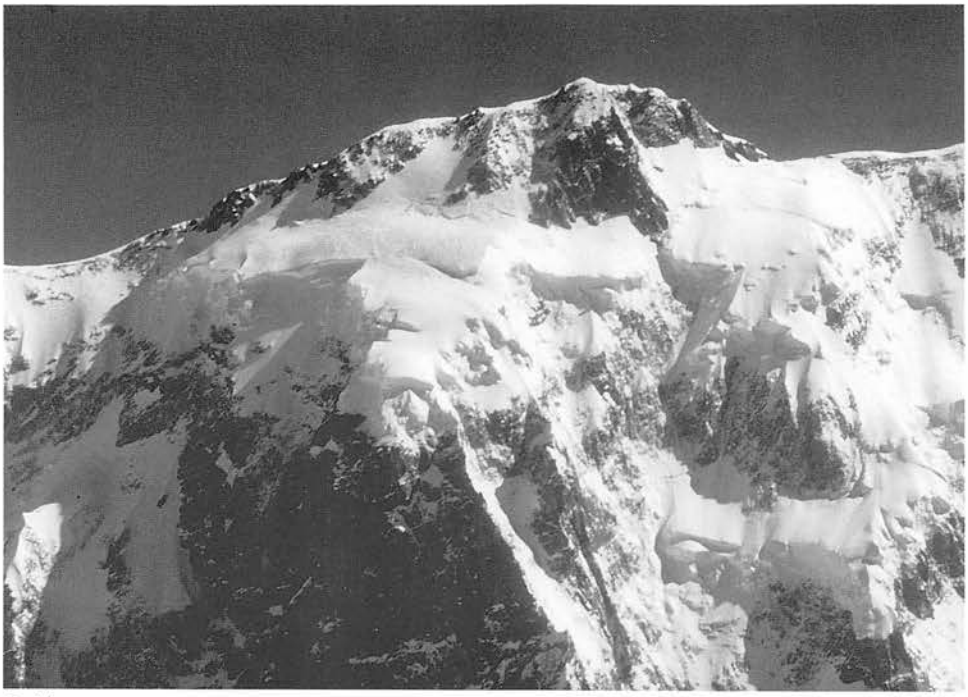
▼クラウン（Crown 7,295ｍ）南東面　1990年秋　2名　1992年秋　1名　　China



▼クン（Kun 7,077m）南面　1982年夏　1名　　India



▲マナスル（Manaslu 8,163m）北東面　1982年冬　1名　　Nepal

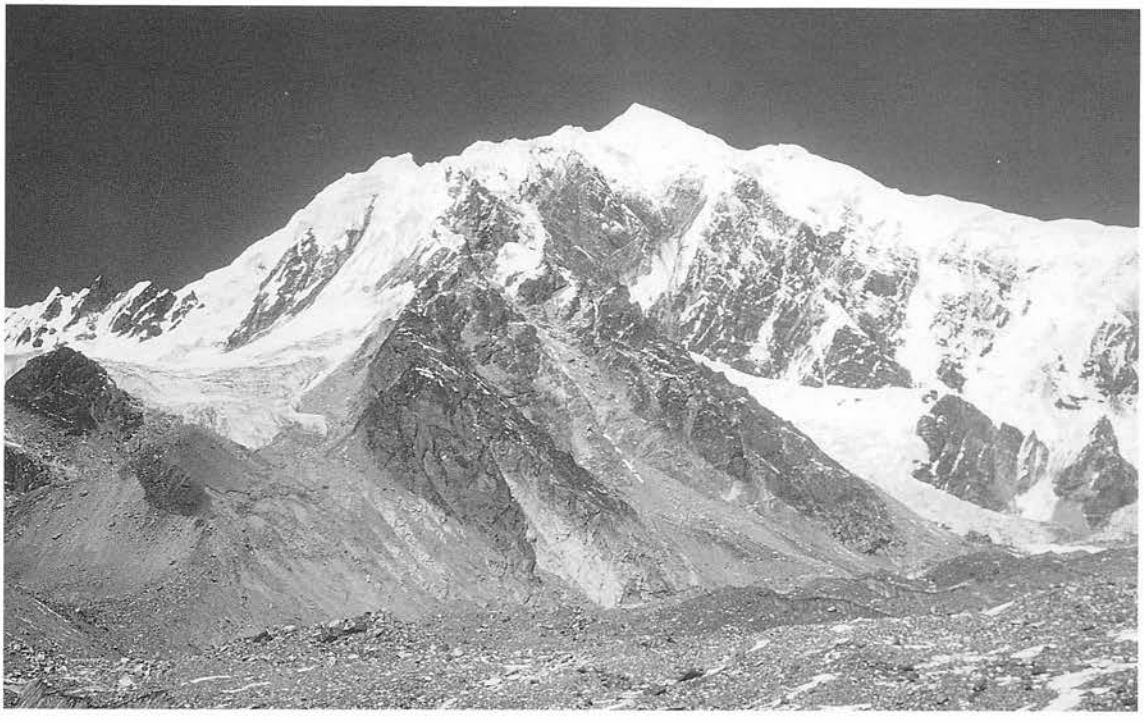


◀ バトゥラⅢ（七七二九m）南面　一九七八年七月六日、伊東満、大久保真、石川裕司が初登頂

Pakistan

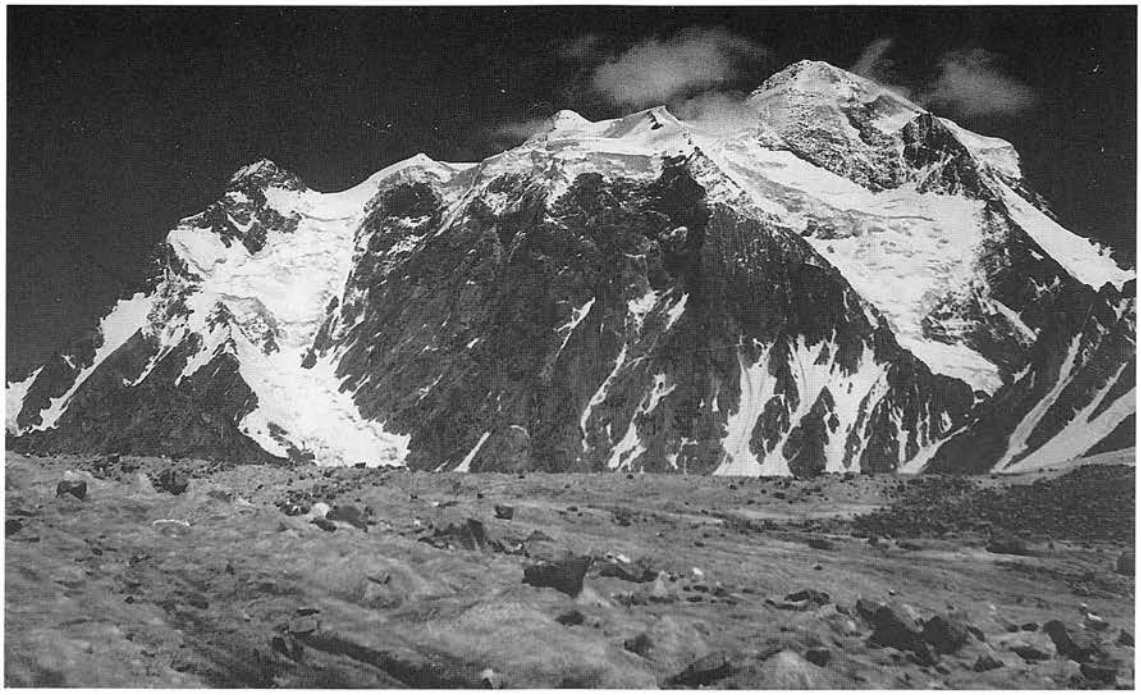
栄光の山々

Nepal

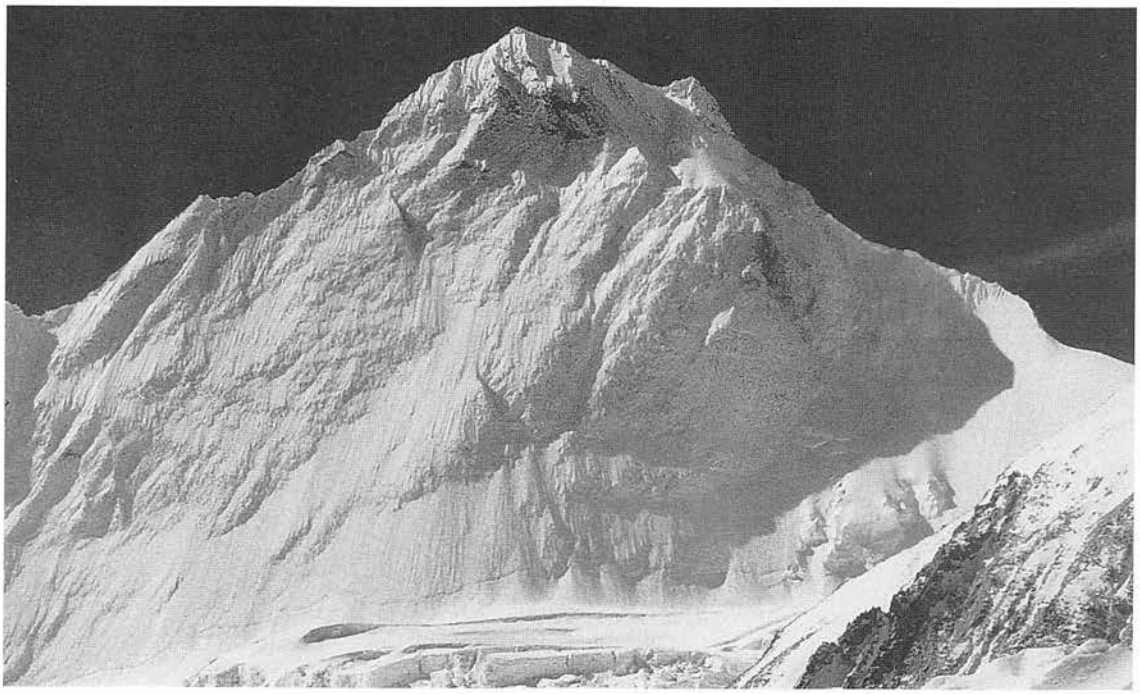


▲ランタン・リ（Lantang Ri 7,205m）1981年10月10日、山田昇ら3名が初登頂　Nepal

▼インド、マモストン・カンリ（Mamostong Kangri 7,526m）1984.9.13 山田昇ら3名が初登頂 India



7,000m峰初登頂



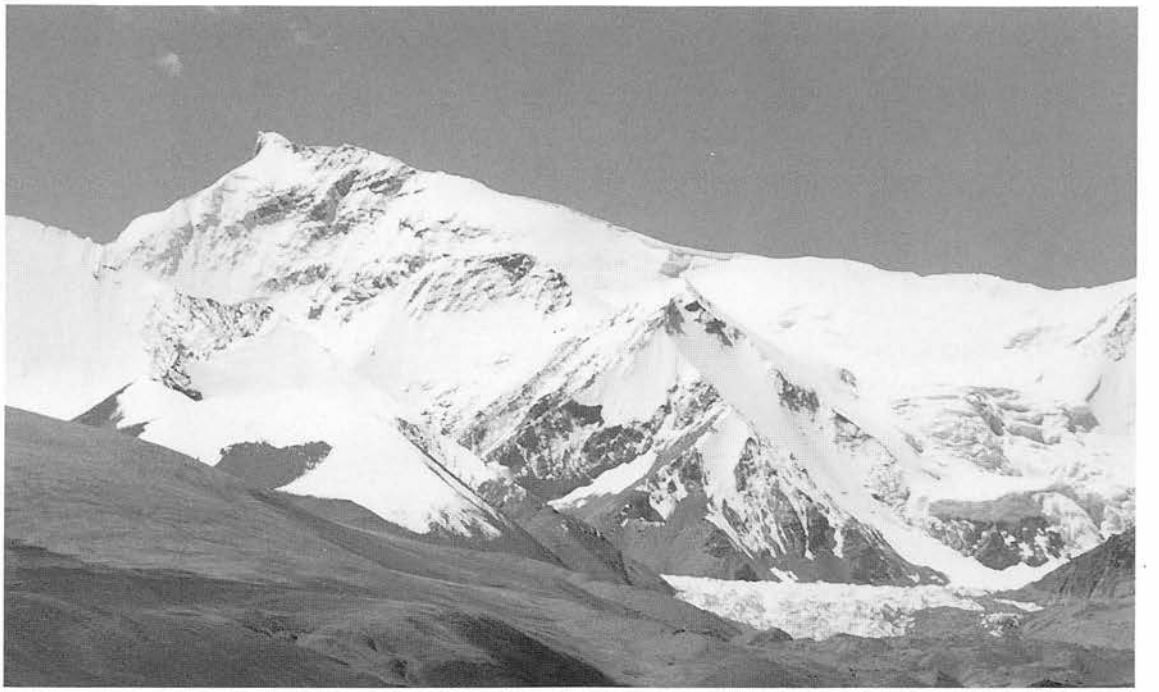
▲中国、チョー・アウイ（Cyo Aui 7,354m）1986.10.12 志小田美弘ら4名が初登頂 China

▼中国、カルジャン（Karejiang 7,216m）1986,10,14 新郷信廣ら3名が初登頂　China

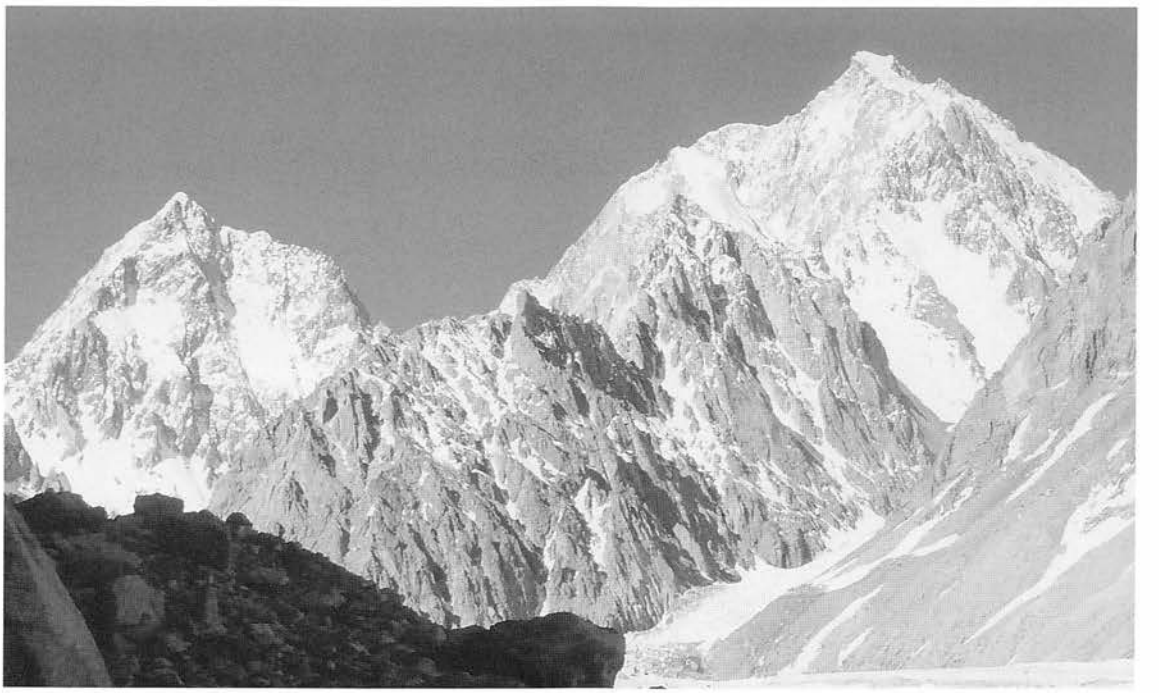
栄光の山々

▲中国、ギャラ・ペリ（Gyala Peri 7,294m）1986,10.31 尾形好雄ら3名が初登頂　China

▼中国、ラプチェ・カン（Labuche Kang 7,367m）1987.10.26 須藤圭一ら8名が初登頂　China

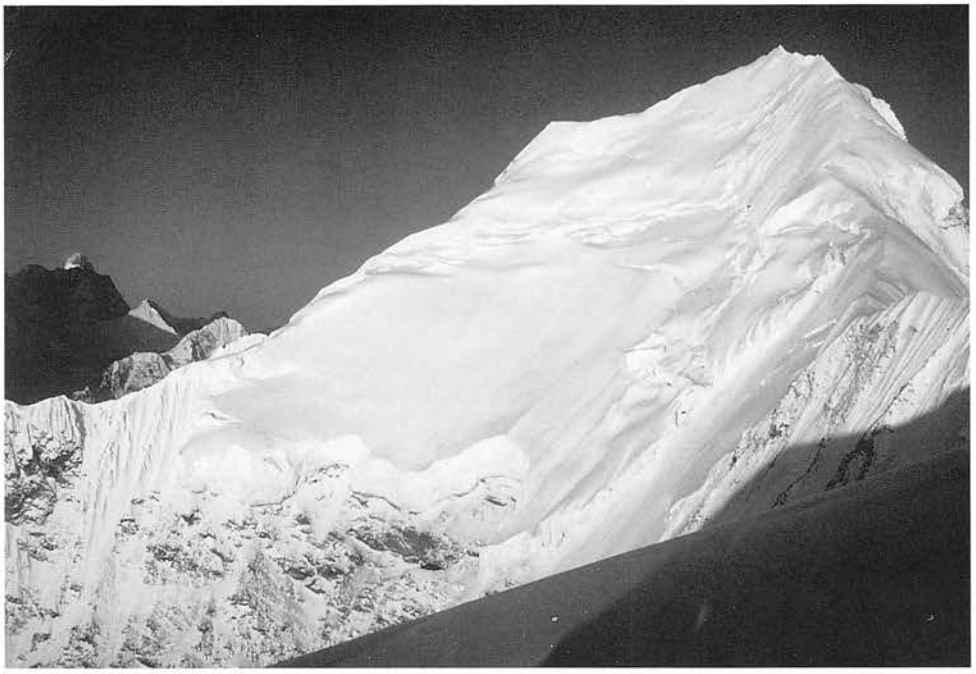


7,000m峰初登頂



▲インド、リモⅠ峰（Rimo Ⅰ 7,385m）1988.7.28 尾形好雄、吉田憲司、サマンラが初登頂　India

▼インド、ピラミッド・ピーク（Pyramid Peak 7,123m）1993, 4 ,24 岩崎洋ら5名初登頂　India



栄光の山7,000m峰初登頂

▲1977.8　インド、ジョギンダール・シン氏を迎えて札幌「ヒマラヤの夕べ」を終えて

交流

ネパール

▲ネパール、S.R.シャルマ氏を囲んで（前列左から加藤保男、清水清二、八木原圀明、菊地薫、角田不二、後列左から尾形好雄、坂下直枝、シャルマ、稲田定重、山森欣一、ランジャン（1979.8）東京にて

▼カンジェラルワ登山隊員とサーダーのチョタレ（カトマンズにて1973.5）

▼カンチェンジュンガ学術班 ＢＣにて
左から五百沢、松岡、谷本、小林（1981.5）

▲ＵＩＡＡ創立50周年記念大会がカトマンズで開催され、ホストのＮＭＡから招待されて、稲田、菊地が参加した。（1982.10）

交流

インド

ＩＭＦ総裁Ｈ.Ｃ.サリーン氏▶を招請。（左、Ａ１小野部長、サリーン氏、柴田会長、稲田専務理事）　東京.1981.8

▼ガンジー首相と稲田定重（ニューデリー、1983.8）

▲ＩＴＢＰ フカム・シン氏（左）と小島守夫（栃木.1985.1）

インドの著名な登山家Ｎ・クマール氏夫妻を囲んで（東京・一九八七・一）
前列左から山森欣一、クマール夫妻、遠藤登、Ａ１
◀石井、中列左から尾形好雄、寺沢玲子、飛田和夫、岳人永田秀樹。後列左から三枝照雄、小松幸三、小島守夫、バット

交流

中国

CMA副主席・史占春氏と▶
稲田定重（北京・1984.10）

▲ラプチェ・カン議定書を交換するチベット登山協会ローサン・ダワ氏(右)と遠藤登(1986.12)

▲HAJとチベット登山協会が合同でナムチャ・バルワに登山することを許可したと、櫻内義雄議員に報告したCMA史占春氏(左)と許競氏(右)。先生にお礼の酒を注ぐ山森（東京.1986.8）

▶HAJ四隊（チョー・アウイ、カルジャン、ギャラ・ペリ、ラプチェ・カン偵察）がラサに勢揃いした（一九八六・九）

▲二列目中央右は現日中協会白西紳一郎理事長。右端立っているのは李致新現CMA常務副主席。三列目左から２人目、李豪傑現CMA交流部副部長

交流

パキスタン
ブータン

パキスタン観光省、ムニュールデン氏▶を囲んで（京都、1984.2）

▼ムニュール・デン氏と新貝勲氏
（福岡、1984.2）

▲パキスタン・アルパインクラブ、ミザール会長と稲田定重　（東京、1984.10）

◀ブータンから登山研修生2人を受け入れ、積雪期登山の研修を八ヶ岳などで実施した。（2人ずつ、2回受入れ）（1983.11）

▼ブータン、ジグミ・チュルティム氏（正面立っている人）を囲んで

（札幌・一九八四）

夏と冬の風物詩

HAJ

合同壮行会（7月）
華甲望年会（12月）

▼恒例の合同壮行会（1986年インド女性合同隊）

◀一九八六年の合同壮行会には西田敏行氏も駆けつけてくれた。

▲ある年の壮行会、椅子に腰かけているのは左、山本久子さん、右は故吉沢一郎氏。

▶左から酒井國光、小笠原進、丸山芳雄の各氏一九九九年から年末に還暦を迎えた会員をお祝いする「華甲望年会」を開催した。

▼インド・ヒマラヤ会議（1989.1.8）

▼ネパール・ヒマラヤ研究会（1979.8.14）

各地で研究・研修・集会を開催

▼ブータン研究会（1983.3.1）

▼カラコルム研究会（1984.2.13）

▲中国登山研究会（1986.3.2）

▲高所登山　事故と環境対策研修会（1994.4.3）

▼日本ヒマラヤ会議・仙台（1980.7.6）

▼地域集会・長崎（1981.12.7）

そして、インド、韓国で講演を

▼稲田定重がインド、ＨＭＴＭで講演（1991.9.21）

▼山田昇がマナリ登山学校で講演（1986.9）

▼山森欣一が韓国釜山で講演（1996.6.1）

▼通常会員総会の模様（1992.5.30）

◀退院し帰国するインド、フカム・シン氏親子を成田空港で見送る（一九九八・三・十五）左から難波治雄・アルパナ・寺沢善信・玲子・岩崎洋・松山昭・飛田和夫・宮崎久夫・鈴木正典（前列・フカム・シン氏と山森欣一）

▶（ニューデリー、一九九一・二 八木原圀明ら）インド、ブラマプトラ川下りを終えて

◀インド、ヒマラヤ観光会議（ムスリー、一九八八・九 尾形好雄）

▲ラサで開催された「ヒマラヤ登山国際会議」には、中国、パキスタン、ネパール、韓国と日本から山森欣一が招待され出席した。(ラサにて、1996.5.23) 1960年、1975年の中国チョモランマ登頂者が集合した。

▼中国登山協会、李致新常務副主席から、ＨＡＪ創立35周年祝賀の楯を戴く 山森欣一理事長（2002.8.25 北京にて）

▶（一九九六・十一・二八 東京湾屋形船にて）
中国登山協会代表団歓迎会
（洛桑達瓦団長以下張江援、趙建軍、格桑(女)、羅申、ガヤ）

▲中国、チベット登山協会、登山隊元幹部（左から高諜興、洛桑達瓦、成天亮、ドジブ（2002.7.24ラサ）

▼新事務所での東京集会

▼ルームには各登山隊の記念隊旗が

▼ナンガ・パルバットＢＣ訪問の家族（1985.7）

▼近喰組の工場でスノーバーを制作（1984.夏）

（前列左が近喰氏）

▲1984.1 剣岳八ッ峰下山サポート隊（大町にて、前列右から３人目、角田不二隊長）

◀ 二〇年間初代会長としてＨＡＪを率いた柴田金之助氏が五月に退任。秋に木曽の山で囲む会が開かれた。（一九八七・九）

◀ ＨＡＪ創立30周年にて
右・柴田初代会長、左・遠藤二代目会長
（一九九八・一）

◀ 二代目会長遠藤登氏の退任を労う会が東京、高松で開かれた。（一九九八・六・二六）

▼オープン当時の高田馬場ルーム内（1979.11）

▼現在の事務所のある萬栄ビル

▼高田馬場事務所最後の東京集会（1994.10.24）

▲尾形好雄常務理事が13年間の専従から離れ、東京湾で労う会が開かれた（1995.1）

目　　次

創立35周年を迎えて

日本ヒマラヤ協会会長　　酒　井　國　光 …… 4

第Ⅰ部　35年のあゆみ

ＨＡＪの30年

日本ヒマラヤ協会前理事長　　稲　田　定　重 …… 8

それからの５年

日本ヒマラヤ協会理事長　　山　森　欣　一 ……20

特別企画＝日本ヒマラヤ協会の30年座談会……25

回想、そして未来　横断的組織が築き上げたもの［山と渓谷752号から転載］

創造するヒマラヤをテーマに30年……32

日本ヒマラヤ協会の山森欣一さんに聞く［岳人608号から転載］

回想　高田馬場15年　　山　森　欣　一 ……38

第Ⅱ部　35年の活動記録 ……51

ＨＡＪの各年の主な活動

第Ⅲ部　登山と野外活動

ＨＡＪ地域別入域者（図とグラフ）／ＨＡＪ国別・標高別入山表

年別山別集計表……90

ヒマラヤ九ヶ国最高峰の概要……94

登山隊の記録（1971年～1997年までは１頁２隊員1998年以降は一隊づつ見開き）……95

登山回数の多い山トップ４ ……164

野外活動：ヒマラヤの旅（トレッキング等のコースと参加者名簿） ……166

野外活動：その他の野外活動（トレッキング、小登山などのコースと参加者名簿） ……169

第Ⅳ部　帰らざる仲間たち……177

ナンダ・カート（インド、ガルワール・ヒマラヤ　1981年秋）／クン（インド、カシミール・ヒマラヤ　1982年夏）／マナスル（ネパール　1982年冬）／ナンガ・パルバット（パキスタン　1984年夏）／クラウン（中国、カラコルム　1990年秋）／クラウン（中国、カラコルム　1992年秋）／ミニヤ・コンカ（中国、横断山脈　1994年秋）

第Ⅴ部　研究会と出版 ……183
（研究会）東北地区ヒマラヤ研究会／日本ヒマラヤ会議／中国登山研究会／インド・ヒマラヤ会議／
ネパール・ヒマラヤ研究会／ブータン・ヒマラヤ研究会／カラコルム研究会／高所登山事
故と環境対策研修会
（出版明細、但し機関誌「ヒマラヤ」を除く）

第Ⅵ部　座談会　歴史の一こまとして
協会の意図するもの（柴田金之助）／協会の体質改善（柴田金之助）／
みんなのヒマラヤの再認識から（岩水竜峰）／創造する　ヒマラヤへ（稲田定重）
ヒマラヤの旅を終えて（1972年３月）……199
ＨＡＡＪの遠征をめぐって（1977年２月）……209
日本登山界とＨＡＪ（1979年12月）……221
21世紀のヒマラヤを語る（1988年ＧＷ）……226

第Ⅶ部　ＨＡＪを支えた人たち ……235
役員名簿／評議員名簿／地域別・会員の推移／会員名簿

第Ⅷ部　創立30周年記念報告／報道にみるＨＡＪ……255

編集後記 ……277

＊図（Ｂ４折り込み）
ヒマラヤ概念図……281～282

カット：谷田川　武

創立35周年を迎えて

日本ヒマラヤ協会
会長　酒井　國光

日本ヒマラヤ協会（英文略称ＨＡＪ）は、昭和42年（1967年）10月の創立以来、広大なヒマラヤ地域（ネパール、インド、パキスタン、アフガニスタン、旧ソ連、中国、ブータン）を舞台に登山・踏査・川下りなどの野外活動を展開すると共に、自然科学・人文科学についても調査・研究・実践し、35年を迎えることができました。

35年の間には、未踏峰・未踏査地域をめざした隊、高所の困難な課題を求めた隊、豊かで楽しい旅に夢を実らせた隊など、それぞれの時代にあった活動を続けた結果、2800余名という多くの人々がＨＡＪの旗の下に集い、魅惑的なヒマラヤの山野での活動に参加した会員の数も実に146隊延べ983名という多きにのぼり、ヒマラヤ登山の大衆化の一翼を担う結果となりました。

ヒマラヤを舞台にした登山・踏査に代表される野外活動には、「高所」なるが故の様々な困難な問題が潜んでいました。そのような実践の妨げになる問題を解決するために、ＨＡＪの主催による研究・研修会が全国各地で続々と開かれ、一般に公開され好評を博して参りました。その中には「インド・ヒマラヤ会議」のように、23年の長きに渡って開かれているものもあります。

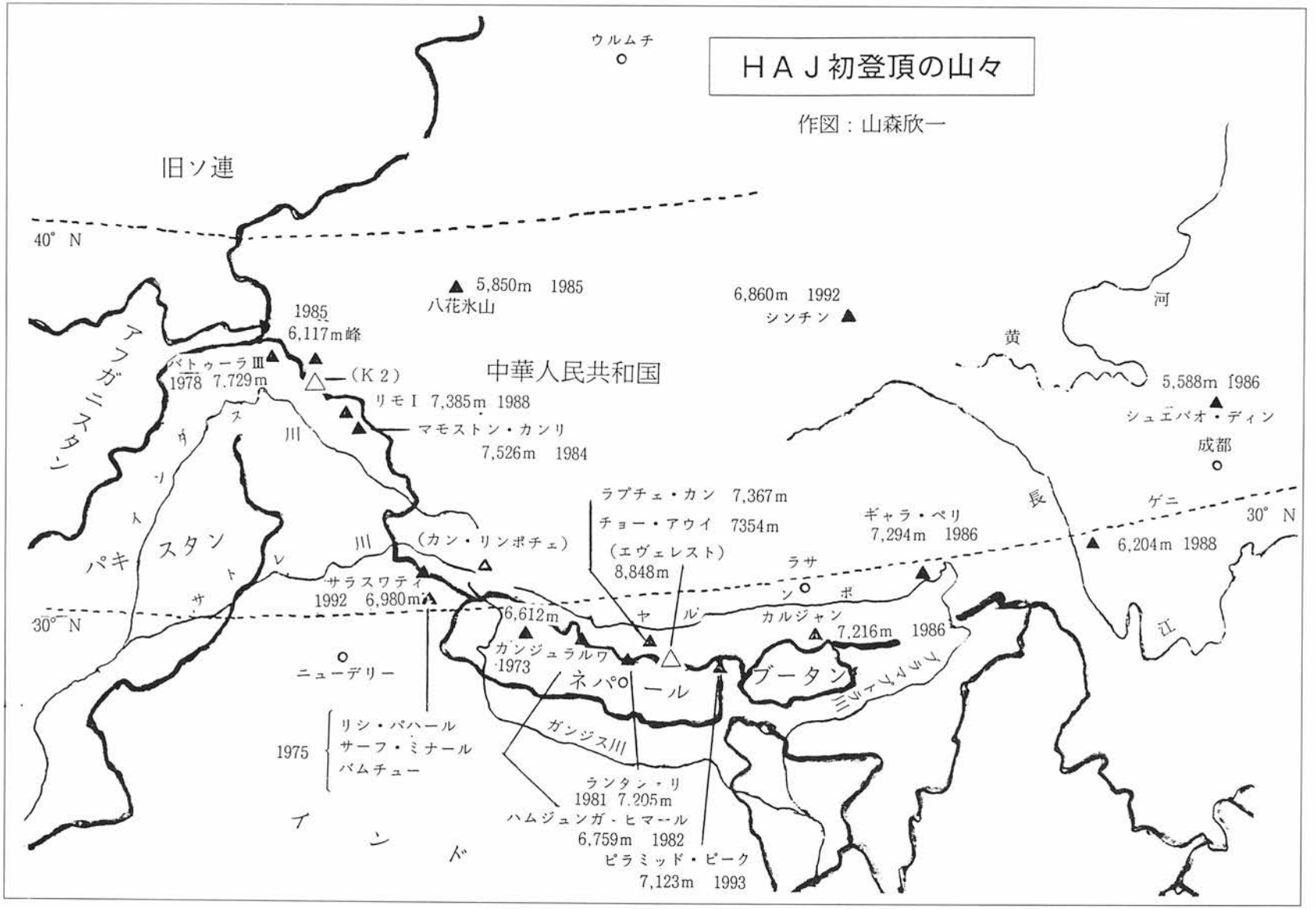
しかしながらこのような地道な研鑽や努力を積み重ねているにもかかわらず、雪崩などの原因により、本会派遣の登山でも20名がヒマラヤの山々に眠るという誠に残念な事故も起きております。今更ながらにヒマラヤの大自然のもつ破壊力の物凄さを思い知らされると同時に、これらの事故の原因を探り次の活動の戒めに繋げるべく努力しているところであります。

ヒマラヤ地域の地理的な位置が、国際社会の複雑な対立構造の中で微妙であった時代には、登山・踏査を実践するためには、より正確な情報が求められておりました。ＨＡＪでは、これらのニーズに応えるべく、ネパール、インド、ブータン、パキスタン、中国各政府の登山担当責任者を招請し、全国各地で研究会を開催し一般に公開して参りました。また、これらの機会を通して、ヒマラヤ諸国との交流を積極的に進めて参りました。また、時代の要請として「山岳環境の汚染防止」につきましてもヒマラヤ地域の実践的な提言をはじめとして、積極的に情報を提供し関係団体と協力して啓蒙活動を展開しておるところであります。

これら登山・踏査などの野外活動の結果につきましては、その都度報告書としてまとめられ希望者が自由に手にすることができるようになっておりますし、研究・研修会等の資料につきましてもまとめられ、特に、中国、ネパールにつきましては個別に手引書としてまとめ、ヒマラヤをめざす登山者の参考書ともなっております。さらに、このような野外活動や研究・研修、交流活動やヒマラヤ地域の情報は、毎月定期刊行しております機関誌「ヒマラヤ」誌上にて逐一報告され、会員内外に提供されております。その「ヒマラヤ」も371号を数えることができました。

このようにＨＡＪが無事35年を迎えることができましたのも、会の草創期を作り上げた柴田元会長や沖元専務理事をはじめとする、歴代役員の皆様の弛まぬ尽力があったればこそでありますし、何よりもその役員を支え続けた2800余名の会員が、ＨＡＪの旗の下に集っていただいた結果であります。そして、ＨＡＪの活動に物心両面からご支援いただいた各界の皆様、ヒマラヤ諸国の関係の皆様に厚く御礼を申し上げます。

今後とも、ヒマラヤ地域での活動を続け、微力ではありますが登山界の発展と国際交流の進展に寄与すべく努力する所存でありますので、ご支援・ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。



ＨＡＪ初登頂の山々
作図：山森欣一
旧ソ連
ウルムチ
40° N
5,850m 1985
八花氷山
6,860m 1992
シンチン
1985
6,117m峰
バトゥーラⅢ
1978 7.729m
（K 2）
中華人民共和国
リモⅠ 7,385m 1988
マモストン・カンリ
7,526m 1984
アフガニスタン
パキスタン
ス
川
ダ
イ
ソ
ト
サ
レ
川
5,588m 1986
シュエバオ・ディン
成都
黄
河
長
ゲニ
30° N
6,204m 1988
ラプチェ・カン 7,367m
チョー・アウイ 7354m
（エヴェレスト）
8,848m
ギャラ・ペリ
7,294m 1986
ラサ
ヤ
ル
ン
ポ
カルジャン
7,216m 1986
（カン・リンポチェ）
サラスワティ
1992 6,980m
6,612m
ガンジュラルワ
1973
ネパール
ブータン
ブラマプトラ川
ニューデリー
ガンジス川
1975
リシ・パハール
サーフ・ミナール
バムチュー
ランタン・リ
1981 7.205m
ハムジュンガ・ヒマール
6,759m 1982
ピラミッド・ピーク
7,123m 1993
インド

第Ⅰ部

35年のあゆみ

ＨＡＪの30年

前理事長　稲田定重

草　創

手元に小さな「ヒマラヤ通信」がある。第1号の巻頭は、柴田金之助会長の「協会の意図するもの」で飾られている。「私は登山家ではありませんが、1963年にヒマラヤを訪れて以来、その美しさにうたれ、このヒマラヤを多くの人々に是非見せてあげたいものだと考えるようになりました。・・・・日本ヒマラヤ山岳協会は低廉な費用で共にヒマラヤの旅を楽しみ、登山、学術、芸術などの諸分野で調査、研究、鑑賞を進めて行こうとする人々の集まりで、ヒマラヤを知ることによって、ヒマラヤの国々と日本との友好親善の架け橋となることも大きな目的として設立いたしました。・・・・多くの方々が協会の意図するものに賛同していただき、ぜひ“世界の屋根”ヒマラヤを研究し、眺め、登り、そして、深い感動をいだいていただきたいと思います」

柴田会長のこの素朴な、そして、新鮮な考えかたに共鳴して協会を興したのは、名古屋を中心とする沖允人氏ら有志であった。設立の1967年は、ベトナム反戦の急激な高まり、中国文化大革命、そして国内では美濃部都政の誕生などに揺れていた年であった。

登山界では、10年ほど前から屏風岩・谷川岳など困難な岩壁の積雪期登攀が行われ、その黄金時代が一段落していた。56年のマナスル初登頂にはじまって、58年の深田久弥氏らのジュガールヒマラヤ遠征、そして、ヒマルチュリ、ビッグホワイト・ピークと続いたネパール・ヒマラヤの隆盛が65年からのネパール登山禁止で挫折していた。しかし、ヒマラヤの情熱は67年からのヒンズー・クシュへのラッシュとなり、10余隊がパイオニアの領域が濃厚な地域で目ざましい成果を上げつつあった。

65年にダウラ・ヒマールに遠征した沖氏ら協会設立の中心メンバーが掲げたのは「みんなのヒマラヤ」というモットーであった。67年10月に沖氏宅を事務局として発足した。「日本ヒマラヤ山岳協会＝ＨＡＡＪ＝Himalayan Alpine Association of Japan」は翌年4月に会報「ヒマラヤ通信」第1号を発行している。会報1号には、エベレスト山麓ナムチェ・バザールへのホテル・飛行場の建設計画をネパール政府に提出したこと、第1回ヒマラヤの旅の募集などが収められている「ヒマラヤの旅」の第1回は当時としては画期的な24名の会員が参加し、新鮮な感動は、後々の精力的な活動、会員相互の連帯感の基礎となっていった。羽田を飛び立つエア・インディアのエンジンの轟音を聞きながら柴田会長は、眼をつぶって旅の無事を祈っていた。

ヒマラヤをみじかに引き寄せる原動力となった「ヒマラヤの旅」はその後連年実施され、創立5周年を記念した71年90名が参加した大ツアーで頂点を迎えることになる。そして、ヒマラヤ・トレッキングの一般化にともない次第に参加者は衰退し、会員の関心は多様な変化を見せ、協会の活動領域は、地域的にはヒマラヤ全域・高地アジアの一部へと拡大し、旅から登山までの広いフィールドへと志向して行くことになる。

協会がヒマラヤ・トレッキングの分野で多くの情報を蓄積し、国内での一定のポジションを獲得したことは、72年10月発行の「岩と雪」27号でのトレッキング特集を会員が担当執筆したことでもわかる。

しかし、この成果は登山界においては「トレッ

キング団体としてのＨＡＡＪ」という認識を植えつけ、後にはじまる登山遠征において障害をもたらすことにもつながった。けれど、文字通り雲の上の存在、一部の先鋭登山者の領域と思われていたヒマラヤを、ひとり登山に限定されずに多くの人にとっての希望、現実へと誘導した業績は、わが国のヒマラヤへの歩みを語る上で断固として光り輝くものであると自負できよう。

71年６月まで発行されたＢ６判の「ヒマラヤ通信」には、すべてが開拓であった草創の時期の苦しみや感激、喜びが詰まっている。その新鮮さが今、痛いようにさえ感じられる。

展　開

ＨＡＡＪとして最初にヒマラヤの頂上をめざしたのは、橋本広隊長らの69年ヒンズー・クシュ踏査隊であった。第２回ヒマラヤの旅ということで派遣された隊は、アフガニスタンのキンジャン山群の４千メートル峰４座に登頂した。

また、自分の所属する組織での遠征参加の経験を持つ会員も次第に増加し、71年からのネパールヒマラヤ登山禁止解除の動きもあって、会員の中では登山遠征の機運が大きな盛り上がりを見せてきた。特に、地方の会員にとっては、ヒマラヤ情報を吸収し、人的ネットワークをつくるだけでなく所属組織では実現しにくい遠征を協会の場に期待するという動きも出てきていた。

創立５周年をまじかにひかえた71年、柴田会長は「協会の体質改善」をとなえ、機関誌上で、総合的なヒマラヤの紹介・研究に加えて入域困難な地域への調査隊の派遣や登山隊の送り出しを今後の課題とし、専門的研究グループの発足を提唱した。既に以前から地域研究の有志活動が始まってはいたが、これが組織化され、71年にはブータン研究会、ラダック研究会が発足した。

これらの研究会は、具体的な入域をめざして基礎的調査から入って行くもので、従来の「旅」という他者依存と異なり、自らが開拓者となり、自分たちのヒマラヤを創って行くという点において創立以来の組織の進化、会員の成長をシンボライズするものであったといえよう。

いまでこそカネとヒマさえあれば自由に行けるこれらの地域は、当時、固く門戸を閉ざしており、この扉を押し開けることは至難の業であったのである。それだけに全てが新鮮であり、新聞が伝える国際情勢の小さな動きにさえ目を配り、あらゆるコネクションを動員してバリヤーにチャレンジする喜びがあり、パイオニアとしての感動を味わうことが出来たのは素晴らしいことであった。

そして、いずれの研究グループも後年、見事に目的を達成して行くことになる。

特に、空昌昭氏を中心とするラダック研究会の精力的な活動が切り開いた73年のラダック初入域は特筆されるべきものであり、後のカシミール・ラダック地域での連続する遠征への道を開くものでもあった。また、登山を志す会員と共に、広く地域のさまざまな分野に関心を持つ会員が一つのグループの中に共存して行ったことは、後の協会の登山遠征隊の特性をつくることに大きく貢献したと言えよう。

71年に最初の集まりを持った東北ヒマラヤ研究会は、「地方のヒマラヤ」の典型であった。彼らにとってＨＡＡＪこそヒマラヤへの希望であり新しい地平を切り開くものとしての存在そのものであった。研究会の中で東北を中心とした会員たちは貪るように情報に接し、いわゆる中央から来た先覚者、経験者たちと語り、同じ思いを持つ同志たちとのネットワークを急速に築いて行ったのである。明け方まで時間を惜しむように語りあい登山に限定しない広い視野でのテーマでのデスカッションや講義のレベルは高いものがあった。この研究会は、各県会員の持ち回りによる献身的な努力で回を重ねるほどに多くの人々を集め、東北というエリアを越え、ＨＡＡＪ会員のワクを越えて全国的広がりを見せて行くことになる。

そして、研究会の報告書は、やがて「ヒマラヤ研究シリーズ」へと発展し、参加者は、協会の登山遠征や運営の中核として成長して行った。

現在、協会が日本のヒマラヤに関する情報センターとして揺るぎない地位を確保していることは自他ともに認めるところであるが、この基礎は既に60年代の終わりには萌芽していた。札幌の阿部淳氏による「高山病ノート」は、地道な研究と組

織活動を積み上げながら北海道地区をリードし、協会前半の運営を支えるその後の氏を予感させるものであり、また、協会の多彩な「ヒマラヤ学」のはしりでもあった。70年末から54回にわたり機関誌上に連載された「ヒマラヤ学入門」は、ヒマラヤの広大さ、奥深さをあらためて認識させ、行動の基礎を形成してくれた。

「学」は驚くほど多彩にわたっている。なかには“お金を盗まれないために”というようなことまで含まれており、異文化の中で行動するためのノウハウがぎっしりと詰め込まれている。それは、会員が蓄積し、協会が獲得してきた豊かさとも言えるものであった。

会員それぞれには、誇るべき「学」、伝えたい「学」があることを再認識させられる。

ヒマラヤ学と銘打たなくとも会員の体験や行動そのものが「学」であった時代、それを共有しようと積極的に協会がヨコのつながりを創って行った時代、それぞれの学に学び個々の豊かさを創るべく真剣になったダイナミックなときを持てたことは、率直に誇りにしてよい歴史である。

地域的には、初期のネパール・ヒマラヤから拡大して、インド亜大陸全域への傾倒が進んだ。特に1年間インドに留学しながらインド・ヒマラヤを広範囲に動き、実戦的な情報を絶えず発信し続けた沖氏の存在は記憶されるべきである。

そして、ヒマラヤ学は「遠征学」として、戦略や戦術の実践論として発展して行った。

しかし、頂上をめざす動きは少なからぬ初期会員の期待を減殺するものでもあった。

創立以来の協会の基盤を築き、会員のきずなを養ってきたものに「集会」がある。全国各地の山麓や街なかで持たれた集会は肩のこらない雰囲気が濃厚にあり、会員にとって楽しいものであった。誰もが参加でき、自由に発言し、互いに知りえたことを喜びあう場であったと言えよう。

その集会の場は、次第に目的化され、実践を前提とした過程の中に組み込まれ、せわしないものとなって行く。いずれの組織にとっても見られる会員意識の分化は協会にとっても例外ではなく、これをよしとしない会員の乖離が次第に多くなって行った。

一方ではＨＡＡＪの体質変化に呼応して、自らのヒマラヤ登山の実現を夢見る多くの人間が結集しはじめていた。東北にヒマラヤ研究会のメンバーが主体となって設立した「小遠征研究グループ」の活動が始まったのは72年である。

タテ社会の論理を否定し、広域のヨコ連携によるライトな登山をめざす論理が熱をもって展開され「Expedition 研究グループ」へと拡大脱皮し、協会の体質を根本から変える巨大な力へと成長するのに長い時間は必要としなかった。

このような「高みへの序曲」とも言える動向の中で、カンジェラルワ（6,612ｍ）遠征が最初の本格的遠征として登場してきた。

トレッキングから脱皮し、研究を深め、真剣な広範なヒマラヤをめざしつつあったＨＡＡＪではあるが、登山界一般の受け止め方はそれらの努力を正当には評価していなかった。或いは、殊更に評価しようとしない動きが存在していたと言える。その実態が表面化したのはカンジェラルワ遠征にからむ東京都山岳連盟加入問題であった。

ネパール・ヒマラヤ遠征を実施するには日本山岳協会の推薦状が必要であり、そのためには傘下の都道府県山岳連盟に加入することが不可欠であった。近い将来東京事務所を開設し、会員数も最も多い東京都を活動の本拠として都岳連に加入することが将来の活動基盤をつくるにふさわしいものとしての加盟申請は厚い壁に阻まれた。北海道の登山者をなぜ東京が推薦しなければならないのかという問題がこれに輪をかけてもいた。

しかし、理解ある人々ははＨＡＡＪの努力をきちんと見つめていた。小島六郎氏らはその一人であった。難航した加入問題は決着し、次代への夢を担ったカンジェラルワは北海道グループの緻密な研究と高い技術を発揮し、73年、未踏峰の頂上に初めて協会の旗をひるがえした。

カンジェラルワの成功が登山をめざす会員に与えた希望は極めて大きいものがあった。いわゆるＥｘｐ研を中心とする遠征の動きは具体的目標を持って加速され、その中で協会の将来像も激しく論議された。論議は急進的過ぎるきらいさえあり時に初期会員との隔絶を招いた。会員の交代現象が発生しはじめたのはこの頃からであるが、会員

の絶対数は着実に増加して行った。

早くから設置したカトマンズ連絡所はランジャン氏特有の人柄もあって多くの会員に利用され、会員に限らず日本隊やトレッカーのネパールでのオアシスのような存在を果してきた。次いで設けたのがデリー事務所である。70年代に入ってインド登山界との接触を深めてくるなかでインドヒマラヤの比重は活動の中で大きく高まって行き、その中で現地事務所の設置にまで発展した。生活設備も整えた郊外のアパートは装備のデポ場所ともなり便宜を受けた会員は多い。カシミールのスリナガールには協会の土地を確保して山小屋設置の話さえ具体化し、実地検分まで行われたが建設にはいたらなかった。

このように現地事務所まで置こうというエネルギーは、現地との結びつきを深め、ヒマラヤ諸国を会員のみじかな存在、親しみある国とすることに大いに役立ったものである。だが、これらの事務所も現地関係者の死亡や情勢変化によってその後閉鎖された。

70年代前半、創立10周年を控えたＨＡＡＪは、「みんなのヒマラヤ」というモットーにおいてトータルな意味での頂点を迎えていたと言えよう。創立に携わった人間たちの夢は見事に開花したと言って過言ではない。

高みへの序曲

頂上をめざす環境が次第に整えられ、研究の場での討議や理論が深まるにつれ、実践への機運が熟してきたことを多くの会員が感じていた。

カンジェラルワはその引きがねとなり、また登山界にはＨＡＡＪの実績がようやく浸透しつつあった。ＨＡＡＪのかなりの会員が地方の海外登山関係で主要な役割を担うようになっていたのも幸いしていたと言えるし、70年代当初から頻繁に開催されるようになった各地の「ヒマラヤ集会」が会員外まで引きつけてきたことも大きい。

東北ヒマラヤ研究会は、名称を東日本ヒマラヤ研究会へと拡大発展し、全国的規模を持つようになっていた。

74年ラムジュン・ヒマール遠征は正に協会の特性を発揮してつくられた本格的広域チームであり、その思想は、後年展開される遠征の原型をなすものであり、登山界全体においても高いレベルでリードし得るまでに成長していた。

74年秋に発行された「Expedition－I」は、頂上をめざす者たちの深い思索、革新の気にあふれ、「残るは実践」という闘志に満ちていた。

ラムジュン・ヒマールは山倉隊長のもとに見事に新ルートからの登頂に成功し、75年の準備を進める者たちに大きな自信をもたらした。

75年ヌン（7,135m）遠征は、協会にとって一つの試練であった。遠征実現までの許可渉外のクリヤー、日印合同となった隊の運営、困難なインド通関への対応など、ＨＡＡＪが初めて直面する多くの問題を処理しながら進められた西郡光昭氏は、隊長としてボンベイにおいて実に足掛け３月の長い期間をひたすら隊貨の通関のために費やしたのだった。

ヌン登頂は成らなかったが、メンバーの中から将来の協会を担う人間たちが現れることになる。

一方、開かれたばかりのナンダ・デヴィ山群に向かった清水澄氏を隊長とするガルワール・ヒマラヤ隊は、数々の幸運に恵まれ、予期以上の成果を上げることが出来た。6,992m峰はリシ・パハール、7,000mに高い無名峰はサーフ・ミナールと命名され、他に６千ｍ１座の初登頂をなし遂げた。

かくして74年から75年にかけての登山遠征の成果はめざましいものがあり、登山遠征を恒常的に組織し、活動の大きな柱として定着させ得る自信を植えつけ、外部に認識させたと言える。

一方、機関誌「ヒマラヤ」は、75年４月から毎月発行となり、編集体制も強化し、新たな編集方針のもとにスタートした。

76年１月からは東京事務所もオープンした。各地のヒマラヤ集会や機関誌上での情報も遠征隊がもたらした成果を加えて充実したものとなり、会運営のバランスから見れば最も均衡した時期であったと言える。

研究会活動も新たに発足したチベット研究会、ワハン研究会、東部ヒマラヤ研究会等を加えて全ヒマラヤをカバーするに至り、全国各地で会員のコミュニケーションは深化して行った。これらの

研究会はそれぞれに机上の論だけではなく実践目標を掲げ、未踏査の地域をめざしてあらゆるつてを求めての渉外活動を一方に伴っていた。

ワハン研究会は、東海の有志を中心に組織され、76年のバダクシャン遠征を実現させたが、ワハン回廊への夢はかなわなかった。

東部ヒマラヤ研究会は、藤井毅氏の精力的なアッサム、アルナチャルへの傾倒を基盤とし、ブラマプトラの奥、ビルマ国境までの踏査を実現させるにいたった。

この時期のＨＡＡＪの活動はインドにおいて当局の関心を引くまでに活発となり、インド登山界の多くの人々と人脈を形成し、後の合同遠征の基礎を築いて行った。

また、国内においてはインド・ヒマラヤに関して他の追随を許さない膨大な情報とノウハウを蓄積し、登山界での権威を確立していた。

遠征が恒常的に実施される情勢にどう対応するかが組織としての課題に上がってきた。登山隊の性格から１）ＨＡＡＪ直轄の隊　２）ＨＡＡＪの名で派遣するが資金等に隊自身が責任を持つ隊、３）後援する隊　に分け、これを略称「ヒマラヤ委員会」が統括することに整理された。しかし、実質的には各隊とその推進グループの主導のもとに実施されて行った。

73年から76年にかけてのＨＡＡＪの活動は本格的なヒマラヤ高峰登山が組織活動の中で定着する序曲であった。間もなく創立10周年を迎えようとしていた。

転　機

10周年は、特別の行事をすることもなかったが、来るべき15周年に向けて協会のありかたを真剣に考えようとする動きが急になってきた。

それは、15周年記念事業として提案された「Ｈ＆Ｓ作戦＝ヒマラヤとシルクロード大作戦」を直接の契機とした。背景には登山への関心の高まりと傾斜、一方におけるＨＡＡＪのモットーである「みんなのヒマラヤ」が衰退することの危惧があった。会員の少なからぬ部分、特に初期からの会員に登山への過度の傾斜、専門化を憂える声があった。“ヒマラヤへの関心”という共通項でのゆるやかな、肩の凝らない集まりというイメージが少しずつ変質してきていたのである。

Ｈ＆Ｓは、前記のような背景を踏まえ、会員の多様なニーズを大きなフレームに統合し、個々が持つ多面的な能力を結集し、創立以来の蓄積を総動員しようという極めて壮大な事業であった。

８千メートル峰のライトエクスペディション、中国からトルコまでのユーラシア全域にわたる踏査活動、各国での登山活動等々、足あけ３年、参加者180余名を予定していた。

準備委員会が儲けられ、機関誌には、Ｈ＆Ｓ計画のページが突設され、計画のラフプランが提案され、各種の集会で盛んに検討された。

76年に提案されたＨ＆Ｓプランであるが、75年春には「ＨＡＡＪとは何か」という提案が機関誌上で稲田によりなされていた。それは10周年をひかえての組織整備、活動のあり方、将来像などを現状を踏まえて提起し、８千メートル峰遠征や大型ツアーなどの記念事業、会員拡大の方向や法人化等を提案していた。

結果的にはＨ＆Ｓプランは、総合事業として統括され、体系的に進められるにはいたらなかった。しかし、計画検討の過程で会員へのアンケートが実施され、それぞれが何をＨＡＡＪに求めているかを把握する努力がなされた。

また、計画を契機として「ＨＡＡＪを考える」というテーマでひじょうに多面的な提案や問題点の指摘、夢が機関誌のなかで連続的に掲載され、それをもとに各研究会や集会で会員の討論が花咲いたことは、極めて有意義なことであった。

今、Ｈ＆Ｓ計画の内容をふりかえると、当時は全く破天荒で無謀とも認識されていた多彩な計画のほとんどがその後の活動の歴史の中で実現されていることに驚く。

「志あれば、事ついに成る」ということわざがあるが、意思と夢の大切さをいまさらながらに感ずるのである。そして、夢を実現させる主体としての人間の可能性の素晴らしさに脱帽してしまう。

Ｈ＆Ｓ計画は２年間にわたり検討され、多くのものを生み出し、ＨＡＡＪの将来の方向を決したと言って過言でない。その意味では大きな10周年

記念事業であった。

特に、76年4月4日の総会で、会の名称を「日本ヒマラヤ協会」と改め「山岳」を外し、より広範囲なヒマラヤでの活動に取組み、また、多くの会員を結集しようとすることが決定された上で取り組んだH＆Sだけに、本懐の歴史に永く記憶されるべきものである。

組織改編の大きな目玉として取り組まれた本会の法人化は、文部省当局との度重なる折衝にもかかわらず実現にはいたらなかった。あらためて登山界のありかた、そこに流れる旧態依然とした体質を痛感させられたものであった。

なお、78年度通常総会は、法人化の準備もあって、社団法人設立総会も兼ねて10月末に行われた。事務所を長年お世話になった名古屋の沖氏宅から東京の山森欣一氏宅に移し、役員体制も専務理事など大幅な入替えが行われた。
これもまた、本会の大きな転機であった。

執行体制の改編とともに、協会全体の組織の見直しが行われ、高所登山委員会、野外活動委員会等理事担当制による八つの専門委員会体制、会員の自主的研究グループとして八つの専門研究会の認定などがなされた。

ヒマラヤ登山学校もH＆S検討の中で事業化したものである。高峰登山の基礎を学び、それぞれの実践に結びつけ、本会の特性を発揮して多くの人間にヒマラヤ登山という素晴らしい体験を提供しようとするものであった。

実質的な第1回は、カシミールのヌン（7,135）で78年夏に実施され、成功をおさめ、また第2回のガルワール・ヒマラヤ隊も見事な成果をもたらした。その後も各山域で登山学校は継続され、登山学校を経験した者は57名に上り、80年代ＨＡＪの登山の中核となり、また、それぞれの地域や組織でヒマラヤへの輪を広げていった。

登山学校は、いわゆる公募登山隊とは全くことなるものであった。計画の当初から参画し、遠征のノウハウ、高所登山の技術をそれぞれの責任分担の中で学び、仲間がつくられて行くシステムは独立行動の出来る個人をつくり出し、組織の永続性をめざすものであった。

78年はまた、カラコルムへ最初のＨＡＪ隊が派遣された年でもあった。西郡光昭氏を隊長とするバトゥーラⅢ峰（7,729）隊の成立の背景には壮大な計画が秘められていた。Expedition研究会はラムジュン・ヒマールに続く二つの遠征を成功させた後、やがては超高峰への登山を展望していた。そして、カンチェンジュンガ縦走という破天荒とも言える計画が熱をもって語られ、その前哨戦として、バトゥーラⅢ峰がプレ・カンチェンジュンガ遠征として登場してきた。

未踏の高峰であったⅢ峰が見事初登頂をおさめたことは、カンチェンジュンガへの夢を大きく引き寄せたものであった。

79年11月には、高田馬場に待望の独立事務所を持つことができた。悲願であった「ルーム」を獲得したことは、活動の質を大きく変えることにもつながり、専従職員体制が敷かれたＨＡＪは80年代へ向けて、大きく飛翔することになる。東日本ヒマラヤ会議は日本ヒマラヤ会議と改称しその第1回が山形で持たれた。

カンチェンジュンガ

80年3月に機関誌「ヒマラヤ」は100号を迎えた。記念の座談会の中で登山界のリーダーたちは、ＨＡＪの飛躍を率直に評価すると共に、日本登山界に生まれたユニークな組織とその活動方法に期待を寄せると同時に、非常な興味をもって見ていたことがうかがわれる。

創立以来掲げられてきた「みんなのヒマラヤ」の歴史をうけ「創造するヒマラヤ」へと転換したＨＡＪだが、財政能力と事業、運営方式のギャップに執行部は常に苦しむ日が続いた。この悩みは今にいたるも解消されていない。財政難は、カンチェンジュンガ遠征で頂点に達したが、計画にはいささかのためらいもなかったのは、驚異でもあった。

カンチェンジュンガは、オールラウンドにヒマラヤに関わり、高所登山をその一方の柱とするＨＡＪの将来像にとってどうしても越えねばならない課題として認識された。

組織にとって最初の8千メートル峰でありながら何故に超高峰、それも当時の世界登山界に類を

見ない「縦走」という困難極まる課題を設定したのか、計画成立までの経緯をいま分析しても確たる答えは見つけられないのである。

夢とかロマンとかいうものに、客観性とか必然性とかの理性はないのかもしれない。カンチェンジュンガはそれでこそ芽生えることが出来たテーマであったと言えよう。

しかし、ひとたび設定された目標はすさまじい魅力で人間を引きつけ、行動に駆り立てるものである。それが巨大であるほどに狂気ともいえる情熱が注がれる。カンチェンジュンガは正にそれであった。

80年の偵察に続いて、81年の本隊は4名の学術隊を加え総勢26名の巨大な隊となった。文字通りＨＡＪの持つ戦力を傾注した遠征であり多くの会員の支援を受けて実現した隊であった。隊は、ヤルン・カンと主峰の二つの超高峰に同日に10名の隊員が登頂に成功したが、主目的である縦走は成らなかった。

しかし、この遠征に参加し、8,000ｍを経験した隊員たちはこの後、現在にまでいたるＨＡＪの活動の中核となっており、特に、80年代以降連続的に実施される遠征のリーダーシップをとるにいたる。

形として大遠征となり、登山界の主流となりつつあった新しいヒマラヤの登り方から見れば画期的に評価されるものではなかったが、送りだした組織にとってはあらゆる意味でエポックメーキングな歴史を刻んだのである。

カンチェンジュンガは創立以来の頂点であると同時に、高みへの新たな出発点でもあった。

痛恨のナンダ・カート

カンチェンジュンガが終わると同時に冬期エベレストの計画が浮上した。

エベレストはその絶対高度なるがゆえに常に目標たり得る魅力を保持している。しかも冬のエベレストは何にもまして極限の課題である。

カンチェンジュンガは登頂こそしたものの目的である縦走を成功させるには至らなかった。隊員と送りだした側には不完全燃焼があった。しかも、不完全燃焼ながらＨＡＪが保有する戦力は頂点を極めていた。

組織として多分、これまでのパワーと情熱を結集出来る日が再び訪れてくるのはないのではないかと思われた。かくて、冬期エベレストは必然のテーマと受け止めた。カンチェンジュンガのメンバーたちも燃えた。

ルートはより困難な西稜に設定した。すべてを賭けて挑戦するにふさわしいルートであった。

早急な資金対策がとられ、そのメドが完全についた数日後の10月上旬、全く思いもかけない驚天動地の知らせがインド・ヒマラヤから飛び込んできたのである。ガルワール・ヒマラヤ、ナンダ・カートにおけるＨＡＪ隊のアクシデントである。ＨＡＪ創立以来の最初の遭難、しかも7名という大量遭難であった。高所登山委員会では、続発するヒマラヤの遭難を分析し、機関誌において特集を組んだ直後のことであった。

遭難の知らせを受けて捜索隊の派遣が決定され国外にあってエベレストに備えていた隊員は緊急にデリーに招集され、同時に冬期エベレストは無念の涙をのんで放棄された。

捜索隊は、冬迫る高所で超人的な捜索を行ったが7名の命は再び帰ることはなかった。

遭難対策は数カ月にわたり、厳しい対応を迫られた。何よりも初めて友を失うという哀しみにうちひしがれた。運命のあまりの非情さをかみしめた81年であった。

ナンダ・カートは、高所登山に取り組むことの厳しさ、2度と悲劇を繰り返すまいという確認を痛いほどに認識させた。

しかし、遭難事故はナンダ・カートの翌年もＨＡＪ隊を襲うことになり、その後も繰り返し悲劇は発生した。

原因の徹底した分析、防止への真剣な努力がなされつつも根絶は、いまもってかなわない。

ヒマラヤの巨大さ、人間の弱さを噛みしめる。

国外ネットワーク

協会は、発足当初からヒマラヤの各国と交流を持ってきた。創立者の柴田金之助氏は、協会が出

来る前からネパールの若者を招請し、日本の大学で学ばせていた。

発足の初期はネパール・ヒマラヤを主たる活動対象とした関係から、ネパールとの交流がほとんどであった。タカリーの実力者インドラ・マン・セルチャン氏とは、息子のキラン君ともどもネパールに行く会員がお世話になったところである。

柴田氏の招請で日本の大学を卒業したランジャン氏は、カトマンズに低廉で親しみ易いホテルのエクスプレス・ハウスを開き、会員だけでなく日本の登山家やトレッカーのオアシスとなった。

ランジャン氏のネパールにおける人脈や働きかけにより、主管の観光省や登山界、他に協会のコネクションが拡大された面もある。カンチェンジュンガ遠征の前後にネパールに滞在し、ＨＡＪの国外渉外要員ともいうべき役割をつとめ、極めて困難な接衝をこなした菊地薫氏の努力を素晴らしいものがあった。菊地氏にはＨＡＪだけでなく多くの日本隊がお世話になったはずであり、記憶されるべき人である。

ネパール観光省登山局長Ｓ．Ｒ．シャルマ氏を招請したのが79年であり、氏はこのあと81年にもＨＡＪの招請で日本を訪れた。氏にはカンチェンジュンガ遠征やのちのムスタン遠征で多大なお世話になったが、ちょうどネパール政府においても登山・観光振興の新たな検討が行われていた時期であった。ＨＡＪとしては、外国人、登る側の立場から出来るかぎりの資料提供を行った。

インドとの最初の結びつきにも柴田氏の人脈があったが「ヒマラヤの旅」をとおしてのエア・インディアのコネクションは、インド登山界との関係を開拓した。

インド登山界で活躍したM．Ｓ．コーリ氏やジョギンダール・シン氏は共にエア・インディアのスタッフであり、彼らをとおしてインド・ヒマラヤに関する多くの知見がもたらされ、また、何度かの来日をとおして多くの会員がインド・ヒマラヤに親しみを持つようになっていった。

インドとの交流過程で最も重要な役割を果たしたのは沖允人氏であった。

氏のずば抜けた渉外力、広く豊かなセンス、緻密な行動力が開拓したネットワークは驚くほど広範な分野にわたり、登山界に止まらなかった。この広いネットワークは全員にオープンされ、協会と会員の活動にはかりしれない力となったのである。75年の日印合同ヌン遠征は、その人脈の中から誕生した。

氏の人脈を引き継ぎ、発展させた基盤の上に立って、80年代中期からの日印合同による未踏の巨峰への遠征が実現されていった。

ナンダ・カートの大遭難は、ＨＡＪが遭遇した最大の哀しみではあったが、インド側との新たな交流の拡大ももたらしてくれた。

遭難に際していち早く出動してくれたのインドチベット国境警察（Ｉ．Ｔ．Ｂ．Ｐ）は、インド登山界の雄であり、外国人には閉ざされていた山域でもめざましい登山活動を展開していた。
ＩＴＢＰとの結びつき、信頼関係は、中心的存在のフカム・シン氏を軸として深化し、84年からの連続する入域困難な地域での未踏峰への合同遠征を実現させて行った。

その頂点は、91年のシッキム側からのカンチェンジュンガ合同遠征であった。

一連の日印交流の基礎にあったのは、インド登山財団（ＩＭＦ）総裁のH．Ｃ．サリーン氏であった。

81年に本会の招請で来日した氏は、豊かな外交センスを持ち、インド各界に大きな信頼を有する人物で、ＨＡＪの活動をあたたかく見守り、庇護し、アドヴァイスを与えてくれたことを感謝したい。

30年の歴史の中でインドでＨＡＪがお世話になった人々の数は膨大であり、いちいち名を記すのが困難なほどであるが、80年当初までの特に記憶すべき人のみを記した。

ブータン、中国、その他に関しては、歴史の中でふれて行く。

未踏を求めて

みんなのヒマラヤの時代からＨＡＪが一貫して追求してきたものに「未踏」へのチャレンジがある。未踏は、山だけではなく、地域、分野、方法など、前人の足跡のないところに行動のロマンを

求めてきたのである。

初期は「ヒマラヤの旅」の一般化から始まり、次いで未踏の地域へと踏み出して行った。

その主要なものを上げるだけでも、ラダック、ブータン、アッサム、アルナチャル、シッキム、ムスタン、西南中国と北西中国の広範な地域があり更に後年には、未踏峰への挑戦と併せた多くの外国人立ち入り制限区域への入域がある。

これら、入域困難な地域への踏査や登山を可能にした基盤には、綿密な地域研究が存在した。ＨＡＪの各地域研究会が果たした役割は極めて大きなものがある。

地域研究は、単に研究に止まらず入域と実践行動を常に伴っていたところに力の源泉があった。この伝統は、登山隊にも引き継がれ、各登山隊は高いレベルの地域研究を引っ掲げていたところにＨＡＪ隊の特性があった。研究と行動の両輪がかみ合って進んできたこと、それを可能にする広い人材を擁してきてところにＨＡＪの強みがあったと言えよう。

機関誌90号から128号まで連載されてきた「未踏への誘い」は、インド・ヒマラヤとカラコルムの未踏峰と未踏査の地域を網羅した。

既に開拓の黄金時代は遠く過ぎたとはいえ、広大なヒマラヤにはまだまだ夢が残されていることを紹介するとともに、ＨＡＪの80年代中期からの連続する未踏峰への挑戦の予告でもあった。

ブータン、ラダックへの初入域は、地域研究会が上げた大きな業績であるが、入域にとどまらず次の段階では、更に奥地へ、そして登山許可の取得へと進んだ。

ブータンのジチュ・ダケの初登攀、最高峰ガンカル・プンスムへの度重なるチャレンジ、東部カラコルムでのめざましい７千メートル峰の初登頂は、全く未踏のロマンから生まれた成果である。東部カラコルムの雄サセル・カンリ、ヤル・ツァンポ大湾曲部のナムチャ・バルワ、ギャラ・ペリ、ブータンのガンカル・プンスムの存在がさまざまな場で熱気をもって語られ、遙かな夢として登山を志す会員たちを引っ張って行ったのである。

ＨＡＪは、ヒマラヤへは遅れて参入したが、独自の努力により、「未踏の最後の輝き」をつくりあげたと言えよう。

ネパールのムスタンへのチャレンジも記憶される出来事である。ムスタンは皆が憧れる一つの象徴ともいえるものだった。ムスタン王やネパール王室関係をはじめとするさまざまな関係への強力な働きかけは、ブリクティ・サイルの初登頂となって結実し、ダモダール・ヒマールの知られざるパノラマを世に紹介した。

80年に始まったインド・ヒマラヤ会議は、ＨＡＪのインドに於ける活動と情報集積を象徴するものである。

この会議は、インド・ヒマラヤに関する最も権威あるインフォメーションの場として現在も継続され、インドへ出掛ける日本隊にとっては必ず参加しなければならないまでに成長している。

この会議を支えてきた基礎には、地道な地域研究と旺盛な、連続するインド・ヒマラヤでの登山活動と、引き継がれ、フォローアップされてきた人脈が存在する。

中国への展開

中国が登山者に門戸を開きはじめたのは79年からであるが、ＨＡＪが実際にアプローチしたのは82年からである。中国領ヒマラヤへは、日本山岳会をはじとする日本隊が活動しはじめていたがＨＡＪは、ネパール、インドへの傾注が続いており、地域研究の段階にあった。

82年カトマンズのＵＩＡＡ総会での中国登山協会代表団との接触が最初である。

そして、83年に稲田、山森が北京へ飛んだのを契機として本格的な展開が始まる。

中国登山協会との協議は以後、堰を切ったように集中的に行われ、スークーニャン山群への隊の派遣を皮切りに全域、特に西南中国とチベットへの派遣が現在まで連続している。

最大の目標は、未踏の最高峰であったナムチャ・バルワにあった。

ナムチャ・バルワをめぐって中国側への渾身の渉外が行われ、将来の合同登山をめざして岩登りの技術コーチまで派遣されたが、挑戦の機会はついに訪れなかった。

しかし、ナムチャ・バルワの存在が中国での活動の大きな牽引力となり、ナムチャ・バルワの未踏が消滅してからも変わらぬ活動を連続する基盤をつくったことは、この巨峰へのこだわりが無駄ではなかったことを示している。

80年代の中国領ヒマラヤにはまだ、パイオニア・ワークの余地が十分に残されていたのは幸運であった。

その中でも、クラウンはナムチャ・バルワに次ぐ魅力を持ち、また、ＨＡＪの渉外が生み出した珠玉の名峰といえよう。

しかし、85年から92年にわたる３回のトライには成功するに至らず、この山に情熱を燃やし続けた３名の命さえ失われたことは何としても悔やまれることである。

チベットに未踏の７千メートル峰が幾つも残されていたことは幸運であり、われわれはヒマラヤ黄金の時代の最後の残照を経験することが出来た。特に、86年、グレート・ベンドの名峰ギャラ・ペリの初登頂の栄誉を担うことができたのは記念すべきことであった。

86年から87年は、正に怒濤の活動が展開され、カルジャン、チョウ・アウイ、ラプチェ・カンと続いた7,000ｍ峰初登頂は、正に奇跡ともいえる幸運であり、この後、同様の成果を上げた東部ヒマラヤの7,000ｍ峰の初登頂と合わせて日本のヒマラヤ登山において永く記録されるべきエポックであると言えよう。

7,000ｍのピーク・ハンティングの後を次いだのが西南中国を中心とした6,000ｍの未踏へのチャレンジである。

既に、中国との接触の初期から横断山脈を主とする魅力的な山への度重なる渉外は中国側も驚きの目で見ていた。

84年の雲南のユイロンがその最初であり、86年から本格化した。特に、アプローチが比較的至便であり、短期間で登れる四川の山々は、多くの会員にとってヒマラヤ登山への入門の場を提供してくれた。

この地域への登山は以後、現在まで継続され、更に新しい地域と目標が限りなく広がりつつある。特筆されることは、この地域の研究が個人のしつような興味と努力によって成されていることである。山森欣一氏による地域研究は、自らの実践を踏まえて最大の情報を提供し、また、多くの会員たちを西南中国・チベット地域の登山に組織しており、ＨＡＪのロマンを継承し、登山界へ刺激を与え続けている。

以上の実践行動は、山と地域に関して大きな研究・情報の蓄積をもちらし、83年の中国登山研究会を最初としての一連の研究会の開催や「中国登山の手引き」等をとおして広く公開されてきたところである。また、これまでの集大成としての地域クロニクルが編まれている。

日印合同遠征

ＨＡＪとインドとのきずなは、初期のネットワーク構築を経たのち、インド・ヒマラヤでのトレッキングの開拓となり、入域困難な地域への初入域から登山の時代へと発展してきた。

インド・ヒマラヤは規制が多く、一部を除き７千メートル峰の大半は、単独隊では許可取得が困難な情勢にあった。この事情は基本的に今も変わらない。

特に、ＨＡＪが伝統としてきた未踏峰主義は、インド・ヒマラヤでは困難な壁が存在していた。魅力的な高峰のほとんどは、北の国境に引かれたインナーラインの彼方にあり、外国人の立ち入りを厳しく制限していたのである。

このインナーラインのバリヤーを突破するための精力的な活動は70年代前期から続けられてきた合同遠征の最初は75年のヌン遠征であったが、これはジャム＆カシミール州とのジョイントであり、中央レベルではなかった。

前述のように、80年に始まったインド・ヒマラヤ会議は、インド登山に取り組むＨＡＪの積極的な姿勢の具現化であり、インド登山財団（ＩＭＦ）とのより強い接触をもたらす契機となった。81年にＩＭＦ総裁のＨ．Ｃ．サリーン氏がＨＡＪの招請で来日されたことは、のちの連携への基礎になった。

サセル・カンリへの夢に始まった東部カラコルムへの憧れは、サリーン氏をはじめとするＩＭＦ

の強力に助けられ、10余年の歳月を要してこの地域に未踏の最高峰マモストン・カンリへと結実した。

インド陸軍を主体とするインド側とＨＡＪの最初の本格的合同登山はマモストン・カンリの初登頂をもってはじまった。

この遠征で日本側リーダーをつとめた尾形好雄氏は、このあと連続して行われた日印合同隊の中核となって活躍した。

翌年は、念願のサセル・カンリⅡ峰が、インドチベット国境警察（ＩＴＢＰ）との合同により登られた。最初にサセル・カンリへの夢を提唱した沖氏が隊長をつとめたのは幸いであった。

インド側隊長のフカム・シン氏は、この遠征以後引き続き日印合同の主役となっていった。88年のリモも合同隊により初登頂の栄誉に輝いた。

このようにして養われた両国のジョイントの成果が結集されたのが91年のカンチェンジュンガである。シッキム側からのトライは、70年代後期からの13年にわたる念願であった。

合同隊は、困難な北東支稜からの登頂に成功したが一人のインド隊員の命が失われたことは極めて残念であった。

日印合同遠征は、ピラミッド・ピーク、サラスワティと続けられ、また、登山だけでなくプラマプトラ川の中印国境からのラフティングも実施された。ＨＡＪにとって日印合同は歴史に残る成果を上げたが、インド登山界にとっても一つの時代を画したと思われる。遠征に参加した隊員を中心にエベレスト、他においてインド隊の活躍が見られた。

カラコルムの光と影

カラコルム・ヒンズー・クシュ山域におけるＨＡＪの活動は、他の地域に比べればずっと少ない。78年のバトゥーラⅢ峰の後にこの地域に入るのは84年まで待たねばならなかった。

そして、84年ナンガ・パルバットは、たとえようもない悲劇をもたらした。

最も困難といわれるルパール壁に挑んだ角田不二氏ら４名は、壁から帰ることがなかった。

飛田和夫氏の情熱が実現した85年Ｋ２は見事に成功をおさめ、氏を中心にカラコルムへのトライが続いて今に至っている。

帰らざる人々

1967年の創立から30年、この歴史の中で２千６百名の会員が協会の名簿に名を連ねた。それぞれの会員が、それぞれの歴史を協会史に刻み、また、自分史を創造り、大いなる喜びをヒマラヤからいただいてきたと言えよう。

しかし、20名の人間たちは、ヒマラヤから帰ってきていない。

既に記したように、最初のヒマラヤでの死は81年ナンダ・カートからもたらされた。７名というヒマラヤ登山史上稀に見る悲劇であった。

その後も哀しみは幾度も繰り返された。ナンガ・パルバットでの４名の死、クラウンでの二人、ミニヤ・コンカでの４人をはじめとし、30年間で７隊20名、登山に参加した者の３％の会員の命が失われていることに愕然とする。

そして、帰らざる者たちの多くはＨＡＪのさまざまな活動の中核となって歴史を支えてきた素晴らしい人間たちだった。

それぞれの事故は、機関誌上や報告書などで分析され、２度と繰り返すまいとの努力が尽くされてきた。しかし、巨大なヒマラヤに対して人間の力や考えは余りにも小さい。

ストップ・ザ・アクシデントをスローガンとしての研究や対策にもかかわらず、ヒマラヤに向かう限り、この命題に直面して行かねばならないだろう。30年を迎えるにあたり、帰らざる人々をあらためて想起し、その冥福を祈り、功績に感謝を捧げるものである。

終わりに

正しく歴史をふりかえり、歩みを記すことはほとんど不可能である。

「評価は歴史によって下される」といわれるが、正しい言葉ではないような気がする。

ましてＨＡＪという任意の団体が歩んだ歴史を

評価し、総括するなどということは大きな意味は持たない。

30年の足跡を振り返りながら強く感ずるのは組織に反映し、これを動かす個人のエネルギーである。それぞれの時をそれぞれの人間たちが担ってきた。ＨＡＪという組織は、個人史をつくる舞台としては、他の組織より柔軟に機能してきたと言える。この特性を失うことなく年輪を重ねて行きたいものである。

多くのことを書き漏らした気がする。30年史の中でそれぞれ感慨で振り返っていただきたい。

それからの5年

理事長　山森欣一

創立30周年に当たり当時理事長であった稲田定重氏（現顧問）が、30周年に至るＨＡＪの歴史の概要を12項目に区分整理し報告している。この報告は緻密な分析と執行側の当事者としての思い入れも織り混ぜて、ＨＡＪの30年の歴史の骨格をほぼ伝えている。従って新しい会員のためにもこの報告を本誌にも再掲載したのである。

私はその30周年に当たって「回想・高田馬場15年」と題して、ＨＡＪとして初めて専従員を置いて開設した高田馬場のルームを中心とした「人」に照準を合わせて、ＨＡＪの一時代を報告した。

この項は、ＨＡＪの35年の歴史をまとめることであるが、30年以降際立った変化もないことから、ここでは「回想・高田馬場15年」風に、「人」に照準を合わせて、1995年以降について記すこととした。

1995年

１月28日、東京湾上の屋形船を貸し切って13年間の専従生活から離れた尾形好雄君の労う会が奥様同席で、全国各地から参集した仲間によって執り行われた。

４月10日、札幌で昨年ミニヤ・コンカで行方不明となったＨＡＪ隊福澤卓也、渡辺靖之、鈴木洋介、工藤潤二４君の追悼会がＨＡＪと北海道大学ＷＶ部の合同で執り行なわれ、ＷＶ部ＯＢでありＨＡＪ理事の大内君の大変な努力で無事終えることが出来た。

５月中旬にはその４隊員のご母堂を中国、四川省の成都に案内し、市内の文殊院にて４君の供養が30名の僧参列のもと執り行なわれた。この間ご母堂たちは峨眉山を訪れ遠くミニヤ・コンカを望み隊員の冥福を祈り別れを告げた。私はその間ラサに飛び「ヒマラヤ登山国際シンポジウム」に参加した。

６月には飛田和夫君が４名でカラコルムの難峰、キンヤン・キッシュに挑戦したが登れなかった。この隊には91年のヌンからＨＡＪの登山隊に参加して登頂した田村正勝氏も参加した。田村氏はヒマラヤ見参に一足遅れたが、92年ムスターグ・アタ＆クラウン、93年ブロード・ピーク登頂、94年ムスターグ・アタ登頂、98年ニンチン・カンサ西稜初登攀と、その後も毎年のようにヒマラヤに挑戦している。大変な努力家である。

私は12月、韓国のヒマラヤン・クラブの呉仁換氏に招かれて大阪の大西保氏とソウルで開かれた同会の晩餐会に出席した。当日はＨＡＪの古い会員であり韓国ヒマラヤ登山の草分けでもある朴鉄岩氏にお目にかかり懇談した。大西氏は大阪山の会の重鎮であり、一時はカトマンズクラブを中心にネパールで活躍されていたが、阪神大震災を切っ掛けに住吉仙也氏の紹介でＨＡＪに入会。特にネパールや韓国の岳人との交流が深く、様々な情報を提供して戴いている。

この年の総会で年会費を13年振りに改定、８千円に増額した。

1996年

１月27日、17回目を迎えた「インド・ヒマラヤ会議」を群馬県山岳連盟と共催。前橋市で泊まり込みで行った。この時は八木原君が前橋市長選挙に立候補中であり会議終了後に地元岳人主催の決起大会に参加した。その席上でかってＨＡＪの東京事務所を引き受けて戴いていた近藤龍良氏に再会した。

3月にはＩＴＢＰを退官されたフカム・シン氏、94年ルンポ・カンリ登山隊の連絡官であった顔安金副主席を団長とする中国登山協会代表団の歓迎会が続いた。

4月23日、遠藤会長が勤務先を退職されたことを労い、酒井國光理事が山と渓谷社のシリーズ物「春山」を出版されたことを祝って合同の会を開催した。

同月には、山岳4団体が取り組んできた「プラスチック製登山靴突然破壊シンポジウム」を開催。また、94年ミニヤ・コンカ登山隊の登山と遭難の記録を出版した。

5月には、大西氏の紹介で韓国、釜山で開催された「第2回日韓岳人シンポジウム」に私が出席し、韓国岳人にテイクイン、テイクアウト運動の実践について実演を交えて講義した。このテキストは大西氏の努力によって、ハングルで韓国岳人に配布された。

同月には、中川君がＨＡＪ所属として都岳連常務理事となり海外委員長に就任した。

この年の登山隊派遣はムスターグ・アタ1隊と寂しいものであったが、その登山隊は7月に中川君が率いて登頂に成功。この登山隊には北海道の佐藤英樹君、兵庫の石川龍彦君、群馬の品川幸彦君らが参加した。佐藤君は、北海道を代表する登攀グループの札幌登攀倶楽部の猛者である。少々荒っぽい風情の持ち主ではあるが善人である。その後もチョム・カンリ、ヤンラ・カンリに参加して実力をいかんなく発揮している。石川君は教師からの脱サラ組で教師時代の鬱憤を晴らすようにニンチン・カンサ、チョム・カンリに参加し、ハン・テングリ、アコンカグアと漂泊し、奈良から東京集会に通う。品川君は旧ソ連の七千メートル峰5座を総ナメにし、普通の遠征をしたいと門を叩いてきた。これが切っ掛けでその後は群馬勢となりＧⅠ、ＧⅡと連続登頂に成功したものの、昨年星野龍史君と共にダウラギリⅠで行方不明となってしまった。

私は、8月と9月に2度チベットに通った。ナムチャ・バルワの件で暫く疎遠となっていたチベットとの関係を戻さなければ、ＨＡＪの舞台が狭くなる。そんな思いがあった。なによりもサマー・キャンプの舞台を見つけなければならなかった。もちろんチベットにはＨＡＪが目指す未知・未踏のExpeditionの舞台が豊富にある。8月は合同登山の渉外を兼ねてラサに行き、ニンチン・カンサとクーラ・カンリの観察を行い、ニンチン・カンサをサマー・キャンプの候補とした。9月には再びラサに飛び合同登山の候補地のヤンラ・カンリの偵察を実施した。しかし、言葉の障害と雨と時間切れで効果は上がらなかった。だが、チベット側の様子が分かったのは収穫であった。

機関誌「ヒマラヤ」が300号を迎えた。内容は、1979年、1988年に続いて本年実施したアンケート調査の結果特集である。300号の表紙写真は、ＨＡＪが1982年春にネパール、ムスタンに派遣した登山隊が頂上付近から撮影した写真を使用した。ヒムルン・ヒマール、無名峰、ネムジュン、ギャジカン、マナスル、Ｐ29と雄峰の連なる景観は壮観である。当時、登山隊はブリクティ・サイルをめざしたが、その山群の最高峰に初登頂した。その後、登山隊が初登頂した山は、ハムジュンガール・ヒマール（6,795m）であり、ネパール政府のブリクティ・サイルではないことが判明した。

11月下旬に、中国登山協会代表団（ローサン・ダワ団長ら6名）を東京湾・屋形船で歓迎した。

1997年

正月早々発売された朝日現代用語「知恵蔵」のスポーツ表紙裏に「日本人のヒマラヤ登山」と題し、グラフ・図などで解説した。

私は、3月末からチベット登山協会との2度目の合同登山をクーラ・カンリⅡ峰で行った。残念ながら登頂は出来なかった。この隊の副隊長は樋上嘉秀君、登攀隊長は宮崎久夫君であった。樋上君は93年のＨＡＪムスターグ・アタからヒマラヤ登山に開眼、10年連続してヒマラヤへ通うと誓い、それを実践している。94年はユイチュ、95年ヌンと酒井隊長の下に参加。97年以降は私とカバン、ナムナニ、ターラ・リ、ヤンラ・カンリ、ニンチン・カンサと付き合ってくれ、副隊長としていつも私のいたらないところをカバーしてくれている。宮崎君は尾形君の雪と岩の会の後輩で、日常的にルームの主として若手を教育してくれている。仕

事柄飲酒が進み過ぎるのがいささか心配である。

7月には新しいサマー・キャンプの舞台となるニンチン・カンサに隊を送り出した。隊長は天城敞彦君にお願いした。副隊長をお願いした関根氏が都合で参加出来なくなり、登攀隊長の志小田美弘君を中心にまとまってくれたが、なんと言っても経験豊かな飛田君のサポートで乗り切った。古典的過ぎるくらいの常識であるリーダーとメンバーの関係を参加した隊員も、気を揉んだ送り出し側も分かってくれただろうか。

もう一隊、北海道の女性だけのグループ「ラリーグラス」のメンバーがＨＡＪ隊としてムスターグ・アタに出発した。隊長は85年ムーシュ・ムスターグ、87年ヌン、94年ユイシュとＨＡＪが派遣した女性隊のメンバーだった市川春代さん。副隊長は93年ニルカンタ遭難事故が切っ掛けで入会した辻野治子さん。登頂には成功したもののラリーグラスとしては試練だったようだ。私は暫く続いたムスターグ・アタのサマー・キャンプを一時中断するために、カシュガルにデポしてある荷物の整理のためウルムチ～カシュガルを訪問し、帰途アルタイ登山の渉外を行った。

9月には、ネパールからの要請で、ポカラに建設予定の「国際山岳博物館」の建設資金協力について山岳４団体＋日本ネパール協会、ＨＡＴ－Ｊと６団体で協議会を設立。資金協力について協議を重ねた。不安だらけの出発であった。

この年、年会費を１万円でお願いすることにした。

こうして10月１日、ＨＡＪ創立30周年記念日をむかえた。これを記念して翌98年１月に記念講演会、祝賀会を挙行することになり、それに合わせて30周年記念誌を発行することになり、超過密の力仕事に打ち込むことになった。

1998年

１月25日に待望久しかった「創立30周年記念式典・講演会＆祝賀会」を開催した。式典では遠藤会長の挨拶に引き続き稲田理事長による30年の歩みが紹介され、飛び入りで柴田前会長が創立時のエピソードを披露された。講演会は名塚秀二君、汪鉄銘中国登山協会副主席、ハリシュ・カパディアＨＪ編集長（ＩＭＦ副総裁)、神原達氏（ハルカ・グルン元ネパール観光大臣の代理）を迎え、科学技術館で240名（無料）が出席して盛大に行われた。これまでお世話になった団体・個人に感謝を込めて記念の盾を贈呈した。夜は、会場を九段会館に移して祝賀会。遠藤会長の挨拶、坂口三郎日山協会長らから祝辞を戴き、白石紳一郎日中協会事務局長の乾杯のご発声で270名が出席してこちらも盛大に終了することが出来た。参加者には創立30周年記念誌「雪の住処30年の記録」が配布された。

５月には遠藤登会長の強い辞意を受けて、酒井國光氏に会長に就任して戴いた。この月には野沢井歩君が奮闘して「ネパール登山の手引き」を刊行した。野沢井君は92年のヌンに参加して以来、ＨＡＪと所属するバーバリアンクラブを舞台に毎年ヒマラヤ登山を続け、東京都山岳連盟海外委員長の重責も果たしている。

夏のサマー・キャンプは関根氏率いるニンチン・カンサ隊が西稜に新ルートを開いて気を吐いた。ミニヤ・コンカ山群のラモ・シェに酒井隊長以下が挑戦したが、悪天候や氷河の状態が悪く残念ながら登頂は出来なかった。

私は10月に慌ただしくカバンとヤンラ・カンリの偵察に行った。メンバーは樋上君と太田康夫君。気心の知り合った仲なので短い期間ながら要領良く成果を上げることができた。

1999年

２月の「第７回　中国登山研究会」は、中国登山協会代表団（団長：張江援交流部部長、楊世涛、趙建軍両交流部副部長）を講師に招いた。私は、その後代表団を案内して、北海道、宮城を回った。両地域からチョモランマ登山隊が派遣されるため、その協議も兼ねていた。

私は、４月下旬から渉外のため北京、成都、ウルムチを連れ合い同伴で回った。同時期寺沢さんにはパキスタンで開催された「国際山岳観光会議」に参加して戴く。

５月には稲田氏が理事長を辞し、私はその職を引き継ぐことになった。

７月には本会が呼び掛けて、日山協、労山、Ｊ

ＡＣとの「登山４団体三役懇談会」を開催。毎年この時期に開催することで合意した。

サマー・キャンプは、関根隊長がひきいたチョム・カンリは第三登に成功。原動力になったのは川崎浩史君。東洋大学隊でＫ２の8,000ｍラインを経験し、97年のニンチン・カンサ隊にも参加した。体も態度もデカイが芯のある男である。アルタイの最高峰を中国側から登頂しようと酒井隊長以下ヴェテランが頑張ったが、初期の手配ミスが祟り、時間切れで登頂は出来なかった。

私は、昨年偵察したカバンと岩崎洋君が狙うナムナニ新ルートの二つの隊をまとめて２ヶ月間をチベットで過ごした。副隊長は1991年ミニヤ・コンカ隊の松舘正義君。これにいつもの樋上嘉秀君。私を入れたこの３人は同じ猿年で連れ合いも３人共「犬年」犬猿の仲なのである。2001年にはこの３組で「桃玄幇」という飲み会を結成した。カバンには1978年ＨＡＪバトゥラⅢ初登頂者の伊東満君が参加した。相変わらずメリハリの効いた態度で若者に受けていた。山は若手が頑張ったがクレバスに阻まれて断念。伊東君は帰国し、残る６名でナムナニに向かう。私が15年前に偵察した北カンテをアルパイン・スタイルで登ろうという野心的な試みである。勿論、松舘、樋上には無理なので最初からこの二人用に6,902ｍのグナ・ラという未踏峰を用意しておいた。結局若手の３人も偵察との名目で合流し、１日で往復してしまった。帰国寸前にＨＡＪ事務局の資料で初登頂は幻となり第二登となった。一方、ナムナニは北カンテ横の雪壁を登攀し３ビバークで登頂。西面通常ルートを下降するという立派な内容で成功した。そして冬の到来する直前のカイラス周遊を行った。カイラスを離れた11月１日は、私がＨＡＪに専従して20年目であった。今は昔、メンバーの中にそれを知っている者はいなかった。

カイラスからネパールに出た岩崎君にはインドで開催された「ミレニアム・ミート」に参加して貰った。

12月11日に「華甲望年会」をかんぽヘルスプラザ東京で開催。これはＨＡＪの歴史も30年を超えて還暦を迎える方が多くなったので、一同でお祝いし、合わせて登山報告を行う。89名が集い３名を祝った。

2000年

２月に本会の呼び掛けで「登山４団体」共同による「ヒマラヤ登山者アンケート調査」の実施を決定。６～７月に実施した。

７月には本会幹事で「登山４団体三役懇談会」を開催。

サマー・キャンプは、初めてパキスタンを舞台にした。山はスパンティーク。これは、7,500ｍ級の山を対象としたサマー・キャンプをパキスタンでも実施したいが、そのための準備期間としての意味合いが込められていた。岩崎君隊長の下に、鈴木正典君、高橋敏雄君ら実力者が岩崎君を助け女性２名を含めた全員が登頂した。スパンティークは白川義員氏の「世界百名山」を選考するとき、当時委員だった広島三朗、原田達也のカラコルム通によって強力に推薦された名峰である。

私は、13年来の夢がかなって東チベットの「若尼峰」に登山することになった。ところがこの年の夏、チベットは大雨であった。道路決壊でアプローチは使えない。やむを得ず目標を「ターラ・リ」に変えた。チベットに入る前から風邪を引き、私は登山基地ロザで15日間入院。この間、登山は樋上君と野沢井君が連携して実施。目標のターラ・リは登れなかったが、連峰の２つの峰に初登頂することが出来た。

私と野沢井君は、スパンティークを終えてネパールから回ってきた岩崎、鈴木両君とラサで落ち合い再びモンダ・ラを越えてクー・カンリⅠに向かった。南面からアルパイン・スタイルで登ろうという計画であったが、大雨でアプローチが駄目。北面からトライしたが雪崩の危険があり断念した。私は、岩崎君と馬を並べてブータン国境へ行った。素晴らしい天候の下に国境の白い山々が屏風のように連なっていた。初撮影と喜んだが、その後、福岡大学のニンチン・カンサの報告書に頂上付近から撮影されたと思われるショットに国境の山々が写っていた。

12月は「華甲望年会」である。本年は特別「喜寿」の古原和美顧問もお祝いした。古原顧問は、深田久弥氏らとジュガール山群を探査、1964年の長野山協のギャチュン・カンの隊長でもあり、我

が国ヒマラヤ登山の先達である。また、医師として「日本登山医学研究会」の重鎮でもある。華甲対象者５名も加え66名でお祝いした。

年の暮れになって本会常務理事であった角田不二君の遺稿追悼集がご母堂の手で発刊された。私が依頼されて編集を担当したが、印刷の段階で不具合が生じて一時は断念の兆しもあっただけに、日の目を見てホッとした。

2001年

１月、本会の呼び掛けで「登山４団体山岳保険・共済懇談会」を開催した。これは、各団体が実行している登山者向けの保険・共済のシステムや現状について披露しあい、大同団結の糸口を模索しようとするもの。本会は独自なものを持っていないので司会進行に回った。日山協と分離実施している都岳連にも参加して貰った。

サマー・キャンプは、ニンチン・カンサ西稜に酒井隊長に野沢井君がサポートして６名で実施。この隊には98年隊に参加しながら高山病のためラサから帰国した日南長二郎君が再び参加した。残念ながら登頂出来なかったが、広島から富士山に何回も通って努力した。悔いはなかったろう。野沢井君に激励叱咤されて登頂した宮川真一、斎藤正朗両君はヒマラヤ初登山であった。紅一点の志村真由美さんは、その後もＨＡＪ事務局に足を運んで雑務を手伝ってくれている。

私は、秋に念願のヤンラ・カンリに行った。高齢者登山隊になってしまったが、アプローチで橋を架けたり、ポーター道を探したりと、登山本番も楽しかった。ルートは雪主体で技術的にはさほど難しくはなく、佐藤英樹君、太田康夫君、萬徳清孝君らがその雪をだまし騙し登ったが、国境稜線に這い上がって終わった。充実した登山だったろうが、ポーラーメソッドに慣れていない隊員もいたようだ。私は91年以来の3,350ｍという低地のＢＣと久し振りに雇ったコックに毎食大盛りのカレーを出されて７kgしか痩せられなかった。

12月の華甲望年会は手違いで会場を変えたが、４名の該当者を59名で祝った。

2002年

１月、今年が国連が定めた「国際山岳年」ということで昨年秋から山岳有識者が懇談していたが、「登山４団体」＋ＨＡＴ－Ｊ＋学者で「国際山岳年日本委員会」を設立した。国際山岳年１年限りの機関である。

２月、本年はＨＡＪ創立35周年に当たるので「35周年記念行事」を開催する旨、役員へ提案する。

伝説のヒマラヤニスト「クルト・ディームベルガー」が日山協の招待で来日。

３月、故・高橋照さんの遺稿が持ち込まれる。照さんは1982年頃からＨＡＪに頻繁に出入りしていた関係もあり、この遺稿を「ヒマラヤ」誌上で連載すべく家族に了解を得る。

４月、ＨＡＪ主催の恒例の「高所登山　事故と環境対策研修会」を中止した。折しも、国際山岳年日本委員会の主催によるフォーラムが東京で開催される日であった。

５月、ＨＡＪ総会。野沢井君に専務理事に就任して貰う。その他、若手の理事に常務理事として当事者意識を持って運営に参加してもらうことにする。

６月、岩崎、田辺治、野沢井、後藤文明の若手がガッシャーブルムⅠからチョゴリザをアルパイン・スタイルで登るべく出掛けた。悪天候待ちで苦労したがＧⅠの登頂に成功したものの、岩崎、後藤は帰路ビバークとなり、これがたたったのか、後藤君が脳に障害を受けヘリコプターでスカルドへ戻り、帰国して入院リハビリに励む結果となった。このためチョゴリザは取り止めた。

７月、私は高齢隊を率いてサマー・キャンプでニンチン・カンサへ行った。98年ＨＡＪ隊が開拓した西稜は素晴らしいルートであった。高齢隊のため中国では初めて高所協力員を雇用したが、いかんせん隊員のパワー不足で6,700ｍで断念した。

こうして秋には創立35周年を迎えることになった。私がＨＡＪ事務局に専従して丁度満23年となる。あっと云う間のような気もするがそれなりに長い時が過ぎたのかも知れない。夢の途中でやむなく黄泉の住人となった仲間の顔が次から次へと浮かんでくる。

特別企画＝日本ヒマラヤ協会の30年 座談会

回想、そして未来
横断的組織が築き上げたもの

日　時　東京、ＨＡＪ事務所
出席者　阿部　淳
沖　允人
稲田　定重
山森　欣一
八木原圀明
中川　裕
写　真　川崎　博

［山と渓谷752号（1998年３月号）から転載］

名古屋で産声をあげた日本ヒマラヤ山岳協会の創立メンバーらが掲げたモットーは「みんなのヒマラヤ」。トレッキングに続く高峰登山の隆盛のなかで、やがてその精神は「創造するヒマラヤ」として引き継がれていく。運営面や登攀活動を通じてそれぞれの時代をリードしてきた６人の方々が、創立の気運と現在、そして将来を語る。

「みんなのヒマラヤ」から「創造するヒマラヤ」へ

山森　本日は日本ヒマラヤ協会（ＨＡＪ）の30年を振り返るということで、各時代を担われた方々に集まっていただきましたが、まず、協会とかかわったきっかけをお話しいただければと思います。それでは沖さんから。

沖　６年くらい前まで名古屋に住んでいたんですが、現在顧問をされている柴田金之助さんから、「いろんな人にヒマラヤの良さを伝えよう」ということで話がありまして、近くに住むヒマラヤ登山経験者らが集まってスタートしたわけです。「それじゃあヒマラヤを見るツアーを考えよう」と、当分は登山よりも、ヒマラヤを見るためのグループを組織しました。

阿部　まだＨＡＪができる前ですが、あるスポーツ紙で、柴田さんがネパールの要人と交流し、ネパール語も勉強しているという記事を見たんです。さっそく「辞書はどこで手に入れたのか」ということをたずねたんです。そのとき、「ちょうど会を作ろうと思っているので、もしよかったら入らないか」との誘いを受けた。それがきっかけですが、辞書のことはわかりませんでした。

稲田　私は東北のほうでこつこつと山をやっていまして、1968年ごろですが、ちょうど福島県岳連で海外登山をやろうという機運が盛り上がっていたんです。海外委員などを仰せつかって走り回っておったんで、ヒマラヤの生の情報をどこで集めたらいいのかということでいろいろ悩みました。そのときヒマラヤ山岳協会の存在を知りまして、ここにいらっしゃる沖さんに「あれを教えてくれ、これを教えてくれ」と盛んに手紙を出したわけです。そのうち沖さんのほうから「会員にならない

か」と誘われたのがそもそもです。

山森　じゃあ私ですが。入会したのはたぶん73年だったと思うんですね。あのころは沖さんがあちこちに、勧誘のために機関誌の『ヒマラヤ』を送られていたんです。ちょうど「ヒマラヤに行きたいな」と思っていたものですから入会しました。機関誌を読んで勉強しようというのがきっかけでした。

八木原　私は74年夏、カトマンズでカンパ紛争に巻き込まれていたラムジュン隊といっしょになり、翌年、稲田さんから青森でのヒマラヤ研究会に誘われた。ダウラギリⅣ峰に登り、ダウラⅠ峰南東稜計画中に「カンチェンジュンガ縦走計画に参加しないか」という話になり、登頂者の山田昇や鈴木茂と入って、本格的にＨＡＪと関わったわけです。

中川　81年に明治大学の駿台山岳部でガンガプルナをやったんです。そのときの登攀リーダーが角田不二という人で、『ヒマラヤ』の編集長をやっていました。そのかかわりで81年のカンチの梱包を手伝いにいったのが最初です。会員になったのは83年だったと思います。そのあと、ナンガ・パルバットに行こうと準備していたんですが、怪我で駄目になりました。しばらく間があいて88年ぐらいから出入りしています。

山森　歴史をひとつひとつたどるには膨大な時間が必要です。皆さんもおわかりだと思うでんすが、言うなれば「名古屋時代」と、それから東京へ来て「遠征華やかなりし時代」、「少しずつ下降線をたどっていく時代」とに分かれると思うんですね。稲田さんも30周年記念誌にまとめていらっしゃいますが、発足当時の様子を聞かせてください。

沖　そのころはまだ「トレッキング」という言葉もなく、とにかくヒマラヤを見にいく旅をやろうということでした。１回目のときは新聞にもあまり載りませんでしたけれども、計画を知った人たちからすごい反響がありました。その後も参加する人が少しずつ増えていき、ずっと続けようと。ただ、柴田会長以外は山好きな人が多いものですからなんとなくもの足りないんです。ツアーだけでは。会名も初めは「山岳」というのが入っていたわけですけれども、名前とは裏腹に山はほとんど行ってなかったですね。

そのあと、ぜひ登りたいという人がどんどん出てきて、ツアーのほうもそのころになると旅行社が参入してきたんですね。結局、競合することになり、ツアーの実施からは撤退したんです。

山森　今回の記念誌にもそれぞれの時代を表現する記事を掲載させてもらいました。その当時に書かれたものをそのまま皆さんに見ていただくのがいいのではないかと。

そのなかに５周年の座談会で「ヒマラヤの旅を終えて」というのがあるんです。第７回の九十何人いった企画が終わったあと、72年の３月に沖さんの司会でやられているんですね。

じつは記念誌にこれを載せることには反対もあったんです。会長が非常に刺激的なことを書かれているということで。それは「ヒマラヤ協会が推薦状を出せる団体になればいいんじゃないか」というようなＨＡＪの勢力拡大の話でした。

沖　たしかに柴田会長はそうとう型破りなかたでしたね。陶器屋さんでインドにも技術援助をしていました。お金がもらえるわけですが持ち出せない。それで何か現地のために事業をやろうとしてネパールに飛行場を造る計画もした。かなり奇想天外なところがありましたね。

阿部　ええ、壮大なロマンをもっていました。

山森　協会のユニークさとしてよく言われるのが、日本の登山界は岳連でも縦形式の仕組みなのに、ヒマラヤ協会はいうなれば「横断的な組織」だ。どうしてこんなことができたのか、どうしてそれが存続できたのかということです。初期のころからそういうつながりを意識されたということはあるんですか？

沖　あまり意識はしなかったんですけれどね。僕は名古屋の中京山岳会という古い山岳会の会員ですが、よその会の人と山行に行くとクビになるというくらい純粋培養でやっていたわけです。それで協会を作るんだったら、そういうセクショナリズムは廃止したいと。そういう横断的にやろうという気持ちは柴田会長ももっていたし、ほとんどの人がそう考えていました。

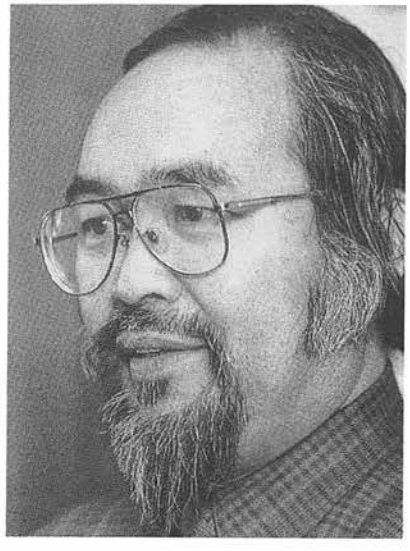
それと、ツアーを企画しても、ある程度人数が集まらないと費用の面で大変だということで、集

［阿部淳］日本ヒマラヤ協会評議員
一九三三年北海道生まれ。北海道山岳連盟初代海外委員長、一九七〇～七五年　八七年～九五年理事

一九六七年～七二年専務理事
一九三五年愛知県生まれ。足利工業大学教授
［沖允人］日本ヒマラヤ協会元専務理事

［稲田定重］日本ヒマラヤ協会理事長
一九四〇年福島県生まれ。一九七九から十年間専務理事

際部長。群馬県山岳連盟理事長
一九四六年群馬県生まれ。日本山岳協会国
［八木原圀明］日本ヒマラヤ協会常務理事



［山森欣一］日本ヒマラヤ協会専務理事
一九四四年北海道生まれ。元東京都山岳連盟海外委員長、一九七九年からＨＡＪに専従

海外委員長、日本山岳協会海外常任委員
一九六〇年埼玉県生まれ、東京都山岳連盟
［中川裕］日本ヒマラヤ協会常務理事

客のための集会もやらなければいかんと。ただ、それだけではもの足りないのでどなたか講師をお願いして基調講演みたいなことをやっていただきました。初めのうちは人集めのためにやろうということが多かったんです。そのあたりで「商売でやっているんじゃないか」というような批判もかなりありましたね。

阿部　たしかに最初は「ヒマラヤの旅」が続きましたよね。だけど実際に、当時はまだ簡単には行けない時代でした。しょうがないから旅に加わり、その機会を利用して小さいピークに登る。実際に第1回目でもトゥインズの登山計画がだめになった人や、近い将来に実現しようとして加わった人などが多かった。

稲田　私らもそうだった。トレッキングに行くという感覚はまったくなかったです。「山に登りにいく」と。とにかく少しでも高いところにということで、ギリギリの行動日数にしてとにかく登る。で、帰ってきたら報告書を出して。というように、ひとつの小さなエクスペディションと考えていました。

山森　機関誌『ヒマラヤ』が果たした役割も大きいわけです。最初のころは何に重点をおいて編集されていたんですか？

沖　初めのころはヒマラヤの旅をＰＲしようと。それと何かシリーズものでヒマラヤに関するものを載せようということでした。機関誌は厚いものも薄いのもありましたし、内容はバラエティには富んでいたんですけれども、ポリシーというものはあまりなかった。

稲田　その後、どういうスタイルにしようかと私と角田君で話し合って、最初には「人」ですか、それから連載ものというようにパターンを決めたんです。非常に編集もやりやすかったんですけれども、今考えますと、おもしろくなくなったということはあるんでしょうね。「自由さ、楽しさ」みたいなものが減ってきたというか。

阿部　会としての方向性ははっきり見えてきたということもあるのかと思いますね。

山森　そうですね。あきらかに登山に焦点を合わせて、会自体がどんどんそっちにひっぱられていっていますから、必要なものがどんどん集積されることによって、今につながる基礎になったとも言えると思います。

稲田　やはり協会の体質が微妙に変わってきたと思うんですよ。沖さんたちがやっていた時代は、とにかくみんなで集まって、クラブ的な性格がありました。機関誌があいうようなパターンになってきたというのは、組織論を重視してきたということです。

山森　前半の時代は「みんなのヒマラヤ」というモットーで表現されていたんですが、稲田さんが専務理事になられて「創造するヒマラヤ」というようなモットーを提示しました。稲田さんは東京へ事務所が移る前から会の運営にタッチされていたと思うんですが。

稲田　あまりにもいろんなことが多すぎてひと口に語れないんですが、印象に残ることと言えば、ひとつは山森氏との出会いですかね。それがその後の80年代のＨＡＪというものを作り上げていった。

高田馬場に事務所をもったということ。これも非常にうれしかったですね。それまで借家住まいをしていたのが一戸建ての家をようやく手に入れたという感じで。そのへんに捨ててある布団まで拾ってきて、みんなが泊まれるようにしたり、家に古い布団があるからなんてそれを持ち寄ったりとか。事務所をもつことのインパクトは想像以上のものがあったと思います。文字どおりの「梁山泊」でしたね。みんな泊まってましたし。

あとは81年のカンチェンジュンガまで非常な勢いでやってきて、カンチェンジュンガでさらにパワーを盛り上げて、その勢いでがむしゃらに走った。あっというまに過ぎた全力疾走という印象ですね。

山森　行動の幅はカンチェンジュンガをきっかけにして、たぶんぐっと広がったと思うんです。そのなかのひとつに国際交流という面がある。外国のお客さんをどんどん招いて研究会を開くということもやっていたんです。東京以外では北海道が活発で、定期的に集会が開かれていた。阿部さんがその中心的な役割を果たしていらしたわけですね。

阿部　北海道の特色かもしれませんけれど、遠征

に関しては非常に遅れていました。北大あたりは早かったんですけれども、そのあとかなり停滞していまして、社会人団体もさほど積極的ではありませんでした。けれど、行きたい人間だけはたくさんいて、ポテンシャルは高かったんです。

山森　海外からのお客さんを迎えるにも、みんな若かったものですからなんとなく気おくれがするというか、相手に対しても「こんな若造が相手じゃ申し訳ないんじゃないか」というような気持ちもありました。81年の日本ヒマラヤ会議にインドからサリーンさんを迎えたときは、稲田さんも私も30代後半から40代の頭くらいですから。

稲田　けっきょく「交流」というんですかね。あれを始めたのはあまり純粋なものでもなく、「未踏の地域とか未踏峰とかにどんどん入っていきたい」と。それをやるためにはやはりある程度のステータスと言うんですか、その国とこちらとの関係を築いていきたいということがありましたから。

伝統的山岳会ならそれなりのつながりもあるが、こちらとしてはこれから。向こうが「トップダウン」というのだったら、こちらは肩書きにとらわれず、「ボトムアップ方式」でやっていこうということですね。ただ招いた人たちには、一様にいい印象をもっていただいたと思います。それなりの懸命なもてなしをしました。

沖　日本に来た有名な人はたくさんいますけれど、だいたいは正式外交ルートで来た。ＨＡＪはそうじゃなくて、まあ「草の根外交」というか、とにかくこの人ならという人を引っ張ってくる。それこそ今ぐらいの歳でしたらサリーンさんが来ても驚かないけれども、当時はそうとうに格が違ったわけですよ。

阿部　まあＨＡＪなりのプロトコルというか、外交儀礼みたいなのはありましたね。ＨＡＪ自体のなかにソフトな中身のあるプロトコルが。

山森　そうしてヒマラヤ協会がだんだん活動を広げてみんなが注目するようになり、非難や偏見の目で見られることもありました。そういうときに八木原さんのように、地方でどんどんやっている人が入ってくれたんで、非常によかったと思っているんです。今もその延長線にあるわけでですが。

八木原　私は群馬を基礎としてずっとやってきたんですけれども、ただ「群馬、群馬」と言ったって限界があるわけで、「外へ出ないと駄目だぞ」、「群馬のお山の大将になってしまったらおしまいだぞ」というのがありましてね。うまい具合にＨＡＪのおかげで、黄河源流やブラマプトラ河川下りなどいい思いをさせてもらったというのもあります。

協会が求められているもの そして次の時代への構想

山森　沖さんから教わったことで私が今でも印象に残っているのは「遠征は報告文集を出して終わるんだ」ということです。報告書を出して、情報が集まって、みなさんに公開して、ということで、けっきょく自分たちは意識していないんだけれども、「ヒマラヤ協会ってすごい」という印象が培われた。

そのツケが90年代になって出てくるわけですね。活動が高峰登山の基礎を学ぶ「サマーキャンプ」を中心にしたものになり、外からは情報提供だけを期待されるようになった。

中川　ヒマラヤ協会がいろいろと言われていた時代があったようですけれども、今のヒマラヤ協会というのは情報の宝庫という意味で非常に高い位置にある。なかにいると問い合わせに応じるのにほんとうにアップアップというか。サマーキャンプというのを主体にやっていくのもひとつの根幹なんでしょうけれども、80年代のような山登りの実践との両立も必要でしょうし。

それと、今、ヒマラヤについての情報というのはほとんどヒマラヤ協会から発信されているというのが現状です。情報提供というものに僕らがどこまで対応していけばいいのかということ。データを培っていくためにはお金も必要ですので、どのようなかたちでデータの蓄積を実現させていくのか、ということも考えないといけないんじゃないかなと思っています。

稲田　たしかに情報の質というのは変わってきている気がします。沖さんや僕の時代を考えますと、ヒマラヤに関するゼネラルなものというんでしょうか、いわゆる基礎的なこと。よく機関誌に掲載された「ヒマラヤ学」的な情報が求められていた

と思うんです。次の段階で「遠征論」、「戦略論」みたいなものに変わってきて。そして今は非常にテクニカルな情報、あるいは専門的な情報というんですかね、とくにデータ的なものになっている。

山森　たしかにほかに情報がないんですね。蓄積されたものがない。ヒマラヤ協会が求められているんだけれども、それは協会自身のためにやっているのであって、人さまのためにやっているんじゃないという意識もあるんですよ。ところが、この小さな団体に期待が寄せられているというのが現状です。

また、情報を出すのは簡単だけれど、どこへ行き、どういう山登りをしようとするのかがわからない。まずそこを押さえないと情報管理はできません。そのためには日山協とか労山とかＪＡＣ（日本山岳会）とかヒマラヤ協会だとか、個別のことを言っている時代ではない。自分たちの組織から人材を派遣するなり、知恵を出しあってしっかりとした情報管理の機構を作るべきだと思っています。

沖　以前は日本はかなり受け身だった。いろんな情報があってそれを勉強していく、と。だけど10年くらい前から発信基地にならざるを得ない状況なんですよね。

もうひとつ。今は日本百名山のツアーというのがいろいろありますよね。ヒマラヤもそういう時代になると思うんです。それはそれでパックを作ればいいんですよ。プモ・リだといくらで、どのくらいで行けるとかね。いつも八木原さんみたいに死にもの狂いで登らなきゃいかんというわけじゃないと思うんです。

山森　そうなると安全面への配慮というものが重要になってくる。ところが、日本の社会そのものに自己責任という概念が確立していないんです。こういう考え方をせめて登山界のなかから発信していかなくちゃいけない。ヒマラヤ協会としては、遠征をやるときに必ずそういうことはやっているんですけれども、ほかにも広げていきたい。

稲田　今の情報に関連してのことですけれども、これをどう取り扱うかということが、ＨＡＪの将来の方向と非常に関わってくるんじゃないかという気がするんですよね。今のまま要請に順応して懸命に発信しようということでやっていると、社会的なヒマラヤ協会の存在意識というものは果たせるんでしょうが、こちらのほうの情報管理、運営管理というのがダウンしていくような気がするんです。

阿部　将来へ向けての地盤点検をし、だんだん確立していくといいと思いますね。ＨＡＪのよい点は人間のネットワークというものが、きちっと続いてきているということです。これから中川さんみたいな若い人の時代ですけれども、ＨＡＪのＤＮＡというか、そういういいところを引き継いで、若い人を育てていってほしい。これからは好みも、人も、登山もいっそう多様化してきますから、そのなかでネットワークを組みながら続いていってほしいと思います。

八木原　私の場合はＨＡＪと関わりながら、群馬岳連があり、今は日山協にも関わっているわけです。そうしたら立場から、ここしばらくは登山界全体にかかわることをまとめやすい時期なんですよ。情報の問題も、ひっくるめてやらないと大きな力にならないということを、ここのところ感じていて。とにかくおたがいが「おらが、おらが」を言わないようなかたちでやっていくようにしないと。

中川　今、阿部さんもおっしゃっていたように、多様化していくということもあって、リードしていくのがすごくむずかしい気がするんです。実際にひっぱっていく人をどう確保するのか、どう運営していくのかということです。情報を集めるのもそうした人たちがいないとできませんし、そのあたりが課題だと思います。

沖　次の課題といえば数年前に阿部さんと結託して「シルバー・ヒマラヤ・プラン」というのを考えていたんですよね。私たちがもういちどヒマラヤと関われるかどうかわからないけれども、やはりヒマラヤの見えるところに住みたい。できたら、そこで死にたいと思っていたわけです。そこでグループ化して住めるようなところを作ろうかなという夢があって、ちょっとやりかけたんですけれど、なかなかうまくいかなかった。まあ将来の夢ですね。だんだん会員も高齢化していく、だけど、ヒマラヤは捨てきれないという人が多いと思うん

です。

山森　われわれ現役としては、さきほど言いましたような情報管理の問題と、もうひとつは登山共済の問題があるんですね。これは人がたくさんいればいるほど安くできるわけです。八木原さんも言いましたけれどもヒマラヤ協会に対する期待が高まっているなかで、協会がショックアブソーバーのようなたちにあるんです。私たちがすばらしいと思って続けている登山が次の世代に引き継がれていけるように、各団体が結集してだれもがいつでも入れるような共済となれば、登山界の進展につながるのではないかと思っています。

（98年1月26日、日本ヒマラヤ協会にて収録）

1998

岳人スクランブル

創造するヒマラヤをテーマに30年

GAKUJIN SCRAMBLE

日本ヒマラヤ協会の山森欣一さんに聞く

「みんなのヒマラヤ」を掲げ、1967年に産声をあげたHAJは今では日本を代表するヒマラヤの研究・実践団体となった。その30年の歴史を振り返って専務理事の山森欣一さんが熱く「創造するヒマラヤ」について語る。21世紀の日本の登山界は…。

ヒマラヤの多くの峰を飾ったＨＡＪの旗

構成◉永田秀樹

素朴で新鮮な感動から

――日本ヒマラヤ協会（以下ＨＡＪ）、30周年おめでとうございます。今や日本の海外登山をリードする一大組織となりましたが、まず創立の頃の話から聞かせてください。

山森　初代会長となった岐阜の柴田金之助さんが、陶器の会社を経営されていてインドに行くことが多く、その帰りにヒマラヤを見て山岳美に感動したんです。一九六三年です。柴田会長は登山家ではなかったのですが「多くの人に、ヒマラヤを見てもらいたい」という、その素朴で新鮮な考えに共鳴した名古屋の登山家たち、とりわけ沖允人さんが中心となって柴田会長を支え、67年に日本ヒマラヤ山岳協会ができました。当時は名称に「山岳」がつきましたが、川喜田二郎さんのようなネパールの権威者が入っていました。

――70年代初めは、トレッキングの会という印象があったのですが…。

山森　素晴らしいヒマラヤになるべく多くの人に、安く行ってもらいたい、それが基本にあったからです。「みんなのヒマラヤ」というモットーで「ヒマラヤの旅」を計画しました。

71年の創立５周年記念では、90人が参加しての大ツアーになりました。それに、72年の「岩と雪」27号のトレッキング特集を会員が分担して執筆したので、トレッキング団体ではないかという誤解が広まりました。

――ボランティアでは大変ですね。

山森　ヒマラヤが先鋭的な登山家のものだと思われていた時代に一般の人も体験できるものだと認識してもらった点では大きな功績があったと思います。

――それからヒマラヤ登山へ？

山森　ええ、日本でもトレッキング会社が生まれ、「ヒマラヤの旅」の時代は終わったという意識と、現在理事長をしている稲田定重らの東北ヒマラヤ研究会グループから、遠征の研究会をつくろうという声が出てきました。

72年には総合的なヒマラヤの紹介と研究、入域困難な地域への踏査隊、登山隊の派遣を提唱し、ＨＡＪも次の段階へと入りました。この結果、ラダック、のちには東部ヒマラヤなど全ヒマラヤをカバーする研究会が、各地の会員の間に生まれました。

――充実した研究会が多かったですね。

山森　ええ。稲田が30周年誌に書いていますが、「従来の『旅』という他者依存と異なり、自らが開拓者となり、自分たちのヒマラヤを創って行く」そんな意識が会の中に生まれてきました。

未経験なのに隊長に

――ところで、山森欣一さんがＨＡＪと関わったのはいつからですか？

山森　普通の会員としては73年からです。そのうち未踏峰だったガルワール・ヒマラヤのハルディオル（7251ｍ）への隊員募集があって、それに74年に応募してからです。抜き差しならぬようになったのは（笑）

――今や百戦練磨の山森さんが公募隊に参加したなんて信じられません（笑）

山森　結局、その遠征はだめになり、75年にカシミールのヌン峰（7135ｍ）へ行きなさいと、別の山に回されてしまって、それからです。

――別の山で我慢するなんて、実に初々しいですね（笑）

山森　いやそうでもない（笑）

ビザ発給のトラブルが影響して、インドに飛んだ隊長は登山のための休暇をその処理で費やしてしまって、結局私が隊長代行になってしまった。まったく経験がないのにですよ（笑）

――同時期にもう一隊ガルワールへ出ていますが、その隊には稲田さんら経験者が何人もいたはずですが？

山森　そうなんです。応募した未経験者が隊長代行になるなんて変だ、力を平均化すべきだと主張したが、だめで結果的にヌンは登頂に失敗。ＨＡＪのやり方はおかしいと激論して、私はやはりヒマラヤは同じ釜のメシの仲間たちと遠征しようと、山嶺登高会の仲間とカラコルムのハッチンダール・キッシュ登山の準備に取り掛かったのです。

しかし、翌76年に喧嘩相手の稲田が訪ねてきて、81年のカンチェンジュンガ縦走を一緒にやりたい、それが当時のＨＡＪのエクスペディション研究会

の総意であると口説かれたのです。

――ある種の熱気ですね。

山森　はい。当時すでにＨＡＪを中心に、地方のヒマラヤに興味を持っている人たちのネットワークが確立されていたのです。稲田の東北ヒマラヤ研究会、北海道の阿部淳氏らのグループなどによって、異文化の中で行動するノウハウが詰まったヒマラヤ学入門などが、「ヒマラヤ」誌上で展開され、広くヨコの連携で、ヒマラヤを目指すようになったんです。

会の名称から「山岳」がとれたのも76年で、「より広範囲なヒマラヤ」を目指しました。

「ヒマラヤ」誌とルーム

――「ヒマラヤ」誌の果たした役割も大きいですね。

山森　はい。初期の「ヒマラヤ通信」が「ヒマラヤ」となって毎日発行となったのが75年７月からです。この中で展開した地域研究、「遠征学」とも言える中身は、誇っていいものと思います。今では314号まで出ています。

――ＨＡＪの発展の基礎ですね？

山森「ヒマラヤ」だけでなく、事務所の存在も大きかったと思います。現在は、東京・池袋にルームがありますが、個人の自宅ではなく、独立したルームだったために、様々な登山者が出入りし、ヒマラヤ登山計画のゆりかごのような役を果たしました。

――毎月の機関誌の発行、事務所の存在、そして常駐スタッフの存在。これはいつごろ確立したのですか？　社団法人でもおかしくないと思いますが…。

山森　確立したのは79年です。78年秋、カンチェンジュンガ遠征を立案した過程で、社団法人化を文部省体育局スポーツ課に働きかけました。当時の担当官も実質的に遜色はない、ただし基本財産は2000万円、全国組織なら東京に事務所と専従スタッフが必要と指導されました。独立した事務所の維持は大変ですが腹をきめて開設、専従職員として私が入りました。それが79年の11月からです。

――なぜ社団法人になれなかった？

山森　文部省所管の山岳関係の社団法人は日本山岳協会、日本山岳会、京都大学学士山岳会の三団体あるので、各団体の了承が必要と指導を受けました。しかし日山協の当時の今井田研二郎会長が賛成しなかったと聞きました。

――中国チョゴリ遠征隊の資金を個人的に流用して失脚した人ですね。

山森　ヒマラヤ協会を認めたら、アンデス協会もアルプス協会も認めなくてはならないと言ったそうです（笑）

そんな経緯で、社団法人化へ邁進するよりも、目の前に迫ったカンチェンジュンガ縦走に全力を尽くしたんです。山に登る方が大事ですからね。

――結果的にカンチェンジュンガ縦走計画にたずさわった人々、八木原圀明さん、尾形好雄さんなどがＨＡＪの骨格を作って現在にいたっていますね。

ＨＡＪとよく似た地方の人々が結集した日本ヒンズークシュ・カラコルム研究会（ＨＫＴ）の場合は、77年にＫ２遠征を成功させています。大プロジェクトの遠征という点では遅れていたＨＡＪが、カンチェンジュンガでひとつにまとまり、その後の登山界において大きな核となりましたが…。

山森　やはり事務所の存在が大きいでしょう。ＨＫＴの新貝勲さんが言っていましたが、一時期ＨＫＴの人間が、日山協の海外委員会を支えたと。しかし、ＨＡＪもそうなったら大変だよと。

我々はいいところばかりを日山協にとられてしまったと…。

――でも今、実際に日山協海外常任委員会を支えているのはＨＡＪでしょう。ほとんどの分析データが、ＨＡＪから出ているし…。今は人脈的に重なっているせいもありますが、日山協は少なくとも公的機関なんだから、情報のただどりはよくありませんよね（笑）

山森　私の口からは、それにウンとは言えません（笑）

ＨＫＴとの比較にもどせば、沖允人さんは素晴らしい方で、ＨＡＪの初期の頃、ヒマラヤのよさを伝えるために地方に講演され登山界に大変な貢献をされた。またＨＫＴの広島三朗さんもカラコルムの伝導師のように活躍したけど、それだけだと限界がある。根本的に違うのはやはり事務所が

できたことによって、様ざまな人が入れ替わり立ち代わり出入りして、情熱が長く続いたのだと思いますよ。トータルなヒマラヤの情報が蓄積されましたから…。

山は、ツルの恩返し

――カンチェ前後の動きは？

山森「高峰登山の基礎を学び、多くの人に素晴らしい体験の場を…」という目的でヒマラヤ登山学校を78年から始めました。第一回はヌン峰で開かれ、第五回まで続きました。カンチェが終わった後に、冬のエベレスト西稜の計画が決まっていましたが、実行間際に、登山学校のナンダ・カートで雪崩遭難が起こり、西稜は断念しました。

――80年代のＨＡＪの活躍は素晴らしいですね。インド、中国では未踏峰を次々と落とし、さらに黄河源流地域など未知の地域への踏査隊の派遣など驚くほど、黄金時代でしたが…。

山森　80年に中国登山が解禁されましたが、ＨＡＪはカンチェ計画に没頭していたため乗り遅れてしまった。その後、ブータンの方や中国登山協会の幹部と交流を深め、日本に招待し研究会を広くオープンして会員以外にも情報を公開しました。

――インドも中国も、未踏地域の登山許可が目白押しでしたね。

山森　もともとＨＡＪは他人が行かない所を中心に研究していましたし、インドとは沖さんが留学し、柴田会長時代からの深いつながりもありました。中国とは83年に北京に出かけ、こちらが登りたい三十数座の山と当時未開放だった公路の踏査、長江や黄河、ヤルツァンポ流域の踏査などを提出して、ねばり強く交渉したんです。許可されたところもあれば、だめな山もあった。

黄金の80年代と言われても、痛恨の事故もありました。30年で83隊が遠征し、延べ658人が登山しましたが、有望な仲間たち20人が倒れたことも事実です。その仲間たちに恥ずかしくない取り組みをと、いつも考えています。

――ＨＡＪでは「ツルの恩返し」とよく言いますが？

山森　それは日山協国際部長も務める理事の八木原がよく言うのですが、ツルでも恩を返すのだから、ＨＡＪの登山隊に参加したら、次の遠征や事務などを手伝ってくれと、それがなかったらサルにも劣ると…。

登山者の意識も時代を経るにしたがって大きく変わりました。公募して高峰登山を行うと、金を払ったんだから登らせろ！　という人も出てきた。ボランティアで指導を受けリスクも負う隊長、インストラクターも悩んで、登山学校は５年ほど中止しました。

80年代末になると完全に「連れて行ってもらいましょう」の時代になっています。89年からは、サマーキャンプを行っています。情報が多く比較的安全に山頂に立てる山で、高所登山の初歩を学んでもらうためです。ヌンやムスターグ・アタなどです。これが、現在でも続く協会の柱の一つです。

――登山者の質が変わった？

山森　もちろん変わっています。社会が変わっているんだから、ヒマラヤへの取り組みも変わって当然です。私たちは登山も面白いが、その過程も素晴らしいと知っていますが、若い人は途中の部分にはあまり目が行かない。アイゼン履いてパッと登る部分にだけ目が行きやすい。払った金の対価として結果、つまり登頂を重視する人が多く、当然ツルの恩返しとはなかなか行かない。しかし、有望な人も育っています。

熱意と情熱の運営

――会員数と会費を？

山森　在籍した人は2600人くらいですが、実質は700人から800人の間です。78年当時と変わりません。入るのも辞めるのも自由な会ですから、会費を払わない幽霊会員はいません。年会費は今年から一万円です。

――よく、それで成り立ちますね？　通常予算は年間どのくらいですか？

山森　人件費を含めて1000万円といったところでしょう。「ヒマラヤ」誌の発送と事務所の家賃で、月50万円。それに人件費です。海外登山隊が何隊出るかによって、その年度予算の規模が違ってきます。

――中国登山研究などの分厚い研究書を出版し、

情報を公開。登山靴の破壊問題まで積極的に取り組んでいますが、みんなボランティアですか？

山森　専従している私は給料をもらっていますが、会員たちのボランティアに支えられているのは事実です。「ヒマラヤ」誌を見ていただければ分かりますが、会費だけでなく、財政支援があります。何かあると財政支援をする会を開いてカンパしてくれる人、貸してくれる人から支援を受けています。

――理事長の稲田さんが、お名前のとおり田んぼを一枚ずつ売って維持していると噂されていますが…。

山森　間違いですよ（笑）。会員の浄財によって維持されているのが本当のところです。例えば高田馬場の事務所から移転した時もカンパが200万円も集まりましたし、30周年記念企画の費用400万円もカンパです。池袋の事務所も群馬の方のご好意で、非常に安い費用で借りています。

――30周年記念の企画は？

山森　1月に記念式典と、30周年誌を出版します。B5判で400ページです。「ヒマラヤの総索引」「ヒマラヤ事故事例集」も順次発行してゆきます。

――三十年史を綴った稲田定重さんの校正ゲラを拝見しましたが、素晴らしいですね。山森さんの「高田馬場15年回想」も、ヒマラヤへの取り組みの情熱が伝わってくる文章ですが…。

山森　私たちに限らず、やはり堂々とヒマラヤへの思いを織りなしてきた人々の熱意が感じられるからでしょう。

ＨＡＪ役割と将来

――これから個人的には、どのような展開を考えていますか？

山森　私がＨＡＪの専従として頑張ってきたのは、ヒマラヤに限らず山の世界ではやらなくてはならないことが、たくさんあるからです。例えばしっかりとした情報管理です。日山協、日本勤労者山岳連盟などの枠を外して、ヒマラヤ、海外の情報が蓄積される場をこれから模索したいですね。

――ヒマラヤの遭難統計を出し、その死亡率の高さを指摘され、雪崩事故やテイクイン・テイクアウトの提唱など、山森さんのデータ管理には、敬服しています。その他には…

山森　登山共済です。共済がしっかりすれば、その資金を活用して山岳レスキューも確個たるものを組織できるようになるでしょう。情報管理と登山共済をどうするか、今、各組織の指導者が考えないと、21世紀の登山界なんてまったく薄っぺらになってしまう。

特に登山共済は重要です。労山の優れた共済を見本として、日山協と労山が大同団結して、登山者のための共済を目指すのが登山組織の指導者の役割じゃないかな。そのための新しい組織を模索する時代ではないでしょうか。

――ＨＡＪの役割は…。

山森　東京の場合なら日山協、都岳連、それにヒマラヤを対象にしたＨＡＪがあります。それぞれが役割分担して、全体として日本の海外登山を研究、考える場になればいい。私たちはインド・ヒマラヤ会議、中国登山研究会など他の組織の人たちにも広く開放しています。同じ海外登山研究会

日本ヒマラヤ協会の初登頂記録

73年	カンジェラルワ（6612m）	ネ
75年	バムチュー（6303m）	印
78年	バツーラⅡ（7730m）	パ
81年	ランタン・リ（7205m）	ネ
82年	ブリクティ・サイル（6364m）	印
84年	マモストン・カンリ（7526m）	印
85年	八花氷山（5850m）	中
	サーセル・カンリⅡW（7518m）	印
86年	雪宝頂（5588m）	中
	ギャラ・ペリ（7294m）	中
	チョー・ウィ（7354m）	中
	カルジャン（7216m）	中
87年	ラプチェ・カン（7367m）	中
88年	リモⅠ峰（7385m）	印
	新青18峰（6237m）	中
	ゲニ（6204m）	中
92年	新青峰（6860m）	中
	サラスワティ（6940m）	印
93年	ピラミッド・ピーク（7123m）	印

印はインド、ネはネパール、中は中国、パはパキスタン。ヒマラヤののべ83座に挑み、登頂したのは55座（うち初登頂19座）となっている。遭難事故は7座で起きている。

でも日山協や都岳連とは別の形でやって、トータルとして登山者に、海外登山を理解してもらえばいい。そういう考えです。

――ＨＡＪの将来はいかがですか？

山森　今まで登山・トレッキングが中心でしたが、様々な楽しみを求める人にサービスできる組織にならなくてはと思います。そのためには会員が増えなくては…。ＨＡＪは、スペシャリストの集まりと誤解されているきらいがありますが、誰でも参加できる会であり、登山至上主義の場ではないのです。実情はヒマラヤのすべてに興味がある人が集まっています。つまり民族、蝶々、音楽や高山植物など、ヒマラヤを取り巻く事柄に興味のある人は、誰でも入れる会なんです。そういうものが、30年の歴史の中に蓄積されています。

――再び「みんなのヒマラヤ」ですね。

山森　はい。蓄積された鉱脈、人脈があるのですから、後は創造的に取り組んでくれればいいのです。

――若い人に入会を呼び掛けて下さい。

山森　ヒマラヤでは、人生の厳しさも楽しさもすべてを味わうことができます。誰かが与えてくれるヒマラヤでなく、自らが作り出すヒマラヤがここにある。大勢の仲間がいるし、優れた人たちと出会うのも人生でしょう。誰にも束縛されずに自分で決断してやって行く場がここにはありますから…。

――ご自身を振り返っては？

山森　79年以来、実に充実しています。まったく悔いがない（笑）

回　想

高田馬場15年

ルームを中心にヒマラヤを舞台として活躍したアルピニストたち

山　森　欣　一

念願のルームを開設

1979年秋。杜の都・仙台のとある一室で数人の男達が額を寄せあって相談に耽っていた。その席にいた私は、重大な決断を迫られていた。

当時ＨＡＪでは、「社団法人化」実現に向けて可能性を模索中であった。文部省体育局スポーツ課（当時）に足を運び状況を説明していたが、担当者からは、全国規模の社団法人の要件について説明があった。その中の重要な要件として、「東京に専従者をおいた［事務所］を設けること」があった。

その頃、ＨＡＪではＥＸＰＥＤＩＴＩＯＮ研究会を中心にカンチェンジュンガ縦走計画が進行中であり、その準備を強力に推進しなければならない時期に差し掛かっていた。

前年の78年秋、ＨＡＪの事務所を東京に移転するに当たって、私の自宅に引き受けていたこと、カンチェンジュンガ計画では副隊長（その後隊長）として推進役の一端を担っていたことなどの状況から、東京に専従員を置いた自前の事務所を開設することになれば、私が専従員の第一候補であることは目に見えていたのである。

カンチェンジュンガ縦走の夢にとりつかれて３年が過ぎていた。引き返すには遅過ぎたし、それにも増してカンチ縦走計画は魅力的であり、翌年春には偵察隊長として100日間ほどネパールで過ごすことが決まっていた。私が専従を引き受けるにはあまりにも条件が整い過ぎていた。

こうして、私と菊地薫君は全国の会員が集うのに足の便が良い山手線を中心に、ＨＡＪルームを探し廻り落ち着いた先が高田馬場であった。ビルの入口は大通りには面していなかったものの、部屋の窓は大通りを見下ろす位置にあった。南の窓からは新宿の高層ビル群が、台所からは東に池袋のサンシャイン・ビルを見ることが出来、まるでいながらにしてヒマラヤの八千メートル峰を見ているような気分にさせられる場所であった。11月１日、新事務所は希望と不安を入り混ぜて船出したのであった。

カンチから冬期マナスル

1980年

カンチェンジュンガの偵察の年となり、３月１日に私が出発した後の事務局には、妻と松本正城君に詰めてもらった。松本君は偵察に一緒に行く予定であったが、79年秋にインドのクンを山崎金一君と二人でアルパイン・スタイルで登攀したが、

登頂断念しビバークとなり凍傷を負い偵察に行ける状態ではなくなった。松本君は、ヌンのことで私を尋ねて来たのが切っ掛けでＨＡＪに入会した。偵察から帰って来た後のカンチのミーティング後の酒の席で、言い争いとなってしまってその後は彼はＨＡＪから足が遠退いてしまった。

また表に出る事無くＨＡＪ事務局を支援してくれたのが土居正勝君であった。77年に知り合って以来、家と年が近かったことも手伝って信頼しあえる間柄だった。77年当時、私は都岳連の海外委員長であったが、80年春任期半ばにして彼に委員長の座を託し偵察に出発した。彼は本番の留守中を含めて何くれとなくＨＡＪ事務局をサポートしてくれ、都岳連の海外委員会も飛躍的に発展させた。82年夏のクンの隊長を引き受けてくれたが、突発事情で降りた。しかし、85年夏には前年のナンガ・パルバット遭難の家族をＢＣまで案内する役目を引き受けてくれた。その後も悩める私の相談相手となってくれていたが、私が91年秋ミニヤ・コンカで登山中突然病死した。残念極まる早過ぎる47歳の死であった。

偵察から帰国しても多忙であった。カンチ本番の資金・物資のことが中心であった。隊員が手分けして膨大な物資を調達するために走り廻り、夜には連日ミーティングである。当時のミーティングでは酒を入れながら行うのが恒例化していたが、その席で必ず寝てしまったのが、山田昇・藤倉和美・角田不二の三君であった。今は亡き三君であるが、山田君と角田君は徐々に鍛えられてかなり呑めるようになったが、藤倉君はカンチ本番が終わった後の秋にナンダ・カートで遭難したため、多分呑めないままだったと思う。モンスターと異名をとった好漢であったが、呑むと赤鬼の様になって寝てしまうのであった。そんな呑み会が連夜繰り広げられていた。それについて行けないような体力では、とてもカンチ遠征には耐えられなかったのだろう。この頃藤倉君ら数名のメンバーはルームに集まる時も走ってきており、ビルの屋上で整理運動をしてから５階のルームに降りて来たが、その音がうるさいと７階の住人からクレームがついたこともあった。

社団法人化の件でも、文部省担当者の「日本山岳協会など既存の山岳関係社団法人の一筆があるとなおいい」との指導をクリアーするために、当時の日山協の三副会長（高橋定昌、鎌田久、丹部節雄各氏）を個別に訪ねて意向を打診した。おおむね好意的な感触であったので、同意要請文書を日山協に提出したが、最終的には鎌田副会長からの電話連絡が入って、当時の今井田会長の「それでは、文部省はアルプス協会もアンデス協会も認可するのか」との意向でＨＡＪの要請は保留となってしまい、このことも法人化の道が遠退く一因となった。

この間を縫うようにして、四国・九州・信州・上州を飛び回って「日本ヒマラヤ会議・集会」を開いた。11月上旬の連休にカンチの別送品が梱包されて船積みされて行った。しかし、資金難は一向に解消されず、カンチ委員会の幹部の悩みは尽きなかった。相変わらずのテレビ局廻りが続いた。暮れには78年ＨＡＪトリスル登山学校に参加し、一時はカンチの仲間として活動していた野中和雄君が、谷川岳東尾根で５人の仲間と遭難するという悲報も飛び込んで来た。彼はカンチを諦め地元栃木の仲間とインド、カシミール・ヒマラヤに向かうことになりその訓練での遭難であった。松見新衛君もカンチ計画に顔を出しながら去って行った一人であったが、81年夏中国の未踏峰コングールをアルパイン・スタイルで登攀中行方不明となってしまった。

1981年

２月中旬、私は前日漸くにして出たテレビ局からの前渡金を抱えて成田を出発した。それでも帰りのキャラバンの路銀は用意できなかった。隊員達の背と手には山ほどの荷物があった。箱崎で規定の重量を預け、残りは機内持ち込みである。成田では安全検査の台に荷物を乗せ「20kgは預けることが出来ますよ」と言われて慌てて荷物をひったくって来た、という笑えぬ状態であった。それがこの頃のＥＸＰスタイルであった。

カンチ・トラバースは、参加した隊員達の努力に報いることができず完敗であった。しかし、真面目な隊員が多かったためか、隊員達は腐ることなくそれ以後もヒマラヤに通い続けてくれたこと

が嬉しい。このＥＸＰには部外者が参加していた。加藤康二君だ。既に都岳連やイエティ同人で活躍していたヒマラヤ・ニストであったが、我々の無線担当として参加してくれた。私が都岳連の海外委員長として、推薦状交付以外に事故対策の研修会を行った時に、彼はクレームをつけたのだが、それ以来の出会いだった。キャラバン中に話しをしてお互いに納得できる関係になった。彼は秋にアンナプルナ南壁に行くことになっていた。一時帰国した彼がＨＡＪのルームに寄ってくれた時、私は彼を冬のエヴェレスト西稜に副隊長として誘い、彼は承諾してくれて、家庭の悩みを打ち明けてくれた。結局ナンダ・カートの事故でエヴェレスト計画は御破算になってしまったが、彼も又、アンナプルナ南壁を越えた八千メートルで消息を絶ってしまったのである。

カンチ本番には学術班があった。主峰とヤルン・カンの比高を観測するのが主目的であり、そのために登山隊は両峰の頂上に測旗を建てる任務を負っていた。そして無事にその役割を果すことができたのである。隊長はヒマラヤの世界では高名な五百沢智也氏である。その後もＨＡＪの学術の面では大変お世話になっている。谷本秀喜君は測量の専門家として海外青年協力隊でネパールにいてその縁で参加。登山家でもあり、カンチ終了後には、松本君とクンに行き物議を呼んだりした。谷甲州の名でＳＦ作家としてスタートし、新田次郎賞を受賞するなど大いに活躍が期待されている。

私の留守中、事務局には細貝栄君と緑川恭子さんに詰めてもらった。細貝君は単独登山やヒマラヤ登山でも第一人者であり、ヒマラヤの辺境に単独行を実践しているユニークな岳人であったが、大変な負担をかけてしまった。緑川さんは、私が所属する山嶺登高会の先輩である緑川広氏の奥さんである。私の妻が出産まぢかだったため助けてくれた。山嶺では緑川氏が隊長、私が副隊長となって78年春にハチンダール・キッシュに登山したが、登頂を断念して下降中に亀井建樹君がロープ切断のため転落死亡してしまった。亀井君は、カンチェンジュンガでの活躍が期待されており、77年には翌年のＨＡＪのバトゥーラⅢの偵察を行っていて、ハチンダールの後は、トリスル登山学校の登攀隊長として参加することが決まっていた。枠にはまらないスケールの大きな岳人だっただけに悔まれる遭難であった。

６月に帰国してからもルームには入れ替わり立ち代わり人が詰めた。７月にはネパールのシャルマ登山局長、８月にはインドのサリーンＩＭＦ総裁を招いて研究会。若輩ものの私や事務局のスタッフでは釣り合いがとれず、長老の藤江幾太郎画伯などに応対していただくなど、人材不足を感じたのもこの頃である。

９月に入り、冬のエヴェレスト西稜をマスコミが支援してくれることになった。私は、ヒマラヤ各地に登山中のメンバーに決定通知書を発送した。10月３日、稲田氏宅にて今後の事業計画を検討している場所にインドのシカール社からナンダ・カートの第一報が入ったのである。ＨＡＪ始まって以来初めての遭難。それが７人と大量遭難である。この事故処理で見せたＨＡＪの支援体制は、官僚化していない組織の強さであり、如何に人の繋がり・信頼が大切であるかを物語っていた。捜索に出向いてくれた多くの岳友。家族関係者との辛い連絡に明け暮れ支えてくれた岳友。筆舌に尽くし難い感謝の気持ちで一杯であった。私はこの遭難で「事故責任」の世界である筈の「登山」という行為に厭というほど虚しさを感じたのである。

1982年

ナンダ・カート遭難で後輩であり長年のパートナーであった藤倉君を失った尾形好雄君が事務局に専従することとなった。機関誌「ヒマラヤ」を現在のようなスタイルに作り上げたのは、前編集長の角田君であったが、彼はカンチの遠征の後、秋に自分の所属する明大駿台山岳部ＯＢ会隊を率いてガンガプルナに挑んでいたが、ナンダ・カートと同じように雪崩によって２人を失っていた。尾形君は、専従すると同時に角田君の後の編集長として「ヒマラヤ」を担当すると共に、博学多識を遺憾なく発揮して以後のＨＡＪ事務局の牽引車となった。

春には懸案であった「ムスタン」遠征が実現した。隊長は菊地君。ネパールの諸事に通じ、語学も達者。74年のラムジュン・ヒマールからネパー

ルに入り浸って研鑽し、ランジャン氏が経営するエクスプレス・ハウスを足場にして、ＨＡＪのみならず多くの人々の信頼を得ていた。カンチェンジュンガ遠征の時、一部には両雄並び立たずの例えのように、私と彼がうまくいかないのではないかと不安視する向きもあったが、大人の彼は偵察・本番を通じて未熟な私を立てて補佐してくれた。その彼が実力を如何なく発揮し、岳人としての高い資質を見せたのがこの遠征であった。ブリクティ・サイルという未知の地域は、彼らによってようやく解明の緒についたのである。この遠征で一皮剥けたのが佐久間隆君であった。菊地君によって彼の才能に花が開いた。しかし、好事魔多しであろうか。佐久間君は冬のマナスルの頂上アタックの帰り滑落死亡したのであった。佐久間君は、私が初めて所属した東京白稜会に所属していた。同会からは78年トリスル登山学校隊に中岡久君と北川勇人君が参加した。80年の同会友の会の新年会に鎌田久先輩に声を掛けられて出席した折に、彼からカンチ参加の希望が寄せられたのが縁で本番に参加したのであった。

夏には予定していた土居君に代わり私がクン登山学校の隊長として参加した。しかし、気温の上昇による岩盤の崩落によって勝山教孝君を失った。この隊には稲垣公平氏と今野一也氏に参加してもらった。稲垣氏は65年アルプス遠征組であるが、都岳連の海外委員として一緒に汗をかいた仲であり、若い連中の面倒みには定評がありまとめ役にぴったりであった。ＨＡＪ・ＥＸＰ研は75年に２つの隊をインドに出したが明暗を分けた。暗は私のカシミール隊であり、明は今野氏の参加したガルワール隊であった。氏は高校教師であるが、年季の入った信頼できる登山家でもある。登攀はガンガプルナの傷の未だ癒えていない角田君に任せた。その角田を慕って長繁夫、小暮孝、肥田繁男の三君が集まった。そして、84年夏、角田・小暮・肥田の三君は今給黎宣幸君と共にナンガ・パルバットのルパール壁に眠ったのである。

10月にはカトマンズでＵＩＡＡ50周年大会が開かれた。ＨＡＪからは稲田・山森がホスト国のネパール山岳協会（ＮＭＡ）からゲストとして招かれたが、私は菊地君に行って貰った。それは、各国の展示館作製の要請が日本にもきたが、窓口が断わりネパールの困惑した事情を知っている菊地君が何とかしなければとの思いがあったからである。当時、菊地君はＪＡＣの海外連絡委員であったので、その関係筋の協力も得て、56年マナスル隊装備、日本で出版されているヒマラヤ写真集などを展示し面目を保った。費用については、ＮＭＡからゲストとして招かれた10数人の協力によってほとんどを賄った。

ネパール・ヒマラヤは、冬の八千メートルの時代であった。ナンダ・カート遭難でエヴェレスト西稜の夢破れた山田君は、ナンダ・カート捜索の折に冬のマナスルを打診していた。許可の優先権はイエティ同人にあったが、彼らは行きそうにもなかったので、この冬を目指して山田・菊地両君を中心に準備を進めた。資金も何とか集まり見返りとしてカメラマンの阿久津悦夫氏が同行することになった。気配りの菊地君は優先権のあったイエティ同人にも声をかけ、青田浩君が参加することになった。青田君は加藤君が遭難したアンナプルナ隊の隊員で登頂に成功していた。カトマンズにいた菊地君は、かねてから話しをつけてあった法政大Ⅱ部山岳部ＯＢ会の村上和也君と、山学同志会の石橋真君の参加を要請した。２人とも秋の登山を終えたばかりであった。マカルーの無酸素登山に成功したばかりの石橋君については会との間でやりとりがあったが、結局は２人共参加したのである。村上君は翌年カモシカ同人隊で山田君と一緒に冬のエヴェレストの登頂に成功し、84年夏には私のナムナニ偵察に付き合ってくれた。冬のマナスル登山は、登山初日に隊長で最も経験の深い山田君が、アンザイレンした３人パーティの最後尾を歩いていてクレバスに転落、骨折して登山の戦線から離脱するというドジを踏み、結局アタックに出た佐久間君の遭難に繋がったのであった。尤もアタッカーについて、石橋君と佐久間君の間で固辞しあった結果佐久間君となった経緯があった。その石橋君も、85年春山学同志会のネパール合宿に参加して、アマダブラムに登頂し下降中に滑落死亡した。他会のクライマーからも慕われた逸材の惜しまれる死であった。

ブータン、中国へ

1983年

戦後の中国登山が開始されたのは、80年からであるが、ＨＡＪではネパールでの登山を展開していて手が廻らなかった。折りしも82年秋にカトマンズで開かれたＵＩＩＡ総会には、中国、ブータンからも代表団が来ており、ＨＡＪでもカトマンズで彼らと接触することができた。こうして、２月末にはブータンのニドップ・ドルジェ氏を招請し研究会を開催した。また、３月には稲田・山森が北京に一週間滞在して、今後ＨＡＪが中国で展開したい活動について協議を行った。

２件の遭難事故もあって、登山学校の見直しを行い、この年に計画していたヌンは中止するつもりであったが、応募した天城敞彦、大久保博、細貝登三君の執拗な要請に根負けして、飛田和夫君を隊長に、ガンガプルナ、クン、マナスルと遭難続きで滅入っていた角田君をまたまた引っ張り出してヌン隊を送り出した。角田君ら３名が登頂したが、天城、大久保両君は登頂できなかった。その天城君が研鑽に研鑽を重ね、５、６、７千メートル峰を順次登頂し、昨年97年のニンチン・カンサ隊の隊長を務め、自身も含めて９名の登頂者を出すとは、本人にも全く予想のできなかったことであろう。

ブータンは新しい地域というばかりでなく、古くから多くの岳人の憧憬の国でもあったから、多少の値段が張っても行きたい人が多く、ブームとなった。しかし、天候のこともあってか成果は上がらなかった。この国の最高峰ガンカル・プンスムを登山したいということが誰しもが願うことであった。そのためには許可もさることながら、登山を理解してもらわなければならない。こうして２人の研修生を受け入れることになり10月から２ヶ月ほど滞在した。

中国は風雲急を告げていた。東のナムチャ・バルワ、西のナムナニを筆頭にギャラ・ペリ、クーラ・カンリ、クラウン、チョー・アウイ、ニェンチェンタンラなどの山は許可申請が山積みされているとの噂だった。それらは全て知られた山々であった。しかし、広大な中国には知られざる山、地域がもっともっと存在する筈である。だが、知られざる山も知られた山に入ってこそ見つけることができる。先ず行く事が必要だ。同時に、登山協会の幹部を招請し、研究会を開く必要がある中国登山協会（ＣＭＡ）の代表団を招請するために積極的に活動したが、解禁以来の３年間の間に大物（チョモランマ、チョゴリ、シシャパンマ、コングルー、ミニヤ・コンカ）に日本から登山隊が出たことによって、国内の関係は複雑に絡み合っていた。中国側も一団体だけの招請には応じないとの意向なので、止むを得ず共同歩調をとり、７月末からの来日が実現した。ＨＡＪでは東京と札幌の２ヶ所で研究会を開催した。西南中国、インド、ネパール地域を目標にした探査計画が練られ、同行取材の交渉が続けられた。この結果、インド、ネパールは除外されたものの、雲南、四川、チベットについて３隊が派遣されることになった。相手はＮＨＫであった。ＮＨＫとの出会いは高橋照氏の引き合わせであった。加藤保男君が冬のエヴェレストで遭難し、その追悼の席で高橋氏と一緒にＪＡＣのルームに行き、そこでＮＨＫの岡田正大氏に引き合わされたのであった。その後は大変な苦労の末、同行取材が実現したのであった。

最初の目的地である秋の四川はスークーニャンであった。隊長は角田君に頼んだ。彼は未だ若輩であり、ＮＨＫの名ディレクターを相手に大変な気苦労があったと思うが、サポートした吉田憲司君と共に大役を果たしてくれた。吉田君は、私が78年に挑戦し亀井君を失ったハチンダール・キッシュを82年に登り、見事に初登頂に成功した金沢大学のＯＢであった。彼らの隊の報告をしてもらうために都岳連の研究会に招請した時に来たのが吉田君であったが、その彼を亀井君の両親が自宅に招いて話しをしたいと言われて連れていったのが私との縁で、ＨＡＪに係わるようになったのである。彼ら２人はそのまま中国に残り、翌年ナムチャ・バルワに向かう中国登山隊隊員に岩登りの基礎技術について指導した。場所は四川省北部松藩であった。同時に、登山隊に必要な物資が船積みされ中国へ送られた。

東と西　ＥＸＰ黄金時代

1984年

新年早々遭難騒ぎで明けた。ナンガ・パルバット登山のトレーニングとして北アルプス剣岳八ツ峰に挑んでいた角田君達４名が朝日新聞に住所記載で報道されてしまったのである。実は彼らは予備日もあり、実際には自力で下山したのであるが同時期に八ツ峰に入り予備日を過ぎたパーティがあったことから記事になったようだ。私は、まだ予備日があるので、彼らの登山家としてのプライドを考慮して動くつもりはなかった。しかし、新聞報道を見た隊員家族からの要請が続き、やむなく、全権を委任してくれる事を条件に１月10日ルームに対策本部を設けた。とはいえ正月で下山したばかりの友人達にこれから２週間入山してくれと要請しても何人来てくれるか分からなかった。しかし、ルームで集会に参加し酒を酌み交わしながらヒマラヤ談義を重ねていたことはダテではなかった。所属山岳会の応援を加えて20人が要請に応じてくれたのである。大町に降りるのか、馬場島か。情報を収集し角田君の行動を想定し、大町に絞って下山サポート隊として２週間分の食糧を持った16人を送り出し、馬場島には連絡員を送った。幸運にも予想は当たり彼らは大町に下山した。サポート隊は大町のゲートで彼らと逢ったのである。その夜ルームでは部屋の底が抜けるのではないかと思われる饗宴が繰り広げられた。私にとっては、どんな初登頂よりも忘れる事のできない嬉しい友情の一こまであった。

その角田君がエスコートして、２月にパキスタン政府観光局長のムニュール・デン氏を招請して、カラコルム研究会を開いた。カンチ隊で世話になったシェルパのペンバ・ノルブとナワン・ヨンデンがカモシカ同人隊の冬期エヴェレストで負った凍傷の治療のため来日した。帰国前ルームで歓迎をしたのもこの頃であった。

４月には飛田君が隊長で雲南の玉竜雪山に向かった。同行取材のＮＨＫは２班を出し、大理・麗江と西双版納に向かった。登山隊と別行動であった。ブータンのジチュ・ダケは八木原圀明君が隊長となり、角田君のナンガ・パルバットと合同で盛大な壮行会を行った。大長老の吉沢一郎氏も見え、これ以降壮行会の常連として参加してくれるようになった。

５月には副会長として遠藤登氏に就任していただいた。ＨＡＪに対していつも理解を示していただいていたので、今後の指導をお願いしたのである。しかし、何時も独断先行する事務局の姿勢は一向に改まることなく、副会長に相談するのが遅かったり、事後報告だったりして心配をかけ通しであった。この時期、副会長の令夫人が急逝され大変ご苦労されたようであった。90年に会長に就任していただき現在に至っている。

私は、西南中国の仕上げともいうべきチベットに出発しなければならなかった。心配はナンガ・パルバットであった。あのルパール壁である。角田君は、ナンガの後、尾形君隊長のインドとの合同マモストン・カンリに参加することになっていた。この登山も岳人がよだれを流しそうな地域である。胃の痛くなるようなインドのビザ問題がある。私の留守中には、ネパール観光省のシュレスタ局長を招請して研究会が開かれた。

８月末ナムナニ偵察を終えてラサに帰着した私は、ルームに国際電話を入れ、真っ先にナンガ隊の消息を訪ねた。電話口には中岡君が出て「登頂はできなかったが角田さんはマモストン・カンリに向かった」と言う。この一言で一安心し同行取材が成功したこともあって、ラサの高さを忘れて痛飲した。しかし、成都で逢ったＨＡＪスークーニャン・トレッキング隊の小林英見隊長から意外なことを尋ねられた。「角田さんはその後どうなりましたか」、「彼はマモストンに行きましたよ」「日本を出てくる時、ナンガで行方不明と聞きましたが」なんてこった。東京に電話を入れると角田君の後輩でガンガプルナ、ヌンに一緒に行った熊田雅史君が出た。「本当の事を言え！」と怒鳴り真実を知らされた。私からの電話については口止めをされていたらしい。この日から全く酒がまずくなった。東京では角田君の先輩の鈴木雄一君が現地に飛び情報収集に明け暮れ、その後、カンチの仲間であった片岡邦夫君とヌンの細貝君がＣ１付近まで捜索したが手がかりはなかった。痛恨

の1984年であった。

尾形君達はこの遭難の事後処理の最中にインドへと飛び見事マモストン・カンリの初登頂に成功した。その最年少隊員の岩崎洋君は角田君の後輩であり、角田君が来る事を前提にこの隊に参加したのであるが、これが縁となりその後86年カルジャン、93年ピラミッド・ピークなどを含めて、まるで角田君の生まれ変わりかのように、ルームやヒマラヤで活躍することになるのであった。

1985年

目の廻るような忙しさであった。1月のインド・ヒマラヤ会議には、ＩＴＢＰのフカム・シン氏を招請。昨年から中国の黄河全流を下るための協議が進んでいたのであるが、折りしもＮＨＫの黄河とぶつかり、計画を源流部だけに絞らざるを得なくなっていた。この計画は読売新聞の江本嘉伸氏が窓口となって進んでいたが、隊長として八木原君が決まっていたので、カンチの仲間であった八嶋寛君と群馬から佐藤光由君に手伝ってもらうことにした。八嶋君は78年のＨＡＪの二つの登山学校に参加した強者で、カンチも偵察と本番に参加し、その間に結婚も済ませるという離れ技の持ち主であり、考えが柔軟で猪突猛進型でもある。その後86年のチョー・アウイの全員登頂を成功させ、91年には再び八木原君と組んでブラマプトラ川川下りを成功させた。黄河隊は5月に出発してほぼ目的を達成して帰国した。

2月には2度目のブータン研修生の受け入れを行い、5月には飛田君隊長のＫ２隊が出発した。Ｋ２は山田・吉田・村上の三君が登頂に成功したが、執拗に頂上攻撃をかけた飛田隊長等は悪天のため登頂できなかった。7月には沖允人隊長のインドとの合同サセール・カンリⅡ登山隊が出発したが、ＨＡＪのインドの基盤を築いた沖氏だけに事務局の手を煩わせる事もなく出かけた。残念ながら日本側は登頂できなかった。この隊に参加した徳島和男君は、70年代初期から活躍した岳人であるがブランクをものともせず復帰し、ＪＡＣ東海のシュエレン、クラウンを成功させたが、97年夏のＫ２を目の前にして5月に穂高岳で雪崩のため遭難した。

7月には森美枝子隊長の女性登山隊が崑崙を目指して出発した。ウルグ・ムスターグが目的であったがアメリカ隊が入る事になりホータンの南に転進した。合間にはナンガ・パルバットの家族をＢＣまで案内した。土居隊長の下に長君、角田君の後輩でガンガプルナで一緒だった中川裕君、木村陽子さんがエスコートした。木村さんは亀井君と同じ会社に務めていた関係で正月に亀井君の自宅に線香を上げに来ていた時にたまたま私と会い、ケダルナート登山学校に参加して登頂した。その後、翻訳を始め事務局をサポートしてくれていたが、この時は旅行代理店務めであった。

8月にはＪＡＬが墜落して大騒ぎの最中に懸案の二つの登山隊が出発した。大内倫文君が率いるブータンの最高峰ガンカル・プンスム隊である。北海道を中心に組まれたが、本部から角田君が登攀の中心として参加する予定であったが、ナンガ・パルバットの事故のため、急遽尾形君に出動してもらった。また、道外から渡辺斉氏と半谷貞夫氏が加わった。渡辺氏は山へ真剣に取り組んでいる岳人として岳界では知らない人はいないほどの人であるが、若き日に果せなかった高峰への夢を退職して実践し始めた頃だった。半谷氏は生粋のクラーマーであるが今はダックスの社長として多忙な日を送っており、ブータンの山で久し振りに登山を実践したいと望んでいた。尾形君は、すっきりとした中央稜を攻めたが、隊員の高山病が原因となり登頂を断念せざるをえなかった。一度逃したチャンスを取り戻すにはブータンはあまりにも小さな国であった。いまでも魅力ある高峰は閉ざされたままである。

もう一つは、舘野秀夫君率いるシャクスガムの名峰クラウン隊であった。ＨＡＪが中国から得た第一番目の山である。舘野君は75年明組のガルワール隊員であった。ナンダ・カートの捜索に行ってはいるものの、久し振りのヒマラヤであった。クラウンには私が行く予定であったが、ナムチャ・バルワを見据えたギャラ・ペリを偵察するために舘野君に隊長をお願いした。この時は、副隊長は77年Ｋ２で活躍した中込清次郎君にお願いした。私が83年暮れに八ヶ岳に行くために汽車に乗ると向側に坐っていたのが中込君だった。彼はリモの

計画が暗礁に乗り上げていて私がクラウンに誘ったのであった。その中込君はクラウンの後も勢力的にヒマラヤに通っていたが、97年夏スキル・ブルムの登頂に成功しながら懸垂氷河のため遭難した。85年クラウンは登頂できなかったが舘野君は、リシ・ガンガ奥についで、ここでもシプトンの跡を見て充分満足したようだった。

私は9月にギャラ・ペリの偵察に向かった。ギャラ・ペリは中国側の意向もあって、競合しているＨＡＪ／大分岳連／神戸大の三者の合同を模索したが神戸大学は話し合いにもつかなかった。大分とは合同で合意したが、偵察の直前になってＨＡＪからの再三の督促にも回答がなく、結局我々だけとなった。偵察には熊田君を予定していたが、彼はＫ２で体調を崩してしまった。クンの仲間の三浦敏弘君に助っ人を頼み二人で出発した。三浦君は当時名を馳せていた春日井山岳会のチーフ・リーダーであった。ギャラ・ペリのあるヤル・ツァンポ江のロケーションは素晴らしかった。こんな登山がしたいとつくづく思った。ナムチャ・バルワ北面も流石王者の貫禄充分であった。

12月には北京に出向いてお世話になった登山協会の皆さんを招いて答礼を行った。

1986年

１月のインド・ヒマラヤ会議にはＩＭＦのジャヤール副総裁を招請。３月には中国、四川省登山協会代表団を招請。４月の連休には遠藤副会長を四川～チベットに案内し、夏の雪宝頂と87年合同ラプチェ・カンの下準備とした。

85年Ｋ２で山田・吉田両君はポーランドのクルティカと出会い、帰国後合同登山の話しを進めていた。相手国との合同登山の経験は多いＨＡＪではあるが、クライマーとの合同は初めてである。吉田君が中心になり、斎藤安平君が加わって事務局が何もする事無く出かけて行ったが、意見があわなくなって途中から下山した。

夏には四川省登山協会と合同登山を実施した。隊長は遠藤副会長にお願いし、登攀は八木原君に任せた。何とも豪華な布陣であった。四川省登山協会には北京から助っ人が二人きた。現在中国登山協会交流部部長の要職にある張江援さんがその内の一人であった。登山は八木原君の好リードであっさりと終わった。

更にインドと女性合同登山隊が寺沢玲子さんに率いられてキンナウルへと出発した。登山は不調に終わったが、寺沢さんにはこの後も、インド、中国と女性合同登山隊を率いてもらう事になる。また、英語の不得意な私の支えともなってくれているし、現在は常務理事として事務局全般のサポートをしてもらっている。

秋は大変であった、ギャラ・ペリ、チョー・アウイ、カルジャンと三つの七千メートルの未踏峰を攻め、来年のチベットとの合同登山のラプチェ・カンの偵察であった。ギャラ・ペリには最初から飛田君にお願いした。ブータンのガンカル・プンスムをとるか、ギャラをとるか、内部で慎重に検討した結果ナムチャ・バルワへの一歩として、ガンカルを捨て、尾形君にギャラに廻ってもらったのであった。登攀は厳しかったが、尾形君ら３名が初登頂に成功した。ナムチャ・バルワに巨歩を進めたと誰しもが考えたのであった。

チョー・アウイは、仙台の西郡光昭氏に依頼した。西郡氏は75年カシミール隊隊長として一緒に苦労し、その後のカンチェンジュンガも支えてくれた。仙台は八嶋君が隊長となった。準備に事務局が手を貸すこともなかった。見事に全員が初登頂に成功した。カルジャンは九州の新郷信廣氏に依頼した。クーラ・カンリの東に聳える難しい山である。九州では力不足ということで、群馬の宮崎勉君に助っ人を依頼した。宮崎君は八木原君と組んで、群馬のヒマラヤ登山を発展させてきた張本人である。彼の抜群のセンスに期待大であった。また、ヌン、カンチの仲間である保坂昭憲君にもサポートをお願いした。彼らは困難な登攀の末に５人が初登頂に成功した。

ラプチェ・カン偵察は斎藤君にお願いした。ラプチェ・カンの資料を集めている時、斎藤君が何時も手伝ってくれていた。パートナーは、ギャラ・ペリ偵察を棒に振った熊田君。この偵察の成功が翌年の大成功に繋がった。斎藤君は偵察終了後ネパールに出て、山田君と冬のマカルー南東稜を登ったが登頂できなかった。そして87年群馬隊で冬のアンナプルナ南壁からの登頂に成功しながら、Ｃ

3手前で転落行方不明になってしまったのである。悔み切れない死であった。

9月末、私は俳優の西田敏行を案内して、雲南の梅里雪山、四川のゲニなどの偵察を兼ねた2ヶ月の長い旅に出た。同行取材でＨＡＪの運営資金を調達するためである。

これらの一連の秋の活動を終えて11月末には、ローサンダワさんらチベット代表団を招請してラプチェ・カンの議定書を交換した。実はこの夏、松本市で「国際アルピニスト」集会なるものが開かれた。この集会にＣＭＡからも史占春主席と許競副主席が出席し、通訳として趙建軍さんも来日した。松本市の会議に行く前に、一週間程東京にいるのでＨＡＪでアレンジして欲しいとの要望があり、幾つかについてアポをとった。その中に桜内義雄議員もあって、昼食会に私も招かれた。その席上で、史主席から桜内議員に「ナムチャ・バルワは、ＨＡＪとチベットが一緒になって実施することを許可した」と報告した。次いで主席から私にお礼に桜内議員にお酒を注ぐようにと言われ私は感謝を込めて議員の盃を満たしたのであった。このようなことが、あったので来日したチベット登山協会代表団とＨＡＪはナムチャ・バルワの議定書に調印したのであった。以後はご存じのとおりであった。

苦闘続き試練の日々

1987年

辛い年になった。ＨＡＪへの許可に対して、ＪＡＣが政治ルートを使って妨害に出たのである。このためＨＡＪの再三の訪中の要請についてもＣＭＡからは許可は出なかった。

3月に尾形君はガンカル・プンスムの可能性を探りにブータンへ飛んだ。5月には創立以来会長を務められた柴田金之助氏が退任された。

夏に中国、ゲニは飛田君に依頼したが登頂はならなかった。インド、ヌンは女性隊で北海道の木下祥子さんが隊長を務め、2名が登頂した。木下さんはその後トレーニング中に怪我をして、今ではヒマラヤに通えないのが残念である。

秋には私が隊長でチベットとの合同ラプチェ・カン登山を実施した。副隊長には出口當氏に担当してもらった。私が肺水腫でシガツェに11日間入院していた間、全て出口氏が指揮をとり見事初登頂にこぎつけた。それも15人である。出口氏には79年のヴァスキ・パルバット隊長としても随分と不自由な目に合わせてしまったし、92年ムスターグ・アタ／クラウンでも再び副隊長として付き合ってもらった。

秋には尾形君がＨＡＪの資金調達の旅に出かけた。ムツゴロウを中国から旧ソ連へと抜ける旅であった。なにかと大変であったが、彼の人柄と柔軟な頭で切り抜けたようだ。

1988年

年明け早々、新貝勲氏を煩わせて北京に飛んだ。新貝氏は史主席とも懇意の中であるので何かとお世話になった。史主席は長い演説を行ったが、ナムチャ・バルワの進展は見られなかった。新貝氏には山田君の八千メートル14座登頂プランでもお世話になったが、山田君のマッキンリーの遭難騒ぎが一段落した89年7月に交通事故であっけなく他界した。誰しもが驚いた死であった。

春に青海省のシンチンに植松秀之氏が隊長で出かけたが前衛峰の登頂にとどまった。植松氏は東北人特有の人情味溢れる岳人である。81年には、京都大学と競合したランタン・リの隊長も務め、見事にこの国境の名峰の初登頂に成功した。

また、昨年失敗したゲニに飛田君が再び挑み、今度は全員初登頂に導いた。飛田君は、冬のＫ2に執念を燃やし、昨年暮に熊田君と二人で冬のバルトロ氷河を歩き、今秋は、高所の実態を探るべくガッシャーブルムⅡ隊を組織したが、予想以上に早い雪に悩まされて単身ＢＣに到達するにとどまった。遠征が連続していて周りも心配した。

夏には尾形君が再びインドと合同を組み、シアチェンの近くに聳えるリモⅠに挑み初登頂に成功した。この隊には、ガンカル・プンスム隊として集まった信州大学組の吉田秀樹君と二俣勇司君が参加していたが、二俣君は92年の私が隊長を務めたクラウンで雪崩のため行方不明となってしまった。

秋には山田君が、シシャパンマとチョー・オユー

の連続登頂を行った。山田君はアンナプルナで最良のパートナーである斎藤君を失い、困惑していたが、単独で登るべく相談に来た。チョー・オユーは空いていなかったが、11月に入れば冬とのことで許可を取得した。私は、86年にガッシャーブルムⅠを二人で登り、そのルートが現在ではジャパニーズ・クーロワールと呼ばれている初登攀者の清水修君と組む事を推奨した。山田君はそれを発展させて群馬の高校の後輩でもある三枝照雄君を誘い、春に参加したＪＡＣの三国合同チョモランマ登山の若手である馬場哲也君と山本篤君も誘った。結局馬場君は、所属する東京農大のナンガ・パルバット隊に行き、不幸にも落雷を受けて死亡した。４人となった登山隊であったが、山田君はシシャパンマをキチンと主峰まで登り、チョー・オユーもアッという間に登ってしまった。

1989年

大変な年となってしまった。年明け早々昭和天皇が崩御。翌日がインド・ヒマラヤ会議で平成元年。インド・ヒマラヤ会議が終わってからご苦労さん会を開き、更に二次会を私の家で開いた。たまたまパキスタンの件が不調に終わり、久し振りに沼田で過ごした山田君や九州から参加した新郷氏や尾形君も交えて、平成元年の書初め大会となった。これが山田君と最後の別れとなった。

３月６日マッキンリーから山田君、小松幸三君、三枝君の遭難の第一報が入った。３人ともＨＡＪの終身会員である。派遣母体のない隊であったがすぐに関係者が集まり対策本部を設置した。ＨＡＪも全面的に協力した。捜索隊は、ＨＡＪと群馬を中心に派遣された。残念な結果であった事は、ご承知のとおりである。しかし、このような非常事態に迅速に対応できるＨＡＪ事務局は、このところ10年のＥＸＰの積み重ねの成果であることが証明される結果となった。

ＥＸＰは久し振りに低調であった。夏のヴァスキ・パルバット、シャラリ、チョモランマ全て登頂できなかった。しかし、シャラリ隊には隊長代行として、前年ブロード・ピークの登頂に成功している酒井國光氏、イスト・オ・ナール登頂者の西嶋錬太郎氏などユニークな面々が集った。登頂は出来なかったが、参加者は素晴らしい山旅に満足した筈であった。私にとっては５年間待ちに待った木里入りであった。酒井氏にはその後、５年連続してサマー・キャンプの隊長を努めてもらうことになる。チョモランマ隊には、ギャラ・ペリから橋本康弘、今村裕隆両君、ラプチェ・カン隊から田辺治君、初参加の石坂工君ら若手が参加し活躍したが、石坂君は残念なことに91年今村君率いるベルニナ隊でマカルーの登頂に成功後下山中に遭難死亡してしまった。

６月には、ネパールの最も人気の高い通称エヴェレスト街道のタンボチェにある僧院が全焼し、再建のための募金依頼が日本にも来て、ＪＡＣ、ＪＭＡ、日ネ、労山などと共同して活動した。このことが、90年のＨＡＴ－Ｊ創立や、93年のプラブーツ問題で所謂山岳４団体が協力する素地が築かれたのかもしれない。

1990年

ジリ貧のＥＸＰはサトパントとクラウンだけであった。３月にはＩＴＢＰのラオ総監夫妻を招請した。４月には初めて「中国登山の手引き」を発刊。この手のものは情報が新しくなければ価値が少ないので、版を重ねる事を課した。このため部数は100部とし、２年ごとに改訂版を出す事にした。手引きを作るのは楽しい。結果的にはあれもこれもと欲張り大冊となってしまった。

４月には田部井淳子さんの呼び掛けで、前述したように「ヒマラヤの山岳環境を汚染から守る」運動のための組織作りの呼び掛けがあり、度々ミーティングが持たれた。当初は東京で国際会議を開催する事が当面の主目的であったが、それを足場にして一つの組織を作ろうというものであった。10月にはＨＡＴ－Ｊの発足式を行い、各団体の長が名前を連ねることになり、遠藤会長にも何度かご足労願った。

５月には遠藤副会長に会長に就任していただくと共にＨＡＪの責任体制を理事長制度へと変更した。

夏には尾形君に再び資金プロジェクトを担当してもらい、ＮＨＫの岡田氏と共に北インドに行ってもらった。この辺境行きは思わぬ結果になった。

一つは、現地でＩＴＢＰのフカムシン氏とばったり出会い、氏から合同でシッキム側からカンチェンジュンガを登らないか、との誘いを受けたのである。国際電話でその話しを伝える尾形君の声を聞きながら、私は目まぐるしく頭を回転させ即決断し、その話しを受けて進めるように伝えた。ここは一番八木原君と共同歩調で進めようと思った。群馬では冬のサガルマータ南西壁挑戦の話しがあった。山田・三枝両君の遭難で若手の育成が急務であった時期なので、その舞台として知られざるカンチェンジュンガはピッタリであった。もう一つは我々には直接関係ないのであるが、後年ネパールのムスタン地区で「やらせのＮＨＫ」として話題になったのが岡田氏であったのである。

サトパントには保坂君に隊長になってもらった。この隊には50歳代の隊員が三人含まれていた。関根幸次・遠藤京子・平川宏子の三氏である。三人共見事に登頂に成功した。関根氏に副隊長をお願いしたが、現役を続ける氏はこれ以後もヌン、ムスターグ・アタ、ブロード・ピークなど高峰に挑み続けている。遠藤さんは84、85、87、88、90年と続けてＨＡＪのＥＸＰに参加されたが、現在はヒマラヤン・グリーンクラブの代表として活躍している。

クラウンは、85年に引き続いて舘野君が率いていたが、なんという不運、Ｃ１からＢＣへ下降中懸垂氷河が崩落し、85年も一緒であった菅沼勲医師と共に埋没してしまったのである。遺体は翌年仲間によって遭難場所にて発見された。秋でも雪のない場所なのである。私は傷心の橋本、二俣君たちを北京まで迎えに行った。

秋から年末にかけては、インド参りが続いた。カンチェンジュンガ合同登山と並行して、ブラマプトラ川を中国国境からバングラデシュ国境までＩＴＢＰと合同で下ろうという計画が進行していたためである。同行取材としてムツゴロウが行く。私は躊躇なく八木原君に出馬の要請を行った。彼にしかできない。パートナーは八嶋君。あちこちに当たって戦力として早稲田大学から上原和明・中谷敏夫・関口顕俊の三君に参加してもらった。経験のある登山とは違いボートからウエアーなど慣れないことが多かった。年末には何とか出発して行った。

財政は苦しい。何とかしたいということで、ナムチャ・バルワとギャラ・ペリのテレカをセットで作り販売した。また、ナムチャ・バルワについては政治ルートが効を奏したＪＡＣとＣＭＡが合同で挑戦することが発表されたので、ＨＡＪとしての取りまとめとして「神秘のグレート・ベンド　ナムチャ・バルワ」を発刊した。皮肉な事に、ＪＡＣ隊にはＮＨＫがつくことになり、84年チベットに一緒に行った東野良氏が派遣される事になった。以後中国における氏の活躍は素晴らしい。

再びカンチから

1991年

ブラマプトラの川下りは成功した。ブラマプトラの上流は中国領であり、ヤル・ツァンポ江と呼ばれている。その源流はナムナニの東に発し、ナムチャ・バルワの北東で大きく南流し、インド、アッサム平原へと流れ込む。二つの巨峰を登山し、大河ヤル・ツアンポ江～ブラマプトラを下りベンガル湾に至る。こう願ったのは1975年のことであった。ナムナニもナムチャ・バルワもヤル・ツァンポも見た。しかし、実現しているのは下流のインド内の川下りだけである。それにしても、八木原君をして初めて恐怖を抱いたというヘリコプターによらなければ入る事の出来ない中印国境に入れたというのは、大変なことだろう。

カンチェンジュンガ合同も登頂に成功した。10年前にネパール側から縦走を目指したが、発想の段階ではその舞台はシッキム側であったから、隊長の尾形君の感慨もまたひとしおであったと思う。この隊はインド側からの要請で女性を含めることになり、北川みはるさんと貝塚珠樹さんに参加してもらった。北川さんは88年に女子登攀クラブ隊でガッシャーブルムⅡに登頂していたが、95年正月に北アルプス穂高岳で遭難してしまった。貝塚さんは87年ＨＡＪ女性隊でヌンに登頂、89年シャラリに参加していた。カンチの後橋本君と一緒になり92年のアタ／クラウン隊にも参加した。

夏には、ヌンを中岡君に、シュエバオ・ディンを酒井氏に隊長をお願いし共に成功した。酒井隊

には私も中学２年になった息子と共に参加した。

秋には私がミニヤ・コンカへ行った。日本の登山界は高齢化と共に、既製ルートに集中する傾向が益々強くなっていく。その傾向が若手にまで及んでいる事実を見るのは寂しい限りだ。手つかずの未知の要素がある山に挑めば、充実した登山ができる。その足掛かりを作りたい、との思いである。副隊長には松舘君に来てもらった。八戸在住で何を話しているのかよく分からない言葉が多いが、人間性に溢れて若手に慕われている。年寄の少ない珍しい構成になったが、山塊構造も手伝って稜線に出た所で日数を余して下山した。得るところの多い登山だったと思う。

秋にはＩＴＢＰの代表団を招請し、全国を旅した。暮れには青海登山協会の代表団とも懇親し、また新たなる繋がりをもった。

1992年

ＨＡＪのＥＸＰには波がある。それは必ずしも周期化している訳ではない。波によってＨＡＪに出入りするメンバーにも変わってくる。特に月末に開かれる東京集会にその現象が現れる。費用を安く上げるには自前で料理をするのが手っ取り早い。何時の頃からか自然に役回りが決まって、黙っていても誰かが台所に立つ。足繁ぐ通っている内に突然姿を消す人もいる。人生に迷い酒を呑みヒマラヤの話しで明日を乗り切ろうとやって来る人もいた。気のおけないルームの良さがあった。

この年のＥＸＰは活気があった。春には福山佶君が88年に登頂断念したシンチンに向かい見事に初登頂を成し遂げた。福山君は83年カモシカ同人の冬のチョモランマでＢＣ担当だった。86年の雪宝頂組であるが、中国語が達者である。６月にはインドとの合同女性登山隊が寺沢さんに率いられて出発した。隊員はユニークな人ばかりであるが、寺沢さんの後輩である菅原愛里さんには、何時もヒマラヤの翻訳や賓客の相手としてサポートしてもらっている。インド側の隊長は女性で初めてエヴェレストを二度登る事になるサントシュさんである。隊は全員が初登頂して帰国した。

ヌンは今村君に率いられて、前年登頂できなかった関根氏に副隊長をお願いして出発した。登攀隊長にはラプチェ・カンで活躍した須藤圭一君に頼んだ。彼は登頂したカングルーやジチュ・ダケが６千メートル峰に引き下げられた経験を持つ。91年ミニヤ・コンカで悔しい思いをした森谷雅春君も参加した。登頂した中には、古関正雄・野沢井歩両君がいるが、今はＨＡＪの理事・常務理事として事務局の雑用を引き受けてもらっている。

私は積年の懸案事項であるクラウンに決着をつけるべく出発した。順応をムスターグ・アタで行うことにした。ここは次のサマー・キャンプの舞台と考えていたので、情報の収集も目的であった。共に登頂に失敗し、クラウンで二俣君を雪崩で失う結果となり、寒風すさぶアギール峠を降りた。

1993年

中印国境に聳えるニェギェ・カンサンは、残り少ない７千メートル峰としては近づき難い場所にあった。ＩＴＢＰとの合同の準備を進めていたが、やはり時期尚早であった。転進先はシッキムのピラミッド・ピークであった。尾形君を隊長に新郷氏、岩崎君ら気心の知れた仲間であっさりと初登頂して来た。ニェギェはインド隊に登られた。

夏のヌンは中川君に隊長をやってもらう事にした。登頂は出来なかった。中川君は90、91、92年と連続してヒマラヤに通い詰めていた。少々才走る面があり、それ以上に口が滑らか過ぎるところはあるが、勉強家でもある。クラウンでは二俣君と一緒に雪崩に遭い生還した。ＨＡＪの常務理事として事務局の一端を担ってもらっているが、現在は都岳連の海外委員長の役割も果している。

私は短期間のサマー・キャンプの新しい場所を求めて、青海省のユイチュに行った。ＨＡＪの古い会員である脇田康治君や全く新しい太田康夫君がいて二人が登頂した。太田君はその後もルンポ・カンリと97年のクーラ・カンリⅡに参加したが、研究熱心でとりわけ地形の解読に情熱を燃やしており、私が偵察したランタン・リルンやヤンラ・カンリの解明に力を貸してもらっている。ムスターグ・アタは酒井氏が隊長、副隊長に西嶋氏をお願いし、全員登頂を果した。

秋になり、登山者の命を守るプラスチック製登山靴が突然破壊するという報告が出た。労山の働

きかけでＪＭＡ、ＪＡＣと山岳４団体で懇談会を作り対応に当たった。労山、ＪＡＣ、ＨＡＪの持ち回りで会議が終わると、一杯入れながら登山界の様々な事柄について雑談した。深刻な問題であるが一部足並みの揃わなかった面もあったが、無理強いをせず一定の成果を上げたのであった。

インドのニルカンタでＨＡＪ会員の佐々木祐一君が隊長を務める隊が懸垂氷河の崩落によって６名が行方不明になった。佐々木君が何かあったらＨＡＪに連絡してくれ、と言ったとのことで対策本部からサポートの依頼があった。現地には寺沢さんにサポート行ってもらった。本部から派遣されて来たのが辻野治子さんで、これが縁で辻野さんは翌年のユイシュ隊のメンバーとなった。

秋には「カンチェンジュンガー西・東－」を発行した。81年ネパール側と91年インド側の登山報告を一冊にまとめたものであった。このような気持ちを「万感」というのであろうか。亀井・野中・藤倉・加藤・佐久間・渡辺・山田君らの顔が浮かんだり消えたりした。みんな49、50年の牛と虎年だった。角田君だったらどんな形に編集したか。そんな気持ちが胸に込み上げてしかたがなかった。この中で、私はもう一つやらなければならない事があった。それはヤルン・カンという巨峰の初登頂にかかわる問題である。既に角田君によって問題が提起され、彼の遺稿集の中に掲載されている。（残念ながら未刊）このことを隊長であった私が日の目を見せなければ彼に対して申し訳がないと思ったからである。この事は波紋を広げたが、ことは巨峰の初登頂のことである。事実は事実として指摘しておく義務があるだろう。

91年冬に群馬岳連は冬のサガルマータ南西壁に挑戦したが失敗した。今度は、秋のチョー・オユーで順応を終え冬の本番に備えた。尾形君が助っ人として今回も参加。ネパールは目まぐるしく登山規則を変えたため、八木原君は隊長の座に坐れず住吉仙也先生とトレッカーの形でＢＣで指揮をとった。隊長は91年ＨＡＪカンチで登頂した名塚秀二君。彼は90年チョゴリ北西壁を登り、カンチそして今回の成功と、山田君亡き後の日本のエースとなった。81年インドのスワロガロヒニ登山がヒマラヤのデビューであったが、その後は八千メートル峰にしか行っていない。この登山は、三次で６名の登頂者を出すパーフェクトの成功となった。

1994年

高田馬場最後の年となった。２月の大雪の日にヒマラヤン・ジャーナル編集長として活躍中のハリシュ・カパディア氏を招請してインド・ヒマラヤ会議を開催した。大変気さくな岳人だった。

４月には第一回の「高所登山　事故と環境対策研修会」を開催。ＳＳＦの補助金を受けた。５月には「ヒマラヤ登山　日本隊遭難の記録」を出版。６月にはチョモランマ中国側初登頂者である王富州氏が中国登山協会主席として来日、盛大な歓迎会を行った。

春には八嶋君が隊長で残り少なくなった未踏峰のルンポ・カンリに行った。少々心配したが登れなかったものの無事故で帰国した。夏には寺沢さん率いる女性合同隊がユイシュに登頂。サマー・キャンプのユイチュは酒井氏隊長で全員登頂。ムスターグ・アタは飛田君隊長でこれも全員が登頂した。しかし、私が率いたミニヤ・コンカでは、若い４名の隊員が行方不明となるという大事故となってしまった。付き合いが短かっただけにやり切れない思いが強い。帰国して家族の皆さんへの報告を行ったのは、３年前に急逝した土居君の命日の10月15日のことであった。

丸15年を過ごした高田馬場に別れを告げる事になったのは、ビルの建て替えのためであった。移転にまつわるゴタゴタをしたくないと思い交渉は簡潔にした。八木原君の繋がりで現在の事務所に決まったのは、ミニヤ・コンカに出発する直前の夏の暑い日のことであった。10月末には多くの会員の皆さんの手伝いとカンパにより滞りなく新事務所に移転することが出来た。新事務所に移転後、財政的な面から専従員を一名にすることとなり年内一杯で尾形君が事務局を離れた。

高田馬場の15年史は、ＨＡＪが長く続く限りこれからも語り継がれて行く事だろう。
（ＥＸＰを中心として、思い出すままに高田馬場15年を綴った。触れることのできなかった多くの支援者については、次の機会を待ちたいと思う。）

第Ⅱ部

35年の活動概要

昭和42年（1967年）

10月１日　日本ヒマラヤ山岳協会設立

昭和43年（1968年）１

１月　　ポカラ方面現地事情調査（柴田会長）
３月25日　エヴェレスト方面現地調査報告（アン・カジ・ラマ、松沢憲夫、宮原巍）
ネパール政府に対して「Tentative Plan for Tourist Resort at Khumbu」と題する宿泊施設の建設計画を提出。
４月　　ヒマラヤ通信第１号発行（Ｂ６判縦　12頁）
７月　　ヒマラヤ通信第２号発行（Ｂ６判縦　12頁）
８月　　東京、大阪で「ヒマラヤの旅」打ち合わせ会。
10月19日　「第１回ヒマラヤの旅」24名出発（ネパール、エヴェレスト＆アンナプルナ方面）
12月１日　　「第１回ヒマラヤの旅」報告会（名古屋市、グリル・ベル　24名）
昭和43年度総会（名古屋市、名城大学校友会館　24名＋委任状56名、翌年度から終身会費を2500円－但し夫婦会費3000円－を決定）

昭和44年（1969年）２

２月12日　ヒマラヤ通信第３号発行（Ｂ６判縦　30頁）
３月１日　理事会（名古屋市今池、新理事に宮原巍、B.ランジャン）
15日　ヒマラヤ通信第４号発行（Ｂ６判縦　32頁）
４月　　東京、名古屋、大阪で「ヒマラヤの旅」打ち合わせ会
５月14日　　ネパール、インドラ・マン・セルチャン氏を招請し来日。
歓迎会は25日大阪（12名）、26日福岡（23名）、31日名古屋（19名）、６月３日浜松（12名）、９日東京（22名）で開催。10日帰国。
17日　ヒマラヤ通信第５号発行（Ｂ６判縦　８頁）
６月25日　ヒマラヤン・ライブラリー１　「ネパール王国旅行案内」発行
７月　　ヒマラヤ通信第６号発行（Ｂ６判縦 28頁）
28日　「第２回ヒマラヤの旅」ヒンズー・クシュ 踏査隊出発。（橋本広隊長以下５名）
８月26日　　「ヒマラヤ映画とヒマラヤを語る会」（札幌日赤会館、11名他）
10月３日　理事会（名古屋市）
10日～12日　　「ヒマラヤの旅」打ち合わせ会兼親睦登山。中ア駒ヶ岳、（31名）
ヒマラヤ通信第７号発行（Ｂ６判縦　20頁）
11月５日　緊急理事会（名古屋市）
26日　　「ヒマラヤを語る会」大阪、共済会館　３名
12月27日　第３回「ヒマラヤの旅」出発、16名（ネパール、エヴェレスト＆アンナプルナ等）

昭和45年（1970年） 3

1月　ヒマラヤ通信第8号発行（B6判縦　24頁）
2月28日　総会（名古屋市、愛知県青年会館、38名）
3月　ヒマラヤ通信第9号発行（B6判縦　20頁）
紹介カードの発行
4月　ヒマラヤ通信第10号発行（B6判縦　32頁）
東京事務所オープン（中央区日本橋浜町2-57東京ABC社内）
会員名簿発行（350名）
6月　ヒマラヤ通信第11号発行（B6判縦　36頁）
25日　ヒマラヤン・ライブラリー2　「カトマンズとその周辺」発行
7月　「第4回ヒマラヤの旅」出発。中京山岳会・名城大学合同ミール・サミール隊（半田重雄隊長以下5名）後援。8月21日帰国。
「ヒマラヤの絵ざら」販売
25日　総会（大阪市電電公社江川寮、27名）
8月1日　ヒマラヤン・ライブラリー3「エベレストの麓へ」発行。
25日　「ヒマラヤを語る会」札幌市サッポロビヤホール、22名
9月　ヒマラヤ通信第12号発行（B6判縦　36頁）
23日　「ヒマラヤを語る会」（キラン・マン・セルチャン君を囲んで）名古屋市愛知青年会館、19名。
理事会（名古屋市愛知青年会館）
10月3日　「ヒマラヤを語る会（JACエベレスト隊他）」東京中央区立体育館、34名
ヒマラヤ通信第13号発行(B6判縦　24頁)
12月　ヒマラヤ通信第14号発行（B6判縦　42頁）
14日　「ヒマラヤ集会」札幌市市民会館、17名
27日　「第5回ヒマラヤの旅」出発。（ネパール、ゴサインクンド、ダウラギリ方面）10名。

昭和46年（1971年） 4

1月30日　理事会（名古屋市）入会金2500円（夫婦会員3000円）、年会費2000円。
ヒマラヤ通信第15号発行（B 6判縦　56頁）
2月 8日　「ヒマラヤ集会」京都市、京都ホテル 9名。
3月　ヒマラヤ通信第16号発行（B 6判縦　52頁）
16日　「ヒマラヤ集会」札幌市労農会館、23名
26日　「ヒマラヤ集会」名古屋市日新航空名古屋営業所、21名
28日　「ヒマヤラ集会」大阪市うつぼ公園内スポーツマンクラブ、22名。
4月 8日　総会（東京都中央区総合体育館）35名。
ブータン研究会、カシミール・ラダック研究会発足。
ヒマラヤ通信第17号（B 6版縦　32頁　深田久弥先生追悼）
東京都山岳連盟に加盟。
10日　「ネパール卓球団歓送会」名古屋市スカイラウンジ、34名。
5月 1日　「ヒマラヤ集会」盛岡市岩手大学ホール、17名。
2日　「ヒマラヤ集会」秋田市大平山神社、17名。
5日　「ヒマラヤ集会」札幌市労農会館、11名。
ヒマラヤ通信第18号発行（B 6判縦　30頁）
6月 5日～6日　第 1回東北地区ヒマラヤ研究会（仙台市公会堂、35名）
ヒマラヤ通信第19号発行（B 6判縦　46頁　この号でB 6判は最後となる）
28日　「ヒマラヤ集会」札幌市労農会館、24名。
7月 4日　「キラン君送別会」名古屋市香取旅館、37名。 8日東京「博雅」、13名。
理事会（名古屋市）旅費と慶弔規定細則決定。
23日　「第 6回ヒマラヤの旅」出発。カシミール登山隊（空昌昭隊長以下 4名） 8月19日帰国。
8月25日　ヒマラヤ20号発行（B 5判32頁、以後各月発行となる。）
9月24日～26日　「富士山ヒマラヤ集会」河口湖ロッジ、74名。
11月25日　ヒマラヤ研究 I「第 1回東北地区ヒマラヤ研究会報告」発行。
12月 4日　「ヒマラヤ集会」名古屋市ホテル・ニューナゴヤ、11名。
7日　「ヒマラヤ集会」東京事務所、30名。
10日　「ヒマラヤ集会」大阪市近畿電電会館、10名。
26日　「第 7回ヒマラヤの旅」出発。（ネパール）90名。

昭和47年（1972年） 5

2月7日　インド、マナリとダージリンに連絡事務所を開設。
3日　東京定例ヒマラヤ集会、37名。（毎月第一木曜日夜、東京事務所か中央区立体育館で開催することになったので以後省略）
25日　第7回北海道ヒマラヤ集会、札幌市労農会館、27名
3月20日　「カシミールの山　カシミール・ヒマラヤ登山隊報告」発行。
25日　チベット研究会発足。
25日、28日～29日　「ヒマラヤ写真展」東京都中央区立体育館
26日　理事会＆総会（中央区立体育館、47名）
5月18日　「ヒマラヤ集会」名古屋市天王会館、17名。
6月15日　「ヒマラヤ集会」名古屋市名城大学校友会館、42名。
17日～18日　第2回東北地区ヒマラヤ研究会（盛岡市自治会館、73名）
20日　第8回北海道ヒマラヤ集会、札幌市雪印パーラー、19名。
7月1日　ヒマラヤ研究Ⅱ「トレッキングの全て」発行。
13日　「ヒマラヤ集会」名古屋市名城大学校友会館、25名。
8月1日　ヒマラヤ研究Ⅲ「ネパール・ヒマラヤトレッキング」発行。
19～20日　「ヒマラヤ集会」宇都宮市みくら山会館、11名。
9月12日　「ヒマラヤ集会」札幌市北光教会、17名。
23日～24日　「長野ヒマラヤ研究会」大町市長野県山岳総合センター、47名。
23日　理事会＆総会（大町市山岳総合センター）
29日　「ヒマラヤ集会」酒田市佐藤守利氏宅、20名。
10月1日　ヒマラヤ研究Ⅳ「第2回東北ヒマラヤ研究会報告」発行。
12日　「ヒマラヤ集会」名古屋市名城大学校友会館、20名。
13日　「ヒマラヤ集会」大阪市近畿電電会館、20名。
14日　「ヒマラヤ集会」広島市せとうち苑、30名。
15日　「ヒマラヤ集会」福岡市西鉄労働会館、16名。
小遠征研究会発足。
11月4日～5日　「ヒマラヤ集会」天童市出羽路荘、50名。
28日　ヒマラヤ研究Ⅴ「ブータン研究」発行。
12月4日　「ヒマラヤ集会」札幌市市民会館、18名。
14日　「ヒマラヤ集会」名古屋市名城大学、18名。

昭和48年（1973年） 6

1月25日　「ヒマラヤ集会」名古屋市名城大学友会館、19名。
27日～28日　第11回北海道ヒマラヤ集会。札幌市定山渓無意根山荘、18名。
2月8日　「ヒマラヤ集会」名古屋市インド航空、5名。
3月2日　「カンジロバ遠征隊を送る会」札幌市アカシアホテル、65名。
8日　「ヒマラヤ集会」名古屋市ニューナゴヤ、20名。
10日　「ヒマラヤ集会」富山市金剛化学福祉会館、17名。
11日　ネパール、カンジェラルワ隊出発。（渡辺文仁隊長以下6名）
15日　「ビスタリ・クラブ」発足。集会、犬山市、13名。
31日　シェルパ・リスト発行
4月1日　「ランタン谷　ランタン・ヒマール冬期踏査報告」発行。
12日　総会、名古屋市愛知会館、22名。
5月14日　「ヒマラヤ集会」名古屋市インド航空、10名。
9日～10日　第3回東北ヒマラヤ研究会（天童市出羽路荘・農業会館、80名。）
6月22日　「ヒマラヤ集会」長良川、11名。
7月12日　「ヒマラヤ集会」名古屋市インド航空（ＡＩ）、8名。
14日～15日　「ＨＡＡＪ長野研究会」諏訪市、
「インド・ヒマラヤ講演と映画の会」M.S.コーリー氏
9月15日　富山県文部省登山研修所（富山ヒラヤマ集会を兼ねる）、76名。
17日　名古屋市中小企業センター
18日　東京、科学技術館・サイエンスホール
19日　宇都宮市栃木会館
20日　「カンジロバ遠征隊仮報告書」発行。
28日　カシミール・ツアー隊（空昌昭団長）出発。
9月1日　ヒマラヤ研究Ⅶ「チベット・ラダック研究」発行。
12日　ラダック・ガルワール踏査隊（冲允人隊長以下5名）出発。
22日　「ヒマラヤ集会」広島市東洋工業労働組合会館、21名。
24日　「ヒマラヤ集会」熊本市福祉会館、25名。
28日　第13回北海道ヒマラヤ集会、北光教会、14名。
12月10日　ヒマラヤ研究Ⅷ「第3回東北ヒマラヤ研究会報告」発行。

昭和49年（1974年） 7

1月26日～27日　　長野ヒマラヤ研究会、
28日　　「北海道ヒマラヤ集会」札幌市電電会館、23名。
2月18日　　「北海道ヒマラヤ集会」札幌市電電会館、18名。
3月31日　総会、東京京橋会館、31名。
6月2～3日　　第4回東北ヒマラヤ研究会（福島県飯坂温泉あずま荘、126名）
7月31日　ネパール、ラムジュン・ヒマール遠征隊（山倉洋一隊長以下6名）出発。
10月1日　ヒマラヤ研究IX「EXPEDITION　I」発行。
12日～13日　　「ヒマラヤ集会」木曽　50名。
11月30日～12月1日　　「ヒマラヤ集会」八戸市商工会館、100名。
12月14日　「晩餐会」東京都郵便貯金会館、

昭和50年（1975年） 8

1月　　ニューデリー事務所開設。
3月30日　　「ヒマラヤ集会」大阪府山岳連盟事務所、12名。
31日　　「ヒマラヤ集会」広島市ＡＩ、17名。
4月1日　　「ヒマラヤ集会」福岡市電電会館、13名。機関紙「ヒマラヤ」月刊となる。
12日　総会、名古屋市郵便貯金会館、20名。
年会費4000円となる。
26日　　カシミール・ラダック写真展、小山市長崎屋。
5月15日　ヒマラヤン・ライブラリー4　「カシミールの街と山」発行。
6月8日～9日　　第5回東北ヒマラヤ研究会（青森県八戸市よねくら）、72名。
13日　　「ヒマラヤ集会」名古屋市地産ビル、7名。
28日　　「ヒマラヤ集会」京都くじ荘、31名。
7月17日　インド、カシミール・ヒマラヤ遠征隊（西郡光昭隊長以下7名）出発。
8月1日　ヒマラヤン・ライブラリー6「小チベット、ラダック」発行。
7日　インド、ガルワール・ヒマラヤ遠征隊（清水澄隊長以下7名）出発。
8日　　「ヒマラヤ集会」名古屋市、10名。
9月12日　　「ヒマラヤ集会」名古屋市、地産ビル、10名。
10月10日～12日　　秋の総会兼親睦登山。岐阜県白川郷＆白山、39名。
11月1日　ヒマラヤン・ライブラリー7「ネパールへの旅」発行。
ヒマラヤ研究X「ヒマラヤを歩き、そして登るために」発行。
4日　　「ヒマラヤ集会」名古屋市、18名。

昭和51年（1976年） 9

1月　　東京事務所開設。（中野区中央3-4-18沢本ビル）
2月27日　　インド・ヒマラヤ登山隊帰国報告会、東京郵便貯金会館、71名。
3月1日　「1975年ＨＡＡＪ　インド・ヒマラヤ帰国報告書」発行。
4月4日　総会、東京事務所、19名。15周年事業（ヒマラヤとシルクロード大作戦）
名称の変更。新名称「日本ヒマラヤ協会」法人設立準備。
第5回ＨＡＪヒマラヤ遠征委員会、東京、シェール・プール、7名。
9日　　「ヒマラヤ集会」名古屋市ＡＩ、17名。
25日　　「ヒマラヤ集会」鈴鹿御池岳山行、21名。
5月11日　　「ヒマラヤ集会」名古屋市ＡＩ、13名。
6月11日　　「ヒマラヤ集会」名古屋市ＡＩ、15名。
26日～27日　　第6回東北ヒマラヤ研究会（栃木県宇都宮市くろかみ荘）、90名。
7月9日　　「ヒマラヤ集会」名古屋市ＡＩ、13名。
8月3日～4日　　「ヒマラヤ集会」御岳山行、6名。
9月18日～19日　　「ヒマラヤ集会」
10月9日　理事会、長野県原村樅の木荘、6名。
9日～11日　　秋のヒマラヤ集会、八ケ岳、12名。
10日　「カンジロバ・ヒマール遠征報告書」発行。
11月7日　第1回Ｈ＆Ｓ準備委員会、名古屋市名城大学工学部、5名。
10日　ヒマラヤ研究XI「インド・ヒマラヤのすべて」発行。
12日　　「ヒマラヤ集会」名古屋市、14名。
28日　　「ヒマラヤ集会」日本ケ塚山山行、7名。
12月　　ヒマラヤ地図研究会発足。

昭和52年（1977年）10

2月4日　「ヒマラヤ集会」名古屋市、20名。
26日～27日　第2回H＆S準備委員会、東京世田谷、5名。
3月1日　「バダクシャンからヌーリスタンへ」発行。
20日　「シェルパの履歴書」発行。
4月8日　「ヒマラヤ集会」東京トラベル日本、13名。
9日　「ヒマラヤ集会」岐阜市南市民会館、16名。
25日　「ヒマラヤ集会」札幌市婦人文化会館、
5月27日　「ヒマラヤ集会」名古屋市ＡＩ、17名。
6月6日　「ヒマラヤ集会」札幌市研修会館、
12日～13日　「ヒマラヤ集会・海の幸を食らう会」気仙沼市吹上荘。
23日　「ヒマラヤ集会」東京新国際ビル、12名。
25日　ヒマラヤン・ライブラリー8「中央アジア・シルクロード」発行。
25日～26日　第7回東北ヒマラヤ研究会（秋田県秋田市協同社ビル）、45名。
7月8日　「ヒマラヤ集会」岐阜市佐々木宅＆抜戸岳～笠ケ岳山行、20名。
「ヒマラヤの彼方へ」講演と映画の会。ジョギンダール・シン氏＆水野勉氏。
7月24日　名古屋市名銀ホール
25日　小山市清芳幼稚園大ホール
26日　郡山市公会堂
27日　八戸市商工会館
30日　帯広市勤労福祉センター
31日　旭川市市民文化会館
8月1日　札幌市北海道新聞社ホール
3日　東京日本交通協会会議室
18日　パミール登山隊（増田秀穂隊長以下3名とアライ谷班2名）出発。
9月9日　「ヒマラヤ集会」名古屋市ＡＩ、11名。
10月23日　「ヒマラヤ集会」能郷白山山行、11名。
11月26日　理事会、H＆S委員会、城陽市内田宅、9名。
27日　総会、城陽市内田宅、15名。法人化委員会発足。カンチェンジュンガ計画承認。
12月3日　「ヒマラヤ集会」諏訪郡原村田中ペンション、12名。
4日　「ヒマラヤ集会」東京トラベル・ジャパン、20名。
9日　「ヒマラヤ集会」名古屋市ＡＩ、15名。
20日　「パミール・山と高原」発行。

昭和53年（1978年）11

1月22日　常任理事会、東京うづら荘、７名。
2月２日　理事会、東京お茶の水ウィーン、８名。
６日　「ヒマラヤ集会」札幌婦人文化会館、
10日　ヒマラヤ研究XII「EXPEDITION Ⅱ」発行。
17日　「ヒマラヤ集会」名古屋市ニューナゴヤ、14名。
19日　「ヒマラヤ集会」東京渋谷区フミネM、32名。
24日　「ヒマラヤ集会」京都市超勝寺、12名。
3月10日　「ヒマラヤ集会」名古屋市ＡＩ、11名。
20日　「ヒマラヤ集会」東京連絡所、14名。
4月１日　東京事務所開設（渋谷区本町１-29-４堀内立三方）
東京連絡所開設（千代田区外神田５-６-３アド社内）
「カシミールの盟主ヌン7135m」発行。
７日　バトゥーラIII峰登山隊（西郡光昭隊長以下10名）出発。
10日　「ヒマラヤ集会」札幌婦人文化会館、
20日　「ヒマラヤ集会」東京連絡所、13名。
21日　「ヒマラヤ集会」名古屋市好日山荘、11名。
23日　奥美濃・金糞岳山行、14名。
5月７日　理事会、東京連絡所、10名。
19日　理事会、Ｈ＆Ｓ委員会、岩手県沢内村、３名。
20日～21日　第８回東北ヒマラヤ研究会（岩手県沢内村開発センター）、47名。
20日　「ヒマラヤ集会」東京連絡所、12名。
6月20日　「ヒマラヤ集会」東京連絡所、13名。
26日　「ヒマラヤ集会」札幌ちとせつる、
8月４日　ヌン登山学校隊（沖允人隊長以下９名）出発。
9月10日　トリスル登山学校隊（稲田定重隊長以下19名）出発。
10月14日　「ヒマラヤ集会・ヌン報告」名古屋市千種会館、40名。
「ヒマラヤ集会」高崎市シャモニー、
29日　総会、東京家の光ビル、37名。任意団体日本ヒマラヤ協会通常総会。
社団法人日本ヒマラヤ協会設立総会。新体制のスタート。
事務所を名古屋から東京へ移転（江戸川区西葛西５-８-４-1216山森方）
12月９日～10日　「ヒマラヤ集会」酒田市西浜海岸ホテル、37名。
23日　常務理事会、東京銀杏荘、５名。

昭和54年（1979年）12

1月20日　「ヒマラヤ集会」仙台市市役所研修室、25名。
「ヒマラヤ集会」福井市芦原温泉降泉荘、11名。
21日　「ヒマラヤ集会」札幌市婦人会館、20名。
2月18日　「ヒマラヤ集会」広島市中国新聞社会議室、13名。
19日　「ヒマラヤ集会」大阪市チサン・ホテル、21名。
20日　「ヒマラヤ集会」酒田市労山事務所、28名。
21日　「トリスル28日間」発行。
3月31日　理事会、東京全特会館、9名。
4月1日　「森田勇造氏講演会」東京都勤労福祉会館、72名。
総会、東京都勤労福祉会館、25名（委任状260名）夫婦会員制度。
評議員会、東京連絡所、11名。
機関紙「ヒマラヤ」新装発行（編集長・角田不二常務理事）
8日　「ヒマラヤ集会」水戸市婦人会館、28名。
5月26日　「ヒマラヤ集会」福島市あづま荘、24名。
8月5日　「S. R. シャルマ氏歓迎会」東京都勤労福祉会館、27名。
6日　「第1回ネパール・ヒマラヤ研究会」札幌市婦人会館、
8日　「第2回ネパール・ヒマラヤ研究会」仙台市都市センター
11日　「第3回ネパール・ヒマラヤ研究会」福岡市はかた会館
12日　「第4回ネパール・ヒマラヤ研究会」大阪府立青少年会館
14日　「第5回ネパール・ヒマラヤ研究会」東京都勤労福祉会館
17日　「S. R. シャルマ氏サヨナラ・パーティー」東京つな八、12名。
9月9日　「ヒマラヤ集会」京都市、5名。
16日　キャシードラル登山学校隊（山倉洋一隊長以下13名）出発。
22日～24日　「秋のヒマラヤ集会」富士山、18名。
25日　会章決定（制作者：山形県、斉藤豊会員）
10月21日　稲田定重専務理事、インド側の招待によりガンゴトリ山群視察に出発。
27日　「登山学校報告会」東京都勤労福祉会館、18名。
11月1日　新事務所開設（新宿区高田馬場3-23-1淀橋食糧ビル506号）
山森欣一常務理事が事務局長として専従。
12月8日～9日　「第1回日本ヒマラヤ会議」山形市あこや会館、39名。
21日　機関紙「ヒマラヤ」100号記念座談会、ルーム、6名。
22日　常務理事会、ルーム、4名。
30日　ネパール、セミナー・トレッキング隊（岩水竜峰隊長以下21名）出発。

2月16日　「カンチェンジュンガ偵察隊壮行会」東京海洋会館、50名。
17日　「ヒマラヤ集会」名古屋市中小企業センター、25名。
27日　「ヒマラヤ集会」広島市ＲＣＣ文化センター、
24日　「第２回日本ヒマラヤ会議」京都市農協会館、47名。
3月１日　ヒマラヤ100号発行。
カンチェンジュンガ偵察隊（山森欣一隊長以下７名）出発。
９日　「第３回日本ヒマラヤ会議」札幌市中央競馬会場外センター、48名。
16日　「ジョギンダール・シン氏歓迎会」東京都勤労福祉会館、
「インド・ヒマラヤ集会」
3月17日　仙台市宮城県婦人会館、28名。
18日　宇都宮市栃木県青年会館、31名。
20日　名古屋市愛知県中小企業センター、28名。
21日「ヒマラヤ集会」大阪市府青年会館、26名。
23日　「第１回インド・ヒマラヤ会議」東京ＡＩ、32名。
「ジョギンダール・シン氏サヨナラ・パーティ」、東京都
4月20日　総会、東京岸記念体育館、31名（委任状339名）
年会費6000円となる。
「セミナー・トレッキング報告会」東京岸記念体育館、
24日　「東京ヒマラヤ定例集会」以後毎月ルームにて開催。
6月７日　「野田衛氏講演会」東京
24日　「ヒマラヤ集会」名古屋市
7月６日　「第４回日本ヒマラヤ会議」仙台市共済会館、48名。
8月１日　文部省へ法人設立許可申請書提出。
「高所登山懇談会」ルーム、５名。
9月13日　ケダルナート登山学校隊（尾形好雄隊長以下20名）出発。
10月25日　「第５回日本ヒマラヤ会議」高知市、32名。
26日　「第６回日本ヒマラヤ会議」福岡市電気ビル、38名。
27日　「ヒマラヤ集会」長崎市
11月２日～３日　「第７回日本ヒマラヤ会議」前橋市、70名。
16日　「第８回日本ヒマラヤ会議」大町市長野県山岳総合センター、31名。
27日　「登山学校報告会」東京都勤労福祉会館、60名。
29日　「ヒマラヤ集会」小山市
12月６日　「ヒマラヤ集会」水戸市

昭和56年（1981年）14

1月20日　「日本ヒマラヤ協会年報　I」発行。
29日　「カンチェンジュンガ隊壮行会」東京、東方会館、
「ザンスカール山群中央部踏査報告」発行。
2月14日　カンチェンンジュンガ隊（山森欣一隊長以下22名）出発。
3月29日　「ヒマラヤ集会」水戸市
4月5日　「第9回日本ヒマラヤ会議」札幌市社会教育センター、35名。
8日　カンチェンジュンガ学術隊（五百沢智也隊長以下4名）出発。
5月17日　理事会、ルーム、6名。
総会、東京アジア会館、17名。（委任状297名）
6月13日　「第10回日本ヒマラヤ会議」秋田・田沢湖、25名。
7月18日　「ネパール・ヒマラヤ研究会」東京海洋会館、
「S. R. シャルマ氏歓迎会」東京、
19日　「第11回日本ヒマラヤ会議」京都伝統会館、18名。
11日　理事会、ルーム、6名。
31日　「日本カンチェンジュンガ学術遠征報告」発行。
8月17日　「ランタン・リ登山隊壮行会」長井市、
23日　「第12回日本ヒマラヤ会議」仙台市郵便貯金会館、35名。
25日　「H. C. サリーン氏歓迎会」東京ライオン、
28日　「H. C. サリーン氏サヨナラ・パーティ」東京、天国、
30日　ランタン・リ登山隊（植松秀之隊長以下7名）出発。
9月11日　ナンダ・カート登山学校隊（小島守夫隊長以下8名）出発。
28日　ナンダ・カート隊遭難、7名 行方不明となる。
30日　「カンチェンジュンガ報告会」東京都勤労福祉会館、
10月25日　ナンダ・カート捜索隊（菊地薫隊長以下14名）出発。
11月7日　カンチェンジュンガ第二次学術隊（五百沢智也隊長以下2名）出発。
28日～29日　「第13回日本ヒマラヤ会議兼第2回インド・ヒマラヤ会議」前橋市新花茶屋、
12月5日　「第14回日本ヒマラヤ会議」高知市高知会館、32名。
6日　「ヒマラヤ集会」広島市甘党の店、12名。
7日　「ヒマラヤ集会」長崎市交通会館、10名。
20日　「ナンダ・カート捜索報告会＆追悼会」東京岸記念体育館、

昭和57年（1982年）15

1月9日～10日　「第3回インド・ヒマラヤ会議」東京都勤労福祉会館、30名。
10日　「ヒマラヤ登山　やること、やるべきではないこと」発行。
20日　「インド・ヒマラヤの手引き」発行。
尾形好雄常務理事専従。機関誌編集長に就任。
2月21日　「第15回日本ヒマラヤ会議」札幌市西区区民センター、30名。
24日　「ＮＭＡ　ナルシン・プラダハン氏歓迎会」東京新宿聚楽、20名。
3月14日　「第16回日本ヒマラヤ会議」福岡市、28名。
19日　理事会、ルーム、7名。
4月16日　「ブリクティ登山隊壮行会」東京、赤坂鮨勝、
17日　ブリクティ登山隊（菊地薫隊長以下9名）出発。
5月5日　「ヒマラヤ、そして仲間たちへ」発行。
30日　総会、東京都勤労福祉会館、25名。（委任状241名）
ヒマラヤ登山実践研究会発足。
7月10日　「クン登山学校壮行会」東京、東方会館、70名。
16日　「ブータンを語る夕べ」ルーム、18名。
23日　カラコルム・セミナートレッキング隊（小林英見隊長以下6名）出発。
25日　クン登山学校隊（山森欣一隊長以下17名）出発。
8月9日　クン隊で勝山教孝隊員が落石のため死亡。
9月25日　ナンダ・カートＢＣ訪問団（小島守夫団長以下2名）出発。
10月10日　稲田定重専務理事第44回ＵＩＡＡ総会に招待され、カトマンズへ出発。
15日　「ヒマラヤ集会」広島市ＲＣＣ文化センター、
16日～17日　「第17回日本ヒマラヤ会議」高知市、20名。
11月8日　「冬季マナスル登山隊壮行会」東京タム・タム、30名。
10日　「冬季マナスル登山隊（山田昇隊長以下10名）出発。
12月5日　「ヒマラヤ集会」酒田市文化会館、42名。
18日　冬季マナスル登山隊の佐久間隊員が滑落死亡。
20日　「ナンダ・カート1981　登山・事故・捜索・追悼」発行。

昭和58年（1983年）16

1月8日～9日　「第4回インド・ヒマラヤ会議」東京都勤労福祉会館、36名。
2月20日　「佐久間隆追悼集会」東京、
24日　「ニドップ・ドルジェ氏歓迎会」東京、
26日　「第1回ブータン・ヒマラヤ研究会」札幌市、
27日　「第2回ブータン・ヒマラヤ研究会」名古屋市、
「クン・南面」発行。
3月1日　「第3回ブータン・ヒマラヤ研究会」東京、36名。
4日　「ニドップ・ドルジェ氏サヨナラ・パーティ」東京、銀座、
5日　ネパール山岳博物館協議（於、ＪＡＣ）
7日　第1次訪中団（稲田定重団長以下2名）出発。
31日　「日本ヒマラヤ協会年報 Ⅱ」発行。
4月15日　理事会、ルーム、5名。
20日　女性ブータン・トレッキング隊（黒石恒隊長以下7名）出発。
尾形好雄常務理事関連事業協議のためカトマンズへ出発。
27日　北海道・ブータン遠征隊（京極紘一隊長以下7名）出発。
5月22日　総会、東京都勤労福祉会館、24名（委任状218名）
6月11日～12日　「第18回日本ヒマラヤ会議」宇都宮市、13名。
15日　第2次訪中団（稲田定重団長以下2名）出発。
7月2日　「ヌン登山隊壮行会」東京大飯店、54名。
24日　ヌン登山隊（飛田和夫隊長以下7名）出発。
31日　「第1回中国登山研究会」東京龍生堂ビル、70名。
「中国登山協会代表団歓迎会」東京池袋、28名。
8月2日　「第2回中国登山研究会」札幌市、80名。
20日　稲田定重専務理事、インド、ブータンへ出発。
27日　インド登山財団創立25周年記念で稲田専務理事が講演。
9月21日　ネパール山岳博物館協議（於、ＪＡＣ）
23日　スークーニャン隊（角田不二隊長以下3名・同行取材5名）出発。
28日　ブータン偵察隊（戸谷薫隊長以下2名）出発。
10月1日　「烈風の彼方へ」発行。
9日　中国ナムチャ・バルワ隊岩登り技術指導（角田不二／吉田憲司）
26日　ブータン人登山研修生2名受け入れ来日。（タシ・ツェリン／パサン・ツェリン）
12月21日まで滞在。
12月4日　「第19回日本ヒマラヤ会議」仙台市、

昭和59年（1984年）17

1月1日　「ヌン登頂」発行。
7日～8日　「第5回インド・ヒマラヤ会議」東京都勤労福祉会館、36名。
10日　「北アルプス剣岳八ッ峰救援本部」設置。（ナンガ・パルバット登山隊合宿チーム）
28日　稲田定重専務理事訪印。
2月13日　「第1回カラコルム研究会」東京海洋会館、45名。
「ムニュール・デン氏歓迎会」東京海洋会館、46名。
15日　「第2回カラコルム研究会」京都、25名。
16日　「ペンバ・ノルブ&ナワン・ヨンデン両氏歓迎会」東京新宿、21名。
23日～24日　常務理事会、5名。
3月13日　山森欣一常務理事訪中
17日　「雲南隊壮行会」東京高田馬場、21名。
4月1日　雲南登山隊（飛田和夫隊長以下4名・同行取材7名）出発。
14日　理事会、ルーム、8名。
「ＨＡＪ合同壮行会」東京海洋会館、120名。
25日　ジチュ・ダケ登山隊（八木原圀明隊長以下9名）出発。
5月18日　ナンガ・パルバット隊（角田不二隊長以下4名）出発。
19日　拡大理事会、ルーム、9名。
総会、東京龍生堂ビル、17名（委任状213名）
副会長に遠藤登氏就任。
25日　稲田定重専務理事訪中。
6月25日　ナムナニ偵察隊（山森欣一隊長以下4名・同行取材4名）出発。
7月1日　「プラチャンド・マン・シュレスタ氏歓迎会」東京、
「第6回ネパール・ヒマラヤ研究会」東京
4日　「第7回ネパール・ヒマラヤ研究会」仙台
18日　阿部淳理事「第2回ヒマラヤ登山観光会議」出席のため訪印。
23日　ナンガ・パルバット隊事故第一報入る。角田隊長以下4名全員行方不明となる。
27日　スークーニャン・トレッキング隊（小林英見隊長以下6名）出発。
28日　マモストン・カンリ登山隊（尾形好雄隊長以下5名）出発。
8月11日　ナンガ・パルバット捜索隊（片岡邦夫隊長以下2名）出発。
10月1日　「ナンガ・パルバット合同追悼会」東京岸記念体育館、
28日　稲田定重専務理事、山森欣一常務理事訪中。
12月1日　「ヒマラヤ集会」名古屋市名城大学校友会館、13名。
14日　稲田定重専務理事、尾形好雄常務理事訪中。

昭和60年（1985年）18

1月12日～13日　「第６回インド・ヒマラヤ会議」東京都勤労福祉館、45名。
2月６日　第２次ブータン登山研修生受け入れ。（イシ・ウォンチェック／ジョチェ・ドルジェ）
（２月６日～３月23日まで）
4月13日　「Ｋ２登山隊壮行会」東京東方会館、160名。
18日　稲田定重専務理事、八木原圀明常務理事、舘野秀夫会員訪中。
5月11日　理事会、大正セントラルホテル、８名。
総会、大正セントラルホテル、14名（委任状226名）
12日　沖允人会員「第３回ヒマラヤ登山観光会議」出席のため訪印。
20日　Ｋ２登山隊（飛田和夫隊長以下16名）出発。
「黄河源流探検隊壮行会」東京日本橋精養軒、70名。
23日　黄河源流探検隊（八木原圀明隊長以下６名・同行取材11名）出発。
6月30日　稲田定重専務理事、山森欣一常務理事訪中。
7月１日　ナンガ・パルバットＢＣ訪問団（土居正勝団長以下11名）出発。
「千人の悪魔」発行。
13日　「合同壮行会」東京東方会館、180名。
14日　東部カラコルム日印合同登山隊（沖允人隊長以下５名）出発。
26日　日中婦人友好登山隊（中根千枝総隊長以下８名）出発。
8月２日　中ネ辺境踏査隊（中江啓介隊長以下７名）出発。
14日　ガンカル・プンスム登山隊（大内倫文隊長以下10名）出発。
16日　クラウン登山隊（舘野秀夫隊長以下11名）出発。
9月５日　稲田定重専務理事訪中。
10日　ギャラ・ペリ偵察隊（山森欣一隊長以下２名）出発。
15日　「日中婦人友好登山隊報告会」東京私学会館。
12月９日　「ガンカル・プンスム登山報告書」発行。
19日　稲田定重専務理事、山森欣一常務理事訪中。
25日　「ギャラ・ペリ偵察報告」発行。

1月11日　「N．D．ジャヤール氏歓迎会」東京、高田馬場、9名。
11日～12日　「第7回インド・ヒマラヤ会議」東京、目黒さつき会館、41名。
2月28日　「四川省登山協会代表団歓迎会」東京、
3月2日　「第3回中国登山研究会」東京、大正セントラルホテル、36名。
6日　稲田定重専務理事、尾形好雄常務理事訪中。
4月5日　「第1回Expedition研究会（北海道）」札幌市、青少年会館、40名。
17日　常務理事会、ルーム、6名。
27日　遠藤登副会長、山森欣一常務理事訪中。
5月13日　「トランゴ・タワー隊壮行会」東京、高田馬場、32名。
19日　日・ポ合同トランゴ・タワー登山隊（山田昇隊長以下3名）出発。
24日　理事会、東京、大正セントラルホテル、7名。
総会、東京、大正セントラルホテル、19名（委任状199名）
31日　「地球の背骨の一角に立つ」発行。
6月4日　「プラチャンド・マン・シュレスタ氏御夫妻歓迎会」東京新宿、7名
30日　「ナンガ・パルバット　勇者よ永遠に」発行。
7月6日　稲田定重専務理事訪中。
7日　常務理事会、ルーム、4名。
12日　「合同壮行会」東京、東方会館、200名。
25日　日中合同雪宝頂登山隊（遠藤登隊長以下10名）出発。
8月3日　日印合同女子遠征隊（寺沢玲子隊長以下6名）出発。
12日　「中国登山協会代表団歓迎会」東京、
29日　山森欣一常務理事訪中。
9月1日　ラプチェ・カン偵察隊（斎藤安平隊長以下2名）、カルジャン登山隊（新郷信廣隊長以下6名）、チョー・アウイ登山隊（八嶋寛隊長以下10名）、ギャラ・ペリ登山隊（飛田和夫隊長以下6名）出発。
17日　阿部淳理事「第4回ヒマラヤ登山観光会議（マナリ）」出席のため訪印。（13日に山田昇理事も同会議のため訪印）
15日　「日本ヒマラヤ協会年報 Ⅲ」発行。
29日　西南中国広域踏査隊（山森欣一隊長以下9名）出発。
11月23日　稲田定重専務理事、新貝理事訪中。
30日　「第4回中国登山研究会」東京、大正セントラルホテル、40名。
「チベット登山協会代表団歓迎会＆ＨＡＪ秋期中国4隊合同報告会」
東京、東方会館、60名。

昭和62年（1987年）20

1月11日　「第8回インド・ヒマラヤ会議」東京、岸記念体育館、35名。
「Col. N. クマール氏講演と映画の夕べ＆御夫妻さよならパーティ」東京、大正セントラルホテル、13名。
2月1日　「K2（8,611m） 高みを求めて」発行。
3月25日　尾形好雄常務理事ブータンへ出発。
5月30日　理事会、東京、大正セントラルホテル、9名。
総会、東京、大正セントラルホテル、25名（委任状199名）
創立以来20年間会長を務められた柴田金之助氏が退任、名誉会員に推挙される。
6月19日　常務理事会、ルーム、5名。
7月5名　稲田定重専務理事、山森欣一常務理事訪中。
11日　「合同壮行会」東京、東方会館、
25日　ゲニ登山隊（飛田和夫隊長以下13名）、新青偵察隊＆トレッキング隊（植松秀之隊長以下9名）出発。
26日　ヌン女子登山隊（木下祥子隊長以下5名）出発。
「乔鳥衣峰　7,354m］発行。
8月5日　「天府の霊峰　雪宝頂」発行。
20日　尾形好雄常務理事訪中。
9月1日　「謎の河の秘峰　ギャラ・ペリ」発行。
10日　日中友好ラプチェ・カン合同登山隊（山森欣一隊長以下9名）出発。
12日～13日　「柴田前会長を囲む会」御岳山、14名。
25日　中ソ辺境踏査隊（尾形好雄隊長以下6名）出発。
12月1日　「神の山　ゲニ峰」発行。
4日　冬季バルトロ氷河偵察隊（飛田和夫隊長以下2名）出発。

1月10日　「第9回インド・ヒマラヤ会議」東京、目黒さつき会館、35名。
稲田定重専務理事、山森欣一常務理事、新貝勲理事訪中。
3月27日　「ヒマラヤ集会」盛岡市、県民会館、18名。
4月6日　山森欣一常務理事訪中。
16日　「合同壮行会」東京、東方会館、160名。
22日　新青登山隊（植松秀之隊長以下8名）出発。
30日　「友好の白き頂　ラプチェ・カン」発行。
5月20日　ゲニ登山隊（飛田和夫隊長以下7名）出発。
28日　理事会、ルーム、
総会、東京、シチズン・ボール、18名（委任状201名）
6月6日　日印合同リモⅠ峰登山隊（尾形好雄隊長以下7名）出発。
7月1日　機関誌「ヒマラヤ200号」発行。
9月10日　「合同壮行会」東京、東方会館、
12日　ガッシャーブルムⅡ登山隊（飛田和夫隊長以下6名）出発。
21日　尾形常務理事「第5回ヒマラヤ登山観光会議（ムスリー）」出席のため訪印。
10月3日　チベット登山隊（山田昇隊長以下4名）出発。
11月27日　日印合同リモⅠ峰登山隊が、国際山岳連盟（ＵＩＡＡ）の遠征委員会のヒット・クライミングに選ばれた。
12月　「カシミールの女神　ヌン」発行。

平成元年（1989年）22

1月8日　「第10回インド・ヒマラヤ会議」東京都勤労福祉会館、38名。
3月6日　山田昇常務理事、小松幸三・三枝照雄両終身会員の3名が、冬季マッキンリーで遭難との報が入り、本会として捜索を含む「遭難対策本部」の活動を全面的に支援する。
4月1日　中華民国山岳協会ヌン登山隊（高銘和隊長以下15名）来局し、ヌン情報提供する。
5月27日　理事会、ルーム、8名。
総会、東京、シチズン・ボール、19名。（委任状218名）
6月12日　「神の山　格聂峰」発行。
20日　本年1月19日に全焼したネパールのタンボチェ僧院の再建援助について、山岳団体が協力するための協議が行われ、日山協、労山、ＪＡＣ、日ネと共に募金を実施する。
7月15日　「合同壮行会」東京、東方会館、
23日　ヴァスキ・パルバット登山隊（出口當隊長以下3名）出発。
26日　シャラリ登山隊（山森欣一隊長以下9名）出発。
8月15日　チョモランマ登山隊（尾形好雄隊長以下9名）出発。

平成２年（1990年）23

1月７日　「第11回インド・ヒマラヤ会議」東京都勤労福祉会館、41名。
14日　稲田定重専務理事、尾形好雄常務理事訪印。
3月19日　ＩＴＢＰ「Ｄ．Ｇ．ラオ御夫妻さよならパーティ」東京、11名。
31日　「もう一つのチベットへ　桃源郷への山旅」発行。
「中国登山の手引き・初版」発行。
4月16日　ヒマラヤを中心とする山岳環境の保護を啓蒙する活動を行うために、新しい団体「日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト」を設立するに当たり、日山協、労山、ＪＡＣと共に、この運動に協力することとなった。
5月16日　常務理事会、ルーム、５名。
26日　理事会、ルーム、８名。臨時理事会、大正セントラルホテル、７名。
総会、東京大正セントラルホテル、17名。（委任状205名）理事長制度に移行。
会長に遠藤登氏が就任。
31日　尾形好雄常務理事訪印。
7月１日　北部インド辺境踏査隊（尾形好雄隊長以下５名）出発。
７日　「合同壮行会」東京、東方会館、175名。
11日　サトパント登山隊（保坂昭憲隊長以下10名）出発。
8月15日　クラウン登山隊（舘野秀夫隊長以下７名）出発。
9月14日　常務理事会、ルーム、４名。
23日　稲田定重理事長、八木原圀明常務理事訪印。
10月20日　クラウン登山隊の舘野隊長と菅沼医師の遭難の報入る。
24日　山森欣一専務理事事故処理のため訪中。
31日　尾形好雄常務理事訪印。
12月６日　稲田定重理事長訪印。
20日　日印合同ブラマプトラ河河下り隊（八木原圀明隊長以下５名・同行取材班５名）出発。
財政用テレフォンカード作成（ナムチャ・バルワ＆ギャラ・ペリの２枚組）

平成３年（1991年）24

1月1日　「神秘のグレート・ベンド　ナムチャ・バルワ」発行。
13日　「第12回インド・ヒマラヤ会議」東京、新宿勤労福祉会館、58名。
2月28日　日印合同カンチェンジュンガ登山隊（尾形好雄隊長以下14名）出発。
3月3日　稲田定重理事長訪印。
4月18日　シッキム撮影隊出発。
5月25日　理事会、ルーム
総会、東京、大正セントラルホテル、22名（委任状382名）
6月20日　「サトパント峰登頂記　聖地巡礼の旅」発行。
7月7日　「合同壮行会」東京、東方会館、
14日　ヌン登山隊（中岡久隊長以下12名）出発。
8月1日　雪宝頂登山隊（酒井國光隊長以下13名）出発。
25日　クラウン峰ＢＣ踏査隊（星野貢隊長以下６名）出発。
9月10日　ミニヤ・コンカ登山隊（山森欣一隊長以下12名）出発。
19日　稲田定重理事長「第７回ヒマラヤ登山観光会議」出席のため訪印。（登山の部で講演）
10月5日　「神の河　ブラマプトラの激流を下る」発行。
9日　「ＩＴＢＰ代表団歓迎会」東京、アルカディア、
17日　「ＩＴＢＰ代表団サヨナラパーティー」東京、九段会館。
12月5日　「青海登山協会代表団歓迎会」東京、花福、10名。

平成４年（1992年）25

1月12日　「第13回インド・ヒマラヤ会議」東京、オリンピック記念青少年総合センター、50名。
2月２日　パラグライダー調査団（森田千里ら４名）出発。
4月５日　「新青登山隊壮行会」東京、東方会館、53名。
稲田定重理事長訪印。
15日　「土居正勝氏を偲ぶ会」東京、東方会館、120名（４団体共催）
23日　新青登山隊（福山佶隊長以下６名）出発。
5月30日　理事会、ルーム、６名。
総会、東京、高田馬場西商店街ビル、17名（委任状228名）
「天壇の山に挑む　ミニヤ・コンカ東面」発行。
6月７日　寺沢玲子日印合同女子登山隊隊長訪印。
30日　「秀麗ヌン峰を攀じる」発行。
7月４日　「合同壮行会」東京、東方会館、
14日　クラウン峰登山隊（山森欣一隊長以下12名）出発。
19日　日印合同女子登山隊（寺沢玲子隊長以下６名）、ヌン登山隊（今村裕隆隊長以下14名）出発。
30日　小雪宝頂登山隊（酒井國光隊長以下７名）出発。
9月20日　尾形好雄常務理事「第８回ヒマラヤ登山観光会議（ゴウハティ）」出席のため訪印。
10月24日　クラウン登山隊二俣登攀隊長遭難の報入る。
12月１日　「麗しき四川の夏」発行。
５日　稲田理事長訪印。

平成５年（1993年）26

1月10日　「第13回インド・ヒマラヤ会議」東京、目黒さつき会館、
21日　「クラウン峰報告会＆二俣勇司氏を偲ぶ会」東京、125名。
2月19日　「日印合同ピラミッド・ピーク隊壮行会」東京、銀座、
21日　日印合同ピラミッド・ピーク登山隊（尾形好雄隊長以下５名）出発。
3月７日　「ＨＡＪ事故対策研修会」東京、シチズン・ボール、31名。
20日～21日　「第１回北海道海外登山研究会」札幌市、（３団体共催。）
20日　「美しき谷の姉妹峰　四姑娘山登山の記録」発行。
4月23日　稲田理事長、ヒマラヤン・クラブ名誉会員に推挙される。（日本人としては西掘栄三郎、三田幸夫両氏に次いで３人目となった。）
5月29日　理事会ルーム、６名。
総会、東京、シチズン・ボール、15名（委任状245名）
6月29日　「Ｎ．Ｄ．ジャヤール氏さよならパーティー」東京、９名。
7月10日　「合同壮行会」東京、東方会館、
18日　ヌン登山隊（中川裕隊長以下７名）出発。
22日　ユイチュ登山隊（山森欣一隊長以下６名）出発。
24日　ムスターグ・アタ登山隊（酒井國光隊長以下11名）出発。
8月19日　稲田理事長、植松秀之理事訪印。
9月　プラスチック製登山靴が「突然破壊」する問題に対処するために、労山の呼び掛けで、日山協、ＪＡＣと共に「プラスチック製登山靴突然破壊問題に関する山岳４団体懇談会」を発足させ、登山者側から事故防止の啓蒙等に取り組んだ。
10月６日　寺沢玲子常務理事、帯広ピスタリクラブのニルカンタ峰遭難事故処理支援のため、同遭難対策本部からヒマラヤ協会への要請により訪印。
31日　「カンチェンジュンガ－西・東－」発行。
「ＮＵＮ　7135」発行。
11月30日　「知られざる北部シッキムの山々」発行。
12月10日　チベット登山協会から要請の有った「8000ｍ峰14座登頂支援」について、日山協、ＪＡＣ、長山協と協議。

平成６年（1994年）27

２月11日　「東部カラコルム」発行。
13日　「第15回インド・ヒマラヤ会議」東京、シチズン・ボール、46名。
17日　「ハリシュ・カパディア氏さよならパーティ」東京、15名。
４月３日　「第１回高所登山　事故と環境対策研修会」東京勤労福祉会館、72名。
６日　［新疆登山協会代表団歓迎会」東京、高田馬場、19名。
11日　「ルンポ・カンリ隊壮行会」東京、高田馬場、22名。
12日　ルンポ・カンリ登山隊（八嶋寛隊長以下９名）出発。
「ナマステ！サラスワティ　－サラスワティ峰初登頂の記録－」発行。
５月21日　理事会、ルーム、９名。
総会、東京、シチズン・ボール、23名（委任状242名）
26日　「ヒマラヤ登山　日本隊遭難の記録」発行。
「永別　皇冠峰」発行。
６月13日　常務理事会、ルーム、６名。
20日　「中国登山協会代表団歓迎会」東京、高田馬場、幸村、
29日　「日中友好女性隊壮行会」東京、高田馬場、花福、
30日　日中友好女性合同登山隊（寺沢玲子隊長以下４名）出発。
７月９日　「合同壮行会」東京、東方会館、
10日　臨時理事会＆評議員会、ルーム、
15日　稲田理事長訪印。
21日　ムスターグ・アタ登山隊（飛田和夫隊長以下７名）、ユイチュ登山隊（酒井國光隊長以下６名）出発。
８月７日　スピティ／ラダック奥地探査隊（沖允人隊長以下３名）出発。
10日　「ＨＡＪ Summer Camp　崑崙の頂を踏む」発行。
17日　ミニヤ・コンカ登山隊（山森欣一隊長以下７名）出発。
10月４日　ミニヤ・コンカ隊４名行方不明の報入る。
11月１日　新事務所に移転。（豊島区東池袋４-２-７萬栄ビル501号）
25日　常務理事会、ルーム

平成７年（1995年）28

1月８日　「第16回インド・ヒマラヤ会議」東京都勤労福祉会館、60名。
28日　「尾形好雄事務局員の退職を労う会」東京、屋形船、
4月２日　「第２回高所登山　事故と環境対策研修会」東京都勤労福祉会館、60名。
10日　「ルンポ・カンリ　チベットの未踏峰」発行。
16日　「ミニヤ・コンカ峰合同追悼会」札幌市、ベルコ会館、200名。
「葱嶺の白き父なる山　ムスターグ・アタ登頂の記録」発行。
5月12日　「クンヤン・チッシュ隊壮行会」東京、
19日　ミニヤ・コンカ隊中国訪問団（山森欣一団長以下５名）出発。
山森専務理事「ヒマラヤ登山国際シンポジウム（ラサ）」出席のため訪中。
27日　理事会、ルーム、６名。
総会、東京、かんぽヘルスプラザ東京、16名（委任状309名）
年会費8000円となる。
6月12日　クンヤン・チッシュ登山隊（飛田和夫隊長以下４名）出発。
7月８日　「ヌン隊壮行会」東京、かんぽヘルスプラザ東京、
23日　ヌン登山隊（酒井國光隊長以下11名）出発。
12月12日　山森専務理事「韓国ヒマラヤ・クラブ年次晩餐会（ソウル）」出席のため訪韓。

平成８年（1996年）29

1月27日～28日　「第17回インド・ヒマラヤ会議」前橋市、72名。群馬岳連と共催。
2月10日　「東崑崙・天女の山　玉虚峰に登る」発行。
3月20日　「フカム・シン氏さよならパーティ」東京、かんぽヘルスプラザ東京、29名
21日　「中国登山協会代表団歓迎会」東京、高松、９名。
4月７日　「第３回高所登山　事故と環境対策研修会」東京、かんぽヘルスプラザ東京、40名
14日　「横断山脈　ミニヤ・コンカ峰　登山と遭難の記録」発行。
21日　「プラブーツ突然破壊シンポジウム」東京、オリンピック記念青少年総合センター」４団体共催。
23日　「遠藤登会長の退職を労い、酒井國光理事の春山出版を祝う会」東京、東方会館、92名。
5月14日　中川裕常務理事、ＨＡＪ所属として東京都山岳連盟理事に就任。（21日常務理事・海外委員長就任）
25日　理事会、ルーム、７名。臨時理事会、かんぽヘルスプラザ東京、８名。
総会、東京、かんぽヘルスプラザ東京、21名。（委任状259名）
28日　山岳４団体（日山協、労山、ＪＡＣ、ＨＡＪ）による情報管理意見交換会。
30日　山森欣一専務理事「第２回　日韓岳人シンポジウム（釜山）」出席のため訪韓。
7月６日　「ムスターグ・アタ壮行会」東京、かんぽヘルスプラザ東京、
20日　ムスターグ・アタ登山隊（中川裕隊長以下６名）出発。
8月24日　ニンチン・カンサ偵察隊（山森欣一）出発。
9月25日　日中合同ヤンラ・カンリ偵察隊（山森欣一）出発。
11月１日　機関誌「ヒマラヤ300号」発行。
11月28日　「中国登山協会／西蔵登山協会代表団歓迎会」東京、屋形船、

平成９年（1997年）30

1月１日　朝日現代用語「知恵蔵」1997年版「スポーツ」の項目に「日本人のヒマラヤ登山」掲載。
12日　「第18回インド・ヒマラヤ会議」東京、かんぽヘルスプラザ東京、36名。
19日　「第５回中国登山研究会」東京、かんぽヘルスプラザ東京、35名。
31日　「谷甲州先生を囲む会」ルーム、10名。
2月18日　「神々の座　八千メートル峰への挑戦」発行。
3月８日　「日中合同クーラ・カンリⅡ峰隊壮行会」かんぽヘルスプラザ東京、60名。
14日　臨時常務理事会、ルーム、４名。
23日　「第４回高所登山　事故と環境対策研修会」東京、豊島区民センター、32名。
25日　日中合同クーラ・カンリⅡ峰登山隊（山森欣一隊長以下７名）出発。
5月31日　理事会。ルーム、６名。
総会、東京、かんぽヘルスプラザ東京、14名（委任状268名）
年会費１万円となる。
7月12日　「合同壮行会」東京、かんぽヘルスプラザ東京、
16日　ムスターグ・アタ女性登山隊（市川春代隊長以下６名）出発。
20日　ニンチン・カンサ登山隊（天城敞彦隊長以下13名）出発。
山森専務理事訪中。
8月17日　山森欣一専務理事訪中。
9月26日　ネパール山岳協会がポカラに建設中の「国際山岳博物館」に対する支援要請について関係６団体（日山協、労山、ＪＡＣ、ＨＡＪ、ＨＡＴ－Ｊ、日ネ）が支援組織を結成して協力することを決定。
10月１日　創立満30年を迎える。
12月８日　「チベット登山協会代表団歓迎夕食会」東京、ナバホ、ＪＡＣと共催。

平成10年（1998年）31

1月8日　山森欣一専務理事が、ＮＨＫ国際放送（ラジオ）で「ヒマラヤのゴミ問題」について講演収録。
24日　「中国登山協会汪鉄銘副主席＆ヒマラヤン・ジャーナル、ハリシュ・カパディア編集長歓迎会」東京、和風レストラン高松、14名。
25日　ＨＡＪ創立30周年記念講演会（名塚秀二／汪鉄銘／ハリシュ・カパディア／神原達各氏）東京、科学技術館、240名。
ＨＡＪ創立30周年記念祝賀会、東京、九段会館、270名。
［記念盾贈呈者］インド登山財団、中国登山協会、チベット登山協会、インド・チベット国境警察、エクスプレスハウス、日パ・トラベル、シカールトラベル、ハリシュ・カパディア、ハルカ・グルン（以上国外）日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、東京都山岳連盟、日中協会、ＩＣＩ石井スポーツ、西遊旅行、ティ・エッチ・アイ、ヒマラヤ観光開発、日本メディコ、エアー・インディア、東京新聞出版局、山と渓谷社、近食組、中坪印刷（以上国内）
26日　「中国＆インドサヨナラパーティ」東京、日本橋亭、12名。
山と渓谷掲載用「ＨＡＪ30年座談会」ＨＡＪルーム、沖允人、阿部淳、稲田定重、山森欣一、八木原圀明、中川裕（司会：山と渓谷、久保田賢次編集長）
2月1日　「第19回インド・ヒマラヤ会議」東京、豊島区民センター、48名。
8日　「第６回中国登山研究会」東京、豊島区民センター、12名。
3月4日　海外登山情報センター（仮称）設立委員会の準備会（ＪＡＣ）
16日　ポカラ山岳博物館協議会
24日　海外情報センター（仮称）設立準備会
4月5日　「第５回高所登山　事故と環境対策研修会」東京、豊島区民センター、35名。
20日　海外登山情報センター設立準備委員会
5月1日　「ネパール登山の手引き（初版）」発行。
30日　理事会、ルーム、　名。
総会、東京、かんぽヘルスプラザ東京、　名。
「フカム・シン氏を忍ぶ会」東京、かんぽヘルスプラザ東京、
6月26日　「遠藤登前会長の退任を労う会」東京、和風高松、28名。
7月11日　「ニンチン・カンサ、ラモ・シェ、カバン偵察」合同壮行会、かんぽヘルスプラザ東京、140名。
19日　ニンチン・カンサ登山隊（関根孝次隊長以下10名）出発。
山森欣一専務理事訪中。
8月1日　ラモ・シェ登山隊（酒井國光隊長以下９名）出発。
10日　ナンガ・パルバット日本人遺体写真騒動。（本会の調査で川崎教員隊と判明）
9月21日　ポカラ山岳博物館協議会。
10月10日　カバン偵察隊（山森欣一隊長以下３名）出発。
11月12日　ＩＭＦ創立40周年記念出席のため寺沢玲子常務理事訪印。
13日　ポカラ山岳博物館協議会。
12月8日　ポカラ国際山岳博物館連絡協議会。（日山協）

平成11年（1999年）32

1月31日　「第20回インド・ヒマラヤ会議」東京、豊島区民センター、35名。
2月5日　「中国登山協会代表団（張江援団長ら3名）歓迎会」東京、かんぽヘルスプラザ東京、40名。
7日　「第7回中国登山研究会」東京、豊島区民センター、65名。
11日　「中国登山協会代表団サヨナラ会」東京、江戸川シーサイドホテル、18名。
4月4日　「第6回高所登山　事故と環境対策研修会」東京、豊島区民センター、60名。
27日　山森欣一専務理事訪中。
30日　寺沢玲子常務理事訪パ。
5月29日　理事会、ルーム、　名。
総会、東京、かんぽヘルスプラザ東京、32名。
「稲田前理事長の退任を労う会」東京、和風高松、35名。
7月11日　「チョム・カンリ、ユゥイ・フェン、チベット連続登頂」合同壮行会、かんぽヘルスプラザ東京、150名。
16日　「山岳4団体（日山協、労山、ＪＡＣ、ＨＡＪ）三役懇談会」東京、和風高松
20日　チョム・カンリ登山隊（関根孝次隊長以下8名）出発。
24日　ユゥイ・フェン登山隊（酒井國光隊長以下7名）出発。
8月1日　「ネパール登山の手引き（第2版）」発行。
9月10日　「神々の座・8000m峰データ」発行。（本会の調査で川崎教員隊と判明）
チベット連続登山隊（山森欣一隊長以下7名）の山森隊長ら4名出発。
11月14日　岩崎洋常務理事、ＩＭＦ観光会議に出席。（ニューデリー）
12月12日　「第1回　ＨＡＪ華甲望年会」東京、かんぽヘルスプラザ東京、89名。

平成12年（2000年）33

1月16日　「第21回インド・ヒマラヤ会議」東京、豊島区民センター、39名。
29日　「遠藤登前会長の古希を祝い中国登山協会代表団（　　団長ら4名）を歓迎する会」東京、地どり亭、24名。
2月3日　登山4団体（日山協、労山、ＪＡＣ、ＨＡＪ）ヒマラヤ登山者アンケート調査実務者会議。
6日　「第8回中国登山研究会」東京、豊島区民センター、35名。
3月1日　登山4団体ヒマラヤ登山者アンケート調査実務者会議。
4月2日　「第7回高所登山　事故と環境対策研修会」東京、豊島区民センター、55名。
3日　登山4団体ヒマラヤ登山者アンケート調査実務者会議。
5月18日　「平成12年度会員名簿」発行。
27日　理事会、ーム、8名。
総会、東京、かんぽヘルスプラザ東京、20名。
6月5日　登山4団体ヒマラヤ登山者アンケート調査発送。
7月8日　「スパンティーク、ターラ・リ、クーラ・カンリＩ」合同壮行会、かんぽヘルスプラザ東京、90名。
10日　スパンティーク登山隊（岩崎洋隊長以下7名）の岩崎ら2名出発。
14日　スパンティーク登山隊の大神田ら5名出発。
16日　「登山4団体（日山協、労山、ＪＡＣ、ＨＡＪ）三役懇談会」東京、和風高松
25日　登山4団体ヒマラヤ登山者アンケート調査実務者会議。
28日　ターラ・リ登山隊（山森欣一隊長以下6名）出発。
10月27日　登山4団体ヒマラヤ登山者アンケート調査実務者会議。
11月14日　上記アンケート結果について、報道15社、山渓、岳人に通知。
12月9日　「第2回　ＨＡＪ華甲望年会」東京、かんぽヘルスプラザ東京、66名。

平成13年（2001年）34

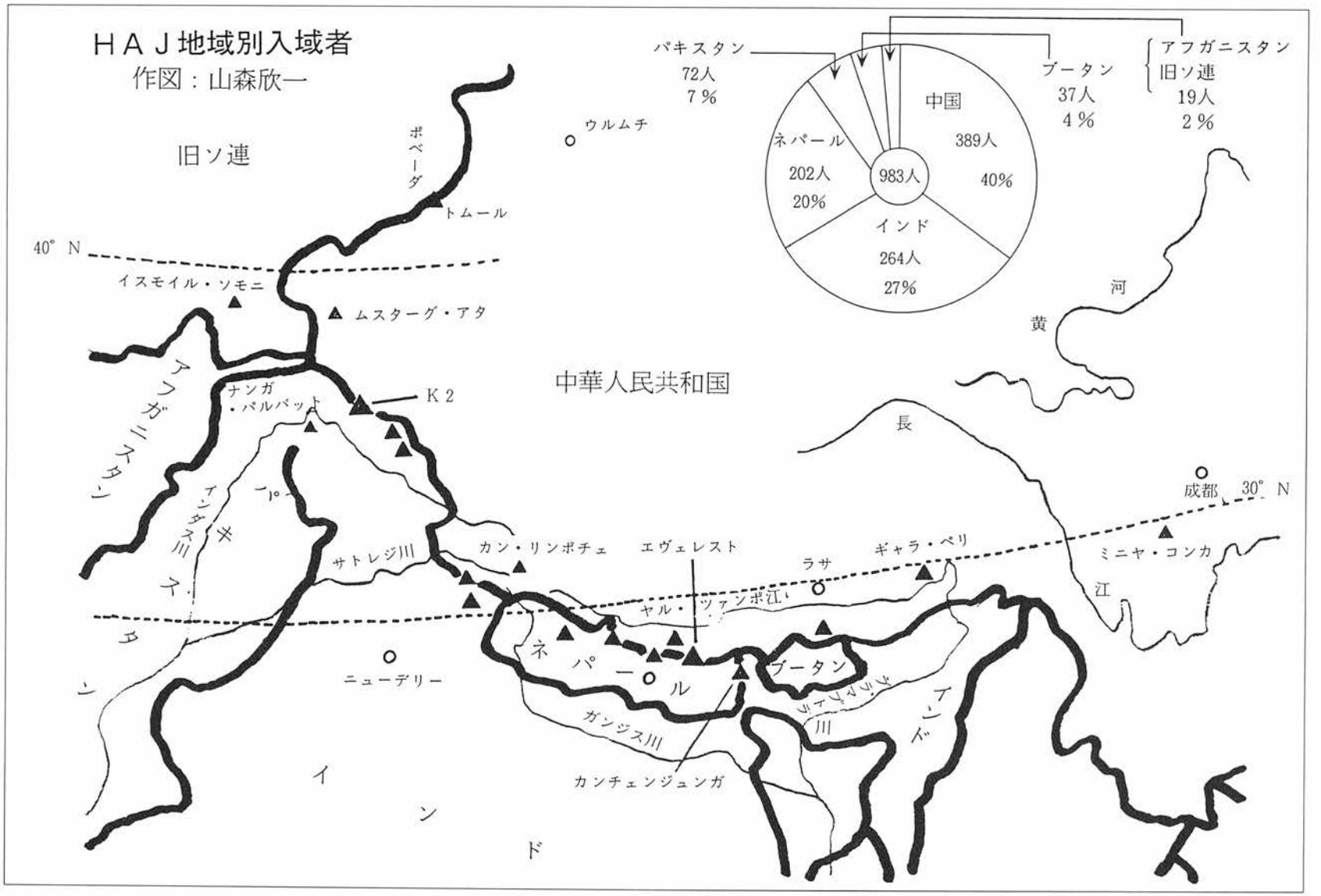
1月24日　「登山４団体　山岳保険・共済懇談会」ＨＡＪルーム、４団体＆都岳連が参加。
28日　「第22回インド・ヒマラヤ会議」東京、豊島勤労福祉会館、31名。
2月６日　「第９回中国登山研究会」東京、豊島区民センター、36名。
「スロヴェニア、シュトレムフェリ夫妻歓迎会」東京、大都会、７名。
21日　国際山岳年協議、東京、西遊記
22日　同上　東京、国連大学
4月１日　「第８回高所登山　事故と環境対策研修会」東京、豊島区民センター、34名。
5月19日　理事会、ルーム、９名。
総会、東京、かんぽヘルスプラザ東京、15名。
20日　登山隊合同スノーバー制作。近食組。８名。
7月７日　「ニンチン・カンサ、ヤンラ・カンリ」合同壮行会、かんぽヘルスプラザ東京、72名。
20日　ニンチン・カンサ登山隊（酒井國光隊長以下６名）出発。
山森欣一理事長訪中。
23日　「登山４団体三役懇談会」東京、がんこ銀座４丁目店
8月９日　「ネパール登山の手引き（第３版）」発行。
9月９日　ヤンラ・カンリ登山隊（山森欣一隊長以下８名）のうちネパール組３名が出発。
10日　同上、中国組５名が出発。
12月８日　「第３回　ＨＡＪ華甲望年会」東京、ランドマーク、59名。

平成14年（2002年）35

1月27日　「第23回インド・ヒマラヤ会議」東京、豊島勤労福祉会館、35名。
国際山岳年日本委員会を日山協、労山、ＪＡＣ、ＨＡＴ－Ｊの４団体と学者らで立ち上げ、ＨＡＪから山森欣一理事長が委員に就任した。（同委員会への拠出金10万円）
2月6日　「第10回中国登山研究会」東京、豊島区民センター、21名。
20日　「クルト・ディームベルガー氏歓迎会」東京、大都会、５名。
4月6日　「中国登山協会代表団（栾开封団長ら５名）歓迎会」東京、大都会、10名。
7日　「同上代表団サヨナラ・パーティ」東京、８名。
国際山岳年日本委員会主催「我ら皆、山の民－私たちは、なぜ山にひかれるのか」東京。
25日　国際山岳年日本委員会、東京、シティクラブ・オブ東京。
5月18日　理事会、ルーム、６名。
総会、東京、かんぽヘルスプラザ東京、20名。
臨時理事会、同上、７名。
6月1日　「カラコルム連続登頂登山隊」壮行会、かんぽヘルスプラザ東京、80名。
10日　カラコルム連続登頂登山隊（岩崎洋隊長以下４名）出発。
7月6日　「ニンチン・カンサ登山隊」壮行会、かんぽヘルスプラザ東京、35名。
国際山岳年日本委員会主催「富士山エコ・フォーラム」静岡県富士宮市。
12日　「登山４団体三役懇談会」東京、中村屋。
20日　ニンチン・カンサ登山隊（山森欣一隊長以下４名）出発。
9月28日　ＨＡＪ創立35周年記念講演会（尾形好雄）東京、かんぽヘルスプラザ東京。
ＨＡＪ創立35周年記念祝賀会、東京、かんぽヘルスプラザ東京。
10月1日　創立満35年を迎える。

第Ⅲ部

登山と野外活動


ＨＡＪ地域別入域者
作図：山森欣一
パキスタン
72人
7％
ブータン
37人
4％
アフガニスタン
旧ソ連
19人
2％
中国
389人
40％
ネパール
202人
20％
983人
インド
264人
27％
旧ソ連
ボベーダ
トムール
ウルムチ
40° N
イスモイル・ソモニ
ムスターグ・アタ
ナンガ・パルバット
K 2
中華人民共和国
黄河
長江
成都
30° N
ミニヤ・コンカ
アフガニスタン
インダス川
サトレジ川
カン・リンポチェ
エヴェレスト
ラサ
ギャラ・ペリ
ヤル・ツァンポ江
ニューデリー
ネパール
ブータン
ガンジス川
ブラマプトラ川
カンチェンジュンガ
インド

上段：入山数　下段：死亡数　上段の（　）内は女性

〔2002年10月１日現在〕

ＨＡＪ国別・標高別入山表

下段の（　）内は死亡率

	中国		インド		ネパール		パキスタン		ブータン		アフ旧ソ連		合計	
８０００m峰	3	17 (0)	1	14 (2)	3	39 (1)	4	28 (1)	−	−	−	−	11	98 (4)
	0	0	0	0	1	1 (2.6%)	1	4 (14.3%)	−	−	−	−	2	5 (5.1%)
７０００m峰	27	201 (14)	15	140 (20)	1	7 (0)	5	29 (3)	1	10 (1)	1	3 (0)	50	390 (38)
	3	7 (4.5%)	1	1 (0.7%)	0	0	0	0	0	0	0	0	4	8 (2.4%)
６０００m峰	13	89 (17)	8	76 (16)	3	21 (0)	1	3 (0)	1	9 (0)	0	0 (0)	26	198 (33)
	0	0	1	7 (9.2%)	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7 (2.4%)
５０００m峰	6	44 (7)	2	6 (0)	0	0	0	0	0	0	1	9 (0)	9	59 (7)
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
４０００m峰	1	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	7
登山の合計	50	358 (38)	26	236 (38)	7	67 (1)	10	60 (4)	2	19 (1)	2	12 (0)	97	752 (82)
	3	7 (2.0%)	2	8 (3.4%)	1	1 (1.5%)	1	4 (6.7%)	0	0	0	0	7	20 (2.7%)
野外活動	11	31	9	28	20	135	3	12	4	18	2	7	49	231
総合計	61	389 40%	35	264 27%	27	202 20%	13	72 7％	6	37 4％	4	19 2％	146隊	983人

（注）総合計欄の％は、全体の983人に対する個別の割合

年別山別入山集計表

（ ）内は中高年者数

	山　名	男			女		合　計			平均年	国
		入山	登頂	死	入山	登頂	入山	登頂	死		
1971	コラホイ	4(1)	0(0)	0			4(1)	0(0)	0	33.5	I
1973	カンジェラルワ	6(0)	5(0)	0			6(0)	5(0)	0	29.3	N
1974	ラムジュン	6(1)	4(0)	0			6(1)	4(0)	0	35.5	N
1975	ヌン	7(0)	0(0)	0			7(0)	0(0)	0	28.7	I
	リシ・パハール	7(0)	6(0)	0			7(0)	6(0)	0	31.4	I
	1975年小計	14(0)	6(0)	0			14(0)	6(0)	0		
1976	コー・イ・ムンジャン	9(0)	4(0)	0			9(0)	4(0)	0	29.7	A
1977	コムニズム	3(1)	2(1)	0			3(1)	2(1)	0	34.0	S
1978	バトゥーラⅢ	10(0)	3(0)	0			10(0)	3(0)	0	29.0	P
	ヌン	9(2)	4(0)	0			9(2)	4(0)	0	33.8	I
	トリスル	17(0)	6(0)	0	2(0)	0(0)	19(0)	6(0)	0	28.4	I
	1978年小計	36(2)	13(0)	0	2(0)	0(0)	38(2)	13(0)	0		
1979	キャシードラル	9(1)	0(0)	0	4(0)	0(0)	13(1)	0(0)	0	29.7	I
1980	カンチェンジュンガ偵察	7(0)	0(0)	0			7(0)	0(0)	0	30.1	N
	ケダルナート・ドーム	17(0)	16(0)	0	3(0)	3(0)	20(0)	19(0)	0	28.8	I
	1980年小計	24(0)	16(0)	0	3(0)	3(0)	27(0)	19(0)	0		
1981	カンチェンジュンガ	21(0)	10(0)	0	1(0)	0(0)	22(1)	10(0)	0	31.2	N
	ナンダ・カート	8(1)	0(0)	7			8(1)	0(0)	7	32.4	I
	ランタン・リ	7(1)	5(0)	0			7(1)	5(0)	0	32.0	N
	ナンダ・カート捜索	12(0)	0(0)	0	2(0)	0(0)	14(0)	0(0)	0	29.6	I
	1981年小計	48(2)	15(0)	0	3(1)	0(0)	51(3)	15(0)	7		
1982	ハムジュンガール・ヒマール	9(1)	7(0)	0			9(1)	7(0)	0	31.1	N
	クン	15(2)	0(0)	1	2(0)	0(0)	17(2)	0(0)	1	31.7	I
	マナスル（冬期）	10(1)	0(0)	1			10(1)	0(0)	1	31.8	N
	1982年小計	34(4)	7(0)	2	2(0)	0(0)	36(4)	7(0)	2		
1983	ヌン	7(0)	3(0)	0			7(0)	3(0)	0	31.6	I
	スークーニャン	2(0)	0(0)	0			2(0)	0(0)	0	30.5	C
	1983年小計	9(0)	3(0)	0			9(0)	3(0)	0		
1984	ユイロン	3(0)	0(0)	0	1(1)	0(0)	4(1)	0(0)	0	38.3	C
	ジチュ・ダケ	9(2)	5(1)	0			9(2)	5(1)	0	33.8	B
	ナムナニ偵察	3(2)	0(0)	0			3(2)	0(0)	0	40.0	C
	ナンガ・パルバット	4(0)	0(0)	4			4(0)	0(0)	4	27.5	P
	マモストン・カンリ	5(1)	5(1)	0			5(1)	5(1)	0	33.2	I
	ナンガ・パルバット捜索	2(0)	0(0)	0			2(0)	0(0)	0	30.0	P
	1984年小計	26(5)	10(2)	4	1(1)	0(0)	20(6)	10(2)	4		
1985	ヤラダツォ	6(0)	6(6)	0			6(0)	6(0)	0	32.5	C
	K2	16(1)	3(0)	0			16(1)	3(0)	0	34.1	P
	サセール・カンリⅡ	5(3)	0(0)	0			5(3)	0(0)	0	39.8	I

	山　　名	男			女		合　　計			平均年	国
		入 山	登 頂	死	入 山	登 頂	入 山	登 頂	死		
1985	ムーシュ・ムスターグ				7(2)	0(0)	7(2)	0(0)	0	34.1	C
	ガンカル・プンスム	9(1)	0(0)	0	1(0)	0(0)	10(1)	0(0)	0	31.7	B
	クラウン	10(1)	0(0)	0	1(1)	0(0)	11(2)	0(0)	0	36.0	C
	ギャラ・ペリ偵察	2(1)	0(0)	0			2(1)	0(0)	0	36.5	C
	1985年小計	48(7)	9(0)	0	9(3)	0(0)	57(10)	9(0)	0		
1986	ネームレス・タワー	3(0)	0(0)	0			3(0)	0(0)	0	34.0	P
	シュエバオ・ディン	9(3)	7(2)	0	1(0)	1(0)	10(3)	8(2)	0	37.5	C
	キンナウル・カイラス				5(0)	0(0)	5(0)	0(0)	0	30.6	I
	ラプチェ・カン偵察	2(0)	0(0)	0			2(0)	0(0)	0	31.5	C
	カルジャン	6(1)	5(1)	0			6(1)	5(1)	0	33.8	C
	チョー・アウイ	10(1)	10(1)	0			10(1)	10(1)	0	31.5	C
	ギャラ・ペリ	6(1)	3(0)	0			6(1)	3(0)	0	33.2	C
	1986年小計	36(6)	25(4)	0	6(0)	1(0)	42(6)	26(4)	0		
1987	ゲニ	10(2)	0(0)	0	3(2)	0(0)	13(4)	0(0)	0	35.8	C
	ヌン				5(1)	2(0)	5(1)	2(0)	0	34.8	I
	ラプチェ・カン	9(3)	7(2)	0			9(3)	7(2)	0	31.7	C
	1987年小計	19(5)	7(2)	0	8(3)	2(0)	27(8)	9(2)	0		
1988	シンチン	8(2)	0(0)	0			8(2)	0(0)	0	32.6	C
	ゲニ	5(2)	5(2)	0	2(1)	2(1)	7(3)	7(3)	0	36.7	C
	リモ	7(4)	6(3)	0			7(4)	6(3)	0	41.7	I
	ガッシャーブルムⅡ	5(2)	0(0)	0	1(0)	0(0)	6(2)	0(0)	0	35.7	P
	シシャパンマ	4(0)	3(0)	0			4(0)	3(0)	0	30.8	C
	チョー・オユー	4(0)	4(0)	0			4(0)	4(0)	0	30.8	C
	1988年小計	33(10)	18(5)	0	3(1)	2(1)	36(11)	20(6)	0		
1989	ヴァスキ・パルバット	3(2)	0(0)	0			3(2)	0(0)	0	43.0	I
	シャラリ	7(5)	0(0)	0	2(0)	0(0)	9(5)	0(0)	0	40.4	C
	チョモランマ	9(3)	0(0)	0			9(3)	0(0)	0	33.6	C
	1989小計	19(10)	0(0)	0	2(0)	0(0)	21(10)	0(0)	0		
1990	サトパント	7(4)	7(4)	0	3(2)	2(2)	10(6)	9(6)	0	40.0	I
	クラウン	7(2)	0(0)	2(2)			7(2)	0(0)	2(2)	34.9	C
	1990年小計	14(6)	7(4)	2(2)	3(2)	2(2)	17(8)	9(6)	2(2)		
1991	カンチェンジュンガ	12(2)	3(0)	0	2(1)	0(0)	14(3)	3(0)	0	32.0	I
	ヌン	11(5)	3(1)	0	1(1)	0(0)	12(6)	3(1)	0	40.5	I
	シュエバオ・ディン	12(6)	7(3)	0	1(1)	1(1)	13(7)	8(4)	0	39.1	C
	ミニヤ・コンカ	12(3)	0(0)	0			12(3)	0(0)	0	32.5	C
	1991年小計	47(16)	13(4)	0	4(3)	1(1)	51(19)	14(5)	0		
1992	シンチン	6(2)	2(0)	0			6(2)	2(0)	0	34.7	C
	ムスターグ・アタ	10(4)	0(0)	0	1(0)	0(0)	11(4)	0(0)	0	40.2	C
	ヌン	13(1)	8(1)	0	1(1)	0(0)	14(2)	8(1)	0	33.4	I

	山　名	男			女		合　計			平均年	国
		入山	登頂	死	入山	登頂	入山	登頂	死		
1992	サラスワティ				6(1)	6(1)	6(1)	6(1)	0	35.3	I
	ダークーニャン	7(6)	7(6)	0			7(6)	7(6)	0	48.9	C
	クラウン	10(4)	17(7)	1	1(0)	0(0)	11(4)	0(0)	1	40.2	C
	1992年小計	46(17)	5(2)	1	9(2)	6(1)	55(19)	23(8)	1		
1993	ピラミッド・ピーク	5(2)	5(2)	0			5(2)	5(2)	0	36.2	I
	ムスターグ・アタ	11(4)	11(4)	0			11(4)	11(4)	0	39.2	C
	ヌン	6(1)	0(0)	0	1(0)	0(0)	7(1)	0(0)	0	33.0	I
	ユイチュ	6(6)	2(2)	0			6(6)	2(2)	0	44.8	C
	1993年小計	28(13)	18(8)	0	1(0)	0(0)	29(13)	18(8)	0		
1994	ルンポ・カンリ	8(6)	0(0)	0	1(0)	0(0)	9(6)	0(0)	0	39.6	C
	ユイシュ				4(3)	4(3)	4(3)	4(3)	0	44.0	C
	ユイチュ	5(5)	5(5)	0	1(1)	1(1)	6(6)	6(6)	0	47.8	C
	ムスターグ・アタ	7(5)	7(5)	0			7(5)	7(5)	0	44.4	C
	ミニヤ・コンカ	6(2)	0(0)	4	1(1)	0(0)	7(3)	0(0)	4	35.9	C
	1994年小計	26(18)	12(10)	4	7(5)	5(4)	33(23)	17(14)	4		
1995	クンヤン・チッシュ	3(2)	0(0)	0	1(1)	0(0)	4(3)	0(0)	0	42.5	P
	ヌン	10(6)	4(1)	0	1(1)	0(0)	11(7)	4(1)	0	41.6	I
	1995年小計	13(8)	4(1)	0	2(2)	0(0)	15(10)	4(1)	0		
1996	ムスターグ・アタ	6(4)	5(3)	0			6(4)	5(3)	0	41.3	C
1997	クーラ・カンリII	7(6)	0(0)	0			7(6)	0(0)	0	44.0	C
	ムスターグ・アタ				6(5)	4(3)	6(5)	4(3)	0	44.5	C
	ニンチン・カンサ	13(9)	9(6)	0			13(9)	9(6)	0	43.4	C
	1997年小計	20(15)	9(6)	0	6(5)	4(3)	26(20)	13(9)	0		
1998	ニンチン・カンサ	8(5)	3(3)	0	1(0)	0(0)	9(5)	3(3)	0	43.0	C
	ラモ・シェ	6(6)	0(0)	0	2(2)	0(0)	8(8)	0(0)	0	50.1	C
	カバン偵察	3(3)	−	0	0(0)	−	3(3)	−	0	51.0	C
	1998年小計	17(14)	3(3)	0	3(2)	0(0)	20(16)	3(3)	0		
1999	チョム・カンリ	8(5)	3(2)	0	0(0)	0(0)	8(5)	3(2)	0	42.4	C
	ユーギ・フェン	7(6)	0(0)	0	0(0)	0(0)	7(6)	0(0)	0	47.4	C
	カバン	7(4)	0(0)	0	0(0)	0(0)	7(4)	0(0)	0	44.7	C
	ナムナニ	6(3)	3(0)	0	0(0)	0(0)	6(3)	3(0)	0	44.2	C
	1999年小計	28(18)	6(2)	0	0(0)	0(0)	28(18)	6(2)	0		
2000	スパンティーク	5(2)	5(2)	0	2(1)	2(1)	7(3)	7(3)	0	40.3	P
	ターラ・リ	6(5)	0(0)	0	0(0)	0(0)	6(5)	0(0)	0	52.2	C
	クーラ・カンリI	4(2)	0(0)	0	0(0)	0(0)	4(2)	0(0)	0	42.5	C
	2000年小計	15(9)	5(2)	0	2(1)	2(1)	17(10)	7(3)	0		
2001	ニンチン・カンサ	5(2)	3(0)	0	1(0)	0(0)	6(2)	3(0)	0	40.2	C
	ヤンラ・カンリ	8(8)	0(0)	0	0(0)	0(0)	8(8)	0(0)	0	53.8	C
	2001年小計	13(10)	3(0)	0	1(0)	0(0)	14(10)	3(0)	0		

	山　　名	男			女			合　　計			平均年	国
		入 山	登 頂	死	入 山	登 頂	死	入 山	登 頂	死		
2002	ガッシャーブルムⅠ	4(2)	4(2)	0	0(0)	0(0)		4(2)	4(2)	0	39.3	P
	ニンチン・カンサ	3(3)	0(0)	0	1(1)	0(0)		4(4)	0(0)	0	58.8	C
	2002年小計	7(5)	4(2)		1(1)	0(0)		8(6)	4(2)	0		

★1971年～2002年＝32年間総合計

入山者数：　97隊 752人［内　中高年者数 240人　31.9%］
　　（内　女性　82人［内　中高年者数　32人　39.0%］
　　［但し、偵察＝5隊17人、捜索＝2隊16人、試登＝1隊2人が含まれている］
　　平均年齢：70年代前半＝32.8歳　　後半＝30.6歳
　　80年代前半＝32.8歳　　後半＝34.7歳
　　90年代前半＝39.2歳　　後半＝45.1歳
　　00年代前半＝46.7歳
　　32年間平均37.4歳
登頂者数：　　278人［内　中高年者数　79人　28.4%］
　　（内　女性　28人［内　中高年者数　13人　46.4%］
　　登頂率：37.0%
死亡者数：　7隊　20人［内　中高年者数　2人　10.0%］全て男性
　　死亡率：2.7%

ヒマラヤと呼ばれる九ケ国のうち
カザフスタンとキルギスのみ入山していない。

★国別入山状況

中　　国＝50隊 358人（47.6%）　　イ　ン　ド＝26隊 236人（31.4%）
ネパール＝7隊　67人（8.9%）　　パキスタン＝10隊　60人（8.0%）
ブータン＝2隊　19人（2.5%）　　旧　ソ　連＝1隊　3人（0.4%）
アフガニスタン＝1隊　9人（1.2%）

ヒマラヤ九ヶ国最高峰の概要

国　名	山　名	高度	初登頂日	初登頂者名	ルート
中　国	チョモランマ	8,848	1960, 5,25	王富州、屈銀華、貢布	北　稜
ネパール	サガルマータ	8,848	1953, 5,29	E.ヒラリー、T.ノルゲイ	南東稜
パキスタン	K 2	8,611	1954, 7,31	A.コンパニョーニ、L.ラチェデリ	南東稜
インド	カンチェンジュンガ	8,586	1977, 5,31	P.チャンド、N.ニマ・ドルジェ	北東稜
ブータン	ガンカル・プンスム	7,570	未　踏		
タジキスタン	イスモイル・ソモニ	7,495	1933, 9, 3	エウゲーニィ・アバラーコフ	東　稜
アフガニスタン	ノシャック	7,492	1960, 8,17	酒井敏明、岩坪五郎	南西稜
キルギス	ボベーダ	7,439	1938, 9,19	E.グトマン、イワノフ、シドレンコ	北　稜
カザフスタン	ハン・テングリ	7,010	1964, 8,15	キリク・クジミンら5名	東　稜

では、次の世代がヒマラヤを舞台に夢を馳せる21世紀には、どんな課題があるのだろうか？

私は、次の21世紀に活躍する世代には、次の課題にトライして貰いたいと思っている。その課題は、

「ヒマラヤ９ヶ国最高峰全山登頂」

ＨＡＪでは「ヒマラヤ」には、他の地域にない特色である「七千メートル峰」の存在があることを重視して、その活動の範囲を「７ヶ国（ネパール、インド、パキスタン、中国、アフガニスタン、ブータン、ソ連」としてきた。したがってモンゴルやミャンマーは活動の対象から外して来たのである。しかし、1991年ソ連邦が崩壊し、この地域の七千メートル峰が、ソ連邦から独立したカザフスタン、キルギス、タジキスタンの三つの国に分かれる結果となった。このような経緯からＨＡＪの「ヒマラヤ」は必然的に「９ヶ国」となり、活動の対象からロシアは外れたのである。

ヒマラヤ９ヶ国の最高峰は上記のとおりである。

（文責：山森欣一）

作図：山森欣一

山名と時期　コラホイ＆ハラムク　1971年夏

隊の構成　（平均年令 33.5歳）　5,425m

隊　長	空　昌昭	1936年11月	生（34）
副隊長	玉井　道隆	1915年1月	生（56）
隊　員	田中　重義	1946年10月	生（24）
〃	宇井　邦夫	1950年7月	生（21）
連絡官	なし		

行動概要　（1971年7月23日～8月15日）

7月23日　羽田発、ニューデリー着
31日　氷河を突破し4,800m地点のコルまで
8月1日　空、田中が、5,005mの無名峰とS1ピークに登頂。
10日　ナラナブ発、ガンガル湖・3,550mにBC建設
12日　4,930mのピークに登頂、BCへ下山
13日　BC～スリナガール
15日　ニューデリー発、カトマンズ、カルカッタ香港経由、19日大阪着

位置　インド、ジャム＆カシミール州

結果
◎コラホイ　5,050mの無名峰と4,800mのS1ピークに登頂
◎ハラムク　4,930mの無名岩峰に登頂（※の2名はハラムクには参加していない。

キャンプ配置
△コラホイ
BC　3,510m　モレーン上
ABC　4,800m　車面氷河S1ピーク直下
△ハラムク
BC　3,550m　ガンガル湖

特記事項　連絡官随行せず

報告書　カシミールの山（カシミール・ヒマラヤ登山報告書）B5判 56頁　昭和47年3月20日刊

山名と時期　カンジェラルワ　1973年春

隊の構成　（平均年令 29.3歳）　6,612m

隊　長	渡辺　文仁	1939年10月	生（33）
副隊長	服部　博	1936年3月	生（37）
隊　員	京極　紘一	1943年11月	生（29）
〃	五島　泰明	1943年11月	生（29）
〃	野村　信昭	1946年8月	生（24）
〃	坂本真沙留	1946年8月	生（24）
連絡官	チョタレー（1970ＪＡＣEverest登頂）		

行動概要　（1970年3月11日～5月21日）

3月11日　羽田発、ニューデリーを経由して12日にカトマンズ着
18日　カトマンズ発、ジュムラ着（飛行機）
23日　キャラバン開始、
4月4日　ザラダン・コーラとナウリ・コーラの間に落ちる尾根の端にBC建設。
7日　4,500mに仮C1建設
9日　4,600mにC1建設
11日　4,500mに仮C2建設（アイス・フォール）

位置　ネパール、カンジロバ山群

結果　南西面から、4月22日京極、五島両隊員とミンマ・ツェリン(38)、ミンマ・テンジン(31)が初登頂に成功。翌23日にも服部、野村、坂本隊員とパサン・プルバ(25)が登頂した。

キャンプ配置
BC　3,700m　ナウリ・コーラ出合い手前
C1　4,600m　ピーク上
C2　4,900m　ナイフ・リッジ上
C3　5,300m
C4　5,800m

報告書　「1973年カンジロバ・ヒマール遠征報告書　－カンジェラルワ初登頂－」　B5判 173頁　1976年10月10日刊

4月14日　4,900mにC2建設（岩稜）
17日　5,300mにC3建設
21日　5,800mにC4建設
5月2日　BCを撤収し7日ジュムラに帰着
8日から21日まで4便に分けてカトマンズに帰着し解散。

山名と時期　ラムジュン・ヒマール　1974年秋

隊の構成　（平均年令 35.5歳）　6,983m

隊　長	山倉　洋一	1930年2月	生（44）
副隊長	大崎　正信	1939年7月	生（35）
医　師	安部　泰夫	1938年5月	生（36）
隊　員	植竹　清孝	1937年3月	生（37）
〃	佐々木　正	1941年1月	生（33）
〃	菊地　薫	1946年5月	生（28）
連絡官	ビジィ・クマリ・チェットリィ（28）		

行動概要　（1974年8月27日～11月）

7月21日　カンパ族の内紛で北面が不可になったため渉外として隊員2名が羽田を出発
8月27日　本隊4名カトマンズ着
9月5日　カトマンズ発、ポカラ着（飛行機）
7日　先発隊キャラバン開始。ペディガオン、シクリス、スピィカルカなどを経て偵察の結果15日4,200mにBC建設。
26日　雪原5,000mにC1建設
10月6日　コル5,350mにC2建設
10月17日　南東稜5,840mにC3建設
19日　6,700mまでルート工作

位置　ネパール、アンナプルナ山群

結果　東稜から10月20日植竹、菊地両隊員が初登攀に成功。翌21日にも大崎、安部両隊員とロブサン・ツェリン(36)が登頂した。

キャンプ配置

BC	4,200m	
C1	5,000m	雪原上
C2	5,350m	
C3	5,840m	
仮C4	6,050m	

特記事項　①雇用したHP3名がトラブルで途中下山。佐々木隊員は、血圧172となりドクター・ストップでC2から下山。

報告書　なし「ヒマラヤ研究XII EXPEDITION II（ヒマラヤの口ひげに登った男たち）」1978年2月10日刊

山名と時期　ヌン　1975年夏

隊の構成　（平均年令 28.7歳）　7,135m

隊　長	西郡　光昭	1939年9月	生（35）
副隊長	山森　欣一	1944年2月	生（31）
隊　員	田中　重義	1946年10月	生（28）
〃	保坂　昭憲	1947年5月	生（28）
〃	山田　正弘	1946年1月	生（29）
〃	清水　政雄	1948年5月	生（27）
〃	鈴木　康志	1952年3月	生（23）

インド側隊員
アスラム・ライグルー（Aslam Laigroo）（25）
連絡官　プラム・スッバ（Puram Subba）（28）

行動概要　（1975年7月17日～9月4日）

5月11日　西郡隊長ビザ解決のため羽田発、ニューデリー着
7月17日　本隊ニューデリー着
30日　センティンク氷河4,100mにBC建設
8月1日　4,840mにC1建設
5日　5,280mにC2建設
8月9日　5,780mにC3建設
17日　6,300mにC4建設
24日　BC撤収
9月2日　ニューデリー着

位置　インド、ジャム&カシミール州

結果　8月19日北西稜を抜けて頂稜(約7,000m)に保坂、アスラムの2名が到達したものの登頂を断念した。

キャンプ配置

BC	4,100m	センティンク氷河左岸
C1	4,840m	D41直下(アイスフォール下)
C2	5,280m	スノープラトー上
C3	5,780m	西壁内
C4	6,300m	北西稜上

特記事項　ビザトラブルのため出発が2ヶ月遅れとなり、隊長は登山の現場に全く参加出来なくなってしまった。インドとの合同登山。

報告書　「カシミールの盟主ヌン7,135m」
B5判　111頁（カラー6頁）　1978年4月1日刊

山名と時期　リシ・パハール　1975年秋

隊の構成　（平均年令 31.4歳）　6,992m

隊　長	清水　澄	1939年2月	生（39）
副隊長	稲田　定重	1940年8月	生（35）
医　師	能勢　眞人	1945年9月	生（29）
隊　員	今野　一也	1939年4月	生（36）
〃	今井　二郎	1947年1月	生（28）
〃	荻原　明郎	1948年1月	生（27）
〃	×舘野　秀夫	1949年2月	生（26）
連絡官	B.P.Sフンダル（B.P.S.Fundal）		（24）

行動概要　（1975年8月7日～10月20日）

8月7日　稲田副隊長ら4名が日本を出発
9月1日　チャンガバン氷河4,500mにBC建設
6日　氷河源頭近く5,180mにABC建設
11日　チャンガバンの断念決定。転進する
13日　5,000mにC1建設
18日　5,750mにC2建設
21日　6,230mにC3建設

位置　インド、東部ガルワール山群

結果　9月27日今井、荻原両隊員がリシ・パハールの初登頂に成功。翌日清水、稲田、能勢、舘野も登頂。10月2日今井、荻原がサーフ・ミナール（6,911m）に初登頂。9月19日今野、フンダルがバムチュー（6,303m）に初登頂した。

キャンプ配置

BC	4,500m	チャンガバン氷河
C1	5,000m	左岸のサイド・モレーン上
C2	5,750m	雪原上
C3	6,230m	〃

特記事項　チャンガバンの許可で入山し転進した。この他にサーフ・ミナール（6,911m）、バムチュー（6,303m）にも初登頂した。

報告書　なし「ヒマラヤ52号」「岩と雪48号」

10月9日　BC撤収
18日　ニューデリー着

山名と時期　コー・イ・ムンジャン　1976年夏

隊の構成　（平均年令 29.7歳）　5,530m

隊　長	有田　豊	1931年4月	生（35）
登攀L	松田　要悦	1942年7月	生（33）
医　師	林　清隆	1948年9月	生（27）
隊　員	×佐藤　優	1939年2月	生（37）
〃	松舘　正義	1944年4月	生（32）
〃	村山　延久	1945年3月	生（31）
〃	村上　秀三	1950年2月	生（26）
〃	脇田　治	1950年7月	生（23）
〃	寺村　重一	1953年3月	生（23）
連絡官	なし		

行動概要　（1976年6月28日～8月30日）

6月28日　日本発、北京経由ラワルピンディ着
7月1日　アフガニスタン入国カブルー着
10日　カブルー発、14日ゼバック着
15日　キャラバン開始
21日　BC建設
23日　コー・イ・ブラ初登頂
25日　コー・イ・ムンジャン主峰、西峰登頂

位置　アフガニスタン、ムンジャン山群

結果　7月23日松田、松舘、村山、佐藤の4名が、コー・イ・ブラ（5,360m）に初登頂に成功。25日松田、松舘、村山、村上の4名がコー・イ・ムンジャン主峰に第2登し、西峰（5,440m）にも初登頂した。

キャンプ配置

BC	第2谷の4,350m地点	
C1	4,800m	

特記事項　連絡官、通訳なし。

報告書　「バダクシャンからヌーリスタンへ」
B5判　167頁　1977年3月1日刊

8月1日　第6谷4,050mに第2BC建設
8日　松田が5,480m峰に登頂
10日　第2BC撤収
22日　カブルー着
30日　羽田着

山名と時期　イスモイル・ソモニ　1977年夏

隊の構成　（平均年令 34歳）　7,495m

隊　長　増田　秀穂　1943年2月　生（34）
副隊長　内田　嘉弘　1937年1月　生（40）
隊　員　高橋　純一　1948年11月　生（28）
連絡官　なし

行動概要　（1977年7月19日～8月20日）

7月19日　日本発、モスクワ着
21日　モスクワ～オーシ（飛行機）～レーニンBC着（小型ジェット機32人乗り）
25日　ヘリコプターでフォルタンベックBC
30日　BC～C1
31日　C1～C2
8月1日　C2～BC
4日　BC～C1
5日　C1～C2
6日　C2～C3
7日　C3～C4
8日　C4～C5（6,700m）
8月9日　6,700m～6,900m
10日　6,900m～頂上～6,900m
11日　6,900m～C3
13日　BC着
14日　BC～レーニンBC

位置　タジキスタン、パミール

結果　8月10日、内田、高橋の2名がバロートキン・ルートから登頂に成功した。

キャンプ配置

BC　4,000m　フォルタンベック氷河
C1　5,000m
C2　5,800m
C3　6,000m
C4　6,300m
C5　6,900m（6,700m）

特記事項　アライ谷まで83歳の前田清氏が参加したが、この高齢での入山は初めてとのこと。

報告書　「パミール・山と草原」　B6判　153頁　箱付き　昭和52年12月20日刊

山名と時期　バトゥーラⅢ　1978年夏

隊の構成　（平均年令 29歳）　7,729m

隊　長　西郡　光昭　1939年9月　生（38）
登攀L　坂本真沙留　1946年8月　生（31）
〃　上杉　純夫　1946年10月　生（31）
隊　員　新谷　暁生　1947年5月　生（31）
〃　石川　裕司　1949年12月　生（28）
〃　伊東　満　1951年1月　生（27）
〃　大久保　真　1951年4月　生（27）
〃　佐々木光男　1951年11月　生（26）
〃　白木　和志　1950年10月　生（27）
〃　馬場　洋一　1953年10月　生（24）
連絡官 Muhammand AKRAM fRINIDI大佐（　）

行動概要　（1978年4月14日～7月30日）

4月14日　本隊日本発
5月9日　BC建設
22日　C1建設
6月4日　南稜6,230mに到達
6月9日　南西壁にC2建設
6月30日　C3建設
7月5日　C4建設
6日　石川、伊東、大久保初登頂に成功
11日　全隊員BC帰着
30日　帰国

位置　パキスタン、バトゥーラ山群

結果　南稜を6,250mまで登ったが断念し、南西壁にルート変更。7月6日、石川、伊東、大久保の3名がC4（7,300m）から初登頂に成功した。尚、このピークは、登頂時はバトゥーラⅡと呼ばれていたものである。

キャンプ配置

BC　4,210m　バルタール氷河
C1　5,400m
C2　6,100m　南西壁
C3　6,800m
C4　7,300m

特記事項　前年夏に2名を偵察隊として派遣。

報告書　なし　日本ヒマラヤ協会年報「HIMALAYA 1980」　昭和56年1月20日刊

山名と時期　ヌン　1978年夏

隊の構成　（平均年令 33.8歳）　7,135m

隊　長	沖　　允人	1935年1月	生（43）
登攀L	小川　　務	1944年12月	生（33）
隊　員	鈴木　正規	1931年6月	生（47）
〃	安藤　忠夫	1943年3月	生（35）
〃	飯村　富参	1944年10月	生（33）
〃	高橋太一郎	1947年8月	生（30）
〃	東　　英樹	1949年2月	生（28）
〃	八嶋　　寛	1950年3月	生（28）
〃	×寺本　政幸	1950年11月	生（27）
連絡官	Farid Hussain Kashimir（30）		

行動概要　（1978年8月4日～8月31日）

8月4日　本隊大阪発、ニューデリー着
8日　ＢＣ建設
9日　Ｃ1建設
11日　Ｃ2建設
16日　Ｃ3建設
8月21日　Ｃ4建設
25日　ＢＣ撤収、カルギル着
29日　ニューデリー着

位置　インド、ジャム＆カシミール州

結果　西稜ルートから8月22日、高橋、東とニマの3名がＣ4から登頂。同日Ｃ3から出発した飯村、寺本、ナワンも登頂に成功した。23日には小川、鈴木、高橋、八嶋がD41（5,813m）に登頂した。

キャンプ配置

ＢＣ	4,100m	センティンク氷河
Ｃ1	4,900m	
Ｃ2	5,340m	
Ｃ3	5,800m	
Ｃ4	6,200m	

特記事項　Ｃ3でガスコンロの事故があり、テント半焼し隊員が顔面に大火傷を負う。

報告書　なし「ヒマラヤ84号」昭和53年11月号

山名と時期　トリスル　1978年秋

隊の構成　（平均年令 28.4歳）　7,120m

隊　長	稲田　定重	1940年8月	生（38）
副隊長	×野中　和雄	1949年3月	生（29）
隊　員	鈴木　節男	1954年5月	生（24）
〃	畠山　秀男	1945年11月	生（32）
〃	飯島　孝夫	1943年1月	生（25）
〃	安中　秀子	1949年12月	生（28）
〃	×角田　不二	1952年9月	生（25）
〃	中岡　　久	1949年9月	生（28）
〃	×北川　勇人	1953年5月	生（25）
〃	飛田　和夫	1946年1月	生（32）
〃	釣部　恵子	1954年1月	生（24）
〃	野島　照雄	1950年11月	生（27）
〃	今井　清和	1945年1月	生（33）
〃	和田　誠治	1948年10月	生（29）
〃	高原　　修	1943年12月	生（34）
〃	真島　博志	1955年1月	生（23）
〃	西田　茂夫	1950年11月	生（27）
〃	桑原　健一	1949年6月	生（29）
〃	八嶋　　寛	1950年3月	生（28）
連絡官	Captain Mukesh Chopra（25）		

位置　インド、東部ガルワール山群

結果　9月28日、南稜ルートから角田、八嶋、飛田、中岡、高原、西田が初登攀に成功。同日Ⅱ峰(6,690m)に北稜ルートから野中、飯島、安中、北川、釣部、今井、真島が初登攀に成功。27日、6,100mの無名峰に畠山、鈴木が登頂した。

キャンプ配置

ＢＣ	4,750m	トリダン
Ｃ1	5,150m	トリスル氷河左岸
Ｃ2	5,850m	トリスルⅡ峰氷河
Ｃ3	6,400m	

報告書　「トリスル28日間」Ｂ5判　143頁　昭和54年2月21日刊

行動概要　（1978年9月10日～10月6日）

9月10日　本隊成田発、ニューデリー着
18日　ＢＣ建設
30日　ＢＣ撤収
10月4日　ニューデリー着

山名と時期　キャシー・ドラル　1979年夏

隊の構成　（平均年令 29.7歳）　6,100m

隊　長	山倉　洋一	1930年2月	生（49）
副隊長	佐々木　正	1941年1月	生（38）
医　師	吉野　英二	1953年2月	生（26）
〃	江端　峯男	1946年11月	生（32）
講　師	菅野　武士	1945年5月	生（34）
隊　員	住友　房夫	1940年10月	生（38）
〃	×照井　博	1945年1月	生（34）
〃	角田　哲	1947年9月	生（31）
〃	斉藤　則子	1948年7月	生（31）
〃	加藤　守	1950年6月	生（29）
〃	戸部　洋子	1953年10月	生（25）
〃	北畠須磨子	1953年2月	生（26）
〃	志田セツ子	1955年5月	生（24）
連絡官	ラビィ（30）		

行動概要　（1979年9月16日～10月9日）

9月9日　先発隊2名成田発、10日ニューデリー
16日　本隊日本発、17日ニューデリー着、マナリに向かうが途中でバス横転。

位置　インド、ラホール山群

結果　10月4日、5,850mのコル上で時間切れのため登頂を断念した。

キャンプ位置

BC	4,380m
C1	4,720m
C2	5,000m
C3	5,290m

特記事項　マナリに向かったバスが横転し、半数の隊員が負傷し1名脱落となる。チャンドラ河の端が壊れて2日間徒歩となる。

報告書　なし　日本ヒマラヤ協会年報「HIMALAYA 1980」昭和56年1月20日刊

9月25日　BC建設
27日　C1建設
30日　C2建設
10月2日　C3建設
6日　BC撤収
9日　マナリ着、ニューデリー着

山名と時期　カンチェンジュンガ偵察 1980年春

隊の構成　（平均年令 30.1歳）　8,586m

隊　長	山森　欣一	1944年11月	生（36）
副隊長	菊地　薫	1946年5月	生（33）
隊　員	若尾　巻廣	1949年7月	生（30）
〃	×山田　昇	1950年2月	生（30）
〃	八嶋　寛	1950年3月	生（30）
〃	×角田　不二	1952年9月	生（27）
〃	片岡　邦夫	1954年4月	生（25）
連絡官	チョーダリ		

行動概要　（1980年3月1日～6月18日）

3月1日　日本発
3日　カトマンズ着
13日　ダーラン・バザールからキャラバン開始
28日　ヤンポディン発
4月1日　ラムゼー着
15日　ベース・キャンプ着
C1建設
C2建設
C3建設
5月23日　BC撤収
29日　ヤンポディン発
6月3日　イラム着
5日　カトマンズ着

位置　ネパール、カンチェンジュンガ山群

結果　翌年の縦走の可能性を探るため派遣されたが、グレート・シェルフから2名が南峰南壁の7,650mに到達し、南峰、中央峰、主峰縦走の可能性が高いことを確認した。

キャンプ配置

BC	5,510m
C1	6,100m
C2	6,400m
C3	7,200m

報告書　「カンチェンジュンガ西・東」A5判3
17頁　カラー8頁　1993年10月1日刊

山名と時期　ケダルナート・ドーム　1980年秋

隊の構成　（平均年令 28.8歳）　6,831m

隊　長	尾形	好雄	1948年7月	生（32）
副隊長	×山田	昇	1950年2月	生（30）
講　師	×角田	不二	1952年9月	生（28）
隊　員	飯田	徳治	1945年9月	生（34）
〃	宇佐美博康		1950年1月	生（30）
〃	遠藤喜重郎		1946年5月	生（34）
〃	大野	廣美	1942年6月	生（38）
〃	菊池	春枝	1949年11月	生（30）
〃	北出	昭彦	1958年2月	生（22）
〃	木村	陽子	1954年9月	生（26）
〃	熊谷	洋	1955年3月	生（25）
〃	斉藤	光明	1956年6月	生（24）
〃	新郷	信廣	1943年3月	生（37）
〃	関	久雄	1951年2月	生（29）
〃	高瀬	敏久	1950年8月	生（30）
〃	野畑	浩之	1952年7月	生（28）
〃	藤岡	明生	1956年3月	生（24）
隊　員	丸	誠一郎	1954年10月	生（25）
〃	村上	豊子	1956年3月	生（24）
〃	山形	正己	1954年3月	生（26）
連絡官	ラジプ・ラジ（27）			

位置　インド、西部ガルワール山群

結果　10月1日、山田、新郷、関の3名が登頂し、本峰を狙ったが断念。翌日、尾形以下16名も登頂。飯田を除く19名の登頂となった。

キャンプ配置

BC	4,350m
ABC	4,860m
C1	5,550m
C2	6,280m

報告書　「ヒマラヤ、そして仲間達へ!!」B5判　88頁　1982年5月5日刊

行動概要　（1980年9月4日～10月11日）

9月4日　先発隊日本発、5日ニューデリー着
15日　先発隊BC建設
10月4日　BC撤収

山名と時期　カンチェンジュンガ　1981年春

隊の構成　（平均年令 31.2歳）　8,586m

隊　長	山森	欣一	1944年2月	生（37）
副隊長	菊地	薫	1946年5月	生（34）
登攀L	八木原圀明		1946年11月	生（34）
〃	保坂	昭憲	1948年2月	生（33）
〃	尾形	好雄	1948年7月	生（32）
医　師	加藤	亮子	1935年2月	生（46）
隊　員	飛田	和夫	1946年1月	生（35）
〃	若尾	巻廣	1949年7月	生（31）
〃	×渡辺	優	1949年11月	生（31）
〃	×山田	昇	1950年2月	生（31）
〃	×藤倉	和美	1950年3月	生（30）
〃	八嶋	寛	1950年3月	生（30）
〃	×佐久間	隆	1950年8月	生（30）
〃	小松	伸	1950年9月	生（30）
〃	福山	茂	1951年2月	生（30）
〃	谷岡	俊匡	1951年6月	生（29）
〃	×角田	不二	1952年9月	生（28）
〃	二階	義治	1954年1月	生（27）
〃	片岡	邦夫	1954年4月	生（26）
隊　員	鈴木	茂	1955年1月	生（26）
〃	鈴木治三郎		1955年11月	生（25）
通　信	×加藤	康二	1949年3月	生（31）
連絡官	Rabi Shresta（28）			

位置　ネパール、カンチェンジュンガ山群

結果　5月9日主峰に保坂、山田、藤倉、片岡、鈴木茂の5名とシェルパのニマ・テンバが登頂、同日ヤルン・カン（8,505m）に八木原、尾形、飛田、角田、片岡の5名が登頂するものの、時間切れとなり縦走は断念した。

報告書　「カンチェンジュンガ西・東」B5判　317頁　カラー8頁　1993年10月1日刊

行動概要　（1981年2月1日～6月10日）

2月1日　先発隊日本発
3月16日　先発隊BC着（5,500m）
31日　本隊BC着
4月14日　ABC建設　（7,300m）
5月8日　MC5、WC5建設
15日　BC撤収　イラム着　カトマンズ着

山名と時期　ナンダ・カート　1981年秋

隊の構成　（平均年令 32.4歳）　6,611m

隊　長	小島　守夫	1940年3月	生（41）
副隊長	×藤倉　和美	1950年3月	生（31）
隊　員	×阿部　直彦	1946年1月	生（35）
〃	×斎藤　孝雄	1946年1月	生（35）
〃	×本田　荘八	1951年5月	生（30）
〃	×寺本　政幸	1950年11月	生（30）
〃	×埜口　正則	1952年5月	生（29）
〃	×鈴木　陽一	1953年7月	生（28）

連絡官

行動概要　（1981年9月12日～10月8日）

9月12日　本隊日本発、ニューデリー着
14日　アルモラからキャラバンスタート
19日　本隊ＢＣ着
21日　Ｃ１建設
25日　Ｃ２建設
27日　７名行方不明となる
29日　ハイ・ポーターがＣ１に帰着するが、テント１張が雪崩によって埋没していた。

位置　インド、東部ガルワール山群

結果　９月28日Ｃ３が雪崩に襲われ、隊長を除く７名全員が行方不明となった。

キャンプ配置

ＢＣ	4,000m
Ｃ１	4,800m
Ｃ２	5,400m
Ｃ３	6,000m

特記事項　10月～11月にかけて11名の捜索隊を派遣、6,000m付近を捜索するも何も発見できず。

報告書　「ナンダ・カート 1981」Ｂ５判　133頁　1982年12月20日刊

10月１日　隊長Ｃ１泊
4日　ＢＣ撤収
8日　ニューデリー着

山名と時期　ランタン・リ　1981年秋

隊の構成　（平均年令 32歳）　7,205m

隊　長	植松　秀之	1939年8月	生（42）
副隊長	飯沢　実	1950年5月	生（31）
登攀Ｌ	×山田　昇	1950年2月	生（31）
医　師	結城　正明	1952年8月	生（29）
隊　員	若尾　巻廣	1949年7月	生（31）
〃	那須　宗一	1952年12月	生（28）
〃	中岡　久	1949年9月	生（31）
ネパール	サンゲ・シェルパ（42）		
〃	アン・リタ・シェルパ（32）		
〃	アン・リンジ・シェルパ（27）		

連絡官

行動概要　（1981年8月29日～10月　日）

8月29日　本隊日本発、30日カトマンズ着
9月5日　カトマンズ発
7日　キャラバンスタート
19日　ＢＣ建設
21日　Ｃ１建設
30日　Ｃ２建設

位置　ネパール、ランタン・ヒマール山群

結果　10月10日南西稜から山田、リンジ、那須、若尾の４名が初登頂に成功。翌日にも飯沢、中岡が登頂に成功した。

キャンプ配置

ＢＣ	4,940m
Ｃ１	5,500m
Ｃ２	6,200m
Ｃ３	6,630m

特記事項　京大隊と同時許可。但し京大隊のルート以外との条件付き。京大隊キャンセルし南西稜からのルートを選定した。合同が条件。

報告書　なし　日本ヒマラヤ協会年報Ⅱ「HIMALAYA 1981～1982」昭和58年3月31日刊

10月２日　Ｃ３建設
ＢＣ撤収
カトマンズ着

山名と時期　ナンダ・カート　1981年秋

隊の構成　（平均年令 32.4歳）　6,611m

隊　長		菊地　薫	1946年5月	生（35）
副隊長	×	尾形　好雄	1948年7月	生（33）
隊　員	×	山田　昇	1950年2月	生（31）
〃		若尾　巻廣	1949年7月	生（32）
〃	×	佐久間　隆	1950年8月	生（31）
〃		新郷　信廣	1943年3月	生（38）
〃	×	舘野　秀夫	1949年2月	生（32）
〃		宮崎　久夫	1949年10月	生（32）
〃		鈴木　茂	1955年1月	生（26）
〃		佐藤　誠	1954年6月	生（27）
〃		片岡　邦夫	1954年4月	生（27）
サポート		絹川　忠道	1960年9月	生（21）
〃		村上　豊子	1956年3月	生（25）
〃		物井　洋子	1956年1月	生（25）

連絡官　マンガル・ビザ（　）

行動概要　（1981年10月26日～12月10日）

10月26日　本隊ニューデリー着

位置　インド、東部ガルワール山群

結果　11月16日～18日にかけて遭難隊のC3（約6,000m）付近まで達してゾンデ作業を行うも、何も発見することは出来なかった。C2も発見出来ず。

キャンプ配置

BC	3,700m	ピンダリ氷河右岸カルカ
C1	4,500m	象の頭
C2	5,380m	

特記事項　10月～11月にかけて14名の捜索隊を派遣、6,000m付近を捜索するも何も発見できず。

報告書　「ナンダ・カート 1981」B5判 133頁 1982年12月20日刊

11月2日　BC建設
9日　C1建設
14日　C2建設
15日～25日　C2～C3付近捜索
28日　BC撤収

山名と時期　ハムジュンガール・ヒマール 1982年春

隊の構成　（平均年令 31.1歳）　6,759m

隊　長		菊地　薫	1946年5月	生（35）
登攀L	×	佐久間　隆	1950年8月	生（31）
隊　員		土谷　正伸	1951年1月	生（31）
〃		三笠喜美夫	1951年4月	生（31）
〃		遠藤喜重郎	1946年5月	生（35）
〃		浅見　昭夫	1958年2月	生（24）
報　道		寺田　捨己	1939年10月	生（42）
〃		新妻　勲		（26）
〃		中里　雅行		（26）
ネパール		タン・ジャンブー（26）		
〃		キショール・バッタライ（26）		

連絡官　ビム・バハードル・タパ

行動概要　（1982年4月17日～6月15日）

4月17日　本隊日本発、18日カトマンズ着
5月6日　第一デポキャンプ建設
8日　第二デポキャンプ建設
10日　BC建設
25日　佐久間、土谷がⅢ峰とハムジュンガ・

位置　ネパール、ダモダール山群

結果　5月18日Ⅳ峰（6,217m）とV峰（6,476m）に佐久間、土谷、タシが初登頂。19日に2名、21日にも6名（2度目の土谷を含む）もⅣ峰とV峰の登頂に成功した。25日に佐久間と土谷がⅢ峰（6,655m）ハムジュンガ・ヒマール（6,759m）にも初登頂。

キャンプ配置

BC	4,400m	ナッカリ・ダモダール・クン
C1	5,400m	ストマック下部
C2	5,800m	Ⅰ峰とⅡ峰間左俣氷河出合
C3	6,270m	Ⅱ峰とⅣ峰のコル（ⅢとⅥ用）

特記事項　トリビューバン大学との合同。ヒマラヤの6,000mを越える山頂での初のVTR撮影の成功。

報告書　なし　日本ヒマラヤ協会年報Ⅲ「HIMALAYA 1982～1984」昭和61年9月15日刊

ヒマールの初登頂に成功。
29日　BC撤収
6月11日　カトマンズ着

山名と時期　クン　1982年夏

隊の構成　（平均年令 31.7歳）　7,077m

隊長	山森　欣一	1944年2月	生（38）
副隊長	稲垣　公平	1939年10月	生（42）
講師	×角田　不二	1952年9月	生（29）
〃	今野　一也	1939年4月	生（43）
隊員	長　繁夫	1951年1月	生（31）
〃	丸谷　政明	1952年12月	生（29）
〃	三好喜代美	1957年1月	生（25）
〃	×勝山　教孝	1951年6月	生（31）
〃	×小暮　孝	1958年3月	生（24）
〃	平田　清志	1946年10月	生（35）
〃	小坂　邦弘	1955年2月	生（27）
〃	工藤　誠志	1949年9月	生（32）
〃	川名　正一	1948年3月	生（34）
〃	三浦　敏弘	1953年3月	生（29）
〃	×太田　行雄	1944年1月	生（38）
〃	高坂　裕紀	1953年10月	生（28）
〃	×肥田　繁男	1957年11月	生（24）
連絡官	ラジ・クマール・シャルマ		

位置　インド、ジャム＆カシミール州

結果　8月9日C2への移動、荷上げを終え下山中のパーティに落石が襲い、勝山が巻き込まれ滑落死亡。15日捜索隊によって発見埋葬された。このため登山活動は中止された。

キャンプ配置

BC	4,500m
C1	5,300m
C2	6,300m

特記事項　カルギルでインド側によるヘルスチェックが実施された。

報告書　「クン・南面」B5判　83頁　1983年2月刊

行動概要　（1982年7月18日～8月23日）

7月18日　先発隊日本発、19日ニューデリー着
29日　先発隊BC建設
8月1日　本隊BC入り
14日～15日　勝山捜索、収容活動
21日　BC撤収、ニューデリー着

山名と時期　マナスル　1982年冬

隊の構成　（平均年令 31.8歳）　8,163m

隊長	×山田　昇	1950年2月	生（32）
副隊長	菊地　薫	1946年5月	生（36）
隊員	×佐久間　隆	1950年8月	生（32）
〃	×角田　不二	1952年9月	生（30）
〃	青田　浩	1958年1月	生（24）
〃	新郷　信廣	1943年3月	生（39）
〃	森田　雅博	1957年12月	生（24）
〃	×石橋　真	1952年7月	生（30）
〃	村上　和也	1955年3月	生（27）
報道	阿久津悦夫	1938年8月	生（44）
連絡官			

行動概要　（1982年11月10日～12月31日）

11月10日　本隊日本発
15日　カトマンズ発
30日　BC建設（4,900m）
12月5日　C1建設（5,900m）
11日　C2建設（6,400m）
17日　C3建設（7,200m）

位置　ネパール、マナスル山群

結果　12月18日、角田、佐久間、青田の3名がアタックを敢行したが強風のため断念。下降中佐久間がプラトーの下から滑落死亡した。

キャンプ配置

BC	4,900m
C1	5,900m
C2	6,400m
C3	7,200m

特記事項　12月2日、5,300m地点で山田がヒドン・クレバスに転落し自力脱出したが、足首を捻挫して戦線から離脱した。

報告書　なし「熱風の彼方へ」（佐久間隆　遺稿・追悼集）A5判　117頁（カラー4頁）1983年11月1日刊

12月18日　3名がアタックするも約7,700mで強風のため断念。下山中佐久間が滑落死亡。
22日　BC撤収、カトマンズ着

山名と時期　ヌン　1983年夏

隊の構成　（平均年令 31.6歳）　7,135m

隊　長　飛田　和夫　1946年1月　生（37）
副隊長　×角田　不二　1952年9月　生（30）
隊　員　天城　敞彦　1947年5月　生（36）
〃　大久保　博　1949年4月　生（34）
〃　細貝　登　1953年10月　生（29）
〃　坂入　一彦　1955年6月　生（28）
〃　熊田　雅史　1956年2月　生（27）
連絡官　Fit Lt Rath（32）

位置　インド、ジャム&カシミール州

結果　8月16日、角田、細貝、熊田の3名が西稜から登頂に成功。

キャンプ配置

ＢＣ　4,100m
Ｃ1　4,900m
Ｃ2　5,400m
Ｃ3　6,300m

報告書　「ＮＵＮ登頂'83」Ｂ5判　24頁　1984年1月1日刊

行動概要　（1983年7月24日～8月28日）

7月24日　本隊日本発、25日ニューデリー着
25日　ニューデリー発
8月1日　ＢＣ建設
2日　Ｃ1建設
6日　Ｃ2建設
15日　Ｃ3建設
16日　西稜ルートから3名が登頂
21日　ＢＣ撤収
26日　ニューデリー着

山名と時期　スークニャン北壁試登 1983年秋

隊の構成　（平均年令 30.5歳）　6,250m

隊　長　×角田　不二　1952年9月　生（31）
隊　員　吉田　憲司　1953年1月　生（30）
連絡官　奉清栄

位置　中国、四川省

結果　北壁右岩稜のコル4,900mまで試登。

キャンプ配置

ＢＣ　3,500m
ＢＰ　4,600m

報告書　なし「ヒマラヤ145号」昭和58年12月号

行動概要　（1983年9月23日～10月7日）

9月23日　日本発、北京着、25日成都着
27日　成都発、日隆着
28日　ＢＣ建設
29日～30日　北壁試登
10月30日　日隆着
7日　北京着

山名と時期　ユイロン　1984年春

隊の構成　（平均年令 38.3歳）　5,596m

隊　長	飛田　和夫	1946年1月	生（38）
隊　員	関　久雄	1951年2月	生（33）
〃	遠藤喜重郎	1946年5月	生（37）
〃	遠藤　京子	1938年5月	生（45）
連絡官	張俊岩（52）		

位置　中国、雲南省

結果　北東稜のコル約5,100mまで達したが、時間切れのため登頂を断念した。

報告書　なし「日本ヒマラヤ協会年報Ⅲ（雲南の山旅・玉龍雪山・1984年」昭和61年9月15日刊

行動概要　（1984年4月1日～4月28日）

4月1日　日本発、北京経由、3日昆明着
5日　昆明発
6日　BC建設
10日　ABC建設
15日　C1建設、北東稜のコルに出るも、時間切れのため登頂を断念。
20日　BC撤収

山名と時期　ジチュ・ダケ　1984年春

隊の構成　（平均年令 33.8歳）　6,809m

隊　長	八木原圀明	1946年11月	生（37）
副隊長	出口　當	1942年4月	生（41）
登攀L	須藤　昇	1948年9月	生（35）
医　師	×関　章司	1936年2月	生（48）
隊　員	須藤　圭一	1953年5月	生（30）
〃	千明　政彦	1958年2月	生（26）
〃	菊池　卓雄	1957年12月	生（26）
〃	×新舛　憲三	1949年4月	生（34）
〃	原　守哉	1956年11月	生（27）

位置　ブータン、西部

結果　5月20日東稜から八木原、出口、須藤圭、新舛、原の5名が南峰に初登攀したが、主峰は断念した。

キャンプ配置

BC　4,500m
C1　5,300m
C2　5,600m

報告書　「雷龍の国の白い頂」B5判　23頁　昭和61年5月1日刊

行動概要

4月25日　本隊日本発
27日　パロ着
30日　キャラバン開始
5月4日　BC建設
7日　C1建設
13日　C2建設
20日　東稜から5名が南峰に初登攀
22日　BC撤収
24日　ティンプー着
28日　ブータン出国

山名と時期　ナムナニ偵察　1984年夏

隊の構成　（平均年令 40歳）　7,694m

隊　長　山森　欣一　1944年2月　生（40）
副隊長　五百沢智也　1933年5月　生（51）
隊　員　村上　和也　1955年3月　生（29）
連絡官　湯明利（32）

位置　中国、チベット自治区

結果　北面氷河に入り5,900m地点に到達し、ナムナニ北東カンテ（仮称）とグナ・ラ峰（6,902m）を偵察。

キャンプ配置

ＢＣ　4,450m（ナムナニ峰西面）
Ｃ1　5,200m
Ｃ2　5,470m

報告書　なし「日本ヒマラヤ協会年報Ⅲ（聖地巡礼とナムナニ峰偵察）」昭和61年9月刊

行動概要　（1984年6月25日～8月31日）

6月25日　日本発、北京、成都を経て29日ラサ着
7月25日　ＢＣ建設
27日　Ｃ1建設
28日　Ｃ2建設
30日　ＢＣ撤収
8月23日　ラサ着
31日　日本着

山名と時期　ナンガ・パルバット　1984年夏

隊の構成　（平均年令 27.5歳）　8,126m

隊　長　×角田　不二　1952年9月　生（31）
隊　員　×今給黎宣幸　1956年6月　生（27）
〃　×肥田　繁男　1957年11月　生（26）
〃　×小暮　孝　1958年3月　生（26）
連絡官　シャウカット・ハッサン（24）

位置　パキスタン、ナンガ・パルバット山群

結果　ＢＣを出発した全隊員が、7月6日Ｃ3からの交信を最後に消息を絶った。雪崩に襲われた可能性が高い。

キャンプ配置

ＢＣ　3,650m
Ｃ1　4,900m
Ｃ2　5,800m
Ｃ3　6,700m

特記事項　ルートは、ルパール壁中央側稜（1970年メスナーが登ったルート）

報告書　「勇者よ永遠に」Ｂ5判　83頁　1986年6月30日刊

行動概要　（1984年5月18日～7月上旬）

5月18日　日本発、イスラマバード着
23日　イスラマバード発、ギルギット着
27日　キャラバン開始
28日　ＢＣ建設
6月2日　Ｃ1建設
16日　Ｃ2建設
7月6日　Ｃ3建設、夕方ＢＣの連絡官とトランシーバー交信後消息を絶つ。

山名と時期　マモストン・カンリⅠ　1984年秋
隊の構成　（平均年令 33.2歳）　7,526m
隊　長　尾形　好雄　1948年7月　生（36）
副隊長　×山田　昇　1950年2月　生（34）
隊　員　新郷　信廣　1943年3月　生（41）
〃　吉田　憲司　1953年1月　生（31）
〃　岩崎　洋　1960年2月　生（24）
インド側　バルワント・サンドゥ（48）
〃　ランジット・クマール（38）
〃　ナンドゥーラル・プロフィット（42）
〃　H．C．チョーハン（33）
〃　P．M．ダス（33）
〃　ラッタン・シン（31）
〃　マハビール・タクル（27）
〃　ラジーブ・シャルマ（29）
連絡官
行動概要　（1984年7月28日～10月9日）
7月28日　本隊日本発
8月12日　キャラバン開始
位置　インド、東部カラコルム
結果　9月13日、山田、ラジープ、吉田が初登頂に成功。続いてチョーハン、ダスも登頂した。15日にも尾形、新郷、マハビール、ラッタン、岩崎、16日にもサンドゥ、ナンドゥーラルも登頂した。
キャンプ配置
BC　4,600m
ABC　4,900m
C1　5,600m
C2　6,100m
C3　6,750m
報告書　「千人の悪魔の峰」B5判　91頁　昭和60年7月1日刊

8月14日　BC建設
9月12日　C3建設
21日　BC撤収
29日　ニューデリー着

山名と時期　ナンガ・パルバット捜索1984年夏
隊の構成　（平均年令 30歳）　8,126m
隊　長　片岡　邦夫　1954年4月　生（30）
隊　員　細貝　登　1953年10月　生（30）
連絡官
位置　パキスタン、ナンガ・パルバット山群
結果　角田隊C1（4,900m）地点に達して捜索するも何も発見できなかった。
報告書　「勇者よ永遠に」B5判　83頁　1986年6月30日刊
行動概要　（1984年8月11日～25日）
8月11日　日本発、12日イスラマバード着
13日　イスラマバード発、14日ぎるぎっと着
16日　BC建設
17日　BCからC1地点捜索
19日　BC撤収
22日　イスラマバード着

捜索報告　片岡　邦夫
8月17日（金）　晴

天気良好。ラッキーである。朝、2人共カメラを持って飛び出す。C1地点に向け出発。やはり見た目よりははるかに遠い。カール状の所迄、1時間。カールをつめてガラ場を登る。えらく遠く、やはり本隊並に4時間かかって岩稜に出る。ドイツ隊のキャンプ跡はあるが、HAJ隊のは確認出来ない。角田日記を頼りに岩稜をクライムダウンして探すも、見つけられない。C1～C2の残置フィックスが1本、双眼鏡で見える。ガラガラのルンゼを下ったデブリの中で、ダンラインの未使用のフィックス1本を回収する。左の尾根（南西稜に近い方）へ少し登り氷河を見た後、エーデルワイスを探す。なかなかいいのがなく、時間がかかる。4：00、BCに帰幕。ラッシー（ヨーグルト）をもらいまた下痢がひどくなる。細貝氏も始まった。天気に恵まれ、ルートを追うもC2、C3、C4共にテントを発見できない。C2～C3間の雪稜にトレースらしきものが見えるのみ。ルートの難しさを2人で話してファイアーを囲む。

山名と時期　黄河源流の山　1985年春

隊の構成　（平均年令 32.5歳）　5,442m

隊　長	八木原圀明	1946年11月	生（38）
副隊長	八嶋　寛	1950年3月	生（35）
隊　員	佐藤　光由	1961年4月	生（24）
〃	小泉　武栄	1948年2月	生（37）
〃	梶　光一		（32）
〃	渡辺　久樹		（29）
報　道	江本　嘉伸ら11名		
連絡官	高　成学（29）		

位置　中国、青海省

結果　6月17日、八嶋、梶、渡辺がヤラダツォに登頂。その後、八木原ら6名も登頂。7月4日、八嶋、佐藤、梶、渡辺がバヤンカラに登頂。7月12日、八嶋、佐藤がコンロン山峠付近にある5,830m峰（高度計）に登頂。

特記事項　黄河流域の広域調査。ゴムボートによる黄河源流の川下りも実施。

報告書　なし「ヒマラヤ167号」1985年10月号

行動概要　（1985年5月23日～7月21日）

5月23日	日本発、北京、西宁を経由して6月6日マドゥに到着。
6月11日	源流部へ出発
13日	黄河と長江を分ける分水嶺であるグズグヤ山（4,800m）に登る。
17日	ヤラダツォに登頂
23日	星宿海調査
24日	佐藤、渡辺が、星宿海からザーリン湖まで川下り。
27日	梶、渡辺と江本が、ザーリン湖からオーリン湖へ川下り。
30日	八木原、八嶋、小泉他2名が、オーリン湖から、マドゥまで川下り。
7月4日	バヤンカラ登頂
12日	5,830m峰登頂
	西宁着　北京着
21日	日本着

山名と時期　K2　1985年夏

隊の構成　（平均年令 34.1歳）　8,611m

隊　長	飛田　和夫	1946年1月	生（39）
副隊長	中岡　久	1949年9月	生（35）
〃	×山田　昇	1950年2月	生（35）
登攀L	吉田　憲司	1953年1月	生（32）
医　師	塩田　純一	1950年2月	生（35）
隊　員	山田　修	1940年1月	生（45）
〃	伊地知　博	1940年10月	生（44）
〃	遠藤喜重郎	1946年5月	生（38）
〃	土谷　正伸	1951年1月	生（34）
〃	武部　秀夫	1952年12月	生（32）
〃	石田　勇悦	1953年8月	生（31）
〃	細貝　登	1953年10月	生（31）
〃	村上　和也	1955年3月	生（30）
〃	坂上　利明	1955年5月	生（29）
〃	熊田　雅史	1956年2月	生（29）
〃	岡田　勇孝	1957年6月	生（27）
連絡官	Muhammad Ramzan		

位置　パキスタン、バルトロ山群

結果　7月24日、南東稜から吉田、山田、村上が登頂に成功。山田は無酸素登頂。

キャンプ配置

BC	5,500m
C1	6,250m
C2	6,800m
C3	7,400m
C4	7,840m

報告書　「高みを求めて」B5判　145頁　昭和62年2月1日刊

行動概要　（1985年5月20日～8月27日）

5月20日	本隊日本発、イスラマバード着
6月1日	キャラバン開始
20日	BC建設
26日	C1建設
28日	C2建設
7月6日	C3建設
18日	AC建設
8月8日	BC撤収

山名と時期　セサール・カンリII　1985年夏

隊の構成　（平均年令 39.8歳）　7,518m

隊　長	沖　　允人	1935年1月	生（50）
登攀L	岡本　正人	1948年1月	生（37）
隊　員	安藤　忠夫	1943年3月	生（42）
〃	×徳島　和男	1945年7月	生（40）
〃	×峯本　　柩	1955年1月	生（30）
インド側	Hukam Singh		
〃	Pattanayak		
〃	Phu Dorjee		
〃	Chait Sight Kutiyal		
〃	Neema Dorjee		
〃	Sonam Wangdus		
〃	Sherap Chholdon		
〃	Tshering Smanla		
〃	Prahlad Singh		
〃	C.K.Tyagi		
〃	×Tshering Angchock		
〃	Piar Singh		
連絡官	Ljajullah Ansari Zakaria		

位置　インド、東部カラコルム

結果　9月7日、Sonam Wangdus、Phu Dorjee、Chholdon、Smanlaの4名がII峰西峰に初登頂した。

キャンプ配置

BC	4,800m
ABC	5,400m
C1	5.700m
C2	5,900m
C3	6,450m
C4	6,650m

特記事項　8月30日、C3からC2へ下降中のAngchockが転落死亡した。インドとの合同登山。

報告書　なし「ヒマラヤ170号」1986年1月号

行動概要　（1985年7月14日～9月25日）

7月14日	本隊日本発、ニューデリーを経て27日
8月4日	キャラバン開始
8日	BC建設
9月10日	BC撤収

山名と時期　ムーシュ・ムスターグ　1985夏

隊の構成　（平均年令 34.1歳）　6,638m

隊　長	森　美枝子	1941年5月	生（44）
隊　員	木下　祥子	1943年12月	生（41）
〃	早川　昭子	1948年12月	生（36）
〃	市川　春代	1950年1月	生（35）
〃	釣部　恵子	1954年1月	生（31）
〃	小林　佳子	1958年4月	生（27）
〃	福田　裕子	1959年11月	生（25）
中国側	馬　　力（24）		
〃	雷　雲霞（23）		
連絡官	周　懐美（31）		

位置　中国、新疆ウイグル自治区

結果　ムーシュ・ムスターグを断念し、西側にある5,850m峰に8月25日8名が初登頂し、パーフォア・ピンシャン（八花氷山）と命名する。

キャンプ配置

BC	4,240m
C1	4,610m
C2	5,050m
C3	5,260m

報告書　「地球の背景の一角に立つ」B5判101頁　1986年5月31日

行動概要　（1985年7月26日～9月9日）

7月26日	日本発、北京、ウルムチを経由して30日和田（ホータン）着。
8月1日	和田発、2日台提着
3日	キャラバン開始
4日	BC建設
9日	C1建設
17日	C2建設
19日	市川、釣部がアタックするも、5,600mで断念し、C3建設。
25日	釣部、市川、木下、馬力が初登頂に成功し、27日にも森、早川、小林、雷も登頂した。
29日	BC撤収
9月7日	北京着
9日	日本着

山名と時期　ガンカル・プンスム　1985年秋

隊の構成　（平均年令 31.7歳）　7,590m

隊　長	大内　倫文	1948年3月	生（37）
登攀L	尾形　好雄	1948年7月	生（37）
医　師	小林　真也	1957年7月	生（28）
隊　員	渡辺　　斉	1940年3月	生（45）
〃	半谷　貞夫	1947年10月	生（38）
〃	江崎　幸一	1952年3月	生（33）
〃	三好　　誠	1959年1月	生（26）
〃	工藤　哲靖	1959年8月	生（26）
〃	亀田　文恵	1959年10月	生（25）
〃	櫛島　俊司	1961年11月	生（23）
ガイド	イシュ・ウォンチュク		

位置　ブータン、北西部

結果　西面から中央稜に取り付くも、隊員の肺水腫事故のため6,800mにて登頂断念。

キャンプ配置

BC	5,050m
ABC	5,450m
C1	6,250m
C2	6,450

特記事項　江崎高山病となり小林付き添いヘリコプターにて下山。

報告書　「ガンケル・プンズム（7,541m）登山報告」B5判　22頁　1985年12月9日刊

行動概要　（1985年8月14日～10月26日）

8月7日	先発隊3名日本発
14日	本隊6名日本発
16日	カルカッタ発、首都ティンプー着
19日	ティンプー発、21日ジャッカル着
22日	キャラバン開始
31日	BC建設
9月2日	ABC建設
12日	C1建設
22日	江崎、小林ヘリコプターで下山
24日	C2建設
26日	雪崩で亀田隊員300m流される
30日	工藤隊員肺水腫となり2日BCへ収容
	BC撤収
10月21日	ティンプー着

山名と時期　クラウン　1985年秋

隊の構成　（平均年令 36歳）　7,295m

隊　長	×舘野　秀夫	1949年2月	生（36）
副隊長	×中込清次郎	1947年2月	生（38）
医　師	×菅沼　　勲	1929年9月	生（55）
隊　員	遠藤　京子	1938年5月	生（47）
〃	小川　貞夫	1946年11月	生（38）
〃	星野　　貢	1947年12月	生（37）
〃	森山　安次	1949年12月	生（35）
〃	石川　　昌	1952年8月	生（32）
〃	橋本　康弘	1954年8月	生（31）
〃	宮阪　憲一	1961年3月	生（24）
〃	中野　圭一	1962年2月	生（23）
連絡官	荘　申		

位置　中国、新疆ウイグル自治区

結果　時間切れのため東壁6,300mで登頂雄断念する。その後氷河雪崩のためルート破壊。

キャンプ配置

BC	3,946m
C1	4,410m
C2	5,100m
C3	6,050m

特記事項　9月30日、中込、石川が6,117mに初登頂。翌日にも宮阪、中野、橋本、遠藤、石川、中込、星野、小川が登頂。

報告書　「砂漠の涯の遠き頂き」B5判　48頁（カラー8頁）昭和62年3月30日刊

行動概要　（1985年8月15日～10月29日）

8月15日	日本発、21日カシュガル着
20日	カシュガル発、23日マザー着
24日	キャラバン開始
31日	BC建設
9月6日	C1建設
14日	C2建設
22日	C3建設
27日	東壁6,300mに到達
30日	中込、石川が6,117m峰に初登頂
10月1日	8名が6,117m峰に登頂
12日	BC撤収
21日	カシュガル着
26日	北京着

山名と時期　ギャラ・ペリ偵察　1985年秋
隊の構成　（平均年令 36.5歳）　7,294m
隊　長　山森　欣一　1944年2月　生（41）
隊　員　三浦　敏弘　1953年3月　生（32）
連絡官　×ラバ（51）
位置　中国、チベット自治区
結果　西面4,150mまで偵察。
キャンプ配置
ＢＨ　2,850m
ＢＣ　3,550m
報告書　「加拉白里偵察報告」Ｂ５判　34頁
1985年12月25日刊
行動概要　（1985年９月10日～10月24日）
９月10日　日本発、北京、成都を経由して12日ラサ着。
15日　ラサ発、林芝、東久を経て17日ペ着
18日　キャラバン開始
25日　ＢＨ建設
10月２日　ＢＣ建設
10日　ＢＨ撤収
16日　ラサ着
偵察記　山森　欣一

ＢＨで休養をとった後27日には、連絡官、コック、通訳の５人で上部ルート偵察に向った。あちこちと迷いながら獣道を拾いながらようやく、下の河原は見える所まで出る。ところがここから河床へ降りるためには、背丈が２～３m位あるトゲの木の密生した林を切り拓らかなければならなかった。

翌日からルート整備と荷上げを２人で行う。この頃、対岸のギャラ村から漁師が４人と犬が８頭登ってきた。熊を撃ちに来たと恐ろしい事を言う。通訳は、我々が上部に行っている間に漁師が子熊を担いで来たと報告。

９月30日に10日間分の食糧を持って２人で上部へ移動した。更に氷河上約3,500mに今回のＢＣを設営した10月２日には、天候は完全に好天に向かい偵察期間中持続すると云う幸運に恵まれた。

10月８日には、充分とはいかないにしても、一通りの道路偵察を終えてＢＨに帰幕した。

山名と時期　ネームレス・タワー　1986年夏
隊の構成　（平均年令 34歳）　6,239m
隊　長　×山田　昇　1950年2月　生（36）
隊　員　×斎藤　安平　1953年1月　生（33）
〃　吉田　憲司　1953年1月　生（33）
ポーラン　ヴォイテク・クルティカ（38）
連絡官　ムハマッド・サイード（33）
位置　パキスタン、バルトロ山群
結果　クルティカとの仲がうまくいかずに登頂を断念する。
報告書　なし　ヒマラヤ179号「トランゴ・ワー遠征報告（斎藤安平）」1986年10月号
行動概要　（1986年５月19日～７月８日）
５月19日　日本発
25日　イスラマバード発、26日スカルド着
29日　キャラバン開始
６月４日　ＢＣ建設
８日　台座に到着
21日　上部ルート工作
23日　登攀中止
29日　ＢＣ撤収
登攀記　斎藤　安平

22日、今日は、山田と私でルート工作に出る。昨日の終了点でクラックは無くなり、次のクラックが５メートル程右の方にある。初めフリーで行こうとしたが行けず、ボルト２本を打つ。

ヘアーラインクラックが10メートル程続いており、ナイフブレートのタイオフの連続で登る。クルティカの“Ａピトン”はこういうクラックに大変有効だった。やがてクラックも広くなり、ストッパーが使える様になる。クラックとジェードルのラインに沿って、フリーと人工で登り続ける。岩はしっかりしており、昔、シャモニの岩を登っていたころを思い出す。

我々とクルティカの関係は、非常に悪くなってきており、特に20日の夜以来ほとんど口を聞いていない。彼といっしょにいることが苦痛すらなってきており、こんな状態で登攀を続けることは我々に望むところではない。結局降りようということになった。その旨吉田に知らせ、クルティカに話してもらう。いやな役を彼に押しつけた。

山名と時期　シュエバオ・ディン　1986年夏

隊の構成　（平均年令 37.5歳）　5,588m

隊　長	遠藤　登	1930年10月	生（55）
登攀L	八木原圀明	1946年11月	生（38）
隊　員	中岡　久	1949年9月	生（36）
〃	森山公美丈	1941年9月	生（44）
〃	福山　佶	1943年8月	生（42）
〃	天城　敞彦	1947年5月	生（38）
〃	菅野　千尋	1949年1月	生（37）
〃	菅原　和明	1955年8月	生（30）
〃	三好喜代美	1957年1月	生（29）
〃	大金　信夫	1959年10月	生（26）
中国側	鄭　荣発（55）		
〃	張　江援（33）		
〃	楊　久輝（32）		
〃	王　馬特（29）		
〃	王　華山（29）		
〃	李　慶（26）		

位置　中国、四川省

結果　8月5日、八木原、中岡、菅原、大金が発登頂に成功。翌日、張、楊、王馬、王華、李、森山、福山、天城、三好の9名も登頂に成功。

キャンプ配置

BC　4,170m

C1　5,100m

特記事項　四川省登山協会との合同登山

報告書　「天府の霊峰　雪宝頂」B5判　63頁（カラー8頁）1987年8月5日刊

行動概要　（1986年7月25日～8月21日）

7月25日　日本発、北京を経由して成都着。
27日　成都発、紅原、松藩を経由し大溝へ
30日　BC建設
8月4日　C1建設
5日　八木原ら4名は初登頂
6日　張ら9名が登頂成功
8日　BC撤収
17日　成都着
21日　日本着

山名と時期　キンナウル・カイラス　1986年夏

隊の構成　（平均年令 30.6歳）　6,473m

隊　長	寺沢　玲子	1951年8月	生（34）
隊　員	斉藤　則子	1948年7月	生（38）
〃	金子　珠実	1958年4月	生（28）
〃	南指原さゆり	1959年8月	生（26）
〃	風間　雅子	1958年12月	生（27）
インド側	I.D.シャルマ（28）		
〃	Ila Rajan（20）		
〃	Anju Agarwal（19）		
〃	Radsha Devi（21）		

位置　インド、ヒマチャル・プラデシュ州

結果

キャンプ配置

BC　4,670m

ABC　4,930m

C1　5,230m

特記事項　インドとの女子合同登山。

報告書　なし「ヒマラヤ181号」1996年12月号

行動概要　（1986年8月3日～10月3日）

8月3日　本隊日本発、4日ニューデリー着
8日　ニューデリー発、シムラ着
19日　シムラ発、カルパ、リッパ、アクパ、モラン、タンギを経て。
26日　BC建設
30日　ABC建設
9月2日　C1建設
9日　BC撤収
10月3日　帰国

山名と時期　ラプチェ・カン偵察　1986年秋

隊の構成　（平均年令 31.5歳）　7,367m

隊　長　×斎藤　安平　1953年1月　生（33）
隊　員　　熊田　雅史　1956年2月　生（30）
中国側　　成　　天亮（46）
〃　　拉　　旺（42）

位置　中国、チベット自治区

結果　北面から西面に入り6,200m地点まで偵察。

キャンプ配置

ＢＣ　4,500m
ＡＢＣ　5,300m
Ｃ1　5,650m

報告書　「ラプチェ・カン 7,367m」Ｂ5判 143頁　1988年4月刊

行動概要　（1986年9月1日～10月8日）

9月1日　日本発、北京、成都を経由して4日ラサ着
6日　ラサ発、8日ランゴロ着　ＢＣ建設
17日　ＡＢＣ建設
20日　Ｃ1建設
21日　西稜下6,200mに到達
24日　ＢＣ撤収
30日　ラサ着

山名と時期　カルジャン　1986年秋

隊の構成　（平均年令 33.8歳）　7,216m

隊　長　新郷　信廣　1943年3月　生（43）
副隊長　友田　健治　1948年11月　生（37）
登攀Ｌ　宮崎　勉　1947年11月　生（38）
隊　員　保坂　昭憲　1948年2月　生（38）
〃　岩崎　洋　1950年2月　生（26）
〃　綾戸　新二　1964年11月　生（21）
連絡官　李　致新（24）

位置　中国、チベット自治区

結果　10月14日、新郷、友田、岩崎が本峰（7,216m）に初登頂。南峰は断念する。16日にも宮崎、保坂2名も登頂した。

キャンプ配置

ＢＣ　4,200m
ＡＢＣ　5,300m
Ｃ1　5,730m
Ｃ2　6,150m
仮Ｃ3　6,580m

報告書　なし「ヒマラヤ182号」1987年1月号

行動概要　（1986年9月1日～11月2日）

9月1日　日本発、北京、成都を経由して3日ラサ着
8日　ラサ発、モンダにＢＣ建設
14日　ＡＢＣ建設
20日　Ｃ1建設
Ｃ2建設
10月11日　仮Ｃ3建設
13日　Ｃ3建設
14日　新郷ら3名北峰に初登頂
16日　宮崎ら2名登頂
11月2日　帰国

山名と時期　チョー・アウイ　1986年秋

隊の構成　（平均年令 31.5歳）　7,354m

隊　長	八嶋　寛	1950年3月	生（36）
医　師	松木　克雄	1955年12月	生（30）
隊　員	小野寺光義	1945年12月	生（40）
〃	佐藤　修	1948年7月	生（38）
〃	遠藤　幸寿	1953年10月	生（32）
〃	江村　克志	1956年11月	生（29）
〃	石川　啓二	1957年5月	生（29）
〃	山田　敏雄	1958年10月	生（27）
〃	志小田美弘	1959年1月	生（27）
〃	大久保主計	1959年4月	生（27）
連絡官	旺　加（29）		

位置　中国、チベット自治区

結果　10月12日北西稜から、遠藤、松木、江村、志小田が初登頂に成功。14日にも八嶋隊長ら6名が登頂し、全員登頂となった。

キャンプ配置

BC	5,800m
C1	6,100m
C2	6,700m

報告書　「乔烏衣峰」B5判　135頁　1987年7月刊

行動概要　（1986年9月1日～11月7日）

9月1日	日本発、北京、成都を経て4日ラサ着
7日	ラサ着、13日ジャブ・ラ着
17日	キャラバン開始
21日	BC建設
24日	C1建設
10月2日	C2建設
12日	7,200mでビバークして遠藤ら4名初登頂に成功。
14日	八嶋ら6名登頂
17日	BC撤収
30日	ラサ着
11月7日	日本着

山名と時期　ギャラ・ペリ　1986年秋

隊の構成　（平均年令 33.2歳）　7,294m

隊　長	飛田　和夫	1946年1月	生（40）
登攀L	尾形　好雄	1948年7月	生（38）
隊　員	太田　健	1954年2月	生（32）
〃	橋本　康弘	1954年8月	生（32）
〃	今村　裕隆	1959年4月	生（27）
〃	藤原　拓夫	1956年3月	生（30）
連絡官	王　家瑞（46）		

位置　中国、チベット自治区

結果　10月31日、南稜から尾形、橋本、今村の3名が初登頂に成功。

キャンプ配置

BC	3,200m
ABC	4,200m
C1	5,000m
C2	5,650m
C3	6,300m
C4	6,700m

報告書　「ギャラ・ペリ」B5判　121頁　カラー4頁　昭和62年9月1日刊

行動概要　（1986年9月1日～11月21日）

9月1日	日本発、北京、成都を経て4日着
8日	ラサ発、モンダにBC建設
11日	キャラバン開始
15日	BC建設
22日	ABC建設
10月3日	C1建設
11日	C2建設
19日	C3建設
21日	C4建設
31日	尾形ら3名が初登頂に成功
	BC撤収
	ラサ着
11月21日	日本着

山名と時期　ゲニ　1987年夏

隊の構成　（平均年令 35.8歳）　6,204m

隊　長	飛田　和夫	1946年1月	生（41）
医　師	林　清剛	1948年9月	生（38）
隊　員	江尻　健二	1933年5月	生（54）
〃	遠藤　京子	1938年5月	生（49）
〃	柴崎　裕代	1947年3月	生（40）
〃	小原　博	1949年3月	生（38）
〃	小沢　隆明	1949年8月	生（37）
〃	永尾　剛士	1950年9月	生（36）
〃	長谷川喜久夫	1957年1月	生（30）
〃	伊藤　哲朗	1956年10月	生（30）
〃	安田　素彦	1957年7月	生（30）
〃	山崎賢二郎	1958年7月	生（29）
〃	飛田　真樹	1973年7月	生（14）

連絡官　王　馬特（31）

位置　中国、四川省南西部

結果　南稜から挑むも5,300mで登頂断念。

キャンプ配置

BC　4,200m

C1　5,000m

報告書　「ゲニ峰」B5判　74頁　昭和62年12月1日刊

行動概要　（1987年7月25日～8月23日）

7月25日　日本発、北京を経て成都着
27日　成都発、康定を経て30日熱枸着
8月1日　キャラバン開始
7日　最高到達点に達する
14日　BC撤収
21日　成都着
23日　日本着

山名と時期　ヌン　1987年夏　7,135m

隊の構成　（女性隊）（平均年令 34.8歳）

隊　長	木下　祥子	1943年12月	生（43）
副隊長	小泉　恵子	1954年1月	生（33）
隊　員	市川　春代	1950年1月	生（37）
〃	寺沢　玲子	1951年8月	生（35）
〃	貝塚　球樹	1961年3月	生（26）

連絡官　Mala Honnati（33）

位置　インド、ジャム＆カシミール州

結果　8月27日、西稜から小泉、貝塚とカルマが登頂に成功した。

キャンプ配置

BC　4,100m
C1　4,900m
C2　5,300m
C3　5,900m
C4　6,300m

報告書　「カシミールの女神ヌン」B5判　カラー4頁　61頁　1988年12月刊

行動概要　（1987年7月26日～9月6日）

7月26日　日本発、ニューデリー発、8月2日タンゴール着
8月4日　BC建設
7日　C1建設
12日　C2建設
23日　C3建設
26日　C4建設
27日　小泉、貝塚、カルマが登頂成功
31日　BC撤収
9月2日　ニューデリー着
6日　日本着

山名と時期　ラプチェ・カン　1987年秋

隊の構成　（平均年令 31.7歳）　7,367m

隊　長	山森　欣一	1944年2月	生（43）
副隊長	出口　　當	1942年4月	生（45）
隊　員	小川　貞夫	1946年11月	生（40）
〃	森山　安次	1949年12月	生（37）
〃	古川　英勝	1952年10月	生（34）
〃	須藤　圭一	1953年5月	生（34）
〃	橋本　康弘	1954年8月	生（33）
〃	田辺　　治	1961年1月	生（26）
〃	高橋　俊也	1961年10月	生（25）
中国側	成　　天亮（47）		
〃	旺　　加（30）		
〃	阿　加布（24）		
〃	加　　拉（24）		
〃	達　　穷（23）		
〃	普　　布（23）		
〃	拉　　巴（23）		
〃	佟　　璐（24）（女性）		
〃	拉　　吉（17）（〃）		

位置　中国、チベット自治区

結果　西稜から10月26日、旺加、須藤、加拉、達穷、拉吉、田辺、高橋、出口が初登頂に成功。翌日、橋本、拉巴、普布、佟璐、高橋、小川も登頂に成功した。

キャンプ配置

BC	4,500m
ABC	5,300m
C1	5,600m
C2	6,150m
C3	6,900m

特記事項　チベットとの合同登山。山森隊長9月26日～10月9日肺水腫のため下山し復帰。

報告書　「ラプチェ・カン7,367m」B5判　カラー4頁　143頁　1988年4月刊

行動概要　（1987年9月10日～11月9日）

9月10日	日本発、北京、成都を経て12日ラサ着
16日	BC建設
20日	ABC建設
11月1日	BC撤収

山名と時期　シンチン　1988年春

隊の構成　（平均年令 32.6歳）　6,860m

隊　長	植松　秀之	1939年8月	生（48）
副隊長	福山　　佶	1943年8月	生（44）
医　師	尾鷲　和也	1959年11月	生（28）
隊　員	小玉　義広	1957年6月	生（30）
〃	峰岸　　一	1960年6月	生（30）
〃	増田　　隆	1960年9月	生（27）
〃	三浦　　誠	1967年1月	生（21）
〃	森山　英穂	1955年2月	生（33）
連絡官	高　成学（　）		

位置　中国、青海省

結果　5月15日新青18峰（6,273m）に、福山、峯岸、小玉、増田、三浦が初登頂。主峰は断念した。

キャンプ配置

BC	4,980m
C1	5,650m

報告書　なし「ヒマラヤ201号」1988年8月号

行動概要　（4月22日～6月2日）

4月22日	日本発、北京、蘭州を経由して24日西宁着
26日	西宁発、順応訓練を混えて都蘭を経て29日ゴルムド着
5月2日	森山隊員入院。崑崙山口を越えて途中でキャンプをしながら5月6日ベースキャンプ建設。
5月9日	C1建設
15日	新青18峰に福山ら5名が初登頂 BC撤収 西宁着
6月2日	帰国

山名と時期　ゲニ　1988年春

隊の構成　（平均年令 36.7歳）　6,204m

隊長	飛田　和夫	1946年1月	生（42）
副隊長	伊藤　哲朗	1956年10月	生（31）
隊員	遠藤　京子	1938年5月	生（50）
〃	天城　敞彦	1947年5月	生（41）
〃	寺沢　玲子	1951年8月	生（36）
〃	×滝田　収	1957年3月	生（31）
〃	大野　邦晴	1961年12月	生（26）
連絡官	高　敏	（24）	

位置　中国、四川省

結果　6月11日、飛田、伊藤、滝田の3名が南稜から初登頂に成功。翌日にも2度目の飛田と遠藤、天城、寺沢、大野も登頂に成功。

キャンプ配置

BC	4,350m
C1	5,150m
C2	5,750m

報告書　「格聂峰」B5判　44頁　カラー2頁

1989年6月12日刊

行動概要　（1988年5月20日～6月30日）

5月20日	日本発、北京を経由して21日成都着
22日	成都発、25日熱柯着
28日	キャラバン開始
30日	BC建設
6月3日	C1建設
10日	C2建設
11日	飛田ら3名初登頂
12日	遠藤ら5名も登頂成功
15日	BC撤収
26日	成都着
30日	日本着

山名と時期　リモI　1988年夏

隊の構成　（平均年令 41.7歳）　7,385m

隊長	尾形　好雄	1948年7月	生（40）
隊員	渡辺　斉	1940年3月	生（48）
〃	新郷　信廣	1943年3月	生（45）
〃	高橋　純一	1948年11月	生（39）
〃	青木　正樹	1934年11月	生（53）
〃	吉田　秀樹	1953年5月	生（35）
〃	×二俣　勇司	1955年6月	生（32）
インド側	フカム・シン	（50）	
〃	C.Rパトナイン	（40）	
〃	D.チャンド・タクール	（36）	
〃	V.K.ヴィット	（32）	
〃	N.D.シェルパ	（40）	
〃	S.I.カネィヤ・ラル	（35）	
〃	ラッタン・シン	（35）	
〃	×ツェワン・サマンラ	（30）	
〃	アタヌ・チャタレジ	（27）	
〃	シェルプ・チョルデン	（33）	
連絡官	R.ラビ（　）		

位置　インド、東部カラコルム

結果　7月28日南壁から尾形、吉田、サマンラが初登頂に成功。同日C1からラッタン・シン、カネィヤ・ラルも登頂。29日新郷、二俣、シェルプ、アタヌ、渡辺も登頂。30日高橋も登頂。

キャンプ配置

BC	4,300m	南・北テロン氷河合流点
ABC	5,050m	北テロン氷河
C1	5,960m	アイベックス・コル直下
C2	6,750m	南壁
C3	7,000m	〃

特記事項　I.T.B.Pとの合同登山

報告書　なし「ヒマラヤ204号」1988年11月号

行動概要　（1988年6月12日～8月18日）

6月12日	本隊日本初、ニューデリー着
27日	キャラバン開始
7月4日	BC建設
9日	C1建設
19日	C2建設
27日	C3建設
8月1日	BC撤収

山名と時期　ガッシャーブルムⅡ　1988年秋

隊の構成　（平均年令 35.7歳）　8,035m

隊　長	飛田　和夫	1946年1月	生（42）
副隊長	小川　貞夫	1946年11月	生（41）
隊　員	寺沢　玲子	1951年8月	生（37）
〃	熊田　雅史	1956年2月	生（32）
〃	伊藤　哲朗	1956年10月	生（31）
〃	安部　誠	1957年3月	生（31）
連絡官	Shak Jehan		（34）

位置　パキスタン、バルトロ山群

結果　隊長のみGⅡBCに到着したものの、登山活動は出来なかった。

特記事項　ポーターはウルドカスまで。パキスタンの「冬期」は10月1日～3月31日。

報告書　なし「ヒマラヤ215号」1989年10月号

行動概要　（1988年9月16日～11月18日）

9月12日	日本発、13日イスラマバード着
19日	イスラマバード発、スカルド着
26日	キャラバン開始
10月3日	ウルドカス着、ポータ解雇
16日	コンコルディア着
21日	隊長が単身GⅡBC着
31日	アスコーレ着

山名と時期　チベット2座連続　1988年秋

隊の構成　（平均年令 30.8歳）

隊　長	×山田　昇	1950年2月	生（38）
隊　員	×三枝　照雄	1957年10月	生（30）
〃	清水　修	1958年4月	生（30）
〃	山本　篤	1962年10月	生（25）
連絡官			

位置　中国、チベット自治区

結果　10月24日、シシャパンマ主峰（8,027m）に山田、三枝、山本が登頂。11月6日、チョー・オユー（8,201m）に4名全員が登頂した。

キャンプ配置

シシャパンマ		チョー・オユー	
BC	4,900m	BC	4,900m
ABC	5,800m	ABC	5,700m
C1	6,400m		
C2	6,900m		

報告書　なし「ヒマラヤ208号」1989年3月号

行動概要　（1988年10月3日～11月20日）

10月3日	日本発、北京、蘭州を経由して4日ラサ着
7日	ラサ発、シガツェを経由して9日シシャパンマBC建設
18日	C1建設
20日	C2建設
21日	7,350mまで偵察
24日	山田ら3名シシャパンマ登頂
29日	BC撤収
31日	チョー・オユーBC建設
11月3日	ABC建設・4日、6,350m、5日、7,200mと移動して6日4名全員登頂。
8日	BC撤収

山名と時期　ヴァスキ・パルバット　1989年夏

隊の構成　（平均年令 43歳）　6,792m

隊　長　出口　當　1942年4月　生（47）
隊　員　森山公美丈　1941年9月　生（47）
〃　伊藤　守　1953年11月　生（35）
連絡官　ゴパル・チャンドラ・サーハン

位置　インド、西部ガルワール山群

結果　北壁5,500mまで到達。

キャンプ配置

ＢＣ　4,300m
ＡＢＣ　4,800m
Ｃ１　5,200m

報告書　なし「ヒマラヤ217号」1989年12月号

行動概要　（1989年7月23日～8月30日）

7月23日　日本発、ニューデリー着
25日　ニューデリー発、リシケシを経由して26日ウッタルカシ着
27日　キャラバン開始
31日　ＢＣ建設
8月4日　ＡＢＣ建設
8日　Ｃ１建設
11日　北壁5,500mで登頂断念
20日　ＢＣ撤収
23日　ニューデリー着
30日　日本帰国

登山記　森山　公美丈

テントで休息していると、3時頃突然ゴーという音がするので外に出てみると北壁側から滝の様な雪崩が落ちてくる。そしてテントの斜前約40m位のところで止まる。17時過ぎ出口さんがルート工作から帰ってくる。それから30分程して伊藤さんもＣ１に帰着。紅茶で労をねぎらう。夕食の後これからの行動について3人で話し合う。結論として、思ったより困難な山であり、日程的にも登頂は無理ということになり、11～12日で行けるところまで行き、その後は東壁側を踏査することにする。

残念ではあるが隊の現状等を考えるとやむを得ない。全員納得する。

山名と時期　シャラリ　1989年夏

隊の構成　（平均年令 40.4歳）　6,032m

隊　長　山森　欣一　1944年2月　生（45）
隊長代行　酒井　國光　1939年4月　生（50）
隊　員　西嶋錬太郎　1942年8月　生（46）
〃　松舘　正義　1944年4月　生（45）
〃　大久保　博　1949年4月　生（40）
〃　干場　晃　1951年6月　生（38）
〃　菅沼　弘子　1952年9月　生（37）
〃　谷田川　武　1953年9月　生（35）
〃　貝塚　珠樹　1961年3月　生（28）
連絡官　江　硯　都（35）

位置　中国、四川省南西部

結果　北西稜から5,500mまで達するも岩が脆いため登頂を断念。

キャンプ配置

ＢＣ　4,500m
Ｃ１　4,700m
Ｃ２　5,150m

報告書　「桃源境への旅」Ｂ５判　92頁
カラー1頁　1990年3月刊

行動概要　（1989年7月26日～8月30日）

7月26日　日本発、北京を経て成都着
28日　成都発、西昌を経て30日木里着
8月1日　キャラバン開始
5日　Ｃ１建設
13日　Ｃ１建設
15日　Ｃ２建設
16日　北西稜5,150mに到達
18日　5,250m峰に全員登頂
20日　ＢＣ撤収
23日　稲城着
26日　成都着
30日　日本着

山名と時期　チョモランマ　1989年秋

隊の構成　（平均年令 33.6歳）　8,848m

隊　長	尾形　好雄	1948年7月	生（41）
副隊長	新郷　信廣	1943年3月	生（46）
隊　員	平田　清志	1946年10月	生（35）
〃	橋本　康弘	1954年8月	生（35）
〃	谷口　雅朗	1957年11月	生（31）
〃	今村　裕隆	1959年4月	生（30）
〃	田辺　　治	1961年1月	生（28）
〃	×石坂　　工	1965年6月	生（24）
〃	西川　　修	1963年11月	生（25）

連絡官　明利衆

位置　中国、チベット自治区

結果　北壁8,200mで登頂断念

キャンプ配置

ＢＣ　5,500m
ＡＢＣ　6,150m
Ｃ1　6,900m
Ｃ2　7,500m
Ｃ3　8,000m

特記事項　ハイポーター雇用せず・ＡＢＣに泥棒約50万円（現金）の被害。

報告書　なし「ヒマラヤ218号」1990年1月号

行動概要　（1989年8月15日～11月9日）

8月15日	日本発、北京、成都を経由して、19日ラサ着
22日	ラサ発、シガツェ・シガールを経由して25日ＴＢＣ着
30日	ＢＣ建設
9月11日	ＡＢＣ建設
26日	Ｃ1建設
10月13日	Ｃ2建設
21日	Ｃ3建設
22日	2名が北壁ホーンバイン・クーロワール8,200mに到達 ＢＣ撤収
11月9日	帰国

山名と時期　サトパント　1990年夏

隊の構成　（平均年令 40歳）　7,075m

隊　長	保坂　昭憲	1948年2月	生（42）
副隊長	関根　幸次	1933年10月	生（56）
隊　員	遠藤　京子	1938年5月	生（52）
〃	平川　宏子	1940年5月	生（50）
〃	天城　敞彦	1947年5月	生（43）
〃	桶川和気夫	1950年3月	生（40）
〃	×滝田　　収	1957年3月	生（33）
〃	南指原さゆり	1959年8月	生（30）
〃	中川　　裕	1960年8月	生（29）
〃	後藤　文明	1965年5月	生（25）

連絡官　ナリン・ゴーダム（28）

位置　インド、西部ガルワール山群

結果　8月10日、北稜から保坂、関根、天城、桶川、後藤が登頂成功。翌日にも遠藤、平川、滝田、中川も登頂した。

キャンプ配置

ＢＣ　4,800m
Ｃ1　5,100m
Ｃ2　5,800m
Ｃ3　6,300m

報告書　「聖地巡礼の山旅」Ｂ5判　70頁　カラー4頁　1991年6月20日刊

行動概要　（1990年7月15日～8月22日）

7月15日	本隊日本発、ニューデリー着
16日	ニューデリー発、18日ガンゴトリ着
19日	キャラバン開始
25日	ＢＣ建設
28日	Ｃ1建設
8月2日	Ｃ2建設
9日	Ｃ3建設
10日	保坂ら5名登頂
11日	遠藤ら4名登頂
14日	ＢＣ撤収
18日	ニューデリー着
22日	日本着

山名と時期　クラウン　1990年秋

隊の構成　（平均年令 34.9歳）　7,295m

隊　長	×舘野　秀夫	1949年2月	生（41）
登攀L	橋本　康弘	1954年8月	生（35）
医　師	×菅沼　勲	1929年9月	生（60）
隊　員	×二俣　勇司	1955年6月	生（35）
〃	柳沢　剛男	1962年9月	生（27）
〃	佐々木　剛	1965年10月	生（24）
〃	益子　英雄	1968年2月	生（22）
連絡官	李		

位置　中国、新疆ウイグル自治区

結果　9月27日、BCへ下山中の舘野、菅沼の2名がFルンゼ出合で氷河雪崩に遭い行方不明となる。このため6,320mで登頂を断念した。

キャンプ配置

BC　4,000m
ABC　4,300m
C1　4,400m
C3　5,800m

報告書　なし「ヒマラヤ203号」1991年1月号

行動概要　（1990年8月15日～10月26日）

8月15日　日本発、北京、ウルムチ、カシュガルを経て22日マザー・ダラ着
23日　キャラバン開始
31日　BC建設
9月13日　C1建設
17日　C2建設
22日　C3建設
27日　6,320mに到達。BCへ下山中の舘野、菅沼Fルンゼ出合で行方不明となる。
28日～29日　捜索活動
10月11日　BC撤収
20日　カシュガル着
26日　帰国

山名と時期　ヌン　1991年夏

隊の構成　（平均年令 40.5歳）　7,135m

隊　長	中岡　久	1949年9月	生（41）
副隊長	関根　幸次	1933年10月	生（57）
登攀L	橋本　康弘	1954年8月	生（36）
〃	伊藤　守	1954年11月	生（36）
隊　員	井上　博之	1934年4月	生（57）
〃	沢田　幸子	1940年12月	生（50）
〃	田村　正勝	1942年4月	生（49）
〃	滝口　良二	1949年1月	生（42）
〃	森山　英穂	1955年2月	生（36）
〃	吉岡　俊博	1959年7月	生（31）
〃	中山　裕朗	1963年12月	生（27）
〃	伊藤　英世	1967年1月	生（24）
連絡官	P.D. シン		

位置　インド、ジャム＆カシミール州

結果　8月14日、西稜から橋本、田村、中山の3名が登頂に成功。

キャンプ配置

BC　4,100m
C1　4,900m
C2　5,350m
C3　5,900m
C4　6,400m

報告書　「秀麗ヌン峰を攀じる」B5判　カラー2頁　71頁　1922年6月30日刊

行動概要　（1991年7月14日～8月24日）

7月14日　本隊日本発、ニューデリー着
24日　BC建設
29日　C1建設
8月1日　C2建設
5日　C3建設
6日　C4建設
14日　橋本ら3名登頂
18日　BC撤収
20日　ニューデリー着
24日　日本着

山名と時期　カンチェンジュンガ　1991年春

隊の構成　（平均年令 32歳）　8,586m

隊　長	尾形　好雄	1948年7月	生（42）
副隊長	名塚　秀二	1954年11月	生（36）
隊　員	新郷　信廣	1943年3月	生（48）
〃	吉田　秀樹	1953年5月	生（37）
〃	今村　裕隆	1959年4月	生（31）
〃	田辺　　治	1961年1月	生（30）
〃	江塚　進介	1961年4月	生（29）
〃	佐藤　光由	1961年4月	生（29）
〃	小田　隆三	1962年9月	生（28）
〃	後藤　文明	1965年5月	生（25）
〃	×星野　龍史	1967年11月	生（23）
〃	秋山　　剛	1970年9月	生（20）
〃	×北川みはる	1949年4月	生（41）
〃	貝塚　珠樹	1961年3月	生（30）
インド川	フカム・シン		
〃	C.R.パタナイン		
〃	カネイヤ・ラル		
〃	×ツェワン・サマンラ		
〃	サントシュ・ヤダヴ（F）		
〃	シェルップ・チョルデン		
〃	ペマ・シェルパ		
〃	ケム・ラジュ・タクール		
〃	×パサン・シェルパ		
〃	スンダル・シン・マルトリア		
〃	ゴビン・シン・ラワット		
〃	ジョット・シン・パンダリ		
〃	サルキ・ブディア		
〃	プルバ・レプチャ		
〃	ロブサン・ツェリン		
〃	スマン・クティヤル		
〃	ＢＣ要員5名		

行動概要　（1991年2月28日～6月16日）

2月28日	日本発、ニューデリー着
3月31日	ＢＣ建設（殿は4月28日ＢＣ入り）
5月24日	名塚ら3名が登頂成功
25日	シャルマら3名が登頂成功
30日	ＢＣ撤収
	ニューデリー着

位置　インド、シッキム州

結果　5月24日、北東支稜から名塚、今村、小田の3名が登頂。翌日シャルマ、サマンラ、カネヤ・ラルの3名も登頂した。

キャンプ配置

ＢＣ	4,935m	（3月31日）
ＡＢＣ	5,200m	（4月15日）
Ｃ1	5,700m	（　20日）
Ｃ2	6,300m	（　27日）
Ｃ3	6,800m	（5月4日）
Ｃ4	7,450m	（　9日）
Ｃ5	7,850m	（　15日）
Ｃ6	7,950m	（　23日）

特記事項　インドとの合同登山。5月17日にはＣ5からアタックに出たパサン・シェルパが滑落、行方不明となる。

報告書　「カンチェンジュンガ－西・東－」
Ｂ5判　カラー8頁　358頁　1993年10月刊

登頂記　今村　裕隆

ウエスト・コルから岩稜を30m位登ると、もっと先に行っているだろうと思った小田君が目の前の雪壁を登っている。1人でないと思うと気が楽になった。

コルから先は、ヤルン氷河側のミックス壁となった急斜面をトラバース気味に登る。フィックス・ロープも所々残っている。頂上までは直線距離ではたいした事ないがアップ・ダウンが多く、時間と体力を使ってしまう。

頂上直下だと思われる大岩の下に着く。もし頭上の大岩が頂上なら、カンチェンジュンガの真の頂上は踏まないという不文律があり、もうここから引き返してもいいんじゃないかと思う。

念の為にＢＣの隊長に連絡を取ってみると、'80年の山学同志会のルート図ではチムニーを登り雪の台地になった所だと言う。まだ先かと不安になる。

その間、小田君が右から回り込み大岩の上にでると古いバンブーや酸素ボンベがあると言う。やっと疲れた体をそこまで引き上げると、下からは想像もできない雪の台地となっていた・－。

15時23分、小田、今村も登頂した事を伝え、互いに記念写真を撮る。

山名と時期　シュエバオ・ディン　1991年夏

隊の構成　（平均年令 39.1歳）　5,588m

隊　長	酒井　國光	1939年4月	生（52）
秘書長	山森　欣一	1944年2月	生（47）
隊　員	江尻　健二	1933年5月	生（58）
〃	平川　宏子	1940年2月	生（48）
〃	三輪　　力	1942年8月	生（51）
〃	森山　安次	1949年12月	生（41）
〃	戸部　秀男	1950年9月	生（40）
〃	久保　　均	1954年6月	生（37）
〃	柏倉　秀克	1956年3月	生（35）
〃	小野田　靖	1957年4月	生（34）
〃	中居　満穂	1962年1月	生（29）
〃	合田　祐介	1968年5月	生（23）
〃	山森　直樹	1977年11月	生（13）
連絡官	童　明　純		

位置　中国、四川省北部

結果　8月12日、南稜から森山、平川、戸部、久保、柏倉が登頂。13日にも酒井、中居、合田が登頂した。

キャンプ配置

ＢＣ　4,170m

Ｃ１　5,100m

特記事項　江尻隊員不調となり、山森親子と連絡官が付き添って松藩まで下山。後日、三輪も下山。

報告書　「麗しき四川の夏」Ｂ５判　60頁　1992年12月１日刊

行動概要　（1991年８月１日～21日）

８月１日	日本発、北京経由成都着
３日	成都発、松藩を経て４日麻病村着
５日	ＢＣ撤収
７日	江尻、山森父子下山
11日	Ｃ１建設
12日	森山ら５名登頂
13日	酒井ら３名登頂
15日	ＢＣ撤収
16日	成都着
21日	日本着

山名と時期　ミニヤ・コンカ　1991年秋

隊の構成　（平均年令 32.5歳）　7,556m

隊　長	山森　欣一	1944年2月	生（47）
副隊長	松舘　正義	1944年4月	生（47）
隊　員	伊藤　清春	1950年12月	生（40）
〃	森谷　雅春	1954年8月	生（37）
〃	松田　靖彦	1959年3月	生（32）
〃	中川　　裕	1960年8月	生（31）
〃	居川　康祐	1962年1月	生（29）
〃	河内　正樹	1962年2月	生（29）
〃	林　　雅樹	1963年11月	生（27）
〃	千葉　真嗣	1966年2月	生（25）
〃	高見　清十	1966年8月	生（25）
〃	川上　　豪	1969年10月	生（21）
連絡官	高　　敏（27）		

位置　中国、四川省南西部

結果　ハイローコー～北東稜からの登頂を目指したが、コル上の6,400mで登頂を断念した。

キャンプ配置

ＢＣ　3,400m

Ｃ１　4,200m

Ｃ２　5,000m

Ｃ２′　5,200m

Ｃ３　5,800m

報告書　「天壇の山に挑む」Ｂ５判　128頁　1992年５月号刊

行動概要　（1991年９月10日～11月11日）

９月10日	日本発、北京を経由して成都着
13日	成都発、二郎山を越えてモーシ着
14日	キャラバン開始
15日	ＢＣ建設
22日	Ｃ１建設
29日	Ｃ２建設
10月９日	Ｃ２′建設
13日	Ｃ３建設
20日	北東稜6,400mに到達
31日	ＢＣ撤収
11月３日	成都着
11日	日本着

山名と時期　シンチン　1992年春

隊の構成　（平均年令 34.7歳）　6,860m

隊　長	福山　　佶	1943年8月	生（48）
副隊長	坂上　利明	1955年5月	生（37）
登攀L	増田　　隆	1960年9月	生（31）
隊　員	中田　和良	1950年2月	生（42）
〃	林本　　章	1964年5月	生（27）
〃	城田陽一朗	1969年4月	生（23）
連絡官	高　成学		

位置　中国、青海省

結果　5月18日、増田、林本の2名が初登頂に成功した。

キャンプ配置

BC	5,000m
ABC	5,600m
C1	6,000m
C2	6,350m

報告書　なし「ヒマラヤ250号」1992年9月号

行動概要　（1992年4月23日～6月13日）

4月23日	日本発、北京、西宁、ゴルムドを経由して高所順応を行い5月4日BC建設。
5月7日	ABC建設
15日	C1建設
17日	C2建設
18日	増田、林本の2名初登頂に成功
24日	BC撤収
	西宁着
6月13日	帰国

山名と時期　ムスターグ・アタ　1992年夏

隊の構成　（平均年令 40.2歳）　7,546m

隊　長	山森　欣一	1944年2月	生（48）
副隊長	出口　　當	1942年4月	生（50）
登攀L	橋本　康弘	1954年8月	生（37）
〃	×二俣　勇司	1955年6月	生（37）
医　師	斎藤　　繁	1961年11月	生（30）
隊　員	木辺　正夫	1932年1月	生（60）
〃	田村　正勝	1942年4月	生（50）
〃	×滝田　　収	1957年3月	生（35）
〃	秋山　和彦	1959年1月	生（33）
〃	中川　　裕	1960年8月	生（31）
〃	橋本　珠樹	1961年3月	生（31）
連絡官	黄　先　青（37）		

位置　中国、新疆ウイグル自治区

結果　西稜の約7,000mまでで登頂断念

キャンプ配置

BC	4,350m
C1	5,300m
C2	6,000m
C3	6,700m

特記事項　クラウン峰の高所順応を目的に入山。

報告書　「永別　皇冠峰」B5判　カラー1頁　134頁　1994年5月号

行動概要　（1992年7月14日～8月14日）

7月14日	日本発、北京、ウルムチを経て16日カシュガル着
19日	カシュガル発、スバシ着
23日	BC建設
26日	C1建設
30日	C2建設
8月5日	C3建設
10日	アタックするも寒気のため約7,000mで断念
14日	BC撤収、カシュガル着

山名と時期　ヌン　1992年夏

隊の構成　（平均年令 33.4歳）　7,135m

隊　長	今村　裕隆	1959年4月	生（33）
副隊長	関根　幸次	1933年10月	生（58）
登攀L	須藤　圭一	1953年5月	生（39）
隊　員	遠藤　京子	1938年5月	生（54）
〃	森谷　雅春	1954年8月	生（37）
〃	安藤　　斎	1959年7月	生（33）
〃	森尾　直康	1960年5月	生（32）
〃	古関　正雄	1961年3月	生（31）
〃	野沢井　歩	1964年8月	生（27）
〃	佐藤　　健	1965年5月	生（27）
〃	高野　雅洋	1966年2月	生（26）
〃	鈴木　典仁	1966年12月	生（25）
〃	山口　直之	1968年10月	生（23）
〃	川上　　豪	1969年10月	生（22）
連絡官	S.B.シャルマ		

位置　インド、ジャム&カシミール州

結果　8月13日、西稜から今村、森谷、野沢井が登頂。15日にも関根、須藤、森尾、古関、佐藤が登頂した。

キャンプ配置

BC	4,100m
C1	4,900m
C2	5,400m
C3	5,900m
C4	6,300m

報告書　「NUN」B5判　72頁　1993年10月

行動概要　（1992年7月19日～8月23日）

7月19日	本隊日本発、ニューデリー着
20日	ニューデリー発、レー着
22日	レー発、23日タンゴール着
26日	BC建設
28日	C1建設
8月1日	C2建設
6日	C3建設
11日	C4建設
18日	BC撤収

山名と時期　サワスワティ　1992年夏

隊の構成　（平均年令 35.3歳）　6,940m

隊　長	寺沢　玲子	1951年8月	生（40）
隊　員	加藤　孝子	1948年9月	生（43）
〃	白沢　真弓	1959年6月	生（33）
〃	亀田　佳恵	1959年10月	生（32）
〃	山口恵美子	1959年5月	生（33）
〃	楠田　愛里	1961年3月	生（31）
インド側	サントシュ・ヤダヴ（24）		
〃	ジョティカ・ネギ（27）		
〃	バニタ・ティムンピ（24）		
〃	マムタ・タクール（21）		
〃	リタ・パテル（32）		
連絡官	アルパナ・パンテイ（22）		

位置　インド、西部ガルワール山群

結果　8月18日、インド側メンバー全員が初登頂に成功。翌日、日本側6名全員も登頂した。

キャンプ配置

BC	4,350m
BC	5,160m
C1	5,420m
C2	5,730m
C3	6,450m

報告書　「ナマステ.／サラスワティ」B5判　カラー1頁　107頁　1994年4月号

行動概要　（1992年7月19日～9月3日）

7月19日	日本発、ニューデリー着
23日	ニューデリー発、26日バドリナート着
28日	キャラバン開始
8月6日	BC建設
9日	C1建設
11日	C2建設
17日	C3建設
18日	インド側初登頂
19日	日本側全員登頂
22日	BC撤収
28日	ニューデリー着
9月3日	日本着

山名と時期　ダークニャン　1992年夏

隊の構成　（平均年令 48.9歳）　5,355m

隊　長	酒井　國光	1939年4月	生（53）
隊　員	岩田　達雄	1928年5月	生（64）
〃	仁名野完治	1936年2月	生（56）
〃	天野　一郎	1947年4月	生（45）
〃	小太刀　健	1948年8月	生（43）
〃	大久保　博	1949年4月	生（43）
〃	谷田川　武	1953年9月	生（38）
連絡官	高　　敏	（28）	

位置　中国、四川省西部

結果　8月9日、酒井、岩田、仁名野、小太刀、大久保、谷田川が登頂。13日にも仁名野、天野が登頂した。

キャンプ配置

BC　4,350m

特記事項　当初計画は、シャオ・シュエバオ・ディンであったが、道路事情で転進したもの。

報告書　「美しき谷の姉妹峰」B5判　98頁　1993年3月20日刊

行動概要　（1992年7月30日～8月19日）

7月30日	日本発、北京経由成都着
8月1日	小雪宝頂を断念し康定へ向かうため成都を出発。しかし、ここも豪雨のため3日成都に戻る。
4日	成都発、5日リーロン着
7日	BC建設
9日	6名が登頂
11日	アル・クーニャン5,100mまで
13日	2名が登頂
14日	BC撤収
15日	成都着
19日	日本着

山名と時期　クラウン　1992年秋

隊の構成　（平均年令 40.2歳）　7,295m

隊　長	山森　欣一	1944年2月	生（48）
副隊長	出口　　當	1942年4月	生（50）
登攀L	橋本　康弘	1954年8月	生（38）
〃	×二俣　勇司	1955年6月	生（37）
医　師	斎藤　　繁	1961年11月	生（30）
隊　員	木辺　正夫	1932年1月	生（60）
〃	田村　正勝	1942年4月	生（50）
〃	×滝田　　収	1957年3月	生（35）
〃	秋山　和彦	1959年1月	生（32）
〃	中川　　裕	1960年8月	生（31）
〃	橋本　珠樹	1961年3月	生（31）
連絡官	黄　先　青	（37）	

位置　中国、新疆ウイグル自治区

結果　南東稜の約7,000mまで到達するものの登頂を断念した。

キャンプ配置

BC　4,000m
C1　4,250m
C2　4,400m
C3　5,100m
C4　5,800m
C5　6,500m

特記事項　アタックに向かいC3へ移動中の二俣、中川が雪崩に遭い、二俣が行方不明となり捜索しても発見できなかった。

報告書　「永別　皇冠峰」B5判　カラー1頁　134頁　1994年5月号

行動概要　（1992年8月15日～11月1日）

8月15日	カシュガルにて出発準備
22日	キャラバン開始
28日	BC建設
9月22日	C5建設
28日	7,000mに到達
10月2日	アタックの先発としてC4へ移動中の2名が雪崩に遭い二俣行方不明となる。
3日	捜索活動5日まで
7日	再度アタックするもC5で断念
15日	BC撤収
23日	カシュガル到着
11月1日	日本着

山名と時期　ピラミッド・ピーク　1993年春

隊の構成　（平均年令 36.2歳）　7,123m

隊　長	尾形　好雄	1948年7月	生（44）
副隊長	新郷　信廣	1943年3月	生（50）
隊　員	岩崎　　洋	1960年2月	生（33）
〃	鈴木　正典	1961年11月	生（31）
〃	平田　和照	1970年1月	生（23）
インド側	ハルバジン・シン（36）		
〃	A.S.ラワット（25）		
〃	スンダル・シン（45）		
〃	ジョ・シン（28）		
〃	ロブサン・シェルパ（25）		
〃	ヒラ・ラム（29）		
〃	チョダ・ツェリン（38）		
〃	ドゥルビン・シン（29）		
〃	プルナ・クマール・グルン（36）		
〃	プルバ・レプチャ（32）		

位置　インド、シッキム州

結果　4月24日、岩崎、尾形、ジョ・シン、ロブサン、新郷、スンダル・シン、プルバが初登頂に成功。26日鈴木、平田、ヒラ・ラムも登頂。

キャンプ配置

BC	5,000m
ABC	5,450m
C1	5,600m
C2	6,700

特記事項　インド、ITBPと合同登山。

報告書　なし「ヒマラヤ261号」1993年8月号

行動概要　（1993年2月21日～5月　日）

2月21日	日本発、ニューデリー着
3月5日	ニューデリー発、バグドグラ、シリグリを経由してガントック着
9日	ガントック発、ラチェン着
13日	キャラバン開始
17日	BC建設
4月7日	ABC建設
11日	C1建設
19日	C2建設
24日	尾形ら7名が初登頂に成功
5月9日	ガントック着

山名と時期　ムスターグ・アタ　1993年夏

隊の構成　（平均年令 39.2歳）　7,546m

隊　長	酒井　國光	1939年4月	生（54）
副隊長	西嶋錬太郎	1942年8月	生（50）
隊　員	樋上　嘉秀	1944年6月	生（49）
〃	天城　敞彦	1947年5月	生（46）
〃	谷田川　武	1953年9月	生（39）
〃	金森　博之	1954年7月	生（39）
〃	高橋　敏雄	1958年10月	生（34）
〃	志小田美弘	1959年1月	生（34）
〃	池上　邦彦	1961年2月	生（32）
〃	中島　俊弥	1964年12月	生（28）
〃	伊藤　英世	1967年1月	生（26）
連絡官	高　志　堅		

位置　中国、新彊ウイグル自治区

結果　8月17日、西嶋、高橋、志小田、中島、伊藤が登頂成功。18日にも残る6名登頂。

キャンプ配置

BC	4,350m
C1	5,200m
C2	6,200m
C3	6,850m

特記事項　18日登頂のBパーティは下山中、ホワイトアウトと夕暮れのため7,100m付近でビバークとなる。

報告書　「葱嶺の白き父なる山」B5判　98頁　カラー1頁　1994年4月刊

行動概要　（1993年7月24日～8月28日）

7月24日	日本発、北京、ウルムチを経て26日カシュガル着
28日	カシュガル発、スバシ着
8月1日	BC建設
5日	C1建設
9日	C2建設
16日	C3建設
17日	西嶋ら5名登頂
22日	BC撤収
28日	帰国

山名と時期　ヌン　1993年夏

隊の構成　（平均年令 33歳）　7,135m

隊　長	中川　裕	1960年8月	生（32）
副隊長	林　雅樹	1963年11月	生（29）
医　師	能勢　眞人	1945年9月	生（47）
隊　員	柳沢　剛男	1962年9月	生（30）
〃	金　保國	1956年10月	生（36）
〃	林　英子	1962年9月	生（30）
〃	武田　澄人	1965年7月	生（27）
連絡官	ビレンダール・シン（35）		

位置　インド、ジャム＆カシミール州

結果　8月15日、中川、林が6,700mまで到達するも悪天のため登頂を断念した。

キャンプ配置

BC	4,000m
C1	4,900m
C2	5,400m
C3	5,900m
C4	6,400m

報告書　なし「ヒマラヤ265号」1993年12月号

行動概要　（1993年7月18日～8月25日）

7月18日	本隊日本発、ニューデリー着
19日	ニューデリー発、レー、カルギル、タンゴールを経由して28日BC建設
7月31日	C1建設
8月5日	C2建設
9日	C3建設
14日	C4建設
15日	2名が西稜6,700mまで到達するも悪天のため登頂を断念した。
19日	BC撤収
20日	レー着
25日	帰国

山名と時期　ユイチュ　1993年夏

隊の構成　（平均年令 44.8歳）　6,179m

隊　長	山森　欣一	1944年2月	生（49）
登攀L	森山　安次	1949年12月	生（43）
隊　員	森山公美丈	1941年9月	生（51）
〃	得田　公明	1949年1月	生（44）
〃	脇田　康治	1950年9月	生（42）
〃	太田　康夫	1953年3月	生（40）
連絡官	樊　永　宁（37）女性		

位置　中国、青海省

結果　8月2日、南面から脇田、太田の2名が登頂に成功した。

キャンプ配置

BC	5,050m
C1	5,650m

報告書　「崑崙の頂を踏む」B5判　52頁
1994年8月10日刊

行動概要　（1993年7月22日～8月11日）

7月22日	日本発、北京を経由して23日西宁着
25日	西宁発、ゴルムド経由、高所順応をしながら29日BC建設
8月2日	C1建設
3日	脇田、太田登頂に成功
5日	BC撤収
7日	西宁着
11日	帰国

山名と時期　ルンポ・カンリ　1994年春

隊の構成　（平均年令 39.6歳）　7,095m

隊　長	八嶋　寛	1950年３月	生（44）
医　師	後藤　真	1949年２月	生（45）
隊　員	×新舛　憲三	1949年４月	生（44）
〃	桶川和気夫	1950年３月	生（44）
〃	太田　康夫	1953年３月	生（41）
〃	瀬尾　正敏	1953年８月	生（40）
〃	正木　直子	1956年10月	生（37）
〃	北村　俊之	1962年８月	生（31）
〃	杉浦　広幸	1963年５月	生（30）

連絡官　顔　金安（42）

位置　中国、チベット自治区

結果　北東稜上6,200ｍのＣ１までで北面に転進したが断念した。

キャンプ配置

ＢＣ　5,200m
Ｃ１　6,200m
ＮＣ１　5,950m

報告書　「ルンポ・カンリ」Ｂ５判　50頁
カラー３頁　1995年４月10日刊

行動概要　（1994年４月11日～６月15日）

４月11日	本隊日本発、カトマンズを経由して18日ザンムー着。高所順応など行い22日ＢＣ建設
５月４日	北東稜にＣ１建設
11日	北面に転進決定
27日	ＢＣ撤収
30日	カン・リンポチェへ出発
６月７日	ラサ着
15日	帰国

山名と時期　ユイシュ　1994年夏

隊の構成　（平均年令 44歳）　5,933m

隊　長	寺沢　玲子	1951年８月	生（42）
隊　員	沢田　幸子	1940年12月	生（53）
〃	市川　春代	1950年１月	生（44）
〃	辻野　治子	1956年12月	生（37）
中国側	樊永宁（37）		
〃	庄連文（22）		
〃	馬占鳳凰（22）		

位置　中国、青海省

結果　７月14日、日中双方７名全員と通訳の王が登頂に成功した。

キャンプ配置

ＢＣ　4,350m

特記事項　青海省登山協会との女性合同登山。青海側は未踏峰としていたが、頂上には鉄塔が立っていた。

報告書　「玉虚峰」　Ｂ５判　72頁
1996年２月10日刊

行動概要　（1994年６月30日～７月24日）

６月30日	日本発、北京を経由して西宁着
７月３日	西宁発、高所順応を行いゴルムドを経由して10日ＢＣ建設
14日	日中双方７名が全員登頂に成功
16日	ＢＣ建設
20日	西宁着
24日	帰国

山名と時期　ユイチュ　1994年夏

隊の構成　（平均年令 47.8歳）　6,179m

隊　長	酒井　國光	1939年4月	生（55）
隊　員	樋上　嘉秀	1944年6月	生（50）
〃	山岸　和男	1945年2月	生（49）
〃	山岸　喜世	1948年5月	生（46）
〃	森山　安次	1949年12月	生（44）
〃	戸部　秀男	1950年9月	生（43）
連絡官	李　軍（58）		

位置　中国、青海省

結果　8月3日、南西稜から全員登頂。

キャンプ配置

BC	5,050m
C1	5,300m

報告書　なし「ヒマラヤ277号」1994年12月号

行動概要　（1994年7月21日～8月13日）

7月21日	日本発、北京を経由して22日西宁着
24日	西宁発、ゴルムドを経由して高所順応を行い28日BC建設
8月2日	C1建設
3日	全員登頂に成功
6日	BC撤収
10日	西宁着
13日	帰国

山名と時期　ムスターグ・アタ　1994年夏

隊の構成　（平均年令 44.4歳）　7,546m

隊　長	飛田　和夫	1946年1月	生（48）
副隊長	関根　幸次	1933年10月	生（60）
隊　員	田村　正勝	1942年4月	生（53）
〃	泉田　清幸	1948年3月	生（46）
〃	大久保　博	1949年4月	生（45）
〃	日南長二郎	1955年3月	生（39）
〃	小林　剛	1973年12月	生（20）

位置　中国、新疆ウイグル自治区

結果　8月18日、飛田、田村、小林が登頂。1日にも残る4名も登頂した。

キャンプ配置

BC	4,350m
C1	5,200m
C2	6,200m
C3	6,850m

報告書　なし「ヒマラヤ278号」1995年1月号

行動概要　（1994年7月21日～8月28日）

7月21日	日本発、北京、ウルムチを経由して23日カシュガル着
25日	カシュガル発、スバシを経由して29日BC建設
8月2日	C1建設
7日	C2建設
16日	C3建設
18日	飛田、田村、小林登頂
19日	関根ら4名も登頂
21日	BC撤収しカシュガル着
28日	帰国

山名と時期　ミニヤ・コンカ　1994年秋

隊の構成　（平均年令 35.9歳）　7,556m

隊　長　山森　欣一　1944年2月　生（50）
副隊長　渡辺　斉　1940年3月　生（54）
登攀L　×福澤　卓也　1965年10月　生（28）
隊　員　高田　幸子　1950年2月　生（44）
〃　×渡辺　靖之　1966年12月　生（27）
〃　×鈴木　洋介　1967年9月　生（26）
〃　×工藤　潤二　1971年10月　生（22）
連絡官　高　敏（30）

位置　中国、四川省、横断山脈

結果　9月20日に北東支稜6,050mに到達するも、28日C3にて福澤、渡辺靖之、鈴木、工藤の4名が行方不明となる。

キャンプ配置

BC　3,950m
C1　4,250m
C2　4,950m
C3　5,850m

報告書　「ミニヤ・コンカ峰」B5判　116頁
カラー8頁　モノクロ16頁　1996年4月14日刊

行動概要　（1994年8月17日～10月15日）

8月17日　日本発、北京を経由して18日成都着
21日　成都発、石棉、磨石、新興を経由して、25日BC建設
30日　山森肺水腫のため磨石へ下山
31日　C1建設
9月2日　高田不調のため磨石へ下山
6日　C2建設
7日　山森BC復帰
10日　高田BC復帰
19日　C3建設
20日　福澤、渡辺靖北東支稜6,050mへ到達
28日　福澤、渡辺靖、鈴木、工藤の4名がC3で行方不明となる。
30日＝10月1日　捜索活動
10月6日　BC撤収
9日　成都着
15日　帰国

山名と時期　クンヤン・チッシュ　1995年夏

隊の構成　（平均年令 42.5歳）　7,852m

隊　長　飛田　和夫　1946年1月　生（49）
隊　員　田村　正勝　1942年4月　生（53）
〃　大谷日佐夫　1969年8月　生（25）
〃　寺沢　玲子　1951年8月　生（43）
連絡官　K.A.サティ（23）

位置　パキスタン、ヒスパー山群

結果　北東の東側6,700mで登頂断念。

キャンプ配置

BC　4,050m
C1　4,400m
C2　4,700m
C3　5,000m
C4　6,150m
C5　6,450m

報告書　なし「ヒマラヤ290号」1996年1月号

行動概要　（1995年6月12日～8月25日）

6月12日　本隊日本発、イスラマバード着
14日　イスラマバード発、16日パスー着
20日　キャラバン開始
25日　BC建設
30日　C1建設
7月6日　C2建設
12日　C3建設
17日　C4建設
8月2日　C5建設
4日　6,700mに到達するも断念
10日　BC撤収
14日　イスラマバード着

山名と時期　ヌン　1995年夏

隊の構成　（平均年令 41.6歳）　7,135m

隊　長	酒井　國光	1939年4月	生（56）
副隊長	樋上　嘉秀	1944年6月	生（51）
登攀L	中川　　裕	1960年8月	生（34）
隊　員	中村　喜吉	1947年3月	生（48）
〃	山岸　喜世	1948年5月	生（47）
〃	東條　利文	1948年5月	生（44）
〃	牧野総治郎	1954年4月	生（41）
〃	中島　清治	1954年9月	生（40）
〃	安藤　　斎	1959年7月	生（36）
〃	阿部　訟二	1963年7月	生（31）
〃	中島　俊弥	1964年12月	生（30）

連絡官　ラビ・クマール（28）

位置　インド、ジャム＆カシミール州

結果　8月16日、中川、阿部、両中島が登頂。

キャンプ配置

BC	4,100m
C1	4,900m
C2	5,300m
C3	5,850m
C4	6,300m

報告書　なし「ヒマラヤ289号」1995年12月号

行動概要　（1995年7月23日～8月27日）

7月23日	本隊日本発、ニューデリーを経てレー着24日
26日	レー発、カルギルを経て30日BC建設
8月3日	C1建設
7日	C2建設
11日	C3建設
15日	C4建設
16日	中川、阿部、両中島の4名が登頂成功
19日	BC撤収
21日	レー着
27日	帰国

山名と時期　ムスターグ・アタ　1996年夏

隊の構成　（平均年令 41.3歳）　7,546m

隊　長	中川　　裕	1960年8月	生（34）
副隊長	石川　龍彦	1952年2月	生（44）
隊　員	西尾謙市郎	1947年9月	生（48）
〃	佐藤　英樹	1949年10月	生（46）
〃	×品川　幸彦	1968年2月	生（28）

連絡官　高　志堅（36）

位置　中国、新疆ウイグル自治区

結果　8月13日に西稜から中川、品川が登頂に成功。17日にも石川、北條、佐藤も登頂した。

キャンプ配置

BC	4,400m
C1	5,400m
C2	6,150m
C3	6,950m

報告書　なし「ヒマラヤ301号」1996年12月号

行動概要　（1996年7月20日～8月25日）

7月20日	日本発、北京、ウルムチを経て、22日にカシュガル着
28日	スバシを経てBC建設
8月1日	C1建設
6日	C2建設
12日	C3建設
13日	中川、品川登頂
17日	石川、北條、佐藤登頂
20日	BC撤収し、カシュガル着
25日	帰国

山名と時期　クーラ・カンリII　1997年春
隊の構成　（平均年令 44歳）　7,418m
隊　長　山森　欣一　1944年2月　生（53）
副隊長　樋上　嘉秀　1944年6月　生（52）
登攀L　宮崎　久夫　1949年10月　生（47）
隊　員　干場　晃　1951年6月　生（45）
〃　太田　康夫　1953年3月　生（44）
〃　伊藤　政義　1954年1月　生（43）
〃　吉田　健吾　1972年10月　生（24）
チベット側ドジブ（57）
〃　ガヤ（46）
〃　ドブジェ（42）
〃　ジャツォ（37）
〃　シャオチミ（32）
位置　中国、チベット自治区
結果　5月2日、6,350mに到達するもクレバスのため登頂を断念した。
キャンプ配置
BC　4,250m
ABC　5,400m
C1　5,900m
特記事項　チベット登山協会との合同登山。
報告書　未踏峰　クーラ・カンリII（7,418m）
B5判　90頁　2001年4月22日刊
行動概要　（1997年3月25日～5月23日）
3月25日　日本発、北京、成都を経て27日ラサ着
4月1日　ラサ発、ランカズー、チュツォを経て5日BC建設
13日　ABC建設
17日　C1建設
5月2日　6,350mに到達するもクレバスのため登頂を断念
13日　BC撤収
15日　ラサ着
23日　帰国

山名と時期　ムスターグ・アタ　1997年夏
隊の構成　（女性隊 平均年令 44.5歳）7,546m
隊　長　市川　春代　1950年1月　生（47）
副隊長　辻野　治子　1956年12月　生（40）
隊　員　沢田　幸子　1940年12月　生（56）
〃　堰代まさ子　1945年7月　生（51）
〃　狩野　明美　1954年8月　生（42）
〃　竹内　千恵　1966年5月　生（31）
連絡官　デリシャート（22）
位置　中国、新疆ウイグル自治区
結果　8月16日、西稜から竹内、沢田、市川、狩野の4名が登頂に成功した。
キャンプ配置
BC　4,400m
C1　5,100m
C2　6,000m
C3　6,750m
報告書　未完「ヒマラヤ313号」1997年12月号
行動概要　（1997年7月16日～8月24日）
7月16日　日本発、北京、ウルムチを経て18日にカシュガル着
22日　ゲズ渓谷、カラクリ湖を経てスバシ着
27日　BC建設
8月1日　C1建設
9日　C2建設
15日　C3建設
16日　竹内、沢田、市川、狩野登頂
19日　BC撤収、カシュガル着
24日　帰国

山名と時期　ニンチン・カンサ　1997年夏

隊の構成　（平均年令 43.3歳）　7,206m

隊　長	天城　敞彦	1947年5月	生（50）
登攀L	志小田美弘	1959年1月	生（38）
隊　員	野口　道雄	1936年9月	生（60）
〃	飛田　和夫	1946年1月	生（51）
〃	森山　安次	1949年12月	生（47）
〃	脇田　康治	1950年9月	生（46）
〃	鮫川　太一	1950年12月	生（46）
〃	石川　龍彦	1952年2月	生（45）
〃	加藤　和美	1953年2月	生（44）
〃	×滝田　　収	1957年3月	生（40）
〃	高橋　敏雄	1958年10月	生（38）
〃	川崎　浩史	1964年1月	生（33）
〃	森　　達尓	1970年9月	生（26）
連絡官	趙　玲々		

位置　中国、チベット自治区

結果　8月17日、南西稜（栃木ルート）から志小田、飛田、森山、加藤、高橋、川崎が登頂。
18日にも天城、野口、石川が登頂した。

キャンプ配置

BC	4,850m
C1	5,800m
C2	6,400m
C3	6,500m

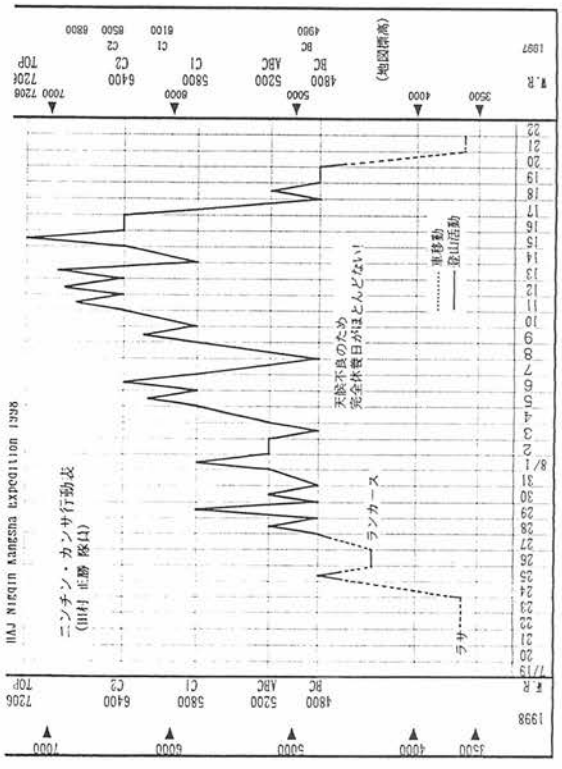
報告書　「寧金抗沙峰」B5判　62頁
カラー2頁　1999年6月20日刊

行動概要　（1997年7月20日～8月27日）

7月20日	北京、成都を経て22日ラサ着
28日	ランカーズを経てBC建設
8月5日	C1建設
11日	C2建設
16日	C3建設
22日	BC撤収、ラサ帰着
27日	帰国

ニンチン・カンサ（Ningqin Kangsha　宁青抗沙 7,206ｍ）　　－China－

ＢＣ裏からニンチン・カンサ西稜と主峰



山名と時期　ニンチン・カンサ　1998年夏

隊の構成　（平均年齢 44.0歳）7,206m

隊　長	関根　孝次	1933年10月	生（54）
登攀L	伊藤　　守	1954年11月	生（44）
隊　員	田村　正勝	1942年4月	生（56）
〃	長水　　洋	1949年7月	生（49）
〃	武部　秀夫	1952年12月	生（45）
〃　＊	日南長二郎	1955年3月	生（43）
〃	山本　　強	1955年12月	生（42）
〃	清水　久江	1963年10月	生（34）
〃	岩瀬　雄二	1964年9月	生（33）
〃	川上　浩史	1968年2月	生（30）
連絡官	楊　　建国	（45）中国登山協会	

位置　中国、チベット自治区

結果　8月15日、新しいルートである西稜から田村、武部、山本が初登攀に成功した。

キャンプ配置

BC	4,800m	（7月27日）
ABC	5,200m	（7月31日）
C1	5,800m	（8月4日）
C2	6,400m	（8月10日）

報告書　なし「ヒマラヤ325号」1998年12月号

特記事項　隊員名簿＊印の日南隊員は、ラサ滞在中に体調を崩したためBC入りせずラサからそのまま帰国した。

行動概要　（1998年7月19日～8月25日）

7月19日　北京、成都を経て21日ラサ着。
24日～26　ランカーズに移動し高所順応。
27日　西面4.800m地点にBC建設。
8月20日　BC撤収～ラサ
23日　ラサ～成都～北京
25日　帰国

登頂記　田村　正勝

8月15日　アタック

田村、武部、山本のアタック隊は3時に起き、6400mの仮C2を6時に出発。幸先よく晴れる。ビバーグ用具一式、フィックスロープ4本を持つ。雪の状態は上々、風なく寒くなく、フィックスに登降器もよく噛んで、8時、6700m台の頂稜下の雪壁基部に至る。無線を入れ、激励を受ける。

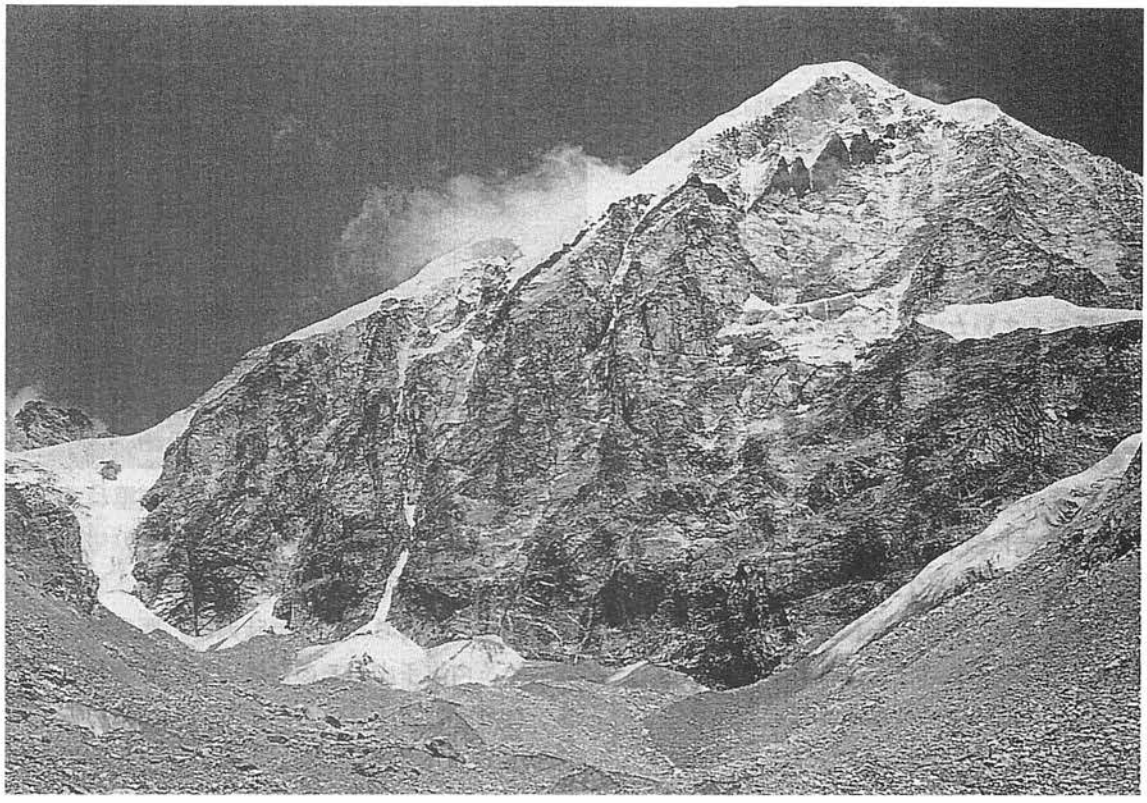
チベット高原西部に陽が当たり始め、しばしば眺めて感慨がある。荒涼として広がる5000m台の山波を眼下に見て改めてチベットにいるという実感があり、冷たく爽やかな高所の空気を感じ、登高意欲が高まるのだった。登頂を確信した。

フィックス終了点からデポロープで田村がさらに5ピッチフィックスし、その上さらに山本が2ピッチ敷設する。C2から計18ピッチ。これで下降用のロープ2本を除いて全て使いきり、頂稜まではフィックスなし。目測は頼りないが、この先は多分3、4ピッチぐらい。山本は傾斜は60度はあるというが、そんなにあったら大変だ、せいぜい45度を越えるぐらいだろう。山本はスタカットを主張したが、その必要はないと、田村が丁寧にステップを蹴り、思ったより早く頂稜線に出る。時は13時頃。

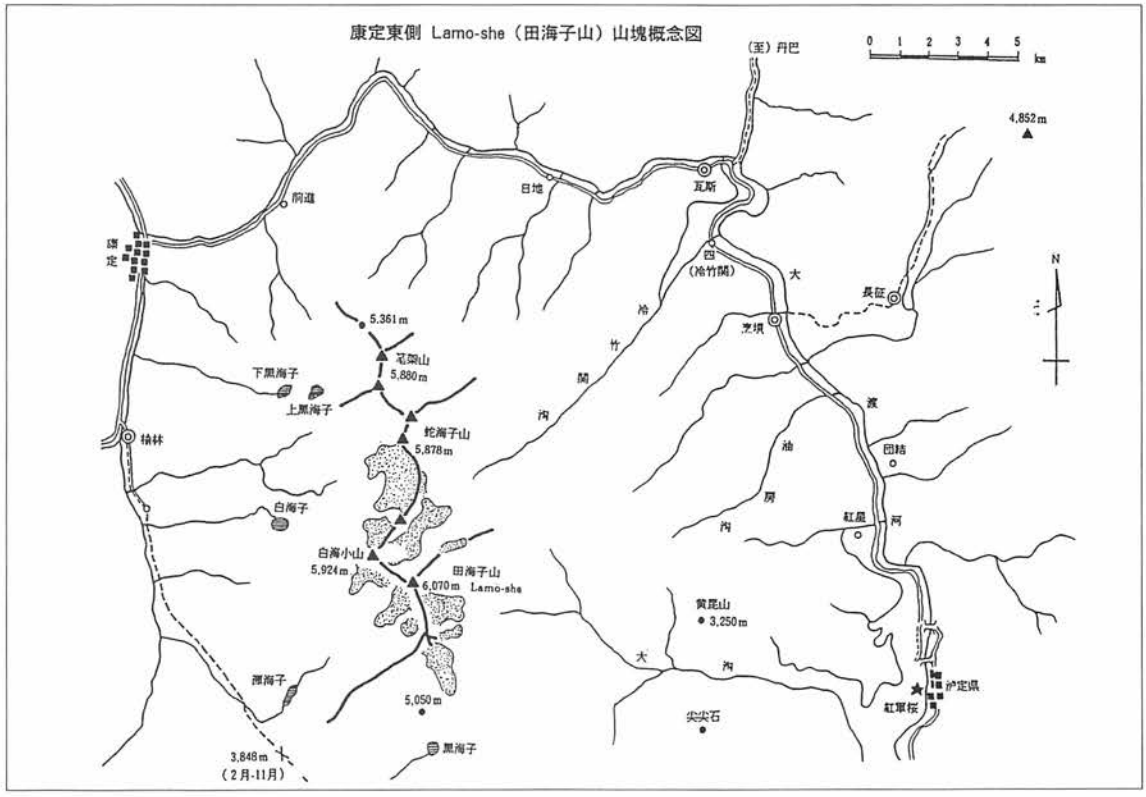
頂稜は東に伸び、ガスがかかって先は明らかではないが、南側も切れ落ちていて、雪庇が見える。緩い尾根をしばらく東へ行くと先が落ちている広い台地に至った。私の簡易高度計も7000m台を示していて、ここが頂上だということになり、勇んで無線を入れた。喜んでいると、ガスのなかに、さらに東に鞍部を挟んでぼーっと、お化けのような高い峰が現れた。ばつの悪い思いで登頂を取消し、疲れた体に鞭打ってさらに東へ向かう。

幸いなことに別に問題のない鞍部に30mほど降り、メドーサの頭のようなうすきみの悪い模様の氷の衝立の脇を登って、2ピッチぐらいで頂上に出た。東側の風に洗われた雪面に古い足跡のようなものがみえる。たぶん去年のものだろう。頂上は南側に弧をかいて弓なりに東西に長く、念入りに東の端まで行って登頂を宣言する。時は15時40分。隊長、連絡官から祝福を受け、なによりも無事期待に添えたことが嬉しい。あたりはガスが多く一部を除いて遠景は望めない。私は弟の散骨をした。山本も同じことをやっていた。

さて、退散、頂稜の端に帰って毎度の定時現象の吹雪となった。スノーバーの支点で2ピッチ下降してフィックスに至り、日没寸前にC2に帰幕できた。19時過ぎだったろう。



山頂直下に5つの神（岩峰）を有するラモ・シェ



山名と時期　ラモ・シェ　1998年夏

隊の構成　（平均年齢 50.1歳）6,070m

隊　長	酒井　國光	1939年4月	生（59）
副隊長	山岸　和男	1945年2月	生（53）
秘書長	谷田川　武	1953年9月	生（44）
隊　員	高羽　秀徳	1930年3月	生（68）
〃	高橋富貴夫	1936年3月	生（62）
〃	吉田　和宏	1953年7月	生（45）
〃	三宅　愛弓	1957年3月	生（41）
〃	牧　久真子	1958年6月	生（40）
〃	安藤　斎	1959年7月2日	生（39）
連絡官	王　華山	（41）四川省登山協会	

位置　中国、四川省

結果　8月9日、西面4,900m地点に谷田川が到達したが、氷河の状態が悪いため登山を断念。

キャンプ配置

ＢＣ　4,300m（8月7日）

Ｃ1　4,800m（8月10日）

最高到達点4,900m（8月9日）

報告書　なし「ヒマラヤ324号」1998年11月号

行動概要　（1998年8月1日～8月25日）

8月1日　北京を経て2日成都着。
3日　成都～雅安
4日　雅安～康定
5日　康定～老榆林
7日　西面4,300m地点にＢＣ建設。
10日　Ｃ1建設
14日　ＢＣ撤収～康定
16日　康定～峨眉山
18日　峨眉山～楽山
23日　帰国

登山記

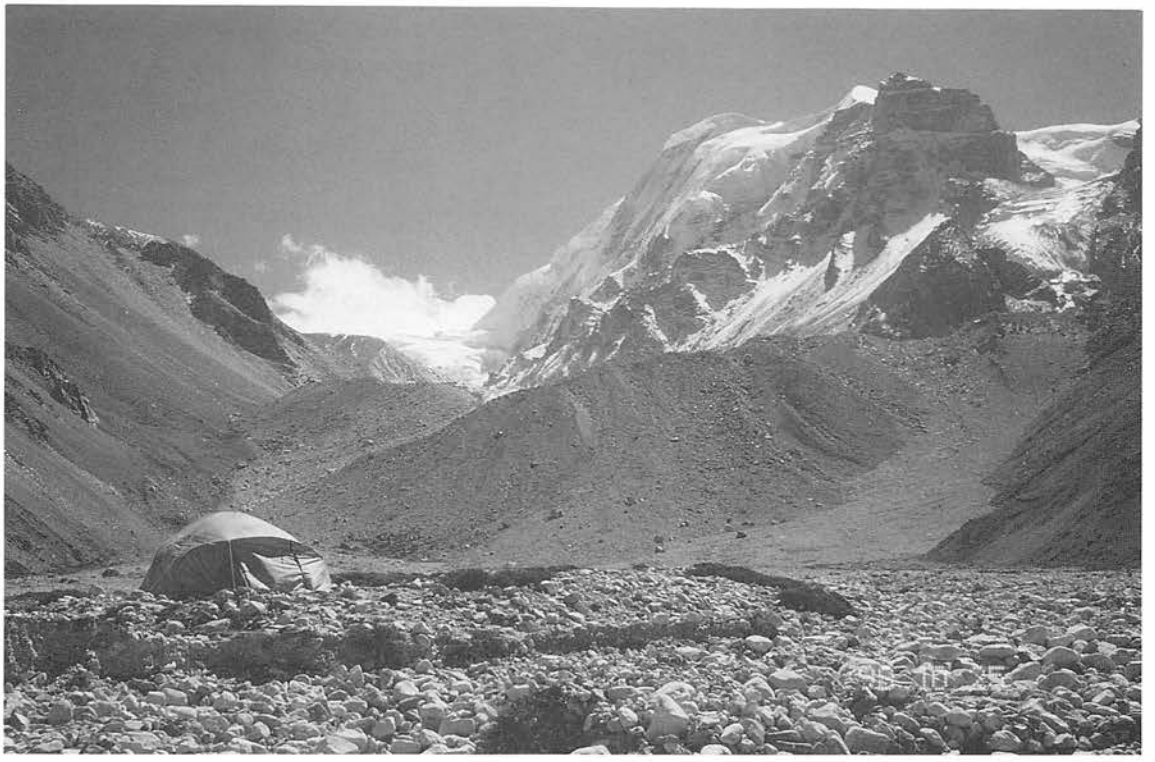
8月9日　ＢＣ－上部偵察

7時起床、西方の山々が新雪を付け美しく見える。晴天になることを祈って、9時、副隊長、谷田川、安藤の偵察隊が出発、ガスが出てくるが、昨日よりは視界が効くとのことでゆっくりと歩を進める。10時40分、尾根状の先端に到着、それから先、足場の悪い中を赤布を立てながら行く。昨日、隊長が話をしていたように確かに凄いモレーンである。大小の岩が複雑に波打っている。同行した王連絡官も「こんな地形は珍しい。ミニヤ・コンカにも似たような所があるが」という。特に大きな岩の上部に達し、先に進もうとすると、ちょうど尾根状の末端に到着した隊長の命により、「無線」という吉田の大きな声が聞こえる。副隊長が無線をオープンにすると、「ここから見える限りＣ1を設置できそうな場所はその大きな岩の周辺しかない。下に降りてテントを張れる場所がないかどうかを確認して下さい。」とのこと。上から見る限りはスペースが少なく、落石の危険も多いように思われる。ガスが少し張れ、上部の氷河が少し見えていることもあり、副隊長が大岩へ下り、谷田川、安藤はＣ1適地も含め、もう少し上部への偵察を続けることとする。少しでも視界のある時に、コルへの手掛かりを掴みたいとの思いでの行動であったが、これが隊長に大きな心配を掛けることとなってしまった。副隊長は大岩の近くにかろうじてテント一張りを張れるスペースを見付け、谷田川は約4900mに達するが、視界が悪くなったため、3名合流してｂｃへと下山する。途中より雨、この日は他の隊員も尾根状の先端までを往復する。それにしてもよく降る。テントを叩く雨音に、何人かは自棄気味に杯を重ねる。深夜、星が見える。

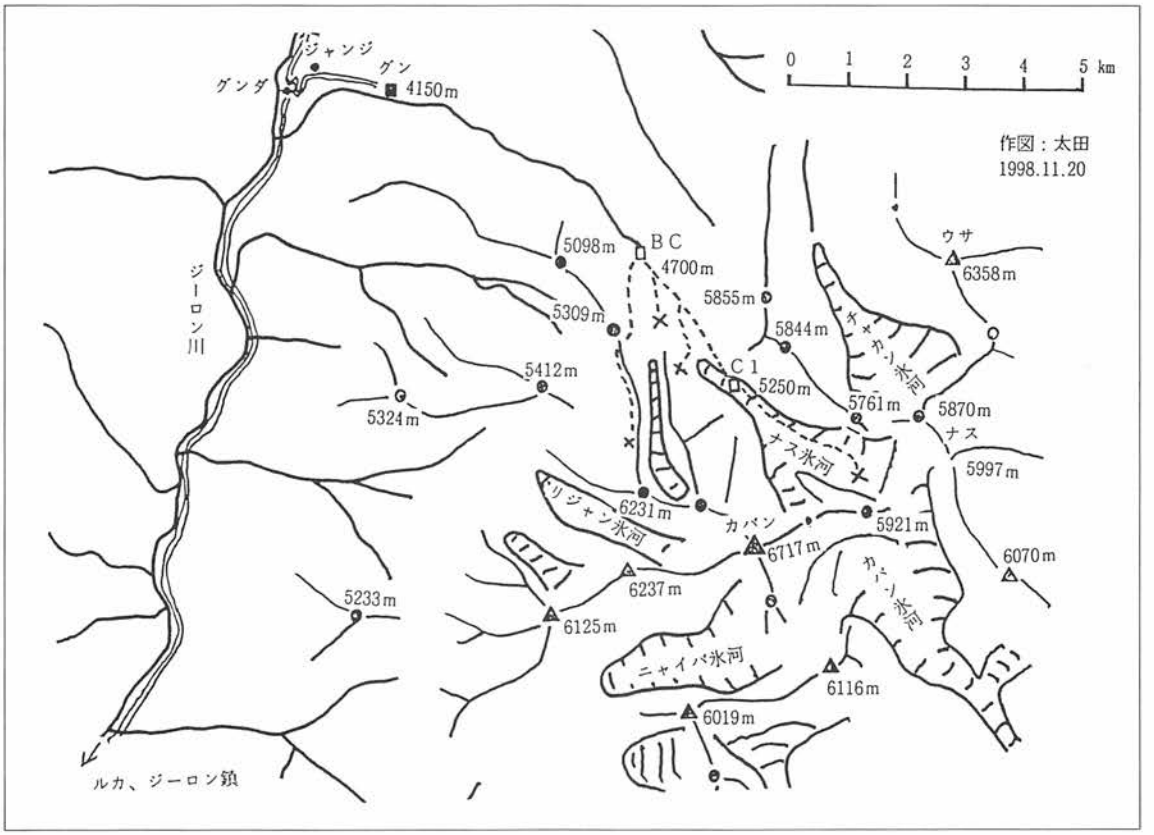
8月12日　Ｃ1－ＢＣ、ＢＣ滞在

6時起床、雨、ガスも深い。のんびりと朝食を取り、小雨の中、撤収の準備をする。11時10分、上部より掛け声がしたかと思うと、ポーター達が駆け足で降りてきた。大きな岩の影で共にスナック菓子を食べた後、深いガスの中を下山する。何時覚えたのか、ポーター達が休憩を取る際に発する「いっぽん、いっぽん」の声が愛敬がある。モレーンの末端部に付くと、ラモ・シェを見たいとの思いで高橋さんがひとりで登ってきていた。天気は回復する見込みはないので、一緒に下山する。途中ポーターのひとるがなき兎を掴まえる。13時45分、ＢＣ着、また雨が本降りとなる。渾海子へと流れ込む沢の水量もだいぶ増えたようだ。

カバン偵察（Kabang 喀邦 6,719m Reconnaissance）　　－China－



ナス川からカバン東面。奥の右が東稜。頂上は見えない。



山名と時期　カバン偵察　1998年秋

隊の構成　（平均年齢 51.0歳）6,719m

隊　長　山森　欣一　1944年2月　生（54）
隊　員　樋上　嘉秀　1944年6月　生（54）
〃　太田　康夫　1953年3月　生（45）
連絡官　開　村（35）　西蔵登山隊

行動概要　（1998年10月10日～11月4日）

10月10日　北京、成都を経由して12日ラサに到着。
17日　シガツェ、ティンリを経由して17日ジーロン県に到着。
18日　ジーロン県～グン（ジープ）
20日　東面ナス氷河の4,700m地点にＢＣ建設。
21日　北西稜付近を5,800mまで偵察。
24日　ナス氷河の5,750m付近まで偵察。

偵察記　樋上嘉秀

氷河中央部は暫くの間は傾斜も緩いままで積雪も少なく歩き易いのでペースが上がる。しかしそれも右手から落ちる支氷河の出合いを真横にする辺りから傾斜が強まると同時に積雪も増え出し、ラッセルが始まってペースダウン。トップの太田隊員が赤旗ポールを見失わない間隔で立てながら必死に頑張って呉れるが、コルは思ったよりも奥まった所に有るらしく、姿を中々現わさない。右手からの支氷河は本氷河よりも傾斜が強いと言っても特別の技術を必要とするもので無く、登頂ルートに考えている東稜途中の6,000m付近に突き上げていて、コルへ出て下から東稜を詰め上がるよりも遥かにピークへは近い。しかも稜線に出た付近一帯が広いプラトーのようになっているようなのでキャンプサイトにも適していて候補ルートの一番手に上げているもの。ただ難点は雪面に何ケ所も縦横に走る裂け目が観察され、このクレバスを通過が出来るかが気に掛かるところ。時間が有れば取り付いて偵察する計画だが、今日は取り敢えずコルまでの偵察に徹して進む。やがて目指すコルと繋がっている右岸の岩峰の連なる尾根から下って来る稜線が確認出来る地点まで来ると氷河正面の向こうに雪をも寄せ付けず、先端を鋭い槍先の如く天に向かって突き上げた尖峰が顔を出し、続いて左手に丸いドーム状のピークが見えて来る。

26日　ＢＣ撤収～ルカへ移動。ヤンラ・カン偵察のＢＣとする。標高約3,000m。
27日　樋上、太田がラマ・プー上流を偵察。
28日　太田がさらに上流を偵察。
29日　ヤンラ・カンリＢＣ撤収。
11月4日　帰国

位置　中国、チベット自治区

結果　10月24日東面ナス氷河5,750mに樋上、太田が到達した。

キャンプ配置

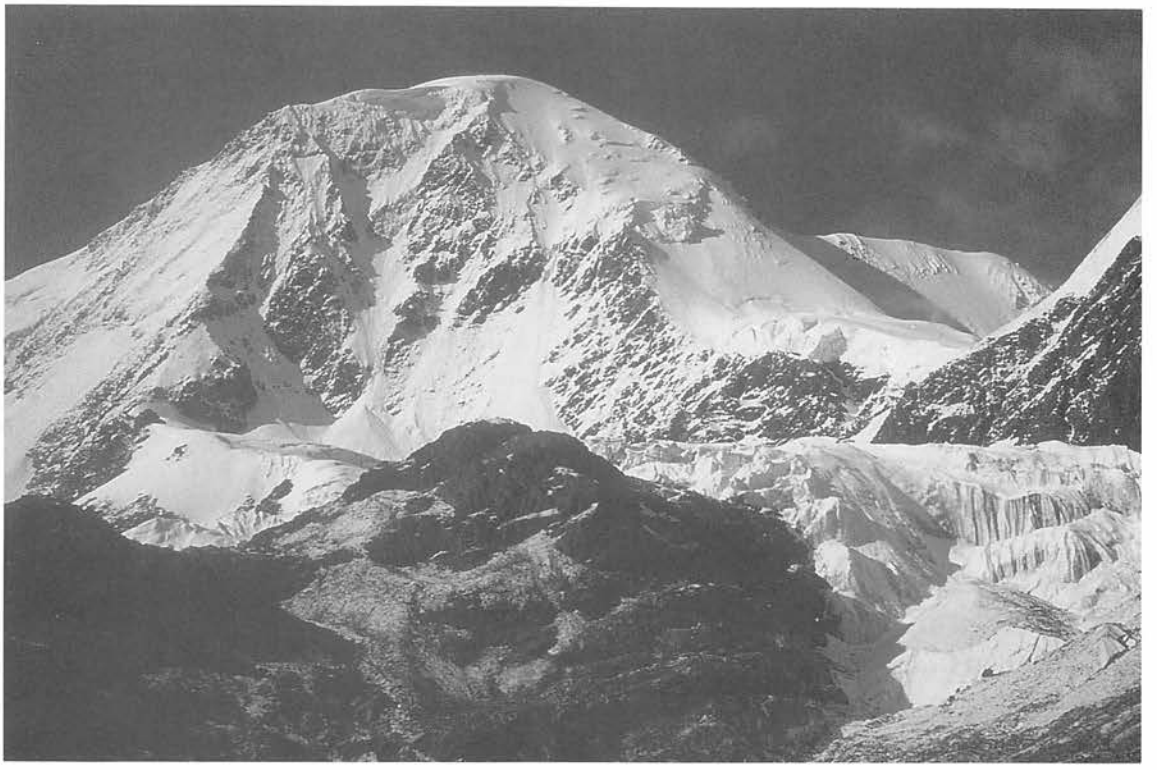
ＢＣ　4,700m（10月20日）
Ｃ1　5,250m（10月23日）
最高到達点5,750m（10月24日）

報告書　なし「ヒマラヤ326号」1999年1月号

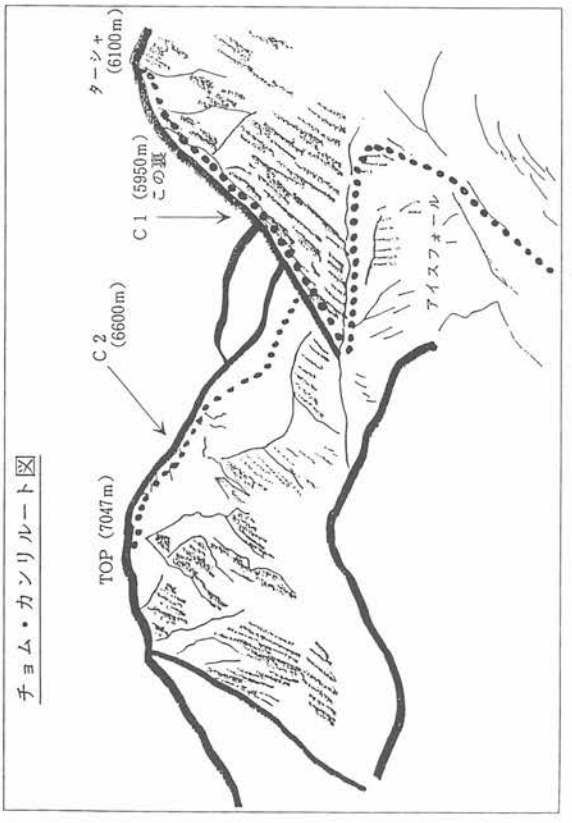
特記事項　カバン偵察終了後、全員でヤンラ・カンリ（7,429m）北面の偵察を実施した。

このピークが出来れば登る予定のナス峰（5,997m）で、尖峰はナス峰から南に延びる尾根上の岩峰だと思われる。それならコルは後僅かに迫っている筈で、後少し登れば広い平坦地が現われるような感じがする。この辺りでコルは右に寄っている感じがするので少し右寄りにルートを取るが、突然トップの太田隊員が立ち止まってしまった。何か有ったのかと近づくとヒドンクレバスに足を踏み込んだらしい。右手には大きな落ち込みが有り、大きなクレバスが口を広げて待ち構えているらしい。これは危ないと私が左上方に向きを変えて登って見たら幾らも行かない内に足元の雪が消えて同じくクレバスの中へ足を踏み入れ掛けた。見れば細い溝なのだが、中を覗き込んだら何とも深そうである。周りを観察すると他にもヒドンクレバスが有りそうな地形である。どうやらヒドンクレバス帯に入り込んでしまった感がする。それに先程から天候は悪化の兆しで、コルの向こうから雪が次々と沸き上がり周りは薄暗いし視界も悪くなっている。この時は降らなかったが、先程からラッセルを強いられている積雪は数日来のこの雲がもたらした新雪に違いなさそうである。こん気象状態と暗さでは雪面の観察も十分出来ない恐れが有る。偵察に来て事故を起こしたのでは話にならないし、今日の偵察は打ち切りとする。

チョム・カンリ（Qomo Kanze 穷母崗日　7,048m）　　－China－



チョム・カンリ南面（ルートは右手コルから頂上にのびる稜）



山名と時期　チョム・カンリ　1999年夏

隊の構成　（平均年齢 42.4歳）7,048m

隊　長	関根　孝次	1933年10月	生（65）
副隊長	佐藤　英樹	1948年４月	生（51）
登攀Ｌ	石川　龍彦	1952年２月	生（47）
隊　員	武部　秀夫	1952年12月	生（46）
〃	鶴巻　陽一	1957年８月	生（41）
〃	川崎　浩史	1964年１月	生（35）
〃	岩瀬　雄二	1964年９月	生（34）
〃	鈴木　一己	1979年５月	生（20）
連絡官	劉　　峰	（　）	四川省登山協会

行動概要　（1998年７月20日～８月25日）

７月19日　北京、成都を経て22日ラサ着。

25日～26日　ヤンパーチンに移動し高所順応。

27日～29日　スゲ・ラ（5,300ｍ）を越えてＢＣ偵察と高所順応。

30日　南面5,300ｍ地点にＢＣ建設。

８月20日　ＢＣ撤収～ラサ

23日　ラサ～成都～北京

25日　帰国

位置　中国、チベット自治区

結果　８月16日、南面ルートから佐藤、武部、川崎の３名が登頂に成功した。

キャンプ配置

ＢＣ　5,300ｍ（７月30日）

Ｃ１　5,980ｍ（８月４日）

Ｃ２　6,600ｍ（８月15日）

報告書　「チョム・カンリ」微笑みの女神の峰

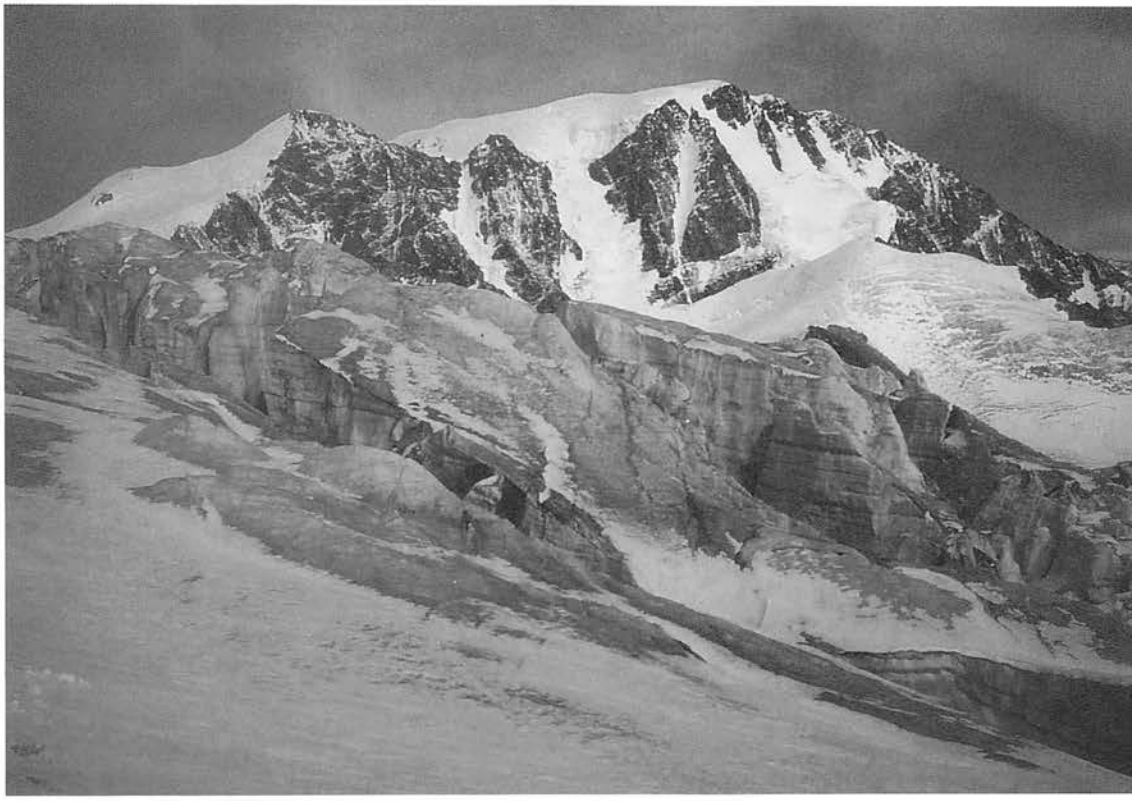
Ｂ５判　58頁　2000年12月31日刊

「ヒマラヤ337号」1999年12月号

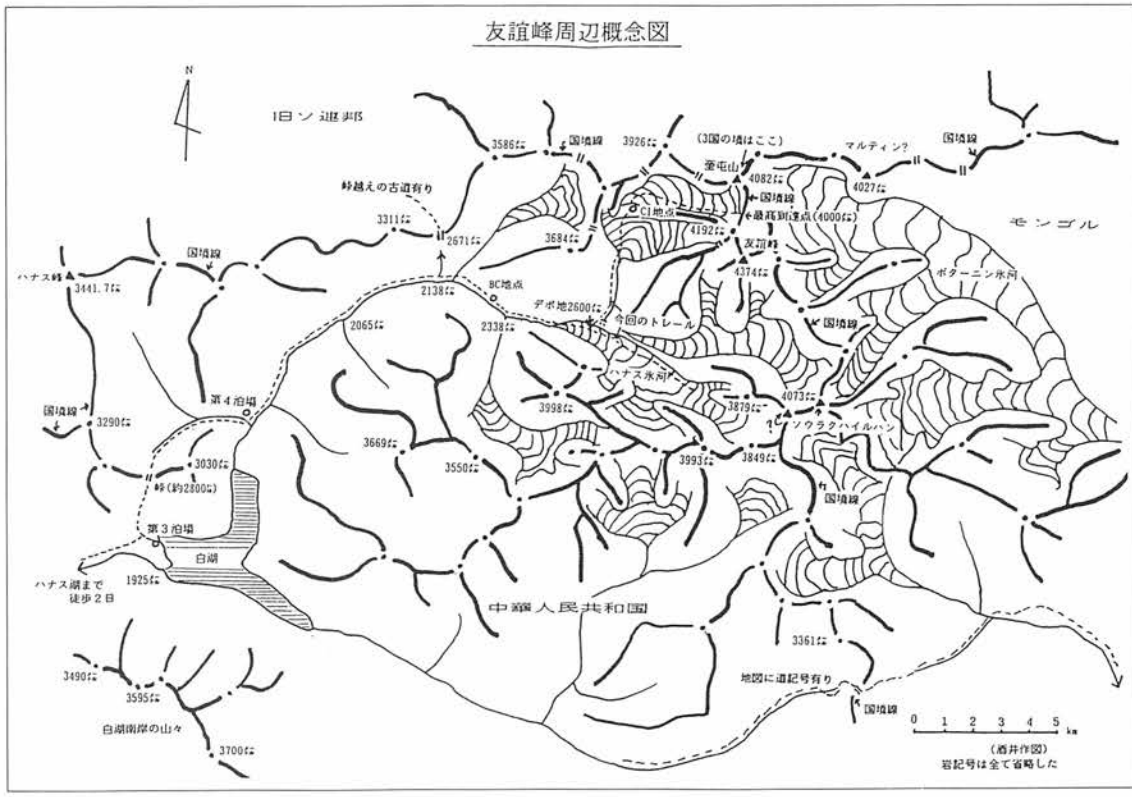
登頂記　武部秀夫

８月16日午前５時30分、チョム・カンリ南壁高度6,600ｍの第２キャンプで目覚める。テントの外をのぞくと、月も星もなく、ただただガス。視界は100ｍはありそうだ。いい天気でないことに第２キャンプの３人（佐藤副隊長、武部、川崎）はがっくり。それでも黙ってシュラフをたたみ水をつくる。今朝も即席天ぷらそば。水分を意識的に多く摂取。アタックの装備を早々すまし明るくなってくる８時まで、テントで待機する。風雪はなく、ひたすら濃いガスが晴れてくるのを待つ。佐藤副隊長が、「とにかく行けるところまでやってみよう」ということで外に出る。隣峰のダブラー峰6500ｍの頂上部が明るくなってガスが切れだした。第２キャンプから左上してゆく最初の３ピッチ昨日ルート工作済なので、川崎、佐藤、武部のオーダーでユマーリングしてゆく。８時の交信で、「天候状況を見ながら行けるところまでやる。」と隊長と確認する。第２キャンプからは、雪壁が２ピッチ、３ピッチ目で雪稜に出る。ここで佐藤副隊長がトップに出て、１ピッチフィックス。川崎くんは、ここで荷をデポ、空身でラッセル。２番手は武部でフィックス１本とスノーバー２本赤旗15本持つ。ラストは佐藤さん、３人コンテで登行してゆく。視界はあいもかわらず良くない。ただ進もうとしている上部の稜線がちらちら見えるのが心強い。雪が安定している雪壁を進む。30ｍ間隔で赤旗をさしてゆく。11時には、高度6900ｍはきたのか、ここで交信。佐藤副隊長が、武部、川崎のコンディションと登行意欲を確認。まわりのルート状況、天候状況を報告。少なくともあと２時間程で登頂できる可能性ありと判断。隊長に「突っこみたい旨」をお願いする。交信後すこし明るく視界が一時200ｍぐらい見え出す。左右の雪稜が、我々がいるところから100ｍ程上部でジャンクション状態になっているのが目視できた。あと少しだ。３人とも疲れてきているが頂上までの距離感がつかめたせいか、がんばれる。そうしているうちに傾斜がすこぶる落ちた。いよいよ頂稜部と感じる。あとはほとんど傾斜もなく稜線がつづく。ふりかえるときれいに赤旗がガスの中で映えている。めだつ赤だ。12時40分、前方が下りぎみになったところで、登頂とする。川崎、武部、佐藤、おもわず、登頂できたことを喜び、苦しかった、つらかったことが脳裏をよぎり年がいもなく涙が出た。お互い抱きあった。隊長へ交信。第１キャンプでは、祝福下さいました。下部は、雪崩のオンパレードで２次アタックを見あわせるとのこと。今回の登山は、ほんとうにしんどかった。

ユゥイ・フェン（友誼峰Youyi Fen 4,374m）　　－China－



C１から見た主峰



山名と時期　ユゥイ・フェン　1999年夏

隊の構成　（平均年齢 47.4歳）　4,374m

隊　長	酒井　國光	1939年4月	生（60）
隊　員	西嶋錬太郎	1942年8月	生（56）
〃	佐藤　邦彦	1943年4月	生（56）
〃	天城　敞彦	1947年5月	生（52）
〃	森山　安次	1949年12月	生（49）
〃	久保　　均	1954年6月	生（45）
〃	久保　隆洋	1984年9月	生（14）
連絡官	李　　春元（35）		

行動概要　（1999年7月24日～8月21日）

7月20日　北京、ウルムチを経て28日ハナス湖を渡る。

29日～31日　正午まで森林許可待ち。

8月7日（土）雪

酒井、西嶋の2名でC1地点を決めに行く。他は停滞とする。

氷河舌端を登る頃より吹雪が強くなったので、デポテントに入って天気待ちをする。

水流の左の大岩を登り、上に出るとそこは広い草原であった。前方が白一色なのでどこが氷河なのか不明だ。丸い軽石を踏んで延々と進む。

氷河上もどこを登っているのか分からないままひたすら前進する。3時半後方の視界がきくと、左手にギザギザの国境稜線が見える。もう3,000mは越えたようだ。ここから東に向きを変え、ヒドンクレバスに気をつけながら登る。

4時半、荷物をデポして下る。4時間かけてBCへ帰り着いた。11時間の吹雪の中での強行偵察の一日、60歳のじいさんのやることではないな。終始トップで頑張った西嶋隊員にただ感謝。

8月8日（日）晴れ

天城、佐藤、森山、久保の4名でC1への荷揚げをし、そのままC1に泊まる。

8月9日（月）晴れ

天城、森山は4,000mのコルまでルート工作する。クレバスが多く、右へ左へと悪戦苦闘。さらには上部で「地雷原」と表現したヒドンクレバス帯に悩まされた。

佐藤、久保はデポテントを往復して荷揚げ。

酒井、西嶋はBCからC1へ入る。

8月4日　ユゥイ・フェン南西ハナス河岸草原の標高2,320m地点にBC設営。

13日　BC撤収。

19日　ウルムチ帰着。

21日　帰国

位置　中国、新疆ウイグル自治区（アルタイ山脈）

結果　8月10日、北稜4,000m地点に6名が到達したものの悪天候のため登頂を断念した。

キャンプ配置

BC　2,320m（8月4日）

C1　3,250m（8月8日）

最高到達点4,000m（8月10日）

報告書　なし「ヒマラヤ336号」1999年11月号

特記事項　森林地帯の入域許可トラブルで2日半停滞を余儀無くされた。

8月10日（火）曇り後雪

6人で頂上アタックに出発する。

昨日の偵察ルートに従い、クレバスを縫って進む。西の空には真っ黒い暗雲が漂い、荒天が近付いていることが明瞭だ。友誼峰頂上も雲の中だ。

コルに登る頃より風雪は一段と強くなる。12時前にコルに着いたが、余りにも風が強いため、ツェルトを破り天気待ちをする。これが実に4時間にもなってしまったのだ。

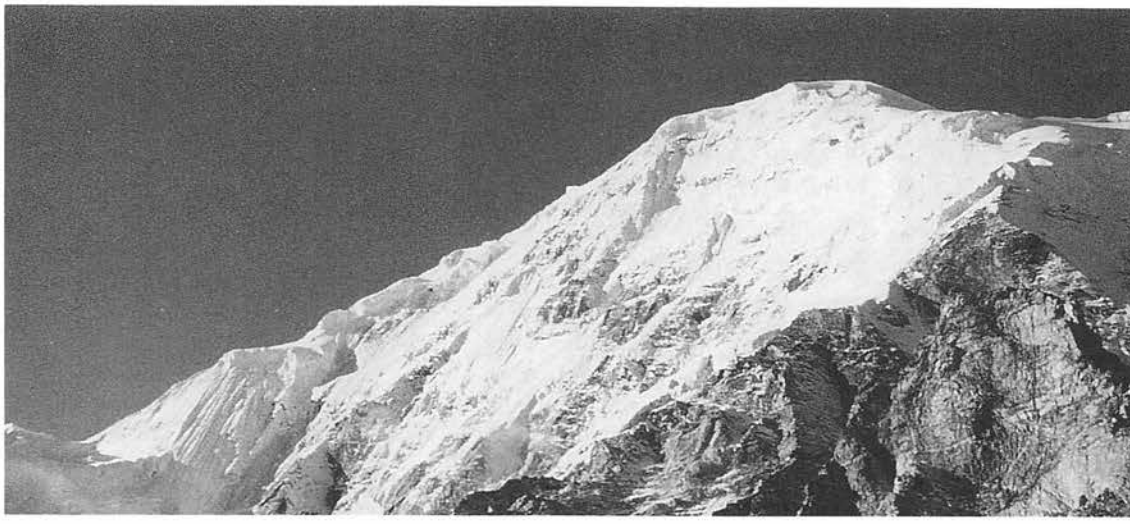
4時、回復の見込みがないため下山を決行する。登りのトレールは完全に消え、赤布を探しながら、迷い迷いの退却行となった。そんな時、私がヒドンクレバスを踏みぬいて墜落した。アンザイレンしていないため、5m位の深さだったので命拾いをした。最後は氷穴から這い出るトドのような格好で、ザイルで引っ張り上げられたのだ。

6時間半かかってどうにかC1に帰着。その晩の風はすさまじかった。何度テントを飛ばされるかと思ったことか。

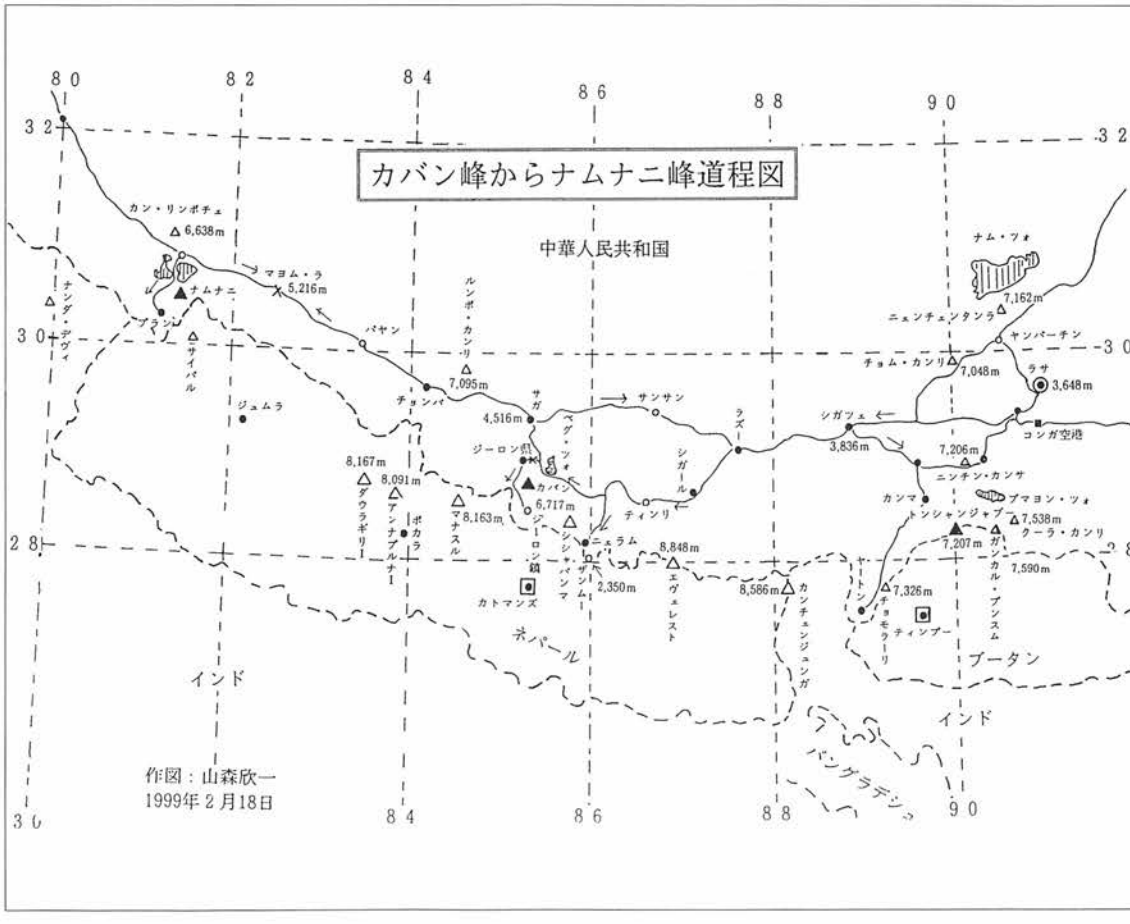
8月11日（水）曇り

昨日から続いた降雪で、ルートは一段と不明になってしまった。天気も昨日の朝のようだ。まだ1日あるが潔く敗退を決意する。

全ての荷物を持ち、下山する。BCでの楽しみは天城酒造特性の日本酒と羊の焼肉だ。



Ｃ１への途中から見たカバン峰東面。左手へのびているのがルートの東稜



山名と時期　カバン　1999年秋

隊の構成　（平均年齢 44.7歳）6,719m

隊　長	山森　欣一	1944年2月	生（55）
副隊長	松舘　正義	1944年4月	生（55）
隊　員	樋上　嘉秀	1944年6月	生（55）
〃	伊東　　満	1951年1月	生（48）
〃	岩崎　　洋	1960年2月	生（39）
〃	野沢井　歩	1964年8月	生（35）
〃	古谷　朋之	1973年8月	生（26）
連絡官	成　　天亮（59）	チベット登山隊	

行動概要　（1999年9月10日～10月10日）

9月10日　山森、松舘、樋上、伊東の4名は成田から北京、成都、ラサ、シガツェ、テングリ、ニェラムを経て17日、ザンムー着。岩崎、野沢井、古谷の3名はネパールからザンムーに入り本隊と合流。

21日　東面ナス氷河にBC設営。

10月9日　BC撤収～ジーロン鎮泊まり。

10日　マ・ラ下で隊を解散。伊東は帰国へ。他の6名は、ナムナニ登山へ。

位置　中国、チベット自治区

結果　10月5日、東稜6,550m地点に3名が到達したもののルート不良で登頂を断念した。

キャンプ配置

BC	4,700m（9月21日）
C1	5,180m（9月24日）
C2	6,000m（10月2日）

報告書　なし「ヒマラヤ339号」2000年2月号

特記事項　ナムナニ（7,694m）との連続登山（伊東を除く）

登山記　野沢井　歩

10月4日　風雪

Aパーティ　C2～上部ルート工作

Bパーティ　BC～C1

相変わらずの風雪。テントも吹き溜まった雪に潰されそうである。視界は50m位だろうか。しばらく様子を見る為待機するが8時出発を決めテントを飛び出す。

固定ロープ、登攀具を担ぎ緩やかな尾根を東稜の取付き点まで行く。うまくすればそのまま頂上に立ちたいのだがこの悪天では少々難しい。

（9：45）東稜取付き。ここから固定ロープを張り始める。予定どおり古谷にトップをまかせ、岩崎、野沢井のオーダーで登る。登攀を開始。雪壁から雪稜、3P目から急になり4P目で岩場が出てくる。雪も岩も脆い。稜の右側は切れ落ちているが視界が利かないのであまり高度感を感じさせない。降雪は少ないのだがガスが濃い為視界が利かない。先のルート状態が掴めないのが厄介だ。岩場を抜けると5～8P目まで雪稜となる。9P目から急雪壁となり、10P目の雪壁上部はサクサクした霜の様な雪質に苦労させられた。そこを乗越し11P～13P稜は緩やかな雪面となる。この先は大きなクレバスが口を開き、手強そうな感じである（16：20）。時間も遅い事も有りC2へ戻る。

C2着（17：43）

Aパーティ　C2～上部ルート工作～C2～C1

Bパーティ　C1～C2手前～C1

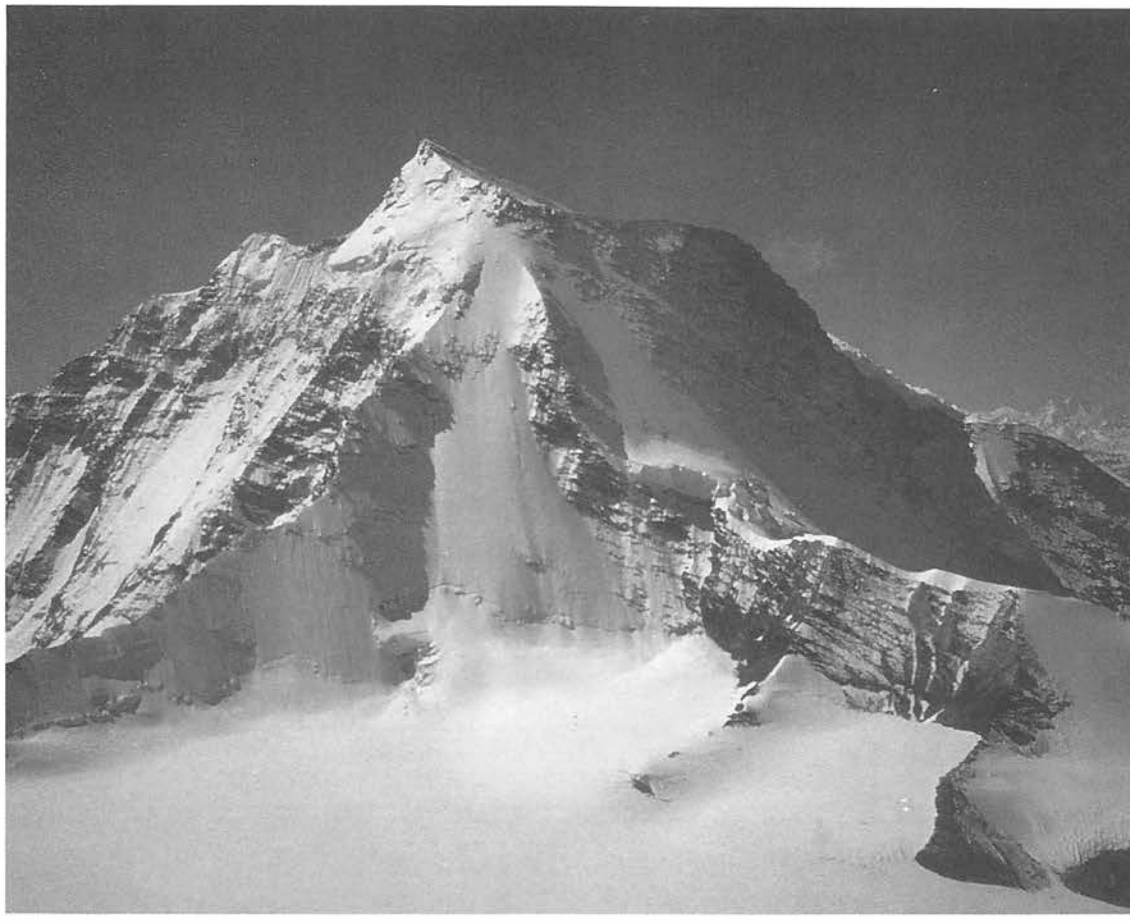
相変わらずの風雪。せめて視界が良ければ救われるのだが…。

先日の固定ロープを最終ピッチまでたどる。今日も昨日同様古谷トップでルート工作に入る。

14P目、この先は大きなクレバスが縦、横と碁盤の目の様に走っている。それを避けながらの登攀となった。稜の両サイドはスッパリと切れ落ちている為、どうしても稜どうしにルートを採るしかない。危険なスノーブリッジを渡りながらの登攀でこの先どうなる事かと心配になる。

16P目、再び大きなクレバスに阻まれ行き詰まってしまった。完全に稜はクレバス帯となっているようだ。17P目、クレバスを避け古谷が果敢に東壁寄りのサクサクした霜の様な大きなセラックの雪壁を越える。しかし、その先も大きなクレバスに阻まれている為、完全に登路を絶たれてしまった。上部も視界が利かない標高は6550m、後170mなのだが残念だ。

しばらく相談しここで登山を断念する事にする。BCの隊長に連絡を入れ撤退を決める。



ナムナニ氷河上から見たナムナニ北面、中央右手リッジの右の雪壁がルートとなった

▶グナ・ラ（古那拉六九〇二メートル）西面。ナムナニ東面七四一〇メートルから撮影。ルートは正面の凹状部分。

山名と時期　ナムナニ　1999年秋

隊の構成　（平均年齢 44.2歳）7,694m

隊　長	山森　欣一	1944年2月	生（55）
副隊長	松舘　正義	1944年4月	生（55）
隊　員	樋上　嘉秀	1944年6月	生（55）
〃	岩崎　　洋	1960年2月	生（39）
〃	野沢井　歩	1964年8月	生（35）
〃	古谷　朋之	1973年8月	生（26）
連絡官	成　　天亮（59）	チベット登山隊	

行動概要　（1999年10月10日～11月10日）

10月10日　ジーロン鎮からサガ、チュンバ、パヤンを経て12ナムナニ北西にＢＣ設営。
18日　5名がグナ・ラに登頂。
25日　3名がナムナニ新ルートから登頂。
26日　西面下降しＢＣ帰着。
28日　ＢＣ撤収～プラン泊まり。
29日～11月1日　カン・リンポチェ巡礼。

登頂記　岩崎洋

10月25日　東壁を抜け出した私達は、一瞬気が抜けてしまい3人とも雪の上にすわり込んでしまった。高度は7,600m位だろうか。最後の登攀中左手に見えた岩稜がロングスタッフ稜だった事が分かり、頂上は手の届く位置にあるはずである。

その時ちょっとした事件？がおこった。野沢井がしきりにザックの数を数えている。「1・2あれ？」「1・2あれ？」2個しかザックが無い!!音も無くザックは滑り落ちて遥か下の雪面に一つの点となって転がっていた。「まいったナー」ブリザードの中、3人とも少々混乱してしまい、次には私のピッケルがザックのもとへ行ってしまった。此処迄一緒に登って来たザックとピッケルだ、置き去りにするには忍びない、此処から山頂経由初登ルートを下降しようと思っていたが、計画を変更して頂上往復後、ザックとピッケルを回収して下山と決めた。

今迄の山では、ＢＣに現地スタッフのみと言う登山が多かったが、西面に出て26時間振りにＢＣと交信し、歓びを分かちあえる先輩達が其此に居てくれる事に、いつもとは違う安心感と感動を覚えた。

交信の後頂上へ向うが、バッテリー切れで、おまけにＨＡＪの旗もザックに忘れてしまい後でひんしゅくを買ってしまう。

ナムナニに守られて風の無かった東面に較べて物凄いブリザードの中高度を上げて行くと、トップを行く野沢井からフィックスの残置が有るとコールが掛かった。それも7ミリのナイロン・ロープである。昨年の日本隊も初登ルートを行っているはずだからスイス隊のものであろう。よくまあ、この高み迄ナイロンを担ぎあげたものだと感心しながら、ロープを横目に見て登る。

東壁を抜け出る迄の苦労を思えば、登頂の時は余りに呆気無くやって来た。ルンゼを登り、野沢井達は稜通しに行き、私は雪面をトラヴァースしてから登りに掛かる。風でバタつくフードを上げると2人が待っているのが見え、3人で肩を組んで山頂を踏む、其処から普蘭（プラン）が見えていたのは、山頂での写真を焼いてから知った。

3人で抱き合い、肩を叩き至福の時は過ぎた。冷たい風が我々を現実に引き戻す。

「さて、そろそろ帰りますか」

11月3日　ラズーでネパールへ出国する岩崎と別れる。
10日　帰国。

位置　中国、チベット自治区

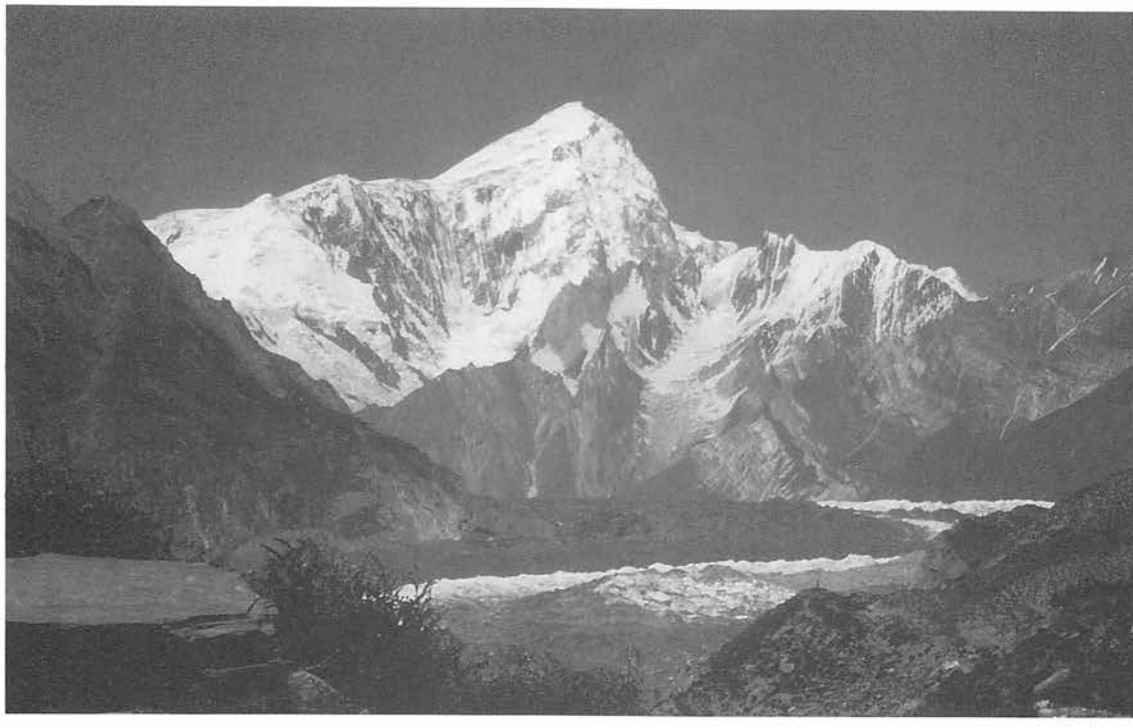
結果　10月25日、北面新ルートから岩崎、野沢井、古谷の3名がアルパイン・スタイルでナムナニの初登攀に成功し、西面通常ルートを下降し、トラバースにも成功した。

キャンプ配置

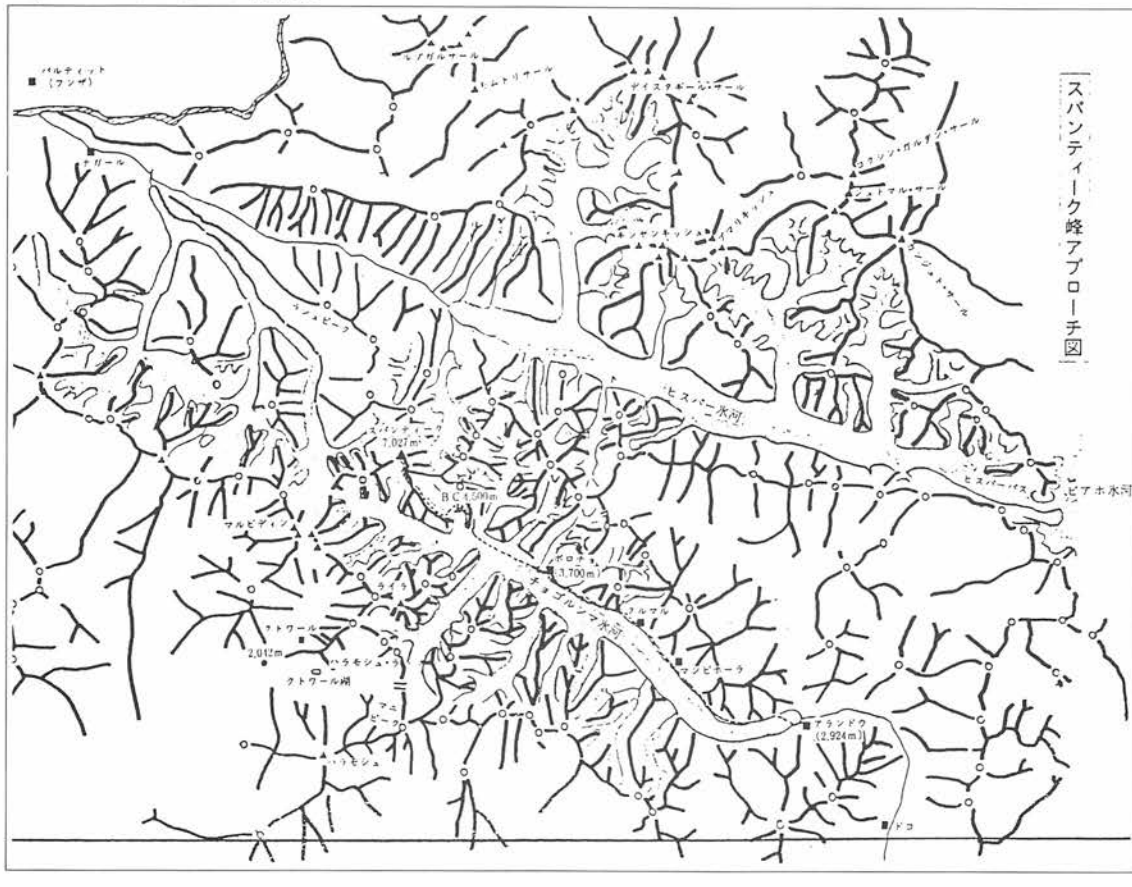
ＢＣ	4,700m	（10月12日）
ＡＢＣ	5,450m	（10月17日）
Ｃ1	6,380m	（10月22日）
Ｃ2	7,205m	（10月23日）
Ｃ3	7,410m	（10月24日）
Ｃ4	6,800m	（10月25日）西面下降中

特記事項　10月18日、山森を除く5名がグナ・ラ（6,902m）を南面からＡＢＣから1日で登頂。第2登に成功した。

スパンティーク（Spanteik 7,027m）　　－Pakistan－



左手がルートとなった南東稜



山名と時期　スパンティーク　2000年夏

隊の構成　（平均年齢 40.3歳）7,027m

隊　長	岩崎　　洋	1960年2月	生（39）
〃	大神田伊曽美	1944年5月	生（56）
〃	保坂　　巌	1955年1月	生（45）
〃	高橋　敏雄	1958年10月	生（41）
〃	鈴木　正典	1961年11月	生（38）
〃	大場裕美子	1967年1月	生（33）
〃	小泉　太史	1971年2月	生（29）

行動概要　（2000年7月14日～8月29日）

7月14日　本隊イスラマバード着
17日　スカルド着
20日　アランドゥからキャラバン出発。
23日　バズィン氷河上にBC設営。
8月18日　BC撤収。
19日　アランドゥ着。
29日　帰国

位置　パキスタン

結果　8月14日、南東稜から保坂、高橋、鈴木が登頂に成功。翌15日にも残る岩崎、大神田、大場、小泉も登頂した。

キャンプ配置

BC	4,500m（7月23日）
C1	5,200m（7月30日）
C2	6,150m（8月12日）

報告書　なし「ヒマラヤ352号」2001年3月号

登頂記　高橋敏雄

本日頂上アタック。

夜明けは5時頃である。紅茶とビスケットの簡単な食事で済ませ、薄明るくなるまでテントの中で待機。昨日のトレースが明確になったため出発。昨日、頂上稜線末端まで明確なトレースが刻まれているので安心して進める。トップを行く鈴木氏のペースで速くコンテニュアスで付いていくのは大変辛い。

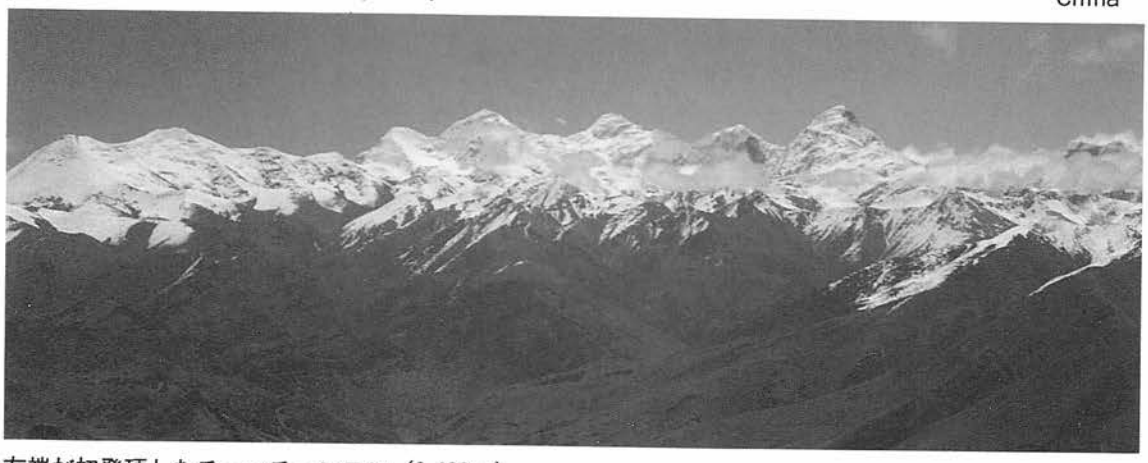
プラトーから正面に鎮座しているスパンティークのルートを確認する。ところが、稜線末端付近で突然風雪になり、ホワイトアウトの状態で視界がまるで利かない。左稜線であることは間違いない。しばしツェルトにもぐり込みガスが晴れるのを待つ。時々顔を出し様子伺うと急斜面が続いていることが確認できた。取りあえず直上することにする。昨日からの新雪が30cm程あり、まだ、なじんでいないため斜面は雪崩そうである。視界の利かない急斜面のラッセルは不安を増幅させ、余り気持ちのよいものではない。

鈴木隊員が孤軍奮闘しトレースを付けていく。新雪さえ降らなければアイゼンが小気味よく利き快適な登りとなるのだが、傾斜がきついため深いところで腰までのラッセルが続く。稜線末端から雪崩を上へ上へと登り詰めると、プラトーから見えた黒々とした岩場の下部に到達する。黒いスレート状の岩場で小休後そのラインに沿って更に登り詰めると花崗岩の茶色い、やや風化気味の丸みを帯びた岩が左手に見える。雪の中からポコポコと出ているように見える。そこが本日の最大傾斜地である。その岩に沿って息を乱しながら登り詰めると傾斜が緩くなり黒いスレート状の岩と花崗岩のミックスした緩い登りが続き山頂は近い。

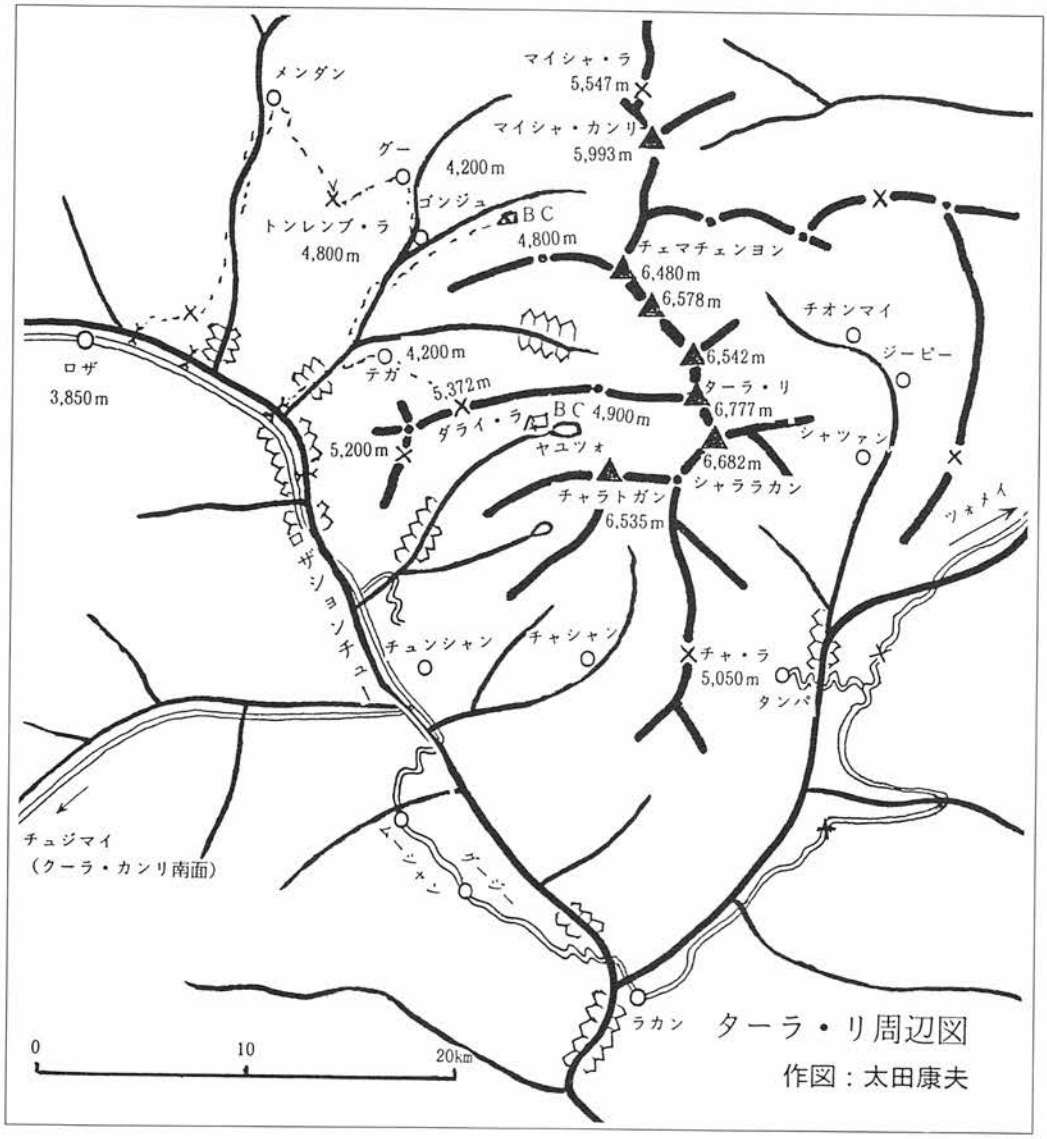
カラコルムの展望台と異名を取るスパンティークの頂に立つと雲が360度わき上がり残念ながらK2やキンヤンキッシュ、フンザの村は見ることができなかった。記念写真を銘々に撮り、1時間ほど滞在して下山にかかる。露岩地帯を越え雪崩そうな雪面を転がるように下る。プラトーへ続く真っ平らな雪面に逃れた途端ヒドンクレバスに肩まで落ちる。アンザイレンの大切さを改めて実感する。C2では隊長を始めB隊が登頂を祝ってくれた。感謝。感謝。本来ならばC1へそのまま、下山する予定であったが疲労が見えたためC2に泊まることになる。

14.AUG.00　A隊（第1次アタック隊）　4:45C2出発。　6:38　小休。プラトー縦断も終え、約10分ほどで山頂稜線取り付き。10:44頂上直下、岩稜帯。14:04　スパンティーク山頂。15:00　下山開始。17:30　C2到着。

ターラ・リ（Thala Ri 打拉日 6,777m）



左端が初登頂したチェマチェンヨン（6,480m）



山名と時期　ターラ・リ　2000年夏

隊の構成　（平均年齢 52.2歳）6,777m

隊　長	山森　欣一	1944年2月	生（56）
副隊長	樋上　嘉秀	1944年6月	生（56）
登攀L	野沢井　歩	1964年8月	生（36）
隊　員	桐沢　輝治	1938年11月	生（61）
〃	佐藤　邦彦	1943年4月	生（57）
〃	太田　康夫	1953年3月	生（47）
連絡官	成　天亮（60）	チベット登山隊	

行動概要　（2000年7月28日～9月10日）

7月28日　北京、成都を経て30日ラサに到着。
8月2日　ラサ～ロザ
3日～4日　南、西面の偵察。
14日　新BC設営。
9月2日　新BC撤収～ゴンジュ村
4日　ゴンジュ村～デンブゥ村
5日　デンプゥ村～ロザ
7日　ロザ～ラサ

初登頂記　野沢井歩

5時起床（北京時間、実際は3時の感覚か）。心配していた天候もそれ程悪くない。BCとの定時交信を済ませ、7時25分出発。氷河に入りロープを結び、前日のトレースをたどり登り始める。モンスーン期のこの時期、午後から翌朝まで天候が悪い事が多かったが、今日は珍しく比較的好天に恵まれた。ガスの中から時折太陽が顔を出し、久しぶりの好天に気分も盛り上がる。しかしそれも登り始めて2時間ほどであっという間に西側から湧き出してくるガスに覆われた視界が利かなくなってしまった。このターラ・リ三群は西側から天候が崩れてくるようだ。

拷問の様なラッセルを続けていると稜線上へと辿りついた様だ。稜の反対側は東面の壁となってスッパリと切れ落ちている。ガスの中、回りの地形を観察していると大きな雪庇の上に乗っている予感がして慌てて戻る。稜線上の先に岩場が見える。岩場があるという事は雪庇の危険が無いだろうと、そこを目指し大きく稜下をトラバース気味に登る。岩場に到着してC2を出てから初めての小休止。

アタックの為オープンしている無線機はC2を10日　山森、野沢井を除く4名帰国

位置　中国、チベット自治区

結果　8月9日、ヤユ・ツォ先のヤユ氷河の状態が悪いため主峰のトライを断念し、連峰の一角である、チェマチェンヨン（6,480m）へ転進することとした。

キャンプ配置

BC	4,900m	（8月8日）
新BC	4,800m	（8月14日）
C1	5,400m	（8月18日）
C2	5,800m	（8月4日）

特記事項　主峰を断念し、連峰の北端にあるチェマチェンヨンに8月25日、野沢井、太田が初登四頂。両名は26日にも、更に北にあるマイシャ・カンリ（5,993m）にも初登頂した。

山森隊長が8月5日～15日まで肺水腫のためロザの病院に入院。16日、新BCに入る。

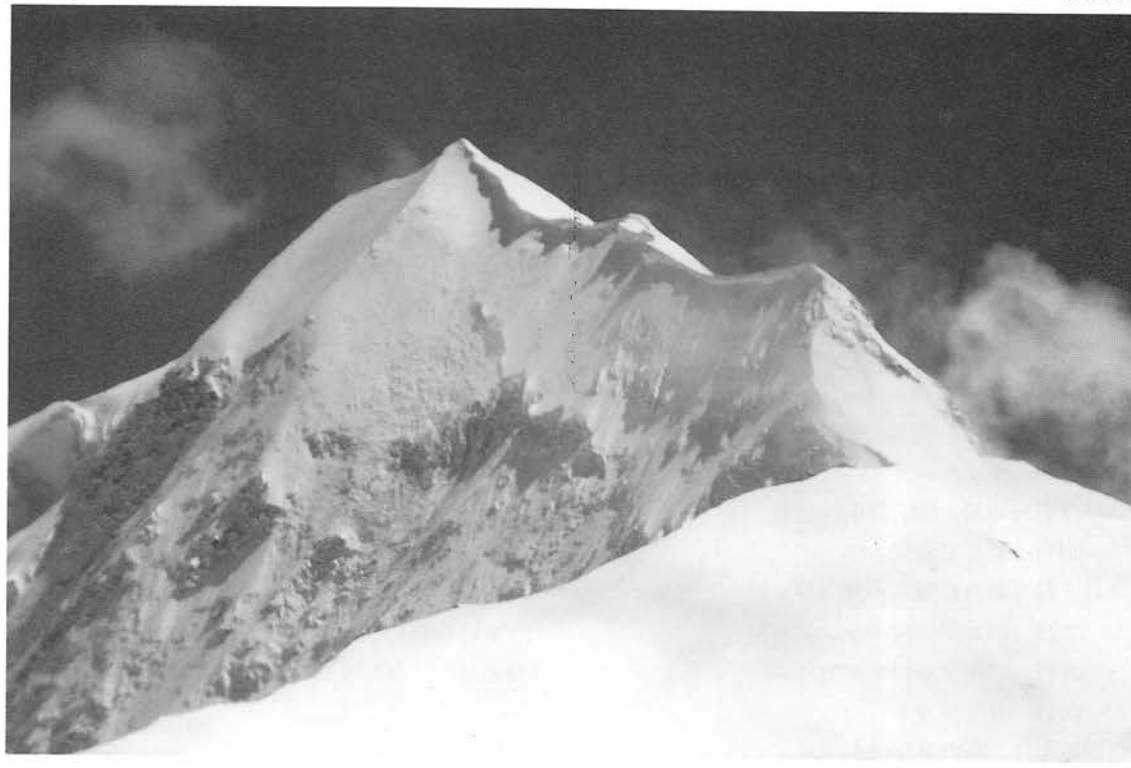
報告書　なし「ヒマラヤ350号」2001年1月号

出て今だ沈黙を保っている。

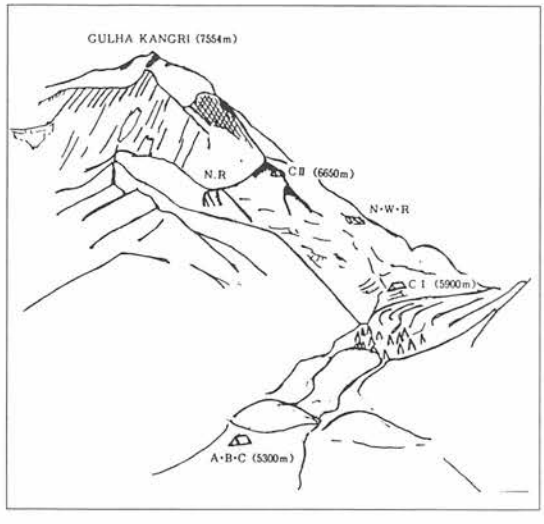
ここから頂上は雪のドーム状となっており、雪の大斜面となっている。

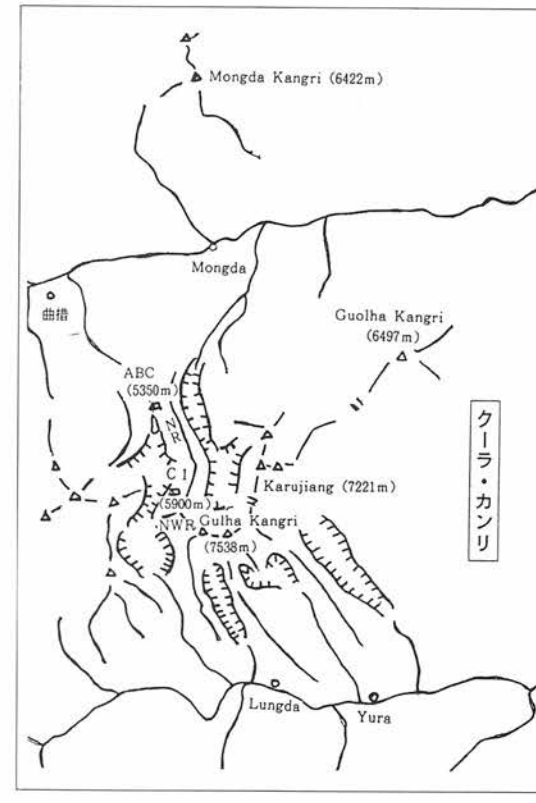
稜線は頂上ドームからギャップとなり、小規模だがクレバス帯となっている。クレバス帯は切れ落ちている東面を避け、西面側から巻き、頂上へ雪の大斜面へと取付く。この最後の雪面の登りは気温が上がってきた事もあり、雪は更に深く、重い。下駄の様にまとわり着く雪のラッセルに随分と苦労させられた。なんとか大雪面を登りきると頂稜へ飛び出した。雪庇に注意しながら頂稜を進み、頂上を目指す。ガスで視界は利かないが稜は広い雪原となり、ゆったりと南に向かって下っている。高度計も中国地図の指す6,480mにほぼ近い数値を指している。一番高そうな雪面を頂上として（13時15分着）竹竿を立てた。

クーラ・カンリⅠ（Kula　Kangri　Ⅰ　庫拉崗日 7,538m）　　－China－



チュツォの尾上からクーラ・カンリⅠ　北面、右手前ににのびるのが北稜





山名と時期　クーラ・カンリⅠ　1999年夏

隊の構成　（平均年齢 42.5歳）7,538m

隊　長	山森　欣一	1944年2月　生（56）
隊　員	岩崎　　洋	1960年2月　生（40）
〃	鈴木　正典	1961年11月　生（38）
〃	野沢井　歩	1964年8月　生（36）
連絡官	成　　天亮（60）	チベット登山隊

行動概要　（2000年9月8日～10月5日）

9月8日　山森、野沢井がターラ・リ登山を終えてラサに帰着。岩崎、鈴木はカトマンズから空路ラサ入りして合流。
11日　ラサ～チュツォ（4,250m）
12日　チュツォにBC設営。
22日　BC下山。
26日～27日　山森、岩崎、ブータン国境へ偵察。
28日　チュツォ～ラサ
30日　山森を除く3名はネパールへ
10月5日　山森帰国

位置　中国、チベット自治区

結果　9月21日、北稜と北西稜の中間を登る新ルートをアルパイン・スタイルでトライしたが、不安定な雪のため登頂を断念した。最高到達点は、20日に到達した6,750m。

キャンプ配置

BC	4,250m（9月12日）
ABC	5,300m（9月14日）
C1	5,900m（9月19日）
C2	6,650m（9月20日）

特記事項　南面をルートとして予定していたが、今夏チベット南部を襲った豪雨のため道路が寸断し、南面から入山出来なかったため、北面から試みた。

報告書　なし「ヒマラヤ357号」2001年8月号

登山記　岩崎　洋

20日。

夜明け前に出発。あまり気持ちの良くないクレバス帯から雪壁へと移り登っていくが、結構急な所もあり気の抜けない登攀となる。トップを行く野沢井は同じペースで確実に登って行く。休めるような所は全く無いのでひたすら登るがペースが今一上がらないのは飲み過ぎなのか、それとも休みが長かったせいなのだろうか？

北稜に抜け出し雪壁のトラバースを始めた頃から急にペースが落ちだし、やがて止まった。トップも恐いだろうが、ミッテルの鈴木も、そして私もひきつるような恐怖を味わっていた。雪のコンディションが悪すぎ、トップは雪崩の恐怖を、私達はピッケルを刺しても何の手ごたえも無く岩に当たってしまう雪に、落ちたら止められない……。トレースから切れるかもしれない。あの、靴の中の足がむずむずするような感覚を多分三人とも感じていたのだと思う。すぐそこに北西稜とのジャンクションが見えるのだが、如何ともし難い。100m程下に幕の張れそうな所があるのをチェックしてあったので其処まで戻り少し早いが今日はこれまでとした。明日夜中に出発しよう。少しは雪が締まっているかもしれない。（CⅡ6,650m）

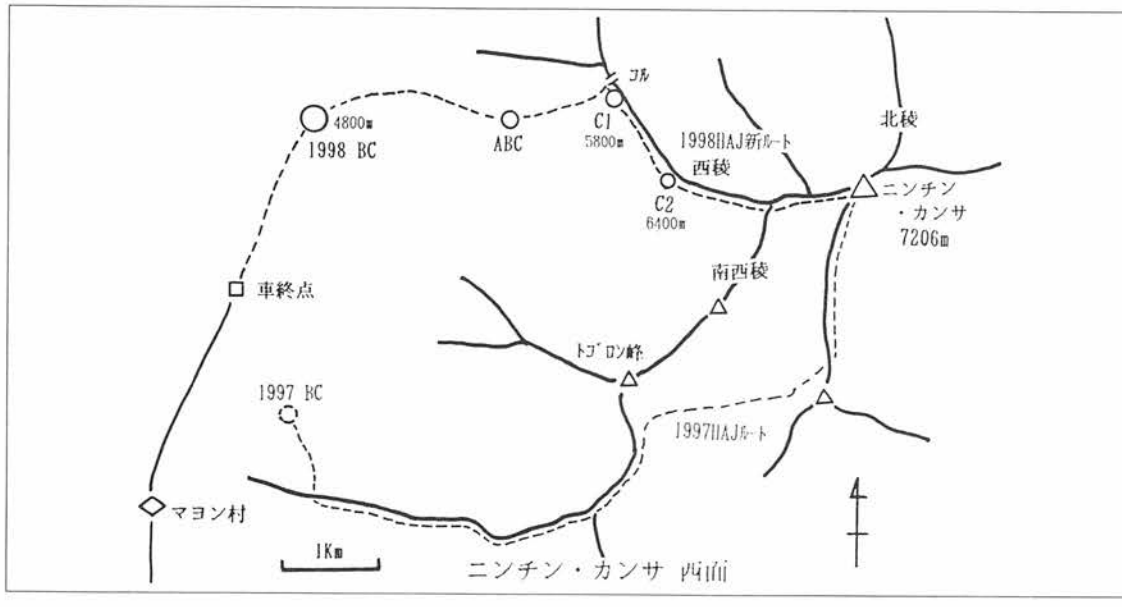
21日。アタック。

暗闇の中、前日のトレースを辿る。左には白い雪、右は氷河まで真っ暗な闇が広がり、何も無い空間である。ヘッドランプの照らす足元しか見えないが、ロープの先で野沢井が格闘しているのが分かる。二つ見える小さな明かりは目標を失い漂っているように見えた。どれだけ時間が経ったのだろう。雪は安定せず一蓮托生であるが、一ヶ所に集まって相談することなど出来ない話である。ただ、ひたすら耐えてコールを待つが、その間にトップは小さな雪崩を三回も浴びたと言う。

「駄目です！！」

そうコールがかかったと思うが今となってははっきりしない。帰ろう、命が大切だ。だって此処から登ってしまったら、もう南面に行く事も無くなってしまうし……。テントに戻り夜明けを待って下山に移った。（ABC5,300m）

ＢＣから見た西面。左端が主峰（そこから手前に派生しているのがルートとなった西稜



山名と時期　ニンチン・カンサ　2001年夏

隊の構成　（平均年齢 40.2歳）7,206m

隊　長	酒井　國光	1939年4月	生（62）
登攀L	野沢井　歩	1964年8月	生（36）
隊　員	日南長二郎	1955年3月	生（46）
〃	宮川　真一	1963年3月	生（38）
〃	斎藤　正朗	1971年4月	生（30）
〃	志村真由美	1972年4月	生（29）
連絡官	趙　　玲々（　）		中国登山協会

行動概要　（2001年7月20日～8月25日）

7月20日　北京、成都を経て22日ラサ入り。

25日～27日　ランカーズで高所順応活動。

28日　BC設営。

8月20日　BC撤収～ラサ

登頂記　宮川真一

悩んだ末に、ぼくはC2に、シュラフとマットは持っていかない事にした。今考えると、自分自身を過信していたのかも知れない。結局、それが失敗だった。6,400mでのシュラフカバーだけというのは、ほとんど眠ることができない。

ぴくらは、ほんの少しのクッキーを食べると、星空の下でロープを結んだ。ここから先はルート工作はしていない。下降用にPPロープを2本づつと、スノーバーを3本づつザックに収め、野沢井さんを先頭に、果てしないラッセルが始まった。時計は4時を少しだけまわっていた。

ベースキャンプで双眼鏡を覗いていた酒井隊長から、無線を通じてのルートの指示があった。指示どおり左にトラバースすると、少し急な雪面になり、それを登りつめると頂稜線にでた。太陽がサンサンと輝いていた。まだ正午を少しまわったばかりだった。

ぼくらはそこでザックをデポし、空身で山頂を目指した。天候はだんだんと怪しくなり、何度かガスで山頂が隠れてしまったけれど、ぼくらはその見えない山頂に向かって進んだ。

ニセピークから少し下降し本ピークに取り付く。先頭を行く野沢井さんに追いつけない。全力を出しても、アンザイレンしているロープは張り、どうしても野沢井さんに負担をかけてしまう。ぼくは初めて弱気になってしまった。「どうやら俺、ここまでみたい。もう力が出ないよ」そんな様な事を口に出してしまった。振り返ると斎藤君も、ぼく同様にへばっている。

ぼくらはそこでアンザイレンを解いた。野沢井さんはロープをズルズルと引きずりながら、それでも後続するぼくらのためにステップを大きく刻みながら山頂に向かった。

ぼくと斎藤君は、最後の力を振り絞って、そのあとに続く、野沢井さんの配慮がうれしかった。

山頂直下の半ピッチで、ぼくはようやく野沢井さんに追いついた。ビレイをした。やがて野沢井さんはぼくの視界から消え、しばらくとホイッスルが聞こえた。

きっとあそこが山頂なんだ。ぼくらはあそこを目指して今まで頑張ってきたんだ。何があるんだろう。どうなっているんだろう。ぼくはあそこに立ったとき、どうなってしまうのだろう。そんな事を考えながら、ぼくは最後の力を振り絞った。午後3時をまわったばかりだった。

ニンチン・カンサの山頂は、思っていたほど広くなく、雪庇と隣り合わせになっていた。ほんの数えるほどの時間しか展望は見えなかったけれど、あきらかに空は近かった。

ぼくは雪の上に座り込んだまま、何度も何度も深呼吸をした。そして、自分の力のなさを痛感した。「もっと、もっと強くなりたい。そして、幾つものヒマラヤの山を登ってみたい」そんな事を感じていた。

25日　帰国。

位置　中国、チベット自治区

結果　8月15日、西稜から野沢井、宮川、斎藤が登頂に成功した。HAJとして21世紀初の登頂。

キャンプ配置

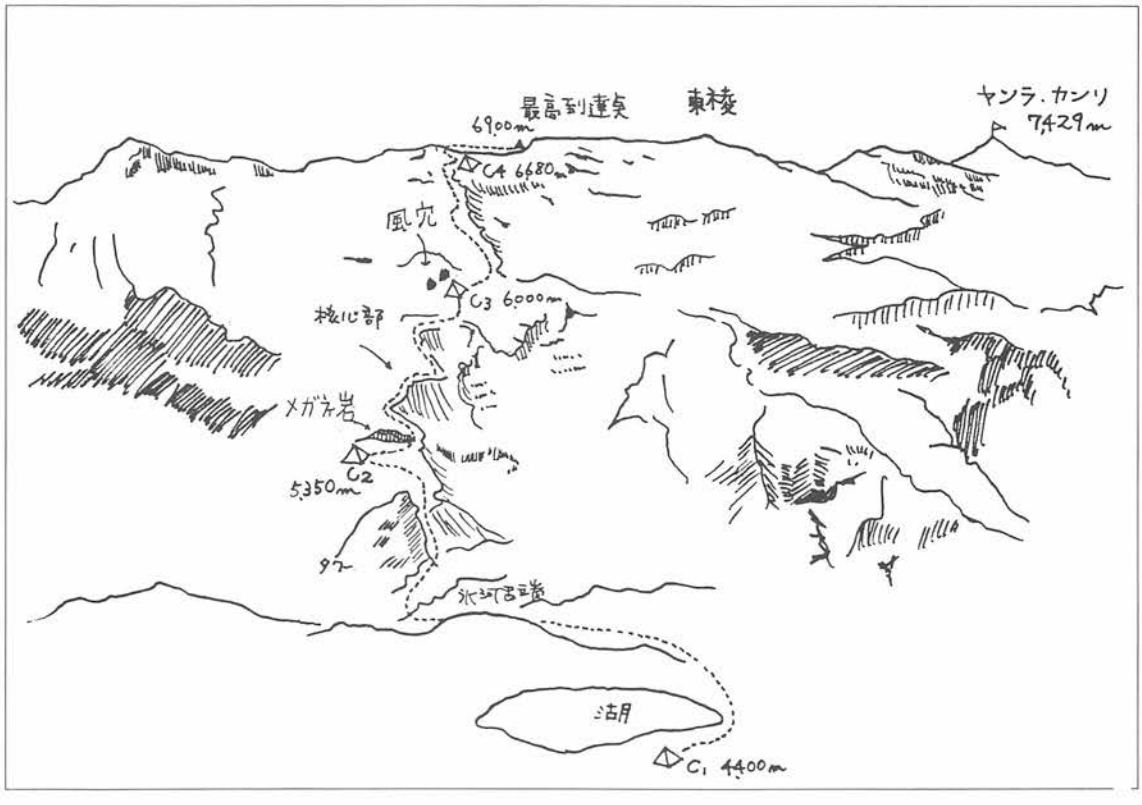
BC	4,800m	（7月28日）
RC	5,200m	（7月30日）
C1	5,800m	（8月5日）
C2	6,400m	（8月14日）

報告書　なし「ヒマラヤ362号」2002年1月号

特記事項　別送品無し。

ヤンラ・カンリ（Yangra Kangri 央然崗日 7,429m）　　－China－

C１から見たヤンラ・カンリ北面全容（右奥の三角のピークが頂上）



山名と時期　ヤンラ・カンリ　2001年秋

隊の構成　（平均年齢 53..8歳）7,429m

隊　長	山森　欣一	1944年2月	生（57）
副隊長	樋上　嘉秀	1944年6月	生（57）
登攀L	佐藤　英樹	1948年4月	生（53）
隊　員	田村　正勝	1942年4月	生（59）
〃	佐藤　邦彦	1943年4月	生（58）
〃	森山　安次	1949年12月	生（51）
〃	太田　康夫	1953年3月	生（48）
〃	萬徳　清孝	1954年7月	生（47）
連絡官	ラバ［拉巴］（47）チベット登山隊		

行動概要　（2001年9月10日～11月8日）

9月9日　佐藤英、佐藤邦、太田の3名は関空からカトマンズ入り。

10日　山森以下残りは北京、成都を経て12日ラサ入り。

16日　ニェラムで両隊が合流。

19日～23日　ルカをBHとして偵察。架橋。

24日　ラマ・プー右岸樹林帯にBC設営。

登山記　佐藤英樹

10月25日～29日　C4～最高到達点（6,900m）

C4（6,680m）は風の通り道なのだろう。16時前後から決まって風が非常に強くなり、一晩中吹いている。マキシムでないテントが欲しいところだ。当初C4からの稜線が2kmと長いので、ビバーク覚悟のアタックも考えていたが、隊長から「C2での休養がないのでアタック中止。国境稜線の行動なら良いという」指示。隊として最低限の努力、出来るだけ高度を稼ぎ、稜線からの頂上の写真を撮り今後の参考にということでの、これからのC4からの行動となる。また、行動食もなくなり、僅かに残った飴を舐めながらの行動だ。25日、目の前の尾根に上がりたいのだが、右側からはクレバスがあるので上がれず、最初、大きな氷の回路を行くが、奥行きが結構あるが結局行き止まりになっている。氷の青さが幻想的だ。今度は尾根に沿って左側を行き、回り込んでプヨンを背にして、急斜面を直上、2PをFixする。これでアンザイレン用のロープを除き、Fixを外したロープも、もうなくなった。ナイフリッジとなった稜線の先にあるプヨンの頂上は、もう下に見えるようになった。広く緩やかな稜線が目の前に広がる。左側のすぐ真下の谷はチリメ・コーラ、それに続くサンジン氷河、ガネッシュ2峰（7,052m）の北面が見えるが、我々の目指すヤンラの頂上は長い稜線に隠れて見えない。張ったFixを1P外しに戻り、ヒドンクレバスを警戒してコンテで、稜線を進み写真撮影をする。珍しく風もなく、天気が良くて暖かい。26日、晴れ、登山最終日。さらに一段高くなった稜線に上がろうと、1PをFix、ここから稜線沿いにトラバース稜上に上がるにはもう数ピッチかかるが、我々には、もうFixロープ、スノーバーが残っていない。破っているところを直に上がろうと、いろいろ試みたが雪が崩れやすく、勇気が出ない。登山最終日の最後に無理をすることもないので、ここを最高到達点で下降することになる。最高到達高度6,900m。7,000mを越えて稜線上から頂上の写真を撮りたかったが、叶わず残念だ。が、小生の場合、未踏の山を充分に堪能でき、右往左往しながらも、結果的には異番安全なルート作成が出来、事故もなく何よりだと思う。27日、C4を撤収して下山にかかるが、C2下の氷河も随分と様相を変えていた。B隊が荷上げに苦労したのが頷ける。天気が良く風もない中、下山のスピードは早く、C1まで下りることが出来た。先月29日にC2に上がって以来、久しぶりにC1に下山だ。やはり土の感触は良い。

11月1日　BC撤収。

7日　ネパール組帰国。

8日　北京組帰国。

位置　中国、チベット自治区

結果　10月26日、国境稜線である東稜の6,900mに到達したものの、装備不足と時間切れのため登頂を断念した。

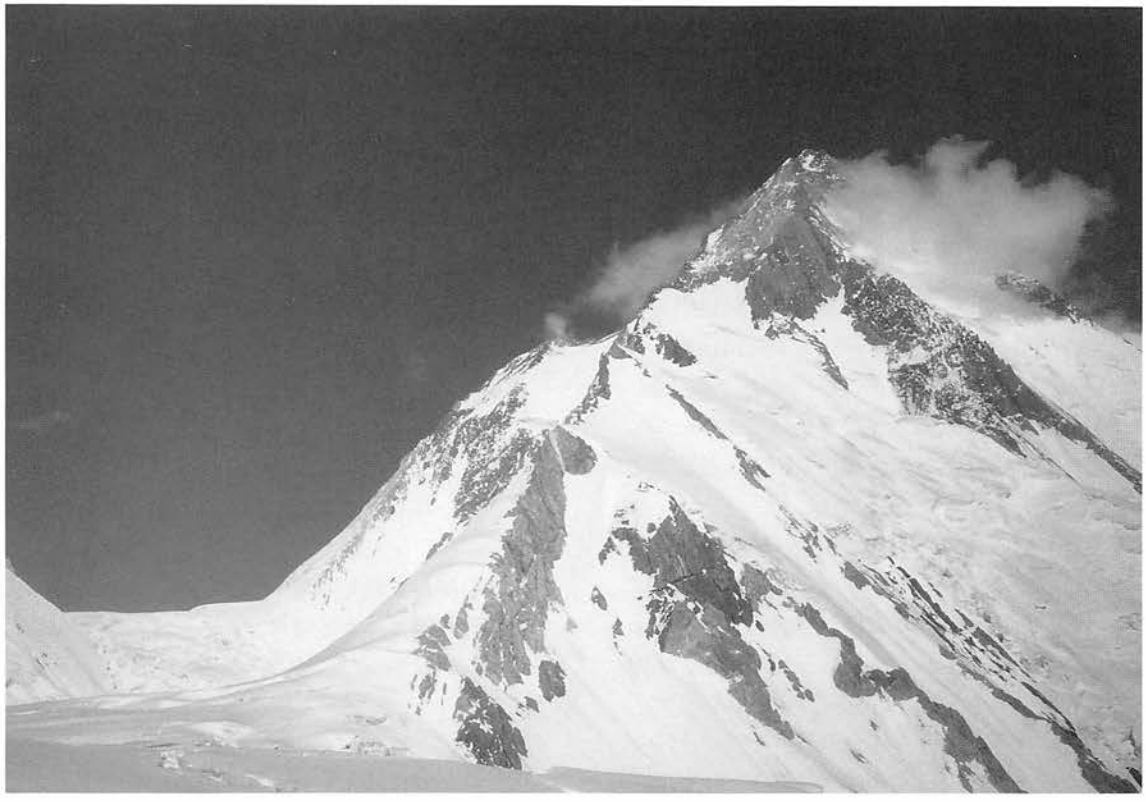
キャンプ配置

BC	3,350m（9月24日）
C1	4,400m（9月29日）
C2	5,350m（10月9日）
C3	6,000m（10月18日）
C4	6,680m（10月24日）

報告書　なし「ヒマラヤ363号」2002年2月号

特記事項　別送品をネパール経由で輸送。このため隊員3名を派遣した。実務は業者依頼なので実質的には1名で可能である。ジーロン鎮には入れなかった。1999年時と状況が変わっていた。

ガッシャーブルムⅠ（Gasherbrum Ⅰ 8,068m）　　－Pakistan－



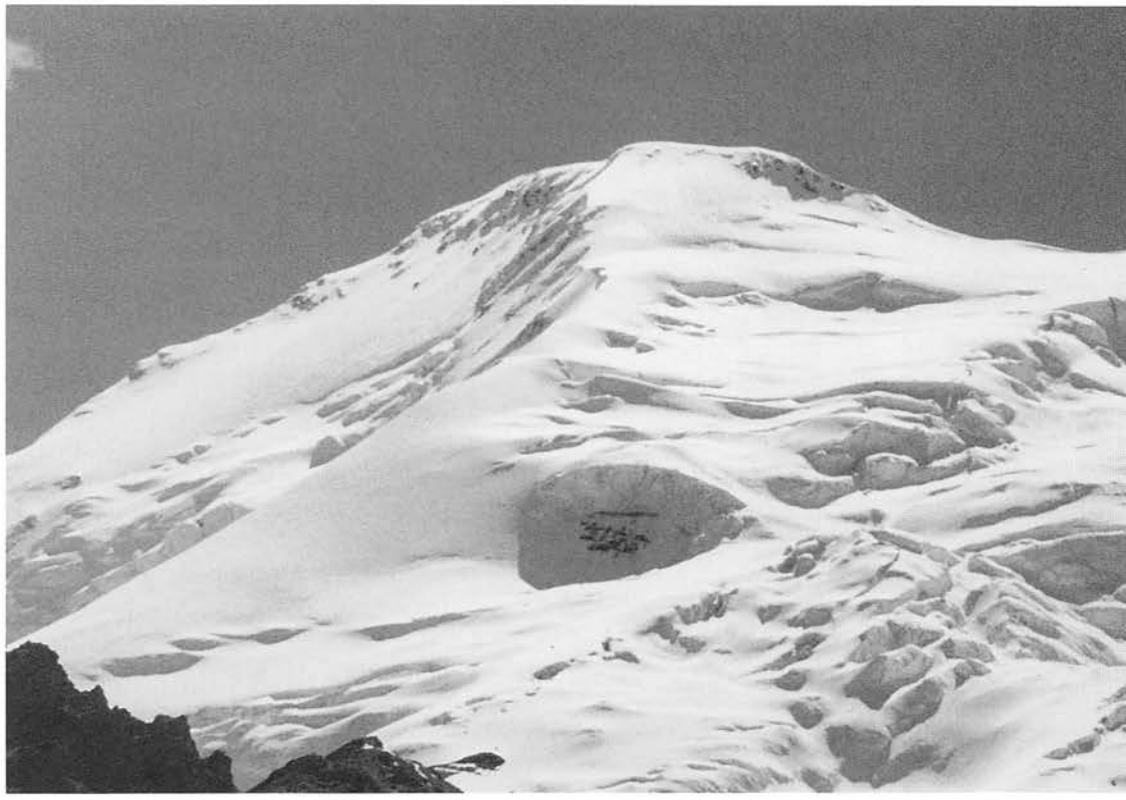
ガッシャーブルムⅠ位置図

山名と時期　ガッシャーブルムⅠ　2002年夏
隊の構成　（平均年齢 39.3歳）8,068m
隊　長　岩崎　洋　1960年2月　生（42）
隊　員　田辺　治　1961年1月　生（41）
〃　野沢井　歩　1964年8月　生（37）
〃　後藤　文明　1965年5月　生（37）
連絡官　Copt.モハメッド・アクタ（31）
行動概要　（2002年6月10日～9月2日）
6月10日　本隊イスラマバード着
13日　イスラマバード発
17日　キャラバン開始
24日　BC着

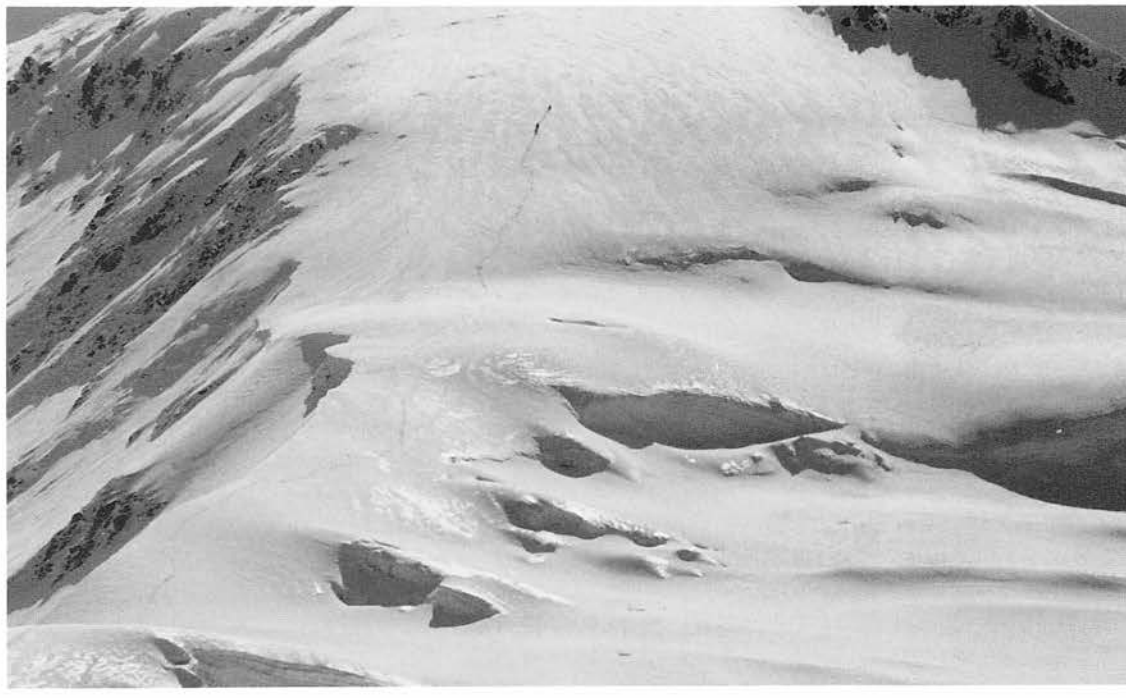
アタックとレスキュー活動
8月3日　BC～C2
4日　C3（7,100m）建設
5日　2:45アタック出発（田辺・野沢井）、（岩崎・後藤）パーティに別れて行動。
12:40～14:00に掛けて4名全員登頂（野沢井、田辺、岩崎、後藤の順番）
14:30 下山開始、直後、岩崎ザックを落とす。
20:00 田辺、野沢井パーティ C3着。岩崎、後藤パーティーは下山ルートを見失いビバークに入る。
23:00から02:00に掛けて田辺、野沢井で上部に捜索に行くが2人を発見できず。（無線は通じていた）
6日　11:00　C3へ自力で戻る。
7日　7:30　C3よりジャパニーズ・クーロワールを下降。
11:00　C2着
13:00　約6,200m地点で後藤が急激に脳浮腫に陥り自力歩行が困難となる。その後岩崎クレバスにはまる。
15:30　先行していた、田辺、野沢井パーティー登りかえし、岩崎を救出。
17:00　後藤を6,000m地点プラトーまで降ろす。（後藤の症状：言語障害、運動障害で一人での歩行も困難であった）
8日　9:00 6,000m地点出発。自力歩行は不可能で、ツエルトでくるみ引っ張り降ろす。
15:00　5,850m泊。リエゾンにC1までのヘリコプターの救助要請するが不可能との返事。
9日　2:30　田辺、野沢井でBCへ酸素ボンベを取りに下山。
7:00　BC着。K2労山隊、近藤和美隊長へ救助要請を手紙で出す。（労山隊はK2をあきらめGⅡへ向かっている途中であった。）
17:50　田辺、野沢井5,850m地点へ帰着。夜から酸素吸入（1ℓ／分）
10日　デキサメタゾン8mgを注射。※連日経口でデキサメタゾンを投与していた。

位置　パキスタン、ガッシャーブルム山群
結果　8月5日、全員登頂に成功するも、岩崎、後藤が帰路ビバークとなり、労山隊のサポートを受けて12日BC帰着。
キャンプ配置
BC　5,100m　（6月24日）
C1　5,800m　（7月1日）
C2　6,400m　（7月3日）
C3　7,100m　（8月4日）
報告書　なし

6:00　5,850m地点出発。（酸素2ℓ／分を投与）クレバス・スノーブリッジの通過は四つんばいで通す。
11:00　5,750m地点泊。
11日　6:00　5,750m地点発。後藤衰弱が激しくスピードが落ちる。
12:00　労山隊のHAP（フセイン）、我が隊のコック（アスカリ）が酸素、スノーボードを担いでヘルプに来た。スノーボード（荷物用で小さい、アーミーから借用）に後藤を引きずり降ろす。
14:20　5,500m地点泊。フセイン、アスカリはBCへ。
12日　7:30　5,500m発。
10:00　労山隊近藤隊長以下4名、フセインと合流。人数が増えた為スピードが格段に伸びた。南ガッシャーブルム氷河のアイスフォールを一挙に降ろした。
15:30　BC着。
13日～15日　BCは悪天。ヘリは飛んでこない。シャクリーンにある労山隊の酸素を取りに行く。連日酸素吸入を行なった。
16日　快晴。12時過ぎヘリコプター来る。後藤、に付き添いで野沢井、リエゾンが乗り込む。コンコルディア、パイユを経由してスカルドへ
スカルドのホテルで着替えた後 DHQ（病院）へ。医者の診察、点滴を行なう。
17日　イスラマ行の飛行機には乗れず、引き続き点滴を受ける。
18日　10:30の飛行機にてイスラマバードへイスラマバード着後病院で診察及び点滴。夕方ラベンダーホテルにて休養。
21:00　イスラマバード空港へ。日・パトラベルの力で無事に航空機へ乗る事が出来た。
19日　北京経由で成田へ定刻12:30着。
境町山の会の仲間と共に群馬・藤岡の病院へ入院（脳浮腫及び血栓）
※本隊、岩崎、田辺両氏は隊荷と共にキャラバン。田辺8月30日、岩崎9月2日帰国。



頂稜から左手前に派生しているのが西稜（頂稜は約6,800ｍ）



▲2002.8.17 ニンチン・カンサ西稜核心部を登攀中の樋上（上）と大神田（下）ＢＣから

山名と時期　ニンチン・カンサ　2002年夏

隊の構成　（平均年齢 58.8歳）7,206m

隊　長	山森　欣一	1944年2月	生（58）
副隊長	樋上　嘉秀	1944年6月	生（58）
隊　員	柳　　謙一	1941年8月	生（61）
〃	大神田伊曽美	1944年5月	生（58）
連絡官	李瑞華（50）		

行動概要　（2002年7月20日～8月25日）

7月20日　樋上、柳は関西空港から北京入り。山森、大神田は成田から北京入りしたが、ＣＡの成田組はビジネスシートに変更になりラッキーな空の旅だった。北京空港で合流し常宿の建国前門飯店に投宿し、ＣＭＡ樊開封、汪鉄銘、顔金安三副主席、王玉勤弁公室主任、趙建軍前交流部副部長、李豪傑交流部副部長、李瑞華連絡官と会食。

21日　北京～成都（飛行機代は1,240元）

本日の為替レートは、１元＝14.4円、李連絡官と共に９時45分北京発。12時07分成都に到着。今回の成都のアテンドは四川探検旅游公司の張兄弟と、98年チョム・カンリ登山隊の連絡官だった劉峰。常宿の一つ拉薩大酒店に投宿し、夜は青羊宮の前にある陳麻婆豆腐で盛り上がる。（張の兄貴とは13年振りだった）

22日　成都～ラサ（飛行機は1,270元）

雨の成都を７時40分発。ラサも雨で９時15分着。途中雨のため道路に水が溢れていた。郵電賓館に11時40分到着。午後連絡官とチベット登山協会を訪問。張明興氏が秘書長となった由。今回の概要を連絡官から話し、特にお願いした高所協力員をランカーズからＢＣへ先行させることを依頼する。ここで初めて李連絡官が我々のＢＣ撤収前の８月17日にＢＣを離れて、同志社大学のロンライ・カンリ登山隊の連絡官となることを知る。夕方、ニマ・ツェリンがやってきてＨＡＰはニマの生徒と分かる。夜は登山協会の前に開店したニマの店で夕食。ＨＡＰとコックの３名が挨拶に来た。

23日～24日　ラサで梱包と高所順応

25日　ラサ（3,648m）～ランカズー（4,454m）

10時20分、厚い雲をラサをジープ２台、トラック１台で出発。雨のカンパ・ラを越えて14時半ランカズー到着。郵政招待所に投宿。

26日～28日　ランカズーで高所順応。

高所順応の為滞在したが、その間、26日には連絡官はＨＡＰとヤクの手配に行き、マヨン村まで車が入らないことが判明した。川が増水のため。

29日　ランカズー（4,454m）～ＢＣ(4,800m)

位置　中国、チベット自治区

結果　８月17日、西稜の6,700ｍ地点に樋上、大神田とＨＡＰのアワンが到達したが登頂は断念した。

キャンプ配置

ＢＣ	4,800m（７月29日）
Ｃ１	5,800m（８月７日）
Ｃ３	6,400m（８月16日）

報告書　なし

ランカズーを９時10分に出発。カロ・ラの先で荷車で川を渡る。そのまま荷車に乗ってマヨン村着10時55分。11時40分荷車を降りて徒歩となる。丘陵地帯を喘ぎながら登り、13時15分ＢＣ到着。ＢＣには驚いたことに中国製の大テントが張られていた。17時から連絡官、ＨＡＰを招いてＢＣ開きを行う。

30日～８月18日　登山期間

30日は休養日であったが、日中の強い陽射しとは裏腹に18時すぎから大雷鳴がＢＣを襲い、噂のニンチン・カンサ雷の洗礼を受けた。

31日　山森を除く３名とＨＡＰの２名でＡＢＣとされる湖まで偵察に行く。

８月３日　隊員３名でＣ１予定地の偵察に出掛けたがＢＣ帰幕は21時、日暮れちょっと前であった。

４日　ＨＡＰの二人がＣ１へ荷上。

５日　隊員３名Ｃ１往復。ＨＡＰ２名Ｃ１荷上。

７日　隊員３名Ｃ１入り。ＨＡＰ２名Ｃ１荷上。

８日　隊員３名Ｃ１上10Ｐルート工作。ＨＡＰ２名Ｃ１荷上。樋上トランシーバー落とす。

９日　隊員３名さらに４Ｐルート工作。ＨＡＰ２名荷上のためＢＣからＣ１へ移動。

10日　９時過ぎ柳リタイア。隊員２名でルート工作し、その後にＨＡＰ荷上で続くも6,300ｍ地点で終了。ＨＡＰ２名ＢＣへ帰幕。隊員はＣ１泊まり。

11日　隊員３名ＢＣ帰幕。

14日　柳がリタイアしたのでＨＡＰのアワンを入れた３名で、アタックするためＢＣを出発。

15日　３名は13時50分、6,400ｍのＣ２予定地に到達。清華大学のものと思われる竹竿があった。

16日　Ｃ１～Ｃ２移動。

17日　午前４時にＣ２を出てアタックするも6,700ｍ地点で11時40分登頂を断念し、下降する。アワンはこの日の内にＢＣ帰着。隊員はＣ１泊まり。

18日　隊員ＢＣ帰着。ＨＡＰ２名Ｃ１撤収。

20日　ＢＣ撤収し、ラサに帰着。

登山回数の多い山トップ4

ヌン（7,135m）インド、カシミール・ヒマラヤ

回	登山期間	隊長名	数	ルート	結　果
1	1975,7,17～9,4	西郡　光昭	7	北西稜	7,19保坂昭憲、アスラムが頂稜約7,000mに到達した。
2	1978,8,4～8,31	沖　允人	9	西　稜	8,22高橋太一郎、東英樹、ニマが登頂。同日C3から飯村富彦、寺本政幸、ナワンも登頂した。
3	1983,7,24～8,28	飛田　和夫	7	西　稜	8,16角田不二、細貝登、熊田雅史が登頂した。
4	1987,7,26～9,6	木下　祥子	5	西　稜	8,27小泉恵子、貝塚珠樹、カルマが登頂した。
5	1991,7,14～8,24	中岡　久	12	西　稜	8,14橋本康弘、田村正勝、中山裕朗が登頂した。
6	1992,7,19～8,23	今村　裕隆	15	西　稜	8,13今村裕隆、森谷雅春、野沢井歩が登頂し、15にも関根孝次、須藤圭一、森尾直康、古関正雄、佐藤健も登頂した。
7	1993,7,18～8,25	中川　裕	7	西　稜	8,15中川裕、林雅樹が6,700mに到達。
8	1995,7,23～8,27	酒井　國光	11	西　稜	8,18中川裕、阿部訟二、中島清治、中島俊弥が登頂。

ムスターグ・アタ（7,546m）中国、新疆ウイグル自治区

回	登山期間	隊長名	数	ルート	結　果
1	1992,7,14～8,14	山森　欣一	11	西　稜	8,10橋本康弘、中川裕が約7,000m付近に到達した。
2	1993,7,24～8,28	酒井　國光	11	西　稜	8,17西嶋錬太郎、高橋敏雄、志小田美弘、中島俊弥、伊藤英世が登頂。18日にも酒井隊長、樋上嘉秀、天城敞彦、谷田川武、金森博之、池上邦彦も登頂。
3	1994,7,21～8,28	飛田　和夫	7	西　稜	8,18飛田隊長、田村正勝、小林剛が登頂。19日にも関根孝次、泉田清孝、大久保博、日南長二郎も登頂。
4	1996,7,20～8,25	中川　裕	6	西　稜	8.13中川隊長、品川幸彦が登頂。17にも石川龍彦、北条治男、佐藤英樹も登頂した。
5	1997,7,16～8,24	市川　春代	6	西　稜	8,16市川隊長、竹内千恵、沢田幸子、狩野明美が登頂。

ニンチン・カンサ（7,206m）中国、チベット自治区

回	登山期間	隊長名	数	ルート	結　　果
1	1997,7,20～8,27	天城　敞彦	13	南西稜	8,17志小田美弘、飛田和夫、森山安次、加藤和美、高橋敏雄、川崎浩史が登頂。18日にも天城隊長、野口道雄、石川龍彦も登頂した。
2	1998,7,19～8,25	関根　孝次	10	西　稜	8,15田村正勝、武部秀夫、山本強が西稜を初登攀した。
3	2001,7,20～8,25	酒井　國光	6	西　稜	8,15野沢井歩、宮川真一、斎藤正朗が登頂した。
4	2002,7,20～8,25	山森　欣一	4	西　稜	8,17樋上嘉秀、大神田伊曽美、HAPが6,700mに到達した。

クラウン（7,295m）中国、新彊ウイグル自治区

回	登山期間	隊長名	数	ルート	結　　果
1	1985,8,15～10,29	舘野　秀夫	11	東　壁	9,27中込清次郎、橋本康弘、中野圭一が6,300mに到達 10.1星野貢ら8名が周辺の6,117m峰に初登頂。
2	1990,8,15～10,26	舘野　秀夫	7	東　壁	9,27橋本康弘、佐々木剛が6,320mに到達。同日BCへ下山中の舘野隊長、菅沼勲が懸垂氷河雪崩のため行方不明となり登山を中止した。
3	1992,8,15～11,1	山森　欣一	11	東　壁	9月28日二俣勇司、中川裕が約7,000mに到達するも、10月1日アタックのためC4へ移動中の二俣が雪崩のため行方不明となった。捜索後再度アタックを敢行するもC5で悪天のため中止した。

野外活動

ヒマラヤの旅

第1回（1968年秋）ネパール

1）アンナプルナ（10月19日～30日）

ポカラ～セティ・コーラ～バチュレチャール～トゥラスワロ～バラハレ～ポカラ

柴田金之助	1921年8月	生（47歳）	×前田　清	1893年11月	生（74歳）
渡辺　嘉男	1901年12月	生（66歳）	増田　秀穂	1943年2月	生（25歳）
×藤江幾太郎	1910年2月	生（58歳）	増田　歳子	1942年12月	生（25歳）
長沢森之助	1899年8月	生（69歳）	佐藤　茂	1937年7月	生（31歳）

2）エヴェレスト（10月19日～11月16日）

ルクラ～ナムチェ・バザール～パンボチェ～クーンブ氷河＆イムジャツェ氷河

渡辺　文仁	1939年10月	生（29歳）	山岡　元弘	1943年6月	生（25歳）
×萩　千夏子	1929年11月	生（38歳）	三吉　康夫	1938年12月	生（29歳）
沼田　敏彦	1925年5月	生（43歳）			

3）エヴェレスト（10月19日～30日）

ルクラ～チュタワ～バクディンマ～ナムチェ・バザール～タンボチェ～ディンボチェ

石森芳太郎	1907年9月	生（61歳）	田渕　昌喜	1919年10月	生（48歳）
村上常太郎	1905年2月	生（63歳）	滝本　啓一	1921年5月	生（47歳）
阿部　淳	1933年11月	生（34歳）	井口　洋平	1910年11月	生（57歳）
森　美枝子	1941年5月	生（27歳）	高沢　忠	1917年2月	生（51歳）
八木　公信	1920年8月	生（48歳）	鵜木　洋	1940年8月	生（28歳）
土屋　武雄	1928年3月	生（40歳）			

羽田をあとに

柴田　金之助

出発の時刻13時30分は刻々と近づいていた。羽田空港特別待合室に、ヒマラヤ旅行団は集合していた。

「これは世界で初めての旅行団で日本ネパール協会としても極めて喜ばしいことであります。チーム・ワークに留意してヒマラヤを楽しんで来て下さい」という顧問川喜田二郎先生の激励の言葉、「ネパールと日本は共に仏教を信ずる人々が沢山いるいわば兄弟の国です。美しいヒマラヤを心ゆくまで眺め、ネパールの人達と仲よくなってきて下さい」というネパール大使館、シャハ参事官のお祝の言葉を受け、団員一同、今からヒマヤラへ行くんだという気持が実感となって胸にわき上ったようであった。

エアインディアのジェット機にエンジンがかかった。21番ゲートには見送りに来て下さった柴田君江、沖理事、ネパール留学生ランジャン君、ＪＴＢの加藤さん、浜松の峰野さん達の顔が見えた。私は椅子のベルトをきつく締めながら眼をつむってこの旅の無事を祈った。

第6回（1971年夏）

コラホイ登山隊として実施（別掲）

第7回（1971年冬）

1）クーンブ氷河（12月26日～72年1月10日）

ルクラ～ナムチェ・バザール～タンボチェ～ディンボチェ～（＊印ロブチェ～ツォラ湖）

L増田	秀穂	1943年2月 生（28歳）	＊吉田	和子	1949年12月5日生（22歳）
＊上田	安宣	1937年3月 生（34歳）	大野	富子	1946年12月 生（25歳）
田尻	種徳	1919年9月 生（52歳）	村山	栄子	1947年7月 生（24歳）
＊井守	克巳	1927年1月 生（44歳）	渡部	信子	1946年6月 生（25歳）
下志万嘉彦		1931年7月 生（40歳）	佐藤	ヨシ	1940年12月 生（31歳）
×＊江坂光守		1936年8月 生（35歳）	宮原	進	1911年9月 生（60歳）
河上	勲	1945年8月 生（26歳）			

2）ランタン・ヒマール（12月26日～72年1月22日）

トリスル・バザール～ドンチェ～シャブルベンシ～キャンジュン・ゴンパBC（偵察）～ガンジャ・ラ～タルケ・ギャン～タラマラン～シパガート～チャイナ・ロード

L池田	昭二	1927年2月 生（44歳）	稲田	定重	1940年8月 生（31歳）
×伊藤	寿	1931年6月 生（40歳）	佐藤	中山	1945年8月 生（26歳）
熊谷	浩志	1936年12月 生（35歳）			

3）ランタン谷（12月26日～72年1月22日）

トリスリベンシ～ドンチェ～シャブルベンシ～シェルパガオン～キャンジュン・ゴンパ～（ガンジャ・ラ越えられず）

L渡辺	正蔵	1938年5月 生（33歳）	中村	勲	1945年4月 生（26歳）
岩淵	一雄	1941年2月 生（30歳）	大谷地政光		1949年10月 生（22歳）

4）ランタン・コーラ（12月26日～72年1月）

キャンジュン・ゴンパ～5600m峰登頂

L山田	康雄	1942年9月 生（29歳）	平岡	雅之	1945年6月 生（26歳）
水野	紀彦	1944年2月 生（27歳）			

5）モディ・コーラ（12月26日～72年1月）

ポカラ～ビレタンティ～ガンドルク～チョムロン～マチャプチャレBC（偵察）

L今村	朋信	1930年10月 生（41歳）	×石崎	貞子	1933年6月 生（38歳）
大崎	正信	1939年7月 生（32歳）	岡	紀江	1940年9月 生（31歳）
白銀	健	1939年1月 生（32歳）	星山	美弥	1943年1月 生（28歳）
中川	紘一	1944年1月 生（27歳）			

6）ティリッツォ（12月26日～72年1月）

ポカラ～ゴラパニ峠～シーカ～ツクチェ～ティニ～ティリッツォ峠～ガサ～タトパニ～シーカ～ゴラパニ峠～ポカラ

三原　洋子　1941年5月　生（30歳）
佐々木典子　1947年2月　生（24歳）
吉田　恭子　1947年8月　生（24歳）

7）ゴラパニ峠（12月26日～72年1月）

L関　裕明　1945年3月　生（26歳）
×小須田義治　1935年10月　生（36歳）
×金子　辰巳　1906年1月　生（65歳）
伊藤　博　1941年1月　生（30歳）
中村　茂樹　1945年4月　生（26歳）
玉主　清　1945年1月　生（26歳）
中村　義治　1938年11月　生（33歳）
関谷　節子　1938年11月　生（33歳）
玉主　澄子　1947年5月　生（24歳）
加藤　憲子　1947年5月　生（24歳）
加藤　昭　1942年1月　生（29歳）
垣本百々子　1942年1月　生（29歳）

8）ゴラパニ峠（12月26日～72年1月）

L横地　康生　1936年12月　生（35歳）
大塚　清市　1926年9月　生（45歳）
竹沢　昴　1940年8月　生（31歳）
岡村　武　1942年11月　生（29歳）
山口かつ江　1942年3月　生（29歳）
大内　健一　1944年2月　生（27歳）
時田　悠治　1946年1月　生（25歳）
玉木　秀一　1946年11年　生（25歳）
玉木きん子　1945年6月　生（26歳）

9）ゴラパニ峠（12月26日～72年1月）

L山里　寿男　1931年10月　生（40歳）
×須賀　玄郷　1930年3月　生（41歳）
佐々木弘之　1937年12月　生（34歳）
井関ヒロ子　1935年4月　生（36歳）
山下　政一　1937年9月　生（34歳）
岡本　紀昭　1943年2月　生（28歳）
中西喜和男　1929年3月　生（42歳）
富塚ユウ子　1945年11月　生（26歳）
小林美和子　1942年10月　生（29歳）

10）ノウダラの丘（12月26日～72年1月）

L沖　允人　1935年1月　生（36歳）
×宮野　輝　1903年7月　生（68歳）
都会　春男　1909年4月　生（62歳）
井口　浩　1913年2月　生（58歳）
井口　洋平　1910年11月　生（61歳）
折戸　正明　1917年7月　生（54歳）
×今井千代子　1917年2月　生（54歳）
黒沢　文代　1938年11月　生（33歳）
村松　伸一　1947年8月　生（24歳）

その他の野外活動

第2回カシミール・ヒマラヤ登山隊（1972年夏）

①スリナガール～ナディハル　サルパル～小登山
②ソナマルグ～ニチナイ～ラスパル　ガンガバル～スリナガール

千葉良正　1943年8月　生（29歳）　　関根令子　1947年5月　生（25歳）
北野督礼　1944年10月　生（27歳）

カシミール・ツアー（1974年夏）

1）ソナマルグ周辺の試登（8月8日～10日）

L空　昌昭　1936年11月　生（37歳）　　久保　幸治　1953年10月　生（20歳）
清水　正雄　1948年5月　生（26歳）

2）ハラムク周辺の偵察（8月13日～17日）

L空　唱昭　1936年11月　生（37歳）　　内田　嘉弘　1937年1月　生（37歳）
清水　正雄　1948年5月　生（26歳）　　伊藤　裕明　1936年10月　生（37歳）
久保　幸治　1953年10月　生（20歳）

ヌン、クン偵察（1974年9月12日～18日）

パルカチ氷河とクン南面スル川沿いを偵察

L沖　允人　1935年1月　生（39歳）　　小川　務　1944年12月　生（29歳）
増田　秀穂　1943年2月　生（31歳）　　菅野　武士　1945年5月　生（29歳）
今村　朋信　1930年10月　生（43歳）　　M．アシュラフ　（31歳）

ラダック、ガルワール踏査隊（1974年9月19日～10月10日）

パルカチ～カルギルーレ～マナリ～ニューデリー（ニュー～リシケシ～ジョシマート～カプコット～サマ～ランケット～ニューデリ）

L沖　允人　1935年1月　生（39歳）　　小川　務　1944年12月　生（29歳）
増田　秀穂　1943年2月　生（31歳）　　菅野　武士　1945年5月　生（29歳）
今村　朋信　1930年10月　生（43歳）

ザンスカール山群中央部踏査（1978年8月4日～9月3日）

スリナガール～カルギル～パニカル～ジュルドゥ～スムドピズドン・ラー～ディヴィン～ピシュツェ～リンシェット～フォタクサール～スムド～ラマユール～レーカルギル～スリナガール

L石川真知子　1935年4月　生（43歳）　　辰巳　順子　1947年10月　生（30歳）

中垣　淑子　1937年2月　生（41歳）　　深山　桃子　1947年4月　生（31歳）

パミール　アライ谷（1977年7月18日～

羽田～モスクワ～オーシ～レーニンＢＣ

中西喜和男　1929年3月　生（48歳）　　×前田　清　1893年11月　生（84歳）

セミナー・トレッキング　ネパール ジュガール山群

（1979年12月30日～80年1月16日）

カトマンズ～コダリ～ラルツ～シチンタン～ゴンベダンダ・カルカ～バイラブクンド～テシンタン～バガン～カラムサングー～ジャルビル～カトマンズ

Ｌ岩水　竜峰　1946年9月　生（33歳）　　鈴木　孝　1952年4月　生（27歳）

×小林　英見　1908年2月　生（71歳）　　薗田　芳子　1951年1月　生（28歳）

五百沢智也　1933年5月　生（46歳）　　×石崎　貞子　1933年6月　生（46歳）

×設楽　芳夫　1912年6月　生（67歳）　　由良　珠江　1939年2月　生（40歳）

井上　英新　1932年12月　生（47歳）　　小野木三郎　1939年10月　生（40歳）

佐藤　圭司　　安藤　志郎　1947年1月　生（32歳）

米山　和男　1924年12月　生（55歳）　　戸部　洋子　1953年10月　生（26歳）

米山　方子　1924年2月　生（53歳）　　榊原　幸子　1955年5月　生（24歳）

柳沢須佐男　1913年7月　生（66歳）　　片岡　邦夫　1954年4月　生（25歳）

白前　和良

カンチェンジュンガ学術調査(1)（1981年4月8日～7月4日）

カトマンズ～イラム～ヤンポディン～ラムゼ～ＢＣ～グンサ～パンペマ～ドバン～ダーランバザール～カトマンズ

Ｌ五百沢智也　1933年5月　生（48歳）　　谷本　秀喜　1951年3月　生（30歳）

小林　詢（44歳）　　松岡　憲知（25歳）

カンチェンジュンガ学術調査(2)（1981年11月7日～12月5日）

カトマンズ～カンチェンジュンガ航空撮影～マチャプチャリ山麓氷河地形調査

Ｌ五百沢智也　1933年5月　生（48歳）　　小野　有五（32歳）

ナンダ・カートＢＣ訪問団（1982年9月25日～10月17日）

1981年登山で遭難した遺族がＢＣを訪問。

ニューデリー～アルモラ～カプコット～ロハルケット～ダグリ～カティ～ＢＣ

Ｌ小島　守夫　1940年3月　生（42歳）　　鈴木

フンザとシャンドル峠越え（1982年７月23日～８月13日）

イスラマバード～ギルギット～フンザ～グピス～シャンドール峠～マスツージ～チトラル～ペシャワール～イスラマバード

L×小林　英見　1908年２月　生（75歳）
　米山　和男　1924年12月　生（59歳）
　米山　方子　1926年２月　生（57歳）
　小川　智　1925年11月　生（58歳）
　村串　静江　1950年３月　生（33歳）
　乗松　通子

ＨＡＪ女性ブータン・トレッキング隊（1983年４月20日～５月18日）

カルカッタ～バグドグラ～プンツォリン～パロ～チョモラーリ方面トレック～ティンプー～プンツォーリン～バグドグラ～カルカッタ

L黒石　恒　1925年８月　生（58歳）
　香原　和子　1927年１月　生（56歳）
　高橋　幸子　1929年１月　生（54歳）
　設楽　純子　1931年４月　生（52歳）
　菅野　昌子　1945年５月　生（38歳）
　今村　朗子　1953年９月　生（29歳）
　佐々木直子　1254年４月　生（29歳）

北海道ＨＡＪブータン遠征隊（1983年４月27日～６月１日）

カルカッタ～バグドグラ～プンツォリン～ティンプー～ドチュ・ラ～ウォンデホゾン～ニカ・チュー～バジャ～セーゼー～テンペ・ラー～マオロタン～チャンザー～プナカ～セリガン～ヤゲマゲ～タムジン～ガサゾン～セリガン～ティンプー～プンツォリン

L京極　紘一　1943年11月　生（39歳）
　梅沢　俊　1946年９月　生（36歳）
　高場　健司　1951年12月　生（31歳）
　江崎　幸一　1952年３月　生（31歳）
　矢島　敬雄　1962年10月　生（30歳）
　三好　誠　1959年１月　生（24歳）
　熊代　康夫　1951年10月　生（31歳）

［北海道・日本ヒマラヤ協会ブータン遠征隊1983年報告書　Ｂ５　８頁1983年８月10日刊］

スークーニャン踏査隊（1983年９月23日～10月６日）

北京～成都～日隆～千海子～花海子～日隆～成都～北京

L×角田不二／吉田憲司は登山の項に収録
＊山岸　喬　1945年11月　生（37歳）
（ＮＨＫ協力取材班）×田川純三／岡田正大／佐藤征夫／斎藤英夫／谷脇健一

［ヒマラヤ145号 四姑娘山の旅（角田不二）150, 151号　四姑娘山の自然（山岸　喬）］
［雲南・少数民族の天地－「天府の国」・四川－（ＮＨＫ取材班）日本放送出版協会］

中国、ナムチャ・バルワ峰登山隊岩登り指導（1983年秋）

10月９日～11月26日　北京～成都～松藩～九寨溝～松藩～成都
1984年春に予定されている中国ナムチャ・バルワ登山隊隊員に対して松藩にて岩登りの基礎技術訓練を指導した。（実質17日間）

L×角田　不二　1952年９月　生（31歳）
　吉田　憲司　1953年１月　生（31歳）

［ヒマラヤ148号　岷山の秋・1983（角田不二）］［中国登山運動史Ｐ226］

ブータン偵察隊（1983年９月28日～10月26日）

戸谷　　薫　1947年12月　　生（35歳）　　三好　　誠　1959年１月　　生（24歳）

ブータン調査隊（1983年秋）

五百沢智也　1933年５月　　生（50歳）　　三好　　誠　1959年１月　　生（24歳）

雲南の旅（1984年４月１日～28日）

北京～成都～昆明～楚雄～大理～麗江～石鼓～帰路＆昆明～西双版納～帰路
Ｌ飛田和夫／関久雄／遠藤喜重郎／遠藤京子については登山の項（ユイロン）
（ＮＨＫ取材班）田川純三／佐藤征男／後藤多門／徳永桂一／金子光雄／横山隆一／坂元友芳／山市健治
［雲南・少数民族の天地－辺境雲南－（ＮＨＫ取材班）日本放送出版協会］

聖地巡礼　カイラスの旅（1984年６月25日～８月31日）

北京～成都～ラサ～ギャンツェ～シガツェ～ソーチン～ゲズ～ゲキョ～シーチェンホー～ダルチェン～カン・リンポーチェ一周～プラン～マヨム・ラ～ヤル・ツァンポ源流～マヨム・ラ～ダルチェン～帰路
Ｌ山森／五百沢／村上は登山の項（ナムナニ）　　五百沢杉子
（ＮＨＫ取材班）
井出郁太郎　1938年12月　　生（45歳）　　東野　　良　1944年６月　　生（40歳）
川上　広文　1948年５月　　生（36歳）　　三浦　吉福　1951年７月　　生（33歳）
［ヒマラヤ156号　チャンタン高原から聖地巡礼の旅（山森欣一）］［西蔵・聖地カイラス巡礼（ＮＨＫ取材班）日本放送出版協会］

スークーニャン・トレッキング（1984年７月27日～８月13日）

北京～成都～日隆～千海子～花海子～日隆
Ｌ×小林　英見　1908年２月　　生（76歳）　　米山　和男　1924年12月　　生（59歳）
　　小川　　智　1925年11月　　生（58歳）　　米山　方子　1926年２月　　生（58歳）
　　黒石　　恒　1925年８月　　生（59歳）　　大塚喜代子　1931年12月　　生（52歳）
［ヒマラヤ157～158号　スークーニャンの山旅（小林映見）］

黄河源流探検（1985年５月23日～７月21日）

北京～蘭州～西寧～青海南山～共和～瑪多～オーリン湖～ザーリン湖～星宿海～カルチューなど源流領域調査～清水河～曲麻来～五道梁～コンロン山峠～格尔木～西寧～北京
Ｌ八木原圀明ら６名の登山班は登山の項（ヤラダツォ）／松下勝治（22）／陸田義行（35）小原信行（25）／三沢武徳（30）／西卓二（25）／栗田邦夫（41）

（読売新聞／映像センター取材班）　／朝田健二（36）野呂進（53）
江本　嘉伸（44）／安斎晃（30）／田辺明（27）
［ヒマラヤ167号　黄河源流探索報告　ヒマラヤ178号　黄河源流域の地形と植生（小泉武栄）黄河源流の動物たち（梶光一）黄河源流水質調査の結果（渡辺久樹）］［ルポ　黄河源流行（江本嘉伸）読売新聞社］

ナンガ・パルバットＢＣ訪問団（1985年７月１日～18日）

84年遭難した隊員遺族のＢＣ訪問
成田～イスラマバード～ギルギット～タルシン～ルパール～帰路
Ｌ×土居　正勝　1944年７月　生（41歳）　長　繁夫　1951年１月　生（34歳）
角田照子（60歳）／徳丸滋（50）／徳丸智恵子　木村　陽子　1954年９月　生（30歳）
（54）／小暮スミ（58）／小暮勝（31）／小暮由　中川　裕　1960年８月　生（24歳）
紀子（29）／肥田富雄（29）
［ヒマラヤ167号　ナンガ・パルバット訪問記（中川裕）］

中ネ辺境踏査（1985年８月３日～28日）

・西遊旅行とタイアップ　西寧～格尔木～コンロン山峠～那曲～ラサ～シガツェ～ザンムー～カトマンズ（3000km雲上の道）世界初
Ｌ中江　啓介　1951年２月　生（34歳）
木槻　哲夫／木槻美登里／望月田鶴子／角田　雅美／大石　英代／篠田　澄江
［ヒマラヤ167号　雲の上の道（青海～ネパール）初縦断成る！］

西南中国広域踏査（1986年９月29日～11月20日）

西田敏行が能海寛の足跡を巡る旅。
北京～崑明～楚雄～大理～麗江～石鼓～昆明（昆成鉄道）成都～雅安～石棉～康定～理塘～巴塘～理塘～熱柯（ゲニ偵察）～成都～理県～紅原高原～松潘～（黄竜寺・九寨溝）～南坪～平武～茂文～臥竜～成都～北京
Ｌ山森　欣一　1944年２月　生（42歳）　西田敏行（38）／安藤邦夫（38）／戸田裕士（31）
（アオイスタジオ撮影班）　／小林保男(31)／原田親（26）
永掘徹（48）／蔵原惟二（51）／川本茂（52）／　連絡官：王馬特
［ヒマラヤ183号格聂（ゲニ）偵察報告（付・西南中国広域踏査（山森欣一）］

新青峰偵察・トレッキング隊（1987年７月25日～８月15日）

＊＝トレック
北京～西寧～格尔木～不凍泉～150kmほど西に進むが断念する～帰路
Ｌ植松　秀之　1939年８月　生（48歳）　＊酒井　正寛　1949年３月　生（38歳）
小玉　義広　1957年６月　生（30歳）　＊川上　茂　1937年２月　生（50歳）
二宮　優子　1956年１月　生（31歳）　＊遠藤登喜子　1953年７月　生（34歳）
大類　広　1957年11月　生（29歳）　＊石山久美子　1957年１月　生（30歳）

＊村上　　武　1937年３月　　生（50歳）
［ヒマラヤ199号　青蔵高原偵察隊報告（小玉義広）］

中ソ辺境旅遊隊（1987年９月25日～10月16日）

ムツゴロウが汗血馬を求めて中央アジアを行く
成田～北京～ウルムチ～石河子～セリム湖～果子溝～イーニン～ホルゴス～パンヒロフ～アルマ・アタ～フルンゼ～タシケント～ハバロフスク～新潟
Ｌ尾形　好雄　1948年７月　　生（39歳）　　永掘徹（49）／畑正憲／他２名
（アオイスタジオ取材班）
［ヒマラヤ205～207，209号　天山北路シルクロードの旅（尾形好雄）］

冬季バルトロ氷河偵察（1987年12月４日～88年１月31日）

冬季Ｋ２の可能性を探るためバルトロ氷河に入る
イスラマバード～スカルド～アスコーレ～ウルドカス～Ｋ２ＢＣ～帰路
Ｌ飛田　和夫　1946年１月　　生（42歳）　　熊田　雅史　1956年２月　　生（31歳）
［ヒマラヤ197号　冬季バルトロ氷河偵察（飛田和夫）］

インド北部辺境踏査隊（1990年７月１日～８月23日）

ニューデリー～シムラ～マナリ～ロータン・パス～ケイロン～ラチェン・ラ～タンラン・ラ～ウプシ～レー
Ｌ尾形　好雄　1948年７月　　生（42歳）　　岡田　正大　1941年８月　　（48歳）
（アオイスタジオ取材班）　　●谷　泰明　1953年11月　　（54歳）
［ヒマラヤ231号　雲上の道を行く（尾形好雄）］　　原田　　親　1960年５月
太田　　亨　1961年３月　　生（29歳）　　道源　直孝　1958年１月　　（32歳）
（おおたとおる）　　徳重　正司　1963年７月　　（27歳）

ブラマプトラ川川下り（1990年12月20日～91年２月17日）

（インド、ＩＴＢＰと合同で、中国国境からバングラディッシュ国境までの河下りに成功。併せて周辺の取材を実施）
Ｌ八木原圀明　1946年11月　　生（44歳）　　ＨＣ　Tajber　Singh
八嶋　　寛　1950年３月　　生（40歳）　　ＨＣ　Attar　Singh
上原　和明　1967年11月　　生（23歳）　　Const　Sasi Dharan　Pillai
中谷　敏夫　1968年５月　　生（22歳）　　Guides　Mr.Akshay　Kumar
関口　顕俊　1968年９月　　生（22歳）　　〃　Mr.Ajay　Mehre
ShriS.P.Camori，Comdt　　（アオイスタジオ取材班）
Shri　ＳＳ　Mishra，Coy　Comdt　　畑正憲／西崎東／他３名
Sub　Bihari　Lai
［神の河　プラマプトラの激流を下る］

シッキム撮影隊（1991年４月18日～

カンチェンジュンガの麓で時任三郎がパラグライダー飛行に挑戦し、合わせて周辺を撮影する。
（アオイスタジオ撮影班）
鈴木哲夫／時任三郎／他３名

クラウン峰ＢＣ踏査隊（1991年８月25日～９月29日）

・90年登山隊遭難隊員の追悼ＢＣ訪問
北京～ウルムチ～カシュガル～イエチェン～マザー・ダラ～イリク～アギール峠～シャクスガム川～インホンタン～ＢＣ～帰路

Ｌ星野	貢	1947年12月	生（43歳）	安田 里子	1950年１月	生（41歳）
山形	正巳	1954年３月	生（37歳）	池田 隆信	1950年12月	生（40歳）
喜内	敏夫	1947年12月	生（43歳）	水野 俊哲	1946年４月	生（27歳）

［ヒマラヤ241号　クラウン峰ＢＣ踏査報告（山形正巳）］

スピティ／ラダック奥地探査隊（1994年８月７日～28日）

ニューデリー～シムラ～ランプール～シャラハン～シムラ～マンディ～クル～マナリ～クンザン・ラ～カザ～ケイロン～バララチャ・ラ～タンラン・ラ～レー～チャン・ラ～パンゴン湖～ウプシ～ツォモラーリ湖～帰路～レーカルドゥン・ラ～レー～ニューデリー

Ｌ沖	允人	1935年１月	生（59歳）	松舘 正義	1944年４月	生（50歳）
沖	道子	1938年７月	生（56歳）			

［ヒマラヤ277号　スピティ／ラダック解禁地区を走破　インド・中国国境にまたがる湖（沖允人）］

ミニヤ・コンカ訪問団（1995年５月19日～25日）

94年隊遭難遺族の成都へ峨嵋山訪問。

Ｌ山森	欣一	1944年２月	生（51歳）	福澤ヨシ子／渡辺園子	
鈴木	典子／工藤千鶴子				

［ヒマラヤ285号　ミニヤ・コンカ訪中団峨嵋山へ（山森欣一）］

ニンチン・カンサ偵察（1996年８月24日～９月４日）

北京～成都～ラサ～ランカズー～ニンチン・カンサ偵察～モンダ・ラ～モンダ～クーラ・カンリＢＣ～帰路

Ｌ山森	欣一	1944年２月	生（52歳）

日中合同ヤンラ・カンリ偵察（1996年９月25日～10月11日）

北京～成都～ラサ～シガツェ～ティンリー～ペグ湖～マ・ラ～ジーロン県～ジーロン鎮～ジャゾン～リサン～ラト・ラ下～帰路

Ｌ山森	欣一	1944年２月	生（52歳）	ガ	ヤ（46歳）

［ヒマラヤ306号　ガネッシュ・ヒマール主峰　ヤンラ・カンリ偵察記（山森欣一）］

第Ⅳ部

帰らざる仲間たち

インド　ガルワール・ヒマラヤ

ナンダ・カート（6,611m）

1981年9月27日

9月27日、C3(6,000m)宿泊予定の藤倉、寺本、鈴木の3名と荷上げの阿部、斎藤、本田、埜口の4名はC3に到達。キャンプを設営後、C2へ下降予定の阿部ら4名は、正午すぎからの降雪のため、C2へのルートを見失いC3へ引き返し、4～5人用のテント一張で7人が宿泊することとなった。

18時の交信でC1の小島守夫隊長と翌日の行動について協議し、28日朝7時に交信することを約束したが、7時の交信に応答はなく、7名は消息を断ったものである。

10月26日～12月10日に14名の捜索隊を派遣し、C3付近までの捜索を行ったが、何も発見することはできなかった。遭難当時の状況から「雪崩」によって没収したものとみられている。

▒遭難者

藤倉和美	1950年3月	生(31)東京
阿部直彦	1946年1月	生(35)神奈川
斎藤孝雄	1946年1月	生(35)宮城
寺本政幸	1950年11月	生(30)愛知
本田荘八	1951年5月	生(30)神奈川
埜口正則	1952年5月	生(29)大阪
鈴木陽一	1953年7月	生(28)神奈川

左から藤倉和美、阿部直彦、斎藤孝雄、寺本政幸、本田荘人、埜口正則、鈴木陽一

インド　カシミール・ヒマラヤ

クン（7,077m）

1982年8月9日

8月9日、スノープラトーを目指していた登山隊は、午後4時に到達した場所に荷物をデポしてC1へ下降することになった。下降を始めた午後4時40分頃、ルート側壁上部から岩雪崩が発生し、ルート上の固定ロープが切断され、勝山が行方不明となった。8月15日の捜索によって勝山は標高5,700m付近で遺体となって発見されクレバスに埋葬された。岩雪崩は急上昇した気温のため岩壁帯の一部が崩落して引き起こされたものとみられる。

▒遭難者

勝　山　教　孝（31）1951年6月　　生　長野

ネパール　冬期ヒマラヤ

マナスル（8,163m）

1982年12月18日

12月18日、頂上アタックに向かった角田、佐久間、青田の3名は、午前8時20分頃プラトーに抜けたが、すさまじい強風のため釘付けとなった。青田が下降し30分後の9時20分頃には角田、佐久間も下降に入ったが、氷壁を降りる時、ピナクル寄りを降りた佐久間が滑落。即死であった。遺体は収容され標高7,200m付近のクレバスに埋葬された。

▒遭難者

佐久間　　隆　1950年8月　　生（32）東京

パキスタン　パンジャブ・ヒマラヤ

ナンガ・パルバット（8,126m）

1984年7月上旬

南面の中央側稜から登頂を目指していた登山隊4名全員が7月7日以降消息を断ったもの。

6日にBCにいる連絡官とトランシーバーによる交信はC3（6,700m）から行われており、彼らはC4に入ろうとしたが、降雪のため、もしくは不安定な積雪に雪崩の危険を察知し、氷田のトラバースを中止し、この日はC3に泊まったと考えられる。天候は前日より悪化したが、C2～C3間は稜上であるため、安全に行動できたのではないか。

それ以後の行動については想定できないが、C3就寝中に雪崩に襲われて埋没したか、C2への下降中に雪崩に襲われたが、いずれにしても行方不明の原因は「雪崩」によるものと想定される。

▒遭難者

角田不二	(31)	1952年9月	生　埼玉
今給黎宣幸	(27)	1956年6月	生　東京
小暮　孝	(26)	1958年3月	生　栃木
肥田繁男	(26)	1957年11月	生　群馬

左から今給黎宣幸、角田不二、小暮孝、肥田繁男

中　国　カラコルム

クラウン（7,295m）

1990年9月27日

9月27日、C1を11時に出発してBCへ下降中の舘野、菅沼の2名は、インスガイティ氷河右岸にある無名峰に喰い込む通称Fルンゼ出合いにて午後4時頃発生したと思われる懸垂氷河崩落による雪崩のため行方不明となり捜索でも発見されなかった。

翌年、BC訪問を目的とした踏査隊によって、2名の遺体は収容されDルンゼに埋葬された。

▒遭難者

舘　野　秀　夫（41）1949年2月　　生　栃木
菅　沼　　勲（60）1929年9月　　生　東京

中　国　カラコルム

クラウン（7,295m）

1992年10月2日

10月2日、頂上アタックを敢行すべく、C3からC4（5,800m）へ移動中の二俣と中川は、午後4時の定時交信をC2の山森隊長と行った。ここでトップ中川となり25P目の固定ロープを登っている時、上部から雪崩が発生。中川は止ったが二俣が行方不明となった。3日～5日と晴天下での捜索でも二俣は発見されなかった。事故はC4へあと10分程の場所であった。下部デブリでザックとヘルメットが発見されている。

▒遭難者

二　俣　勇　司（37）1955年6月　　生　東京

中　国　横断山脈

ミニヤ・コンカ（7,556m）

1994年9月28日

9月28日、C3（5,850m）にいる福沢は午前11時、BCの山森に対して「現在4名共C3にいる。ラセン階段上の荷の回収を終って新しいテントを1張設営。アラレが強いが風は朝からみると弱くなった」と報告。次いでC1の渡辺斉からC3の表層雪崩の危険について聞かれ「北東支稜の雪崩はテントまで届かない。氷河からの雪崩は走路から相当離れているので危険性はない。4人共体調はいいので、4人で支援に行く。アンザイレンして行く。一緒の所に固まらない」などと答え、これが最後の交信となり4名は消息を断ったのである。

30日、C1の渡辺と高田はC2に移動。晴天の中、双眼鏡で階段氷河上や北東支稜、ヤンズーコー氷河上などを観察。

10月1日、2名は階段状氷河に取り付きC3を目指すが、固定ロープ4本で断念。

2日、C2は風強く雪崩が出始めたため、捜索を断念してBCへ下山した。

事故原因は「雪崩」と想定され、C3のテントに4名一緒の時に埋没したか、C3を出て行動し、固定ロープの取付きに到着する間に雪崩に遭遇した。　いずれかのケースの確率が高いと想定される。

▒遭難者

福　澤　卓　也	1965年10月	生(28)北海道
渡　辺　靖　之	1966年12月	生(27)静　岡
鈴　木　洋　介	1967年9月	生(26)茨　城
工　藤　潤　二	1971年10月	生(22)愛　知

第Ⅴ部

研究会と出版

東北地区ヒマラヤ研究会

回	開催年月日	開催地	参加者	主な講師名
1	昭和46年6月5日～6日	宮城県	35名	沖允人／浜巌／江上康／加賀勝／稲田定重／今泉欣
2	昭和47年6月17日～18日	岩手県	73名	西川一三／金田正樹／空昌昭／沖允人／田村真知子
3	昭和48年6月9日～10日	山形県	83名	小方全弘／清水澄／西郡光昭／松島静吾／高橋亭夫
4	昭和49年6月2日～3日	福島県	126名	中島寛／村井葵／大崎正信／浅見正夫／友光幸二
5	昭和50年6月8日～9日	青森県	72名	西村清一郎／阿部淳／五百沢智也／沖允人
6	昭和51年6月26日～27日	栃木県	90名	竹節作太／沖允人／稲田定重／藤井潔
7	昭和52年6月25日～26日	秋田県	45名	沖允人／松村雄
8	昭和53年5月20日～21日	岩手県	47名	高橋喜平／鈴木松治／近藤喜一郎／稲田定重／沖允人

日本ヒマラヤ会議

回	開催年月日	開催地	参加者	主な講師名
1	昭和54年12月8日～9日	山形市	39名	広島三朗／土居正勝／細貝栄／稲田定重／山森欣一
2	昭和55年2月24日	京都市	47名	小松幸三／稲田定重／山森欣一
3	昭和55年3月9日	札幌市	48名	広島三朗／田村俊介／稲田定重
4	昭和55年7月6日	仙台市	48名	角田不二／井上和正／稲田定重
5	昭和55年10月25日	高知市	32名	山森欣一
6	昭和55年10月26日	福岡市	38名	尾形好雄／渡辺優／山森欣一
7	昭和55年11月2日～3日	前橋市	70名	田中壮佶／稲田定重／尾形好雄／山森欣一
8	昭和55年11月16日	松本市	31名	佐藤英夫／上総紀久男／尾形好雄／山森欣一
9	昭和56年4月5日	札幌市	35名	小西政継／稲田定重
10	昭和56年6月13日～14日	田沢湖	25名	杉本忠男／中江啓介／西郡光昭
11	昭和56年7月19日	京都市	18名	S.Rシャルマ／山森欣一
12	昭和56年8月23日	仙台市	35名	H.C.サリーン／尾形好雄
13	昭和56年11月28日	前橋市	60名	尾形好雄／山森欣一
14	昭和56年12月5日	高知市	32名	川村晴一／名越實／稲田定重
15	昭和57年2月21日	札幌市	30名	尾形好雄／山森欣一
16	昭和57年3月14日	福岡市	28名	武井滋／山森欣一
17	昭和57年10月16日～17日	高知市	20名	佐藤英夫／尾形好雄
18	昭和58年6月11日～12日	宇都宮市	13名	
19	昭和58年12月4日	仙台市	32名	

中国登山研究会

回	開催年月日	開催地	参加者	主な講師名
1	昭和58年7月31日	東京都	70名	[中国登山協会／史占春／許競]
2	昭和58年8月2日	札幌市	84名	[中国登山協会／史占春／許競]
3	昭和61年3月2日	東京都	36名	[四川省登山協会／鄭栄発]
4	昭和61年11月30日	東京都	40名	[チベット登山協会] ローサンダワ／成天亮
5	平成9年1月19日	東京都	35名	山崎幸二／石沢好文／中村保／中川裕／山森欣一
6	平成10年2月8日	東京都	12名	猪熊隆之／天城敞彦／宮崎久夫／山森欣一
7	平成11年2月7日	東京都	65名	[中国登山協会／張江援]関根孝次／酒井國光／天城敞彦
8	平成12年2月6日	東京都	35名	酒井國光／関根孝次／岩崎洋／星野龍史／山森欣一
9	平成13年2月4日	東京都	36名	坂本正治／野沢井歩／山森欣一
10	平成14年2月3日	東京都	21名	出利葉義次／酒井國光／野沢井歩／山森欣一

インド・ヒマラヤ会議

回	開催年月日	開催地	参加者	主な講師名
1	昭和55年3月23日	東京都	32名	ジョギンダール・シン／
2	昭和55年11月2日	前橋市	70名	日本ヒマラヤ会議として群馬県山岳連盟と共催。3日まで。
3	昭和57年1月9日	東京都	30名	10日まで。関久雄、安中秀子、小泉俊夫、尾形好雄、山森欣一
4	昭和58年1月8日	東京都	36名	9日まで。定村修一、藤井洋一、中野満、C.S.クマール、尾形好雄
5	昭和59年1月7日	東京都	36名	8日まで。M.S.コーリー／稲田定重／飛田和夫／鈴木和水／山形正己
6	昭和60年1月12日	東京都	45名	フカム・シン 13日まで。鈴木荘平／山中芳樹／渡辺雄二／遠藤雄悦
7	昭和61年1月11日	東京都	41名	N.D.ジャール／提信夫12日まで。／知久隆／沖允人／尾形好雄／山森欣一
8	昭和62年1月10日	東京都	35名	11日まで。山中芳樹／寺沢玲子／松永義夫／遠藤雄悦／尾形好雄
9	昭和63年1月10日	東京都	35名	山中芳樹／竹内肇／小泉恵子／尾形好雄／山森欣一
10	昭和64年1月8日	東京都	38名	倉井登代／尾形好雄／山森欣一
11	平成2年1月7日	東京都	41名	大竹幹衛／出口當／小畑和人／尾形好雄／山森欣一
12	平成3年1月13日	東京都	58名	保坂昭憲／鈴木常夫／小畑和人／尾形好雄／山森欣一
13	平成4年1月12日	東京都	50名	
14	平成5年1月10日	東京都	22名	寺沢玲子／香取純／今村裕隆／尾形好雄／山森欣一
15	平成6年2月13日	東京都	46名	ハリシュ・カディア／松山昭／鈴木常夫／尾形好雄
16	平成7年1月8日	東京都	60名	沖允人／能勢眞人／富田雅昭／柳穣／尾形好雄／山森欣一
17	平成8年1月26日	前橋市	72名	植松秀之／中川裕／平泉宣／大竹尚子／沖允人／尾形好雄（群馬県山岳連盟と共催。27日まで。）
18	平成9年1月12日	東京都	36名	梅山義弘／大橋隆／知久隆／山森欣一／寺沢玲子／中川裕
19	平成10年2月1日	東京都	48名	ハリッシュ・カパディア／香取純／高橋守男／近藤和美
20	平成11年1月31日	東京都	35名	沖允人／柳穣／山森欣一／寺沢玲子／中川裕
21	平成12年1月16日	東京都	39名	宮崎孝／粂川章／鈴木常夫／尾形好雄／中川裕
22	平成13年1月28日	東京都	31名	森田千里／柳穣／田沢孝／加藤孝子／小林正己／中川裕
23	平成14年1月27日	東京都	35名	山中八千代／鈴木常夫／坂本昌士／水野起巳／尾形好雄

ネパール・ヒマラヤ研究会

回	開催年月日	開催地	参加者	主な講師名
1	昭和54年8月6日	札幌市	35名	ネパール政府観光省登山局長　S.R.シャルマ
2	昭和54年8月8日	仙台市	38名	同　上
3	昭和54年8月11日	福岡市	39名	同　上
4	昭和54年8月12日	大阪市	30名	同　上
5	昭和54年8月14日	東京都	42名	同　上
6	昭和59年7月1日	東京都	40名	ネパール政府観光省登山局長　P.M.シュレスタ
7	昭和59年7月4日	仙台市	37名	同

ブータン・ヒマラヤ研究会

回	開催年月日	開催地	参加者	主な講師名
1	昭和58年2月26日	札幌市	25名	ブータン政府　登山担当官　N.ドルジェ
2	昭和58年2月27日	名古屋市	20名	同　上
3	昭和58年3月1日	東京都	36名	同　上

カラコルム研究会

回	開催年月日	開催地	参加者	主な講師名
1	昭和59年2月13日	東京都	45名	パキスタン政府観光省登山局長　ムニュール・デン
10	昭和59年2月15日	京都市	25名	同上

高所登山　事故と環境対策研修会

回	開催年月日	開催地	参加者	主な講師名
1	平成6年4月3日	東京都	72名	浅野勝己／斎藤繁／重廣恒夫／南勲／中村正勝／松山昭 山森欣一
2	平成7年4月2日	東京都	60名	斎藤繁／山森欣一／中川裕
3	平成8年4月7日	東京都	40名	山森欣一／中川裕
4	平成9年3月23日	東京都	32名	山森欣一／中川裕／野沢井歩
5	平成10年4月5日	東京都	35名	斎藤繁／山森欣一／中川裕／野沢井歩
6	平成11年4月4日	東京都	60名	斎藤繁／山森欣一／中川裕／寺沢玲子／野沢井歩
7	平成12年4月2日	東京都	55名	斎藤繁／山森欣一／中川裕／野沢井歩
8	平成13年4月1日	東京都	34名	斎藤繁／山森欣一／中川裕／野沢井歩

出版明細

－但し、「ヒマラヤ」を除く－

Ⅰ．ガイド、研究会報告、地域研究、手引き

Ⅰ－1　ヒマラヤン・ライブラリー

1．ネパール王国旅行案内　　Ｂ６　　３６　昭和44年６月25日　沖允人
　気候、温度と雨量、時差、電力・電話・電報、入国手続き、税関、外国からの交通、国内の交通、通貨・銀行、宿泊場所、チップ、食事と飲み物、病気・病院、祝祭日、土産物店、ネパールについて書かれた本、ネパール語日常会話　（45年に２刷）

2．カトマンズとその周辺　　Ｂ６　　５０　昭和45年６月25日　沖允人
　カトマンズ盆地、カトマンズへの交通、カトマンズ市内の見どころ、パタン市、バドガオン市、カトマンズ周辺の観光地、カトマンズ谷地図、カトマンズ観光のモデルコース、ネパール語日常会話

3．エベレストの麓へ　　Ｂ６　　９５　昭和45年８月１日　沖允人
　世界の屋根のふるさと、クンブ氷河へのトレッキング、ロブジェからエベレストのベース・キャンプまで、エベレスト周辺の小登山、キャラバン　ルクラからカトマンズへ

4．カシミールの街と山　　Ｂ６　　６５　昭和50年５月15日　沖允人
　カシミール概説、時差、電気・通信、税関、カシミールへの入域手続き、インド大使館、両替、旅行案内所、気候、カシミールへの交通、宿泊場所、病院、カシミールの交通、スリナガールのみどころ、カシミール周辺、レストラン・食事、果物、狩猟と釣、ゴルフ・コース、土産物、カシミール観光・トレッキング準備日程、秘境ラダックを訪ねる標準日程

5．インド・ヒマラヤトレッキング

6．小チベット、ラダック　　Ｂ５　　１３２　昭和50年８月１日　沖／空昌昭　2400
　カシミール・ラダックの旅を終えて、世界の秘境ラマ王国、秘境ラダックを訪ねて、さわやか歴史の地守る人々、ラダック紀行、レーの街・中心部「地図」、秘境ラマ王国、ラダック人の印象、ラダック調査報告、朝日放送・テレビルポルタージュ、ラダック研究会

7．ネパールへの旅　　Ｂ６　　６６　昭和50年11月１日　沖／佐々木正　600
　内容は１とほぼ同じ

8．中央アジア・シルクロード　　Ｂ６　　１６７　昭和52年６月25日　沖／植竹清孝　1600

ソ連領中央アジア、中国領中央アジア、シルク・ロードをめぐる

Ⅰ－2　ヒマラヤ研究

Ⅰ．第1回東北地区ヒマラヤ研究会報告　Ｂ6　１３５　1971年11月25日　稲田定重
研究会報告、ヒマラヤの地図、山岳雑誌のヒマラヤ関係資料目録、ヒマラヤ経験者一覧（東北地区）

Ⅱ．トレッキングのすべて　Ｂ5　１６３　1972年７月１日　沖允人
トレッキングの現地事情（インド、アフガニスタン、パキスタン、ネパール）、登山トレッキングの記録、ネパール・ヒマラヤに関する文献資料

Ⅲ．ネパール・ヒマラヤ トレッキング　Ｂ5　１６７　昭和47年８月１日　沖允人
第７回ネパール・ヒマラヤの旅報告、座談会（ヒマラヤの旅を送り出してみて）

Ⅳ．第2回東北ヒマラヤ研究会報告　Ｂ5　１６９　1972年10月１日　稲田定重
研究会報告、技術援助とネパールの人々、チベットの宝物館案内、シェルパの遭難とその葬儀、ヒマラヤの果ての国から、ドッド・クンダリの試登と西ネパールの山旅

Ⅴ．ブータン研究　Ｂ5　１２２　1972年11月28日　沖允人
ブータン　隠れた宝物の国、200年前のブータン、サンダー・ドラゴン（ブータン）踏査行、ブータン文献目録、ブータン入国者に聞く

Ⅵ．ワハン研究　Ｂ5　６３　1972年12月15日　沖允人
ピレネー隊のヒマラヤでの勝利、経験者に聞くワハンの話

Ⅶ．チベット・ラダック研究　Ｂ5　６４　1973年９月１日　沖允人
チベットのこと・回想チベット（西川一三）、チベットの話（木村氏に聞く）、チベットの話（野本氏に聞く）、ラダックの歴史、ラダックの風習、世界の屋根、ラダックの家屋と構造、ラダックとその人たち、カシミール・ラダック間の歴史的関係、日本人とカシミール、ラダックに入った日本人、ラダックに関するノート、ラダック踏査年譜

Ⅷ．第3回東北ヒマラヤ研究会報告　Ｂ5　１６７　1973年12月10日　稲田定重
研究会報告、原典と孫引き、混成パーティ作りのこと、山の本から見たヒマラヤ

Ⅸ．ＥＸＰＥＤＩＴＩＯＮ　Ⅰ　Ｂ5　３４７　1974年10月１日　山田康雄
論説・研究資料、実証への試み（ラムジュン・ヒマール）、年報

Ⅹ．ヒマラヤを歩き、そして登るために　Ｂ5　２７４　1975年11月１日　沖／小島守夫／加賀勝
第４回＆第５回東北ヒマラヤ研究会報告

Ⅺ．インド・ヒマラヤのすべて　Ｂ5　１６１　1976年11月10日　伊東満／稲田
第６回東北ヒマラヤ研究会報告

Ⅻ．ＥＸＰＥＤＩＴＩＯＮ　Ⅱ　Ｂ5　３２２　1978年２月10日　稲田定重
遠征の実践と総括（ラムジュン・ヒマール登山隊、日印合同カシミール・ヒマラヤ遠征隊／ガルワール・ヒマラヤ遠征隊）、カンチェンジュンガをめざして、論説・研究、〔Ｅｘｐｅｄｉｔｉｏｎ研究グループ年報〕

Ⅰ－3　ヒマラヤの桃源境　Ｂ5　１３０　昭和50年８月

Ⅰ－4　シェルパの履歴書

Ｂ5　２７４　1977年３月20日　山下政一／沖允人　2400

シェルパの個人別リストに各隊の評価を記載したもの。73年にシェルパ・カードを作成し、75年に第2版を刊行。それに評価を加えて、一部のシェルパについては顔写真を付けた。

Ⅰ－5　インド・ヒマラヤの手引き

B5　86　1982年1月20日　尾形好雄

インド・ヒマラヤ登山手続きについて見本を駆使しながら、具体的に解説したもの。第2版は、88年3月20日に文献を入れて刊行し125ページ。改訂となった第3版を、95年1月10日に153ページで刊行した。

Ⅰ－6　中国登山の手引き　B5　200　1990年3月31日　山森欣一

中国登山手続きについて見本を駆使しながら、具体的に解説したもの。文献や登山史、事故対策、環境対策も盛り込まれている。山の写真を入れた第2版を254ページで92年4月22日に刊行。第3版を235ページで94年3月18日に刊行。各地域の登山史を大幅に盛り込んだ第4版を300ページで96年5月15日に刊行。第5版を262ページで2001年2月11日に刊行した。

Ⅰ－7　ネパール登山の手引き

B5　145　1998年5月1日　野沢井歩

ネパール登山手続きについて見本を駆使しながら具体的に解説したもの。トレッキング許可ピークの案内も収録。第2版は99年8月1日に160ページで刊行。さらに第3版を2001年8月8日160ページで刊行した。

Ⅰ－8　日本ヒマラヤ協会年報

Ⅰ. HIMALAYA　1980　A5　156　昭和56年1月20日　角田不二

遠征報告［バツーラⅡ／キャシードラル］、研究・資料［日本人のヒマラヤ登山と事故（山森欣一）／ダンビルの地図帳をながめて（堀内立三）／日本ヒマラヤ会議抄録／月刊ヒマラヤ地域別索引］、会務

Ⅱ. HIMALAYA　1980～82　A5　290　昭和58年3月31日　尾形好雄

研究・資料［高所登山の傾向と戦術（尾形好雄）／カンチェンジュンガとヤルン・カンの標高観測（五百沢智也）／日本人のヒマラヤ登山と死亡事故（山森欣一）／実用・ヒマラヤ文献索引－インド・ヒマラヤ　カシミール&ヒマチャルプラデシュ篇（阿部淳）］、遠征報告［ケダルナート・ドーム／ナンダ・カート／ナンダ・カート捜索報告／ランタン・リ初登頂／総括・カンチェンジュンガ1981］、論説［日本ヒマラヤ協会の現状と課題］、会務

Ⅲ. HIMALAYA　1982～1984　A5　245　昭和61年9月15日　尾形好雄

研究・資料［五万メートルを目指す男達（山森欣一）／複数の八千メートル峰を登った男達の系譜（山森欣一）／冬期ヒマラヤについての私見（角田不二）／東部カラコルムの印・パ領有問題（尾形好雄）］、遠征報告［幻の山　ブリクティ・サイル初登頂／雲南の山旅　玉龍雪山／ジチュ・ダケ峰東稜からの登攀／聖地巡礼とナムナニ峰偵察］、国際交流［第1回ヒマラヤ登山観光会議／第2回ヒマラヤ登山観光会議／第44回UIAA総会参加記／ブータン・ヒマラヤ研究会／中国登山研究会／カラコルム登山研究会／ネパール・ヒマラヤ研究会／インド・ヒマラヤ会議／中国人の岩

登り訓練／ブータン人の登山研修／国際交流事業に関する人物往来]、会務

Ⅰ－9　ヒマラヤ登山　やること、やるべきでないこと

Ｂ５　　１４　1982年１月10日　　木村陽子訳

インド登山財団（ＩＭＦ）発行　訪印する登山者に向けて発行した小冊子を翻訳したもの。

Ⅰ－10　神秘のグレート・ベンド　ナムチャ・バルワ

Ｂ５　　４４　1991年１月１日　　山森欣一

ナムチャ・バルワへの道（稲田定重）、憧憬のナムチャ・バルワ（山森欣一）、ナムチャ・バルワ峰を科学調査（北京週報）、ギャラ・ペリ偵察（山森欣一）、ギャラ・ペリ初登頂（尾形好雄）、ギャラ・ペリの気象（尾形好雄）、ヤル・ツァンポー西・東（山森欣一）

Ⅰ－11　知られざる北部シッキムの山々

Ｂ５　　８２　1993年11月30日　　2000円

ヒマラヤの桃源境　シッキム、シッキム・ヒマラヤ北部の知られざる山々、カンチェンジュンガ北東支稜、ピラミッド、ピーク初登頂

Ⅰ－12　東部カラコルム　　Ｂ５　１０３　1994年２月11日

過去と現在の狭間に　憧憬のヌブラ谷－ラダックの秘境－（ハリシュ・カパディア）、リモ山群の概要（尾形好雄）、リモ山群の数座に登頂（G.K. シャルマ）、リモ－３峰初登頂（ハリシュ・カパディア）、シアチェン紀行１（S. ヴェナブレス）、シアチェン紀行２（D. ウィルキンソン）、東部カラコルム最後の玉峰　リモⅠ峰初登頂（尾形好雄）、マモストン・カンリ初登頂（尾形好雄）、マモストン・カンリ初登頂記（岩崎洋）、シアチェン氷河をめぐる印・パ国境（尾形好雄）、東部カラコルムの知られざる谷をさぐる（ハリシュ・カパディア）、チュング・クムダン陥つ（ハリシュ・カパディア）、ボーン・トレイル（骨の道）の最後の山（ジョン・ポーター）、サセル・カンリ２峰（西峰）初登頂（沖允人）、サセル・カンリ２峰第一次アタック（徳島和男）、サセル・カンリ２峰頂上へ向かって（岡本正人）、サセル・カンリ２峰初登頂（Sonam WANGDUS）、未踏への誘い

インド領カラコルム　サセール・カンリ山群（稲田定重）、インド領カラコルム　マモストン・カンリ山群（稲田定重）

Ⅰ－13　ヒマラヤ登山　日本隊遭難の記録

Ｂ５　　５５　1994年５月26日　　山森欣一

1952～93年にヒマラヤの６千m以上の山に入山した日本隊の死亡遭難事故の概要を網羅しまとめたもの。

Ⅰ－14　神々の座　八千メートル峰への挑戦

Ｂ５　　１０４　1997年２月18日　　山森欣一

1952～96年に８千m峰に挑戦した日本隊の全ての概要を一覧表にしたもの。ヒマラヤ万華（挽歌）その１／日本隊のヒマラヤ登山と死亡事故調査（8000m峰）集計表／八千メートル峰山別登頂者リスト／八千メートル峰［実］登頂者リスト／八千メートル峰［延］登頂者リスト／八千メートル峰高齢登頂者リスト／八千メートル峰年少登頂者リスト／八千メートル峰挑戦の記録（入山表）／八千メートル峰　入山・登頂と死亡集計表／八千メートル峰登頂者の遭難死調べ／8000m峰遭難者一

覧表／八千メートル峰［女性・実］登頂者リスト／八千メートル峰［女性・延］登頂者リスト／八千メートル峰　年代・山別入山者数調べ（グラフ）／八千メートル峰登頂者生年月日別リスト／八千メートル峰トータル獲得標高1996

Ⅰ－15　神々の座　8000ｍ峰のデータ（1998年版）

Ａ４　　１５４　1999年９月10日　　山森欣一

上記を更に内容を充実させ、世界の8000ｍ峰登頂者について236番（1978年５月３日まで）英文表記で整理した一覧表を追加した。

Ⅱ．登山・踏査報告書

Ⅱ－1　中国

1．地球の背骨の一角に立つ（日中婦人友好登山隊）	B 5	101	1986年5月31日
2．砂漠の涯の遠き頂き（日本カラコルム遠征隊）	B 5	58	昭和62年3月30日
3．加拉白里偵察報告（ギャラ・ペリ偵察隊）	B 5	34	1985年12月25日
4．天府の霊峰　雪宝頂（日中四川雪宝頂合同登山隊）	B 5	63	1987年8月5日
5．乔烏衣峰　7,354m（乔烏衣登山隊）	B 5	150	1987年7月
6．謎の河の秘峰　ギャラ・ペリ（ギャラ・ペリ登山隊）	B 5	135	昭和62年9月1日
7．神の山　ゲニ峰（1987年夏の記録）（ゲニ登山隊）	B 5	77	昭和62年12月1日
8．友好の白き頂　ラプチェ・カン　7,367m　1987年初登頂の記録（日中友好ラプチェ・カン合同登山隊）	B 5	170	1988年4月
9．神の山　格聂峰（1988年初登頂の記録）（ゲニ登山隊）	B 5	44	1989年6月12日
10．もう一つのチベットへ　桃源境への山旅　シャラリ峰登山の記録（シャラリ登山隊）	B 5	102	1990年3月
11．麗しき四川の夏　雪宝頂登頂（雪宝頂登山隊）	B 5	64	1992年12月1日
12．天壇の山に挑む　ミニヤ・コンカ東面（ミニヤ・コンカ登山隊）	B 5	142	1992年5月
13．美しき谷の姉妹峰　四姑娘登山の記録（小雪宝頂登山隊）	B 5	105	1993年3月20日
14．永別　皇冠峰　1992年クラウン峰挑戦の記録（クラウン峰登山隊）	B 5	155	1994年5月
15．ＨＡＪ Summer Camp 崑崙の頂を踏む（玉珠峰登山隊）	B 5	58	1994年8月10日
16．葱嶺の白き父なる山　ムスターグ・アタ登頂の記録（ムスターグ・アタ登山隊）	B 5	108	1995年4月
17．ルンポ・カンリ　チベットの未踏峰・7,095m　1994年試登の記録（ルンポ・カンリ登山隊）	B 5	50	1995年4月10日
18．東崑崙・天女の山　玉虚峰に登る（5933m）　日中友好女性合同登山隊の記録（日中友好女性合同登山隊）	B 5	74	1996年2月10日
19．横断山脈　ミニヤ・コンカ峰　登山と遭難の記録（ミニヤ・コンカ登山隊）	B 5	142	1996年4月14日
20．未踏峰　クーラ・カンリⅡ（7,418m）－日中友好合同登山隊1997年の記録－	B 5	86	2001年4月22日

Ⅱ－2　インド

1．カシミールの山　カシミール・ヒマラヤ登山隊報告	B 5	56	昭和47年3月20日

2．1975年ＨＡＡＪ インド・ヒマラヤ帰国報告書(日印合同カシミール・ヒマラヤ遠征隊、ガルワール・ヒマラヤ遠征隊1975年)　Ｂ５　３８　昭和51年３月１日

3．カシミールの盟主ヌン7135ｍ（日印合同カシミール・ヒマラヤ遠征隊）　Ｂ５　１１２　1978年４月１日

4．トリスル28日間（ガルワール•ヒマラヤ遠征隊1978年）　Ｂ５　１４３　昭和54年２月21日

5．ザンスカール山群中央部踏査報告（ザンスカール山群踏査隊）　Ｂ５　１２４　1981年１月

6．ヒマラヤ、そして仲間達へ!!　ＨＡＪ登山学校1980年の記録　ガンゴトリ山群　ケダルナート峰（6940ｍ）（1980年インド・ヒマラヤ登山隊）　Ｂ５　９６　1982年５月５日

7．ナンダ・カート1981　登山・事故・捜索・追悼　Ｂ５　１４６　1982年12月20日

8．クン・南面　ＨＡＪ登山学校1982年の記録　カシミール・ヒマラヤ　クン峰（7077ｍ）（カシミール・ヒマラヤ登山隊）　Ｂ５　９２　1983年２月

9．ＮＵＮ登頂'83　ボクらは遂にＫ２をナンガを見た（カシミール・ヒマラヤ遠征隊）　Ｂ５　２６　1984年１月１日

10．千人の悪魔の峰 MOUTAIN OF THOUSAND DEVILS－INDO-JAPANESE JOINT KARAKORUM EXP－（日本・インド合同カラコルム登山隊）　Ｂ５　１０３　昭和60年７月１日

11．カシミールの女神ヌン（NUN7,135ｍ）その白き美しさに魅せられて（女子ヒマラヤ登山隊）　Ｂ５　６５　1988年12月

12．サトパント峰登頂記　聖地巡礼の旅(ガンゴトリ登山隊)　Ｂ５　７０　1991年６月20日

13．カンチェンジュンガ－西・東－　ゼム氷河から踏まわれざる頂へ－1991年－（日印合同カンチェンジュンガ登山隊）　Ａ５　３９８　1993年10月１日

14．〝神の河〟ブラマプトラの激流を下る－チベット国境からバングラデシュ国境へ1800kmのラフティング－（日印合同ブラマプトラ遠征隊）　Ｂ５　７３　1991年10月５日

15．秀麗ヌン峰を攀じる（ヌン登山隊1991年）　Ｂ５　７４　1992年６月30日

16．ＮＵＮ 7135（ヌン登山隊1992年）　Ｂ５　７５　1993年10月

17．ナマステ／サラスワティーサラスワティ峰（6,940ｍ）初登頂の記録－Indo-Japanese Ladies Joint Exp.'92（日印合同女性登山隊）　Ｂ５　１１１　1994年４月

Ⅱ－３　ネパール

1．ランタン谷　ランタン・ヒマール冬期踏査報告（ランタン・ヒマール踏査隊）　Ｂ５　１５６　1973年４月１日

2．カンジロバ遠征隊仮報告書－カンジェラルワ初登頂－（カンジロバ遠征隊）　Ｂ５　１７　1973年７月20日

3．カンジロバ・ヒマール遠征報告書－カンジェラルワ初登頂－（カンジロバ遠征隊）　B５　１７３　1976年10月10日

4．日本カンチェンジュンガ学術遠征報告（日本カンチェンジュンガ学術遠征隊）　B５　２５　昭和56年７月31日

5．カンチェンジュンガー西・東－　ヤルン氷河から縦走へのトライ（日本カンチェンジュンガ学術遠征隊）　A５　３９８　1993年10月１日

Ⅱ－４　パキスタン

1．ナンガ・パルバット　勇者よ永遠に　1984年ＨＡＪナンガ・パルバット登山隊報告、追悼集（ナンガ・パルバット登山隊）　B５　９１　1986年６月30日

2．Ｋ２（8,611ｍ）高みを求めて（Ｋ２登山隊）　B５　１４６　昭和62年２月１日

Ⅱ－５　ブータン

1．雷龍の国の白い頂（1984年ブータン・ヒマラヤ　ジチュ・ダケ登山隊）　B５　２４　昭和61年５月１日

2．ガンケル・プンズム（7541ｍ）登山報告書（ブータン・ヒマラヤ遠征隊）　B５　２６　1985年12月９日

Ⅱ－６　旧ソビエト連邦

1．パミール・山と高原（パミール登山隊）　B６　１５３　昭和52年12月20日

Ⅱ－７　アフガニスタン

1．バダクシャンからヌーリスタンへ－アフガニスタン北奥の踏査・登山－（アフガニスタン登山隊）　B５　１６８　1977年３月１日

Ⅲ．その他

Ⅲ－１．烈風の彼方へ　佐久間隆　遺稿・追悼集　A５　１３４　1983年10月１日

Ⅲ－２．雪の住処30年の記録

B５　４４０　1998年１月25日　山森欣一

日本ヒマラヤ協会（ＨＡＪ）創立30周年を記念して、30年間のあゆみをまとめたもの。①30年のあゆみ　②30年の活動記録　③登山と野外活動　④帰らざる仲間たち　⑤研究会と出版　⑥座談会歴史の一こまとして　⑦アンケート　⑧ＨＡＪを変えた人たち［英文サマリーつき］

第VI部

座談会
歴史の一こまとして

HAJの創立から進展の概略を当時のヒマラヤから抜すい紹介する

協会の意図するもの

（1968. 4　ヒマラヤ通信第１号より）　　会長　柴田　金之助

私は登山家ではありませんが、1963年にヒマラヤの地を訪れて以来、その美しさにうたれ、このヒマラヤを多くの人々に是非見せてあげたいものだと考えるようになりました。

しかし、費用、時間などの点から簡単に誰しも訪れることの出来ないのが現実です。日本ヒマラヤ山岳協会は低廉な費用で共にヒマラヤの旅を楽しみ、登山、学術、芸術などの分野で調査、研究、鑑賞を進めて行こうという人々の集りで、ヒマラヤを知ることによって、ヒマラヤの国々と日本との友好親善の掛橋となることも大きな目的として設立いたしました。

ヒマラヤは山が美しいばかりでなく、ヒマラヤ山麓で西暦前500年頃から栄えた。“ヒマラヤ文化”は仏教などの彫刻・絵画などすぐれた遺産を遺しており、ヒマラヤの国々は芸術的にも豊かなところです。ヒマラヤを訪れた人の全てが「ぜひもう一度行きたい」と思うのは、雄大なヒマラヤ山脈、色彩絢爛たる仏教芸術などに加えてヒマラヤ山麓の人々が非常にホスピタリティに富んでいるからでもあります。

多くの方々が協会の意図するものに賛同していただき、ぜひ、“世界の屋根”ヒマラヤを研究し、眺め、登り、そし、深い感動をいだいていただきたいと思います。

協会の体質改善

（1971年. 3　ヒマラヤ通信第15号より）　　会長　柴田　金之助

“みんなのヒマラヤ”を考えて発足した日本ヒマラヤ山岳協会も来年は五周年をむかえることになります。第一回から第五回までのヒマラヤの旅を送り出したことや各地でのヒマラヤ集会、「ヒマラヤ通信」の発行などが協会の活動の主なものでした。会員数も500名近くなり、しかも、そのうちの多数の方々はヒマラヤ遠征を考えておられる会員です。実際にも30名以上の方がヒマラヤ遠征に参加され、約150名くらいの方がヒマラヤの各地を訪れておられます。

この現状から考えて協会の今後は綜合的にヒマラヤを紹介、研究することはもちろんですがそれに加えて、ヒマラヤ登山とヒマラヤの入域のむつかしい地方への小調査隊を送り出すことをこれからの課題にしたいと思います。それには奥深い活動が要求されますので研究グループ化も進めていくつもりで、その一端としてブータン研究とカシミール、ラダック研究の二つのグループが近く発足します。

これにともなって、ますます情報の交換としてのヒマラヤ集会とヒマラヤ通信を充実したいと考え、会費も会費制度に変えたいと考えております。皆様のご理解とご協力をお願い致します。

“みんなの” ヒマラヤの再認識から

（1976. 7　ヒマラヤ56号から）

専務理事　岩水竜峰

去る4月4日、日本ヒマラヤ協会昭和51年次総会において、会長の委嘱を受けＨＡＪ第3代目専務理事に就任、向こう3カ年間、光栄ある職をお引受けすることになりました。

当初、私はこの職をお引受けすることに、非常な困惑と戸惑いを感じ、何度も増田前専務理事及び沖氏と話し合いを重ねてまいりましたが功をなさず、こういった結果になってしまい、今でもある種の不安を感じております。と申しますのもこの協会には、私よりもはるかに会長を補佐し皆様方をリード出来るすばらしい人材が多くいらっしゃって－例えば多くのヒマラヤ経験者や学識者及びすぐれた登山家、トレッカーーとてもわたしなどではこんな大役には、不適任者と思っていたからです。

しかし、こういう結果になった現在、私は私なりに会長を補佐し精一杯努力してみたいと思っております。

私は、現在の日本人に何が一番欠けているかをあるボランティアを活動通じて考えてまいりました。それは、あまりにもウェスタン・セオリーに傾斜した、日本人の思索を見直し、独自の日本人観の確立を図り、アジア人同胞としての理解と友好を深める必要があるとの結論に達しました。協会の皆様方の中にも、一度インドやネパールさらにパキスタンを旅した際、そう思われた方々が多数いらっしゃるのではないかと思っております。広い意味でアジアから再度日本を見なおしたと多くの人達は語っておられます。そこには、精神文化を基調とした近代化への歩み、考え方、さらに我々の魂を奮い立たせる大地、素朴な人々の生活が、一度は興味本位から、しかし、時が立てば、良い反省材料となり我々の血となり骨となって明日の生活の糧となってくるように思います。色川大吉氏は「ユーラシア大陸思索行」の最後に…それはともあれ、日本の若者達よ、海外に出よう……と結んでいます。

私はまさにその通りだと思っております。協会の使命の一つは、そういった意味あいがあり、それの実践団体でありたい。幸い15周年に向けて、“夢とロマン”を秘めた遠大な計画がスタートし始め、協会でなければできない仕事が多数あるように思います。登山にトレッキングに探検に秘められたヒマラヤの空白部に多数の足跡を残し、そして学術の一端に寄与し、ヒマラヤをめぐる諸国と我国の親善のイニシアティブを取るような団体であってほしいと思っております。

先日の総会において、「日本ヒマラヤ山岳協会」の名称から「山岳」を取り、「日本ヒマラヤ協会」としたいとの意見にたいし、全員一致で可決されたことを想い返せば、会員の胸の内には、私と同様なお考えの方が多数いらしたのではないかと思っております。

しかし、現在のＨＡＪをいろいろな角度から眺めてみますと人材と地域性は、非常に優れていると思われます。しかし、それが十分に発揮されていないのではないでしょうか。もう一度原点に戻り「皆んなのヒマラヤ」を再確認しようではありませんか。そういった意味から各地の理事の皆様方に依頼し、札幌・東京・名古屋のような「ヒマラヤ集会」を各地で催したい。〈ヒマラヤ集会の充実〉とそれによる〈会員一人が一人を勧誘〉をし、これにより、もっと会員が増加定着するのではないでしょうか。また、〈社団法人化〉をすすめ岳界のみならず社会的に有益な団体をめざし関係各機関と相談の上、会長および各理事の皆様方と相談し努力してみたいと思っております。最後に全国に亘る会員を掌握することは至難の業です。中央集権ではなく地方分権の確立を計り、各人各様の実績がＨＡＪ全体の評価につながるような協会にしようではありませんか。以上皆様方の御協力と御援助をお願いいたします。

“創造する” ヒマラヤへ

（1979. 1　ヒマラヤ第86号から）

専務理事　稲田定重

このたび、岩水竜峰氏のあとをうけて本協会専務理事の職をつとめることになりました。昭和42年に創設されて以来、登山、調査をはじめとして、多彩な活動を展開してきたＨＡＪの組織に占める重責を考えるとき、身のひきしまる思いがいたします。

本会の目的・事業は、新定款に定められているところですが、これらの完遂のためには、会員各位の圧倒的な御支援を必要としております。

私は、創設以来、本協会に累積されてきた貴い経験と会員各位の優れた識見の発露に期待しながら全力を尽くして職責を全うしたいと考えております。

ＨＡＪは、いま、さまざまな意味で大きな転換期にさしかかっているように思われます。「みんなのヒマラヤ」を合言葉にして、この国のヒマラヤにおける活動の発展につとめてきた本会の業績が高く評価されるべきことはいうまでもありません。特に、かつて、遠い存在であったヒマラヤをこれほど身近に引き寄せたという貢献は誇り得るものであり、先輩各位の御努力に深く敬意を表するものであります。

ヒマラヤは、“地球上最高の高み”であるという特異な存在を主たる理由として、驚くほど広範な分野で非常な関心をもってとらえられ、活動の舞台となっております。登山の分野では、文字どおり個人と組織の能力の限界を追求する最先端の試みが行われる場になっております。

身近になったヒマラヤは、私たちに新たな可能性を示唆し、課題を問いかけているように思われます。

自らの創意でもって個々人のヒマラヤが築かれて行くとき、ヒマラヤはわたしたちにとって永遠に新鮮であり、尽きぬ驚きと感謝の対象として生きつづけることでしょう。「みんなのヒマラヤ」を超えて「創造するヒマラヤ」へ前進するとき、私たちの組織は、文字どおり「ヒマラヤ協会」の名にふさわしい活動と地位を確立すると考えます。

このたびの社団法人設立への歩みは、私たちの組織の社会性と容量を更に高め、個々人の夢、個々人のヒマラヤを築く上に大きく寄与することを確信しております。

本協会は、本年度総会において新定款を定め、組織運営の面でもいくつかの改革がなされました。その過程でまことに夢多い壮大なＨＡＪの未来像が語られております。会員個々の情熱をベースとして、多くの人と人とが結合し合い、そして、組織を運営する側が確かな理念と誠意をもってかかわるならば、私たちのＨＡＪは限り無く前進して行くことと思われます。

しかし、高度の可能性を秘める一方で、また、それを阻もうとする内外の問題も山積しております。根気強く障害を乗りこえ、ひとつひとつ私たちの夢を現実に化して行くために、会員各位と手をとり合って進みたいと考えます。

専務理事就任にあたりまして、おおかたの力強い御支援をお願いいたしましてごあいさつとします。

5周年目の座談会

ヒマラヤの旅を終えて

日　時　1972年3月7日　16時～21時
出席者　柴田金之助（ＨＡＡＪ会長）
　　鷲北　　晃（インド航空名古屋営業所長）
　　岸本　民子（インド航空）
　　増田　秀穂（理事）、柴田　君江（会計監査）
　　柴田　秀子（会長ご令嬢）
司　会　沖　　允人（専務理事）

これまでのヒマラヤの旅

沖　日本ヒマラヤ山岳協会も5周年記念として企画した第7回ヒマラヤの旅を目標通り終えこれからは新しい時代に入ろうとしております。今夕はこれまで第1回から第7回まで通して直接企画から実行までタッチしていただいたインド航空の鷲北所長さん、そして目に見えないところで協会のヒマラヤの旅を手伝っていただいたインド航空の岸本さん、それにヒマラヤに行く人たちを送り出し、またキラン君はじめネパールからのお客さんをお世話していただいた柴田会長のお嬢さんもご出席ねがい、これまでのヒマラヤの旅をふりかえってみたいと思います。今後のヒマラヤの旅のことも含めていろいろと語っていただきたいと思います。

それでは柴田会長より、第1回の旅の概要から話し始めていただきます。

柴田　今夜はお忙しいところお集まりいただきまして有難うございました。皆さんには第1回から第7回まで本当にお世話になり、そしてご苦労をかけました。本当に喜んでおります。

さて、第1回のヒマラヤの旅ですが、昭和43年の10月でしたね……。24名ほどでネパールへ出かけました。ナムチェ方面とポカラ方面です。これは日本から団体でヒマラヤへ行った初めての旅行団で、空港では当時の在日ネパール副大使のシャー氏や協会顧問の川喜田二郎先生も見送りに来ていただき、それぞれにあいさつをいただきましたね。私が団長でした。増田さんは奥さんとポカラ班に参加されたのでしたね。

増田　そうです。そのころはまだ理事でなかったので一会員として参加しました。

鷲北　トレッキングという言葉がまだ知られていなかったころですね。

沖　第2回は富山の橋本先生がリーダーで行かれたヒンズークシ踏査隊です。このときの報告書は出版されています。隊貨がカブールになかなか着かないというトラブルがあり結局、この装備を協会で買上げることになりこれが協会ヒマラヤ・デポ装備のきっかけになりました。この事件はいろんな山の会合で報告されたので、それ以来各隊とも別送品には気を使うようになり、この種の事故

はほとんどなくなりました。

柴田　第3回はネパールで沖さんが団長でいってもらいナムチェ方面とポカラ周辺でしたね。

沖　そうです。この時の報告書は「エベレストの麓へ」というタイトルで発行され、この方面のトレッキングの指導書的役割をはたしました。

第4回は中京山岳会・名城大学山岳部の合同隊の後援という形でアフガニスタンのミル・サミールへ派遣しました。名城大学の方で「ミル・サミールからファラクサールへ」という報告書が出版されています。

第5回は増田さんが団長でいかれたのですね。

増田　ナムチェ班がフライトを2回試みたが悪天で着陸できず、ゴサインクンド一周に変更になりました。私はカトマンズで待機していました。これもなかなか面白いトレッキングでした。

第6回はカシミールですね。

沖　私も同じところへ行くので空隊長をサポートしました。これが協会主催の最初の登山隊です。そして第7回になるという訳です。

柴田　結局、ネパールへ4回、アフガニスタンへ2回、カシミールへ1回ということですね。パキスタンも企画したが人員が集まらず中止になりました。ざっと1年に2回ということですがよく送りだしたといえますね。

沖　この他に年間約80名くらいの会員の方が個人的に、あるいは他の会でまとまってヒマラヤへ行っておられますから約500名近くのヒマラヤ・トレッキングや登山の経験者ということになります。

団体を組む苦労

柴田　第1回はチャーター便を計画したが結局無理だったね。

沖　人集めはむつかしいですね。行くかと思うと直前に止めたり、急にコースを変更したあげくキャンセルというひどいのもありましたね。とにかく出発前まで人員がはっきりしないのが一番困りました。ある程度の人員が集まらないといろんな面で費用が割高になりますね。結局、皆さんが高くついたことになったケースが多いです。

鷲北　団ができるまで、そして出発してしまうまでわかりませんね。本当は帰ってくるまでわからない。うまくいって当り前、そうかといって失敗は許されないし……。

柴田　何時も計画を鷲北さんへ持ち込むときは50名位は集まるからといろいろサービスをしてもらったあげく5名、10名ですからね。

沖　どんどん申込者が減って行くときなど申し訳ない気持ちでしたね。

鷲北　どこの団体でもそうですよ。だからかまいません。とくにホンコンなど近いところは20名の定員に30名きてもらっても問題ないのですが、ヒマラヤに関しては飛行機やいろいろの都合で人員より多くなるとかえって困る訳ですよ。むしろへった方がいい場合もあります。予約の方で一番簡単なのは15〜16人。掌握もちょうどいいし、責任者も1名でいいので……。

こんどの第7回のように大人数を送りだしたことは大変だったですが、協会にとっては有意義だったとおもいます。外国でもあのような大パーティは組もうとしないですよ。

沖　第1回とくらべて服そうもだんだん気軽な感じになってきましたね。第1回の時は背広、ネクタイはご持参下さいと連絡しましたからね。

鷲北　服装はだいたい東南アジアはうるさくないです。

柴田夫人　アンナプルナ・ホテル（カトマンズの一流ホテル）でもトレッキングの服装のままで幾人も滞在していますものね。

柴田　今からおもうとはずかしいですが、43年の秋、第1回を計画した時点ではヒマラヤ旅行に関する経験も浅く、知識もなく申し訳なかったですが、人数もなかなか集まらなかった。第1回の24人といえば当時ではめずらしかったんではないですか。

鷲北　現在でも多くて20名ぐらいです。ヨーロッパあたりではもっと小さなグループでもあります。

沖　3〜4人のグループでもいいですね。しかし現地事情や英語もよくわからない人はまとまって行った方がいいみたいです。多少英語ができる人はこういう団体旅行にはのってこないですが、彼等がおこなってきたことを聞くとパーミッションをとるのに何日もカトマンズにおり結局とったも

のは、だれでもとれるものばかり、ということが多いですね。従って費用も割高になる。

期間について

沖　1～2ヵ月行くだけなら団体の利点を利用して、でかけた方が有利ではないかとおもいます。トレッキングするものにとってはヒマラヤを歩く時間が貴重なので、カトマンズやポカラにいる時間はできるだけ短い方がいいですからね。

時間をかけるだけでなく、いかに能率よく山登りをするかということを考えなければならないとおもいます。日本である程度準備するのも大切だとおもいます。できるだけ無駄な時間をなくするためにもセルチャン理事とかランジャン理事など、協会の組織を利用してもらうと非常にいいとおもいます。ヒマラヤは2～3ヵ月かけないとまともなトレッキングができないとおもっている人がいまでもいますね。しかし、方法がまずいとかえって2回ぐらいにわけていった方が能率がいいこともあるのです。この点ＰＲがたりないとおもいますね。

鷲北　トレッキングに行かれるグループは特別のルートをねらっていかれる方が多いのですね。そして現地へ行かれるのですがうまくいかない。最初から本人はそんなつもりで行かれるのですか。

沖　その辺の見通しが皆、甘いのじゃないですかね。なかなか許可のとれそうもないところへ行くのなら、事前にむこうへアプローチして、99%許可がでるという段階のときに行くといいんです。しかし、28日間というのは短いですね。なんとかならないですか。こんどのＩＡＴＡの会議のときにでもインド航空から提案して下さい。

（注）ＩＡＴＡ；International Air Transport Association の略（国際航空運送協会）

岸本　28日間というのはトレッキングの期間としてはみじかいですか。

（注）；インド、東南アジア方面の団体割引運賃は12日間以上28日間以内に限られている。これをＧＩＴ（グループ・インクルーシブ・ツアー）運賃といっている。協会の旅行もこれを利用している。1名でも30%引になり、15名以上だと50%引になる。（ただし、ホテルや地上費も一括して旅行社へ払う必要がある。）

沖　短いですね。あっというまにすんでしまう。あと1週間か2週間あるとね……。

増田　そうです。正味1ヵ月欲しいですね。

鷲北　それだけあるとどこへ行けるのですか。

沖　たとえば、ゴサインクンドを一周して帰ってくるのが28日間でせいいっぱいなんです。ちょっと眺めのいいところで滞在しようとおもうとあと1週間ぐらい欲しいです。

増田　順応の問題もありますし、6000ｍクラスへ登るというような場合は28日間ではちょっと無理ですね。

鷲北　しかし、エベレストのベースキャンプまで行かれる人というのはかなりいるのでしょ。

増田　ええ、まあ、エベレスト方面だとそのあたりです。

沖　中途半端なんですね28日間というのは。観光だけだったら28日間というのはもてあましてしまいますし……。

鷲北　現在、わたしの方のＩＡＴＡにファイルしようとしていることはユースフェアというものです。3ヵ月間有効です。ただし、ユースフェアですので年令に制限があり29才までです。フランスとインド間で途中ノンストップというようにコースにも多少制限があります。それを使うことによって、そうとう安い料金で行くことができるんです。2～3ヵ月間でヒマラヤへ行くんでしたら、それは非常にいいものです。ただ、28日間をどうしてもうけたかというとトレッキングのためにもうけたのではないんです。観光客をふやすというための目的が主です。

柴田　一般観光客でしたら1～2週間でいいのですがやはり協会のはトレッキングですからね。エベレストの観光に行くということならそれでいいのですが……。そのユースフェアはもうできているのですか。

鷲北　ヨーロッパ方面ではもうできています。

柴田　ビザの期限が東南アジアはたいてい90日間観光ビザなしでとおる訳なんでしょ。

沖　インドではノービザでは21日間が限度です。

鷲北　インドの短期間のビザはエアーポートでも

とれます。

岸本　行ってスタンプをおしてもらえばいいですね。

沖　ヒマラヤ各地へのＧＩＴが３ヵ月でなくても45日かそれぐらいになるといいですね。そうすればもっと多くの人がヒマラヤへ行くようになるでしょうね。

岸本　皆さん一応お仕事をもっていらっしゃいますが長期にわたっての休暇ということは考えなくてもよろしいのですか。

沖　それがむつかしいことなんですが皆さんにはやっぱり一生に一度という気持があるんじゃないですか。ですからどうせいくんなら長くという考えになり、かなり無理されています。

私はそうではなくて２回も３回も行くところを考えた方がいいと思いますね。

鷲北　28日間にしてナムチェで飛行機が飛ばなかったときに数日延長をすることにしたらどうでしょう。

増田　それでも帰りが気になり眺めがいいところでもゆっくりみられないし、高度の順化もありますし、やはり28日間とくぎられますと落着きませんね。

鷲北　エベレスト方面だと高度順化が問題ですね。第７回の人たちも皆、頭が痛かったといっていましたね。

沖　高度もありますが、それにあせりもあります。どこか4000ｍぐらいのところで１日ぶらぶらしていますとだいぶ順化が違いますものね。だから45日になるとこの点、楽ですからトレッキングに行こうかという人がかなり増えそうです。

柴田　インド航空でもその辺のところを考えて下さり、ヨーロッパであるのなら東南アジアの方でも是非もうけてもらいたいものですね。

鷲北　これも結局、需要と供給の関係ですね。実際にはそういう需要があまりないんです。ヒマラヤ・トレッキングに行く人はこれまでの実績からはたいした人員ではないのです。

柴田　結局そういう制度がないから無理して28日間に入っているのではないですか。

鷲北　それにかわるものとして今、考えられるものは若い年令層のものをもっといかしたい。昨年夏、東京で企画したインド列車大作戦は最初70名くらいしかなかったがテレビの番組にだしたら１週間後に200名以上の申込があったんです。インド国内全部汽車です。これと同じ企画を一昨年にしたんですがうまくいかなかった。一昨年ではまだインドが知られていなかったということです。だんだんインドという国も今までヨーロッパに行っていた若い層に認められてきたということがいえます。アメリカなどへ行くと、ボクたちのように一応英語が不自由なく使えても劣等感をもつが、インドではそんな気持ちを受けない。それに神秘なところがあります。

柴田夫人　それにインドの人は親切ですね。

岸本　特に日本人に親切ですね。

お膳立てのむつかしさ

柴田　まあ、とにかくヒマラヤやインドのよさを皆さんに知ってもらうことが一番ですね。そして行く気になってもらう。しかし、これがなかなかむつかしいです。私のように毎年１～２回海外へ出ていますとネパールといっても東京とそう変りない気持ですがね。

沖　参加者の方はたいてい外国は初めてという方が多いので結局いろんな不安をとりのぞいてあげるためにも集会が必要です。

増田　そうです。行った人に会って話を聞くのが一番ですね。各地での打合せ会は大変ですがね…。

沖　それにでるだけで昨年１年間に30日位つぶれましたものね。第７回のための集会に名古屋のも入れて20回ほど行きました。遠くですと日曜日もつぶれてしまいますしね。増田さんにも頼んで大阪まで行ってもらったりしました。それと打合せ会や送り出しはだれでもやれるようにしておかないと特定の人間に負担がかかりすぎてだめですね。やれる人がやめてしまい、次にやる人がいないと協会のヒマラヤの旅はつぶれてしまいますものね。だからだれでもひまをみてやれるように協会の業務をもっていかないといけないと思いました。第７回は記念事業でしたし、私が中心になってやるのは最後のつもりでしたので頑張りましたがね。

鷲北　協会の役員の方にあまり無理がかさなると

よくないですね。

沖　第7回は今後のためにもあるし、ずい分無理をしてやりましたが、次回からは通常にそう無理しなくてもやれるようにする予定です。林さんが事務局長をやってくれますので。

名古屋・東京で月1回の集会をもつことはそんなに無理ではありません。

鷲北　結局、ヒマラヤ集会でもその前の準備の段階が大変なんでしょ。

沖　そうです。人集めですね。せっかくコーリ氏などを呼んできても人が集まらないと来てもらった人に悪いですしね。会場をかりたりするのは簡単ですが、やはり人をある程度集めておかないと盛り上りませんね。日をきめておくとある程度、皆、予定をしておきますので日をおいてポツポツとやるより集まりがいいのではないかと思い定例集会を東京で始めることにしたのです。

岸本さんは打合せ会にでられなかったようですが、はたからみていていかがでしたか。

岸本　別にトラブルはなかったです。わからないところは皆さんに聞きましたし。

鷲北　彼女の仕事はフライトの予約やチケッティングが主で、余りそういうことには関係ありませんでしたから。旅行の手続きやフライトのことはたいしたことではないのです。5年前に比較すれば全く簡単になってきて国内旅行と変りません。しかし、今でもヒマラヤへ行くということは大仕事だとおもっている人が多いですね。

増田　もちろん、ヒマラヤ集会に来た人が皆んな協会のヒマラヤの旅に参加された訳ではありませんが、しかし、あのヒマラヤ集会がその人のヒマラヤ行きのきっかけになったり参考になったりしたことは間違いないとおもいます。

沖　それだけに苦労してもやりがいがあるということです。「皆んなのヒマラヤ」が協会のモットーですが、とにかく皆んながヒマラヤへいって見て来てほしいですね。

苦　　情

柴田　いろいろと文句をいった人もありましたね。

沖　ええ、しかし、そういう人は少ないです。たとえば今回の旅でもトレッキングをおえて反省の意味で、とく名でもいい、思ったことを書いて欲しいと皆さんに連絡をだしましたが、めんどうくさいのかどうか1通もきませんでした。ヒマラヤは素晴らしかったという手紙ばかり50通ほどきましたが。

鷲北　一般にインド・ネパールの旅ではその場でいろいろ文句があるのですが、帰ってからは文句がでない。結局、日本でヒマラヤのイメージをえがいていたのと実際にみたヒマラヤと違うんですね。それが現地でのトラブルや苦情として出てきます。しかしネパールはネパール、インドはインドです。一般的な旅行でもつらかったことがかえって思い出になって、なつかしむようですが、インドやヒマラヤは印象が強烈ですから余計そうなります。余り決定的失敗がない限り苦情は少ないです。

沖　第1回の萩さんみたいになるとやっぱり大変ですね（ナムチェ方面で高山病で倒れ生死の境を約2ヵ月ほどさまよったが奇蹟的に回復した）。今、どうおもっておられるか知りませんが、阿部さん（理事、第1回参加者）なんか苦労されたでしょう。今でも在ネ日本大使館へ行くとあの時のことを言われますものね。結局、主として本人の不注意だったんですが協会としても予測できなかったということは手おちでした。

増田　今回、Mさんもひどい高山病でしたね。もう少し無理していたら大変だったです。

柴田　ナムチェへ着いた時はなんともなかったのですが。

増田　ネパールへ来る1週間程前に病気になって医者にきいたら、とてもヒマラヤへ行けないからやめなさいといわれたそうですが、それを無理してきたらしいのです。

沖　そういう人はナムチェで寝ていなければいけませんね。

柴田夫人　しかし、女のひとばかりおいていかれてもさびしいものね。

岸本　そうですね。

沖　そういうときに医者がいて、おまえはだめだとはっきり言ってもらえば納得する場合が多いですね。

増田　しかし、ナムチェに着いたときは全く元気がよかったですよ。

沖　なにしろ高度障害というのはわからないです。

鷲北　エベレストのベースキャンプまで行くのにはそうとうの体力がいるのですか。

沖　高度順応がうまくいけば、だれでも行けます。ですから、期間が長ければゆっくり歩けますのでだれでも行けます。ナムチェで1週間ぐらいいればいいんです。もっともあそこは約3800mですね。ルクラ（約2800m）で頭が痛いという人はだめですが。

柴田夫人　そんな人があるんですかね。体力を消耗しているとだめなんですね。

柴田　それと酒気があるとだめです。シャモニーで経験しましたがエギュー・デュ・ミディにケーブルで急に4000m近くまで登ったときは少しぐったりしましたね。

増田　しかし、普通は少しお酒を飲むといいですよ。いらぬ神経を使わなくてもいいから……。

沖　神経質な人はだめですね。実際は寝ているのに自分では寝ていないとおもいこんでいるような人です。とにかく今までで一番大きな事件は萩さんの件ですね。

柴田　あのときは家族の方に2日ほどでパスポートとビザをとってあげ、すぐネパールへ行ってもらいましたが、とにかく大変でした。

鷲北　緊急な海外旅行でしたら外国政府で手紙を書いてもらいそれをもって県庁へ行きますと特別に2～3日でパスポートを作ってもらえます。

沖　萩さんの件も、アフガニスタンの荷物の件もそれ以後みな注意するようになったから、逆説的ですが皆のためになってよかったです。アフガニスタンの荷物の件も普通の遠征隊では20日間位おくれても別にさしつかえないが、28日間の旅でしたのでだめでした。しかし、あれも隊員が1日デリーにいたのだから荷物が着いたかどうか聞いてみることもできたのですが……。まあ、ああいうときは悪いことが重なるんですね。

鷲北　あの件もボクが最初に聞いていたならなんとかなったのですが、すぐに日本に連絡は入らなかったのですから手の打ちようがなかったんです。第7回の時も食糧の荷物を1個なくしましたね。

沖　大きなバスに積む時にはあったんですが、おろしわすれたんですね。たいていの場合そうですがナムチェの人たちは自分たちの荷物のことで一ぱいで共同の荷物には関心がなかったようでした。それで他の人たちから少しずつ分けてもらってナムチェ班の食糧を1つ作ったんですが。

柴田　しかし、あの時のおもちはうまかったですね。

鷲北　今回は玉木さんたち（カトマンズで結婚式をあげたのち奥さんが病気になられた）が少しお気の毒でしたね。風邪と疲れが重なったのですからね。

柴田　2日間ねておられたのですね。やっと元旦の朝起きられて日の出をみられたんです。しかし、玉木さんの結婚式は一生の想い出になりますね。ところで今回の28日間の人は予定通りのコースを歩かれましたか。

トレッキングのしかた

沖　ほぼ予定通り行かれたのは東北の5人のグループだけのようです。あとの人は途中で帰られたり変更したりしましたね。上手に登れば登れるんですが上まで一気に行ってしまって上でまいってしまうのです。少しずつ時間をかけて行けばいいのですが。行かれるときにかせごうとおもい無理するので次の日には行程がのびなくなる。

鷲北　一度そんな経験をしないとだめですか。

沖　ええ、理屈ではわかっていても実際にそんな目に会ってみないとわからないでしょうね。ひとり慣れた人がいると、ここで1日休んでいればあとで2日分の道のりを行くことができるなど適切な助言を与えることができるんです。

増田　要するにあせる人が多いのです。日本人的せっかちさで28日間でどこかのピークに立ちたいというような気持が先に立つのですね。

沖　のんびり歩いた方が結局は得るところが多いということに気がつくのは帰国してからのようですね。第7回でもノウダラで3日ほどゴロゴロしていた人の方が収穫は多かったのではないかと思うくらいです。

柴田夫人　ネパールの街をブラブラしているだけ

でもよいですね。手続など、めんどうなことはほとんどないですしね。悪い人もいませんし。

沖　ネパールに関してはセルチャン氏とランジャン氏がいればもう大丈夫でしょう。あの人たちは本当に良い人ですからね。

柴田・増田　同感です。

沖　しかし結局、ネパールも日本も良い人もいるし悪い人もいるということですね。だからネパールやインドの人でも協会に余りプラスにならないような人を世話する必要はないとおもいます。セルチェン氏がもう1度日本にきたいと言われるなら歓迎しますが…。

柴田さんのおじょうさんもこれからインドで暮されるので、この点気をつけられた方がいいと思います。もっとも、デリーの柴田さんのご友人のカプールさんがおられるから心配ないですがね。

鷲北　デリーですと、中流から上の家でゲストハウスといって下宿みたいなことをしているんです。1部屋にベットをつけて食事もだして1日2食付40〜50Rp、しかし長期の場合はもっと安いですよ。

沖　今後のヒマラヤ観光の旅は東京のフロンティア社の林さんにまかせた訳ですが商業的に考えると登山の方は余りもうからないとおもいますが、ヒマラヤ観光の旅ばかりでは協会の層が浅くなるとおもいます。だから、ピラミットのようにエベレストに登る人とふもとまで行くという方も含む広いものでなければならないと思います。その点登山家が中心になって運営するとピラミットの上の方にばかり力を入れてしまう結果になって協会の会勢を盛り上げるのにはよくないとおもいます。

鷲北　ＨＡＡＪとしては、15日間のヒマラヤ観光というのはどっちかといえば本来の仕事じゃないですね。

沖　本当はそうなんです。ですからフロンティア社の方でその仕事をカバーしてもらうことになったのです。しかし、ヒマラヤの旅経験者の中から本当のヒマラヤニストを育てていくのも会の目的だと思っています。ですから登山の面白いものはその方をやればいいし、その他に興味のある方はそちらから積み上げていけばよいのです。

鷲北　将来はインドやネパールなどのエクスペディションもねらうわけですね。

沖　そうです。1973年のプレモンスーンにネパールのカンジロバ・ヒマールへＨＡＡＪの本格的登山隊としてはじめて送り出すことになりましたのもその一つです。

ＨＡＡＪの勢力拡大

柴田　ＨＡＡＪの推せんするパーティは、インド、ネパールの観光や登山はすべて資格がとれるということにならねばなりませんな。

沖　しかし、現在のＨＡＡＪの力はそこまでいっていないですから……。少なくとも5000人ぐらい会員がいないとだめですね。今は日山協を通さねば正式な許可がとれないです。それをおさえる政治力を作るには、ある程度のバックボーンがないとだめですね。1000人やそこらの会員ではだめですね。それが5000人も会員がいてそれのほとんどがヒマラヤへ行くとなると圧力がかけられます。そうしたら政治力を利用してもいいですが…今はまだ無理ですね。

柴田　先日、協会でお世話した王族の方などの力でうごかしてもいいですがね。

沖　ネパール国自体の問題ならいいというでしょうが、なかなかそうはいかないのです。登山くらいのことで外交的トラブルを起したくないと、ネパールは考えていますね。ネパールがにげているのは登山隊を送り出す国の推せんした登山隊でなければいけないということになっているんです。日本ではそれが日山協なんです。ＨＡＡＪのルートを開いたとすると日本からのルートが2本立てになってしまいます。それではネパールとしても困りますからね。もし、2つのルートが競争したら、ヒマラヤに詳しいスタッフが数多くいる方が有利なわけです。そのためにも会員が、5000名にもなりますといろいろな人がでてくるとおもいます。特別ルートを開くというためでなくて、会員が多いことはいいことですよ。

柴田　しかし、ＨＡＡＪには有能なスタッフがいるから、まあ、なんとかしましょうと政治力にものをいわせてやれないこともないね。

沖　しかし、日山協としてもかなり政治力をもっ

ていますよ。だから、日山協に対抗しようとおもったら、まず会員数が5000人くらいないですとね。

柴田　会員は500人でもいいですが、なにせおよびごしでしていては何も仲々できないね。

沖　まあ、あまり無理をしなくてもネパールに登山隊はだせますからね。ＨＡＡＪは日山協にも加盟していますし……。

しかし、ＨＡＡＪを通さねばヒマラヤ登山隊はだせないということが仮にできたとすれば、ヒマラヤ登山に行くには、かならずＨＡＡＪに加入しなければならないとなるとＨＡＡＪとしては大きいメリットになりますが。今は推せん状をもらうことはたいしたことではないのです。現在の協会としては無理して別ルートを作ってもあまり協会のためにはならないと思います。それよりチベットとかブータンへ行くとか、なかなか普通ではいけないところを開拓して行く方が面白いとおもいます。

鷲北　たとえば、日山協から許可をとってヒマラヤに申請書をだす。しかし、なかなか返事がこないときがありますね。それをＨＡＡＪを通せば早く解答が来るということはどうですか。

沖　今はそれもなかなかむつかしいのです。直接ネパール政府にコンタクトしてはいけない。いわゆる正式外交ルートでの解答を待とうということになっています。直接ネパール政府へ交渉して許可を取るということは禁止されています。それをして見つかると３年間は、その山岳会に推せん状を出さないことになっています。というのは、そういうことができれば皆んなが色々な手を使って抜けがけするわけです。そうなればネパールも手を上げてしまうし、日本国内もてんやわんやになってしまいます。

鷲北　日山協にしか返事はこないのですか。

沖　日本大使館を通じて外務省、日山協と正式外交ルートを通して入ってくるのです。そのために現地の日本大使館にひとり登山係がいるのです。今の協会では協会の会員になっておれば、たとえばブータンへ行くルートが非常につかみやすいとか、ネパールのトレッキングでも普通では許可できないようなところをとるということの方が大切だとおもいます。しかし、心配なのはピラミットの頂点の方はいろいろな研究会などで活躍していますが底辺といいます。いわゆるヒマラヤニスト予備軍である一般観光客がＨＡＡＪへ入りにくくなるのではないかということです。ですからその底辺をどうやって入会してもらうかということが問題ですね。

柴田　しかし、そういうことは一般旅行社が全勢力をつぎ込んでやっているから、協会の方針からいって無理なこととおもうね。普通に登れないところを政治力で解決した方がいいとおもうが。

沖　登る本人たちが一生懸命になるのはいいが送り出す側としてはそこまで無理する必要はないとおもいますね。送り出すスタッフが今の人数ですから、あまりその方に勢力をそそぐと一般会員へのサービスがおろそかになりますしね。特殊な隊を送りだすことが協会のプラスになればいいが喜んでいるのは遠征に行く人だけだということになれば意味はないとおもう。協会の組織を大きくするという力にはならないのではないでしょうか。協会の隊ということなら別ですが、どこかの山岳会の隊であるということでＨＡＡＪが利用されるだけです。もちろん、できるだけのことはしなければなりませんが、今の協会のスタッフにはそれだけの余力はないですね。

鷲北　ＨＡＡＪの場合、個人会員でなりたっているわけですね。

沖　そうです。

鷲北　日山協は法人関係がそうとう入っていますね。

増田　そうです。しかし、ＨＡＡＪは法人会員を入れない方針です。個人会員の方がセクトができなくていいですね。

鷲北　日山協の窓口をそっくりＨＡＡＪに移すということはできないのですか。

沖　登山審議会というのがあるのですが、その委員の殆どがＨＡＡＪのスタッフということになれば、それだけの会員がＨＡＡＪに入っていれば、そうすることも可能だといえますが……。

鷲北　今、日山協はどれだけの規模ですか。

沖　3000団体くらいですね。日本で１番大きいですね。

柴田　その次はＨＡＡＪですか（笑）。そんなわ

けにはいかんですかね。

ヒマラヤのＰＲが大切

沖　この間のコーリ氏の講演会をした勤労者山岳連盟は人数は多いですがいろんな人が個人的に集まっている「労音」と同じ性質のもので意図していることも全く同じです。加入している人にその意識があるかどうかは別としても……。大衆活動ですから動員力はありますね。だから、映画会などしようとするとかなりの人数を集めるわけです。「労山」は組織としては大きいし立派ですが山に入るには政治的な思想などは必要でないと私はおもうのです。しかし、ＨＡＡＪは「労山」のような会員の集め方をしなければいけないとおもいます。でないとだんだん頭の上の方が高くなって底辺がなくなって、おしまいにはひっくり返ってしまう。そして崩れてバラバラになってしまう。結局今の登山界のようになってしまいますね。

鷲北　今のＨＡＡＪの会員となると同時にどこかの会に属しているのですね。

沖　ええ、殆どそうです。余り山、山といわないで、いろんな層をもっと開拓していかねば、先細りになるような気がします。高度の高い山に登る人は研究会のようなものを開いて、そこで研究すればいいし、ヒマラヤ集会のようなものはだれでも来て楽しめるような会にした方がよいとおもいます。

鷲北　もし、集会などをもたれる場合、まえもってエア・インディアにいって下されば多少の費用ももちますし、映画などもお貸し致します。

柴田　ありがとうございます。よろしくたのみますよ。

沖　これから、もっともっとインドなどの旅行者が増えるとおもうのですよ。だんだん日本も高度成長をしてヨーロッパのような都会にあこがれないで、静かな田舎でのんびり…という人が多くなってくるのではないかとおもいます。そこで、インドやパキスタンなどヒマラヤ諸国がクローズアップされると思うのです。

鷲北　一般的な今までの例ですが日本人は非常に欲ばりで色々、盛りだくさんのスケジュールが書いてある方が企画しても受けがいいのです。若い人はそうでもないのですが。

柴田夫人　先日、ハワイへ旅行された人の話ですが、スケジュールがぎっしりで朝早くからバスで飛び回って忙しいおもいで旅行して、結局日本と同じだという印象をうけただけだったそうです。

鷲北　昨年はハワイ、グアム、ホンコンへの旅行者は日本が１位だったそうです。ボクがおもうのですが、グアムなど行くより、ダージリンあたりで１週間すごした方が、はるかに良いとおもいますね。

柴田夫人　ダージリンというところを知っている人はいいですが、知らない人の方が多いでしょ。

鷲北　旅行会社の人も悪いですよ。たとえば、ある新婚夫婦がダージリンへ行きたいといったのです。しかし、よくダージリンを知らない旅行社がハワイの方にしなさいといったんです。その人たちはどうしても行きたいとエアインディアに電話をかけてきたのです。要するにインドやヒマラヤはよく知られていないのですね。ボクたちも一生懸命、ＰＲにつとめているのですが結局は口こみが一番大切ですね。

グアムでも知る人が余りいなかった。しかし、若い人が出掛け、安くて良い所だと人に話すことによって今のように爆発的な人気をうけてきた。インドの場合は口こみで逆に悪く伝わっているものだからだめですね。飢きんでめしがくえないとか、実際そういう村もありますがそうばかりでもない。インドの場合、流通制度が悪く食物などもたくさんできるところとそうでないところがあり、その両者の流通がうまくできていない。

増田　だから、ヒマラヤ集会も数多く開催して、ヒマラヤの良いところもみてもらうということもしないとだめですね。そういう企画もむづかしいでしょうが……。

鷲北　もっともっとインドを知ってもらうためにも大いに集会をもってもらいたいですね。会員に限るときめないで、どんどん新しい人にもみてもらいたいですね。

柴田　私もできるかぎり出席しますよ。そろそろ時間がなくなりかけましたので、この辺で終りにしてはどうですか……。

沖　話がこれまでのヒマラヤの旅の反省というよりもこれからのＨＡＡＪのことにむしろ中心が移っていきましたが大いに結構だと思います。この座談会はほとんど修正せずに「ヒマラヤ研究」に載せてＨＡＡＪの皆さんに読んでいただき、これからのＨＡＡＪのあり方、そして皆さんのヒマラヤへの思いを実行に移していっていただく上の踏台として、あるいは議論のたたき台として役立てていただければと思います。

どうも長時間にわたって有難うございました。ＨＡＡＪのますますの発展とこれまでの皆さんのご苦労に感謝をし、そして、これから１年あまりインドで勉強される柴田さんのおじょうさんのご健康を祈りつつ終りにしたいと思います。

［ヒマラヤ研究Ⅲ　ネパール・ヒマラヤ・トレッキング　から再録したものである］

ＨＡＪの遠征をめぐって

日　時　1977年(昭和52年) 2月27日
場　所　東京・世田谷
出席者　沖　允人（前事務理事）
岩水竜峰（専務理事）
稲田定重（前Exp研担当）
西郡光昭（1975年ヌン登山隊々長）

はじめに

日本ヒマラヤ協会（ＨＡＪ）は本年（1977年）創立10周年を迎えた。この間、さまざまな遠征をおこなってきた。なかでもＨＡＪの専門部会の一つであるExpedition研究会（Exp研）は「遠征とは何か」を理論的に研究し、実践に移して確かめてみようという意欲的な研究会として活動してきた。

1974年のラムジュン・ヒマール（ネパール）1975年のヌン（カシミール）、同年のリシ・パハール（ガルワール）はExp研の総力をあげてとり組んだ遠征であった。いずれもそれなりの成果を得ている。

さらにＨＡＪは15周年を目ざして、ヒマラヤとシルクロード大作戦（Ｈ＆Ｓプラン）を企画し、その一環として、8,000ｍ峰の登頂を組み入れている。この遠征はこれまでの遠征経験をふまえてExp研が担当して進められており、カンチ計画と名づけられているのがそれである。そして、カンチ計画の“前哨戦としてプレ・カンチ計画も立案された。

これらの計画を実行に移す前に、これまでの遠征の総括的反省をしてみようということでこの座談会は開催された。登山の技術的なことは、それぞれの遠征隊でなされているので、この座談会の主たるテーマは「ＨＡＪという組織から見た遠征」という点にしぼった。

出席者は送り出した側として前専務理事・沖允人と現専務理事・岩水竜峰、遠征を実行した側として前Exp研担当理事・稲田定重、現カンチ委員会委員長（1975年ＨＡＪヌン隊々長）西郡光昭の４人である。

紙面の都合で割愛したり、整理した部分もある。ご了解願いたい。（文責　沖　允人）

遠征組織と理念

〈Ｏ〉ＨＡＪの遠征はまず計画があって、それに人が集まる。あるいは集まるということで遠征が成立する。それには誰れでも能力に応じて参加できる。また、それらの遠征は誰でも企画することができる。それが「みんなのＨＡＪ」の一つのいき方である訳です。

一方には少数精鋭でそれを実践しようという動きもある。結局ＨＡＪで出す遠征隊はいろんな内容と形式の遠征隊となる。そして、すぐれたメンバーの構成にしようとすればたいていの場合混成パーティとならざるを得ない、それがすべてのＨＡＪの遠征隊のベースであるといってもよい。

しかし、現実には混成パーティがうまくまとまっていないのではないか、ＨＡＪのささえも弱いのではないかと思います。会員はＨＡＪ以外のどこかの山岳会に属し、それに加えてＨＡＪにも属している。２重に山の会へつながっている。しかし、その個々の山岳会とＨＡＪとのつながりはほとんどないといってよい。

〈W〉それが現実ですよ。

〈O〉だから、今は組織としてやって行く力が弱いのではないでしょうか。

〈N〉これはメンバーの１人１人の資質にかかわることになるが、即戦力になるかどうかとして考えるよりも、ＨＡＪの隊は単一山岳会のメンバーとはちがった合同パーティとしての組織に組みかえて行きたいと思っています。

〈Ｉ〉組織の理念というか、企画力というかそういうことはきちんと１人１人に理解されていた訳ではないが、とにかく何かをやろうというような理念があったことについては間違っていなかったと思います。しかし、遠征の実体の掴み方については甘かった。もっと遠征というものをきちんと掴んでいければならなかったと思うのです。

例えばあいつはその能力をもっていなかったのにあることをまかせた。そして結果的にはまかせたことができなくて遠征隊は大きな打撃をうけた。というような点、それが遠征実務においては技術的な欠陥となったのです。

隊全体としての動きも、予想と違って、この程度の動きはしてくれ、この程度のことは実現できるのではないかと考えていたことができなかった。見通しの不確定さというか、お互の能力を判断できるまでにはお互を知らなかったというか、お互のむすびつきがあまかった、弱かったといえます。

〈O〉遠征にもいろんな型があるのだがそれに見合うような人材が集まればいい遠征ができると思います。ところが、Exp研のこれまでの遠征は、遠征を企画した者とそれに参加して遠征した者との間に何か少しずれがあったような気がするのです。

〈N〉たしかにそうでしたね。

〈O〉例えばこじんまりとまとまって行く遠征隊もあってよく、それにはそういう人が集まってくれればいい訳ですよ。

今回、計画しているようなカンチ計画だけが遠征ではないし、あれが最高で唯一の遠征でもない。遠征は幅広く奥の深いものだと思います。

そのような計画をするならその計画にふさわしいメンバー集めて来なけりゃいかん訳ですよ。それができないところに期待値とのずれが生じる。初めからそういうメンバーが集まることが予想できないのにそういうことを企画するという、いきすぎの面もある。

そのギャップをできるだけ小さくしていかないと今後も企画者のギャップというような、これまでと同じような問題がおこりますよね。

〈N〉だからカンチの前のプレ・カンチの発想はそこから出ている訳ですよ。よせ集めで、いい意味で、一匹狼を集めてワッと行けば登れるという考えはかえなければならないということでプレカンチ計画は始まったのです。このことはこれまでExp研の集中が集まってやってきた本来の行き方とは違ってきている訳です。単一の山岳会で新人が育って行くということまでやらなくてもそれに近いところまでやらねばだめだという考えが出てきたのです。

〈O〉企画にすぐとびつくのではなく計画をよく見直す期間がないとね……。

遠征は荷物を上げればよいという単純な作業ではない。思想も理解しないと企画と違った考えでメンバーが参加してくるということにもなる。こういう考えで登るのだということをメンバーに理解させる期間というのがある程度必要だということですか。

〈Ｉ〉そうです。だからカラコルム計画をプレ・カンチ計画としてカンチの前に立てたわけで、偵察という目的もあるが、山をどんな風に登るかという偵察の意味だけでなく、もちろん、それも重要だけど「一つの完結される山」が必要ということもあってこの計画が生れたのです。

つきつめるとこのプレ・カンチ計画が成功しなければカンチ本番の計画の成功はあり得ないということです。

〈O〉第一次試験のようなもんですね。

今までは企画があって、それに隊員が集まって

遠征に行った。それがあまりよくないということで、まず隊員が自分で計画の理念を考えてみるという期間をおく。いわゆる、ワン・クッションを入れるという計画なんですね。

〈N〉そうです。

〈O〉大きい遠征を企画するなら、その成果を見て、次の遠征を考えるというのは良い方法だと思います。一度でさっと登れるような6,000m級の山ならそんな必要もないと思います。半年ぐらいの準備期間で行って登ってくるということでいいと思いますがね。

ＨＡＪの遠征

〈O〉それにしても、ＨＡＪの遠征隊は山があってから話が始まる。しかし、単一山岳会ならたいていの場合まずメンバーがいて、すなわち人がいて山が始まる。あいつもいる、こいつもいる。この連中の好みなら、そしてこのメンバーならこの程度の山が登れる、あるいはトレーニングを積んで登れるようになるということで山が決まってくるのでしょう。まず人から遠征は始まる。しかし、ＨＡＪの方は山があって、この山に対してこれこれの山登りをしたいやりたいということから遠征が始まる。単純に割切れないが、どっちかというと、遠征計画の対象があって、それから遠征が始まるといってもよいと思います。Exp研がこんな山をこのようにやったらいいと考え、人を集め、トレーニング計画を立てる。今度のカンチ計画もそういうことになっていますね。いきさつはいろいろあるし、原因と経過はいろいろとふくそうしますが……。

〈Ｉ〉そうですね。日常の登山活動がベースになって、そのつみ重ねが遠征として出てくるという遠征の発想はＨＡＪの場合弱いですね。目標が決まり、日程が決まって動き出す。スケジュールによって活動するという要素が多い。

〈O〉それをもっと広げていけばね。Ｋ２をバリエーション・ルートから登るとか、エベレストを中国側から登るとかいう政治的にも技術的にもむつかしい目的を設定すると、当然、よりよい遠征隊を組織する上に合同パーティ、国際パーティということにならざるを得ない。そういうどんな遠征でもこなせるというようにするには、いわゆる混成パーティで充分こなせるという幅広い実力をつけたい訳ですよ。どんな遠征もこなせるExp研であり、ＨＡＪでありたい訳です。ラムジュン遠征だってそういう動きの一つだった訳です。又、それが意図されていた。しかし、行った人はそういうことを頭にあまりおいていない。山にのめり込むというか、山を登ることだけにウエイトがかかってしまう。それはそれで精一杯やった。与えられた困難な条件の中でそこまでしかできなかったということで一応満足すべきでしょう。

だが将来はどういう遠征でも出せるという体制のＨＡＪでないといかん訳です。どういう遠征隊でも組めるというメンバーと体制とがなくてはＨＡＪの存在意識は薄れます。

〈Ｉ〉ＨＡＪの遠征は目的の山なり、対象なりが先行するということは、これからも是非考えなければならないと思うんですよ。

〈N〉山の名が出てくる以前の、人間の面から固めていこうとすれば、ＨＡＪのような会の中でExp研を作ってやって行く必要はない訳です。人間を一歩から養成していくというなら単一の山岳会と全く同じことになってしまう。

〈O〉だから人が入れ変わっても、ＨＡＪの遠征の思想や、やり方はずっと続いて行くというのが理想的なんです。当然、計画によって人は変わらねばならないですが、人間は入れ変ってもいいんです。大事なことはＨＡＪとしての哲学が生きつづけるということでしよう。

前回の遠征に行かしてやったんだから今後は送り出す方を手伝えという、そういうやりかたでＨＡＪとつながって行くのではＨＡＪの遠征は続かないし、続ける必要もない。しかし、人は変わって行っても思想は続くということで遠征を続けたいと思いますね。

〈W〉そうです。同感です。

〈O〉しかし、今までのＨＡＪの隊が、そういう思想の流れがあって遠征をやってきたかというと、ちょっと疑問に思えるのですよ。一つ一つの遠征が単発だったという気がします。それはこの遠征が何を意図して計画されたかということを参加し

た人がよく理解し、共鳴していなかった。企画をしたExp研の会員がそのへんのことをよく考え伝えていなかったからではないかと思います。

〈I〉別の言い方をすれば、今までの遠征はハプニング的なことから始まったといえるのです。

〈O〉とにかく一度やってみようということですね。

〈I〉それに、外部の情勢の変化に機敏に対応しようということもあったんです。はっきりはしなかったが一つの思想をもってはいたのですが、ハプニング的な要素も入ってきたので混乱したということもあります。思想が全くなかった訳ではないのです。

〈O〉メンバー1人1人はおそらく考えをもっていたと思うのですが、Exp研としての大きな流れはなかったのではないかと思うのです。極端にいえばみんなテンデ・バラバラに理想の火をもやしていたということですね。そういうバラバラの考えで遠征に参加していたといえます。それが、ユニークな企画が出なくて、ある企画が提供されそれにハプニング的に便乗するという一つの原因でもあると思うのです。議論ばかりしても実らないからひとつ行ってみよう、ということでやったのがラムジュン遠征だったのでしょう。

〈I〉あのときは送り出す方としてもその点、不安がありましたね。

〈O〉いずれにしても組織の問題はむづかしいものです。とにかく核になる人がいなければ組織は続かないと思います。

ラムジュン計画はその核がはっきりしないというか、一つにしぼられないままに遠征を実行したといえます。

いずれにしてもExp研は本来、Expeditionの研究をする会だった訳ですが、研究もロクにやらないで実行ばかりに重点を置くというきらいがあった。今後、Exp研はこれまでのような登山の行為にウエイトを置いた遠征を続けるなら、研究会ではなく、実行のプロジェクトチームとして再発足すべきだと思います。実行のための研究はおよそ研究などというものからはほど遠く、資材集めにすぎないでしょう。

これは現在のExp研についていえることで、現Exp研委員長の山倉さんも「現在のExp研のあり方につきましては、私としましても、いささか考えるところがあります。この前も冗談に『今の情況では、研究会でなく、Expクラブにしたらどうだ」と言いましたが、たしかに一つの遠征計画が出ますと、それに参画する者のみの活動に集中して他の会員はその渦からはじき飛ばされてしまいます。これをどうするか考える必要があります。

またExp研の総括者としてはっきり決まった者が居らないので最後のまとめでＨＡＪとの関係、将来へ向かっての変化など適確な洞察による決定がなされないことが多くあります。そのためにひとつの決めが転々として変っていってしまう」と嘆いておられます。よく考えるべきだと思います。

ラムジュン遠征のこと

〈O〉次に、個々の遠征について考えてみたいのですが、先にも話の出ていたように、あの遠征はExpeditionのテストケースとしてやってみようということだと考えていいですかね。

〈I〉それとは少しニュアンスが違っています。

あの話が出たのは1973年の4月で、その前の年の段階では、翌年に遠征をやろうという気は少しあったが、実際に組織を動かしてやろうという気はほとんどなかったのです。

たまたま、そこへ、ラムジュンの許可がとれそうだというニュースが入って、それでは、ということでやった訳で、始めからテストケースでという意図はなかったんです。それにのっかってやっているうちに、やはり形ができてきた。準備の過程でExp研の活動を考えだしたということです。

〈O〉そういう意味ではラムジュン遠征は第1回のExp研の遠征としては少し早すぎた。もう1年位あとでラムジュンの遠征はやればよかったのではないでしょうか。

〈I〉そうですね。それまでのExp研の動きとラムジュンとはスムーズには連絡していなかったんですね。

〈O〉ラムジュン・ヒマールはネパール人のためにとっておかれているんだという噂があったのが、外国人も登れるということがわかった。それでは……

というチャンスも大きかった。このあたりのニュースの掴み方は、ＨＡＪは実に早いですね。結局はイギリス空軍隊が初めに行ってＨＡＪは第２登ということになったが、本当はもう１年あとに出したらもっと充実した隊になったと思います。

〈Ｉ〉その“たまたま”ということが、そのあとのヌン遠征にもガルワール遠征にもいえるのです。

〈Ｏ〉企画の方が一呼吸早いんですね。山の決り方が一歩進んでいるといってもよいでしょうか…。

〈Ｉ〉その企画もExp研が発想したのならまだしも、みんなExp研以外から出されたアイデアに乗ったんですね。

〈Ｏ〉それに、簡単に乗ってくるということがExp研究の理念の弱さを物語っていたともいえます。

「オレはこのようにやるが、その計画はおことわり」というようにならなかったんです。しかし、今は違う。これからのヌン、サセル、パミールの計画にはExp研はのってこない。それはそれでいいことです。ラムジュン当時のExp研ならすぐとびついてきたということです。

それにしても、Exp研は自分の遠征をもっている、Exp研はしっかりしてきた、といえますが、しかし、それはそれで一つの重大な決意といえますね。自分が決めて、自分がサイコロをふった遠征だから責任はすべて自分、すなわち、Exp研にある。このことはしっかり自覚してもらいたいものです。計画の成功も失敗も鍵はExp研が握っている訳です。しかし、Exp研の人のこのあたりの認識は未だ甘いのではないでしょうか。資金計画、遭難対策についてもこれまでのような不安定さでは困りますね。いずれにしても責任重大という訳ですね。ともかく、これまでのExp研が他人のたてた計画に簡単にのってきたということは、自分のモノがなかったということかも知れません。

とにかく何が何でも遠征に行きたいという人がExp研に集まっていたから短期間にまとまった訳ですがね。さそった方としてもタイミングがよかったということです。

〈Ｎ〉しかし、遠征の発想仕方、実行段階の甘さはいまだに残っています。一連のカンチの計画が出てきたが、カッカとしてやるということでもないんです。基本的には、Exp研の考え方はあまり変わっていないのではないでしょうか。

〈Ｏ〉多少は修正されてはいますね。

〈Ｎ〉ラムジュン遠征の頃からくらべれば、３隊の経験がありますからね……。

〈Ｏ〉ラムジュン遠征は言うならばタナボタ式ということだった。でも、タナボタをしっかり受けとめて、充分モノにしたということです。Exp研にそれだけの力はあったんですよ。

〈Ｎ〉そうですね。でも、いまだにタナボタを期待する雰囲気はまだ少しは残っていますね。

〈Ｏ〉自ら考え出して遠征を企画するということが弱いんですね。まあ、よせ集めというか、ＨＡＪに入ってくるような人はもともとそういう他力本願的資質をもってくる人が多いんです。自分の仲間で遠征が組織できる人はそっちへ行ってしまうと思うんです。しかし、いろんな理由で、人との関係、職場の関係などのことでも自分の思うような隊ができないということでもＨＡＪに入ってくる。それは、ＲＣＣⅡの隊でもそういう傾向があります。

〈Ｎ〉今度もカンチの計画があって、もう一方でハルディオルの計画があって、結局はハルディオの計画は引込んでしまったが、このことはケンケンガクガクとやった訳ですが、それはそれでよかったんです。ああいう対立する計画があって議論が進むということは遠征を煮つめるにはいいことなんです。

〈Ｏ〉「与えられた菓子を食べるか食べないか」という話だと簡単ですからね。自分で菓子が作れるかということを考えなければならない訳です。

〈Ｉ〉とにかく、基本的な思想については余りかわしていないのに、方法論についてはにがい経験を経てきたので慎重になってきています。そういう意味では進歩したと思います。

〈Ｏ〉とにかく、タナボタであったにしろ、ラムジュンという良い山に登った。遠征隊そのものについては大成功だったです。

ただＨＡＪとしての理想の遠征隊であったかという点にだけは疑問はありますが……。遠征隊自体はもちろん現地では細かいトラブルはいろいろあったが、とにかく一応仲良く帰ってきましたね。

……。

ただ、送り出しの態勢がととのってから出なかったという点と帰ってきてから、この遠征を材料にしてよく反省していない点が惜まれます。その点がＨＡＪとして双手をあげて大成功といえない点です。

〈W〉結局、プランと実行はあったがチェックがされていない。チェック、すなわち検討があって一つの計画が終る訳だけど、ラムジュンにはそれがなされていないから、あとへのつながりが弱いということです。チエックをいかにするかを考えることが次の段階ですね。

〈O〉企画し、実行し、検討しなければ、ただ遠征に行った、山へ登ったというグレードの低いお遊びにすぎないことになる。その意味で報告書をタイムリーにきちんと出さない隊はお粗末といわれても仕方がない。報告書をまとめる段階で隊員はその遠征を反省するものです。

〈Ｉ〉ラムジュンが帰ってきた時点では一応の検討はしたんです。しかし、もう次の遠征が始まっていた。だからもうおそすぎたというか、送り出すのにかかり切りにならざるを得なかったということも検討を十分できなかったという理由の一つでもあるのです。かなり、反省もし、それを次の遠征に生かそうとしたんですがね。チームの成立と新しく送り出すという遠征が２年続いたという点が、スケジュール的に無理だったと思います。

〈W〉検討をし、反省をしたがそれを生かす時間的な余裕がなかったんですよね。

〈O〉矢継早という感じだった。

〈Ｉ〉しかし、生かされる点はすべて生かしていますよ。

〈O〉ラムジュンの隊員があの遠征だけで終わってしまわず、続けてかなりＨＡＪやExp研に協力してくれ、今でもいい人間関係が続いているのは、大きいささえになっていますね。

〈N〉かなり大きいし、有難いことです。

〈O〉報告書をなかなか出さないことなど、文句をいいたい点はあるが、ＨＡＪとしてはそれよりもよい人間関係ができている点が嬉しいことです。Exp研の骨格をなしているといってもよいですね。

ヌンとガルワール遠征

〈Q〉それにしても次のヌンとガルワール遠征がすぐ動き出したという点が性急だったね。

〈Ｉ〉次の計画が動き出したのが1974年の２月でしたからね。あの時はラムジュンの準備の最盛期だったのです。平行して遠征をしたようなもんでした。

〈O〉はじめからインドとの合同隊でヌンをやろうとしていた。ああいう外国人のみで入域できない地域へ入るにはどうしても合同隊、国際隊にならざるを得ないという考えで、始まっていた。許可がなかなか出ないし、あてうまでガルワールも申請した。ところがヌンもガルワールも両方とも許可が出た。しかもヌン隊がプレに入る予定がビザのトラブルでおそくれにおくれガルワール隊同時にインドへむかうという事態になった。そこからヌン隊の苦労が始まった訳ですね。

今から考えれば、両方許可がきた段階で大英断でもってガルワールをやめるべきだったと思うんです。

〈Ｉ〉たしかに、ヌンの遠征の場合は発生まではラムジュンの遠征よりもスムーズだったし、外から与えられたという形で出た遠征計画ではなかった。

もともと空さんがヌンを考えていて、当時はあれは合同ではないと許可は出ないということで進めた。その空さんが途中で病気で隊長をおりたという点も大きい障害だった。

〈O〉残りの隊員全体に合同隊をやりとげるんだという意識が少なかったんでしょうね。

〈Ｉ〉ただ、あの場合、合同隊の意識が少なかったというのはいろいろ事情もあるんです。

許可を取るためにということで合同隊で進んできて、計画が大方組まれた1974年７月の時点で、ラダックがオープンされて、ヌンは合同隊をくむ必要がなくなった。

それよりも隊の成立、そして出発、それに大半の勢力を使わされれたのです。あれがあまり隊の構成や、情勢が変動しなくて、始めのままでいったとしたら、もっと合同隊としての成果が上って

いたと思います。当初計画したメンバーと行った人間とではガラッと変わっているんですからね。

〈O〉合同隊としての意義を意識しないで、とにかく行こうということになったのですね。

〈I〉1975年2月頃の時点では合同隊としてどうすべきかについてはExp研でかなり議論した訳ですよ。ところが、カシミール側隊員の減少ということもあったりして、合同隊が半ば崩れてきたということです。結局は合同隊でなくなってきた。そうなってくると隊員の方としても合同隊としての意識が薄くなってきたということもあります。あれが50－50の合同隊ならもっと合同を意識したと思います。しいていえばリエゾン・オフィサーともう1人インド人隊員が加わったということですからね。

〈I〉ヌン遠征は頂上に登れなかったということ、その後のチームもあまりうまく行かなかったという原因の一端はガルワール遠征を同時期におこなったというところに大きな成否の岐路があったと思います。

〈O〉ガルワールもやめるにやめれないという事情にはあったが、ドライに考えればあれはヌン遠征隊一本にしぼるべきだったね。一本にしぼったとしてもヌンが同じように登れなかった、あるいは成功したかも知れないが、もう少しすっきりしたと思う。1年位延期してもあの年はヌン1本にしぼればよかったんだね。

〈W〉次の遠征に大きく生かした方がよかったかも知れなかった……。

〈O〉勢力が2分された。空さんの「どうしても頂上に立ちたい」という考えがうすれた。山森さんなんかは彼の山登りの態度としてバリエーションから登りたいという考えがあったからね。

ただ、あれを企画した意図からいえば、ヌン、サセル……とつづけたかった訳ですからね。まあ、しかし、曲りなりにもヌン遠征は終わったんだから、あの火をたやさずにもやして行かなければならないと思うんですよ。

空さんはヌンの継ぎにはサセルそしてカシミールからカラコルムへということが頭にあったんだと思うんですよ。そのためにはまずヌンで成功して、という考えがあった。でも、空さんが行かないのにその考えを他人に押しつける訳にもいかないし……。

〈I〉もう一つは状況の変化に対しての判断が甘かったといえます。ヌンとガルワールと両方やるべしというのは、長野で、6月初めに決めたんですよ。その時点以降、沖さんがインドへ行っていて渉外を進めていた。そのころは両隊を出すことについて、資金の面、人の面、送り出す面も含めて細かく分析していた。そして、大体可能であるとふんでいたのです。

〈O〉もちろん、これは結果論だからいえることですが、もし、ヌン遠征が予定通り6月に終っていたらもっとスムーズにガルワール遠征は行っていた。ヌン遠征が8月になだれ込んだという点が決定的な悪条件だった。西郡隊長も帰国しなければならなくなったし……。しかし、もうあの時点ではガルワール遠征もやめる訳にはいかなかった。そういう事態がまさかおこらないだろうというような甘さというか遠征のむつかしさというか……。それが大きな曲点だったね。

〈N〉これでやれるんだという判断が甘かった。シビアさがなかったというか、余裕がなかった訳ですよ。

〈O〉そうです。ちょっとどこかで崩れたらうまく行かないという要素があったんです。あれがガルワール遠征がもう1年あとということならヌン遠征にもあんな混乱はなかった。誤算といえば誤算、不運といえば不運です。もちろん、あくまでもあとにすればよかったというのは結果論ですが…。しかし、結果は重大です。世の中は結果で判断されることが大半ですから。口惜しくても仕方がない。世の中はそういうものでしょう。

中心人物の重さ

〈I〉主要なスタッフは、見通しを立てておくということ、自分が行けなくなったらどうするかということまで考えておく必要はありますね。致命的なダメージをあたえますからね。

〈N〉ヌンのパーティはいわゆる空さん発案だったから、「この指とまれ」といってやってきた連中の肝腎の親指がぬけてしまったのだから、そし

てあとは、つぎはつぎのようなことでメンバーを構成したんだから、弱くてあたり前ということになります。

〈O〉それはそうですが、ＨＡＪのそれまでの交渉のいきさつからいっても、ヌンをやめる訳にはいかなかった。そこに苦しみがあった。空さんがやめると崩れ易い隊だったのも事実です。構成の弱さ、そして、空さんがやめてあとのサポートが病気のせいでできなかったという無理からぬ点は多いが、しかし、もっと、あとのことを考えておくべきだったと思います。やめた人が平隊員なら、ああいうこともあってもやむを得ないが、中心の隊長またはそれに準じる人はそういう意味の重味があるのですよ。

これらのことも考えて、今後は人選を考えなければならないということでしょう。

〈N〉はじめはキシュトワールのトレッキングとヌンの登山をやる予定だったんですよ。あの頃はあまりキシュトワールは知られていなかったですからね。ヌンは清水、空、キシュトワールは浜、西郡でやるという予定だったんです。

〈O〉いずれにしても、中心人物には良いも悪いもすべてがかかってくるということですね。

〈Ｉ〉覚悟してひきうけねばならないということです。

〈O〉いいときばかりではないし、あらゆる重味に耐えなければならない。西郡さんなんかもそういう意味で重い荷ばかり背負っていますね。

〈N〉悪い連続だね。大学の遠征のときから始まってね。(笑)

よくぞ乗り越えた障害

〈Ｉ〉結果的に見ればヌン遠征はすごい障害の連続だったが、よくあれでほうり出さなかったと思いますね。これは高く評価すべきですよ。

〈O〉メンバーも少ないしね。しかし、なおかつあれだけの山登りをやったということはすばらしいことです。もう少しで登れたんですから…。順調にいったとしても、あの程度もいかないこともある。それがあそこまで登ったという点は高く評価されてよいですね。でも本当に残念だった。山森さん、保坂さんの気持が痛いように分かります。

〈Ｉ〉余裕があればまず西稜から登り、次いで北稜ということになっただろうが……。

〈O〉やはり、山森さんなら一ぱつ勝負となれば駄目でも北稜の初登攀にかけてみようという気になる訳でしょう。

〈N〉それに、みんなはじめての遠征だったしね。

2隊を支える

〈Ｉ〉ともかく同じ年に2隊を出しましたからね。2隊を支えるというのは今考えても大変でした。綱渡りの連続だったですね。

〈O〉あれで事故が起ったら大変だったね。

〈Ｉ〉とにかく限界を感じました。

〈O〉もちろん稲田さんがいなければできなかったことだし、それはみんなよく知っている。逆にいうと誰れか中心になる人間が1人いれば、稲田さんほどの能力とやる気があれば、あのくらいの遠征は1人で切りもりできるということでもある。もちろん誰でもやれるということではないですが…。

〈Ｉ〉1人1人のメンバーを支えるのが大変でしたね。会社に話をつけなければならん、これが片付いたら、奥さんの説得、仕事のこと、とにかく次々と問題がおこるし……。個人の問題までもかかわらねばならなかった点から見て、そういう点での隊の弱さはあったと思うね。

〈O〉組織が充分ささえていなくて、稲田さんが大半をささえたということだから……。稲田さんに足をむけて寝られぬ人が多い訳だね（笑)。ＨＡＪはやめても稲田さんには借りが残るということですね。(笑)。その点、ＨＡＪはほとんど支えていない。ＨＡＪの組織としては支えることはあえてしなかった。冷たいようだがそれがExp研を鍛えることになる。

〈W〉個人的な問題は個人的に解決しないと…。組織に甘える、たよるということはイージーな態度になる。同じカマのメシで育った会員ではないからその辺はドライに割切るべきでしょう。もちろんできるだけのことはするが……。個人的な問題もクールにとらえないとね。

〈Ｉ〉クールな扱い方も余裕があればできるんで

すが……。

〈O〉遠征隊の母体なりが個人的な問題もやらねばならないということではなく、やってやれば助かるということね。その辺のけじめははっきりしておかないと甘えが生じる。やらねばならぬことは生命をかけてもやる。しかし、そうでないことは、できればやるという態度はもっていた方がよい。

やってもよろしいというサービスとか親切心とかは、要するにやってもやらんでもよい訳です。しかし、それを続けているとやってもらって当然ということになる。さらに進んでくると、まかりまちがえればやらない方が悪いようにいわれてしまう。逆うらみになる。これが人間を甘やかすもとになると思います。

〈I〉何事においても“オンブダッコ”というのはやめとくことですよ。

〈O〉そうです。余裕があれば隊員の勤め先に頭を下げに行ってやるのもよいがね……。

もう一つの遠征を

〈W〉ガルワールは単独のパーティとして反省するよりは、ヌンと同時に2隊出たということからからみ合わせて考えるべきですね。

〈O〉隊自身としてはよくまとまっていたし、登山も成功した。ただ、あれが出たためにヌンの隊が弱まったということもあります。

それと2隊の時期が重なって悪かったね。

〈W〉ガルワールはインドの知られざる山というか新しい山を見つけ出して登ったという点で成果が大きかったと思うんですよ。

〈O〉ＨＡＪの未知をさぐるという別の遠征へのアプローチとして面白かった訳です。人のあまり入らない地域へ行く。広がりを求めるというか、ああいういき方も続けていきたいですね。

〈I〉ああいういき方の遠征をおこなうのにガルワール隊の構成はぴったりのメンバーだったんです。

〈W〉ＨＡＪとして、あの時期としては、規模といい地域といい理想的な隊だったのではないでしょうか……。

〈O〉よくまとまっていたね。

〈I〉それも準備段階から見れば、いろんな問題があった。中心になる人間がうまく引っぱったからよかったともいえます。

〈O〉ガルワールは行って帰ってきた時点で考えてみてもＩＭＦともうまくいったし、リエゾンともいい関係を得たし、よかったですね。

これを軸にしてＩＭＦとつき合うとか、そういうことも考えるべきですね。

〈I〉そして、それぞれの隊がラムジュンのメンバーのように、次の隊にうまくつながっていったという点も大きい成果でした。

事務局のこと

〈O〉遠征事務局と留守事務局は別のところにおくのがいいし、担当者も別にする方がよい。これまでの隊はその点うまくいったし、今後もそうありたいと思いますね。

〈I〉カンチ計画も本事務局はＨＡＪの東京にあるが隊の事務局は別のところ、留守事務所も別におく、というシステムにしています。

〈O〉留守事務局は遠征の間のみひきうける方がいいですね。遠征隊がまだ日本にいる間は遠征隊事務局を窓口にする方がよいのです。どうしても行くものと留守を見る人との間のギャップがあり、遠征の方はどんどん進むが、それがいちいち留守事務局へ連絡とれていないことが多いからです。

ヌン、ガルワールは小島さんのところを留守事務局においてたが彼はよく働いたね。

〈I〉こまめに、いろいろ連絡を出してくれたり、よくやってもらえた。やはり、遠征経験者であるからでしょうか。平常の彼のノンビリムードらしからぬ動きだったですね。

〈O〉帰ってから小島さんを囲んで何か、会でも開いたんですか。留守事務局の人間は、遠征に行っていた人が喜んでくれ、有難いと思ってくれることが唯一の喜びですからね。有難がってもらったということは分かっているんですが、ちょっとしたお土産を買ってくるとか、反省会のとき招待するとかという何か形にあらわすことが必要ですね。

現地からはもちろん手紙はできるだけ出すこと

も必要でしよう。私が世話したいくつかの隊の中にも「行ってきました」のハガキ一本も出さないで平気な隊もあったし、反省会を開いたらしいが、出席してくれという連絡もないという隊もありました。反省会は行った奴だけがすればいいのではなくて、送り出したり、留守をしたりした人、家族も友人も含めてやるのが理想的なんだと思います。ＨＡＪの遠征はＨＡＪとのつながりはもともとうすいが、せめて留守事務局には人並のあいさつはして欲しいと思うね。

〈Ｉ〉小島さんには、その点、できるだけのことをやったね。

〈Ｗ〉留守事務局も隊員の１人だというくらいに考えなけりゃあね……。

〈Ｏ〉留守事務局というのが一番遠征の中ではむくわれないんですよ。出発後のゴタゴタの処理はかかってくるしね。いずれにしても小島さんはよくやったね。感謝状を送らにゃいかんね。（笑）

とにかく留守事務局としての機能はほぼ完全にはたしたね。山倉さんの蔭のサポートの力も大きかったが……。

〈Ｗ〉ガルワール隊員の今野さんの休暇延長の処理のときもよくやってくれた。

〈Ｉ〉今後の計画ではもっと大きい仕事がかかわってくるから留守事務局は大変だね。

〈Ｏ〉渉外隊員と同じくらいの力がないとね…。とにかく、突然に事がおこり判断し、処理していかなければならないから…。Ｈ＆Ｓプランで多くの登山やキャラバン隊、調査隊、ツアーが出て行くと、たいてい１つや２つのトラブルはおこるからね。

〈Ｉ〉そうなると事務局はコマメならよいという訳にはいかんからね。

ＨＡＪデポのこと

〈Ｏ〉装備の現地デポの考えは昔からあって、いろいろ試みたが、必ずしもうまく行っていない。要は良い管理者が必要なんです。使う方にも問題はあるが……。ネパールのようなランジャン氏という常駐の人が管理していてもはっきりしない。使う方にも問題がある。例えばポールが足りないといって、他のテントのものを勝手に切ってしまう、というようなこともあった。デリーでは部屋を借用していたがその家主とのトラブルもあった。もちろん、誰れも悪意がある訳ではないですが…。インドではあまり多く外国人が出入りすると税務署や、警察が目をつけるということもあるし…。家主にも迷惑をかけたし、いろいろとむつかしい問題もありますね。

〈Ｉ〉でも、デポは何とか続けたいですね。とにかく倉庫のようなところでも借切るかしてですね。

〈Ｏ〉以前は宿泊もできるということも考えていたからね。何しろデリー事務所ということでケーブル・アドレスもおいたから……。

〈Ｎ〉とにかく寝泊りされては家主もたいへんだったね。

〈Ｏ〉誰れか分からない人がきてもＨＡＪの人なら嫌だともいえないし……。

〈Ｎ〉とにかく、別の専用の入口から入れるところでないといけないんです。

〈Ｏ〉とにかく、現在のデポ品を整理し、今後は消耗品などはデポしないことにするんだね。

〈Ｗ〉とにかくデポは有効な方法なんだが…。サセルとかヌンとかカンチとかの遠征を続けるなら、ともかくデポはしておきたい。これは今後の問題として倉庫を借用するという方向で進めたいと思います。家賃は１カ月300RS位だからね。

遭難対策のこと

〈Ｏ〉３隊を通じて、遭難対策をよく考えておく必要があったと思うね。保険をかけておけばそれでよいという訳でもないから……。

〈Ｗ〉幸い、今まで事故がなかったからいいのだが、カンチのような大きい計画をやると、当然このことを考えておかねばなりません。新人から養成して行くやり方、いわゆるタテ社会の組織なら統制もとり易いのでしょうが、いわゆる一匹狼が集まってやるというところにお互いの常日頃の一緒の登山活動や、日常的なつき合いが少ないということから、この点、多少問題がある。これからの遠征についてこのことが一番心配です。

〈Ｉ〉今までの３つの隊は、個人の力量、チーム

の力量と山とのバランス、その間にかなりのゆとりがあったから、あまり緊迫した事態もおこらなかったともいえます。もちろん、多少はありましたが…。しかし、これから大きな遠征をやるのなら事故というようなことも考えなければなりません。これからの遠征はカラコルム、カンチとだんだんとわれわれのチームの力量と山の困難さとの差がちぢまってきています。危険度は高くなっているんですからね。

現在では、カラコルムは充分やれると思っているがその見通しは甘いかも知れない。われわれ個人個人の力、チームの力をはるかに上まわってきて、そこで事故がおきるかも知れない。そういう可能性はある。しかし、私たちの方も能力が上っている。こうなれば、われわれと山との競争ですよ。それがどこまでやれるかということです。カンチまで行きつけるかということです。

そういうことでだんだんと山はむづかしくなって行くので、今までとは違ったチームを作っていかなければならないし、緊急事態の発生のときも考えておかなければならない、そうしないといつか山にまけてしまう。

〈O〉そう大きな金を積んでおく必要はないが初動資金として200万円から300万円の金があれば、すぐ誰れかが行かなければならないような場合もともかくお金だけは困らないしね。

パスポートの発給も時間がかかるので、とにかく万一何かあったら4～5人は出ていけるという体制にしておいた方がいい。少なくとも、Exp研の中心の人は常にそのつもりでいることでしょう。

その点では今までても、緊急の事態のときは誰かがとんではいたけどね。

〈O〉たまた清水さんなど適当な人がいたからいいけれども、いずれにしても、誰かが出ていかなければいけないという覚悟をしておいた方がいいと思います。アクシデントを処理できる能力がある人でないといけないし……。今回だって西郡さん、稲田さん、清水さん全員が出ていったとすると、あと何人もいないように思われます。

〈I〉大変なのは遭難対策というよりも遭難の事後処理ですね。

〈O〉緊急処理本部だね。

〈I〉お金も常時プールしておくのがよいが、必ずしもその必要はないですね。どこかから調達するメドさえついておればいい。

〈O〉しかし、といっても、誰が出すかと迷うだけ無駄な気を使うことになるから、やはり基金という形で積んであるのが理想でしょう。今は幸いに法人化のために国債として若干積んである金があるからいいが、これまではちょっと心配だった。

〈I〉Exp研基金も当初はそのために積み立てたのです。今でも一応Exp研基金は凍結してはあります。基金の集め方もいろいろ問題はありますが…。

〈O〉そのようなお金が一番切実に必要なのは遠征に行く連中なんです。だからＨＡＪ基金にもＥxp研会員から積極的に応募してもらいたい訳です。しかし、現実は冷たいところもある。他の会員は、あの基金は自分のために使ってもらうという機会はほとんどないでしょう。出版のためなどで間接には恩恵をこうむりますが……。

〈I〉ＨＡＪ基金は遠征資金として使えるのですか。

〈O〉使えないことはないです。あの基金には主として3つの用途があります。それは、遠征資金として貸付、緊急事態の処理、会の事業への貸出しです。

〈W〉ただ、今は額が多くないから遠征資金としての一時立替金貸出しはできないのが現状です。

〈O〉これからはＨＡＪの名で遠征に出る人は1人5万円位の金を基金としてデポして行って欲しいですね。この夏出るパミールの隊の人にもいってはありますが…。それは行く人自身のためですからね。Ｈ＆Ｓプランに参加する人もそれは呼びかけてはいるんですが、思うように集まらないのが現実です。これがＨＡＪの会員のつながりの弱い点のあらわれの一つかも知れません。

〈N〉これまでのヌンやガルワールは1人5万円位はデポして行きました。しかし、ヌンの遠征にトラブルがおきたこともあって遠征のために使ってしまったのです。

〈O〉本来なら、遠征が終了するまでは手をつけてはいけないお金ですよ、供出してもらうわけでなく、一時ＨＡＪにデポしてもらうことですから…。この件は会員によく呼びかけて協力してもらわね

ばならないね。

〈I〉私自身も、ＨＡＪ基金の性格がよく分からなかったからちょっととまどった点もあったがそのような遠征にも利用できる。緊急事態も使えるということなら、よくＰＲしてもっと多く集めなければなりませんね。

外国との交流を深める

〈O〉人とのつきあいというものはどこで生きてくるかもわからない。碁のステ石のようなもんでね。例えばクリスマスカードを送るとか、その程度のことでもよいからやっておくべきですね。ＨＡＪのこれまでの多くの人がそうして各国との、人とのつき合いをささえてきたのだから……。Exp研究会としてもＨＡＪとしても今後も考えて行かねばならないことでしょう。ダージリンのＨＭＩとのつきあいも、コーリ氏や副校長のナワン・ゴンブを招待した頃から始まっているのですから…。

〈W〉あまり勢力をつぎ込んでつきあうのも大変だがね。まあ、盆と暮のつき合い程度のことはした方がいいですね。

〈O〉それらのことはこれまでのＨＡＪの弱いところでもあるんですね。単発の隊というか、プロジェクトチームというか、１度行ったら終りとなりかねない隊が多い。アフガニスタンでも５年ほど前に行ってあれから少し切れていた。ＨＡＪ事務局がかろうじてつないでいたといった程度でね。それでも、1976年のワハン隊のときはそのつながりは生き残っていた。こまめにつき合うことが必要だね。理事などを軸にしてね。とても１人や２人ではつき合い切れないし、つきあっておればわずらわしいこともおこるし…。誰の友人の友達だとかいって日本へやってくるし……。

少なくともインドについてはダージリンとウッカルカシ、マナリの登山学校はレパートリーに入れるべきです。

〈I〉つき合いがあれば、いろんなこともたのみ易い。

〈N〉印象がちがうんだよね。

〈O〉ＨＡＪという会があるということを知ってくれるだけでも効果はあります。

〈W〉外国とのつき合いもＨＡＪの１つの使命といってもよいね。

〈O〉とにかく近くに行ったら用事のあるなしにかかわらずたずねてみるということも大切だね。昨年末から今年にかけて西郡さん、伊東満さんがダージリンをたずねてこられたこともその一つだが、あれでまたつながりが濃くなった訳ですよ。

〈N〉そういう意味ではスリナガールだってダージリンだって、友人がいるということで大変助かっていますよね。今までＨＡＪがつないできてくれたからね。人が違って行ってもね。ああＨＡＪの人ですかというようにね、分ってくれるしね。

〈O〉特にExp研の会員が行ったときには、名刺だけでも置いてくるという心掛けが大切ですね。中にはケンカ別れしたという人もあるがね……。(笑)

〈I〉新たにそんなつながりを作ろうとすると、時間とお金がかかるしね。……。

〈O〉もう一つ忘れてはならないコンタクトをしておく機関として、日本山岳協会があります。ＨＡＪは都岳連を通じて加入している訳ですから、もちろん都岳連とのつき合いも大切です。

今までのような海外登山の推薦状の時だけ使えばよいという態度では、やはりあまりいい感じで受け入れられないと思いますね。海外の各機関と同程度以上につき合い、ＨＡＪを知ってもらい、ＨＡＪの実績を示すことも必要でしょう。報告書などもきちんと出して、推薦してもらったことに応えるということも、ＨＡＪの遠征のおさらいをして見るという以上に大切なことでもあるんですよ。

これらのことを完全にやるためにはしっかりした理事会と、事務局が必要でしょうね。とにかく東京事務局の充実は不可欠です。今のＨＡＪは何をおいてもまずこのことを考えるべきでしょう。

〔ヒマラヤ研究XII　EXPEDITION II から再録したものである〕

100号記念座談会

日本登山界とＨＡＪ

日　時　1979年12月21日
場　所　ＨＡＪルーム（東京・高田馬場）
出席者　池田常道（「岩と雪」編集長）
遠藤　登（東京都山岳連盟副会長）
広島三朗（日本山岳協会海外登山委員長）
森田千里（日本勤労者山岳連盟海外登山委員長）
稲田定重（ＨＡＪ専務理事）
・司会　山森欣一（ＨＡＪ事務局長）

時代を先取りしたが……

山森　本日はＨＡＪが登山界で果して来た役割や今後どのような役割を期待するかということでお話し合いをしていただきたいと存じます。始めに専務理事からＨＡＪ設立のいきさつと推移を話してもらいます。

稲田　ＨＡＪが設立されたのは1967年です。当時は、ネパール・ヒマラヤは登山禁止となっておりましたし、外貨枠の規制が緩和されたばかりで、一般の人がヒマラヤはおろか海外へ出ることですら容易ではなかったわけですが、ネパールを訪問した柴田会長がその景観の素晴らしさに感動し、「少しでも多くの人にヒマラヤ（当時はネパール）を見てもらいたい、そして日本とネパールの親善のかけ橋になろう」と言うことで、当時ネパール・ヒマラヤに造詣の深かった人達を名誉会員として迎えて発足したわけです。

数年は、エベレスト、ランタン等のトレッキングを中心として活動し、1970年頃から登山にも目を向け、インドの5,000ｍ級から手をつけ始めました。この頃都岳連に加盟して、1973年のカンジェラルワ（6,612ｍ）初登頂、1974年ラムジュン・ヒマール（6,983ｍ）第２登、1975年リシ・パハール（6,992ｍ）初登頂、1977年コムニズム峰（7,495ｍ）登頂、1978年バツーラⅡ峰（7,730ｍ）初登頂と山の分野では成果をあげてまいりまして1981年のカンチェンジュンガ（8,598ｍ）縦走に取り組んでいます。一方トレッキングのほうでは、1970年頃から、ヒマラヤン・ライブラリーシリーズの出版が始まり、ガイドブック的な役割を果して来ました。トレッキングを行うに当っては、計画をよりスピーディーに行うために航空会社と提携したこともありましたが、そのために山の分野からは会の性格を問題にされたこともありました。

1978年からはヒマラヤ登山学校や単なるトレッキングではないセミナー・トレッキングも企画実行しており、又事務所も東京に移し執行体制も変わって来ております。これからは81年カンチ計画、社団法人化を進める中で、今までのようなＨＡＪ内に向けてのクラブワーク的な面だけでなく、外に開かれた活動も行うようになるだろうと思います。

山森　ＨＡＪが設立された1967年頃登山をやっていた人達はどんな人達でどんな志向をもって動いていたのでしょうか。又その中でＨＡＪのような性格の団体がどうして生まれて来たと思いますか？

広島　僕はその当時ミールサミールへ行こうと思っていましたが、あの当時外国へ行こうとすることですら難しくて、ましてや学生がヒマラヤへ行こうとするのは大変でした。たしかに外貨枠の規制も緩和されてはいましたが、暗中模索の状態だったですね。行く先のこともわからないし、行く方法もわからないという時代でしたから、ＨＡＪは非常に時代を先取りしていたと言えますね。ただそういう意味では外部からみてＨＡＪはエージェントではないのかと思われた性格の時代はもっと早く終わるべきだったのでしょうね。

特殊性とあいまいさ

山森　運営している側としては、まだまだトレッキング隊を多く出す時期だと判断していたのではないでしょうか。そのためには、現地へ入るまでのことは専門家（業者）に任せた方が良いと思っていたのかも知れませんね。

当時ヒマラヤ以外の山はどうだったんですか。

池田　1965年に一般外貨になりましたね。1964年にネパールが閉鎖されてしまって、これからいよいよ自分達がヒマラヤへ行く番だと思っていた人達は、アンデスやヒンズー・クシュに目を向けて積極的に行くようになりましたね。

その時期にトレッキングとはいえ、ネパールを目ざしてＨＡＪが設立されたのは、ある意味では不思議ですし、先を読んでいたと言えます。

日本の登山界ではあくまでも山岳会主義が主流でしたからＨＡＪのような横断的な組織はなかなかなじまないと思いますが、そういう面ではむずかしかったのではないかと思います。ＨＡＡＪのＡをとったのは何年頃ですか。

稲田　Ａをとったのは、1975年です。当時は会員の底辺拡大を計ろうとしていまして、「日本の旅世界の旅」層から「山渓、岳人、岩雪」の層まで全てを対象とした広い底辺の上に、つまりピラミッド状構造の上に先鋭的な部分がなければならない、と言う発想があったんです。いうなれば、トータルなヒマラヤということで活動して行く必要があると思っていた訳です。そこでＡが入ると一般的な山岳会のイメージを受けるということではずしたんですよ。

池田　旅的な層から先鋭の層までという発想が最初からあったかどうかわかりませんが、普通の山岳会組織は逆だと思いますね。確かに一般の山岳会でも奥多摩から北アルプスまでオールラウンドな山登りをしようとは言っていますが、その意味は、奥多摩だけやっている人と穂高の冬をやる人とを会員にするのではなくて、奥多摩から入ってある程度育てて穂高の冬も出来るようにということですね。そういうのとは全く別の尺度をもって会を造ろうとしたのはやはり面白い発想ですね。

又、過去日本にあった横断的な組織としては、ＲＣＣが代表的なものですが、この場合は、的を絞ろうとしていましたよね。或るものに向かって的を絞っていました。ＨＡＪの場合もヒマラヤに向かって集まってきていますが、多様性を始めから組み込んでいますね。何故そうなのか？その辺がユニークなのかも知れませんが、そういう運営をしている中で、カンチの縦走計画が出て来た時には、外から見ていますと、ＨＡＪ自身がある演出をせざるを得ない面がでてくるのではないですか？

山森　遠征の面でも池田さんのおっしゃられるようなことはありましたね。当時の標語は「みんなのヒマラヤ」でしたが「みんなのヒマラヤ」とは何かというと、登山の面では、アイゼンをつけて登ったことがない人も、一度も会ったことのない人も、ヒマラヤに行けば、楽しく一つの隊として登れるだろうということです。そういう性格のあいまいさのまま7,000ｍ級の本格的な登山をやってしまいました。山登りのことを考えると池田さんの話されたように、絞っていかなければならないのに逆にＶの字のように開いていた訳です。

池田　一般の多くの山岳会がある意味ではセクト主義になりつつある時に、風通しを良くする意味ではＨＡＪのような横断的な組織が必要だと思います。そのバランスは重要ですね。カンチもありトレッキングもありで会の運営は大丈夫ですか？

遠藤　ＨＡＪはそうあるべきだと思いますね。カンチもありトレッキングもありというのはＨＡＪらしくて良いと思いますね。

森田　地方の人達は、ヒマラヤを志向していても自分の会としてはやれないということもあって、ＨＡＪの果した役割はあった訳なんですが、これは高く評価していかなければならないと思いますよ。

普遍的性格が必要

遠藤　ＨＡＪが都岳連に入る時にも反対はあったんですよ。しかし、ヒマラヤを志向している人達が集っている会を都岳連の組織に入れなければ、どこの岳連にも所属できない人は結局ヒマラヤには行けないということで、ヒマラヤに行きたい希望を持っているのなら行ってもらおうと思って私は強力に推せんしました。

広島　既成の組織と違うことをやろうとするところにＨＡＪの存在意義があると思いますね。

池田　ヒマラヤサロンという性格と登山の性格を併せて運営して行くことが両立して行くことが出来ることなのかどうか。常識でいえばむづかしいと思いますが、外部から見ていると興味がありますね。

広島　ＨＡＪはもっと登山の文化的な面をやるのが良いと思いますね。スポーツ的なこと以外のものが表に出てくる研究会を多くやってもらいたいと思いますね。それが又全国的な組織として今後伸びて行く要素になりそうですね。

山森　森田さん、労山の中のヒマラヤという面だけをとり上げてみますと比較的ＨＡＪの組織と似かよっていると思うのですが、どういうとらえ方をしていますか。

森田　そうですね、同じような経緯が見られますね。例えば、エージェントみたいなという面で考えても、'71～72年頃大量の人達をヨーロッパに送り込んだ訳です。そのことは登山の大衆化ということで登山を文化的にとらえていた訳です。ただ、ヨーロッパへ行くということだけをとらえるとそれを労山でやりますと、どうしても金銭的なものがからんできてしまいますよね。組織の運営の中では金銭的な面では失敗できないですからどうしても、重点的にやらざるを得なくなりまして、それ以外の仕事が出来なくなって来た訳です。必要なことだからやって行きますが、その面は労山から切り離した訳ですね。

広島　日本人は金銭がからむとどうしても悪いことをやっているような感覚にとらわれがちですが、エージェント的でも多くの人達を送り込む方が大切ですね。海外登山でもまだまだ段階論が見られますが、そういう面を崩して行くという面ではきわめて良いことですよ。

森田　ＨＡＪの果した役割はやはり情報をすぐに印刷物にして皆さんに提供してきたことにあると思います。

池田　ＨＡＪだけのヒマラヤということでなしに、日本人のヒマラヤとしてとらえてもらいたいと思いますね。ＨＡＪの外にもヒマラヤの知識をもった人や権威のある人がいる訳ですが、その人達も引き寄せるような魅力ある会になってくれば新しい組織の在り方として注目されますし、現在の山岳会的な組織から脱却できると思います。現在はまだＨＡＪのヒマラヤという性格が強く、会員外との交流が少ないと見ています。

広島　そうですね。登山の文化的な面からヒマラヤ全体を見るようになってきますとそこにはある普遍的な性格が必要になってきます。普遍的になればそこに所属しない人も恩恵を得られるような団体になるべきだと思いますね。単なる山岳会になってはいけないですね。

今迄果してきた役割は非常に大きなものがあります。特にヒマラヤに行きたいと思っていた地方の人達にヒマラヤの良さを知らしてきた訳ですからね。

山森　会員の地域別の構成を見ましてもやはり、東日本方面が多くなっています。

尾形　ヒマラヤといえばまだまだ中央集権的な性格があった時代に、地方にいて情報が欲しいと望んでいた人達にとっては、ＨＡＪの啓蒙が果した役割は大きかったですね。それ以上にみのがせない功績は、渉外能力ではないでしょうか。単一の山岳会ではなかなか入れない例えば1974年のネパールのラムジュンですとか、或いは1975年のカシミー

ルのヌン・クンやガルワールのリシパハールなどにも渉外能力で入っています。そう考えると単一山岳会では行けない所でもＨＡＪでならなんとか入れるのではないかという魅力はありましたね。

組織と人と…

稲田　地方では情報不足も確かにありましたが、それ以上に岳連の体制下の中では行けなかった事の方が大きかったと思います。その時ＨＡＪを足がかりとして海外に出ていった人達が積み重ねた結果がＨＡＪの体質を変えてきた要因でもあると思います。それは一方は非常に切実な要求をもって遠征の場をＨＡＪに求めていたのに対して片方はまるっきりの仲よし会だったからです。

山森　ＨＡＪが岳連のような組織とは違うことははっきりしているのですが、ＨＫＴ（ヒンズー・クシュ、カラコルム会議の略）が実質的な活動を中止するようになったのはＨＡＪとしては参考にしたいと思います。

池田　ＨＫＴは委員の方に本来やりたかったことと違う方向になっているのではないかという意識が出てきた時にＫ２が始まって、ゆれているうちに最初のものを忘れたのじゃないかと思いますね。

広島　ヒンズー・クシュ、カラコルムに行きたいと言っても、本当にそこだけに行きたいのではなくて、ネパールでもインドでも良い訳ですよ。そういう人達がカラコルムへ行こうとしたらＨＫＴの集会がある、そこへ行って情報を仕入れてこようという事ですよね。カラコルムやヒンズークシュが珍しい頃はそれでも多少は良かったかも知れないんです。それを何回もやっていると委員の方もバテますし、委員は本当にパキスタンの奥が好きでやりたいんだけどできない。そこで仲間だけで研究会をやろうと決議したんだけれども次が始まらなくなった。呼びかける側にも問題がありますし、徐々に新陳代謝がなければダメですね。

池田　Ｋ２ショックではないですか。ＨＡＪも、カンチをやる人とＨＡＪを運営している人とを分けておきませんと悪く言えば、カンチにあらずば人にあらずとなってしまう恐れがありますね。

山森　池田さんのおっしゃるように現実的には、カンチとＨＡＪの総合企画をやっているのは同じ人間になってしまいました。これはＨＡＪ全体の将来を考えると良いことではないと思っています。広島さんのお話しのように組織としては新陳代謝がなければいい発想も生まれてきません。また、組織運営をオーバーラップさせないで、良い発想を継続させていくためにはどうしてもしっかりした組織にしなければいけないということで社団化へ傾斜して行った訳です。

稲田　社団化につきましては一つには運営の方向性にタガをはめて、あまり逸脱したことをしないようにしたいということと組織としての体面を保たなければならないために永続性が問われてくるということで考えています。

池田さんや広島さんのお話しに示唆されるところが多いのですが、確かに組織は人だと思います。また永続的な事業も必要となって参ります。その中心にヒマラヤ研究所を考えております。人と機能の２つの面で社団法人を運営しようと思っております。

ヒマラヤ研究所は情報管理を主たる仕事として行きたいと思っています。池田さんのお話しにもありましたようにＨＡＪ外の英智を結集するような努力が必要だと思います。情報管理の方法としては一つにはモニター制を考えています。その他２～３名の常駐するスタッフを置きたいと思いますし、多くの人がヒマラヤに行っているこれらの体験を体系的にまとめて、それらの結果を各地で開催する研究会にフィードバックして行きたいと思っています。

池田　そうですね、現在では直接的な情報を求める傾向が強くなっていますし、その結果知りたい情報を得るとそれだけで全てを知ったような錯覚にとらわれ易いようです。

ヒマラヤ登山の全体を考えれば、基本的な情報センターさえキチンとしていれば、その年々変動する事項なんかは、大騒ぎしなくても良いと思います。そういう意味でも基本的な資料センターが欲しいですね。

日本唯一の専門団体として

稲田　研究所は蔵書数を誇るというのではなくて蔵書を動かして、どういう情報を造って行くかが大切です。生きたルームを作りたいと思うのですが実行する手法はむづかしい。

池田　蔵書も市販されていて一般的に入手可能なものよりも、例えば登山報告書等を集められれば大変有意義な資料となりますね。

ネパールの登山学校はユーゴが支援していますが、日本は彼らにしてみれば、もっとやってくれてもいいんじゃないかと思っている訳ですね。そういう意味でも交流という時はギブ・アンド・テイクでいかなければダメですね。

森田　日本の登山界がまとまって行動するようなことを考えていかなければユーゴのように国をあげて当たるところにはかなわないですね。

稲田　実は今年ネパールから登山担当のシャルマ氏に来日してもらい北は北海道から南は九州まで５ヶ所で講演、研究会を開いた訳ですが、これなども渉外、交流の一環と考えています。ただ登山許可をお願いするということではなく、相互に交流しながらお願いする所はお願いしていきたいと思っています。今年はインドを予定していますし将来はヒマラヤ関係諸国６ヶ国のメンバーに一堂に会してもらって討議するようなことも考えています。

遠藤　日山協は公式な団体として動きにくい面もある訳ですが、その辺をＨＡＪが補充してくれるといいですね。

森田　ＨＡＪはいろいろな団体に気軽に呼びかけられる体質をもっていると思いますので、そういう時は呼びかけてもらいたいですね。

稲田　これからのＨＡＪは、みなさんのお話しにありましたように、ヒマラヤを対象とした日本で唯一の団体として、ＨＡＪ外の協力も得てヒマラヤ登山文化の中でヒマラヤを目ざそうとする全ての人々が利用できる情報・データの蓄積と提供を行い、ヒマラヤ諸国との交流の面でもより一層の充実を計って行きたいと考えています。そのためにも一刻も早く組織の充実を計り人材についても皆様の協力を仰いでいきたいと思っています。このためにも、社団法人化を当局のご指導の下に早期に実現させたいものと考えます。皆様の益々のご協力をお願い致します。

山森　本日は不充分な司会でまとまりのないものとなり申し訳ありませんでした。皆様の貴重なご意見を参考にこれからの会運営に当って参りたいと存じます。本日はお忙しい中を本当にありがとうございました。これにて座談会を終ります。

［ヒマラヤ100号／1980年３月号　から全文を再録したものである］

200号記念座談会

21世紀のヒマラヤを語る

1988年ゴールデン・ウィーク

三国合同チョモランマ／サガルマータ友好登山隊の狂騒曲がテレビを賑わしているゴールデン・ウィークの最中、ヒマラヤの高峰登山に造詣の深い７人の侍にお集り願い、「21世紀のヒマラヤ」について語って頂いた。21世紀まであと12年、果してその頃、登山界は、ヒマラヤ登山は、ヒマラヤ諸国の情勢は、等々、一体どうなっているのであろうか、ヒマラヤ登山を取り巻く21世紀の展望を様々な角度から大いに語って頂いた。

尚、東北、関東、中部、東海、関西の各地からお集り頂いた〝７人の侍〟に忌憚のない発言を頂く条件として、司会者は覆面記事である事を強要されました。司会進行上、これを飲まざるを得ませんでした事をご了承願います。

日本の登山界の現状

司会　先ず、21世紀の展望を語って頂く前に、日本の登山界の現状を語って貰いたいと思います。登山の多様化が叫ばれて久しくなりますが、日本のヒマラヤ指向の登山者はどの位いるのでしょうか。

G　高齢者の登山者もヒマラヤのトレッキングなどへ出かけるけどこれもヒマラヤ指向と見るの。

D　そこ迄含めると摑みきれないし、限りがないからここではヒマラヤの高峰登山を志す層を考えるべきではないかな。

C　山岳会の長期凋落現象が憂えられているが先ず、組織登山者の中から冬山登山者人口を見てみるのが手っ取早いでしょう。

A　（社）日本山岳協会（以下日山協）の登録会員数は、この日山協の「登山年報－1984年」を見ると75,000人位いで横ばいと推定されているが、重複加入もあるので実際はその半分位だろう。この内、日山協の山岳共済加入者は8,896人（日山協「登山月報」221号）と云うことだからその加入率は約23％となっている。この山岳共済加入者の約9,000人は冬山へ出かける登山者とみなして良いのではないかな。

B　日本勤労者山岳連盟（以下労山）加盟の登山者も日山協と同数位なの？

C　そんなに居ないんじゃないの、少し古いけどこの「山と仲間」（№166号）を見ると、『遭対基金の対会員比加入率が37％で約5,900人（1983年６月末現在）となっているから、労山加盟の登山者は約16,000人と云ったところでしょう。

司会　そうすると、日山協、労山に加盟している組織登山者人口と云うのは約54,000人と云うことですネ。

F　未組織登山者数はどの位でしょうか？

C　会社の職域山岳部や大学などの同好会、未加盟山岳会でどの位になるかなあ〜、ほぼ同数（組織登山者と）とみてはどうかな。

司会　そうしますと日本の登山者人口は54,000人の倍で108,000人と云う事ですか？　山の用具専門店さんなどの発表数字とは２桁違いますネ。

C　小売店さんの方は、登山者数と云うよりも購

買者数と云う事でしょう。1年に1回しか行かないような人でも必要なものは買うのだから、数字としてはそんなもの（登山者が約10万と云う事）じゃないかな。

司会　そうしますと日本の冬山登山者と云うのはこれに先程の山岳共済などの加入率を掛けてみれば良いのでしょうか。

A　労山のは遭難基金と云う事でかなり加入率が高いですが、この数字を掛けてしまうとかなりの登山者数になってしまい、現状とかけはなれてしまいそうだ。山岳共済だって義理で入っている人も居るから掛け率としては20～30%位が妥当ではないか。

司会　108,000人の22%と云うと23,760人ですネ。展望を語って頂くのには少しでも多い方が明るく開けると思いますのできりの良いところで日本の冬山登山者人口は約25,000人と云う数字で如何でしょうか。この人達がヒマラヤ指向を持つ可能性を秘めた登山者と推定される訳ですネ。この数字もかなり独断と偏見に満ているような気もしますが、兎も角、土台がなくては先を語れませんからこれで進めさせて頂きます。

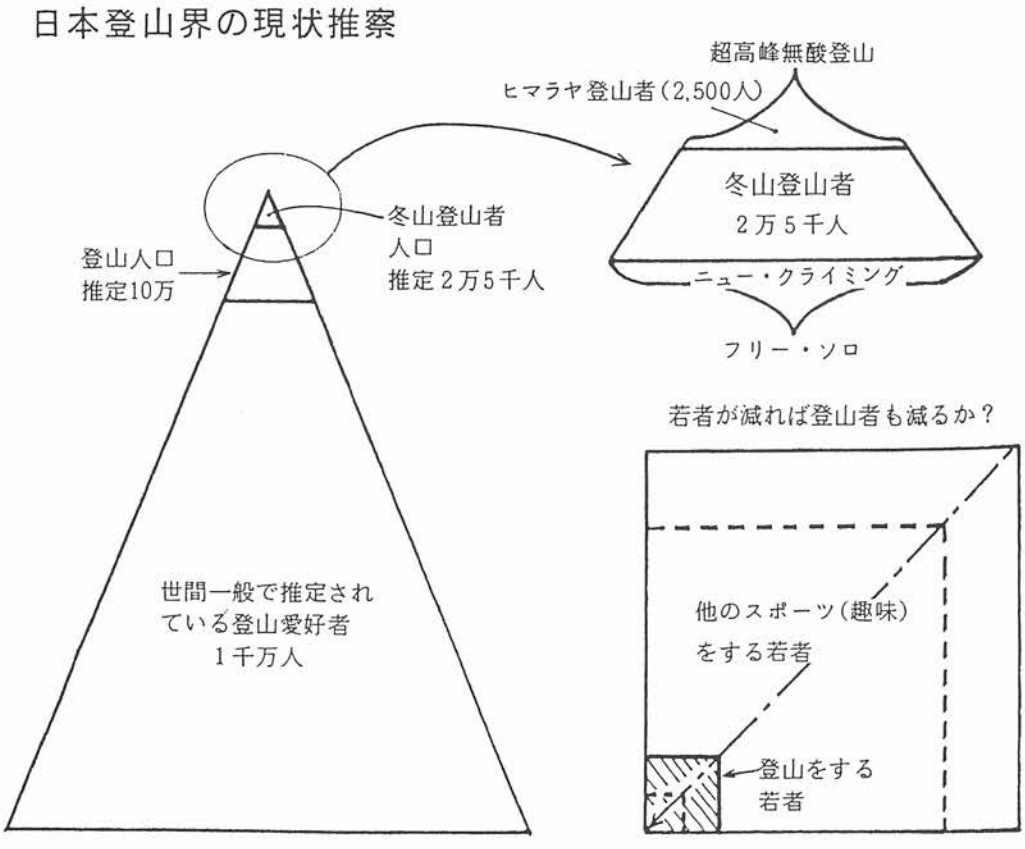
司会　それでは次にこの冬山登山を実践する登山者の内、どの位の人がヒマラヤを目指すのでしょうか。

F　それは最近のヒマラヤ登山の入山者数から推定するしかないんじゃない。

A　ＨＡＪの資料では1980年～87年の8年間に6,000m峰以上のヒマラヤ登山に出かけた人は、合計3,454人。ネパールのトレッキング・ピークなど若干のデーター収集洩れが仮に1割（そんなにある筈ないが）あったとしても延べ人数で約3,800人と云ったとこであろう。

司会　そうしますとこの3,800人の内、8年間に複数出かけた人が何人居るかと云う事ですネ。

D　東京あたりではヒマラヤ・ニストの固定化現象（行く人は何度も出かけると云うこと）が見うけられると聞いてるけど……ＨＡＪの人達も行く



人は何度も出かけているネ。

A　然し、全体から見ればまだごく一部の人達でしょう。感覚的に見て65～75%と云ったところじゃないの。

G　ＨＡＪの「獲得トータル標高」のデーターファイルでは分らないの？

C　あれはご存知のように頂上に登らなければファイルには載りません。誰かさんのように何度行っても頂上に立たないと載せて貰えないの（笑い）

司会　3,800人の65%と云うと2,470人、75%と云うと2,850人ですから、そうしますと先程の冬山登山者数が約25,000人と云う事でしたからその内約10%がヒマラヤ登山に向っていると推定してよろしいでしょうか。

A　このヒマラヤ登山者約2,500人の中から、ここ８年間の平均では、毎年60隊、350人がヒマラヤへ出かけていると云うのが現状かな。

21世紀のヒマラヤ登山者は

司会　21世紀にはこのヒマラヤ予備軍とも云うべき冬山登山者人口は増えるのでしょうか？それとも減少していくのでしょうか？

E　我々が山登りを始めた昭和30年代後半や40年代前半にあの頃山をやってた若者の兄弟数は何人位だったかな、少なくとも現代のように平均１～２人と云う事ではなかっただろう。子供が減ってくるんだから当然、山をやる者だって減ってくるヨ。

G　確かに５人兄弟、６人兄弟は排卵誘発剤でも使わない限り見られなくなった。少ない子供を大事に育てる傾向が強まる中で、マイナーな山登りなどは益々敬遠されていくのか……

C　逆に大事にされ過ぎて山に走ると云う事も考えられるのではないかな。昔、谷川岳遭難者の検死を一手に引き受けられてた水上の石川医師（故人）が「文芸春秋」に書かれてたのを読んだ事があるが、『谷川岳遭難者の統計を見ると、遭難者の殆どが１人っ子、女の姉妹の男１人、長男、と云った人に見られる』と述べられていた。

A　それは遭難者の話じゃないの、大事にされ過ぎた奴は脆いと云う……。

F　子供の絶対数もさることながら、今の社会人山岳会や大学の体育会系山岳部の凋落振りをみる限りでは、現状より増えるとは考えられないのではないかな。

E　それは今の若い者が組織に束縛される事を嫌うからだよ。確かに登山者の絶対数は減ってるのかも知れないが、山岳会などに属さない未組織登山者が増えてるんじゃないかな。要は山岳会などの在り方の問題だよ。

司会　山岳会などの在り方につきましては後でまたじっくりとお聞かせ頂きたいと思います。

D　大学進学率の高まりと共に現在の偏差値教育はこのまま一層と加速されていくんだろうか？そうなると一生のうちで身体を鍛練するのに一番大事な時に汗をかかなかった者が、大学に入ってから山登りのような行為をするだろうか、否、したくとも体力が伴わないために諦めてしまうのではないだろうか。

C　然し、そう云う暗い話になったら、それは単に登山に限らずあらゆるスポーツ種目についても云えるんじゃないの。日体協のスポーツ団体が21世紀のスポーツ界の展望をそう暗くは捉えてないと思うよ。逆にオリンピックの隆盛と共に益々明るく発展すると思ってるんじゃないかな。暗く沈んでいく考えになるのは我々自身が登山がマイナーな行為だと思ってるからだよ。

A　文部省だって莫迦じゃないから偏差値教育一遍倒と云うのは見直されていくだろう。現に今年の東大の定員割れで浮足だってんじゃないの。

司会　具体的に21世紀には大学生などの若者はどの位の数になるものなんでしょうか？

A　文部省の予測データでは、受験人口は、1992年の205万人をピークに減少、2000年には151万人にさらに2005年には133万人まで落ち込むとされている。大学進学率を現在の31～32%とすると、1992年の進学者約64万人が、2000年には47万人になる勘定だ。こうなると大学山岳部が云々などと云うよりも大学そのものが冬の時代を迎えると云えそうだ。

司会　そうしますとやはりこの絶体数の減少からみて21世紀のヒマラヤ登山人口はかなり減少してしまうのでしょうか。

C　そうなってしまっては、先の暗い話になって

しまう訳で、ヒマラヤの魅力に取り憑かれてトチ狂ってきた者としては寂しくなる。絶体数が少なくなるんであれば、埋もれてるヒマラヤ指向者の掘り越しなど、現時点から積極的に啓蒙活動などを展開していく事も我々の役目ではないのか。

B　誰かさん達のようにまわりに余りにも生活を犠牲にしてヒマラヤにトチ狂ってる人を見るとかえって逆効果になるんじゃないの。(笑い)

F　文部省登山研修所で発行している「登山研究」(Vol. 3) に高校の登山活動に関する調査報告が載ってるんですが、これをみると、調査対象校1,583校のうち、回答のあった学校は1,333校で、回答率は84.2%であったと云うんですが、この1,333校のうち登山活動を実施している学校が515校(38.6%) でこのうち部員数が11～25人のところが約50%あると報告されている。この数字をどう捉えるかですが、この515校だけで約7,000人の高校生が山登りをしているんですヨ!　これは明るい材料じゃないですか。これこそ21世紀の金の卵じゃないかな。要はこの金の卵をどう育てるかでしょう。

B　山岳部の顧問と云うのは自分も一緒にフィールドに出て汗を流さなければならないし、ひと度遭難事故でも起せば裁判沙汰になって自分の一生を棒に振りかねない、と云ったリスクがあるため仲々なり手がいないと聞いている。その結果、登山経験の殆どない新任教諭が顧問に据えられる、と云うのが多いんじゃないの、尤もこれは僕らの高校山岳部時代の経験だけどネ、然し、今も余り変りないような気もするけどね～、それでは折角の金の卵も孵化しないで終ってしまうでしょう。全くもったいない。

A　竹下総理の私的諮問機関であるスポーツ振興委員会は、先にオリンピックで金メダルを取るにはどうすべきか、と云う事を基調とした内容の答申案を報告したが、その中の学校教育でのスポーツ指導の項で、教職員でフォローできない専門コーチ等に地域の民間人を活用、と記されていたが、山岳部などは正にそれで、登山経験の豊富なその地域の人に指導を委ねるべきであろう。そして国体競技に踊らされて真の登山を忘れてしまうようなことのないよう正しく指導して貰えば、やがてはそれがヒマラヤの高峰に翔くようになるだろう。

E　それにしても38.6%の実施率と云うのは少ないんじゃないの、野球、サッカーなどはこんなもんじゃないでしょう。

B　それは今にはじまった事じゃないでしょう。この数字をなんとか上昇させるような啓蒙活動が必要なんじゃないかな。観客不在の地味な登山なんて黙っていたら益々食わず嫌いの食べ物のように若い人は離れていくんじゃないかな。最初のとっかかりと云うか、兎も角、一度は山に足を運ばせてみるような、登山の面白さを語っていかないと駄目だよ。

G　と云うことはそれ以前に小中学生の子供達を野外に連れ出して自然の良さと云うか面白さを味わわさせてやる事が大切だネ。お父さん方はこんな所で酒を飲んでないで、明日は子供を連れて奥多摩でも丹沢でも出かけなきゃいけないよ。それが21世紀のヒマラヤ登山の布石になるんじゃないの。

E　二代続けてヒマラヤにトチ狂ったら奥さんに何んて云われるの。(笑い)

F　こう云う高校生達には夢を与える事も大事じゃないかな。○○さんには山やに勲章はいらないと叱呵られそうだけど、やはり登山界にもスターを作り上げる必要があるんじゃないの。

E　ヒマラヤ登山では差当って山田 (昇) さんの様な人ですか？

F　山田君は今の人だよ。10年後は三枝、小西、早川など今8,000m峰を一つか二つ登っている若い世代だよ。

G　ある人が、山田は本を書かないから駄目だ、と云ってたよ。いくら講演会で話したってその話はせいぜい1,000人、いや500人位かな、まあ、その程度の人にしか伝えられない。然し、本は何万人と云う人に読んで貰えるんだから、ヒマラヤの素晴らしさを書き綴れば、それだけ多くの人にアッピール出来るんだから本は是非書くべきだ、とね。

E　本が何万部も売れたらいいけどね。(笑い)

B　確かに我々が山を始めた頃にはボナッティー、テレー、レビュファー、リバノス、ヒーベラー……と云った連中の本に少なからず影響を受けたんじゃないの。それを考えればやはりヒマラヤに引きつ

けるような本は書くべきだネ。

C　何かの手段を使いながらヒマラヤの素晴らしさをどんどん訴えていく必要はある。

E　○○さんは地方新聞を私物化？　してヒマラヤの記事をじゃんじゃん書いてアッピールしてるじゃないですか。

A　栄光と悲劇を一緒にじゃなくて、何んとか栄光だけにして貰いたいネ。

F　本もそうだけど、感動に震えるような山の映画もないネ。これからはやはり映像によるアッピールがいいんじゃないの。

E　山の映画じゃ腰を上げてくれるところがないんじゃないの。

F　例えばレーザーディスクの環境ビデオなんかでもいいんじゃないかなあ〜。音楽を聞きながらヒマラヤの大自然を観賞するなんていいと思うよ。

国内合同の推進

司会　先程、山岳会の組織の在り方について発言がありましたが、只今のヒマラヤ指向者の掘り越しなどもからめまして、どうすれば21世紀のヒマラヤ登山が開けていくのか、その辺りのところを語って頂きたいと思います。

A　昭和30年代に〝3人寄れば山岳会〟などと云われて雨後の竹の子のように創られた山岳会が今、創立30周年を迎える時期に来ている。30年もたてば会の創立趣旨が現状にそぐわなくなってきても当然だろう。例えば〝他会員との山行を禁じる〟と云う会は結構多かった。第2次ＲＣＣ結成の初期にはこの会則に縛られ〝隠れＲＣＣ〟のメンバーもかなり居たと聞く。どう云う訳か登山界と云うところは上部団体の岳連などもそうであるが、「縦割り構造（組織）」が好きなようだ。横への連帯を何故したがらないのであろう。おらがお山の大将で居たい人が多過ぎるんじゃなかろうか、然し、現状の長期凋落振りをみる限りでは、横に眼を見開かず、おらが、おらがと会旗にしがみついて閉塞していくようなとこは、一層会員の高齢化が進み、ついには登山活動とはほど遠いサロン化した会になっていくのではないだろうか。ここで山岳会はどうあるべきかを語るつもりはなかったが変な話になってしまった。ここで云いたかったのは、これからのヒマラヤ登山は国内合同の形が一層増えていくだろうと云う事である。

G　国内合同と云うのはどう云う形？

A　マスコミが好んで使う〝寄せ集め登山隊〟と云う奴さ。

E　確かに現状をみる限りでは、単一山岳会に依る遠征隊派遣と云うのは益々困難になるだろうと云う事は容易に予測される。ヒマラヤ登山をより活性化していくには、各会に1人、2人居る金の卵を結束させて国内合同を推進していくべきだろう。

G　ヒマラヤへは行ってみたいが1人では……、と悩んでる金、いや銀でも銅でも良いが、その卵らにこう云う方法もある、と云う事を知らしめていく事は必要だ。

C　有機的に横のつながりを求めていくのも判るんだけど、余り横の鎖が太くなると山岳会に入ってる意味がなくなっちゃうんじゃないの。21世紀には日山協も個人加盟になってＪＡＣ（日本山岳会）のような支部制にでもなるのかな？

E　どのような形になるかは別にして正会員46人と云うのは、衆議院議員選挙の1票の格差のような問題もあって、いずれ是正されていくんじゃないの。

F　これからは、一層会のオリジナリティーが問われていくんじゃないかな。会としてのバッグ・ボーンがしっかりしていないところはどんどん淘汰されていくんじゃないの。

E　寧ろ、似かよった会どうしが合併していったら良いんじゃないのかな。それこそ山岳会の国内合同だよ。

司会　国内合同の推進から山岳会談義になってしまいましたが、国内合同の推進にしても山岳会の運営にしても詰まるところはマン・パワーの問題になろうかと思いますが、オルガナイザーの養成はどうでしょうか。本日お集まり頂いた皆様は各地域やそれぞれの立場、立場でオルガナイザーとして70年代〜80年代のヒマラヤ登山を牽引されてきた訳ですが、21世紀を迎える時は皆さんも50〜60代と云うお齢になりますが、後継者の方はどうですか？

C　21世紀と云うとあと12年後か、今の20代と云

うとうちの方じゃ居ないなあ〜

E　○○さんは、日本のヘルリッヒコッファーとして70（歳）になっても隊長を降りないんじゃないの……。（笑い）

C　唯、このへんの世代交替と云うのは仲々難しくて、タイミングが悪いと重荷だけかぶせてしまう形になって折角、盛り上りつつある気運も潰しかねないからネ……。

B　21世紀にはオルガナイザーなんていらなくなんじゃないの、気のあった者どうしが出かけていくような個人山行スタイルになっていくんじゃないかな。強いてオルガナイザーと云うのであればそれは旅行エージェントだよ。

G　然し、日本は広いし、世界はもっと広いよこれからは今迄余り活発でなかった県や国からも出てくるんじゃないの、そこに有能なオルガナイザーが居れば……。

E　ここ20年位の間、余り変りばえのないところは、これから10年もそう変わる事はないと思うよ。そこに芽ばえた新たなコアもオルガナイザーとして手腕を発揮する前に嫌気をさして国内合同の方に結ばれてしまうんじゃないかな。

E　オルガナイザーと云う事であれば、これ迄70〜80年代にかけて数多くの遠征隊を送り出してきたＨＡＪ、カモシカ同人、イエティ同人、山学同志会、群馬岳連、カトマンズ・クラブ、労山、ＪＡＣ、ＡＡＣＫ……などが21世紀にはどうなっているかを語ってみては？

G　私が云うのもおこがましいのですが、ＨＡＪは繁栄の一途です。（笑い）

（これについては種々ご発言がありましたが、当り障りが有り過ぎると云うことでオフ・レコとされました。）

コマーシャル・エクスペディション

司会　どうもお話を伺ってますと現有勢力の将来は余り明るいとは云い難いようですが、また新たな時代に即応した組織なりオルガナイザーが出現するのでしょうか。

G　今後は、冬山10年やってそれからヒマラヤへ行くような人は少なくなってくるんじゃないかな。今後の経済情勢や給与水準を推測しても経済的には20代前半の若い人達でも気軽にヒマラヤへ出かけられるようになるのは確かであろう。そうなると己れの技術、経験と云うよりも休暇、費用と云った面からヒマラヤを捉えてくる人が増えてくるだろう。そしてそれを見越したコマーシャル・エクスペディションが増えてくるんじゃないかな。

B　今、ヨーロッパのパーティに見られるエクスペディションが漸く日本にも広がってくると云う事？

A　これ迄もこの手のコマーシャル・エクスペディションは日本でもやってこられたけど、もっと幅広いコマーシャル・エクスペディションになっていくんじゃないかな。

B　ハウザー・エクスペディションやウィンクラー・エクスペディションのようなもの？

A　そう、1〜2人のガイドが10人前後のお客さんを連れてヒマラヤのベース・キャンプに入り、10人の内、何人かは山に登り、何人かは写真を撮り、絵を描き、何人かはバイクやラフティングを楽しむと云ったバラエティーなチーム構成でヒマラヤを楽しむ。

G　ヒマラヤン・キャンプなんかも多くなっていくんじゃないかな。

A　国際パミール・キャンプのようなもの？

G　そう、例えばインドのネルー登山学校やマナリの登山学校でやってるアドヴァンス・コースのようなものを実施するの、受けるんじゃないかな、夏休み期間中にガンゴトリのタポバン辺りにベース・キャンプを設けておいて、ケダルドームのスキー登山コースとかシブリンの岩登りコースと云った何コースかを期間中に開設する。旅行エージェントはキャンプ迄送り込み、キャンプでは高所登山のインストラクターがコース別に指導案内する。要するにヨーロッパ・アルプスでやられてるようなガイド登山の中でヒマラヤの高峰登山を体得していくやり方。こう云う登山も出てくると思うよ。

D　インドの場合、エントリー・ビザの問題がそれ迄に解消されていれば、これはポピュラーになるでしょうネ。

B　然し、そう云う便利主義に走りきったものは登山と云えるのかい。これからは益々〝自然に還れ〟と云う事が叫ばれてくるんじゃないだろうか。

一部かも知れないが国内の山でもヒマラヤでもドテッとした味のある山登りがまた見直されてくるんじゃないかなあ～

A　それは歳を取った人達のノスタルジアでしょう。これからの若い人達にそれを期待するのは難しいんじゃないかな。唯、素晴らしい事は素晴らしい事として語り継いでいかないと駄目だネ。云っても無駄だからと鼻から諦めてしまってはいけない。反応や結果はどうあれ語りかけると云う事は大切だよ。

C　ヒマラヤ登山の大衆化現象がさらに広がると云う事かな。

F　今もそうだけどあと10年位は今の3つのパターンでいくんじゃないかな。即ち、1つはヒマラヤの高峰に憧れてほんとうに登りたくて出かけるタイプ。これはより少数精鋭化してイージー・ルートの無酸素アルパイン・スタイルじゃなくてより困難なルートのスピード・クライムへと走っていくんじゃないかな。2つ目は、兎も角、ヒマラヤへ行ってみたいと云うタイプ。自分で隊を組織して仲間達と出かけると云うのは減少の一途で、それらの煩わしさはお金で解決するむきが多くなり益々コマーシャル・エクスペディションに拍車をかけるようになるんじゃないかな。3つ目は、これからの時期にと云われるかも知れないが、ナショナリズムを掲げたビッグ・エクスペディションも無くなりはしない。今迄にヒマラヤで名を聞かなかったような国の遠征隊が出てくるんじゃないかな。この間のインドネシアのような国の登山隊が……注目されてる韓国の中国登山にしてもそうだろう。このテレビでやってるようなイベントものもこれで終り、これで終りと云いつつ厭もせずにいろんな事がやられてるのと同じだよ。多分21世紀になってもこの手のお祭り騒ぎのイベントは繰り返されると思うよ。

A　今の例のコマーシャル・エクスペディションは、登山者が高い費用を払って登山以外の余分な雑事から逃げたいという事だと思うが、逆に自分達の費用を外部から調達して来て、隊員の個人負担金が10万～20万円という夢のような登山を続けているタイプも、コマーシャル・エクスペディションに入れるべきじゃないかな。

D　そういうタイプは、登山から外す方がいいんじゃないかい。

E　外す訳にはいかないよ。頭の方はコマーシャル・エクスペディションかも知れないが、参加する若い連中にとっては、望んで個人負担金が安くなったのではないのだから。

C　余談になるけど、そんな登山では頭の方はグリーン車まで使うらしいよ。

A　自分の金で登山の費用を賄うのなら、弁当出そうが、グリーン車に乗ろうが、隊の合意なら問題ないだろうけど、外から調達した金で登山をやろうとするのに、それはないんじゃないかい。やっぱりこれも登山なのかなあ。

F　これは、コマーシャル・エクスペディションでなく三つ目のビッグ・エクスペディションそのものだよ。ビッグ・エクスペディションは、登山の中味がビッグなのではなく、鳴り物入りということでしょう。

A　やはりそれは、登山から外した方が良いのじゃないかな。いずれにしても鳴り物入りというのは、一般の岳人には関係の無いところで発想され、一部の特殊な人達のイベントだもね。

F　山を対象としている限り、登山から外せないし、ビッグ・エクスペディションは無くならないと思うね。

21世紀のヒマラヤを取巻く国際情勢は

司会　21世紀のヒマラヤ諸国の情勢はどうなるのでしょうか？　ネパールの立憲君主制はそのままでしょうか？

C　国民総選挙の度に反王制派が優勢なんて報道されるけど、今のシステムで王制がひっくり返る事は先ずないんじゃないの。北と南の緩衝国としてのバランスが崩れた時には大国のちょっかいでどう転ぶか判らないけど、まあ当分は現状のままいくんじゃないかな。

A　21世紀には、ランタン谷入口のシャベルベンシから中国のジィーロン（吉隆）に抜ける中ネ友宜道路やムスタンのロー・マンタンからカンパ・ラを越えてゾンパ（仲巴）に抜ける中ネ友宜道路がオープンするんじゃないかな。

司会　ムスタンのロー・マンタンはオープンされ

ると云う事ですか？

A　ロー・マンタンもドルポもオープンされるよ。

D　ジィーロンやカンパ・ラがオープンするんならシッキムからヤートン（亜東）に抜けるルートをオープンされるんじゃないかな。

司会　と云う事はチョモラーリが中国側から登られると云う事ですネ。

A　21世紀の注目される未踏峰はカンリンポチェとチョモラーリの登頂だよ。

司会　ナムチャバルワやガンケルプンスムは残されてませんか。

A　残ってる訳がない。

D　ガンケルは今のブータンの観光政策からみて向う10年位は凍結されるんじゃないかな。

司会　未踏峰の話が出ましたが、そうなると7,000mの未踏峰は殆ど残ってないと云う事で、今度は6,000mの未踏峰ですかネ。

A　チベットに関して云えば、チベットの6,000m峰と云うのは仮りに未踏峰だったとしても魅力はないよ。そうでしょう4,000～5,000mの大地にピョコンとあるような山なんだから。

F　インドのインナー・ラインが変更され、バドリナートの先の中印国境の山々がオープンになる。（といいねと云う希望）カメット、マナ、チャウカンバ、ニルカンタ……等いい山があるからネ。

司会　ナンダ・デヴィ、サンクチャリーはどうでしょうか。

C　向う10年はやはりクローズじゃないの。東のアルナチャル・プラデシュや西のアクサイチンに於ける中印国境問題も現状のまま。

司会　印パ問題はどうでしょうか？

C　シアチェン氷河での印パの小競合はこれからも続きながら今のままいくんじゃないかな。

司会　ソ連軍の撤退が始まったアフガニスタンはどうでしょうか？

B　向う10年間は一層ドロ沼化するんじゃないの。ワハンも当分無理でしょう。

ルピーは１円を割る

司会　21世紀には１ドルがいくらになるでしょうか。

A　80円位じゃないかな

司会　アメリカ・ドルにリンクしているヒマラヤ諸国の外貨はどの位になりますか？

C　ネパール・ルピーは0.1円、インド・ルピーは0.2円、パキスタン・ルピー0.15円、ブータン・ニュルタムはインドと同じ。

A　中国元は15円、ソ連ルーブルは120円。

司会　ネパール・ルピーが0.1円となるとポーターの賃金はどの位になりますかネ。

C　ポカラ・サイドで180～200ルピー位じゃないかな。勿論、エベレスト街道ではもっと高く240～250ルピー位になるんじゃないの。

司会　最後に21世紀には日本人の8,000m峰サミッターは何人になると思いますか？　因に10年前の1978年には39人、1988年５月現在で116人です。これは述べ人数ではなくて8,000m峰に登頂した人の数です。

C　2,000年に200人と云うところかな。

司会　女性の8,000m峰サミッターは如何でしょうか？　因に1988年現在では、中世古直子、内田昌子、森美枝子、田部井淳子、高橋通子さんの５名です。

A　2000年で20人と云うとこかな。

F　６人目には木村文江が有力候補だね。

司会　今日はいろいろと有難うございました。どのようにまとめたら良いのか悩んでしまいますが、一度とりまとめまして後日皆様のところにお送りしますから、その際に訂正なり書き込みをお願いしたいと思います。どうもありがとうございました。

（文責：尾形好雄）

［ヒマラヤ200号／1988年７月号　から全文を再録したものである］

第Ⅶ部

ＨＡＪを支えた人たち

HAJを支えた人たち

昭和44年度

〔会長〕柴田金之助　〔副会長〕山名二郎　〔専務理事〕沖允人　〔理事〕善行久親　薬師義美　加藤彰　宮原巍　B.ランジャン　〔監事〕柴田君江　加藤復三　〔顧問〕平野三郎　依田孝喜　川喜田二郎　水谷勇夫　神谷貞義

昭和45年度

〔会長〕柴田金之助　〔副会長〕善行久親　〔専務理事〕沖允人　〔常務理事〕加藤彰　増田秀穂　B.ランジャン　〔理事〕阿部淳　橋本広　近藤龍良　浜巌　勝山良三　I.M.セルチャン　〔監事〕柴田君江　加藤復三

昭和46年度

45年度と同じであるが理事として以下追加
植竹清孝　丸山信治　沢田宗親

昭和47年度

46年度と同じであるが、理事の丸山信治が退任し、新たに理事として稲田定重と大谷徹を追加

★昭和48年度～50年度（任期3年）〔1973-1975〕
〔会長〕柴田金之助　〔副会長〕善行久親　〔専務理事〕増田秀穂　〔常務理事〕加藤彰　〔理事〕近藤龍良　植竹清孝　稲田定重　阿部淳　浜巌　木村与吉　橋本広　空昌昭　B.ランジャン　F.M.ハスナイン　A.クワジャ　〔会計監査〕藤田昌平　岩水竜峰

★昭和51年度～53年度（任期53年8月まで76-78）
〔会長〕柴田金之助　〔副会長〕善行久親　〔専務理事〕岩水竜峰　〔常務理事〕久保幸治　〔理事〕稲田定重　山倉洋一　矢野郁雄　藤井毅　大崎正信　山森欣一　黒沢文代　佐藤優　内田嘉弘　植竹清孝　堀内立三　近藤龍良　小林英見　B.ランジャン　A.フィダ　〔会計監査〕増田秀穂　松本香代子

★昭和53年度～58年度〔1978-1983〕
〔会長〕柴田金之助　〔副会長〕山倉洋一　〔専務理事〕稲田定重　〔常務理事〕山森欣一　岩水竜峰　角田不二　〔理事〕植竹清孝　堀内立三　近藤龍良　藤井毅　小林英見　内田嘉弘　清水澄　〔監事〕黒川篤　藤江幾太郎　〔顧問〕川喜田二郎　古原和美　善行久親

但し、57年5月30日近藤理事退任し、尾形好雄常務理事に就任。58年5月22日山倉副会長退任し、理事就任。さらに藤井理事退任し、八木原圀明常務理事に就任。

★昭和59年度～61年度〔1984-1986〕
〔会長〕柴田金之助　〔副会長〕遠藤登　〔専務理事〕稲田定重　〔常務理事〕山森欣一　八木原圀明　尾形好雄　飛田和夫　角田不二　〔理事〕阿部淳　植松秀之　小島守夫　小林英見　岩水竜峰　内田嘉弘　新貝勲　〔監事〕黒川篤　藤江幾太郎　〔顧問〕古原和美

但し、59年7月角田常務理事遭難死亡退任。60年5月11日藤江監事退任し、土居正勝監事に就任。61年5月24日山田昇常務理事に就任。

★昭和62年度～平成元年度〔1987-1989〕
〔副会長・会長代行〕遠藤登　〔専務理事〕稲田定重　〔常務理事〕山森欣一　八木原圀明　尾形好雄　飛田和夫　山田昇　〔理事〕阿部淳　植松秀之　小島守夫　鈴木雄一　岩水竜峰　内田嘉弘　新貝勲　〔監事〕舘野秀夫　土居正勝　〔顧問〕古原和美　柴田金之助

但し、元年2月山田常務理事遭難死亡退任。

★平成2年度～4年度〔1990-1992〕

〔会長〕遠藤登　〔理事長〕稲田定重　〔専務理事〕山森欣一　〔常務理事〕八木原圀明　尾形好雄　〔理事〕阿部淳　植松秀之　小島守夫　土居正勝　鈴木雄一　内田嘉弘　〔監事〕舘野秀夫　中岡久　〔顧問〕古原和美　柴田金之助

但し、2年9月舘野監事遭難死亡退任し、3年5月25日酒井國光監事就任。3年10月土居理事病死退任し、4年5月30日新郷信廣理事就任。

★平成5年度～7年度〔1993-1995〕

〔会長〕遠藤登　〔理事長〕稲田定重　〔専務理事〕山森欣一　〔常務理事〕八木原圀明　尾形好雄　寺沢玲子　今村裕隆　中川裕　〔理事〕阿部淳　大内倫文　植松秀之　西郡光昭　八嶋寛　沖允人　小島守夫　名塚秀二　酒井國光　関根幸次　南勲　林雅樹　新郷信廣　〔監事〕保坂昭憲　中岡久　〔顧問〕古原和美　柴田金之助

但し、6年3月今村常務理事退任し、6年5月21日飛田和夫常務理事に就任し、7年8月退任。

★平成8年度～10年度〔1996-1998〕

〔会長〕遠藤登　〔理事長〕稲田定重　〔専務理事〕山森欣一　〔常務理事〕八木原圀明　尾形好雄　寺沢玲子　中川裕　野沢井歩　〔理事〕大内倫文　八嶋寛　植松秀之　名塚秀二　酒井國光　古関正雄　田辺治　林雅樹　南勲　名越實　〔監事〕保坂昭憲　中岡久　〔顧問〕古原和美　柴田金之助

★平成11年度～13年度〔1999-2001〕

〔会長〕酒井國光　〔理事長〕山森欣一　〔常務理事〕八木原圀明　尾形好雄　岩崎洋　中川裕　野沢井歩　〔理事〕大内倫文　戸谷薫　八嶋寛　名塚秀二　古関正雄　田辺治　林雅樹　南勲　名越實　〔監事〕保坂昭憲　中岡久　〔顧問〕古原和美柴田金之助　遠藤登　稲田定重

★平成14年度～16年度〔2002-2004〕

［会長］酒井國光　［理事長］山森欣一　［専務理事］野沢井歩　［常務理事］八木原圀明　尾形好雄　名塚秀二　岩崎洋　中川裕　田辺治　古関正雄　林雅樹　睦好正治　［理事］大内倫文　戸谷薫　名越實　［監事］保坂昭憲　中岡久　〔顧問〕古原和美　柴田金之助　遠藤登　稲田定重

評議員名簿

★昭和53年度～58年度〔1978-1983〕

阿部淳　大崎正信（北海道）　高橋亭夫（岩手）　池田昭二（山形）　西郡光昭　菊地薫（宮城）　桧山隆（茨城）　水野勉　山里寿男　黒沢文代（東京）　森岡武一（石川）　沖允人（愛知）　矢野郁雄　豊島正（京都）　西村清一郎（兵庫）　八幡浩（広島）　石橋保　松本徑夫（福岡）　B．ランジャン（ネパール）　A．フィダ（インド）

★昭和59年度～61年度〔1984-1986〕

大崎正信　大内倫文（北海道）　高橋亭夫（岩手）　土谷正伸（山形）　八嶋寛（宮城）　村上泰賢（群馬）　土居正勝　水野勉（東京）　関久雄（神奈川）　豊島正（京都）　岡田和泰（兵庫）　名越實（広島）　国沢鎮雄（高知）　倉智清司　松本徑夫（福岡）　肉丸剛（長崎）

★昭和62年度～平成元年度〔1987-1989〕

大崎正信　大内倫文（北海道）　高橋亭夫（岩手）　土谷正伸（山形）　八嶋寛（宮城）　村上泰賢（群馬）　中岡久（埼玉）　水野勉（東京）　豊島正（京都）　岡田和泰（兵庫）　名越實（広島）　国沢鎮雄（高知）　倉智清司（福岡）　新郷信廣（佐賀）　肉丸剛（長崎）

★平成2年度～4年度〔1990-1992〕

大崎正信　大内倫文（北海道）　高橋亭夫（岩手）　土谷正伸（山形）　八嶋寛（宮城）村上泰賢（群馬）　水野勉（東京）　岩水竜峰（岐阜）　南勲（大阪）　岡田和泰（兵庫）　名越實（広島）　国沢鎮雄（高知）　新郷信廣（佐賀）　肉丸剛（長崎）

但し、新郷評議員は、4年5月30日理事に就任。

★平成5年度～7年度〔1993-1995〕

佐々木裕一（北海道）　松舘正義（青森）　土谷正伸　那須宗一（山形）　渡辺斉（埼玉）　出口當　鈴木雄一　坂上利明（東京）　西嶋錬太郎（石川）　中村正勝（長野）　岩水竜峰（岐阜）　名越實（広島）　国沢鎮雄（高知）　下田泰義

（長崎）

但し、佐々木評議員は、平成５年９月29日遭難死亡退任。

★平成８年度～10年度〔1996-1999〕

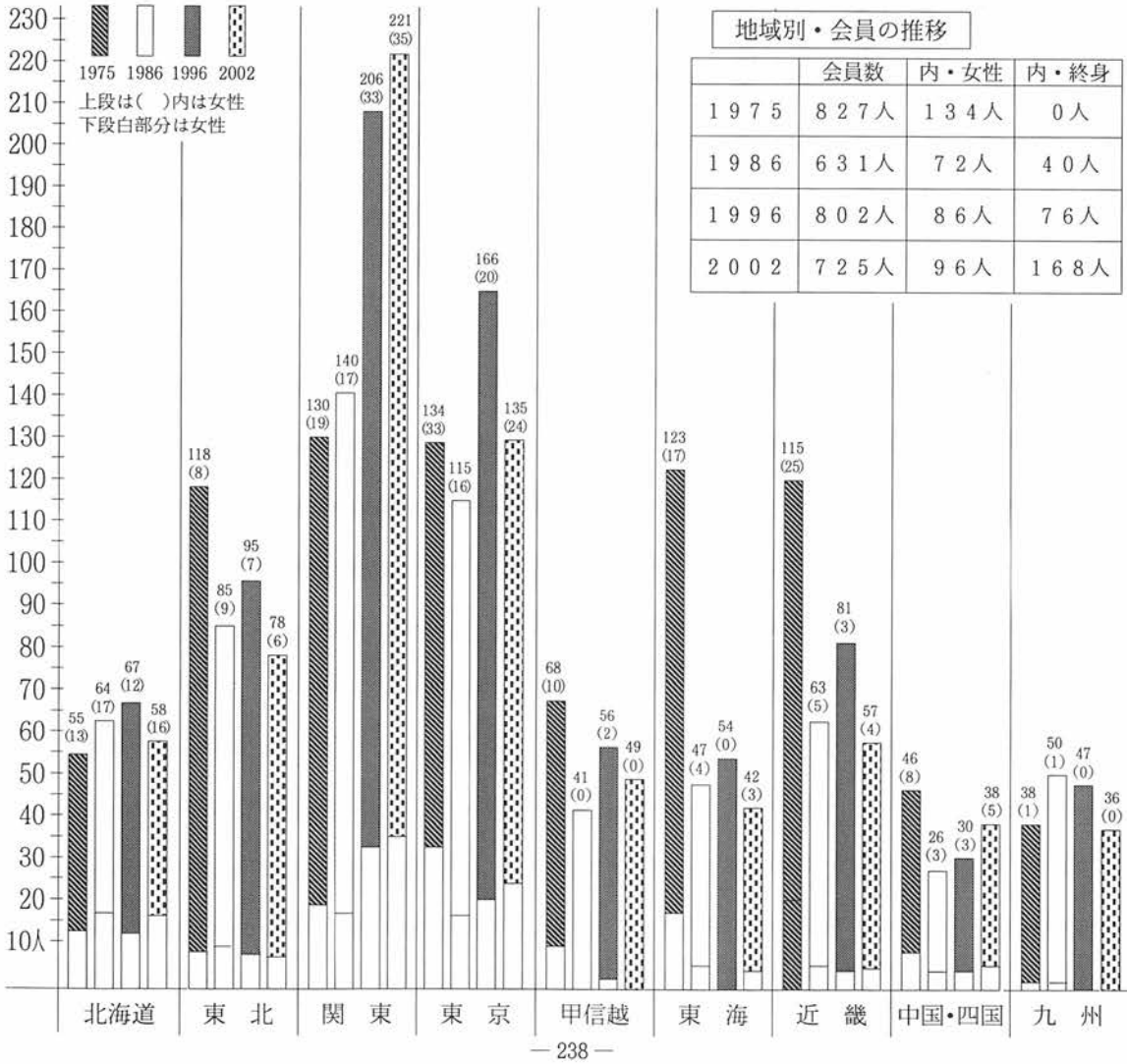
阿部淳　辻野治子（北海道）　松舘正義（青森）　丸山芳雄（秋田）　那須宗一　菅原和明（山形）　小島守夫（栃木）　渡辺斉（埼玉）　鈴木雄一　坂上利明　橋本康弘（東京）　上原昭則（山梨）　西嶋錬太郎（石川）　中村正勝（長野）　大西保（大阪）　今村裕隆（山口）　国沢鎮雄（高知）　下田泰義（長崎）

★平成11年度～13年度〔2000-2002〕

阿部淳　辻野治子（北海道）　松舘正義（青森）　丸山芳雄（秋田）　那須宗一　菅原和明（山形）　小島守夫（栃木）　寺沢玲子（埼玉）　天城敞彦　橋本康弘（東京）　青木茂（山梨）　西嶋錬太郎（石川）　中村正勝（長野）　大西保（大阪）　今村裕隆（山口）　国沢鎮雄（高知）　下田泰義（長崎）

★平成14年度～16年度〔2002-2004〕

辻野治子　佐藤英樹（北海道）　松舘正義（青森）　丸山芳雄（秋田）　志小田美弘（宮城）　菅原和明　鈴木正典（山形）　小島守夫　長繁夫　粂川章（栃木）　後藤文明（茨城）　天城敞彦（東京）　青木茂（山梨）　西嶋錬太郎（石川）　中村正勝（長野）　大西保　樋上嘉秀（大阪）　今村裕隆（山口）　国沢鎮雄（高知）　下田泰義（長崎）　大住恵子（在パキスタン）



地域別・会員の推移

	会員数	内・女性	内・終身
１９７５	８２７人	１３４人	０人
１９８６	６３１人	７２人	４０人
１９９６	８０２人	８６人	７６人
２００２	７２５人	９６人	１６８人

会員名簿

（×＝死亡　◎＝終身会員　＊＝夫婦会員
★＝HAJ・EXP死亡者　○＝現会員）

0001 ○柴田金之助
0002 ＊柴田　君江
0003　山名　二郎
0004　山名　貞子
0005 ×高橋　照
0006　高橋リノ子
0007　薬師　義美
0008　加藤　彰
0009　加藤　弥栄
0010　依田　孝喜
0011 ○善行　久親
0012　水谷　勇夫
0013 ×セルチャン
0014　川喜田二郎
0015 ○Ａ．フィダ
0016
0017
0018
0019
0020　神谷　貞義
0021　丸山　五郎
0022
0023　望月　芳元
0024 ○太田　進造
0025　奥田千鶴子
0026 ○森　美枝子
0027 ＊坂本　美弥
0028 ○橋本　広
0029　井口　洋平
0030　高澤　忠
0031　杉浦　勝利
0032　武市　延雄
0033　碓井　橘造
0034　三吉　康夫
0035　伊達　忠雄
0036 ◎阿部　淳
0037 ◎阿部　充子
0038　石村　揚正
0039　小山　貢
0040　大野　光彦
0041 ×前田　清
0042　田渕　昌喜
0043 ×平岩　治郎
0044　都田　徹
0045　加藤　復三
0046 ○沖　允人
0047 ＊沖　道子
0048　清水　敏一
0049　矢野　郁雄
0050　瀧川悠紀夫
0051　柏　敏明
0052　浜田　武雄
0053　小川　篤彦
0054　若山善次郎
0055　竹内悠紀夫
0056　小原　英雄
0057　山名　康裕
0058　八木　公信
0059　柴田　寿彦
0060　池田　篤夫
0061　志賀嘉寿恵
0062　貞安　道男
0063　小島　和彦
0064　網倉　志朗
0065　野島　典雄
0066　米山賢二郎
0067　小倉　竹雄
0068　中出水　勲
0069　小野徳太郎
0070　山名　徹
0071　山名　芳郎
0072　石渡　伴男
0073　山名　競
0074　山岡　元弘
0075　岡村　治信
0076 ×小島　六郎
0077　矢田城太郎
0078　渡辺　嘉男
0079　酒井　田昇
0080　松平　直寿
0081　鈴木　眞
0082　山岸　淳八
0083　安彦　六郎
0084　野村　晃
0085　坂口敬一郎
0086　高橋　弘
0087　高橋　幸子
0088　高橋　眞
0089　望月　計市
0090　小椋　凱夫
0091 ×萩　千夏子
0092 ×神谷　恭
0093
0094 ×江坂　光守
0095　宮沢　宏昌
0096
0097　渡辺　文仁
0098 ○田辺卓司
0099　滝本　啓一
0100 ×吉沢　一郎

■ 101～200

0101 ○遠藤　益夫
0102　馬渕　幾夫
0103　石森芳太郎
0104　土屋　武雄
0105　阿江　寿
0106　森谷　虎彦
0107　村上常太郎
0108　竹端　節次
0109 ×和田　忠一
0110　石橋　保
0111　池田　昭二
0112　松尾　春充
0113　宮崎伊三夫
0114 ○沼田　敏彦
0115　勝山　良三
0116 ◎松本　徨夫
0117　亀松　靖夫
0118　亀松　悦子
0119　峯野　勝弘
0120　植田　貞而
0121　谷野　計夫
0122　桃井　雅弘
0123　鵜木　洋
0124　山田　圭一
0125　藤井貴美子
0126　向井　裕彦
0127　冠木伊衛門
0128　政本　桂子
0129 ×古賀　明憲
0130 ×河村　栄二
0131　大野　寛機
0132 ×浜　巌
0133　秋山　守
0134　岸正　二郎
0135　新井信太郎
0136　本多　夏生
0137　井本　洋
0138　吉田　建治
0139　中尾　邦雄
0140　馬宮　弘次
0141　田中　瑞穂
0142　増田　秀穂
0143　増田　歳子
0144　河田　博喜
0145　高山　栄二
0146
0147　藤井　康
0148　緒方　寸
0149　森　直樹
0150　橋本　詞央
0151　寺崎　義治
0152　丸山　寛子
0153　古庄　久則
0154　新妻喜恵子
0155　五島　泰明
0156　守脇　久之
0157　水出　忠徳
0158　曽原　国蔵
0159 ×ランジャン
0160 ×藤江幾太郎
0161　高柳　彰司
0162　長沢森之助
0163　立石　俊夫
0164　茂村　進二
0165　佐藤　隆利
0166　西宮　辰明
0167　資延　憲英
0168 ◎植竹　清孝
0169 ○名村　義人
0170　由井　格
0171　佐藤　茂
0172　池田　正男
0173　池田　和代
0174　青島三千男
0175 ○木戸　繁良

0176 野田 明子
0177 鈴木 丈司
0178 勝山 泰子
0179 村上 清光
0180 佐伯 邦夫
0181 ×坪川 賢三
0182 西 賢二
0183 新妻 徹
0184 竹沢 昭治
0185 坂元 勇
0186 平野 明
0187 市川 喜堅
0188 松本 明
0189 近藤 龍良
0190 新島 義昭
0191 ×宮野 輝
0192 高田 光一
0193 金田 正樹
0194 金井 駿三
0195 和田 誠一
0196 中藪 淳一
0197 川向 栄一
0198 高橋利志之
0199 矢島 勇
0200 石津 勝司

■ 201～300

0201 鈴木 務之
0202 加藤 末雄
0203 佐々木民秀
0204 淡川 舜平
0205 西田 繁造
0206 風間 京子
0207 馬場堅治郎
0208 ○上田 安宣
0209 田村 宣男
0210 並木 満夫
0211 木村 孝保
0212 松山 幸弘
0213 太田 五雄
0214 丸山 信治
0215 ○惠 秀彦
0216 田中 タキ
0217 倉智 清司
0218 高津 義孝
0219 小林 勉
0220 酒井 猛
0221 伊部 義人
0222 古田 進
0223 ×小須田義治
0224 高橋重記海
0225 荻原 公
0226 中澤 瑛二
0227 原 忠栄
0228 中川広三郎
0229 山本 方代
0230 ×葛西 健次
0231 今井 制夫
0232 米山 正弘
0233 津田 文夫
0234 磯部 好子
0235 奥田 忍
0236 田中 泰生
0237 佐伯 千昭
0238 浅葉 雄司
0239 堀内 立三
0240 ×小林 英見
0241 福井 善範
0242 空 昌昭
0243 鈴木 茂徳
0244 森 迪彦
0245 半田 重雄
0246 坂本 豪
0247 森口 東洋
0248 宮崎 斉
0249 岩本美智恵
0250 ×今泉 均
0251 鈴木 由郎
0252 ×梶本徳次郎
0253 前田 武治
0254 渡辺 一正
0255 門倉 賢
0256 高沢 満雄
0257 大沢 セエ
0258 嶋倉 宏光
0259 島田 良
0260 ◎清水 澄
0261 宮坂 尚樹
0262 今井 二郎
0263 佐藤 宗和
0264 ○花崎 洋
0265 鈴木多美子
0266 入江 孝史
0267 川北 昌博
0268 田渕 博
0269 山田 邦昭
0270 ×水野 治朗
0271 上野テル子
0272 塩沢 久仙
0273 榎本 康男
0274 野村 邦夫
0275 横山 功子
0276 山本 英毅
0277 井口 邦利
0278 平岡 雅之
0279 水野 紀彦
0280 ＊大山 公子
0281 岡 紀江
0282 渡辺 公稔
0283 朴 鉄岩
0284 阿江 茂
0285 山里 寿男
0286 ○田尻 種徳
0287 ＊田尻 利子
0288 ○杉本 忠男
0289 中井 義博
0290 真仁田美智子
0291 ◎小島 守夫
0292 桑原 次郎
0293 飯田 祐次
0294
0295 ×松田 光雄
0296 ○植木 知司
0297 百瀬 斐敏
0298 荻須 昭大
0299 今村 朋信
0300 武藤 政之

■ 301～400

0301 ×依田文彦
0302 鈴木 茂
0303 福井 浩之
0304 宮崎 栄治
0305 西川 雄策
0306 近藤 彰子
0307 ○加賀 勝
0308 ○古原 和美
0309 ×古賀 明憲
0310 間安 宏
0311 末吉 鐵也
0312 ○石川 勝也
0313 ×上田 竹三
0314 島 汀子
0315 河西 俊郎
0316 ○大山幸太郎
0317 安倍 康夫
0318 江原 光夫
0319 池原 信吾
0320 御着 祥三
0321 橋本 繁男
0322 石塚 正夫
0323 楳木 栄一
0324 楳木 昌子
0325 平田 増雄
0326 池田 隆信
0327 寺本 正史
0328 佐藤 健三
0329 小林 賢次
0330 三鍋 久雄
0331 藤沢 乙三
0332 浜 孝子
0333 田村 禎助
0334 吉田 実
0335 ◎西郡 光昭
0336 ○鈴木 常夫
0337 高橋 邦臣
0338 野村 信昭
0339 田中 睦郎
0340 高橋 英幸
0341 山下 政一
0342 山田 康雄
0343 千田 博之
0344 ◎稲葉 英夫
0345 中川 恵資
0346 ○大崎 正信
0347 榎本 幸子
0348 岩本 敬之
0349 石田 長門
0350 篠 繁市
0351 熊谷 幸子
0352 ×広島 三朗
0353 山田 孝夫
0354 ○久保 開次
0355 ○田中 重義
0356 河野 慎一
0357 出堀 宏明
0358 井関 扶
0359 井関ヒロ子
0360 小林美和子
0361 上 直子
0362 ◎南 勲
0363 西村 和子
0364 ◎内田 嘉弘
0365 ◎内田 昌子

0366 藤塚 知成
0367 ○京極 紘一
0368 服部 博
0369 服部 隆子
0370 宮 下弘
0371 ×前田 光雄
0372 ◎稲田 定重
0373 ○黒岩 守
0374 原田 明
0375 小杉 伸一
0376 浅野 則子
0377 熊谷 幸子
0378 斉藤 洋子
0379 ×石崎 貞子
0380 郷地 勝子
0381 浅見 亨
0382 滝川 清
0383 ○米山 利雄
0384 永沼 雅子
0385 海藤 博子
0386 井上 英新
0387 高木 泰夫
0388 ×望月 忠
0389 ○井守 克己
0390 ×渡辺 真澄
0391 内田 敏子
0392 小山 昭夫
0393 藤平 健
0394 藤平 正子
0395 永田 崇嘉
0396 村井 栄一
0397 楢原ユリエ
0398 宇佐見郁子
0399 小山眞喜義
0400 小山美喜子

■ 401～500

0401 島津 昌泰
0402 島津 洋子
0403 塩原 輝昭
0404 畠中 茂
0405 掛見 則夫
0406 小泉 博嗣
0407 内田 国博
0408 一原 有徳
0409 石田 剛
0410 高橋ユウ子
0411 斉藤勘次郎
0412 渡辺 正蔵
0413 高橋 正幸
0414 高橋 満子
0415 仕名野完治
0416 光澤 昭夫
0417 長谷川宗親
0418 渡会伊良子
0419 ×沼田 眞
0420 佐藤 泰
0421 佐々木 正
0422 岩淵 一雄
0423 佐藤 雅信
0424 吉田 恭子
0425 ○三原 洋子
0426 大谷地政光
0427 野川 康夫
0428 釜石 登
0429 中野孝太郎
0430 佐々木典子
0431 鎌田 忠昭
0432 玉井 道隆
0433 ○葛谷 凱治
0434 長尾 良男
0435 中村 勲
0436 宇井 邦夫
0437 渡部 信子
0438 村山 栄子
0439 大野 富子
0440 安田徳三郎
0441 杉浦 勝美
0442 母里 昌弘
0443 小西 喜助
0444 宮台 伸吉
0445 西村清一郎
0446 西村 光枝
0447 下志万嘉彦
0448 下志万千鶴子
0449 棟方 亮
0450 中馬 董人
0451 山下 靖博
0452 白銀 建
0453 中村 隆哉
0454 藤田 昌平
0455 菅田 臣子
0456 井口 浩
0457 ×福田 文二
0458 柴田 英輔
0459 室 博
0460 室 伊子
0461 篠原 三郎
0462 篠原 俊子
0463 小篠 篤二
0464 秋山 宏明
0465 中川 紘一
0466 ×須賀 玄郷
0467 山口 温夫
0468 堀田 悳
0469 渡辺 博
0470 野上 成勇
0471 魚住 巌
0472 河上 勲
0473 山本 浩
0474 北野 督禮
0475 宮原 進
0476 金沢 清一
0477 ○千葉 良正
0478 大藤 朋子
0479 ○堀内 弘和
0480 大橋 和夫
0481 ○黒川 篤
0482 上野毛戸康男
0483 宮森 常雄
0484 寺崎 順子
0485 ○中村 喜吉
0486 五十嵐紀陽
0487 ○坂本真沙留
0488 ×伊藤 寿
0489 平沢 健治
0490 秋元 智安
0491 佐藤 中山
0492 望月恵美子
0493 浅野目誠一
0494 中村 善夫
0495 幕谷 泰幸
0496 小野 晃
0497 辻ノ内 譲
0498 熊谷 浩志
0499 菊地 晃一
0500 佐々木弘之

■ 501～600

0501 ×杉沢知勢子
0502 ◎岩水 竜峰
0503 柴田 勇
0504 ○水野 勉
0505 ○奥田 寛
0506 阿部 弘二
0507 ×今井千代子
0508 大谷 徹
0509 木村 与吉
0510 岡本 紀昭
0511 関 裕明
0512 中村 義治
0513 島村 唯岸
0514 関谷 節子
0515 中村 茂樹
0516 金子 辰巳
0517 伊藤 博
0518 中田 友三
0519 玉主 清
0520 玉主 澄子
0521 加藤 憲子
0522 黒沢 文代
0523 中村 修一
0524 薄地世史郎
0525 督永 進
0526 清水 洋司
0527 寺江 清
0528 伊藤 弘子
0529 ×松島 静吾
0530 那須 久雄
0531 併井 照和
0532 佐野 昇三
0533 斉木 紀子
0534 佐藤 ヨシ
0535 板倉 幸男
0536 柴田 利雄
0537 柳沢 秀昭
0538 横地 康生
0539 須賀 佳子
0540 居林 重麿
0541 ○鍋島 義雄
0542 友光 幸二
0543 田中 裕
0544 ○打矢 道雄
0545 佐橋 忠明
0546 小林 忠一
0547 折戸 正明
0548 野崎 裕美
0549 安斉 令子
0550 ＊水野 淳子
0551 ○粕谷 俊矩
0552 山根 紀賢
0553 矢島 勇
0554 神尾 吉臣
0555 寺田 作二

0556 鷲北 久子
0557 林 茂樹
0558 中西喜和男
0559 塚本 重一
0560 松田 達夫
0561 垣本百々子
0562 川崎 松男
0563 入山 憲一
0564 能政 信夫
0565 岡 清
0566 辻 好栄
0567 鹿鳥 清巳
0568 大塚 清市
0569 竹沢 昴
0570 岡村 武
0571 上沢 容子
0572 山口かつ江
0573 大内 健一
0574 時田 悠治
0575 三浦 愛明
0576 京念 孜
0577 山下 孝
0578 山下 佑子
0579 加藤 昭
0580 阿部 輝一
0581 池松 満
0582 井上 英機
0583 小林 昭治
0584 玉木 秀一
0585 玉木きん子
0586 寸田 侑
0587 木村 智
0588 今村 信彦
0589 本多日出彦
0590 横尾 光子
0591 中村 直子
0592 亀井 英二
0593 伊藤 叡一
0594 木村 勝直
0595 ◎出口 當
0596 伊藤 章
0597 宮井 章子
0598 八幡 浩
0599 関根 伝平
0600 鷲北 晃

■ 601～700

0601 安藤 英之
0602 ○中瀬 司
0603 豊島 正
0604 佐藤慶治郎
0605 ○加藤 智司
0606 田中 利夫
0607 藤条 好夫
0608 竹嶋 正弘
0609 ○松村 隆雄
0610 ◎今野 一也
0611 井口 亮太
0612 井口しのぶ
0613 脇坂 順一
0614 ×押谷 光喜
0615 本間 春江
0616 大獄 藤一
0617 増子 力
0618 佐藤 淳志
0619 清野 孝
0620 竹本 隆夫
0621 岸 三千彦
0622 ○松田 謙介
0623 中川 道男
0624 藤崎 和生
0625 ○高橋 亭夫
0626 山倉 洋一
0627 小嶋 義明
0628 早藤 栄一
0629 渡部 昭一
0630 早坂 一佳
0631 松田 要悦
0632 高橋 理貞
0633 ×羽根田一馬
0634 ○根岸 喜明
0635 笹川 慶子
0636 渡辺 紀子
0637 ×田辺 郁夫
0638 黒岩 健
0639 黒岩 英子
0640 竹田 憲作
0641 松山 尚民
0642 福沢 勝幸
0643 小畑隆三郎
0644 中島 信行
0645 B.K.タパス
0646 清水 はつ
0647 ×岡川 豊治
0648 豊田 貞歳
0649 豊田 満ち
0650 神門 巌
0651 ◎菊地 薫
0652 ○佐藤 浩輔
0653 田上 陽助
0654 増茂 博
0655 矢野 光夫
0656 屋敷 篤
0657 古田 佳久
0658 伊藤 清志
0659 滝 紘之
0660 伊藤 裕明
0661 内田 博之
0662 黒澤 輝男
0663 本舘 栄康
0664 浅沼 賢一
0665 小田島忠一
0666 斉藤 清吉
0667 佐藤藤一郎
0668 菅原 隆志
0669 野口 一広
0670 佐藤 豊記
0671 渋谷 昭明
0672 平 良三郎
0673 ◎植松 秀之
0674 ×設楽 芳夫
0675 ○押谷 嘉浩
0676 竹内 暢子
0677 佐野加代子
0678 ○荘司 昭夫
0679 井ノ口泰淳
0680 高木 稔
0681 成末 洋介
0682 堀内 恒夫
0683 山野 善孝
0684 吉川 章
0685 松田 経雄
0686 松田 正子
0687 松田 憲雄
0688 佐藤 守利
0689 加藤 肇司
0690 酒井 昌三
0691 杉山 修
0692 ×松尾 秀樹
0693 矢部 達雄
0694 福本 和佳
0695 ◎山田 雅昭
0696 三沢 志朗
0697 阿由葉勝実
0698 倉知 誠
0699 伊藤 照美
0700 松下 洋子

■ 701～800

0701 戸谷 賀一
0702 福田 順一
0703 堀内 孝恵
0704 矢沢 義秋
0705 滝口 明
0706 大塚 理作
0707 ×高頭 清次
0708 氷高てる子
0709 葉上 光昭
0710 加藤 明方
0711 根岸 裕二
0712 佐藤 忠
0713 小林 静生
0714 小林 進二
0715 黒田 久子
0716 ×立田 実
0717 清水 一彦
0718 三宅正太郎
0719 増田 豊
0720 西野 廣
0721 新谷 明喜
0722 八木 功
0723 伊藤 洋行
0724 川上 一夫
0725 川上須美子
0726 小林 深
0727 水地 征夫
0728 安岡 俊三
0729 中山 峰男
0730 福重 憲嘉
0731 藤森 良隆
0732 竹内 仁
0733 ◎能勢 眞人
0734 岡本 英治
0735 ×森岡 武一
0736 矢崎 利武
0737 矢崎美弥子
0738 ◎山森 欣一
0739 ◎山森美智子
0740 菊池 充弘
0741 矢後 和夫
0742 荻野 正昭
0743 渡辺 七郎
0744 樫野 良雄
0745 三原 悟

0746 元川 伸光
0747 成田 安弘
0748 ◎保坂 昭憲
0749 伊藤 善八
0750 白石 恒雄
0751 阪野 吉平
0752 紺野 敏春
0753 神尾 政雄
0754 戸井田重雄
0755 井上 渉
0756 佐々木清次
0757 杉崎満寿雄
0758 佐藤 邦雄
0759 ×鈴木 貞子
0760 田中道太郎
0761 後藤 紘顕
0762 酒井 秀光
0763 木本 桂春
0764 植木 悦雄
0765 星野 富雄
0766 ×上野 博
0767 国友 雅夫
0768 松田 良治
0769 藤井 毅
0770 ×加藤 学
0771 ×鈴木 真一
0772 菊地 晶三
0773 森本 孝子
0774 中島 正晴
0775 下田喜美子
0776 横樺 太
0777 森田 晃夫
0778 武藤 裕輝
0779 片岡 健一
0780 山崎 純男
0781
0782 大野真之助
0783 好岡 義雄
0784 金子 利史
0785 多々良修一
0786 大山 光一
0787 池田 則章
0788 井関 芳郎
0789 清水 正雄
0790 小野 太一
0791 柴田 満
0792 川田 寛
0793 小原 紀男
0794 ×松見 新衛
0795 松峯 達男
0796 石原 謙
0797 村松 伸一
0798 八嶋 道郎
0799 小川 勝
0800 平野 栄子

■ 801～900

0801 小林 年
0802 岡田 勝英
0803 加藤 広美
0804 酒井 保
0805 伊東 哲夫
0806 ◎桧山 隆
0807 ○佐藤 忠男
0808 今井 学
0809 太田 博久
0810 関根 悦治
0811 駒井 満男
0812 ◎加藤 燦
0813 岡村 一郎
0814 栃木 トヨ
0815 ○泉 有輝信
0816 吉沢 均子
0817 安藤 昌宜
0818 諸岡 千秋
0819 舞木 善郎
0820 赤津 光一
0821 ○小松 達
0822 堀 英夫
0823 高橋 忠一
0824 西村 和夫
0825 木下 洋亮
0826 山本 陽一
0827 小沢 孝一
0828 白井 敏治
0829 鈴木 秀枝
0830 生 卓見
0831 水谷 健
0832 松沢 良江
0833 藤本 英明
0834 南波 章
0835 正田 元成
0836 菅原 庄一
0837 板垣 祐二
0838 田村 幸子
0839 小淵 修子
0840 磯部 広勝
0841 井関 二郎
0842 鶴田 千秋
0843 山下 孝之
0844 松島 賢昌
0845 林 さゆり
0846 上村信太郎
0847 鈴木 隆則
0848 ★舘野 秀夫
0849 高橋 忠栄
0850 土谷 匡
0851 松沢 仁
0852 岩本 高樹
0853 高橋 邦臣
0854 尾立 憲俊
0855 大杖 哲司
0856 江越 弘人
0857 稲生由美子
0858 池田 善人
0859 佐々木誠一
0860 高鍋左武郎
0861 真鍋 ヒサ
0862 金子 勇一
0863 菜畑みどり
0864 ○船津 武士
0865 高杢 康之
0866 山野 明男
0867 ○野上 国広
0868 寺田 文夫
0869 三和 秋雄
0870 ○高木 基揚
0871 山名 矩子
0872 竹中 秀一
0873 本田 昌司
0874 平田 攻
0875 大庭 義行
0876 ○津田よし江
0877 新井 祥之
0878 米田 純一
0879 ◎金沢 健
0880 浜田 幹央
0881 ◎松舘 正義
0882 水野 美稲
0883 飯田 宏子
0884 木村喜代志
0885 中里 哲夫
0886 藤川 雅代
0887 松井 道大
0888 吉田 潔司
0889 ○岡田 和泰
0890 ＊岡田 睦
0891 橋本 正巳
0892 村岡由貴夫
0893 松本 喜邦
0894 ◎名越 實
0895 花田 春生
0896 鈴木 清子
0897 小島 裕治
0898 山本 治男
0899 斉藤 豊
0900 ×金子 年成

■ 901～1000

0901 望月 市子
0902 茂木 寛子
0903 佐藤 純子
0904 山本 登一
0905 ◎稲田セツ子
0906 柴田 清康
0907 沢田石一夫
0908 小野 輝夫
0909 ×浅倉 義勝
0910 中村 信明
0911 五十嵐 博
0912 鈴木 康志
0913 高島 一郎
0914 丹波 智子
0915 丹波美智子
0916 米地 文夫
0917 小川 務
0918 小川 幸恵
0919 中里 文夫
0920 関口 令安
0921 清水 正夫
0922 金子 宏
0923 遠藤 章
0924 川崎 航洋
0925 中村 勉
0926 上村 芳枝
0927 尾崎 章代
0928 ×高見 和成
0929 藤井 隆典
0930 朝香 孝一
0931 菅野 恵子
0932 鈴木 孝始
0933 工藤 晃一
0934 土田 公司
0935 近藤 康春

0936 谷津 義則
0937 大谷 浩一
0938 浜口 徹
0939 久保 幸治
0940 吉田 宣義
0941 齋藤 満
0942 義本 幸一
0943 安田 一司
0944 片岡 喜恵
0945 田尻 昇子
0946 永礼 一郎
0947 大久保 仁
0948 中山 正勝
0949 赤羽 武士
0950 赤羽 時江
0951 池田 豊雄
0952 ○齋藤 悳
0953 林 健治
0954 山田 実洋
0955 ○高橋 毅
0956 佐藤 力
0957 山田 潔
0958 天池 弘子
0959 吉川 祐治
0960 松田福太郎
0961 荒井 清治
0962 荒木 健次
0963 近藤 高一
0964 堀井 昌子
0965 ×高橋 照
0966 小草真佐子
0967 倉橋洋次郎
0968 玉井 裕夫
0969 ○日向野恵美子
0970 羽根 博雄
0971 鮎川 邦夫
0972 庄司 優
0973 三浦 良夫
0974 鼎 治紀
0975 ◎石川真智子
0976 ○石黒 重恭
0977 板垣 允俊
0978 榎本 和介
0979 ○佐々木香代子
0980 桑原 良敏
0981 坂本 庄司
0982 鈴木 省三
0983 樋口 英夫
0984 小島 洋一
0985 西山 克巳
0986 ×小林 昭一
0987 碓井 信吉
0988 ★鈴木 陽一
0989 吉岡 修
0990 會田 雅英
0991 小島 睦夫
0992 富澤 伊
0993 奥田 博
0994 和田 勲
0995 君野 敏子
0996 ×佐藤 優
0997 大野 晴美
0998 渥美 剛治
0999 ×志村 一夫
1000 吉田 妙子

■ 1001～1100

1001 平田 一三
1002 平田 寿子
1003 ×岡林 俊彦
1004 井上 隆雄
1005 渡辺 憲一
1006 宗綱 チズ
1007 横山 昌平
1008 田路 良一
1009 ×坂本 輝夫
1010 木谷 明
1011 近藤 菖雄
1012 木村 正明
1013 木村 尚子
1014 小林 浩一
1015 酒井 成司
1016 片山 繁
1017 木村 郁夫
1018 菊地 泰雄
1019 中垣 淑子
1020 高野 勤
1021 ○菅野 武士
1022 ○肉丸 剛
1023 藤田 通元
1024 山田 正弘
1025 板谷 佳史
1026 荻原 明郎
1027 酒井 耕三
1028 角森 文雄
1029 菊地 隆彦
1030 丸山 喜康
1031 柳沢須佐雄
1032 森口 遵
1033 斉藤かつら
1034 小池 ハル
1035 堀田 剣
1036 有田 豊
1037 尾崎千代一
1038 鈴木 正巳
1039 小町 恵子
1040 村山 延久
1041 村上 秀三
1042 長谷 斉
1043 梅野 淑子
1044 佐藤 直司
1045 寺村 重一
1046 三和 裕佶
1047 鍋島 博
1048 寺林 靖夫
1049 堀江 健二
1050 大滝 潤二
1051 遠藤 康治
1052 ◎岡田伊佐男
1053 松山 和子
1054 福井 深雪
1055 脇田 治
1056 潟上 弘子
1057 ×竹本 廣泰
1058 大平 栄一
1059 阿部 重雄
1060 田場 穣
1061 佐藤キエ子
1062 藤川 格司
1063 木村 優子
1064 竹田 政男
1065 小向 肇
1066 小笠原好太郎
1067 三浦 勝美
1068 山田 泰義
1069 榊 勝義
1070 音喜多 博
1071 森山昭一郎
1072 川村 康憲
1073 直江 裕進
1074 寺浦 義隆
1075 新井 晴美
1076 ★角田 不二
1077 宗政 正義
1078 筋田 雅則
1079 風間 毅
1080 ○太田 譲治
1081 斉藤 正志
1082 神村 吉次
1083 海津 勲
1084 ○伊東 満
1085 竹下 良二
1086 吉田 研一
1087 ○寺田 昭一
1088 林 清剛
1089 門井 照子
1090 遠藤 勝久
1091 古山 勝康
1092 鈴木 秀夫
1093 佐藤 勝子
1094 木下喜久雄
1095 林 良吉
1096 神山 良雄
1097 ×福与 邦夫
1098 野川 初江
1099 山崎 栄
1100 片山加寿子

■ 1101～1200

1101 菊地 仁
1102 ×近藤 芳春
1103 岩佐 弘子
1104 小原 睦代
1105 沢田 睦子
1106 尾島 健誠
1107 村上 啓三
1108 白岩 堅
1109 須藤 正次
1110 永沢 栄
1111 諏訪木秀夫
1112 千明 邦彦
1113 渡辺 浩幸
1114 青田 幸子
1115 水谷 洋子
1116 目黒 泰輔
1117 ○原 蕃
1118 安西 憲一
1119 山田 公司
1120 桜木 清隆
1121 大東 勝
1122 平木裕美子
1123 藤松 太一
1124 森 秋正
1125 山田 疆一

1126 平岩 功臣
1127 松永 勇
1128 ○加藤 善之
1129 ◎脇田 康治
1130 佐藤 成生
1131 赤澤 正史
1132 梅嵜 秀明
1133 佐々木俊和
1134 岸川由美子
1135 ○佐藤 正昭
1136 ×亀井 建樹
1137 中村 好江
1138 ○飯沢 実
1139 伊藤 俊彦
1140 紺野 稔
1141 北原 英男
1142 ×佐々木裕一
1143 平間 操
1144 ○厚地 豊道
1145 横田 春雄
1146 渡辺 伝良
1147 晒谷 政史
1148 安藤 和巳
1149 前田 裕子
1150 池田 哲郎
1151 ◎高橋 純一
1152 小野木三郎
1153 小沢斗志彰
1154 和田 誠治
1155 酒井 柴郎
1156 梶 久
1157 近藤 孝男
1158 安藤 忠夫
1159 山田 勇喜
1160 山田つぼみ
1161 杉本 猪三
1162 寺本 滉
1163 管野 昭
1164 ○福山 茂
1165 白木 和志
1166 大久保 真
1167 佐々木光雄
1168 馬場 洋一
1169 ○上杉 純夫
1170 石川 裕司
1171 ×野中 和雄
1172 伊藤 行人
1173 関 久雄
1174 中原 隆子
1175 中西 都男
1176 中西律恵子
1177 池上 一利
1178 石飛 君子
1179 北林嘉鶴子
1180 ×両角 泰夫
1181 高橋富貴夫
1182 大沢由佳理
1183 上島 保文
1184 ◎若尾 巻廣
1185 風見 武秀
1186 谷本 交平
1187 ○小松 伸
1188 大友せつ子
1189 川口 久雄
1190 小堀 嘉幸
1191 高原 修
1192 阿部真理子
1193 高橋太一郎
1194 ○森 秀子
1195 坂野 宏三
1196 ○八嶋 寛
1197 鈴木 修
1198 松田 安
1199 渡部 一恵
1200 佐藤ひとみ

■ 1201～1300

1201 田中 利幸
1202 二階 義治
1203 伊東 祐介
1204 長尾 直子
1205 山田 憲子
1206 加藤 五郎
1207 今井 清和
1208 古岡 滉
1209 ◎中岡 久
1210 山下 誠一
1211 ×北川 勇人
1212 五十嵐利信
1213 ○鈴木 正規
1214 岡本 敏
1215 野鳥 照雄
1216 東 英樹
1217 ◎伊地知 博
1218 ○伊原 哲士
1219 ○桑原 健一
1220 生田 浩
1221 小川 順子
1222 三浦 佳久
1223 ○辰巳 順子
1224 ★佐久間 隆
1225 ◎飛田 和夫
1226 橋本千恵子
1227 高畑 政雄
1228 佐藤 智英
1229 佐原 正行
1230 真島 博志
1231 内田 利夫
1232 ○西田 茂夫
1233 松本 正城
1234 松本 和貴
1235 内川 恭夫
1236 後藤 英治
1237 河西 隆夫
1238 河西 英子
1239 鈴木 節男
1240 千葉 孝義
1241 小柳津善司
1242 蒲 雅子
1243 坪田 茂也
1244 仁藤 清司
1245 福島 英敏
1246
1247 畠山 秀男
1248 飯島 孝夫
1249 坂本 尚顕
1250 麻田 隆之
1251 飯村 富彦
1252 ○島田 成正
1253 大里 祐一
1254 大里千寿子
1255 福田 文英
1256 福田 恵子
1257 杉崎 正美
1258 緒方 圭介
1259 柿島 裕
1260 藤塚 弘
1261 佐藤 正孝
1262 富沢いさお
1263 坂本 知忠
1264 村田 真悟
1265 深山 桃子
1266 八木 正爾
1267 橋本 久
1268 角田 哲
1269 小泉 恵子
1270 ★寺本 政幸
1271 ○野口 邦夫
1272 中村 茂
1273 清水 保志
1274 岡崎 猷之
1275 阿部 東吾
1276 ○那須 宗一
1277 谷岡 俊匡
1278 野中 久和
1279 川端 治
1280 清井 礼子
1281 戸部 洋子
1282 ×照井 博
1283 住友 房夫
1284 伊藤 弘昭
1285 足立 雅敏
1286 足立富士子
1287 ○五月女 隆
1288 ◎江端 峯男
1289 下川原浩司
1290 石坂 美咲
1291 中住 晴彦
1292 羽田 令子
1293 藤原優太郎
1294 佐藤 隆
1295 ○平沢 健治
1296 矢切早一郎
1297 樋口 富一
1298 栗山 康雄
1299 田中 敏春
1300 桜井禎一郎

■ 1301～1400

1301 梅本 和巳
1302 斉藤 雅登
1303 落合 養子
1304 ○岩本 正道
1305 飯澤 和夫
1306 本図 一統
1307 ◎八木原圀明
1308 ×山田 昇
1309 ×稲葉 幸郎
1310 金沢 康夫
1311 加藤 守
1312 北畠須磨子
1313 ○斉藤 則子
1314 志田セツ子
1315 ○大関 雅且

1316 ◎鈴木　雄一
1317　浦田　善弘
1318 ○長田　光義
1319 ○三笠喜美夫
1320 ○京極　紘一
1321　杉浦　治美
1322　水上　雅
1323 ○高橋　功一
1324　吹井　雪夫
1325 ○森川　洋佑
1326　松崎　信吉
1327　伊藤　礼子
1328 ○宇佐見博康
1329　岩倉　貞義
1330　伊藤　孝司
1331　高須　敏久
1332　黒沢　順
1333　鈴木　孝
1334　由良　珠江
1335　安藤　志郎
1336　高井良行満
1337 ○村上　泰賢
1338　梅澤　正紘
1339　太田　正弘
1340　村上　満尋
1341　板橋　元一
1342　酒田　総嗣
1343　水島　鋭秀
1344　榊原　幸子
1345　西沢　信男
1346　太田　陽三
1347　常陸　民生
1348　水野　正雄
1349 ◎遠藤喜重郎
1350 ◎尾形　好雄
1351　稲垣　公平
1352　戸部　玲子
1353 ○文蔵　照雄
1354 ★藤倉　和美
1355　木村　陽子
1356　鴨田　行雄
1357　師田　信人
1358 ○粂川　章
1359 ○若林　岩雄
1360　浅野さつき
1361　阿部　忠正
1362　三河　常郎
1363 ◎前島　孝夫
1364　山口　芳子
1365 ×菅野　一寛
1366　大山　敦
1367　藤原　邦俊
1368　宮田　史郎
1369 ○工藤　光隆
1370　熊谷　洋
1371 ◎西嶋錬太郎
1372　松島　祐一
1373 ×堀内　章雄
1374　森　辰男
1375 ○伊藤　文雄
1376　西出　悦子
1377　藤岡　明生
1378　竹野　君代
1379　柴田　拓
1380 ○田中　英博
1381　畠山　優
1382　大野　広美
1383　豊田　昇
1384　斉藤　光明
1385　岩本　健一
1386　野畑　浩之
1387　勝田誉士雄
1388　木辺　正夫
1389　飯田　徳治
1390 ◎新郷　信廣
1391　菊池　春枝
1392　久保塚隆子
1393　田中　基博
1394　滝口　康博
1395　北川　伸二
1396　森田　富雄
1397　石原　俊洋
1398　物井　洋子
1399　丸　誠一郎
1400 ○大澤　清

■ 1401～1500

1401　石井　孝寿
1402　三ツ元三郎
1403　武田　良雄
1404 ○遠藤　京子
1405　北村　敏郎
1406　山本　紘典
1407 ○山形　正巳
1408　後藤　豊子
1409　奥畑　清美
1410 ×鈴木　荘平
1411　増田伊世子
1412　松本実千代
1413 ◎金沢　健
1414　高場　健司
1415 ○松川　吉晴
1416　佐藤　孝充
1417 ◎土谷　正伸
1418　日詰　恭修
1419 ×渡辺　優
1420 ○真下　富夫
1421　水野　栄次
1422　戸田　幹雄
1423 ★斉藤　孝雄
1424　坂田　興一
1425　内田　志郎
1426　浅見　昭夫
1427　木村　一興
1428　鈴木　直勝
1429　岸本喜久男
1430　後藤　治男
1431　山下　丈夫
1432　田原　節子
1433　若林　善弘
1434　平田　眞士
1435　斉藤　君子
1436　坂本　正智
1437　勝畑　浩
1438　福田　廣
1439　高尾　馨
1440 ★勝山　教孝
1441 ○米本　光徳
1442　小澤　富夫
1443　田中　成三
1444 ◎片岡　邦夫
1445　栗津　浩二
1446　鈴木　邦彦
1447　谷本　秀喜
1448 ×土居　正勝
1449 ★埜口　正則
1450　岩佐　正敏
1451　小暮　利江
1452 ○S.クマール
1453 ×速水　豊
1454 ○伊藤　守
1455 ○武井　博
1456 ○須田　栄一
1457 ×大竹　重信
1458　加呂眞貴子
1459　柏木　恒造
1460 ○山崎　幸二
1461　名塚　達夫
1462　星野　通明
1463 ◎桶川和気夫
1464　松岡　憲二
1465　小馬　恒雄
1466　山本　春雄
1467　白石　宣夫
1468 ○大崎　健司
1469　藤原　一孝
1470　林　邦博
1471　鈴木治三郎
1472　吹田　有徳
1473　三宅　世展
1474　大澤　清美
1475　中山　松夫
1476　佐々木一夫
1477 ×土方　浩
1478 ◎中村　武昭
1479　植田　宗男
1480 ◎青木　正樹
1481 ★本田　荘八
1482　中江　啓介
1483 ×古橋　隆一
1484 ○山下　健夫
1485　高井　勝夫
1486　竹原　夏美
1487　川名　正一
1488 ○石川　昌
1489　河原　文武
1490　尾形　芳秀
1491　三好喜代美
1492 ◎小泉　俊夫
1493 ◎名塚　秀二
1494　松島　宗一
1495 ○湯沢　好夫
1496　西川　隆
1497 ○長　繁夫
1498　荒川　市郎
1499　福田　義幸
1500　遠峰　富子

■ 1501～1600

1501　細貝　登
1502　金子　一実
1503　近藤　和美
1504　伊藤　定夫
1505　川又　義民

1506 和田 純一
1507 ○笹岡 慎司
1508 ◎森山 安次
1509 田中 秀樹
1510 芝田 敬久
1511 深津 安志
1512 ★小暮 孝
1513 奥村 清明
1514 山上 幹夫
1515 林 信之
1516 江良 勝輝
1517 上総紀久男
1518 小林 一夫
1519 長谷川 諭
1520 ○三浦 敏弘
1521 米田 薫
1522 山名 常夫
1523 本松 秀敏
1524 倉迫 和幸
1525 ★阿部 直彦
1526 橋爪 雅彦
1527 北 和則
1528 ○竹村 重和
1529 小倉 真
1530 馬場 俊裕
1531 環 良導
1532 小坂 邦広
1533 柏倉 市郎
1534 伊藤 智樹
1535 飯鉢 優
1536 石田 勇悦
1537 高坂 裕紀
1538 森谷 正彦
1539 小玉 義広
1540 佐藤 尚志
1541 長谷川啓明
1542 大屋 明義
1543 佐藤 誠
1544 ◎宮崎 久夫
1545 鈴木 茂
1546 ○工藤 誠志
1547 ○宮崎 勉
1548 ◎糸屋 幸
1549 成尾 竹俊
1550 舟山 邦芳
1551 長本 進
1552 藤原 武重
1553 早田佳津子
1554 清水 義彦
1555 下井 孝雄
1556 西川 義広
1557 ○松永 義夫
1558 成田 洋
1559 吉越 文隆
1560 佐藤 隆司
1561 石井 年光
1562 小川 貞夫
1563 丸谷 政明
1564 渡 俊二
1565 内田 利朗
1566 伊東 節郎
1567 袖崎 敏昭
1568 ×太田 行雄
1569 ◎戸谷 薫
1570 ◎橋本 康弘
1571 ◎平田 清志
1572 栗田喜代美
1573 ◎江本 嘉伸
1574 ○大久保 博
1575 田中 吉春
1576 渡辺 照人
1577 尾関 敏彦
1578 青山 博
1579 ○国沢 鎮雄
1580 ○清岡 謙一
1581 ◎天城 敞彦
1582 ○田中 誠司
1583 ○安部 誠
1584 遠藤 容弘
1585 阿部 恭浩
1586 津田 元
1587 ◎小野寺光義
1588 麻田 正博
1589 森光 一仙
1590 平野 晋二
1591 山崎 泰人
1592 宮阪 憲一
1593 真行寺栄一
1594 ○伊藤 博紀
1595 井塚 真樹
1596 小川 智
1597 福田 靖
1598 後藤 裕
1599 青黄 靖
1600 位田 守

■ 1601～1700

1601 米川 正利
1602 佐藤 清司
1603 丸山 史郎
1604 石川 忍
1605 鈴木 繁
1606 ○高羽 秀徳
1607 村串 静江
1608 阪上 義次
1609 小段 賢
1610 ★肥田 繁男
1611 二階 寿人
1612 米山 和男
1613 羽田 明史
1614 佐藤 俊介
1615 ◎武部 秀夫
1616 ○結城 正明
1617 ○丸山 芳雄
1618 ○高木 敏男
1619 桑名 信幸
1620 石川 進
1621 森田 雅博
1622 宮代 良治
1623 ×峯本 枢
1624 ◎中川 裕
1625 ×陳 親博
1626 富重 薫
1627 伊藤 光男
1628 遠藤 幸夫
1629 倉田真知子
1630 立野 正敏
1631 ○栗山 敏三
1632 ○大内 倫文
1633 ×高橋 賢一
1634 山西 敏彦
1635 熊代 泰夫
1636 ○三好 誠
1637 矢島 敬雄
1638 ×新舛 憲三
1639 武田 博仁
1640 櫛島 俊司
1641 長野 稔
1642 梅沢 俊
1643 三輪 力
1644 坂入 一彦
1645 小島 剛博
1646 ○浅地 徹
1647 岩本 侑三
1648 黒石 恒
1649 亀田 文恵
1650 ○関口 政男
1651 小林 真也
1652 香原 和子
1653 太田 博久
1654 ○江本 英通
1655 新野 清
1656 高橋 幸子
1657 設楽 純子
1658 管野 昌子
1659 今村 朗子
1660 佐々木直子
1661 ○江崎 幸一
1662 小野 和子
1663 加藤 弘司
1664 ◎村上 和也
1665 左近允輝一
1666 ○徳間 勇一
1667 笠松 幸衛
1668 ×鈴木 美雄
1669 土屋 博
1670 ★今給黎宣幸
1671 ○渡辺 雄二
1672 中島 正史
1673 藤井 雅章
1674 吉賀 信市
1675 西野 信昭
1676 大森 和子
1677 梨田 善昭
1678 ◎熊田 雅史
1679 ×新貝 勲
1680 松井 尚純
1681 ◎吉田 憲司
1682 園山 研二
1683 小林 一見
1684 光畑 幹夫
1685 最上 はる
1686 高浪 文隆
1687 ★菅沼 勲
1688 延地 京子
1689 亀井正次郎
1690 古田 修
1691 佐藤 武志
1692 井上 和子
1693 金森 和男
1694 ◎千明 政彦
1695 伊藤 文雄
1696 佐藤 文明
1697 山岸 喬
1698 須佐見吉生
1699 ◎須藤 圭一
1700 ◎遠藤 登

■ 1701～1800

1701 ◎下田 泰義
1702 ○詫間 悟
1703 ○菊池 卓雄
1704 新保 栄司
1705 新保 節子
1706 湯浅 道男
1707 ◎坂上 利明
1708 広瀬 昇之
1709 ○永田 秀樹
1710 福田 久勝
1711 水越 武
1712 八木 祥光
1713 ◎中村 正勝
1714 ○小山 芳一
1715 松林 芳弘
1716 大塚喜代子
1717 玉谷 正夫
1718 唐戸 弘邦
1719 山下 重光
1720 原 守哉
1721 ×俵谷 久義
1722 須藤 昇
1723 三島隆一郎
1724 ○嶋村芙美江
1725 伊藤 克巳
1726 八ケ代正次
1727 三輪みどり
1728 入谷 浩右
1729 山田 好郎
1730 谷川 幸利
1731 ○渡部 清治
1732 ○大内 政宣
1733 ×西野 正晃
1734 成田 俊夫
1735 佐々木弘二
1736 鈴木 英二
1737 ×中込清次郎
1738 市橋 隆二
1739 ○井樽 努
1740 ×大浜 健次
1741 稲木 昌夫
1742 山田 修
1743 平尾陽太郎
1744 椎名 晴夫
1745 ○伊藤 哲朗
1746 浅田 晋平
1747 ◎岡田 勇孝
1748 水科 善隆
1749 阿部 嘉範
1750 渡辺 繁明
1751 神戸 恵子
1752 松本 吉隆
1753 ○金森 博之
1754 新谷 英世
1755 ◎岩崎 洋
1756 K.K. グハ
1757 ○督永 忠子
1758 ○ナジール
1759 塙 勉
1760 ×斎藤 安平
1761 門島 逸平
1762 柴本 武信
1763 松木 武信
1764 ○馬場 博行
1765 梅野 満雄
1766 ◎寺沢 玲子
1767 ◎塩田 純一
1768 小林 憲生
1769 中川 紘一
1770 ◎金子 英一
1771 ◎菅原 和明
1772 山本 茂雄
1773 ○則友 進
1774 川田 修二
1775 石井 清
1776 ○高橋 敏雄
1777 佐藤 修
1778 浅倉 豊
1779 吉崎 岳
1780 杉山 正樹
1781 D.パンディ
1782 野村 優
1783 福井 俊之
1784 榛地 良行
1785 ○杉林 仁止
1786 ○東谷 昭三
1787 平井 謙二
1788 ○星野 貢
1789 中村 正治
1790 村中 康
1791 ○中野 圭一
1792 ×徳島 和男
1793 ○大橋 英児
1794 橋口 隆
1795 川島 弘
1796 ◎佐藤 緑
1797 岡本 正人
1798 加藤 智二
1799 ◎松元 邦夫
1800 ×小松 幸三

■ 1801～1900

1801 ◎渡辺 斉
1802 村上 正
1803 内村 友宏
1804 森山公美丈
1805 ○工藤 哲靖
1806 竹内 敬一
1807 沼 賢亮
1808 ◎福山 佶
1809 ○譚 佐強
1810 ◎佐藤 光由
1811 今井 敬一
1812 ◎吉田 文江
1813 平元 忍
1814 ×三枝 照雄
1815 泉 洋一
1816 佐々木みゆき
1817 ○木下 祥子
1818 早川 昭子
1819 茂木 初邦
1820 小林 佳子
1821 福田 裕子
1822 ○市川 春代
1823 ×峯本 枢
1824 ○大藤たか子
1825 ○柳沢 剛男
1826 吉川 勲
1827 ○鳥井 修一
1828 松浦 浩
1829 小泉 武栄
1830 ○宮川 清明
1831 米田 康男
1832 佐々木禮子
1833 ◎今村 裕隆
1834 ○溝端 文則
1835 井上 道雄
1836 船尾 修
1837 ○川嶋 保幸
1838 町山 健二
1839 杉本 伸一
1840 柳澤 和宏
1841 丸山 邦男
1842 中島 和彦
1843 尾原 由教
1844 小川 昌彦
1845 永塚 朗
1846 小田 典宏
1847 伊藤 剛
1848 ◎石川 龍彦
1849 花高 了三
1850 細海 昭二
1851 石川 啓二
1852 ○大金 信夫
1853 大久保主計
1854 高橋 孝次
1855 清水 充治
1856 南指原さゆり
1857 ○菅野 千尋
1858 金子 珠実
1859 高橋 俊也
1860 石川 裕司
1861 大野 説子
1862 小沢 隆明
1863 ◎清水 修
1864 滝口 良二
1865 小暮 文彦
1866 高橋 洋昭
1867 堀 三津子
1868 高橋 岸男
1869 ★二俣 勇司
1870 風間 雅子
1871 友田 健治
1872 箕田 一彦
1873 綾戸 新二
1874 ×滝田 収
1875 荷宮 英二
1876 阿部 幹雄
1877 小石 栄蔵
1878 高橋 史郎
1879 林尻 悟
1880 ○石田 道幸
1881 辻 秀信
1882 ◎松木 克雄
1883 藤原 義彦
1884 江村 克志
1885 菅原 護
1886 中野 和子
1887 遠藤 幸寿
1888 ○志小田美弘
1889 ○奥野 三郎
1890 ◎太田 健

1891 ◎藤原　拓夫
1892　渡部　光則
1893 ○田部井政伸
1894　渡辺　寛治
1895　玉沢　伸章
1896 ◎増田　　隆
1897　広本　俊也
1898 ◎伊藤　正毅
1899　黒石川由美
1900　村岡由貴夫

■ 1901～2000

1901 ○古川　英勝
1902　佐藤　　哲
1903　奥　　和男
1904 ○中山　秀樹
1905　梁　　永林
1906　森山　英穂
1907　児島　　修
1908　斉藤　順二
1909　佐伯　成司
1910　吉田　能啓
1911　岩坪　　宏
1912　田尻　信広
1913 ○藤田　伸一
1914　斉藤　祐一
1915 ◎田辺　　治
1916 ○戸川　　浩
1917　清水　保志
1918　牧瀬　敏裕
1919 ◎吉田　秀樹
1920　井下　隆弘
1921 ◎峯岸　　一
1922 ◎江尻　健二
1923 ×香川　　毅
1924　小原　　博
1925 ○牧　久真子
1926　柴崎　裕代
1927　丸山　尚道
1928　柳沢　昭夫
1929 ○山本　一夫
1930　八幡　常正
1931 ◎橋本　珠樹
1932　長谷川喜久男
1933　伊藤　泰造
1934　山崎賢二郎
1935 ○奥村　　豪
1936 ◎関根　幸次
1937　矢作　郁子
1938　宮内　幸男
1939　渡辺　輝男
1940 ○松田　靖彦
1941 ○高田　幸子
1942 ◎林　　雅樹
1943　松永　信子
1944　菅沼　弘子
1945　安田　素彦
1946　永尾　剛士
1947 ○九里　徳泰
1948　三好　　誠
1949 ○澤村　幸蔵
1950 ○村井　龍一
1951 ◎藤田　弘基
1952　菅野　公一
1953 ○酒井吉次郎
1954 ◎酒井　國光
1955　河合　峰雄
1956　深野　稔生
1957　二宮　優子
1958　石川　龍之
1959 ◎山中　芳樹
1960　長谷川　守
1961　高柳　健一
1962　石津　航平
1963 ×猿渡　健司
1964　綱島　潤一
1965　増島　葉子
1966　大類　　広
1967　鈴木　元彦
1968 ○室岡　　博
1969　野村　光勇
1970　大勝　浩司
1971　小原　和晴
1972 ○外山　勝平
1973　秋山　正人
1974 ○山本　秀夫
1975 ○植松　満男
1976 ○奥村　　博
1977 ○伊藤　克巳
1978　田中　基喜
1979　鈴木　秀雄
1980 ○川上　　茂
1981 ○酒井　正寛
1982 ○村上　　武
1983　浦住　文枝
1984 ◎井上　　功
1985　清瀬　芳則
1986　張　　湘偉
1987　大野　邦晴
1988　最上　一次
1989　小笠原　功
1990 ○西田　　均
1991 ○笠井　芳郎
1992 ◎高橋　　堅
1993　井古田忠男
1994　尾鷲　和也
1995 ○秋山　恭子
1996 ○神長　幹雄
1997　西村　秋二
1998　渋谷　千秋
1999 ○矢口　勝義
2000 ◎小松　明子

■ 2001～2100

2001　柿沼　　孝
2002　尾形　真也
2003 ○吉井　英生
2004　伊藤　　剛
2005 ×石坂　　工
2006　前野　和重
2007 ◎谷田川　武
2008 ＊田部井淳子
2009　伊藤　龍治
2010 ○西川　　修
2011　土田　義人
2012　山田　良二
2013 ○谷口　雅朗
2014　山田　政巳
2015　畑　　典之
2016　青田　晋行
2017　遠藤　雄悦
2018　千葉　貴子
2019 ○山本　　篤
2020　知久　哲也
2021　阿蘇　一博
2022　服部　憲司
2023　沢野　　公
2024　大河原真也
2025 ×小山　　晃
2026　菊地　陽子
2027　吉田　二教
2028　木谷　博史
2029　守分　正明
2030 ○大蔵　喜福
2031　荒川　紀一
2032 ◎清水　純子
2033 ◎加藤　孝子
2034 ○熊谷　　隆
2035 ◎久保　　均
2036 ○鹿島　庄平
2037 ○福島　功夫
2038　鈴木　　治
2039　千田　雅之
2040　藤田　　清
2041 ○河田　　厚
2042　千場　　晃
2043 ○遠藤　克昭
2044 ○伴野　勇夫
2045　安　　栄種
2046　宮川　　章
2047 ◎藤田久美子
2048 ○安田　一郎
2049　松浦みどり
2050 ◎国重　光熙
2051　関　　裕保
2052 ○重廣　恒夫
2053　末吉　祐子
2054　一宮　繁紀
2055　山口　朝栄
2056 ○村上　博行
2057　赤星　光一
2058 ◎彌野　光一
2059　坂原　忠清
2060　直野　　淳
2061 ○川崎　浩史
2062 ◎田中　祥治
2063　塚越　幸子
2064　長森　幸一
2065 ○石原裕一郎
2066　岡田　充弘
2067　草田　　修
2068 ○大谷　　司
2069 ○大井田賢一
2070　遠藤　昌志
2071　水野　俊哲
2072　狩野　正広
2073 ＊香取　静子
2074　嶌田　　聡
2075　圓山　快廣
2076　宇野　　徹
2077　平岡　敏治
2078　佐々木　剛
2079 ○西村　　哲
2080　鈴木　明克

2081 新海 裕悟
2082 青山 暁男
2083 西川 勝生
2084 藤田 和之
2085 ○河内 正樹
2086 ○平川 宏子
2087 小野 武彦
2088 益子 英雄
2089 ○居川 康祐
2090 ○伊藤 吉樹
2091 船越 重幸
2092 ○村上 芳男
2093 白幡君太郎
2094 ◎後藤 文明
2095 ○我妻 邦夫
2096 野上 建紀
2097 小太刀 健
2098 伊藤 清春
2099 ○中村 保
2100 ○中島 雄三

■ 2101～2200

2101 ○伊藤 英世
2102 神戸 治男
2103 稲泉 眞彦
2104 松浦 伸
2105 ◎田中 一江
2106 ×波木井三寅
2107 ◎福山 京子
2108 ○中山 裕明
2109 成崎 公生
2110 ○早川 晃生
2111 松田 仁志
2112 和仁 達朗
2113 ○大須賀春一
2114 高田 智博
2115 小田 隆三
2116 ○小西 浩文
2117 ○江塚 進介
2118 ×星野 龍史
2119 ◎喜内 敏夫
2120 ◎戸部 秀男
2121 中谷 敏夫
2122 中尾 清治
2123 ○今野 昌雄
2124 ○関根 章平
2125 本多 孝
2126 合田 祐介
2127 ○沢田 幸子
2128 千葉 真嗣
2129 関口 顕俊
2130 ○森谷 雅春
2131 井上 博之
2132 上原 和明
2133 秋山 剛
2134 ○田村 正勝
2135 ○高見 清十
2136 ◎杉野 智英
2137 川上 豪
2138 吉岡 俊博
2139 ×北川みはる
2140 ×佐々木豊喜
2141 中居 満穂
2142 中島 睦美
2143 ○平石 英雄
2144 柏倉 秀克
2145 ×佐藤 彰
2146 荒木 幹治
2147 山崎 茂
2148 西内 義人
2149 佐藤 由
2150 井田 實
2151 ○丸山 正記
2152 小西 一郎
2153 ○森 保仁
2154 谷口 純三
2155 ◎野沢井 歩
2156 ◎鈴木 正典
2157 ○渋澤 眞一
2158 小野 貞夫
2159 ○安田 里子
2160 ○池田 隆信
2161 木村功二郎
2162 堀江 誠克
2163 中村 忠敬
2164 杉山 義昭
2165 黒田 次郎
2166 花房 憲男
2167 小野田 靖
2168 ○秋山 和彦
2169 ○吉村 千春
2170 ○米山 悟
2171 加藤 千代
2172 ○柳 穣
2173 島田 和生
2174 ◎安藤 斎
2175 金子 直子
2176 大森 佳子
2177 ○山岡 人志
2178 ◎古関 正雄
2179 沼田 洋一
2180 佐野 耕司
2181 川辺 謙二
2182 仁科 友夫
2183 陶 法義
2184 小倉 一夫
2185 中田 和良
2186 林本 章
2187 重栖 隆
2188 山口 直之
2189 ＊大竹 尚子
2190 鈴木 典仁
2191 ◎高野 雅洋
2192 ○佐藤 健
2193 森尾 直康
2194 渋谷 芳雄
2195 山口 斌
2196 ○森田 千里
2197 ○中村 広
2198 天野 一郎
2199 城田陽一朗
2200 ＊菅原 愛里

■ 2201～2300

2201 ○賀集 信
2202 ○内海 努
2203 ○斎藤 繁
2204 ○大西 敏明
2205 ○鷲津 清
2206 小川 和彦
2207 小池 正器
2208 田村美奈子
2209 斉藤 和子
2210 ○石川 富康
2211 ○大宮 求
2212 ○白沢 真弓
2213 ○亀田 佳恵
2214 山口恵美子
2215 笹瀬 雅史
2216 ○河口 攻
2217 岩田 達郎
2218 ◎笹原 芳樹
2219 ○洞井 孝雄
2220 ◎太田 康夫
2221 上田 雪
2222 ◎星野 光
2223 ○宮武 淳
2224 尾上 弘司
2225 川原 英歳
2226 三枝 啓子
2227 堀 綾音
2228 ○伊藤 宏範
2229 ○林 孝治
2230 ○大槻 利行
2231 武田 剛
2232 ○斎藤 勤
2233 ○市川 義輝
2234 野村 和義
2235 ＊中山 敦子
2236 北村 俊之
2237 小川 裕正
2238 山岸 憲一
2239 金 保國
2240 山崎 裕晶
2241 ○得田 公明
2242 久慈 正弘
2243 ◎小塚 和彦
2244 ○久保田賢次
2245 ○伊丹 紹泰
2246 ○長谷川昭一
2247 ○池上 邦彦
2248 西口 正治
2249 河西 貴史
2250 ○平田 和照
2251 栂 哲夫
2252 小久保 壮
2253 ○樋上 嘉秀
2254 ○武田 澄人
2255 荒井 俊彦
2256 ○牧野総治郎
2257 高野 正道
2258 ○岡野 修
2259 ◎林 英子
2260 ○廣瀬 学
2261 ○香取 純
2262 ○藤井信一郎
2263 吉國 和人
2264 ○後藤 真
2265 西原 強
2266 ○宮崎 孝
2267 ○及川美奈子
2268 武藤 豊
2269 ○西川 建夫
2270 ○七宮 勝広

2271 ◎中島　俊弥
2272 ○田中　俊甫
2273　大城　泰
2274　大島　義広
2275　久保木　学
2276 ★福沢　卓也
2277 ○長谷川庸作
2278 ◎古関千代子
2279 ○浅野　勝巳
2280 ★工藤　潤二
2281　遊佐　正明
2282　渡邊　宏紀
2283 ○金子　文雄
2284　小笠原重篤
2285　橋井　参二
2286 ○貫田　宗男
2287 ○溝手　康史
2288　西田　正生
2289 ○井上　重治
2290 ○原田　裕之
2291　藤田　鎮大
2292　牛島　浄
2293 ○関根　勝
2294　篠原　敏夫
2295　盛野　英喜
2296　鎌田　耕治
2297　石田　清
2298 ◎寺田　勉
2299 ○戸室　誠一
2300　正木　直子

■ 2301～2400

2301 ◎南　伸明
2302 ○吉田　隆司
2303　大滝　勝
2304 ◎稲富　昭
2305　堀川　虎男
2306　樊　永寧
2307　鮑　永忠
2308　泉田　清幸
2309 ×斎藤喜美雄
2310　井上　教裕
2311 ◎北條　治男
2312 ○井上　仁
2313 ×小林　穣
2314 ○松山　昭
2315　大沼　達郎
2316 ○森　達弥
2317 ○田島　茂治
2318 ×高野　春夫
2319 ○日南長二郎
2320 ○森　茂
2321 ○久保　毅
2322　橋村正悟郎
2323 ○滝口　紀彦
2324　小田切直人
2325　田中加代子
2326 ○高田　英明
2327　鷲崎　好
2328　上村　博道
2329 ○東條　利文
2330 ○阿部　訟二
2331 ★渡辺　靖之
2332 ○岩崎　俊夫
2333 ×横山　秀一
2334 ◎内山　章
2335　杉山　敏彦
2336　江口　正徳
2337　高野　佐知
2338　井口　功
2339 ○真嶋　花子
2340 ○辻野　健治
2341 ＊辻野　治子
2342 ◎寺沢　善信
2343 ○上原　昭則
2344　山田　耕司
2345 ○難波　治雄
2346 ○吉岡　祥
2347　木村　博幸
2348 ◎金丸　裕司
2349　竹岡康一郎
2350 ◎小野寺　斉
2351 ◎福島　正明
2352 ○鈴木　邦光
2353　須藤　克昌
2354 ○目黒　孝道
2355　瀬尾　正敏
2356 ○中島　秀澄
2357 ○山岸　和男
2358 ＊山岸　喜世
2359　大亀　寿秀
2360 ★鈴木　洋介
2361 ○五十嵐辰美
2362 ○竹澤　雄三
2363　友藤　考則
2364 ○平泉　宣
2365　三井　利安
2366 ○粂川　章
2367　関田　睦巳
2368　矢崎　政美
2369　杉浦　広幸
2370　宇都木慎一
2371 ◎涌澤　亮介
2372 ○渡辺　誠
2373　玉井浩一郎
2374　原　真
2375 ○伊藤　政義
2376　吉門　達彦
2377 ○住吉　仙也
2378 ◎柳　謙一
2379 ○佐々木慶正
2380 ○田中　正明
2381 ○山本　幸生
2382 ○杉田　和子
2383　藤井　真三
2384　奥田　仁一
2385　小山　敦
2386　大泉　剛
2387 ○中島　清治
2388　狩山　謙
2389 ◎青木　茂
2390　小林　剛
2391　柿岡　等
2392 ○藤谷　和人
2393 ×松本　省治
2394　有持　真人
2395 ○睦好　正治
2396 ○K.D.ジョン
2397 ○鷹取　宏
2398 ○大橋　清一
2399 ○佐々木　保
2400 ○田中　喜樹

■ 2401～2500

2401 ○須田　利昭
2402　緑山　英雄
2403 ○本橋　篤
2404 ○中谷　正秀
2405 ◎八木原博子
2406 ◎八木原真央
2407 ◎名塚　好子
2408 ×保坂　忍
2409 ×精盧　行信
2410 ○大野　義照
2411 ○鹿田　雄三
2412 ○森　和之
2413　竹田　寛次
2414 ○青木　勉
2415 ○鍋師　晴佳
2416　浅井　武
2417　前田　恵久
2418 ○大山　博文
2419　白木　政志
2420　藤本　勇
2421　北山　卓嗣
2422　高橋　正也
2423 ○田辺　浩司
2424　佐藤　信二
2425　今泉　摩子
2426　菊地　基
2427 ○丸野　孝雄
2428　澤山　恵
2429　三枝　昌彦
2430　田村　康一
2431　高須　章
2432　加藤　利弘
2433　難波　城行
2434　谷平　祐一
2435　大谷日佐夫
2436　久保　直樹
2437 ○大久保一宏
2438　望月　啓治
2439　福田　醇
2440 ○石澤　好文
2441　戸谷みゆき
2442 ○丸山　隆司
2443 ○小笠原　進
2444　山吉　行永
2445 ○相楽　利夫
2446 ○小山　幹
2447　高橋　伸二
2448　松村　歩
2449　定藤　正弘
2450 ○大西　保
2451 ×小西　政継
2452 ×原田　達也
2453 ○相澤　敏信
2454 ◎久保田一美
2455　中世古隆司
2456 ×盧　周孝
2457 ○杉本　恭二
2458　黒川　伸一
2459 ○倉澤　保男
2460　津谷　直樹

2461 ○増井　行照
2462　安藤　博
2463 ○国分　等
2464 ○堤　信夫
2465 ＊堤　久美
2466 ○安部　博
2467 ○石川　一郎
2468　成末　洋介
2469　石野　俊子
2470 ○宮本　数男
2471　林　昌平
2472　松崎　美晴
2473　杉山　敬弘
2474　光永　正樹
2475　小野玄二郎
2476　島倉千絵子
2477 ○吉井　敏英
2478 ○増永　広樹
2479 ○平田　恒雄
2480　古川　雅士
2481　佐々木穂高
2482 ○斎藤　惇生
2483　三木　崇
2484　冨永　重夫
2485　西尾謙市郎
2486　堀切　敏
2487　時田　光晴
2488　久保田敏康
2489　渕　雅広
2490 ○道家　博司
2491 ○野口　道雄
2492 ○迫田　泰敏
2493 ◎田辺ともみ
2494　藤井　正彦
2495　吉江　光善
2496 ×品川　幸彦
2497 ○橋本　昌典
2498　山崎　紀子
2499　高市　豊義
2500 ○野口　信彦

■ 2501～2600

2501 ○伊東　敏紀
2502 ◎佐藤　英樹
2503 ○鈴木　俊弘
2504　小林　賢次
2505 ◎佐々木千恵
2506 ◎寺田　捨巳
2507　中澤　安信
2508　長谷川啓明
2509 ○田中　秀行
2510 ○小室　豊
2511 ○押田　礼子
2512　中山　健
2513 ○浦　一美
2514 ○西本　武志
2515　鈴木　一恵
2516 ○稲垣　圭子
2517 ◎糸屋　幸
2518 ◎宮川　裕子
2519　八木　博
2520　竹内　千恵
2521 ○影山　弥生
2522　吉田　健吾
2523　辻田希代彦
2524 ×小山　良子
2525 ×福本　誠志
2526 ○熊崎　和宏
2527　花谷　泰広
2528 ○田島　崇行
2529 ○永田　幸一
2530　矢田部　裕
2531 ○片岡　泰彦
2532 ○米澤　俊
2533 ○鳥居　佐吉
2534　石井　収
2535　大滝　明夫
2536 ○加藤　和美
2537 ○佐藤　憲次
2538 ○神崎　忠男
2539 ○池田　優典
2540　松平　盛亮
2541 ○宮前　哲治
2542　堰代まさ子
2543 ◎鮫川　太一
2544 ○大塚　知則
2545 ○橋本しをり
2546 ○青山　年宏
2547 ○新谷　英世
2548 ○坂本　宏和
2549　加藤　正俊
2550 ○加藤　秀木
2551 ○石本　朋子
2552 ○穂積　玲子
2553 ◎和田　秀明
2554　飯塚　陽子
2555 ○岡部　純一
2556　渡部　弘
2557 ◎東野　良
2558 ○横山　均
2559　真鍋　貴彦
2560 ○狩野　明美
2561 ○中村　圭司
2562 ○森本　英之
2563 ○利部　輝雄
2564 ○高橋　和弘
2565 ○竹内　洋岳
2566　盧　雲錫
2567　高橋　厚志
2568 ○大塚　徹
2569　酒井　清二
2570 ×橋谷田義文
2571 ×大宮　秀樹
2572　保坂　正美
2573　山梨　秋良
2574 ○岩崎　栄
2575　八島　修
2576 ○小林　正巳
2577 ○鈴石健二郎
2578 ○末盛　亮
2579 ○誉田　泰章
2580 ○桜沢善之助
2581 ＊桜沢美佐子
2582　今井　正史
2583 ◎保坂　巌
2584 ○岩瀬　雄二
2585　岡田　康洋
2586 ○大竹　幹衛
2587 ○松島　宏
2588　掘永　敏克
2589 ○綿貫　剛
2590 ○田中　敏雄
2591 ○白井　良岳
2592 ○廣田　豊
2593　豊嶋　芳晴
2594 ○斎藤　彦之
2595 ○大住　恵子
2596 ○近藤　明
2597 ○清水　潤
2598 ○渡辺　庄一
2599 ○山本　薫
2600 ○田中　洋史

■ 2601～2620

2601 ○植田　雄介
2602 ○山口　忠夫
2603　天宮　央貴
2604 ◎重川　英介
2605 ○大場裕美子
2606　場本　剛士
2607　大野　美治
2608 ○菅原　聡
2609 ○谷西　和夫
2610　木村　充彦
2611　川鍋　典子
2612 ○笠原　俊幸
2613 ○吉永　英明
2614　多賀　寛
2615 ○川上　浩史
2616 ○山本　強
2617　長堀　崇
2618 ※清水　久江
2619　坂上　知子
2620　西羅　誠
2621 ○長水　洋
2622 ○梅澤　佳子
2623 ○水野起己
2624 ○加瀬美留男
2625 ○坂井　広志
2626　金井　増光
2627 ○劔持　典之
2628　高橋　明
2629　大本　研二
2630 ○増山　茂
2631　星川俊一郎
2632 ○児玉　康
2633　春日　明
2634　池邊　勝利
2635 ○吉田　和宏
2636　佐藤ナツ子
2637　庄司　幸雄
2638　江藤　公
2639 ○三宅　愛弓
2640 ◎近藤　幸夫

2641 高畠　聡
2642 大木　康晴
2643 ○堤　拓哉
2644 松本　弘
2645 越智　勝治
2646 佐藤　文博
2647 ○伊吹　明郎
2648 ○榎本　幸博
2649 ○平野　崇
2650 ○鈴木　一己
2651 ○高柳　昌夫
2652 ◎佐藤　英樹
2653 ◎嶌田　富夫
2654 ○高貝喜久雄
2655 ○古谷　朋之
2656 ○長谷川昌雄
2657 ○太田　吉雄
2658 ○井上　徹三
2659 ○齊藤　信久
2660 ○有川　博章
2661 菅野　公彦
2662 ○川畔武比古
2663 佐藤　大輔
2664 平岡　千明
2665 ○桂　太郎
2666 ◎佐藤　邦彦
2667 ○鶴巻　陽一
2668 ○平山　良正
2669 山本　嘉雄
2670 鈴木　利雄
2671 ○井上　彬
2672 斎藤　孝雄
2673 宮澤　章
2674 ○上妻　恒宣
2675 高田　良一
2676 ○遠藤　清夫
2677 小林　晴美
2678 ○生玉　道雄
2679 ＊熊崎　皆子
2680 ○大神田伊曽美
2681 ○錦織　英夫
2682 瓦林　紘司
2683 ○長島　義人
2684 ○恩田真砂美
2685 ○神谷　進
2686 ○下越田　功
2687 ○井出　里香
2688 ○亀田　広明
2689 関　太郎
2690 ○宗像　充
2691 ○桐沢　輝治
2692 ○鈴木　量子
2693 野津　基弘
2694 ○庄田　一信
2695 亀田　幸一
2696 ○浅野　能弘
2697 平岡　竜石
2698 ○久保田昌幸
2699 ○冨田　政裕
2700 ○玉井　雅治

■ 2701～2800

2701 上野　孝一
2702 ○瀧根　正幹
2703 ◎坂口　三郎
2704 ○加藤　伊助
2705 ○海老　潤子
2706 ○出利葉義次
2707 吉村　賢
2708 ◎岩崎美津子
2709 周　軍平
2710 三井　素子
2711 伊東　仁司
2712 ◎田中　文男
2713 佐藤真理子
2714 ○斉藤　義孝
2715 ○荒川　洋子
2716 ○小林　俊紀
2717 ○古屋　仁志
2718 ○遠山　雄二
2719 ◎関根　吉江
2720 ○下間　洋司
2721 ○谷口　静枝
2722 ○福永　泰三
2723 ○小田　直美
2724 宮坂　敦子
2725 ○鳥居　和雄
2726 ○福原　裕
2727 ○大林　公紀
2728 ○丸山　博司
2729 ○横山　浩二
2730 ○片平　和志
2731 ○平田　攻
2732 ○吉松　哲俊
2733 櫻井　利幸
2734 ◎森谷　信次
2735 ○大内　一成
2736 ◎長谷川和雄
2737 ○青木　玲子
2738 ○小泉　太史
2739 ◎城　隆嗣
2740 ○坂本　正治
2741 ○芹澤　尚敬
2742 ○熊村　秀人
2743 ○田中　光彦
2744 ○萬徳　清孝
2745 ○浅野　弘幸
2746 内野　安登
2747 ○亀井　正
2748 ○杢代　新一
2749 ○宮川　真一
2750 ○安部　鉄雄
2751 ○安藤　富夫
2752 ○佐藤　益國
2753 ○年森　靖
2754 ○乃一　広志
2755 ○千葉　富夫
2756 ○渡辺　富夫
2757 ○林　祥治
2758 ○加藤　正徳
2759 ○和田　淳二
2760 丸山　剛
2761 丸山　尚代
2762 ○磯野　澄也
2763 ○佐藤　修史
2764 ○鳴海　大助
2765 ○小林　重一
2766 ○斉藤　正朗
2767 ○志村真由美
2768 ○角田富美子
2769 ○深井　嘉浩
2770 ○野高　健司
2771 金子　敬
2772 ○上小牧慶寛
2773 ○田中　正志
2774 ○寺田　七郎
2775 ○及川　英男
2776 ○伊藤　秀明
2777 ○土器屋由紀子
2778 ○高橋　宙
2779 ○田辺　義博
2780 ○蜷川　達也
2781 ○東　昭一
2782 ○山本　悟
2783 ○日野岡宣男
2784 ○北村　誠一
2785 ○増子　麗子
2786 ○鈴木　昭
2787 ○関根　孝
2788 ○塚田　宏司
2789 ○乾　昌宏
2790 ○吉武　裕志
2791 ○梅山　義弘
2792 ○飯　正
2793 ○百瀬　尚幸
2794 ○伊東　研二
2795 ○中島　清松
2796 ○児玉　隆司
2797 ○近藤　照衣
2798 ○上田　京子
2799 ○富澤　征子
2800 ○岩渕冨士男

■ 2801～

2801 ○高橋留智亜
2802 ○田渕　一
2803 ○守屋　益男
2804 ○曽我　浩從
2805 ○半本　秀博
2806 ○河野千鶴子
2807 ○銭本　隆行
2808 ○京極　紳
2809 ○小林　享子
2810 ○山本　宗彦
2811 ○笠井　正基
2812 ○正井　教之
2813 ○藤川　康
2814 ○石川　和伴
2815 ○早川　和子

第Ⅷ部

創立30周年記念報告
報道にみるＨＡＪ

日本ヒマラヤ協会創立30周年記念
講演会&祝賀会報告

1998年１月25日、本会の創立30周年を記念して講演会と祝賀会が開催され、天候にも恵まれ多くの参加者を得て盛大裏に終了した。

★講演会と記念楯贈呈の部

北の丸公園にある科学技術館・サンエンスホールを会場に９時15分、尾形好雄常務理事の司会で開会。初めに、オープニング映像として、東の雪宝頂から西のクラウンまでＨＡＪの登山の模様がスライド100枚によって紹介された。未踏の地に足跡を残したＨＡＪらしく、新鮮な映像の連続であった。

次いで主催者の挨拶として、遠藤登会長が外国からの講演者やＨＡＪ創立者の柴田顧問等に謝辞を述べた。そして、稲田定重理事長が30年の歴史を振り返り、年代ごとの主な出来事を紹介した。ここで柴田前会長が飛び入りで、ＨＡＪを創立する切っ掛けになった留学生受入れなどのエピソードを紹介。

－記念講演－

Ｉ）名塚秀二氏

［世界の三大峰を語る］

冬期サガルマータ（エヴェレスト）南西壁初登攀、チョゴリ（Ｋ２）北西壁初登攀、カンチェンジュンガ北東支稜（シッキム側）登頂など、ヒマラヤの東から西の八千メートル峰に足跡を残し、６座に７回登頂して現在日本で最も多くの八千メー

講演会風景、右上から講演する名塚、汪、カパディア、神原各氏と左は会場風景

▼記念楯贈呈者写真。左から汪、カパディア、神原、坂口、山本、近喰、督永、辻、田中、永田、香取、各氏と遠藤会長

トル峰の登頂者である氏が、登山の切っ掛けやヒマラヤへの係わり紹介し、スライドを駆使してヒマラヤの美しさ、楽しさ、厳しさを語った。

Ⅱ）汪鉄銘氏

［中国登山の現状と問題点］

中国登山協会の副主席である氏は、中国では古代にも登山活動があったことを紹介し、旧暦の9月9日には「重陽節」と言って皆でお酒や弁当を持って山に登ったことを紹介、一種の健康法だったと言う。また、近代登山は、旧ソ連の指導を受けて1955年から始まったと紹介。1979年に外国隊に門戸を開いた結果、中国も多くの技術やノウハウを学び、刺激を受けたことを紹介した。現在では中国人の登山活動も活発になり、特に若者にはスポーツクライミングが大人気であるが、資金的に人工岩場や指導者不足のためレベル・アップに時間がかかると指摘。環境対策も統一した部門がないので対策も遅れ勝ちであることを指摘した。

（通訳は中国登山協会の李豪傑氏）

Ⅲ）ハリシュ・カパディア氏

［インド・ヒマラヤの概念］

インド・ヒマラヤの東から西にかけて広く足跡を残している氏が、自国の山々を地域別に紹介し、その後160枚に及ぶスライドを駆使して、シッキム・ヒマラヤから東部カラコルムに至るインド・ヒマラヤの全域について詳細に紹介し、ヒマラヤン・ジャーナル編集長の面目躍如たるものがあった。（通訳はＨＡＪ会員の菅原愛里さん）

▲飛入りで講演する柴田金之助前会長

Ⅳ）神原達氏

当初予定していたネパールの元観光大臣であるハルカ・グルン氏が来日できなくなり、原稿が送られてきた。グルン氏は神原氏に代読を依頼。しかし、それでは味けがない。神原氏は1960年からグルン氏の友人であることも分かるように、その時代のネパールの精通者であるので、氏の体験を交えて紹介して頂いた。グルン氏の原稿にはネパールの観光経済が沢山の数字を使って書かれているので大変興味深いものであった。

－記念楯贈呈－

ＨＡＪの30年の歴史を支えてくれた部外の皆様に遠藤会長から記念の楯が贈られた。前記の講演が1時間早く終了したため、来場済みの約半分の方に贈呈され、残りは記念祝賀会会場で贈呈された。その後贈呈者の記念撮影があり、17時講演会の部は終了した。楯贈呈は下記の皆さんであった。

（講演会の部の参加者数は240名）

中国登山協会／インド登山財団／チベット登山協会／インド・チベット国境警察／日本山岳協会／日本勤労者山岳連盟／東京都山岳連盟／日中協会／ＩＣＩ石井スポーツ／西遊旅行／ヒマラヤ観光開発／日本メディコ／ティ・エッチ・アイ／ダックス／エクスプレス・ハウス／日パトラベル／シカールトラベル／エアー・インディア／東京新聞出版局／山と渓谷社／近喰組／ハリシュ・カパディア／ハルカ・グルン／中坪印刷／

★祝賀会の部

九段会館に場所を移して行われた祝賀会は18時頃からウエルカム・パーティ方式であったため、あちこちで全国から久し振りに集まったメンバーたちの輪ができ華やいだ雰囲気の中で始まった。

定刻18時半、八木原圀明常務理事の司会で開宴。記念の楯贈呈の後、遠藤登会長挨拶、来賓代表と

して日本山岳協会の坂口三郎会長、中国の汪鉄銘氏、インドのハリシュ・カパディア氏、日本山岳会の大森薫雄副会長、日本勤労者山岳連盟の安藤英典副理事長と祝辞を戴き、日中協会白西紳一郎事務局長から乾杯のご発声を頂いた。会場の２ヶ所にあるテレビには、日中合同ラプチェ・カンと日印合同リモの登山隊の模様が映し出されていた。宴もたけなわになる頃には、アチラコチラで同じ隊員同志の記念撮影が始まり、最後には壇上での撮影大会の様相となってしまい交通整理ができるほどの盛況であった。

稲田定重理事長の締めの挨拶があり、祝賀会は無事20時半お開きとなった。参加者は270名。なお、祝賀会参加者には、426ページのＨＡＪ創立30周年記念誌「雪の住処 30年の記録」が贈呈された。

★御礼

30周年記念行事の実施にあたりまして、会員の皆様に資金協力のお願いをして参りましたが、多くの皆様からのご協力によりまして、式典関係と出版の一部（記念誌発行）を終えることができました。引き続き出版関係を順次実施する予定であります。尚、野外と写真展につきましては、中止とし、機会を見て別途企画致します。これまでに寄せられました会員の皆様のご協力に感謝申し上げます。　　（文責：山森　欣一）

◎　1998年１月31日現在　資金カンパ
延べ人数：251　総額：5,554,000円
下記の方々から３口以上のご協力を戴きました。
［30口］八木原圀明［20口］遠藤登［15口］尾形好雄［10口］柴田金之助／山森欣一／寺沢善信・玲子／星野光／酒井國光／鈴木雄一／松舘正義／井上功／佐々木千恵［8.8口］小林英見［８口］八嶋寛［７口］稲田定重／出口當／後藤文明［５口］植松秀之／飛田和夫／名塚秀二／佐藤光由／小島守夫／野沢井歩／中岡久／山田豊／渡辺斉／土谷正伸／宮崎久夫／遠藤克昭／滝口良二／吉田秀樹・文江［４口］久保均［３口］古原和美／伊藤正毅／久保開次／中込清次郎／植竹清孝／西郡光昭／高田幸子／平田清志／岩水龍峰／山倉洋一／森山安次／天城敞彦／片岡邦夫／阿部淳／今村裕隆／山崎幸二／岩崎栄／橋本康弘・珠樹／市川春代／大西保／督永忠子／保坂昭憲／石川龍彦／品川幸彦／花崎洋／田村俊介／大内倫文／金子勇一／中川裕／天宮央貴／匿名２名

▼祝賀会風景、上から日山協会・坂口会長、日中協会・白西事務局長、ヌン登山隊参加者

ヒマラヤ登山で遭難事故ゼロを目指して
「ストップ・ザ22」の達成を!!

山森欣一（日本ヒマラヤ協会常務理事）

ヒマラヤの大自然は、限りなく岳人を魅了します。

日本隊のヒマラヤ登山は、隆盛の一途をたどり、六〇〇〇㍍以上の高峰に挑戦した岳人は一九五二年～八八年の三十七年間で延べ七〇〇〇人を超えようとしています。

また八〇〇〇㍍峰マナスルをはじめ、六十四座（パキスタン27座、ネパール21座、中国11座、インド4座、ブータン1座）の七〇〇〇㍍峰に初登頂し、八〇〇〇㍍峰一二七人、七〇〇〇㍍峰六四八人のサミッターも誕生しています。

しかし、このような華やかな成功の裏には、無念にもかけがえのない生命を落とした岳人が一七六人にも達する厳しい事実もあります。入山者約七〇〇人に対する死亡率は実に二・五%という高いものであり、四〇人に一人の割で死亡しています（左表参照）。

さらに、日本隊のヒマラヤ登山では、一九六八年から八八年まで二十一年間、連続して死亡事故が発生するという不名誉な記録を更新中でもあります。そこで今年は二十二年目に当たるので、死亡事故はゼロにすべく「ストップ・ザ22」の合言葉を考えました。

このような現状を打破するために、日本ヒマラヤ協会（ＨＡＪ）では、日本隊のヒマラヤ登山から死亡事故を「ゼロ」にすべく、関係者に協力をお願いすることになりました。

一人でも多くの岳人にこの合言葉の意味するところをご理解いただき、楽しいヒマラヤ登山を実現していただきたく「岳人」誌上から呼びかけを行うものです。

誰も好んで死に向かうわけではありません。しかし、ヒマラヤ登山に潜む危険や死亡率の高さなどを知りながらも、多くの岳人の深層心理には「自分だけは大丈夫！」という意識があるのもまた事実です。

事故を防止するためには、二重、三重の、慎重なまでの態度が必要です。その一つとしてこの合言葉――「ストップ・ザ22」――を位置づけたいのです。

遭難のまとめ

過去の死亡事故の事例をみますと、雪崩七七人（四三・八%）、転滑落七〇人（三九・八%）、高山病一三人（七・四%）、そのほかクレバス転落、落石、ロープ切断、凍死、行方不明などに分類されます。

しかし、遭難は常に複数の要因が重なり合って引き起こされています。一つの現象だけに目を奪われることなく、全体を見つめる目を養うことが肝要です。

過去の遭難報告書の多くには、冬山登山の経験不足、リーダーシップの欠如、高山に対する認識不足、異文化への理解不足、攻撃と防御への無配慮、流行や模倣の氾濫など、反省が繰り返し述べられています。

いま、なにをするか

「ストップ・ザ22」を達成するためには、ヒマラヤ登山に向かう岳人一人ひとりの生命への執念が必要です。目標をしっかりと確認し、計画全体をもう一度チェックし、特に生命を守ることを最優先にした登頂計画であるかどうか確認したいものです。また、ぜひとも過去の失敗例を参考にされることをお勧めします。貴重なる生命を失い、遅まきながらも必死にその原因を探り、反省した報告書が数多くあります。彼らの失敗を他山の石としなければ、死んだ岳人が浮かばれません。

高所登山のメカニズムは複雑です。排他的にならず、多くの経験者から話を聞く姿勢は重要なことだと思います。

生命を守ること――これは世界の人々の共通した願いであり、共通の利益でもあります。

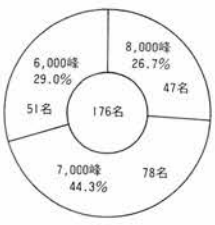
日本隊のヒマラヤ登山と死亡事故

（6,000m以上の峰を目指した隊を対象とした。1952年～1988年）

上段：入山者　左欄：隊数
下段：死亡者　右欄：人数　%＝入山者に対する死亡率

目標＼年度	1952～1969	%	1970～1979	%	1980～1984	%	1985～1988	%	合計	%
8,000m峰	4 / 38	0	23 / 386	4.4	46 / 466	4.7	50 / 465	1.7	123 / 1,355	3.5
	0 / 0		8 / 17		13 / 22		7 / 8		28 / 47	
7,000m峰	46 / 333	1.5	145 / 1,304	2.4	111 / 845	3.9	80 / 537	1.7	382 / 3,019	2.6
	4 / 5		20 / 31		18 / 33		9 / 9		51 / 78	
6,000峰	36 / 169	2.4	127 / 853	2.2	142 / 996	1.7	99 / 660	1.8	404 / 2,618	1.9
	4 / 4		11 / 19		6 / 17		8 / 11		29 / 51	
合計	86 / 540	1.7	295 / 2,543	2.6	299 / 2,307	3.1	229 / 1,602	1.7	909 / 6,992	2.5
	8 / 9		39 / 67		37 / 72		24 / 28		108 / 176	

原因別死亡状況



目標山岳高度別死亡状況

地域別死亡状況

朝日新聞
1985年(昭和60年)6月9日　日曜日　14版　スポーツ　(18)

世界の屋根 処女地狙う

日本ヒマラヤ協会の今年度派遣登山、探検隊
(K2以外は未踏峰)

山名	(標高㍍)	地域	隊長	隊員
K2	(8,611)	カラコルム	飛田和夫	10人
ガンケルプンズム	(7,541)	ブータン	大内倫文	10人
クラウン	(7,295)	カラコルム	館野秀夫	10人
サセルカンリ2峰	(7,531)	イランドト	未定	12人
ギャラペリ	(7,150)	チベット	山森欣一	5人
ヤラダツォ	(5,202)	黄河源流	八木原圀明	21人
ムズターグ	(6,638)	崑崙	森美枝子	8人
チベット高原縦断			未定	7人

ヒマラヤの高峰はほとんど登りつくされ、未踏の八千㍍級は一つもなく、七千㍍峰でも十座余りしかない。残り少ない処女峰を目指して、いま世界の登山界は、ヒマラヤ最後の初登頂時代を迎えているが、このなかで注目を集めているのは、日本ヒマラヤ協会の存在だ。昨年、世界の未踏峰では、五番目に高いマモストンカンリ（七、五一六㍍）の初登頂を果たした同会は、ことし、別表のようにヒマラヤに八隊を派遣する。うち七隊が未踏山域だ。一つの山岳団体で同じ年にこれほど処女地域に多くの隊を送りこむのは世界的にも珍しい。

日本ヒマラヤ協会

高田馬場（東京）に事務所を持つ日本ヒマラヤ協会（柴田金之助会長、会員七百人）は、体協加盟の日本山岳協会とは違って、ヒマラヤ愛好者が集まって十八年前につくった民間クラブだ。日本登山界のしにせ、日本山岳会（一九〇五年創立）と比べると、後発もいいところだが、二十代の会員が圧倒的に多く、その若いエネルギーを結集して、これまでに六千㍍以上の山に延べ二百人近くを登頂させた。

日本ヒマラヤ協会隊が初登頂を狙うブータンのガンケルプンズム（七、五四一㍍）＝同協会偵察隊写す

探検派の7隊

登山界をアッといわせるような派手な氷壁ルートの登はんを専門にしたRCCⅡや山学同志会といった先鋭的クラブと比べると、活動は地味だった。余り注目されない山々にコツコツと登りながら、ネパール、インド、中国などの山岳国との交流を深めてきた。各国から日本にやってくる若い山男を、会員たちが自宅に泊め、一緒に日本アルプスなどに登りながら、技術をみがき合ってきた。

ここ数年、処女峰の登山許可がよく日本ヒマラヤ協会におりるようになった背景として、こうした〝草の根〟の交流を見逃せない。これがインドやチベットに多くの知人を生み、その人たちが国際的な登山許可取得競争のなかで、ヒマラヤ協会をバックアップしてきた。昨年、軍事上の要所に近い東部カラコルムのマモストンカンリ登山を実現できたのも、インド陸軍登山家との長年の家族ぐるみのつき合いが実った結果といわれる。

草の根交流が効き どーんと登山許可

慎重な行動心がける

稲田定重・日本ヒマラヤ協会専務理事の話　黄河源流とK2南東稜（りょう）を目指す二隊はすでに現地入りした。あとの隊もそろそろ出発するが、どの隊も資金調達に苦しみ、個人負担百五十万円以上のケースも出ている。妻子のある隊員は大変だろう。八一年のナンダカート登頂と昨年のナンガパルバット遠征で計十一人の会員を雪崩で失うという痛恨の遭難を経験しているので、今回はとくに慎重に動くように心がけている。ガンケルプンズムは米国にも同時許可がおりたが、初登頂を意識することなく、マイペースで目指したい。

それにしてもことし派遣の八隊のうち、七隊が未踏検地域に入山というのは、驚きだ。ほとんどの山域が、米国や西欧の隊、なかには、日本隊の申請とぶつかりながら、許可を取得した。

K2登山を除く七隊はいずれも探検的色彩の濃い遠征ばかりだ。ブータンのガンケルプンズム、K2の中国側にひっそりと立つクラウン（中国名は皇冠峰）などは、遠望写真があるだけで、登頂ルートもはっきりしない。また、今回は偵察活動に重点を置くチベットのギャラペリも興味深い。同峰はヒマラヤ山脈を貫通しているヤルツァンポ（ブラマプートラ）川の大湾曲峡谷沿いにそそり立つ鋭峰で、地形は複雑をきわめ、全容を伝える地図も写真もない。偵察が成功すれば、貴重な資料が得られるだろう。（武田）

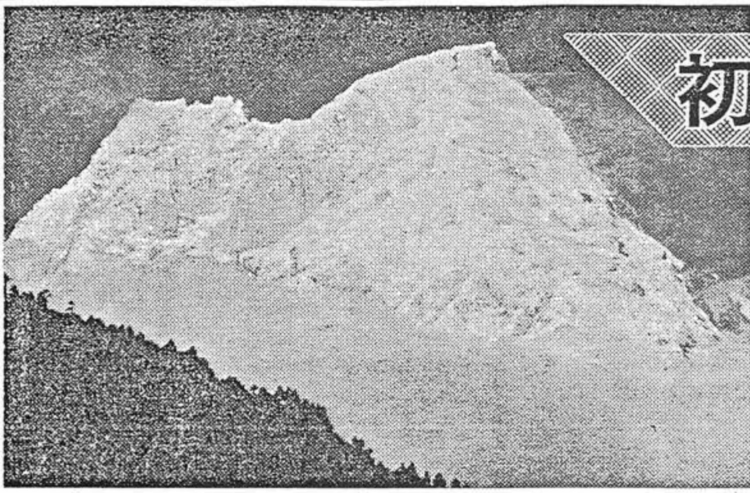
朝日新聞
1986年（昭和61年）11月28日　金曜日　14版　スポーツ　（18）

初登頂時代そろそろピリオド

ヒマラヤ

未踏は10座足らず

征服急ピッチ　日本隊も活躍



今秋、日本ヒマラヤ協会隊が初登頂したギャラペリ＝昨年の同協会偵察隊うつす

注目の7,000メートル峰　（◎は未踏峰）

山名	標高（メートル）	地域	
◎ナムチャバルワ	7,762	チベット	84年中国隊断念
クーラカンリ	7,554	チベット	86年神戸大初登頂
◎ガンケルプンズム	7,541	ブータン	87年HAJ隊挑戦へ
サセルカンリⅢ峰	7,495	カラコルム	86年インド隊初登頂
チョーアウイ	7,354	チベット	86年HAJ隊初登頂
◎ジェジェカンプーカン	7,300	ブータン	
◎クラウン	7,295	カラコルム	87年静岡大挑戦へ
カルジャン	7,221	チベット	86年HAJ隊初登頂
◎ツェンダカン	7,200	ブータン	
崑崙最高峰	7,167	崑崙	86年東農大初登頂
ニェンチンタングラ	7,162	チベット	86年東北大初登頂
ギャラペリ	7,151	チベット	86年HAJ隊初登頂
◎チリン	7,090	カラコルム	86年横浜山岳会断念
◎カント	7,089	東チベット	87年同志社大挑戦予定

（注）HAJ＝日本ヒマラヤ協会

今季、ヒマラヤでは、残り少なくなった未踏の七千㍍峰をめぐって、激しい初登頂争いが繰り広げられ、日本隊だけで、六隊が処女峰に登頂する、という華々しい成果をあげた。世界には八千㍍級の未踏峰は一つもなく、これで残された主な七千㍍級の山は十座にも満たなくなった。これらの山々も、あと一～三年内に登頂されそうな形勢にあり、地球上の七千㍍峰初登頂時代にピリオドが打たれる日も迫ってきた。

今季のヒマラヤ登山シーズンは、日本ヒマラヤ協会（HAJ）隊のギャラペリ初登頂を最後に、幕を閉じた。ことしの同協会の活躍はめざましく、チョーアウイ、カルジャンの両未踏峰も制し、チベットの処女峰三座の完登を記録した。

中国領ヒマラヤでは、社会人中心のHAJ隊に対抗して、学生登山隊もがんばった。未踏峰として世界で二番目に高かったクーラカンリに神戸大が登頂したのに続き、東北大がニェンチンタングラ、東京農大が崑崙の最高峰（七、一六七㍍の無名峰）にそれぞれ初登頂し、このところ低迷気味の学生登山界に大きな朗報をもたらした。

この結果、世界に残された主な処女峰は別表（◎印）の通りとなった。うち、世界の登山界で最も関心を集めているのは、未踏峰としては、世界最高のナムチャバルワ（七、七六二㍍）と、ブータン最高峰のガンケルプンズム（七、五四一㍍）の二つ。

両方とも難しい山だ。ナムチャバルワはヒマラヤ山脈を貫通しているヤルツァンポ川（インド側ではブラマプートラ川）の大湾曲峡谷沿いにそそりたつ鋭峰である。地形は複雑をきわめ、八四年の中国隊は登頂可能ルートも発見できなかった。ガンケルプンズムには、昨年、精鋭ぞろいの米国隊とHAJ隊が別ルートから初挑戦したが、氷の大岩壁にはばまれ、今秋の英国隊もやはり失敗した。

注目のナムチャバルワには、米国など各国隊から登山許可申請が殺到しているが、HAJ隊が一、二年のうちに中国と合同で挑戦する交渉を進めている。同隊は、先月、大湾曲峡谷をへだてて、ナムチャバルワの対岸にそびえるギャラペリに初登頂した際、地形をじっくり観察する機会に恵まれた。また、HAJ隊はガンケルプンズムに来年挑む許可を取得した。さらに同志社大も東チベットの秘境にある未踏峰カントに来年、挑む。

これらの残る七千㍍峰は、いずれも未探検地域にあるだけに、ルート偵察などの苦労を伴うが、八千㍍峰とくらべると標高も低く、現在の進んだ登山技術と装備なら、せいぜい一、二回の挑戦で登頂は可能とみられている。八千㍍峰初登頂時代（一九五〇～六四年）に続く第二の初登頂時代の終盤をいろどる「最後の輝き」も、いよいよ見納めである。（武田）

産経新聞　夕刊　平成7年(1995年)　11月21日　火曜日　<第三種郵便物認可>

日本ヒマラヤ協会 遭難防止へ一役

"世界の屋根"甘くみるな 過去の事故を一冊の本に

「今回の悲惨な遭難も、貴重な教訓として伝えていきたい」。山岳愛好家でつくる「日本ヒマラヤ協会」（稲田定重理事長）は、ヒマラヤの高峰に挑んだ日本登山隊のすべての遭難を分析し、一冊の本にまとめて来年にも発行する。この中に、今月初めの大雪で日本人トレッキング客計十六人が死亡した一連の事故も急きょ、盛り込まれることになった。同協会は「遭難は似た状況で起きる」とし、過去の系統的研究が事故防止に役立つ―と話している。

同協会は昭和四十二年に設立され、会員数は約八百人。毎年三、四回ずつヒマラヤ登山隊を派遣しているが、一方で過去の六度の遭難で十六人の死者を出している。

このため遭難防止への取り組みに熱心で、毎年「事故対策研究会」を開催。昨年には、ヒマラヤで平成五年までに起きた日本隊の遭難について、その概要と統計をまとめた「日本隊遭難の記録」（A4判五十五㌻）を発行した。

記録は、ヒマラヤの六〇〇〇㍍以上の高峰に挑んだ日本登山隊、一千二百十隊のうち百三十一隊が遭難事故に遭い、二百二十二人が死亡したと明示。死亡率は日本登山隊員全体の二・五㌫にのぼる―と指摘し、〝世界の屋根〟を安易に目指すことに警鐘を鳴らしている。先月発行した会報「ヒマラヤ288号」でも、過去の大量遭難の実態をリポート。その直後に今回の相次ぐトレッキング遭難事故が起き、衝撃を受けたという。

同協会の山森欣一専務理事(五一)によると、山岳遭難は雪崩と、高山病に起因するものとに分けられ、それぞれに対策が必要。多くの命を失った遭難事故には、同じ過ちを繰り返す例も後を絶たないという。

今月起きたトレッキング事故は、ヒマラヤでは乾期の十―十一月中旬には積雪がないというのが常識だったことから、関係者の間で「予期し得ない出来事だった」ともいわれている。しかし山森さんは、昭和六十二年十月に同協会のラプチェ・カン登山隊が、同じように不意の大雪に見舞われた経験を指摘し、教訓を生かせなかったことを残念がる。

同隊は、雪が降らないとされていた四五〇〇㍍地点のベースキャンプが大雪に見舞われ、五三〇〇㍍地点のキャンプは雪崩に流されるなど大打撃を受けた。今回のゴーキョ峰の遭難と似た状況だったという。

同協会が来年の発行を目指す遭難事故分析集は、昨年発行した記録集をもとに内容を大幅に拡充し、三百㌻ほどに再編集する。個々の事故を報告書などを頼りに詳細に調べ、天候、地理条件、隊員の状態、アクシデントの有無などを分析。そこから教訓を導き出し、登山愛好家らに広く知らしめたいという。

同時に、現地の地理・気候を研究している学者らの観測データを登山者の安全確保にフィードバックできるよう、学術界に情報提供を求めていく方針だ。

円高や余暇の増大で日本からヒマラヤを目指す登山愛好家は増えつつあるが、安全確保はおろそかになっていないか。「登山者がベテランなのかビギナーなのかーヒマラヤの自然はそれを知らない。一人ひとりが研究し、十分に準備するほかはない」と、山森さんは警告を発している。

日本ヒマラヤ協会が昨年発行した「日本隊遭難の記録」（左）と、大量遭難をリポートした会報「ヒマラヤ」288号

天候、地理条件、アクシデントの有無など分析

インドを代表する登山家が来日

―ITBP司令官だったフカム・シンさん

フカム・シンさん（中央）を囲むＨＡＪの白沢真弓さん（左）と加藤孝子さん

長らくインド・チベット国境警察（ＩＴＢＰ）の高官を務めて、昨秋退官したフカム・シン（Hukam Singh）さんが来日した。一九八五年と九一年の来日は日本ヒマラヤ協会（ＨＡＪ）の会議に出席したものであるが、今回はインド冬期競技財団の責任者として、猪苗代で開催されるアジア地域の少年少女スキー選手権に参加する選手を引率して来日した。

フカム・シンさんは、今年五十八歳。インドのクマオンヒマラヤのパンチ・チュリの近くにあるムンシャリで生まれた。そのためか、顔立ちは日本的であり性格も温厚である。

十九歳になるまでヒマラヤを眺めながらムンシャリで過ごし、五七年大学に入るために旧英国領時代から有名なヒルステーションであったアルモラに移った。

九年間陸軍生活をした後、国防省の中央警察に入り、インド・チベット国境警察に配属され長らくジョシーマートで勤務し、後年はニューデリーに移った。

フカム・シンさんは、ＩＴＢＰの登山隊として多くのヒマラヤ登山を率いてきた。七〇年にはトリスルに隊長として登頂し、七四年にはシヴリン隊を率いて初登頂に成功している。七六年にはトリスルの最終キャンプの六四〇〇㍍付近からスキー滑降を行っている。

八〇年代半ばからは、東部カラコルムが制限付きながら、外国隊にオープンされたのに伴い、合同登山を実施するようになる。八五年にＨＡＪとサセール・カンリⅡの初登頂に成功。八八年にもＨＡＪとリモⅠに初登頂。九〇年には台湾とサセール・カンリⅠ登頂に成功し、九三年には広島の会とアク・タシの初登頂も成し遂げた。その間、九一年にはＨＡＪと合同隊を組み、シッキム側からのカンチェンジュンガに成功し、九二年にはエベレストに挑み、女性のサントシュを含む八人を登頂させた。サントシュは翌年も登頂して、女性として初の二度登頂者となり、インドで一躍ヒーローとなった。

フカム・シンさんとＨＡＪの付き合いの始まりは、八一年のナンダ・カートの遭難事故がきっかけである。六〇〇〇㍍のキャンプで七人が行方不明となった時、ＩＴＢＰが陸上から捜索隊を派遣したが、その時の司令官がフカム・シンさんであった。

フカム・シンさんは、長らくインド登山財団（ＩＭＦ）の幹事も務めた。八五年にはＨＡＪのインドヒマラヤ会議のゲスト・スピーカーとして講演されたが、その内容は格調高く、自然の中に占める人の役割からヒマラヤに住む人々の存在、その人々と峰のかかわり、また探検家たちの教訓やそして具体的に登山隊として守らなければならない事柄まで、その中身の濃い講話は、参加者たちに深い感銘を与えた。

フカム・シンさんは九三年にＫ２の北側（中国領）からの登頂計画を進めたことがあった。もちろん中国側との綿密な協議の末の計画であったが、この計画は残念ながら、印・パの微妙な関係のために断念せざるを得なかった。また、九三年にはインドと中国の国境アルナチャル・プラデイシュに聳える未踏峰ニェギェ・カンサンにＨＡＪとの合同登山を進めたが、これも当時の中・印の微妙な関係の中でシッキムに転進した。

アプローチの非常に悪い、そのニェギェ・カンサンに昨秋インドのＩＭＦ隊が初登頂し、今年はこの山群の主峰であるカント（中国側から八八年に同志社大学隊が初登頂している）に、またしてもＩＭＦ隊が入山するということを聞くと、なにやらこのラインに動きがあるのではないか思えてくる。

退官後のフカム・シンさんは、ニューデリーで登山やトレッキングを扱うマウンテン・エクスペディション（ＭＥ）という会社を経営している。日本の登山者には頼もしい協力者である。

（日本ヒマラヤ協会・山森欣一）

聡】ダイアナ元皇太子妃が埋葬された英国では七日、国民の間に、荘重さと現代性をミックスした「民衆葬」への満足感とともに、弟のスペンサー伯が献辞の中で展開した「王室批判」への共感が広がっている。ブレア首相はこの日午後、エリザベス女王と会い、今後の王室のあり方について話し合う。

七日付の英各紙は葬儀の特集を組み、献辞の全文を掲載した。スペンサー伯が遺児のウィリアム(一五)、ヘンリー(一三)両王子について「義務と伝統のみにしばられるのではなく、自由に歌えるようなおおらかな環境をつくるために、血のつながった親族として何でもする」と述べたことを、格式重視の王室に対する「大胆な挑戦」と紹介している。

高級日曜紙オブザーバーは社説で「ウェストミンスター寺院で行われた葬儀史上、最も感動的なスピーチ」と絶賛した。古めかしい英王室の体質やチャールズ皇太子への強い不満はお

は自分が即位するか、即位せずにウィリアム王子に王位を譲るかの選択を迫られるだろう」と予想している。

一方、大衆層の読者が多いメール・オン・サンデー紙は、葬儀が国民の不満の「ガス抜き」となり、君主制を強化するとの見方を紹介。ダイアナさんがウィリアム王子の国王即位を熱望していたことから、「同王

爆風伴う氷河雪崩

カラコルム遭難 隊員の写真で判明

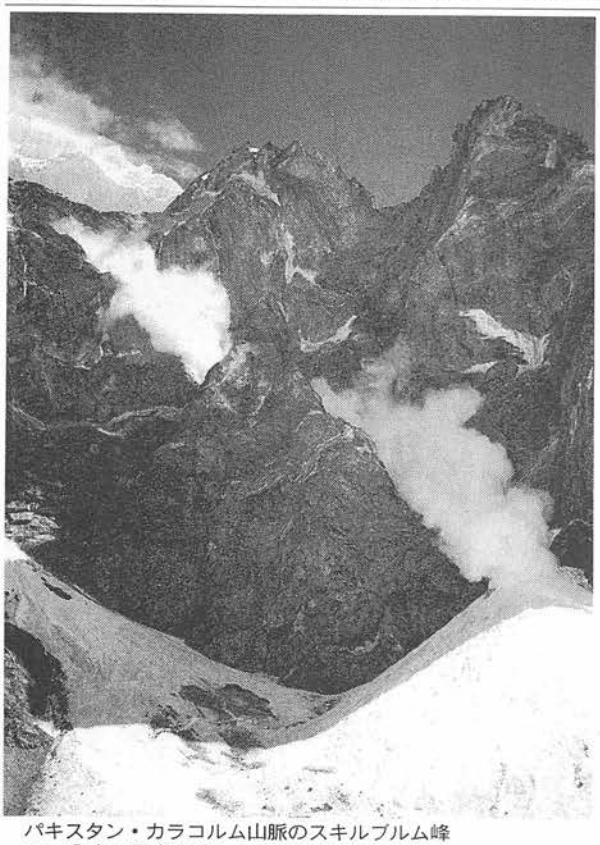
急なV字谷を白煙を上げて落ちる氷塊。はるか上には、岩壁に垂れ下がる氷河の端――。パキスタン・カラコルム山脈のスキルブルム峰(七、三六〇㍍)で先月、日本人六人の命を奪った雪崩は、地形によって起きる、爆風を伴った氷河雪崩だったことが、事故の二週間前、隊員たちが同じ場所で発生した雪崩を撮った写真で分かった。

遭難した「神奈川ヒマラヤ登山隊1997」の尾上弘司隊員(四一)によると、写真は八月五日、ベースキャンプ(BC)から撮影した。「ドーン」という音とともに、BC北側の壁から氷河が崩壊、白煙を上げて約八百㍍流れ落ちた。

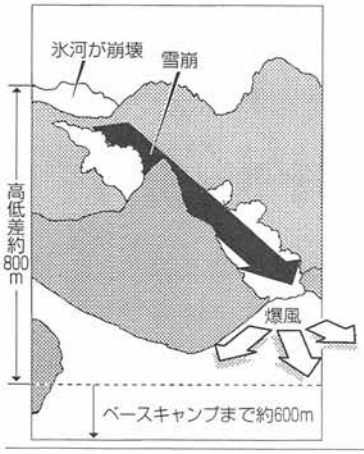
六人の命を奪った雪崩が発生したのは、約二週間後の二十日未明。就寝中だった隊員たちは約四十㍍も吹き飛ばされた。BCは、写真右下の雪崩の通り道から、約六百㍍離れた標高五、三〇〇㍍の場所に設置していた。

雪崩による爆風は、氷河などの崩落で大量の氷塊や雪が谷を流れる時、狭い谷間で空気が圧縮するため発生するとされる。新潟大学積雪地域災害研究センターの和泉薫・助教授(四六)は「大規模な雪崩が起きれば、谷筋と違った方向にも爆風が進む地形だと思う」と話す。

ヒマラヤ遭難史に詳しい日本ヒマラヤ協会の山森欣一・専務理事(五三)によると、氷河雪崩による日本隊のヒマラヤ遭難はこれ以前に二十三件あった。うち、爆風を伴う雪崩によるものは六件で、十四人が死傷した。山森さんは「隊員の予想を超える規模の雪崩だったようだ。爆風が発生しやすい地形を知る上で、この写真は貴重な資料だ」という。



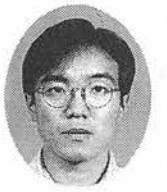
パキスタン・カラコルム山脈のスキルブルム峰で、6人の死者を出した雪崩が起きた現場では、事故発生の2週間前にも、雪崩が発生していた＝「神奈川ヒマラヤ登山隊1997」提供



朝日新聞　1997年（平成9年）9月24日

コラム 私の見方

「爆風雪崩」教訓を生かせ



武田 剛　写真部

カラコルム山脈のスキルブルム峰（七、三六〇㍍）で先月、六人の犠牲を出した神奈川ヒマラヤ登山隊の隊員たちが、山ろくの村で私に語った。「まさか、あそこで雪崩に遭うとは」。雪崩を受けたベースキャンプ（BC）の選定に「問題はなかった」とも話す。ではなぜ、世界第二位の高峰K2（八、六一一㍍）をはじめとする登頂歴がある広島三朗隊長（五四）らベテランが遭難したのか。

一行を襲ったのは、「爆風雪崩」と呼ばれる氷河雪崩による爆風だった。登頂成功後の八月二十日未明、約八百㍍上部の岩壁から氷河が崩壊した。狭いV字谷を流れ落ちる間に空気が圧縮され、猛烈な突風が発生した。就寝中の隊員たちは、テントごと約四十㍍吹き飛ばされた。広島隊長ら六人が死亡し、五人が重軽傷を負った。

BCは氷河が崩れた岩壁の基部から約六百㍍離れていた。雪崩の通過ルートとBCの間には一本の尾根があり、それを乗り越えるとは「考えられなかった」。生存隊員は思い起こす。

しかし、ヒマラヤの大自然は、隊員たちの予測を超える力を秘めていた。雪崩は尾根を越えて、下山を数時間後に控えたBCを爆風がさらった。

広島隊長自身、同じ時期にK2に挑んでいた日本山岳会東海支部隊の田辺治隊長（三六）と、頭上の氷壁を見上げながら、「あれが崩れたら、危ないね」と話し合っている。だが、雪崩が起きても手前の尾根が防波堤となり、BCまで届くとは思っていなかったようだ。その壁で爆風雪崩が起きた。「まさか、あれが本当になるとは……」と、田辺隊長は振り返る。

神奈川隊の遭難について、ヒマラヤ遭難に詳しい日本ヒマラヤ協会の山森欣一・専務理事（五三）は、「予想を超える雪崩だったようだ。でも、山に『まさか』はない」と語る。

九五年十一月、エベレスト山群のゴーキョ・ピーク山ろくで、日本の中高年グループ十三人が死亡した。この時も、「まさか」の雪崩だった。

現場で取材した私は、目を疑った。その六年前、大学の山岳部員として、寝泊まりしていた放牧小屋のすぐ横が遭難地点だった。よく見れば、後ろに約三〇度の急斜面が迫っていた。

「人が住んでいるのだから」と、安心していた小屋の隣で、後に惨事が起きるとは。危険を感じなかった自分を恥じた。

氷河雪崩による日本隊のヒマラヤ遭難はこの四十年間で、今回を含め二十四件起きている。うち、爆風雪崩は八件、二十五人が死傷している。

爆風雪崩の破壊力はすさまじい。国内でも一九三八年と四〇年の冬、北アルプスの黒部峡谷で惨事が起きている。「泡（ほう）雪崩」と呼ばれ、多量の空気を含んだ新雪が、深い谷を流れる間に爆風が発生した。電源開発作業員の宿舎を約六百㍍先の岩壁まで吹き飛ばしたこともあり、埋まった人も含め計百十二人の命を奪った。

爆風雪崩は、その遭難件数が少ないため、過去のデータに乏しく、科学的な研究が進んでいない。今回の事故で、爆風雪崩の研究データがもっとあれば、「まさか」と思わずに、BCを安全な場所に移すなどの対策が取れていたかもしれない。

その意味で、事故に遭った神奈川隊は貴重な記録を残している。惨事の二週間前、事故現場と同じ場所を撮影したフィルムには、雪煙を上げて押し寄せる雪崩が写っていた。

神奈川隊が持ち帰った現場写真などの記録を、爆風雪崩のメカニズムを知る資料に役立ててほしい。山森専務理事も「大切なのは、過去の遭難をしっかり分析し、教訓にすることだ」と話している。

1997年(平成9年)9月11日 (朝刊)

1997.9.11

8000メートル級の山 15番目発見

K2の南東8キロ

【北京10日＝共同】十日付中国各紙は、新疆ウイグル自治区のカシュガル地区でこのほど、標高八、〇一一㍍の山が新たに確認され、世界の八千㍍級の山は計十五座となったと報じた。

この山は「中央峰」と名付けられ、高さは十五位。

カラコルム山脈の世界第二の高峰K2（八、六一一㍍）の南東約八㌔にある。一九七六年に行われた航空観測の際に見つかり近くの高山と連なっているため注意されなかったが、最近になって中国科学院蘭州氷河凍土研究所の専門家らが独立峰であると認定した。

専門家らは「中国地質学上の大きな発見であると同時に、世界の登山界は新たな目標を見つけたことになる」と述べている。

朝日新聞

1997年(平成9年)9月11日 (夕刊)

(9) 読

◆15座目の8千㍍峰発見

【北京10日＝共同】十日付中国各紙は、新疆ウイグル自治区のカシュガル地区でこのほど、標高八、〇一一㍍の山が新たに確認され、世界の八千㍍級の山は計十五座となったと報じた。

この山は「中央峰」と名付けられ、高さは十五位。カラコルム山脈の世界第二の高峰K2（八、六一一㍍）の南東約八㌔にある。一九七六年に行われた航空観測の際に見つかり、近くの高山と連なっているため注意されなかったが、最近になって中国科学院蘭州氷河凍土研究所の専門家らが独立峰であると認定した。

讀賣新聞

1997年9月11日

朝日新聞社
運動部　御中

日本ヒマラヤ協会
山森欣一

８０００メートル級の山
１５番目発見　記事について

貴紙本日朝刊の上記記事拝見致しました。記事の内容の「Ｋ２の南東８キロ」が正しければ、この山は、通常ブロード・ピーク中央峰と呼ばれ、既に、パキスタン側から初登頂されており、また、中国側からも登頂されています。さらに、この山群は北峰と中央峰と主峰から成っていて、この三山を縦走したバーティも二つあり、その内の一つは日本隊です。

ちなみに、中国で販売されている十万分の一の地図では標高８０１１ｍ、山名はＺｈｏｎｇｙａｎｇとなっていますので、これは中央峰と訳せるでしょう。また、山と渓谷社から発行されている「山岳年鑑'８８」の付録の地図［バルトロ氷河・十万分の一］では標高８００６ｍ、山名はブロード・ピークＣとなっています。

以上、参考までに送ります。

「新8000㍍峰」は登頂された山

日本ヒマラヤ協会

中国の新疆ウイグル自治区のカシュガル地区で十五番目の八千㍍峰が新たに確認されたという報道について、日本ヒマラヤ協会は十一日、「通常、ブロードピーク中央峰（八、〇一一㍍）と呼ばれる、すでに知られている山であり、八千㍍十四座は不変だ」と指摘した。

同協会の山森欣一・専務理事によれば、「K2の南東八㌔」という位置が正しければ、パキスタン、中国側からも、すでに登頂され、中国の地図にも載っている。今回、報道された中央峰が、主峰であるブロードピーク（八、〇五一㍍）の衛星峰であれば、山岳界の通例では独立峰とは認定されない。山森専務理事は、中国科学院蘭州氷河凍土研究所が登山に詳しくないため、新たな独立峰として十五番目に数えたのではないか、という。

1997年（平成9年）9月12日

朝日新聞

1997.9.14

テスク発

中国で十五座目の八千㍍峰（八、〇一一㍍）が発見されたという報道があったが、一九七五年にポーランド隊が初登頂したカラコルム・ヒマラヤのブロードピークの中央峰らしい。残念ながら、新発見なんて話は、現代では無理のようだ。

この報道は一九七六年に行われた航空観測の際に見つかったのを中国科学院蘭州氷河凍土研究所の専門家らが独立峰と認定した、というもの。

「ヒマラヤに新峰」つかの間の夢

念のためヒマラヤに詳しい日本ヒマラヤ協会の山森欣一専務理事に確認すると「位置を見ても、中国の地図を見ても、ブロードピーク中央峰」と一蹴された。この地域に入山した登山者たちが、また、飛び回っている衛星が、八千㍍を超える山を見逃すはずがない、というのが常識だろう。

独立峰というのも疑問だ。ブロードピークは主峰、北峰あわせて山塊をつくっている。世界第三位の高峰、カンチェンジュンガなどは、主峰のほか南峰、中央峰、それに京大が初登頂したヤルンカンと八千五百㍍前後の峰があって、一つだ。

登山家にとって、未知、未踏は魅力。この報道があって、何人かから電話があった。だれもが「そうでしょうねえ」。ヒマラヤも寂しくなった。

（迫田　泰敏）

1997年（平成9年）9月14日（日曜日）

讀賣新聞

恐

論説委員室から

幻の八千㍍峰

「十五番目の八千㍍峰発見」の記事に、いろめきたった登山家が多かったろう。

日本ヒマラヤ協会の山森欣一さんもその一人だ。まさかと思いながらも、中国登山協会に一番乗りで登山申請をしようと考えたそうだ。

しかし、念のため地図を見たら、記事の「世界第二の高峰K2の南東約八㌔」の位置には、ブロードピーク（八、〇五一㍍）の衛星峰である「中央峰（八、〇一一㍍）」があった。記事の大もとになった新華社電は緯度、経度も書いており、中央峰に間違いない。となると、とっくに登られた山である。

ただ、新華社電は「ブロードピークとの間に七、八三〇㍍の明りょうな鞍部があり、中央峰は完全な独立峰だ」ともいう。発表した研究機関は単に独立峰だといいたかったらしい。

登山の世界でも、独立峰と衛星峰を分ける明確な基準はない。だが、「八千㍍峰十四座」の数え方は定着しており、中央峰が「十五座目の八千㍍峰」になる可能性はなさそうだ。

そういえば第二次大戦中、インドから中国に向かう米軍機が高度九、三〇〇㍍で山に衝突しかけたと報告、エベレストより高い山がある、と大きな話題になった。一九二〇年代の探検家が「八、五〇〇㍍以上」と発表した中国青海省のアムネマチンが、その山かといわれた。

戦前、多くの探検隊が目指したが、接近が難しく、「なぞの山」として登山家らの注目を集めた。新しい測量では六、二八二㍍で、八一年に日本の上越山岳協会隊が初登頂した。

人工衛星で地上のあらゆる物を詳細に観察できる時代だ。冷静に考えれば、いまさら新しい巨峰が見つかるはずもない。それでも「新たな八千㍍峰出現」が、いかにもありそうな気がするのが、広大な中国の奥深さかも知れない。

（新）

1997年（平成9年）9月16日

朝日新聞

登山共済の夢

山森欣一

日本は四方を海に囲まれ、簡単に言うと山が多い国である。今、日本の山岳は、四季を問わず山登りを楽しむ人たちで溢れている。また、海外登山愛好者も増えている。大変喜ばしいことである。

しかし、その陰で遭難も多発している。登山者の質が違うように、遭難の中身も千差万別である。遭難の当事者になると、否応なしに直面するのが費用の問題である。そこで私が夢見る、ベテランもビギナーも含めた「登山共済」について述べたい。

先ず、あらたに「登山共済機構」の設立が必要だ。現行の登山者を対象とした共済等は、所属団体員のみを対象としているため、対象外の登山者のボイコットにつながっている。登山者のためを標榜している団体が、組織されている、いないで一定のサービスに関して登山者を差別することは理に合わない。この枠を外した組織が必要である。

この「登山共済」は、山登りの行為を行う人全てを対象にする。登山者に条件をつけない。当然のことながら希望者（団体）は誰でも入れる。加入申込と同時に、年掛金の納入でいつでも自動的に加入者となることができる。給付の対象は、機構へ提出された山行（個人・団体）のみで、海外も含めて自宅を出て帰宅までの間に起きた傷害、疾病。原因を問わない（故意は除く）。それと救助・捜索活動（公的機関によるものは除く）。また、給付共済金は、死亡は少なめにし、入院・後遺症もほどほどにして、捜索費用に重点をおく。共済金の支払いは簡潔・迅速に行う。希望者に対する前渡金制度も必要だ。最後に掛金は、年間山行回数が少ない、低山オンリー、ハイキングだけなどの理由で、加入しようか、どうしようか、と迷わないほどの低額が基本である。年掛金として途中加入も同額とする。

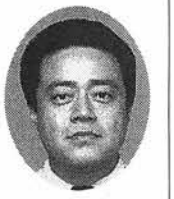
登山共済機構の収入から一定額を、救助網（通信）や救助隊（機材）の整備、安全教育、自己責任による登山の啓蒙の分野に助成を行い、登山者による登山者のための機構としたい。

（労山顧問・日本ヒマラヤ協会専務理事）

日本勤労者山岳連盟「登山時報260号」（1996月10号）

朝日新聞　1998年(平成10年)8月3日　月曜日

1998.8.3



コラム 私の見方

山岳保険制度の整備急げ

近藤　幸夫　運動部

夏山シーズンを迎え、日本山岳協会に連日、百件近い電話が殺到している。一般の登山者にも門戸を開いている山岳保険「特別共済」への申し込みや内容を確かめるものなどだ。九割以上が中高年。遭難を身近な出来事ととらえている、という。

私自身にも体験がある。

大学二年だった一九七九年の夏、山岳部の合宿で南アルプス・駒ケ岳の沢登りをした。仲間が落石で腹部を強打し、動けなくなった。連絡のため、リーダーと二人で下山。長野県警の救助隊員から「急いで救助しないと危ない。民間のヘリコプターは高額だ。支払い能力はあるか？」と念押しされた。当時、同県警は自前のヘリを持っていなかった。結局、悪天候でヘリは飛べず、山岳部OBを中心とした「救助隊」が無事救出した。

本来、登山は自己責任が問われるスポーツだ。ところが、最近の遭難の原因には、トレーニングや下調べなどの準備不足が目立つという。警察庁によると、昨年七、八月に全国で発生した二百四十六件のうち、登山道での転倒や滑落など、地元山岳関係者によると「交通事故のような」事故が六三%を占めた。

しかも、体力・技術不足で、軽いけがでも仲間うちでの救助が望めぬケースが少なくない。今は各県警にヘリが配備されたが、機体整備などで出動できないときもある。民間機による救出だと、夏山では百万円近くかかる。そのため、負担を補う山岳保険に関心が高まっている。

けれども、主な山岳団体が設ける「山岳保険」は、営利目的の事業でないため、広報が山岳雑誌や会報に限られる。年々、加入者は増えているが、詳しい内容まで伝わらず、一般への普及は十分といえない。

先日、北アルプス登山口の長野・上高地を訪ねたとき、登山者に山岳保険について意見を聞いた。加入者は二割に満たなかった。

穂高連峰で仲間と岩登りを楽しんだ大阪府豊中市の会社員、清本久美さん(三)は「山岳保険は装備の一つと思っている。他人に迷惑をかけたくないから入っている」と説明する。一方、未加入者は「遭難したことがない」「危ない山には登らないので不要」などと回答。いずれも「自分だけは遭難しない」と信じている口ぶりだった。

一昨年から会員向けの「山岳保険」を設けた日本山岳会（会員六千人）の中川武・常任評議員(五七)は、保険の意義を別の観点から説明する。「保険に入ると、普段から遭難を意識するようになる。装備やトレーニングなど準備を怠らず登るので、事故防止になる」。現在、九百二十人が加入。「保険会社は原資割れを心配したが、事故が少なく驚いている」と中川さん。

日本ヒマラヤ協会の山森欣一専務理事が提言する「登山共済機構」も、将来の山岳保険のあり方を考えさせる。

「各団体が個別に設けている山岳保険を一つにまとめ、十万人規模になれば、大きな力になる。自前の救助隊を持ち、安全教育の講習を開くことも夢ではない」。ベテラン、初心者を問わず、だれでも安い掛け金で気軽に加入できるシステムへ、山森専務理事の構想は広がる。

海外には実際、この構想に近い組織が存在する。スイスの民間救助組織「REGA」が有名だ。専用ヘリやジェット機を持ち、医師も同乗。二十四時間態勢で待機し、山岳遭難だけでなく、一般災害や交通事故でも駆けつける。年間掛け金は三千円程度。加入者は約百四十万人（九四年）という。

スイス並みとは言わないまでも、各山岳団体には、登山口で手軽に申し込めるシステムや、加入者対象の遭難防止講習会などを、早急に検討してほしい。

スポーツ

山岳界に大きく貢献

30周年の日本ヒマラヤ協会

「登山は文化活動だ」 山森専務

〝世界の屋根〟ヒマラヤに関することなら何でも相談に乗ります―。そんなユニークな団体、日本ヒマラヤ協会（ＨＡＪ）がこのほど創立三十周年を迎えた。登山をはじめとする野外活動の実践、研究、指導、環境保護の啓もうと幅広い活動で知られ、来年一月二十五日に予定されている記念式典に向け、日本の山岳界における大きな貢献があらためて見直されている。

そのＨＡＪを支えているのが専務理事の山森欣一さん（五三）。事務局を一人で切り盛りする傍ら、ヒマラヤの高峰を征服した世界中のクライマーの個人データをはじめ、日本隊の足跡や遭難事故とその原因追跡など詳細な資料をまとめ、多方面に役立てている。

「登山という行為は、文化活動だと思う。困難を克服して一つのことをやり遂げる。それをきちっとした形で評価し、後に続く者に残す責任がある」。とりわけ毎年のように新聞の社会面をにぎわす遭難事故に心を痛める。

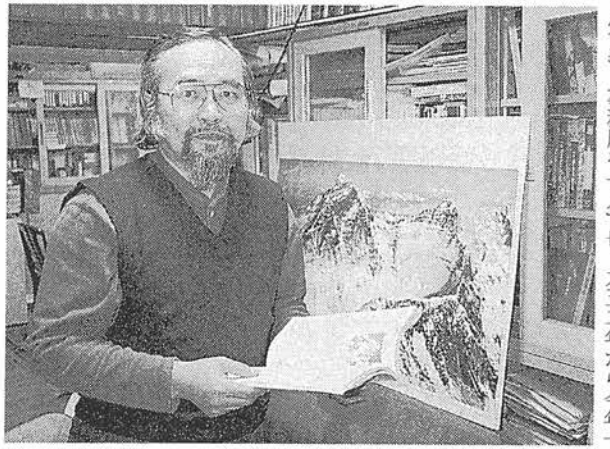
山森さんの資料によると、戦後初めて日本のヒマラヤ登山隊が組織された一九五二年から今年十一月までの四十六年間に、六千㍍以上の峰を目指した日本隊は千四百二十五隊を数え一万四百九十八人が入山。そのうちの実に百四十四隊が死亡事故に遭い、約二・三㌫に当たる二百四十四人が命を落とした。

ただ数字を並べるだけでなく、事故の一つ一つについての状況調査と、地道な原因分析も。同じ不幸を繰り返さないようにとの願いが込められている。

若き日に北アルプスの唐沢岳幕岩の正面壁の初登攀（とうはん）をやり遂げるなど、岩登りの世界で輝かしい業績を残した。今は協会主催の海外登山で主に隊員をまとめる役どころをこなし、機関紙「ヒマラヤ」の編集、情報交換や、研究会出席と多忙を極める。

「ヒマラヤというと屈強な若者の世界と思われがちだが、最近は四十歳以上の中高年や女性の進出も目立つ。危険を避けるだけでなく、自然を守り、ごみで山を汚さない環境に配慮した登山を呼び掛けたい」。このメッセージは、国内登山の愛好家にも聞いてほしい。

ＨＡＪへの問い合わせは、電話０３（３９８８）８４７４。



資料整理に忙しい日本ヒマラヤ協会の山森専務理事

エベレスト
1000人登頂

登山規制緩和後押し

量産支える「請負人」も

エベレストの登頂者が延べ千人を超え、最高峰の大衆化が一段と進んだ。初登頂以来、あらゆるルートが登られ、無酸素や冬季、単独など登山スタイルも出尽くした。それでも、「世界一」の魅力は、各国の登山家を引きつけてやまず、今春は百十八人（日本人十五人）が山頂を極めた。大量登頂の背景には最近、人気を集めている「ガイド登山」の存在がある。

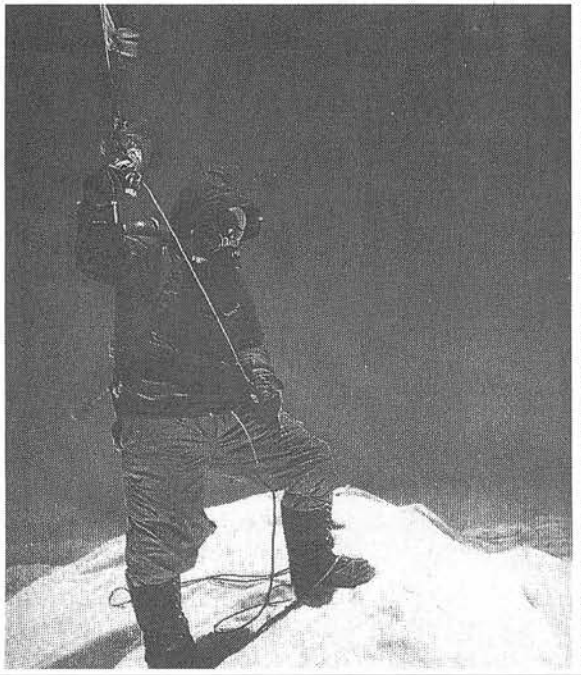
欧米などの企画会社が組織した公募型登山隊は「ガイド登山」と呼ばれ、ガイドやシェルパに助けられ、頂上を目指す。酸素を吸って固定ロープを伝い、好天に合わせて一気にアタックする。複雑な登山許可の取得や物資輸送なども料金に含まれ、一般登山家でもエベレストが身近になった。

「ガイド登山」が増えたことで、シェルパの中には、アン・リタさんのように、最多の十回登頂を果たす例が登場。経験豊富なシェルパは「登頂請負人」的存在になり、引っ張りだこだ。

こうしたビジネスが成立するのは、受け入れ態勢の変化が大きい。ネパールは、一九九六年春から規制を緩和。それまでの一シーズン、一ルート一隊だった制限を撤廃し、複数隊に許可を認めた。中国側も八〇年代後半から、登山許可が緩やかになり、南北両面から登山隊が集中。両国ともエベレスト登山を外貨獲得の「目玉商品」に位置づけたといえる。

ネパール観光省のプラチャンダ・マン・シュレスタ観光局長は「エベレストは八千㍍峰の中で最も情報が多く、通常ルートに限れば、登りやすくなった。世界最高峰のブランドが人気を支える」と話す。世界第二位のK2（八、六一一㍍）は、昨年までの登頂者が延べ百五十六人で、エベレスト人気がうかがえる。

現在、大衆化したとはいえ、自然の脅威は昔と変わらない。九六年五月、「ガイド登山」に参加し、日本人女性で二番目の登頂を果たしながら、下山中悪天候につかまって遭難死した難波康子さんの例もある。今春の大量登頂は、成功した日本隊によると、好天に恵まれたのも、大きな要因だった。（近藤幸夫）



ヒラリー隊員とともにエベレストに初登頂したシェルパのテンジン氏＝1953年5月29日、「エヴェレスト登頂」（朝日新聞社刊）から

詳細な調査で登山家に定評 ホーリーさん

エベレスト登頂者千人突破を集計したエリザベス・ホーリーさん（七四）の調査、分析は、ヒマラヤ登山家の間で定評がある。エベレストに二回登頂した国際山岳ガイドの貫田宗男さん（四七）は「私も山頂の様子などを詳しく聞かれた。ほとんどの隊をフォローしており、政府筋以上に信頼できる」と太鼓判を押す。

日本ヒマラヤ協会の山森欣一専務理事は「ホーリーさんは現地に住んでいるのが強み」と話す。日本では、山岳団体が協力して海外登山情報センター（仮称）を設立する構想がある。山森専務理事は「ネパールでも、ホーリーさんのような人が政府と協力して情報センターを作ってほしい」と話している。

エベレストの登山史

1852年 インド測量局が世界最高峰と認定。
1921年 英国が第1回の遠征隊を派遣。
1953年 英国隊のヒラリー隊員とシェルパのテンジン氏の2人が初登頂。
1960年 中国隊がチベット側から初登頂。
1970年 日本山岳会隊の松浦輝夫、植村直己の2隊員が日本人初登頂に成功。
1975年 女子登攀クラブ隊の田部井淳子登はん隊長が女性初登頂。
1978年 オーストリア隊のメスナー、ハーベラー

NEWS

「プラブーツ突然破壊問題シンポジウム」開かる

四月二十一日、東京・代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターで「プラブーツ突然破壊問題シンポジウム」が開かれた（写真）。

会場には主催者の山岳四団体（日本山岳協会、日本山岳会＝JAC、日本勤労者山岳連盟、日本ヒマラヤ協会＝HAJ）関係者のほか講師、パネラーなど約四十人が集まり、熱心な討議が展開された。

冒頭、日本勤労者山岳連盟事務局長の野口信彦氏が、現在までの経緯を説明。

大石不二夫神奈川大理学部教授が「プラスティックの基礎知識」をテーマにその特性を分かりやすく解説。「この靴はいつまで持つかといわれても難しい。人間に向かってあなたはいつまでなら生きられると断言できないのと同じこと」と語った。

次いで日本スポーツ用品工業会、輸入販売側代表として重廣恒夫氏（アシックス社）が、プラブーツ破壊の苦情発生から対応、現在までの販売足数などを報告。

「八八年の四千五百足を皮切りに九六年予測も含めると、年間約六千足前後（スキーツアーブーツ含む）の靴が販売されている。問題はメーカーが突然破壊を予測・予告できなかったことにある。

破壊の顕著なブーツの回収、ポスターや広告による告示、メーカーに対して製造年月日の刻印指示などを行ってきた」と説明。

現在販売されているコフラック、ダハシュタイン、スカルパ、ライケルなどの製造年月日刻印場所を提示した。

プラブーツをユーザーに直接販売する側の代表として、ICI石井スポーツ営業部長の越谷英雄氏も最前線の現状を説明。

「プラブーツ問題で登山者側、輸入側が動いていることは知っていた。小売店の立場として呼ばれることがなかったのが残念。売る側もユーザーに対して責任があるのは当然。しかしPL法が成立したこともあり、輸入元が過剰な自己規制をして、商品そのものの数が減り、入手困難になることが心配。輸入元を追い込まない方向が一番いい」と語った。

その後プラブーツ突然破壊体験者の野沢井歩、浅見昭夫両氏が体験談を語った。最後に重廣、越谷、野沢井、中川裕（HAJ）、熊崎和宏（JAC）、この問題をウオッチしてきた近藤和美氏らが参加してパネルディスカッションが行われた。

総合司会を務めた山森欣一氏（HAJ）は、

「一番心配なのは、突然破壊で死亡者が出ること。製造年月日刻印前のブーツを持っている人たちに、今後もPRを続けていくべき。登山者は登山者のスタンスでやっていきましょう」と締めくくった。

スポットライト 7

日本人のヒマラヤ登山

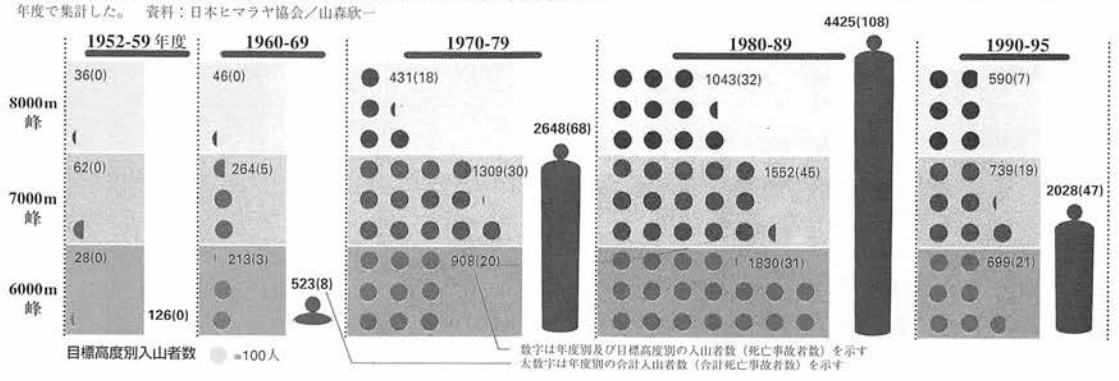
世界最高峰のエベレストを頂点に、高峰が東西に連なるヒマラヤ地方は、世界中の岳人の憧れである。日本でも第二次大戦後から6000m以上の山に入山した登山家は、延べ9750人を超えている。しかし、その一方で遭難事故も相次ぎ、依然として「神の山」への挑戦は難しいようだ。

【ヒマラヤ8000m級14峰の山別延べ登頂者数（日本人）】

注：登頂者数は 🧗＝5人【／】内は死亡者数／総入山者数　▲＝標高（単位：m）
資料：日本ヒマラヤ協会／山森欣一（1995年12月現在）

【日本人のヒマラヤ入山者と死亡事故（1952～95年）】

注：6000m以上の峰を目指した人を対象とし、年度がまたがるときは、死亡事故が発生した年度で集計した。　資料：日本ヒマラヤ協会／山森欣一



朝日現代用語
知　恵　蔵　1997　スポーツタイトル裏面に提供

朝日新聞

2000年(平成12年)11月25日

ヒマラヤ登山者へ 海外情報センター

登山4団体、設立へ

かつては面倒な準備と手続きが必要だったヒマラヤ登山が、商業登山隊（公募隊）の出現で、だれでも料金を払って簡単に実現できる時代になった。半面、高所登山の基本的な知識もないまま公募隊に参加して事故を起こすケースも見られる。このため、日本山岳協会（日山協）など全国的組織を持つ登山四団体が、ヒマラヤ登山者に対して必要な情報提供や安全登山のための研修を実施する「海外登山情報センター」の設立に取り組むことになった。

事故防止へ研修も実施

最近、ヒマラヤ登山受け入れ国の規制緩和が進み、登山に日本国内の推薦が必要なのはネパールだけとなった。さらに、公募隊にはインターネットで簡単に応募できるなど、登山を取り巻く環境が急激に変化している。だれがどの山に登っているかを掌握することもできなくなってきた。

未組織登山者が高所登山の危険について何も知らないままヒマラヤに出かけるケースが増えている。こうした現状を放置できないとして、日本ヒマラヤ協会の呼びかけで日山協と日本山岳会、日本勤労者山岳連盟との四者で海外登山情報センターの設立に向け協力することが合意された。

今夏、四者が共同でヒマラヤ登山経験者千人を対象に実施したアンケートでは、回答者の八割以上がセンター設立に賛成している。センターに期待する情報提供は「登山記録」と「現地情報」が各三〇%、「登山規則と手続き」が二三%などだった。高山病などの事故防止対策や環境保護の研修会に、ほとんどの回答者が関心を示している。

日本ヒマラヤ協会の山森欣一理事長は「六千㍍峰でも高所の知識なしで登ると死ぬことがある。『自己責任だから』と放っておいていいのかどうか、同じ登山者として考えなくてはいけない」と話している。

Saturday Wide

朝日新聞
2002年(平成14年)6月22日 土曜日 14版 スポーツ 20

Saturday Wide

ヒマラヤ、甘えは命取り

過去50年 日本人260人遭難死

日本のヒマラヤ登山者の45人に1人が遭難死——。日本ヒマラヤ協会の山森欣一理事長が、この50年間の日本人のヒマラヤ登山と遭難の克明なデータをまとめた。近年、欧米の登山家らが組織する商業公募隊の普及などでヒマラヤ登山が身近になったが、事故は後を絶たない。(山田新)

今春、商業登山隊テントでにぎわったエベレストのネパール側ベースキャンプ=野口健事務所提供

戦後日本初のヒマラヤ遠征は、52年にネパールのマナスル(8163㍍)に向かった偵察隊。以降、昨年までの50年間にヒマラヤの6千㍍以上の山を目指した日本隊は1694隊、1万1860人にのぼる。

61年、ネパールのランタン・リルン(7225㍍)で大阪市立大隊が雪崩で日本隊初の死亡事故を起こした。以降、遭難死は152隊、260人に達した。68年から昨年まで34年間途切れることなく死亡事故が起き、不名誉な記録を更新中だ。

山森さんによると、原因別では雪崩が125人(48%)で最も多い。次いで転、滑落が79人(30%)、疲労凍死8人(3%)など。転、滑落や疲労凍死のほとんどが、高所の影響を受けた結果と想定できるので、高山病の21人(8%)を加えた108人(41・5%)が「高所要因」による遭難死と考えられる。

つまり、ヒマラヤ遭難の2大原因は雪崩と高所障害といえる。

6千㍍未満の登山とトレッキング(ふもと歩き)の死亡事故も45件、64人に達した。中高年者の高所障害による死亡が圧倒的に多い。

山森さんは「雪崩の危険を察知する能力は、雪山で場数を踏んで養うしかない。高所生理は研究が進んでおり、事故例の報告も多いので、積極的に学ぶことが第一」と話している。

一方、世界最高峰エベレスト(8848㍍)をはじめとする一部の8千㍍峰は商業公募登山隊の普及で、すっかり「登りやすい山」になったかに見える。だが、登りやすいのは天候をはじめとする諸条件がそろったときだけである。

今年5月、エベレストの中国側で、日本隊の高所キャンプでユーゴスラビア人の遭体が発見された。高山病で力尽きたらしい。酸素ボンベが空になったあげく、高所障害でシェルパらの献身的な救助活動できわどく生還したケースも複数報告されている。他隊のシェルパらの支援や、酸素ボンベの提供がなければ絶望的だったといわれる。

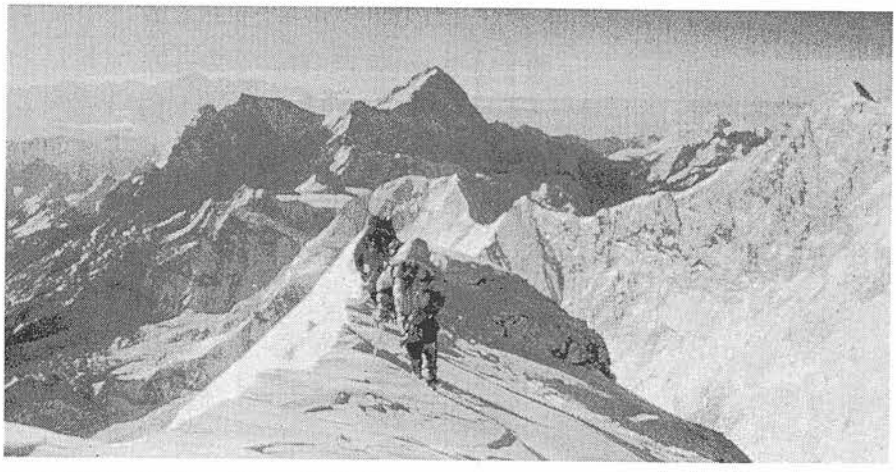
今回、救助活動を手伝ったため登頂を断念したという、医師で登山家の今井通子さんは「他隊の救助をあてにする甘えが横行している」と話す。

ヒマラヤも、特定ルートに多くの登山隊が集中する「観光登山」時代になり、モラルの確立が必要になったようだ。

低くなった？世界最高峰

ガイド登山普及 エベレスト登頂1日50人以上も

世界の最高峰・エベレスト（標高八、八四八㍍、中国名「チョモランマ」）で今年、登頂者が続出している。世界最高齢（当時）で登頂した石川富康さん(六五)と渡辺玉枝さん(六三)。七大陸最高峰最年少制覇となった山田淳さん(二三)。そのほか、桐生山岳会隊など日本人だけで九人が相次いで登頂、なかには一日に五十人以上が登頂したことも。神々が住むといわれるヒマラヤの屋根は〝低く〟なってしまったのだろうか。（銭本隆行）



▼▼荷物はポーターが▼危険個所にロープ

問題は天気と費用だけ

エベレストへの登頂者数は年々増加している。インターネット上で情報提供している「エベレストニュース・コム」によると、初登頂の昭和二十八年から平成二年以前の登頂者は二百八十五人。一方、平成二年以降十三年間で百二十九人と初めて千二百十一人にのぼった。五年には一年三ケタに上り、十三年には百八十二人と過去最高を記録。今年もかなりのペースで登頂者が相次いでいる。

こうした登頂者数増加の背景には、ガイド登山の普及がある。ガイド登山は、高所登山の経験が豊かになり、酸素ボンベなど装備が発達したことで、一九八〇年代前半から欧米の高名な登山家らによって始められた。

一年以上前からの準備期間が必要で「出発できれば遠征は八割が成功」とまで言われた過去のヒマラヤ登山とは異なり、登山隊を専門の会社が公募、組織し、面倒な登山許可の取得や装備の手配を代行する。

現地でも、荷物はポーターが持ち上げ、ガイドによって危険な個所は固定ロープが張られる。エベレストでは、第一キャンプ（標高六、二〇〇㍍）から頂上近くまで固定ロープがつながることもあるという。ここまでくれば、基礎体力や登山経験はもちろん大切だが、天候にさえ恵まれれば、特別な登山家でなくとも世界最高峰の頂上を踏むことができる。

だが、ガイド登山の費用は決して安くはない。日本ヒマラヤ協会によると、相場は三万―六万ドル（約三百六十万―七百二十万円）。一方、以前のように自分で隊を組織して準備する場合だと、一人当たりの費用は二百五十万円ほどで済む。

同協会の山森欣一理事長は「登山未経験の人が高所順応のために五千―六千㍍級に登った後、エベレストに登ってしまう日も遠くない」と話している。

世界の最高峰・エベレストへの登頂者は、ガイド登山の普及で年々増加。登山未経験者がヒマラヤの尾根を歩く日も間近に？（AP）

編集後記

ＨＡＪが、ヒマラヤの山野を舞台に活動して35年が過ぎた。発足当時のスローガンは「みんなのヒマラヤ」であった。その時代は、まさにトレッキングに代表されるように主街道を辿り、ヒマラヤを「見て・知る」時代であった。やがてスローガンは創造するヒマラヤ」へと変化し、街道から道なき道を分け入り、未知の山を登った。このエネルギーは大変なものである。よくも続いたものと、年史をまとめながら感嘆した。

ヒマラヤの高峰は国境地帯となっている。国際政治のバランスが不安定な時代にあっては、そのような国境近くの山々には近づくことは難しかった。その結果として中国やインドには未知・空白の山野が残される結果となった。ＨＡＪが、結果的に活動の大部分を中国やインドに求め、成果を上げた事実から、ともすると一部にはヒマラヤ登山の分野に遅れて参入した形になったＨＡＪは幸運であったと考える人たちがいるかも知れない。しかし、ＨＡＪの運営の一角を担った者として感じるのは全く別の事である。

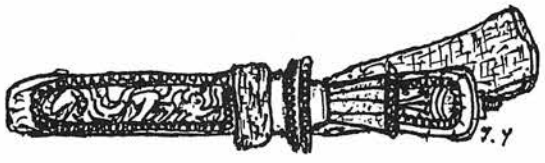
ＨＡＪは、ヒマラヤに興味を持つ人は誰でも入会でき、退会できるようになっている。このように入退会がゆるやかな条件で運営されている会では、会の運営の中心になる人・サポートする人は、時代時代によって変わって行くのが自然体だ。一時期どんに熱くヒマラヤを語り、ルームに足繁く通う人もやがて会社や家庭など一身上の理由などを口実に足が遠退いていく。これは地方も中央も同じだ。

それぞれの時代に行動した人達の軌跡を纏めるのが「行動するＨＡＪ」に相応しいと考えた。しかし、それらの記録の全てが集積されている訳ではない。35年とは長い歳月である。幸い創立30周年記念誌発行の時に可能な限り収録できた。今回はその後の５年間を新たに収録したが、各登山隊の報告中、30周年記念誌に収録した登山隊は重複することも考えて主要部分のみを収録した。

年史は、どうしても編纂を担当する時代の主観に侵され公平さを欠くことになり勝ちだ。しかし、時代を再現することは難しい。それぞれの時代について座談会を収録することで、少しは公平さが保たれることを期待した。膨大な情報が詰まっている機関誌「ヒマラヤ」については、別途総索引を作製する予定なので割愛した。

ゆるやかな集団として存在するＨＡＪの運営の要は、「当事者意識」と「山は土石を辞さず、故によくその高きをなす」原理であると思う。

35年を記念した行事にあたり、年史を纏めることができた。もとより完全なものにはほど遠いが、これがＨＡＪの現在の能力の限界でもある。この記念行事に参加され、資金を援助していただいた多くの会員に御礼を申し上げたい。　　（山森）



雪の住処 35年の記録
（日本ヒマラヤ協会35年誌）

発行日　2002年（平成14年）９月28日
発行人　山　森　欣　一
発行所　日本ヒマラヤ協会（ＨＡＪ）
(The Himalayan Association of Japan)
東京都豊島区東池袋４丁目２番７号
萬栄ビル501号（〒170-0013）
ＴＥＬ 03-3988-8474
ＦＡＸ 03-3988-8502
編集人　山　森　欣　一